熊本県文化財調査報告第61集

曲野（まがの）遺跡 I

一般国道3号松橋バイパスに伴う埋蔵文化財
発掘調査報告（第I・II次調査報告）

1983

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第61集

曲野（まがの）遺跡 I

一般国道３号松橋バイパスに伴う埋蔵文化財
発掘調査報告（第Ｉ・II次調査報告）

曲野遺跡航空写真

ＳＤ－202内　古銭出土ピット

序　　文

熊本県教育委員会では、建設省九州地方建設局において計画された一般国道３号松橋バイパス建設予定地内の埋蔵文化財の調査を進めてきました。

これまでに、微雨・曾畑遺跡についての調査を行い、松橋町微雨遺跡では発掘調査を、宇土市曾畑遺跡については、路線決定にかかわる試掘調査を実施してきました。今回の曲野遺跡の発掘調査もこれらと一連の事業として行われたものです。

調査地域内からは古代の官衙遺跡と思われる遺構が発見され、古代史の空白を埋める重要な資料と思慮されます。

本書が、文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助となり、文化財保護に寄与できれば幸いです。

また調査に当たり、建設省九州地方建設局熊本工事事務所および地元教育委員会など、多数の方々にご協力いただき、ここに厚くお礼を申し上げます。

昭和58年３月31日

熊本県教育長　　外　村　次　郎

例　　言

1．本書は、熊本県教育委員会が建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて実施した、曲野遺跡発掘調査の報告書である。

2．本書は一般国道３号松橋バイパス建設事業に関連して、昭和55年度調査分をＩ次調査、昭和56年度調査分をII次調査として収録した。

3．航空写真については、熊本県警航空隊に撮影をお願いした。記して謝意を表する。

4．遺跡周辺測量図については、東洋航測株式会社の協力を得て作成した。

5．本書の執筆は江本直、髙谷和生、古森政次、浦田信智、河北毅があたり、その分担は文末に示した。

　吉倉真・大澤正己両専門調査員からは玉稿をいただき付論とした。また、寺尾遺跡調査報告を付編とし、併せて収録した。

6．本書に使用した図の作成は江本、髙谷、浦田が行い、河北、森山栄一、坂田延子の協力を受けた。なおトレースは守江洋子の協力を得た。

　掲載写真は浦田によるものである。

7．文中における方位はＧ．Ｎ．を示し、それに対しての長軸のグリッド方眼はＧ．Ｎ．－40°40′33″－Ｗを示す。なお遺構の略記号は次のとおりである。

ＳＤ－溝遺構、ＳＫ－土壙遺構、ＳＢ－掘立柱建物跡、ＳＦ－道路状遺構、ＳＡ－塀遺構、ＳＸ－その他性格不明遺構。

　遺構番号は時代にとらわれず発見順とし、その頭に調査年次の数字を付した。

8．本書の編集は調査員協議のうえ、髙谷が担当した。

本文目次

第1章　序　　説

1．調査にいたる経過…… 1
2．遺跡の地理的環境及び層位…… 2
3．歴史的環境…… 8
4．第Ⅰ次調査の概要……13
5．第Ⅱ次調査の概要……16

第Ⅱ章　旧石器・縄文時代

1．遺構……20
2．遺物……20

第Ⅲ章　弥生・古墳時代

1．遺構……39
2．遺物……40

第Ⅳ章　奈良・平安時代

1．遺構……42
2．遺物……49

第Ⅴ章　鎌倉・室町時代

1．遺構……62
2．遺物……91

第Ⅵ章　近世・近代

1．遺構……116
2．遺物……121

第Ⅶ章　総括

1．遺構の様相……129
　遺構の変遷……129
　掘立柱建物……131

溝遺構及び塀遺構……137
2．遺物の様相……138
須恵器……138
その他の遺物……139
3．遺跡の性格及び時期……139

付　論

・曲野・寺尾遺跡の鉄滓調査……175
・曲野遺跡出土の馬歯について……187

付　編

寺尾遺跡調査報告

1．調査経過及び調査の概要……195
2．主な遺構と遺物……199
(1)　遺構……199
(2)　遺物……204
3．まとめ……241

表目次

第1表　周辺遺跡一覧……10
2　Ⅰ次調査トレンチ設定一覧……15
3　Ⅱ次調査トレンチ設定一覧……19
4　出土石器一覧……21
5　縄文土器出土数一覧……25
6　土師器蓋観察表……50
7　土師器壺・甕・鉢・高坏観察表……52
8　内黒土器観察表……53
9　須恵器蓋観察表……57
10　須恵器坏観察表……58
11　須恵器高台付坏観察表……59
12　須恵器高坏・壺・鉢・甕観察表……61
13　道路状遺構（ＳＦ）一覧……81
第14表　ピット出土数一覧……88
15　ピット内出土遺物一覧（実測分）……90
16　ピット内埋土土色一覧……88
17　ピット内埋土土色別出土遺物対比表……90
18　土師器高台付坏・坏観察表……93
19　土師器小皿観察表……98
20　出土銅銭一覧……115
21　鉄製品一覧……127
22　溝遺構（ＳＤ）一覧……116
23　土壙遺構（ＳＫ）一覧……118
24　性格不明遺構（ＳＸ）一覧……118
25　遺構の変遷一覧表……130
26　掘立柱建物一覧……135

挿図目次

第１図　曲野遺跡周辺地形図……3
2　曲野遺跡層位概略図……5
3　第Ⅲ・Ⅳ層対比図……6
4　層位対比図（曲野－沈目－櫛島）……7
5　層位対比図（瀬田－伊野－曲野）……7
6　周辺遺跡図……9
7　ＳＫ－230（縄文集石遺構）実測図……20
8　旧石器出土地点……21
9　石器実測図(1)……22
10　石器実測図(2)……23
11　縄文土器出土地点……25
12　縄文土器実測図(1)……26
13　縄文土器実測図(2)……27
14　縄文土器実測図(3)……28
15　縄文土器実測図(3)……29
16　縄文土器実測図(4)……30
17　縄文土器実測図(6)……31
18　縄文土器実測図(7)……32
19　縄文土器実測図(8)……37
20　ＳＫ－205実測図……39
21　ＳＫ－228 内遺物出土状態実測図……40
22　弥生土器実測図……40
23　ＳＢ－203 実測図……44
24　ＳＢ－203 柱穴土層断面図……45
25　ＳＢ－218 実測図……46
26　ＳＢ－221 実測図……47
27　22－Ｅ区ピット31・32内遺物出土状態…49
28　土師器（蓋・坏）実測図……50
29　土師器（甕・高坏）実測図……51
30　土師器（壺・甕）実測図……50
31　甑把手実測図……52
32　内黒土器実測図……53
33　須恵器（蓋・坏）実測図……54
第34図　須恵器（坏）実測図……55
35　須恵器（高坏・鉢・壺・甕）実測図……56
36　須恵器（甕）実測図……57
37　ＳＢ－204 実測図……63
38　ＳＢ－223 実測図……64
39　ＳＢ－226 実測図……65
40　ＳＢ－240・241・242・243・実測図……66
41　ＳＢ－206・207 実測図……67
42　ＳＢ－219 実測図……67
43　ＳＢ－220 実測図……68
44　ＳＢ－224 実測図……68
45　ＳＢ－225・227実測図……69
46　ＳＢ－228・229実測図……69
47　ＳＢ－230・232実測図……70
48　ＳＢ－234・235実測図……71
49　ＳＢ－236・237・238 実測図……73
50　ＳＢ－244・245実測図……71
51　ＳＢ－246・247実測図……72
52　ＳＤ－202・203実測図……75
53　溝遺構（ＳＤ）流向方位図……74
54　ＳＤ－228，ＳＫ－219土層断面……77
55　ＳＫ－202 土層断面図……78
56　ＳＫ－210 土層断面図……78
57　ＳＫ－214 土層断面図……79
58　ＳＫ－220 土層断面図……79
59　ＳＫ－221 実測図……80
60　ＳＦ－204・205・206 実測図……81
61　ＳＦ－207・208，ＳＤ－219・220・221・222実測図……83
62　ＳＤ－202 内ピット土層断面図……86
63　ＳＤ－202 内古銭出土ピット……87
64　掘立柱ピット出土地点……89
65　土師器（埦・坏）実測図……92

第66図　土師器（坏）実測図……91
67　土師器坏法量比較図……93
68　土師器（小皿）実測図(1)……95
69　土師器（小皿）実測図(2)……96
70　土師器小皿法量比較図……97
71　土師器小皿形態分類図……97
72　土師器糸切底一覧図……100
73　土師器糸切底の底径及び法量比図……99
74　中世陶器（鉢・すり鉢）実測図……102
75　中世陶器（甕・壺・椀）実測図……104
76　中世陶器（火舎・羽釜・器台・鉢）
実測図……106
77　中世陶器（壺）実測図……107
78　中世瓦質土器（火舎・鉢・高坏）
実測図……108
79　中世瓦質土器(甕)、須恵系土器実測図…109
第80図　磁器実測図(1)……112
81　磁器実測図(2)……113
82　銅銭拓影図……115
83　ＬＳＤ－01埋土断面実測図……116
84　ＳＤ－213・214土層断面図……117
85　ＳＤ－201・205土層断面図……117
86　ＳＤ－216 土層断面図……118
87　ＳＸ－201 平面実測図……119
88　近世陶磁器実測図(1)……122
89　近世陶磁器実測図(2)……123
90　土製品実測図……124
91　鉄製品実測図(1)……125
92　鉄製品実測図(2)……126
93　掘立柱建物類型分類(1)……133
94　掘立柱建物類型分類(2)……132
95　掘立柱建物跡（ＳＢ）棟方向方位図……134

本文写真目次

本文写真１　ＳＢ－203 ピット断面写真……45
2　ＳＢ－221 ピット断面写真……48
3　ＳＤ－228，ＳＫ－219 ……77
本文写真４　ＳＫ－210 ……78
5　ＳＫ－220 ……80

付 図 目 次

付図１　第Ⅰ・第Ⅱ次調査区一覧
付図２　全Ⅰ区遺構配置図（120分の1）
付図３　全Ⅱ区遺構配置図（120分の1）
付図４　全Ⅲ区遺構配置図（120分の1）
付図５　ＲＳＤ－01遺構配置図（180分の1）
付図６　遺構変遷図（540分の1）
付図７　寺尾遺跡遺構集中部実測図(60分の１)

図版目次

図版1 (1)調査前風景……145
(2)調査全区（発掘後）……145
(3)調査風景……145
2 (1)全Ⅰ区ＲＳＤ－01内側遺構検出状況（発掘前）……146
(2)全Ⅰ区ＲＳＤ－01内側遺構検出状況（発掘後）……146
(3)全Ⅰ区ＲＳＤ－01外側遺構検出状況（発掘後）……146
3 (1)全Ⅰ区ＲＳＤ－01コーナー部遺構検出状況（発掘前）……147
(2)全Ⅰ区ＲＳＤ－01コーナー部遺構検出状況（発掘後）……147
(3)全Ⅰ区遺構検出状況（発掘後）……147
4 (1)全Ⅱ区遺構検出状況（発掘前）……148
(2)全Ⅱ区遺構検出状況（発掘後）……148
(3)全Ⅲ区遺構検出状況（発掘前）……148
5 (1)ＳＢ－203（北ヨリ）……149
(2)ＳＢ－204（北ヨリ）……149
(3)ＳＢ－204（東ヨリ）……149
6 (1)ＳＢ－204，ＳＢ－206（南ヨリ）……150
(2)ＳＢ－217（東ヨリ）……150
(3)ＳＢ－218（南ヨリ・発掘前）……150
7 (1)ＳＢ－218（南ヨリ・発掘後）……151
(2)ＳＢ－218（西ヨリ・発掘後）……151
(3)ＳＢ－220（西ヨリ）……151
8 (1)ＳＢ－221（北東ヨリ）……152
(2)ＳＢ－221（南東ヨリ）……152
(3)ＳＢ－226・ＳＢ－227・ＳＢ－228（発掘前）……152
9 (1)ＳＢ－229，ＳＢ－230（発掘前）……153
(2)ＳＢ－234，ＳＢ－235（発掘前）……153
(3)ＳＢ－226（南ヨリ）……153
図版10 (1)遺跡北側遺構集中部ＳＢ－229・ＳＢ－230・ＳＢ－232・ＳＢ－234・ＳＢ－235・ＳＢ－236・ＳＢ－237（発掘後）……154
(2)33・34－Ｊ区Ⅰ次試掘ＲＳＤ－01検出状況……154
(3)遺物出土状態拡大（須恵器高台付坏）……154
11 (1)全Ⅰ区ＲＳＤ－01内遺出土状態……155
(2)28・29－Ｅ区ＲＳＤ－01内遺物出土状態……155
(3)28・29－Ｅ区遺物出土状態拡大……155
12 (1)全Ⅲ区ＲＳＤ－01内遺物出土状態……156
(2)全Ⅱ区ＲＳＤ－01内遺物出土状態……156
(3)全Ⅲ区ＲＳＤ－01検出状況（発掘後）…156
13 (1)全Ⅰ区ＲＳＤ－01検出状況（発掘後）…157
(2)全Ⅲ区ＲＳＤ－01コーナー部検出状況（発掘後）……157
(3)全Ⅲ区ＲＳＤ－01・ＳＡ－01検出状況（発掘後）……157
14 (1)全Ⅱ区ＲＳＤ－01・ＳＡ－01検出状況（発掘後）……158
(2)全Ⅲ区ＬＳＤ－01・ＳＫ－207・ＳＤ－213・ＳＤ－214 検出状況（発掘後）…158
(3)全Ⅰ次試掘ＬＳＤ－01検出状況……158
15 (1)全Ⅱ区ＳＤ－202 内遺物出土状態……159
(2)全Ⅱ区ＳＤ－202 遺構検出状況（発掘後）……159
(3)全Ⅱ区ＳＤ－202 内遺物出土状態拡大…159
16 (1)ＳＤ－215・ＳＤ－216 検出状況……160
(2)ＳＤ－206・ＳＤ－207 検出状況……160
(3)ＳＦ－204・ＳＦ－205・ＳＦ－206 検出状況……160
17 (1)ＳＦ－207・ＳＦ－208・ＳＤ－220・

ＳＤ－221・ＳＤ－222遺構検出状況……161
(2)全Ｉ区22－ＥピットNo.32内遺物
出土状態 ……161
(3)全II区34－ＬＳＤ－202 内古銭
出土ピット ……161
18 (1)ＳＫ－205 検出状況……162
(2)ＳＫ－214 検出状況……162
(3)ＳＫ－221 検出状況……162
19 (1)ＳＫ－230（縄文集石）検出状況 ……163
(2)ＳＸ－201 遺物出土状態……163
(3)ＳＸ－201 遺構検出状況（発掘後）……163
20 (1)35・36－Ｇ区試掘トレンチ……164
(2)35・36－Ｇ区縄文集石拡大……164
(3)47－Ｋ・Ｌ区試掘トレンチ……164
(4)47－Ｋ・Ｌ区出土遺物拡大……164
(5)40－Ｆ・Ｇ区試掘トレンチ……164
21 出土遺物（石器）……165
22 出土遺物（縄文土器）……166
23 出土遺物（縄文土器・土師器）……167
24 出土遺物（土師器）……168
25 出土遺物（土師器・須恵器）……169
26 出土遺物（須恵器・中世陶器・石鍋）……170
27 出土遺物（青磁・白磁・中世陶器）……171
28 出土遺物（中世陶器）……172

第Ⅰ章　序　　説

1.　調査にいたる経過

一般国道３号松橋バイパス建設計画に際し、熊本県教育委員会では文化財保護法にのっとり、計画路線内の埋蔵文化財の確認調査を行った。現地踏査・文献資料等による検討を加えたところ、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、磁器等を表採した。又付近には中世城の曲野城が存在することから、各時期にまたがる遺構がこの地域内に複合し存在することが予想された。

昭和55年度、当該地区の試掘調査を行った所、台地上に一町方形と想定される溝状遺構と多数のピット群が確認され、その時期は奈良時代末～平安時代の初頭時期で、遺跡の性格は、官衙遺跡ではないかと推定された。そこで昭和56年度前年度のⅠ次調査の成果をふまえ、全面発掘調査を行ない、曲野遺跡の全容を現すに至った。曲野遺跡は旧石器時代から江戸時代に亘る長期間、ほぼ継続的に使用された複合遺跡であり、その内容は多岐に亘るものである。本報告書は、Ⅰ・Ⅱ次調査の成果をまとめたものである。

調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	岩崎辰喜（文化課長）
調査総括	隈　昭志（文化財調査係長　主幹）
調査員	江本　直（文化課学芸員　Ⅱ次調査主査）
	髙谷和生（文化課技師　Ⅰ次調査主査・Ⅱ次）
	古森政次（文化課嘱託　Ⅰ・Ⅱ次）
	浦田信智（文化課嘱託　Ⅱ次）
	河北　毅（文化課調査員　Ⅱ次）
専門調査員	吉倉　真（熊本大学名誉教授　Ⅱ次）
	横山浩一（九州大学文学部教授　Ⅰ次）
	白木原和美（熊本大学文学部教授　Ⅰ・Ⅱ次）
	三島　格（肥後考古学会長　Ⅰ・Ⅱ次）
	甲元真之（熊本大学文学部教授　Ⅰ・Ⅱ次）
	板楠和子（前熊本大学文学部助手　Ⅰ・Ⅱ次）
	田辺哲夫（前熊本県立第一高等学校長　Ⅱ次）
	佐藤興治（飛鳥藤原宮跡発掘調査部室長　Ⅱ次）
	石松好雄（九州歴史資料館調査課長　Ⅱ次）
	大澤正己（たたら研究会員　Ⅱ次）

調査指導及び協力者

岡崎　敬（九州大学文学部教授　Ⅱ次）
桑原滋郎（文化庁記念物課文化財調査官　Ⅱ次）
乙益重隆（国学院大学文学部教授　Ⅱ次）
沢村　仁（九州芸術工科大学教授　Ⅱ次）
渡辺正気（元九州歴史資料館　Ⅱ次）
日野尚志（佐賀大学文学部教授　Ⅱ次）
工藤敬一（熊本大学文学部教授　Ⅱ次）
宮本長二郎（奈良国立文化財研究所　Ⅱ次）

山中敏史（奈良国立文化財研究所　Ⅱ次）
富樫卯三郎（前肥後考古学会長　Ⅱ次）
木村幾多郎（九州大学講師　Ⅱ次）
池田栄史（国学院大学助手　Ⅰ・Ⅱ次）
佐藤伸二（国立八代工業専門学校助教授　Ⅱ次）
高倉洋彰（九州歴史資料館主任技師　Ⅱ次）
高橋　章（　〃　〃　）
森田　勉（　〃　〃　）
矢野和之（文化財保存協会理事　Ⅰ・Ⅱ次）
柚原直人（　〃　主任研究員　Ⅰ・Ⅱ次）
勢田広行（　〃　研究員　Ⅰ・Ⅱ次）
杉村彰一（熊本県立氷川高校教諭　Ⅰ・Ⅱ次）
園田啓一（熊本県立松橋高校教諭　Ⅰ・Ⅱ次）
竹内　宏（前長崎県教育委員会文化課　Ⅱ次）
中村和正（　〃　Ⅱ次）
中田敦元（　〃　Ⅱ次）
下村悟史（福岡市教育委員会文化課　Ⅰ・Ⅱ次）
富永直樹（久留米市教育委員会社会教育課　Ⅱ次）
瀬丸敬二（元阿蘇実験考古学研究所研究員　Ⅰ・Ⅱ次）
黒田裕司（元阿蘇実験考古学研究所研究員　Ⅰ・Ⅱ次）
城戸　誠（犬飼町教育委員会　Ⅰ・Ⅱ次）
平山修一（宇土市教育委員会社会教育課　文化財係　Ⅰ・Ⅱ次）
高木恭二（宇土市教育委員会社会教育課　文化財係　Ⅰ・Ⅱ次）
木下洋介（宇土市教育委員会社会教育課　文化財係　Ⅰ・Ⅱ次）
中村幸史郎（山鹿市立山鹿博物館学芸員　Ⅰ次）
大城康雄（熊本市教育委員会文化課　Ⅰ次）
柿内順也（　〃　〃　Ⅰ次）
沢田宗順（八代市 教育文化センター設立準備室　Ⅰ・Ⅱ次）
小田原弘則（松橋町教育委員会　Ⅰ・Ⅱ次）
吉永　明（八代市教育委員会　Ⅱ次）
豊崎晃一（城南町教育委員会文化課　Ⅰ・Ⅱ次）
尾崎源大郎（別府大学学生　Ⅰ次）
最上　敏（　〃　Ⅰ・Ⅱ次）
宮坂孝宏（　〃　〃　）
川添泰光（　〃　Ⅰ次）
江原浩司（明治大学学生　Ⅰ次）
松橋町曲野地区住民
松橋高等学校社会部

調査事務局
林田茂一（課長補佐　Ⅱ次）
田辺宗弘（前課長補佐　Ⅰ・Ⅱ次）
大塚正信（主幹兼経理係長　Ⅰ・Ⅱ次）
松崎厚生（参事　Ⅱ次）
横尾泰宏（技師　Ⅰ・Ⅱ次）
矢野みゆき（前主事　Ⅰ・Ⅱ次）
谷　喜美子（主事　Ⅱ次）

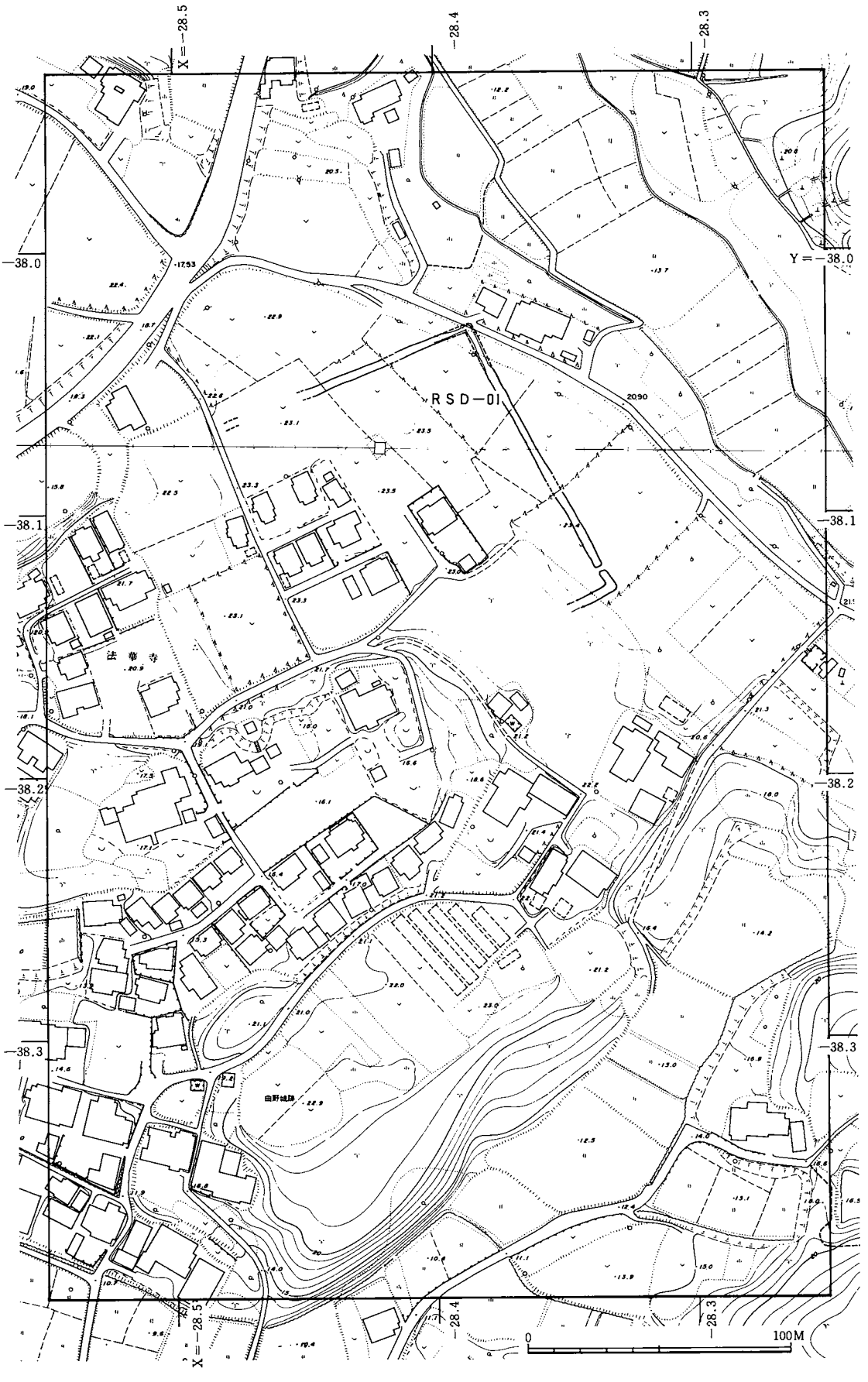
2.　遺跡の地理的環境

地理的環境

松橋町は熊本県のほぼ中央部に位置する下益城郡の西部を占めている。東部及び北部には宇土半島より続く山塊が九州山地へとのびており、一方西部及び南部は平坦な平野地帯で、これらの台地と追田及び水田平野で形成された中山間地帯である。

町内の地形・地質を特徴づけるものは大分県臼杵市と熊本県八代市を結ぶ大断層線である中央構造線（臼杵―八代線）である。松橋町はこの構造線の北側（内帯）に位置しており、これに沿う「肥後変成岩地帯」はこの遺跡の真直中の地質となって走っている。主に花崗閃緑岩・結晶質石灰岩（大理石）・蛇紋岩等が帯状に分布している。中生代白亜紀末（6～500万年前）にこの変成の年代はおさえられ、曲野・古保山の丘陵からは白亜紀の貝化石が多数採集されている。

さらに新年代第四紀では、台地及び段丘地帯には洪積層が生成される。この地層を構成しているものは、



第１図　曲野遺跡周辺地形図

洪積世の下方の礫層・凝灰岩層・粘土層・洪積世の上方の礫層である。この凝灰岩層は、多くの軽石を含み軟く、多量の水分を含む層で、この層のことを松橋地方では「ヒャタン」(灰炭）と呼んでおり、地質学上でいう阿蘇火砕流に相当する。さらに台地の上部には阿蘇火山の噴火による降灰（火山灰）の堆積が厚く覆っており、いわゆるローム層と呼ばれるものである。ローム層は松橋地方でほとんど全ての台地（当尾・豊福・松橋台地）や段丘地帯を覆っている。

沖積層は一般的な水田地帯をさしており、地質としては流土・土砂・砂礫の混層を主とする層である。この層に属するものは各丘陵・台地等に付帯する追田を始めとして、大野川本支流や松葉川流域の平野である。沖積層は本町内においては12.0㎢の面積を保ち、地質総面積中では第四紀洪積層に次いで31.8%を占める。しかしながらその大部分は広義に解釈し使用された干拓地であり、本来的な水田地帯は大野川流域等の追田に限られたものであろう。（高谷）

参考文献

松本唯一『熊本県史総説編』第Ⅰ章　熊本県　1965年

林田憲義『松橋町史』松橋町　昭和54年

古森政次他『熊本県松橋町曲野遺跡調査報告書』九州電力株式会社曲野遺跡調査団　1982年

岩本政教他『熊本県の地理』第Ⅱ章　光文館　1964年

経済企画庁総合開発局『土地分類図』付属資料

層位

近年の大規模な発掘調査の実施にあたっては、住居跡ほかの遺構の確認面を、普通「キナコ」と称される第Ⅲ層・黄褐色土層とする事例が多い。今回の曲野遺跡においても、表土剝ぎを行なったあとこの黄褐色土層に見られる侵食部分を検出することによって遺構を確認する作業を進めている。また、昭和40年代後半から進められてきた九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査や、圃場整備に伴う事例など、加えて今回の曲野遺跡の発掘調査においても、この黄褐色土層および下層の第Ⅳ層・黒褐色粘質土層に縄文時代早・前期の遺物を含む事例が多くあり、この時期に深く係わるテフラであるものと考えられつづけてきた。

しかしながら、我々にとってこの馴染みの深い黄褐色土層についてさえ、その生成起因や時期など不明確な状況であるといわざるを得ない。

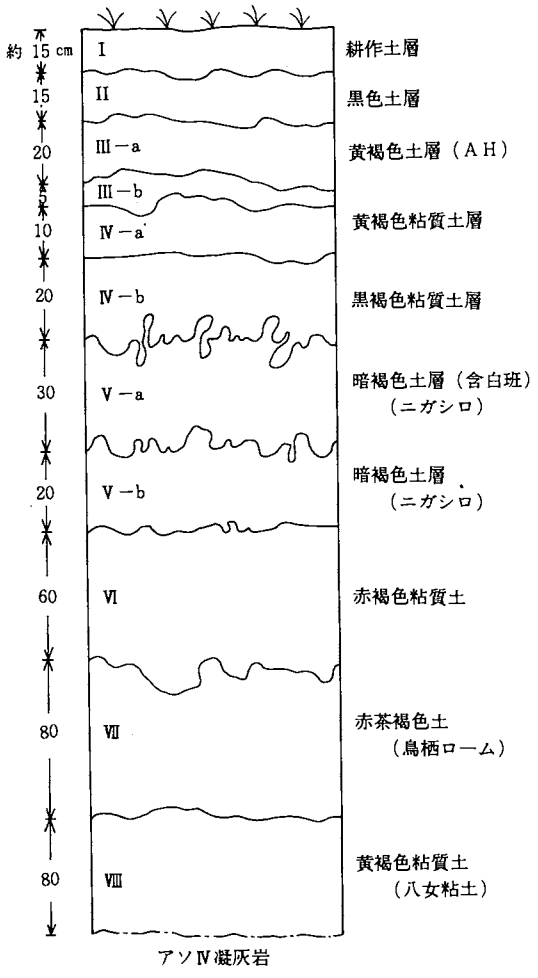
逆にこれらの問題が紐解かれるとすれば、県内の発掘調査における基本土層（鍵層）の確立となり、時期判定や編年作業などに大きな寄与をなすに違いない。分野を異にするが、今日までの発掘調査の事例などをもとにして、黄褐色土層を主とした地層をのぞいて見たい。まずは今回の曲野遺跡の基本層序とその特色について記しておきたい。

深掘トレンチ（31—Hグリッド）によって第1層から第8層まで分離し確認をしている。なお、これらの更に下位については、近くの切り通した崖面によって観察でき、次第に軽石が多くなり、所謂、阿蘇Ⅳ（Ⅵ）の溶結凝灰岩を認めることができる。

第Ⅰ層　耕作土層で厚さは20cm程度である。主に第Ⅱ層が耕作により掻き乱されたもので、小石の混じりもあり、パサパサとしている。耕作物の中で桑や午旁の栽培が行なわれている場合は深掘りされるため下層の土がブロックになったりして混入している。

第Ⅱ層　黒色を呈する火山灰土でいわゆる黒ボクといえる。粘質は少なく乾燥が早くサラサラとしている。縄文時代後晩期以降の遺物を包含している。一時期に堆積したものではなく、何回にも亘って火山灰が堆積したもので、環状溝内の堆積状態から見ると少なくとも8～9C以降にも火山灰が降り積っている。また、地表となった時期ごとに、植物の腐食が起こるため、土壌の黒色化をさらに進めたとも考えられる。

第Ⅲ層　黄褐色土層でサラサラとしており「キナコ」と呼ばれる。水洗すると大小さまざまの石粒や火山ガラスが多量に見られる。もともと中半下部から次の第Ⅳ層にかけて縄文時代早期押型文土器や集石遺構それに塞ノ神式土器や円筒形土器を含むことが知られていた。従来、第Ⅲ層黄褐色土層（通称キナコ層）として一括していたが、ⓐⓑⓒの３層に分離ができる。それはⓐⓑは所謂「キナコ」と称される黄褐色層であり、ⓑには４～５cm程度の淡黄褐色の土塊が含まっている。水洗すると透き通った綺麗な板状の火山ガラスが多量に見られる。広域火山灰アカホヤ「ＡＨ」の純な状態である。ⓒは色調は黄褐色で同じくするが、粘質を持ち、全体的に薄いため黒褐色粘質土と混じり合うことがある。このⓒ層については第Ⅲ層と分離し第Ⅳ―ⓐ層としておきたい。すなわち、第Ⅳ層の黒褐色粘質土層とに共通の粘性が見られ、色調よりも粘質性の特色を優位させることにほかならない。第Ⅳ―ⓐ層と従来の第Ⅳ層とが分離できる場合は、後者を第Ⅳ―ⓑ層とし、分離が困難な場合は一括して第Ⅳ層としておきたい。以上の分離を行なえば第Ⅲ層、黄褐色土層を「アカホヤ」ＡＨ以降、第Ⅳ層を「アカホヤ」ＡＨ以前のものとすることができる。



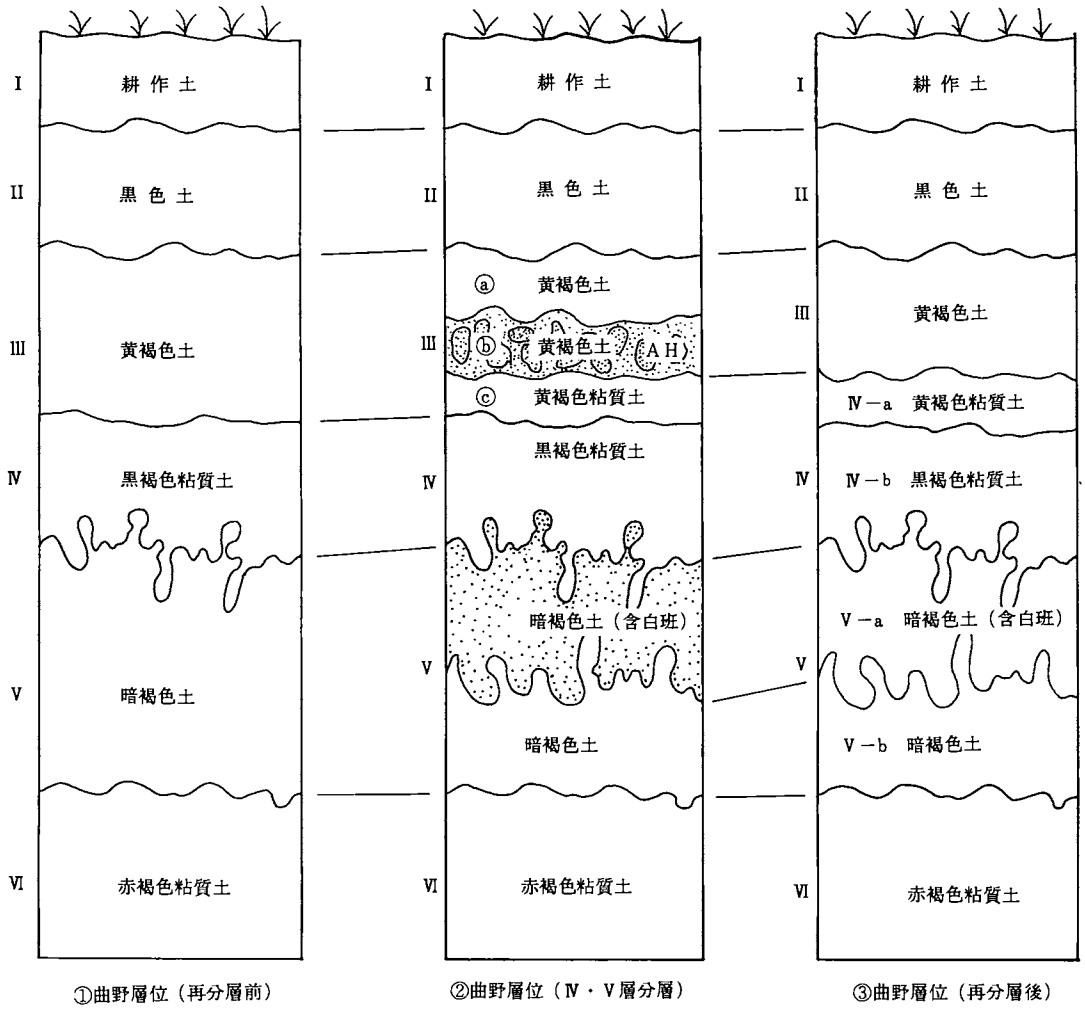
第２図　曲野遺跡層位概略図

従来、縄文時代早前期の押型文土器や円筒土器・塞ノ神式土器や集石遺構が第Ⅲ層の下半から第Ⅳ層にかけて出土するという表現もされたが、新たに第Ⅳ層もしくは第Ⅳ―ⓐ層や第Ⅳ―ⓑ層という表現に変えることが適当と考える。それは縄文時代早前期の遺構や遺物が、アカホヤ（ＡＨ）以降の層にそのベースを置くとは考えられないからである。そして第Ⅳ層は縄文早前期の主なる包含層であるとともに、非常に息の長い層で後期旧石器時代の遺物も包含する可能性を有している。

第Ⅳ層　以上の様にⅣ－ⓐとⅣ－ⓑとからなっており、粘性を有し、縄文早・前期遺物の包含層である。57年度の発掘調査ではⅣ－ⓑ面で遺構の掘り込みを検出でき、埋土や柱穴内の土はⅣ－ⓐもしくはⅣ－ⓐとⅣ－ⓑとが混じり合った状態であることを確認しており、縄文早・前期の住居跡や柱穴と判断している。

第Ⅴ層　暗褐色土であり、「ニガシロ」と呼ばれるゴリゴリした硬質の土塊である。厚いところは60～70cmを計るところもある。「ニガシロ」の通称名は昭和48年に実施された上益城郡益城町古閑遺跡の発掘調査の際、付近の農家の人々の呼称名[註(1)]から次第に使用される様になったもので、土壌学で使用される「クロニガ」「ゴマニガ」とは呼称の起源を異にしている。

第Ⅴ―ⓐ層と第Ⅴ―ⓑ層とに分離できる。第Ⅴ―ⓐ層には白っぽいガラスの班点を多く含み第Ⅴ―ⓑ層はその班点が少なく色調により黒くなっている。それぞれに水洗すると多量の石英や火山ガラスが含まっており、両者の中間位に最も多量の広域火山灰の火山ガラス「ＡＴ」を包含するとの報告を受けている[註(2)]。なお、第Ⅴ―ⓐ層には少量ではあるが雲母が含まっている。雲母は阿蘇起源の火山灰には含まる例がなく、



第3図　第3・4層対比図

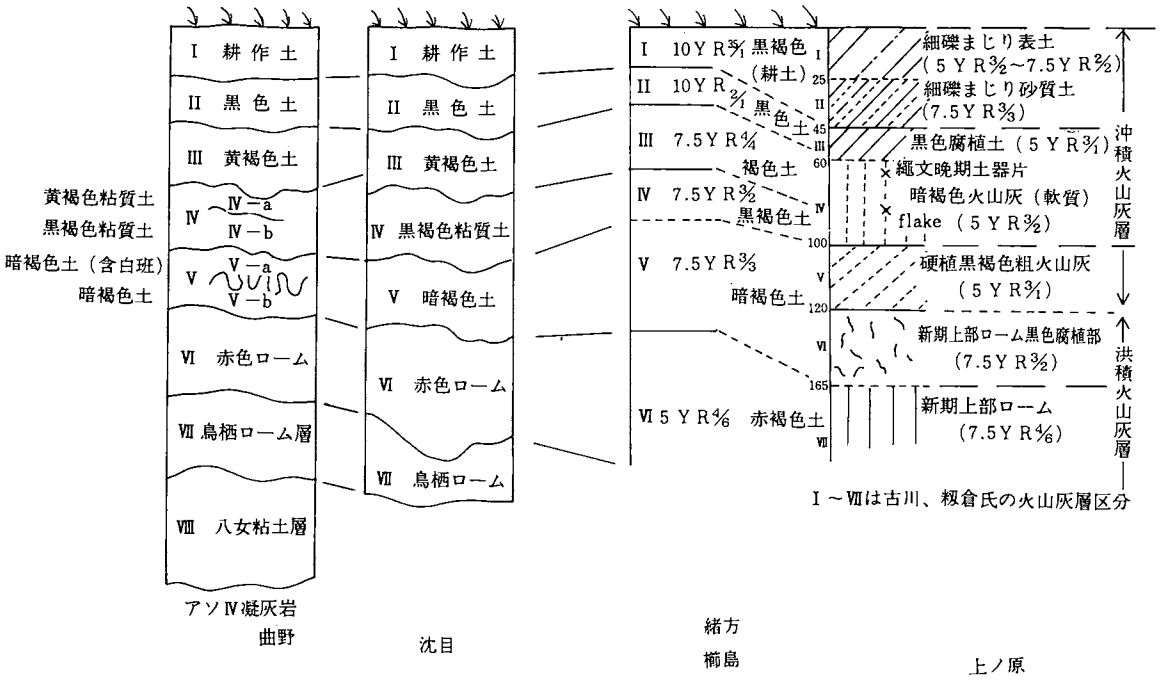
九重山や雲仙の火山に含まれる特色を有しており、第Ⅴ層そのものの生成を解明する上での一つの手掛かりとなろう。

第Ⅵ層　所謂赤色をしたローム層である。一時期に火山灰として堆積したものではなく、永い年月をかけて非常に細かな粒子が集まって堆積している。粘質が強く、水洗すると多量の長石を含んでいる。第Ⅴ層からの黒色の染は幾分見られるが両者は色調や粘性から明確に分離できる。上部から旧石器時代の遺物（ナイフ形石器・台形石器など）が出土している。

第Ⅶ層　赤茶褐色を呈する火山灰層で、1～2mと厚く堆積しているが、短期間のうちに火山灰が降り積り堆積したものと考えられる。粘質は弱まりサラサラとした砂ロームである。所謂、土放れが良い事から農家の稲の床土に利用されている。下位にいくにしたがいMn を多く含む様になる。鳥栖ロームと称されるものである。

第Ⅷ層　淡褐色を呈し粘質が強まる。八女粘土と称されるもので、下位にいくと次第に軽石が多くなり、阿蘇Ⅳの溶結凝灰岩へとつながっている。

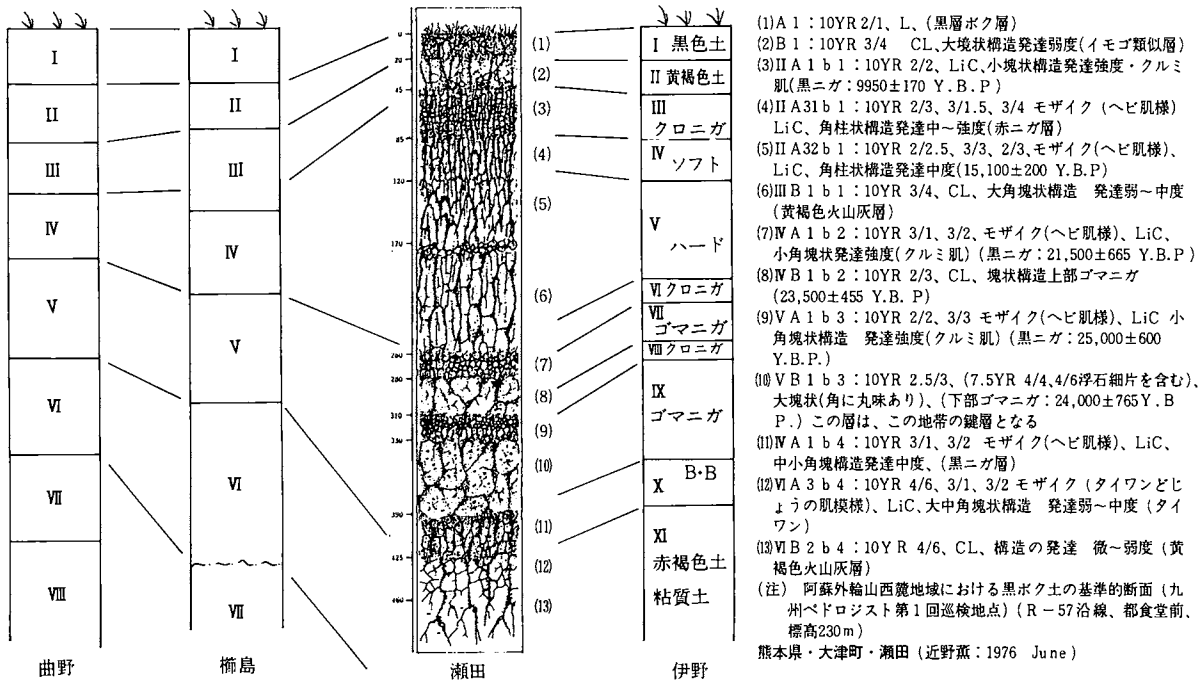
以上、曲野遺跡の地層の概略を記してきたが、第3図は第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の分層状態を示したものである、また、周辺で発掘調査された遺跡で同様の状態を示す遺跡として下益城郡松橋町古保山C遺跡、同郡城南町塚原古墳群・上ノ原遺跡、上益城郡益城町櫛島遺跡[註4)]、古閑遺跡などがあり、第4図はその対比を示したものである。地域的に見るとおおよそ白川以南から下益城郡松橋町地区までの基本層序として捉えることが可能



第4図　層位対比図

であろう。しかしながら白川以北、特に阿蘇周辺ではこのほかに何枚もの火山灰層が加わっている。火山灰の推積が風向きに影響され、噴出地の近くに厚く堆積するという理由にほかならない。

第5図は九州土壌肥料研究会が発表された菊池郡大津町瀬田の土層図で、阿蘇外輪山西麓の基準的断面図であり、これに対比を試みたものである。



第5図　層位対比図

この層序の中で（2）層イモゴ類似層と（8）層塊状構造上部ゴマニガをサンプリングして水洗するとそれぞれ特徴的な板状を呈する火山ガラスを認めることができる。すなわちアカホヤ（AH）と姶良パミス（AT）と考えることができる。C_{14} 年代は（3）層が9950±170 Y.B.Pで、(8)層が23,500±455 Y.B.Pを示し、AH（6,000）AT（21,000〜22,000）の値に非常に近い値が示されている。

曲野遺跡に対比すれば曲野第Ⅱ層と瀬田（1）層、曲野第Ⅲ層と瀬田（2）層とが対比できよう。そして曲野第Ⅴ層と瀬田（7）～(11) 層とが対比できよう。曲野第Ⅵ層は瀬田 (12) 層以下ということになる。曲野第Ⅳ層については不明確であるが層序からすれば瀬田（3）～（6）にあたるものであろう。すなわち、(3)～（6）については阿蘇起源の火山灰と思われ、周辺に厚く堆積したものと考えられる。逆に曲野など阿蘇山から放れ、風向きが逆になる地域についてはその堆積がなかったり、薄いために各層の区分ができずに混在した状態になったりしたものと考えられる。また、曲野第Ⅳ層に類似する瀬田（3）層の「黒ニガ」や（4）層「赤ニガ層」は厚く堆積しており、粘質もあり乾燥するとクラックが生じるため、「ニガシロ」と間違われやすい。この瀬田の土層状態は阿蘇外輪山の北側や東側では同じ様な状況を示すところが多く、基本層序として捉えることができる。また、旧石器時代の遺物が断面から採集されている菊池市伊野遺跡でも同様の層序状態を示している。

これらのことは曲野遺跡―瀬田―伊野―の横への対比が可能である。さらに大分県玖珠郡の九重火山灰や長崎県島原半島の雲仙火山灰の存在が明らかになれば熊本県を中心として、九州を横切る基本層序が確定されることも可能となりつつある。（江本）

註

(1) 固くて耕作に非常に不都合である。農家の人々の手に負えない心情を「ニガシロ坊主」にたとえたことから「ニガシロ」の呼称となったものである。

(2) 東京都立大学教授町田洋氏の報告による。

(3) 緒方勉・古川博恭・籾倉克幹『櫛島遺跡』熊本県文化財調査報告第18集　1975

(4) 近野　董「黒ボク土の断面」『九州の土壌と農業』写真でみる九州の土壌と農業編集委員会　1980

3.　歴史的環境

曲野遺跡の所在する松橋町は、町の大部分が洪積台地と小山塊からなっており、熊本平野と八代平野を南北に分ける地域に位置している。平野はほとんどなく、洪積台地が小河川によって侵食された小規模の谷間に水田が営まれているにすぎない。このような地理的・地形的環境からなのかは判然としないが、熊本平野に面した城南町や宇土市、および、八代平野に面した八代市・宮原町などに比べ、縄文時代を除き遺跡がかなり少ない感がある。ただ、古代に関しては、曲野および寺尾遺跡　発掘成果や、従来から宇土郡寺と考えられている古保山廃寺の存在により、当地方における官衙の存在が予想されるところであり、また、奈良時代末期から平安時代にかけて多数形成される須恵器窯跡および瓦窯跡からの製品の供給先および、それらの窯を経営した集団の背景などが問題になりつつある。

このように、松橋町における同時代の遺跡の展開は熊本県の同時代の歴史を考える上で重要な鍵を担っていると言えよう。

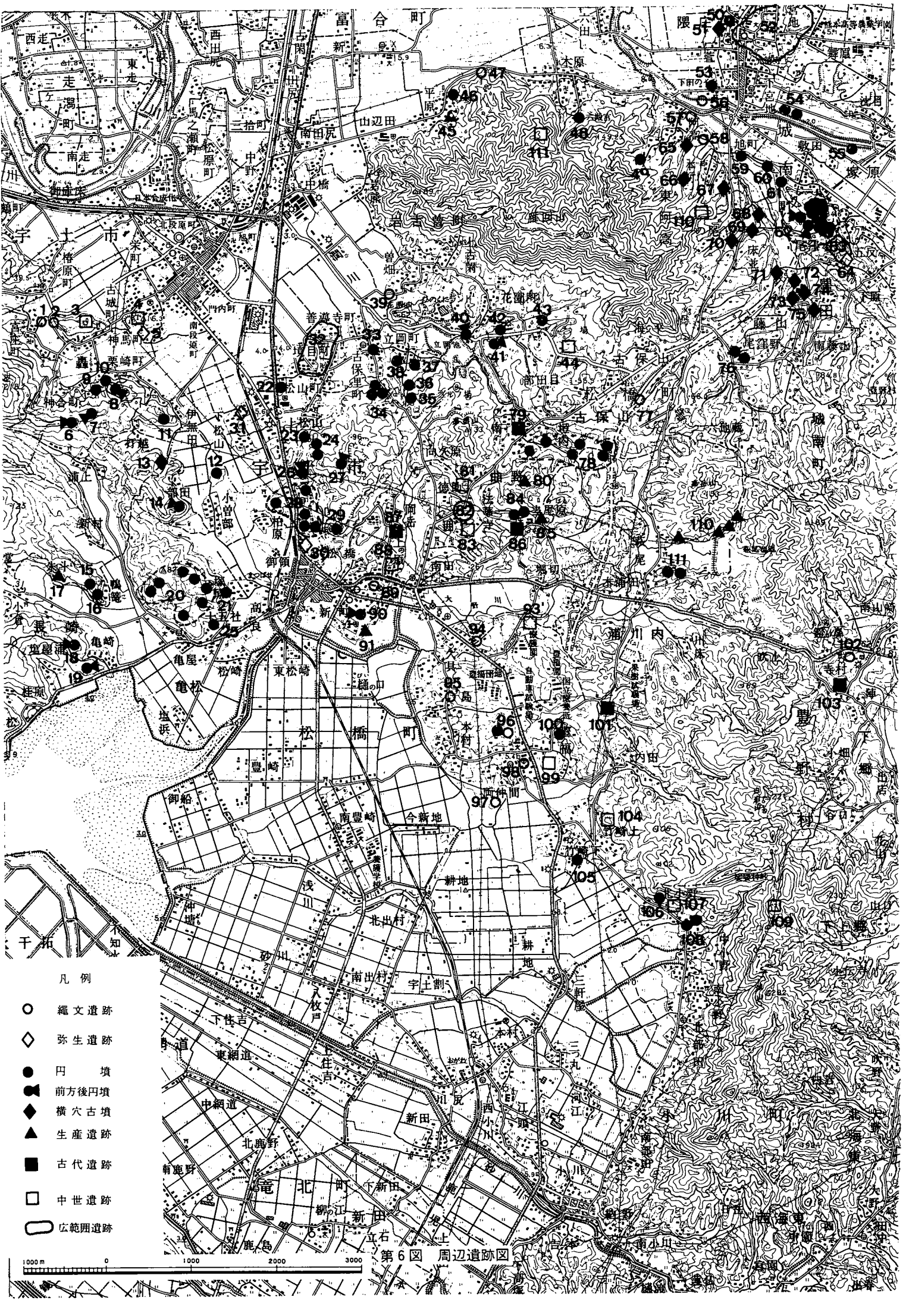
旧石器時代

甲佐町から松橋町にかけては緑川・浜戸川・大野川などが形成した段丘面が広範囲に広がっており、旧石器時代の遺跡の発見が十分期待できる地帯である。[註(1)] 従来から甲佐町を中心として細石器文化期の遺跡は少数知られていた。今回の曲野遺跡およびほぼ同時期に発掘された上ノ原遺跡ではこれらよりも古いナイフ形石器文化期の石器が検出されている。上ノ原遺跡ではナイフ形石器は検出されていないが、両者の遺跡からは類似した台形石器および三稜尖頭器が出土している。

今後、この地帯は踏査および調査を実施することにより、旧石器時代の編年作業および遺跡群としての把握により、当時の人間の行動パターンを抽出できる良好なフィールドとなりそうである。

縄文時代

当地域における縄文時代の遺跡の調査・研究の歴史は古く、大正年間にいち早く九州縄文土器の研究が始


凡例
縄文遺跡
弥生遺跡
円墳
前方後円墳
横穴古墳
生産遺跡
古代遺跡
中世遺跡
広範囲遺跡
1000m
0
1000
2000
3000

第6図　周辺遺跡図

No.	遺跡名	時代	備考
1	轟貝塚(宮莊)	縄文早～後 弥中・古墳・中世	発掘調査・一部報告 京都帝大文学部考古学研究報告 5
2	〃（西岡台）	〃	発掘調査 『宇土城跡(西岡台)』宇土市文化財報告1
3	宇土城址（西岡台）	弥生後～近世	発掘調査 宇土市埋蔵文化財調査報告 1
4	宇土城址（城山）	中世～近世初	発掘調査・未報告
5	宇土城三ノ丸	弥生～古墳 近世	発掘調査・未報告 『宇土城三ノ丸』宇土城三ノ丸発掘調査団
6	スリバチ山古墳	古墳（前）	発掘調査 富樫『宇土市の文化財』 3
7	追ノ上古墳	〃	発掘調査・未報告 富樫『宇土市の文化財』3
8	城ノ越古墳	古墳（？）	破壊・墳形・主体部不明 三角縁神獣鏡出土　富樫『熊本史学』33
9	神合古墳	古墳（後？）	
10	猫ノ城古墳	〃	
11	久保古墳	〃	
12	鬼塚古墳	古墳（後）	
13	大平横穴古墳群	〃	発掘調査・未報告　平山『宇土市の文化財』3
14	仁王塚古墳	古墳（後？）	測量調査
15	鴨籠1号古墳	古墳（中）	発掘調査 京都帝大文学部考古学研究報告 1
16	鴨籠2号古墳	古墳（後）	
17	朱斗窯跡	古墳（後）	
18	国越古墳	古墳（後）	発掘調査・一部報告 乙益『昭和41年熊本県埋蔵文化財緊急調査概報』
19	弁天山古墳	古墳（前）	発掘調査・一部報告 富樫『熊本史学』30
20	塚原古墳群	古墳（後）	舟線刻多数 三島格『日本考古学年報』14
21	塚原古墳？	古墳（中？）	
22	桶底古墳	古墳（後）	
23	チャン山古墳	古墳（前）	発掘調査・一部報告 富樫卯三郎『石人』106号
24	南山内箱式石棺群	古墳（後）	発掘調査 北條・平山・木下『宇土市史研究』 1
25	十五社石棺群	古墳（後）	
26	向野田古墳	古墳（前）	発掘調査 宇土市教委『宇土市埋蔵文化財報告』 2
27	御手水古墳	古墳（前）	
28	御領東原古墳群	古墳（後）	柏原古墳も含める
29	宇賀岳古墳	古墳（後）	発掘調査 京都帝国大学文学部考古学研究報告 3
30	出町	弥生中～後 古墳	発掘調査・未報告 古田一英『熊本史学』26
31	下松山	弥生後	
32	境目	弥生中～中世 縄晩	発掘調査
33	古保里石棺群	古墳（後？）	発掘調査・未報告
34	神ノ山古墳群	古墳（後）	発掘調査 宇土高校社会部部報 2
35	西潤野古墳	古墳（後？）	
36	潤野古墳	古墳（中）	発掘調査 京都帝大文学部考古学研究報告 3
37	晩免古墳	古墳（中？）	〃
38	二枝古墳	古墳（？）	
39	曽畑貝塚	縄文前・後	発掘調査・未報告
40	楢崎古墳	古墳（中）	発掘調査 梅原・古賀・下林『熊本県史跡名勝天然記念物調査報告』2
41	女夫塚古墳（男塚）	古墳（中）	
42	女夫塚古墳（女塚）	古墳（？）	
43	三日鬼の窟古墳	古墳（後）	
44	三日如来寺跡	中世（鎌倉）	高木恭二「如来寺について」「とどろき」7
45	富合平原窯跡	古代(平安初)	発掘調査・一部報告 松本・三島『城南町史』他
46	神ノ上古墳	古墳（後）	発掘調査・未報告
47	ソビエ石貝塚	縄文	
48	木原古墳	古墳（後）	
49	影熊古墳	古墳（？）	
50	西原古墳	古墳（？）	
51	城鼻横穴古墳群	古墳（後）	
52	宮地台地西端遺跡群	弥生中～古墳	多数のカメ棺群、囲貝塚（発掘調査・一部報告）など。松本・三島『城南町史』
53	一ノ町古墳	古墳（？）	
54	三ツ石古墳	古墳（？）	
55	小木古墳	〃	
56	黒橋貝塚	縄文中～後	発掘調査 西田『黒橋』熊本県文化財報告
57	阿高貝塚	縄文中～後	発掘調査・一部報告 西田『阿高貝塚』城南町文化財調査報告
58	御領貝塚	縄文早 縄文後～晩	発掘調査・一部報告 坪井『城南町史』
59	岸1号墳	古墳（？）	
60	岸2号墳	〃	
61	岸3号墳	〃	
62	塚原古墳群	古墳(前～後)	発掘調査 『塚原』熊本県文化財調査報告16
63	上ノ原	古墳	発掘調査 『上ノ原遺跡』Ⅰ　熊本県文化財報告59
64	上ノ原	弥生前～中	〃
65	阿弥陀尾横穴古墳群	古墳（後）	
66	御領横穴古墳群	〃	
67	飛ノ尾横穴古墳群	〃	
68	一位田横穴古墳群	〃	
69	ウシクビ横穴古墳群	〃	
70	一尾横穴古墳群	〃	
71	ハゼ野横穴古墳群	〃	
72	メリ穴横穴古墳群	〃	
73	ハシゴン段横穴古墳群	〃	
74	鶴横穴古墳群	〃	
75	長原横穴古墳群	〃	
76	六地蔵古墳	古墳	
77	古保山	縄文早 縄文晩	
78	古保山古墳群		
79	古保山廃寺	古代(平安初)	松本・三島『城南町史』
80	琵琶田窯跡	？	
81	丸山城	中世	
82	曲野		
83	曲野城	中世	
84	伽藍原古墳	古墳（？）	
85	当尾窯跡	古墳（後）	発掘調査・未報告 『生産遺跡基本調査報告』Ⅱ 熊本県文化財調査報告48
86	寺尾	古代(奈良末)	発掘調査 今回報告
87	上ノ原	縄文早・晩 古代、中世	発掘調査、未報告
88	大野	中世	
89	大野貝塚	縄文後～晩	島田『考古学雑誌』12巻8号
90	松橋大塚古墳	古墳（中？）	
91	前田	古墳	発掘調査、未報告
92	高城	中世	
93	豊田城	〃	
94	上久貝	縄文晩 弥生後	
95	瀬小島	縄文	
96	狐塚	縄文晩 古墳？	
97	宮島貝塚	縄文早～前 弥生中	発掘調査、未報告
98	仲間貝塚	縄文（中）	
99	豊福城	中世	発掘調査、未報告
100	豊福古墳	古墳（？）	
101	弁天廃寺	古代（平安）	浦田『熊本県松橋町曲野遺跡調査報告』
102	ダンボール工場	縄文早・後	発掘調査・未報告
103	浄水寺	古代（平安）	松本雅明『城南町史』
104	竹崎城	中世	
105	竹崎年ノ神古墳	古墳（後）	
106	北平古墳	古墳（後）	
107	小野館	中世	発掘調査
108	年ノ神古墳	古墳（後）	発掘調査・一部報告 富樫・松本『熊本史学』15・16
109	花山城	中世	
110	阿高城	中世	
111	木原城	中世	

第1表　周辺遺跡一覧表

められている。その中心となったのは小林久雄氏であり、城南町阿高、同御領貝塚および同沈目遺跡、また宇土市轟、同曽畑貝塚、そして、松橋町では宮島、大野貝塚などの調査・研究により九州縄文土器編年の骨子が提言されるに至り、現在でも基礎となっている。[註(2)]

さて、曲野遺跡の存在する洪積台地上では押型文土器を中心として各期の土器片が採集される。これまで、古保山C、曲野遺跡において広範囲にわたる発掘調査がなされており、押型文土器に伴う集石遺構や住居跡？などが検出されている。まだ、押型文以後の集落跡は未発見であるが、これまでの貝塚を中心とした調査・研究から、集落を中心とする調査・研究への移行をおそまきながら考える時期であろう。そして、この地域は、先述したように縄文各期にわたり、海岸部と台地上の両地帯に遺跡が分布しており、当時の生活形態の１つの類形を見い出すことが容易な地域といえる。

弥生時代

松橋町から宮原町以北の地域は、干拓地を除けば良好な沖積平野は極めて少なくなっている。このためか熊本平野に面した城南町、宇土市、あるいは八代平野を持つ八代市、宮原町などに比べ弥生時代の遺跡は少ない状況にある。また、遺跡の内容・性格にも違いがみられるようである。城南町・宇土市には、宮地台地西端遺跡や境目遺跡のように弥生時代を通じて形成される拠点的遺跡[註(3)]が知られている。これに対し、松橋町においては、大野台地および豊福台地久具で後期の土器片がわずかに採集されるのみであり、あるいは地形的状況から弥生文化の流入・発展の時期が遅れ、しかも、それほどの活況を呈さなかったことも考えられる。なお、隣接する不知火町出町遺跡では発掘調査により後期の住居址や壺棺が検出されているが詳細は不明である。

古墳時代

当地域における古墳文化の最も特徴的な点は宇土半島基部における前期古墳の集中的分布である。現在まで確実なものは６基（スリバチ山、追ノ上、チャン山、弁天山、御手水、向野田古墳）が知られており[註(4)]、円墳であるチャン山[註(5)]を除いて全て前方後円墳である。このような前期古墳の一地域における集中は県下では他に例がなく、まして、一時期においてこれほどの数の古墳を作り得る生産基盤を当地域には求め得ないところであり、別の要因を考慮しなければならないだろう。[註(6)]

中期古墳は前期古墳のように集中することなく散在した分布を示している。鴨籠１号、楢崎山、天神山、塚原古墳群[註(7)]中の琵琶塚、将軍塚、そして、主体部は不明であるが、松橋大塚もこの時期にあたる。

後期になると、全国的傾向と同様にこの地域においても数多くの古墳が築かれるようになる。それも、小川町年ノ神古墳や富合町神ノ上古墳などのように弥生・古墳期を通じて農耕地としてあまり環境のよくない地域にも点々とした分布を見せるようになる。また、後期の特徴である群集墳も、不知火町塚原古墳群[註(8)]、同御領古墳群、松橋町古保山古墳群、城南町塚原古墳群、同阿高、尾窪、藤山横穴古墳群などがある。

曲野遺跡に近い古保山古墳群は調査例がなく正確な時期は不明であるが表採された須恵器からみると６世紀前半には古墳群が形成されているようである。[註(9)]なお曲野遺跡の周辺には古墳時代の土器が表採できる遺跡はなく、曲野遺跡の成立前、及び古保山古墳群との関連で、今後台地上での集落の状況が注目される。[註(10)]

古代

現在、この地域の同時代の遺跡は奈良末から平安時代にかけて見られる。遺跡としては、陳内廃寺[註(11)]、古保山廃寺、曲野遺跡、寺尾遺跡、上の原遺跡[註(12)]、弁天廃寺、浄水寺[註(13)]、平原瓦窯跡[註(14)]、それに萩尾を中心とした窯跡群および八ノ瀬戸を中心とした窯跡群がある。

古保山廃寺からは軒丸・軒平瓦が出土しており、国分寺出土のものと文様が類似している。法起寺式の伽藍配置を持つと言われ、宇土郡寺に比定されているが不明なところが多い。[註(15)]曲野・寺尾遺跡については後述されているので略するが、方一町に整然と区画された溝、板塀遺構および寺尾遺跡での巡方の出土、また両

遺跡での土器類などから見ると、何らかの官衙遺跡と考える方が妥当であろう。弁天廃寺はまだ調査がなく寺院であるかも不明であるが、焼けた軒丸瓦の出土が知られており、文様から平安時代に属するようである。

萩尾窯跡群は高岳山の南麓に現在まで8基確認されている。[註(16)] 坏・埦を中心として焼かれており、ここで焼かれた製品は、県内各地に搬出されているようであり、国分寺や八代市興善寺などにも認められる。[註(17)] 同時期の窯には隣接する豊野村八ノ瀬戸窯跡群があり、[註(18)] 県央における同時代の窯業生産の中心地となっている。そして、この地域は、当尾窯跡および元米山・先斗窯跡に見られるように、すでに6世紀代に須恵器窯が形成されており、編年的にも7世紀前半を除いて連続して窯が形成されている。[註(19)]

なお、古代の官道である駅路は当地域では2つのルートが考えられている。1つは『延喜式』にある豊向駅を現在の豊野村山崎にあて、浄水寺の横を通り小川町に抜けるルートであり、[註(20)] いま1つは豊向駅を現在の松橋町豊福にあて、曲野遺跡の東側、現在の縦貫道にほぼ沿ったルートである。[註(21)] 現在のところ両者の正否は一概に断定できないところがあるものの、今後の曲野・寺尾遺跡周辺の調査研究により徐々に解明されるものと思われる。

中世

考古学からのこの時期の遺跡の発掘調査はまだ緒についたばかりであり、多言を要しない。

鎌倉時代、この地域は宇土に本拠を置く宇土氏、矢部に本拠を置く阿蘇氏、八代に本拠を置く名和氏、それに北方から菊池氏の勢力が相拮抗しており、室町期には、宇土・名和氏、阿蘇氏、相良氏がこの地方で覇を競っている。特に松橋地方はこれらの勢力により、常に分割された状態におかれている。

考古学的には、いわゆる中世城遺跡がこの間の歴史を知る上での貴重な研究対象となる。この地方には、豊福城、曲野城、宇土城、木原城、隈庄城などの多くの中世城があるものの、発掘調査が行われたのは宇土城（西岡台）のみである。[註(22)] 宇土城の調査では千畳敷と呼ばれる主郭部の周溝と三城と呼ばれる郭に7棟の掘立柱柱建物が発見されており、鎌倉後期から室町末期にかけての中世陶器(備前焼など)、中国製陶磁器類(青磁、染付など) などが出土している。

曲野遺跡では後述するように溝と道路遺構によって区画された中に倉庫と思われる掘立柱建物跡が35棟確認されている。この倉庫群がいかなる理由によって形成されたかは今後の重要な課題となろうが、同一台地上に隣接する曲野城と密接な関係にあることは疑う余地はなく、また文献上では曲野を鎌倉時代から一貫して領地とする阿蘇氏との関連も十分考慮されなければならないだろう。

この他に重要と思われる遺跡には、松橋町大野遺跡と宇土市三日如来寺跡遺跡がある。大野遺跡は大野台地上にあり、当時の海岸近くにあたる。遺跡からは青磁、白磁などの中国陶磁器類が多数採集されている。

また如来寺跡は舌状の丘陵を中途から削り取った平坦な面が残されており、青磁類も採集されている。如来寺は河尻大慈禅寺を創建した寒厳禅師の創建といわれ、1269年に創建されたと言われている。[註(23)] 鎌倉時代の寺院址の調査例は少なく、今後の発掘調査が期待される。　　（古森）

註

(1) 台地地形の基盤となっているのは阿蘇火砕流であり、その上に段丘礫層が部分的に認められる。

(2) 小林久雄『九州縄文土器の研究』の中にまとめられている。

(3) 両遺跡とも弥生前期は未だ空白部分になっているが将来的には前期の遺構が存在している可能性が強い。

(4) なお、両遺跡とも古墳時代まで連続して遺跡が形成されている。
三角縁神獣鏡を出土している城ノ越古墳があるが、破壊され、墳形・主体部とも不明な部分がある。

(5) この古墳も採土中の発見であり、前方後円墳である可能性も残っている。

(6) いわゆる大和政権の進出の構図にあてはまるかどうかはまだ時間を要する問題であるが、宇土城（西岡台）で発見された前期の巨大なV字溝で囲まれた防御的集落と思われる遺跡などは何らか関連があるものと思われる。

(7) 塚原古墳群は前期から中期にかけて方形周溝墓が集中的に築かれており、後期の円墳群と同一墓域内に存在している。この中に首長墓と考えられるような中期～後期にかけての円墳・前方後円墳も作られている。

(8) 石室内の奥壁や側壁にかなり克明な構造船の線刻もみられ、不知火海を基地とする海上交通にかかわる集団の墓地とも考えられる。なお、石室には巨大な安山岩を用いている。

(9) 古くは12基以上の数があったといわれる。主体部の内容は調査例がなく明らかではないが、安山岩の巨石を用いた形跡はなく塚原古墳群に類似したあり方を示すようである。

(10) 今のところ、大野台地上、宇土市松山周辺、同境目遺跡などで古墳時代の土器片が多数採集され、集落と考えられる。なお発掘調査では、城南町上ノ原、同沈目遺跡が知られている。

(11) 白鳳後期８世紀初頭の創建といわれる。

(12) 松橋町により発掘調査されたが未報告のため詳細は不明である。

(13) 松本氏の四碑の調査によれば、奈良時代末期に創建されたとされる。ただ、出土文様瓦は平安前期に比定されるものである。また法隆寺式の伽藍配置をとると言われるが想定の域を脱していない。松本雅明「浄水寺の四碑」『熊本県文化財報告』３

(14) ３基の窯跡が発見されており、須恵器も同時に焼かれている。瓦は宇土郡寺（古保山廃寺）に供給されたといわれるが、文様瓦は出土しておらず不明である。

(15) 松本・三島「古保山廃寺」『城南町史』による。

(16) 萩尾の南、川床地区にもこの時期の須恵窯があるといわれるが、現在のところ確認できないでいる。

(17) いわゆる萩尾タイプと呼ばれる高台付坏であり、高台断面がハノ字状を呈するもので外面体部と高台部を同時に削っている。

(18) 瓦・須恵器を同時に焼いた窯が目立つ。窯の実数は明確ではないが数十基にのぼるものと思われる。瓦には平安前期のものがみられる。松本「八ノ瀬戸窯跡群」『城南町史』

(19) 松本健郎『生産遺跡基本調査報告』Ⅱでは宇城窯跡群の名が与えられている。

(20) 松本雅明、木下良氏等が主張する説であり、このルートには陳内廃寺、益城郡家推定地、浄水寺跡などがある。木下良「肥後国」『古代日本の交通路Ⅳ』

(21) 林田憲義氏、それに筆者もそう考える。鎌倉時代初頭、阿蘇甲佐社領文書の中に「宇土郡勾野四至」の項があり、「東限八代大道」がみえ、さらに豊福近くに「車路」の字名があることによる。

(22) 豊福城でも部分的に発掘調査が行われているが、いずれも未報告である。

(23) 高木恭二「如来寺仏像の胎内銘について」『宇土市史研究』１

4. 第一次調査の概要

昭和55年度における調査は、道路建設予定地内にどのような遺構があり、本調査の必要があるかどうかを決める試掘調査が主であった。その為、調査区内にグリッドを設定し、規則的に試掘トレンチを設定する方法をとり、遺構の検出に努めた。さらに一部表土層を剝ぎ平面的に遺構の拡がりを確認した。

以下調査日誌抄に記す通りである。

調査日誌抄

７月８日　発掘調査予定地におもむき、建設省熊本工事事務所調査係田中係長、浜田技官ならびに松橋町教育委員会小田原主事補らと共に現地踏査を行う。その際買収・未買収地区の確認、道路建設予定地域の中心杭・用地幅杭の確認、現場小屋設置予定地の承認等を行い、発掘調査が円滑に進展するように協力をお願いする。

７月11日　文化財収蔵庫より、調査器材の搬入を行い、発掘調査事務所を開設した。併せて試掘トレンチ設定箇所を踏査し確認を行った。

７月14～16日　発掘調査予定地内の除草作業と併行しグリッド設定作業を行う。グリッドの設定は建設省道路計画図面内の中心杭№229及び中心杭№231を結ぶ直線を今回のグリッド線とし、それを中心として10

m方眼のグリッドを設定する。[注(1)] 今後試掘トレンチは、基本的にはグリッド線に合わせて設定し、一部地形的な制約等がある箇所においては、任意に設定することとした。

7月17日～8月5日　各区のトレンチ掘り下げ作業を行う。33・34－D区、35・36－D・E区では削平及び攪乱のため少量の遺物の検出はあったが遺構の確認はできなかった。40～42－D・E区ではローム面に至るまでの強い削平を受けていた。そのような中で、33・34－J試掘トレンチでは上場幅3.2mを測る黒色の埋土をもつ溝遺構が確認された。今後トレンチの設定は溝遺構の延長部分がどのような状況で検出されるのか、もしくはこの溝遺構に付随する何らかの施設があるのかを確認するため台地上の平坦部に試掘トレンチを設定することとなる。

8月6～26日　字寺尾地区にグリッド線を延長し5本のトレンチを新たに設定する。所謂ロームに達するような攪乱を随所に受けているのが観察される。遺物は縄文土器・土師器・須恵器がかなり検出されるが遺構に伴う出土ではなく、字寺尾地区においては今後遺構の確認はできないものと考え、この地区での調査は断念する。

8月27日～9月4日　33・34－J区内検出の溝遺構確認のため、随所にトレンチを設定したところ、この溝遺構は台地上を環状にまわるものと判明し、遺構名をRSD－01と付した。さらにRSD－01の上面に一部道路状遺構が確認され（32・33－E）、この時期は伴出遺物より12世紀前後であることが判明した。

9月5～10日　25・26－F区においてRSD－01と交差する状況で大型の溝遺構が検出される。埋土の状況から見て、かなり急激に埋没したものであり、さらにこの溝（LSD－01）は西側へと続くものと考えられる。溝底部より染付が出土し、近世の時期であると考えられた。

9月11～16日　グリッド番号20～25－D～H区内の表土剝ぎを重機を用いて行う。全面にわたりピットが確認されるが、耕作溝等によりかなり攪乱を受けている。21－F区で溝が鋭角状に屈折するのが確認される。

9月17・18日　RSD－01にテストピットを設け断面観察を行ったところ、現在まで溝の底部としていた層が埋土であることが判明した。従来、溝の埋土は黒色土の単一層であると考えていたが、更にその下部に褐色土・黒褐色土の二層が確認され、基底面はロームまで達している。これによりRSD－01は深さ1mを越える本格的な所謂「ほり」の様相を呈することとなる。

9月24日　34－J区のRSD－01内で須恵器を検出。溝底部直上の出土であり、この溝の時期を決定できうる資料で、器種は高台付坏と考えられる。時期はその高台の特異な断面形から、松橋町の萩尾大溜池窯跡から出土する通称「萩尾」タイプと呼ばれるもので、奈良末～平安時代初頭に付置づけられる。

9月25日～10月1日　RSD－01の各トレンチでの掘り下げ作業ならびに図面作業を行う。併せて全剝ぎI区をジョレンがきで精査し、平板測量を行う。22－F区には陸橋部が確認され、東側からの道路状遺構もそこへと続いており、RSD－01内側への通路として用いていたものと推察される。

10月2・3日　21－F区RSD－01のコーナー部の発掘を行う。角度はやや鋭角状をなし両方向から掘り進めており、交差部では段差が10cm程あるが、未調整のままである。なお外側上場の立ち上がりは攪乱のため不明である。またこの箇所においても、溝底部にピットを確認する。掘り込み面は3層からであり、多数が確認されるが、何の性格か不明である。

10月6～22日　各トレンチの実測、写真撮影を行う。なお終了のものについては埋め戻し作業を併行して行う。

10月23日　専門調査員諸氏による現地検討会を行う。溝はきわめて規格性の高いもので、伴出遺物から見て奈良末時期の公共性の強い建物に伴う遺構であろう。中央部に方形の掘り方を持つ建物跡が確認できれば非常に重要な発見であろう。来年度の本調査に期待したい、という意見を受け来年度の本調査への意欲が湧いてくる。

10月24～28日　全剝ぎI区の写真撮影のため、清掃及び白線引きを行う。28日写真撮影。

10月29日～11月７日　各トレンチの実測図作製、遺物取り上げ埋め戻し作業を行う。寺尾地区の平板測量を実施する。

11月10・11日　来年度調査予定地の踏査を行い遺跡の拡がりを確認する。11日踏査中に県営圃場整備事業箇所において曲野遺跡と同時期の遺跡を発見する。また曲野遺跡とこの新発見の寺尾遺跡にいたる数箇所で土器の散布を見る。さらに県道より北側箇所においても数箇所散布の濃厚な地点を確認する。

11月17日　資材の撤収作業を行う。以降文化財収蔵庫において図面整理ならびに遺物の整理作業を行う。

番号	試掘トレンチ	出土遺物	出土遺構	調査面積	備考
1	7—E区	S—005(蓋) S—025(高台付坏) 縄文１　中世１ 土師30　須恵11 瓦器１	性格不明遺構	20 ㎡	調査必要なし
2	9—E区	—	なし	20 ㎡	〃
3	11—E区	—	なし	20 ㎡	〃
4	11—B区	土師器、須恵器	落ち込み	20 ㎡	〃
5	13—C区	縄文　1 土師　5 須恵　4 近世　4	竪穴か？　ピット	20 ㎡	〃
6	21—D・E区	土師器、須恵器	落ち込み、ピット	20 ㎡	調査必要あり (全剝ぎ)
7	23—F・G区	土師器、須恵器	RSD—01、ピット	20 ㎡	〃
8	24—D・E区	Y—02（壺）	ピット	20 ㎡	〃
9	21・22—H区	—	RSD—01	10 ㎡	—
10	21—F・G区	土師器、須恵器 近世陶器	RSD—01のコーナー部 SX—201	18 ㎡	—
11	24—E・F区	縄文　3 土師　6 近世　1	RSD—01	12 ㎡	—
12	25・26—F区	土師器、須恵器 近世陶器	LSD—01	20 ㎡	—
13	25・26—E・F区	土師器、須恵器	LSD—01、RSD—01	30 ㎡	—
14	26—D・E区	須恵器　1	RSD—01、ピット	35 ㎡	—
15	28—F・G区	縄文　2 土師　12 瓦器　2	ピット (遺構上面まで)	30 ㎡	調査必要あり
16	30—D・E区	—	RSD—01、SF、SD ピット (遺構上面まで)	35 ㎡	〃
17	32・33—D・E区	青　磁	RSD—01コーナー部 SF (遺構上面まで)	15 ㎡	〃
18	33—E区	—	RSD—01 (遺構上面まで)	10 ㎡	〃
19	33—F・G区	H—046(皿)	RSD—01、ピット (遺構上面まで)	30 ㎡	〃
20	33・34—G区	土師　7	RSD—01、ピット (遺構上面まで)	20 ㎡	〃

番号	試掘トレンチ	出土遺物	出土遺構	調査面積	備考
21	29—H区	土師器	大形ピット (遺構上面まで)	20 ㎡	調査必要あり
22	32・33—H区	土師器	大形ピット (遺構上面まで)	20 ㎡	〃
23	33・34—J区	須恵器(高台付坏) 土師器	RSD—01、ピット	15 ㎡	〃
24	35・36—J・K区	P—014(すり鉢) 縄文 5　瓦器 1 須恵 1　近世 5 土師 20	SD (遺構上面まで)	30 ㎡	〃
25	33・34—D区	近世陶器	落ち込み	24 ㎡	調査必要なし
26	35・36—E区	土師器	なし	24 ㎡	〃
27	36—D区	—	なし	16 ㎡	〃
28	40・41—D区	土師器	不明	16 ㎡	次年度、上段の畑の結果により判断
29	41・42—E区	土師器、須恵器	不明	16 ㎡	〃
30	20～25—C～H区	土師器、須恵器	RSD—01 全面にわたりSD、SK ピット	240 ㎡	本調査必要あり

第2表　Ⅰ次調査トレンチ設定一覧

註

(1) Ⅰ・Ⅱ次調査で用いたグリッド線はあくまでも任意のもので、遺構の主軸に沿うものではない。そこで、この任意のグリッドを地図上にのせる作業を行った。これは道路中心杭で地図上の座標が判明する2点（KEE・KE4—2）から、調査区を縦断し、グリッド中軸線にのせる、結合トラバースを組んで、中軸線の方位角を求めたものである。これによる計算値はG.N.—40° 40′ 33″ —Wを示しており、航空測量の図面上の実寸値とは1′程度数値が異なる。ここでは、北方位はG.N.を用いその角度はG.N.—40° 40′ 33″ —Wを測る。なお文中で用いる北方位は、全てG.N.で統一する。

（高谷）

5. 第二次発掘調査の経過

曲野遺跡の第二次発掘調査は前年の第一次調査にひき続き、昭和56年度実施されることになった。第一次発掘調査の結果に基づき、主に縄文時代早期押型文土器・集石遺構関係調査と奈良～平安時代にかけての環状溝、それに掘立柱建物群の発掘調査が目的とした一つであった。加えてもう一つは、新たに進みつつある用地買収済地区における遺構・遺物の存在有無を調べる試掘調査の実施であった。すなわち、建設省一般国道3号松橋バイパス関係工事第9工区と第10工区がその調査対象地であり、9工区は№214付近約10,000㎡が試掘対象地で、10工区は№220～№230の中で約7,400㎡が発掘対象地で、3457—1、3461—1番地を中心とした6,500㎡が試掘対象地とされた。

建設省九州地方建設局熊本工事事務所長からの依頼を受けて、熊本県教育長との間に発掘調査の委託契約の事務手続きを終えて、文化庁長官あて前者が文化財保護法第57条の2項に基づく発掘届を提出し、後者は同法第98条の2に基づき曲野遺跡の発掘届を通知した。さらに発掘調査用の器材購入の事務手続きや、調査行程表の作成をはじめとした発掘調査の準備を進めた。現地では発掘調査用地の確認や松橋町教育委員会社会教育課と地元関係者への調査協力依頼、そして発掘作業員の確保などを行った。

発掘および試掘調査地については５箇所の調査区に分け、それぞれ全Ⅰ～Ⅴ調査区と仮称した。現場での作業は７月１日から開始し、まずは全Ⅰ～Ⅲ区にかけて、おい繁った雑草の除去と立木の伐採作業からはじめ一部グリッド杭打ち作業も行った。また、現場事務所としてのプレハブハウスの建設を行い、用意しておいた発掘調査用器材・資材の搬入も終えた。

以下、発掘および試掘調査の主な実施行程とその概略について記しておきたい。

７月13日から試掘調査を開始。主に全Ⅳ調査区と全Ⅴ調査区から行ったが、縄文時代早期押型文土器や集石遺構それにピット等が検出されはじめた。

７月21日からはバックフォーを使って、全Ⅱ調査区全面に亘る表土剝ぎ作業を進め、作業者は表土剝ぎが終了した後を追って表面の清掃と遺構の検出につとめた。検出作業を進めると予想にたがわず環状の溝（ＲＳＤ―01）が長く帯状にその姿を現わし、内側には多数のピット群が見られた。両者が同時期のものとすればピット群を掘立柱建物群と想定し、いやがうえにも郡倉や郷倉との考えが強まりつつあった。このほか多数のＳＤ（溝）やＳＫ（土壙）も検出された。

７月24日からは全Ⅰ調査区の表土剝ぎ作業を行い、遺構・遺物の検出を行った。全Ⅱ調査区と同じく帯状に伸び、そしてコーナー部が確認できるＲＳＤ―01を検出し、内側には多数のピット群や溝遺構を検出した。ＲＳＤ―01のコーナー部の直ぐ西側には入口が設けられており、それから東北方向に向って細い硬化面が見られＳＦ（道路状遺構）の周囲には縄文時代早期の押型文土器片や集石遺構の石片が散在し、北西方向への拡がりが確認できた。

８月中は考古学専攻学生の参加もあり作業を大きく進めることができた。発掘調査は全Ⅰ・全Ⅱ調査区とも遺構の再度の検出作業を行い切り合い関係や埋土の状態、それに出土した遺物等から判断し、遺構の掘り込みは原則として時代の新しいものから古いものへと順次調査を進めていくことにした。また、調査の基準となる10m四方のグリッドの設定やレベルを合わせるための矢板打ちなどの作業も済ませた。この間発掘調査を実施した主な遺構はＳＤ―201～210、ＳＫ―201・202、ＲＳＤ―01などである。特に全Ⅱ調査区で調査したＳＤ―02は、ＲＳＤ―01にほぼ平行した状態で設けられており、溝底から出土する遺物は中世初頭であることを示し、ＲＳＤ―01が何らかの形で残存していた状況の中で設けられたことを示唆していた。そして、当初、ＲＳＤ―01の内側で検出した柱穴群については両者が同時期のものと判断していたが、ＲＳＤ―01を切り明らかに時期が後行する柱穴が存在することから、柱穴群の時期は少なくともＲＳＤ―01とＳＤ―202の時期があるものと考えられ、その時期の判断はさらに複雑さを増してきた。試掘調査は前半期に全Ⅳ調査区、後半期に全Ⅴ調査区を主にそれぞれ行った。また、試掘対象地の中の未買収地については、年度の後半期に試掘を実施することとした。

９月中はひきつづき全Ⅰ・全Ⅱ調査区の発掘調査を進め、ＲＳＤ―01を中心にＳＤ―201～ＳＤ―210遺構の調査を行った。また、柱穴群は検出作業を行ったあと、極力掘り込む前に掘立柱建物の柱穴の組み合せを行うことに努めた。その結果、最初に２間×３間と２間×４間の規模を持つ掘立柱建物を確認することができた。さらに柱穴を掘り終えて組み合わせ作業を進めると約10軒を確認することができた。

10月はすでに調査を進めていた全Ⅰ・全Ⅱ調査区に加えて、全Ⅲ調査区の調査もはじめ、表土剝ぎ作業のあと遺構・遺物の検出作業を行った。全Ⅰ調査区ではＲＳＤ―01・ＳＤ―211・柱穴群を中心に掘り方・写真撮影・実測・遺物取り上げの作業を順次行っていった。全Ⅱ調査区も柱穴群の各掘立柱建物ごとと全体の写真撮影を終え、20分の１の縮尺での実測、そして遺物の取り上げを行った。

11月中は主に第Ⅲ調査区の各遺構の掘り下げを行った。ＳＤ―202・203・208遺構の掘り下げやＲＳＤ―01の埋土の上面に見られる硬化面などの調査を実施した。硬化面は小規模であるが、ＲＳＤ―01の北側コーナー付近を切っており中世期を上限として北東側の谷部へ向って時期が下がる傾向があった。特に時期を同じくす

るSD—202や掘立柱建物群との関係が問われはじめた。このほか、全Ⅰ調査区ではＲＳＤ—01の溝底で確認できる柱穴群を調査を行った。この柱穴群は全Ⅱ調査区でも多く検出できたが、溝の中に検出されるという特殊性に加え、各柱穴の深さや大きさ、それに並び方にも規則性が見られず、その用途については最後まで不可解であった。全Ⅱ調査区では20分の１による掘立柱建物群の最終的な実測作業を行った。

12月は主に全Ⅲ調査区のＲＳＤ—01の掘り込みを行った。特に28・29—Ｅグリッド付近の溝底からやや浮いた状態で多くの須恵器や土師器片が出土した。溝底は一定しておらず深く掘り下げた部分も見られ、排水溝としての機能を第一目的として造られた可能性は少なく思われた。なお、建設省で進められている未買収地の用地交渉が難行し、未買収地で予定していた発掘および試掘調査を今年度内に終了する見通しが立たないことと、新規遺構の出現により、熊本工事事務所と協議を行なった結果、一部契約変更の事務手続きを取るに至った。後半には全Ⅱ調査区で検出した掘立柱建物群および柱穴群は埋土の中に糸切底の破片があったり、ＲＳＤ—01を完全に立ち切る現象があることなどから、これらの掘立柱建物群についてはＲＳＤ—01に伴う時期のものではなく、ＳＤ—202もしくはこれ以降の時期のものであるとの判断に達した。

１月から２月も主に全Ⅲ調査区の調査を行い、ＲＳＤ—01の掘り下げ、写真撮影、実測、遺物の取り上げを行った。このあと、内側の柱穴群の調査を続けた。第Ⅰ調査区は残っていた土壙と、ＲＳＤ—01の内側の柱穴群の最終的な写真撮影と実測、遺物の取り上げを終え、縄文時代関係の調査を残すだけとなった。この中でＲＳＤ—01のコーナー部分の内側で検出したＳＢ—218 は唯一黒色の埋土を有しており、２間×２間の規模で、四面疵を有することが判明した。いずれにしろ、ＲＳＤ—01と時期を同じくする唯一の掘立柱建物であり、すぐ横は溝が切れ、入口部分と考えられることから、出入口に関係する性格をもつ建物であろうと判断できた。また、全Ⅰ～全Ⅲ調査区を通してＲＳＤ—01の内側には小溝が巡ることが判明し、浅くＶ字形に掘られ、小さな柱穴を有するこの溝は、ＲＳＤ—01の内側に板塀等の施設があったものと考えられた。しかしながら、ＲＳＤ—01に直接的に伴う掘立柱建物は東側コーナーの内側にあるＳＢ—218 だけであることが判明し、当初、郡倉・郷倉と想定されたＲＳＤ—01そのものの性格については、ＲＳＤ—01のほぼ中心部にあたる部分の調査が最大の鍵となって来た。すなわち、当初より考えられた官衙、特に倉庫群としての捉え方は、礎石痕や、大型の掘立柱建物群の痕跡がない事から肯定されがたき状況となった。各地の調査事例から考えると中央部に施設を有する郡衙の可能性が残されているが、地理的に益城郡と宇土郡の郡境地区に属していることなど、その解明にはさらに複雑さを増して来ている。

３月は全Ⅰ調査区の中で特に北側に多く見られた縄文時代早期の押型文土器と集石遺構を中心に調査を行った。全Ⅲ調査区で残っていた写真撮影と実測、それに遺物の取り上げ作業も終了した。

なお、今回の調査で数点の旧石器時代遺物も検出された。いずれも耕作や溝などによって下層まで掘られた地点から出土したものであるが、正確な出土層位や遺物の分布範囲や密度などは不明であり、今後の調査に期待がもたれた。

発掘調査の実施にあたっては、肥後考古学会長三島格氏や奈良文化財研究所、藤原宮跡発掘調査事務所佐藤興治氏らをはじめ多数の方々に多大の教授と指導を受け、深く感謝の念を抱きながら調査を終了した。

（江本）

番号	試掘トレンチ	出土遺物	出土遺構	調査面積	備考
31	35・36—G	H—038(皿) 縄文 91　須恵 2 土師 11　近世 1	縄文集石遺構	40 ㎡	調査必要あり
32	37—I ・J	H—040(皿) 縄文 39　瓦器 1 土師 11　中世 1 須恵 2　近世 11	縄文集石遺構	40 ㎡	〃
33	39—I ・J	S—028(高台付坏) 土師 6 須恵 2 近世 2	SD (溝遺構)	40 ㎡	〃
34	38—D・E	土師 4 瓦器 1	—	40 ㎡	必要なし
35	40—F・G	—	—	40 ㎡	〃
36	43—K・L	—	—	40 ㎡	調査必要あり
37	45—K・L	縄文 2	縄文集石遺構	40 ㎡	〃
38	47—K・L	P—031(カマド) 縄文 18　瓦器 1 土師 5　中世 3 須恵 1　近世 1	縄文集石遺構	40 ㎡	〃
39	47—M	縄文 2 土師 2 近世 3	縄文集石遺構	20 ㎡	〃
40	49—K・L	—	—	40 ㎡	〃

第3表　Ⅱ次調査トレンチ設定一覧

第Ⅱ章　旧石器・縄文時代

1．遺　　構

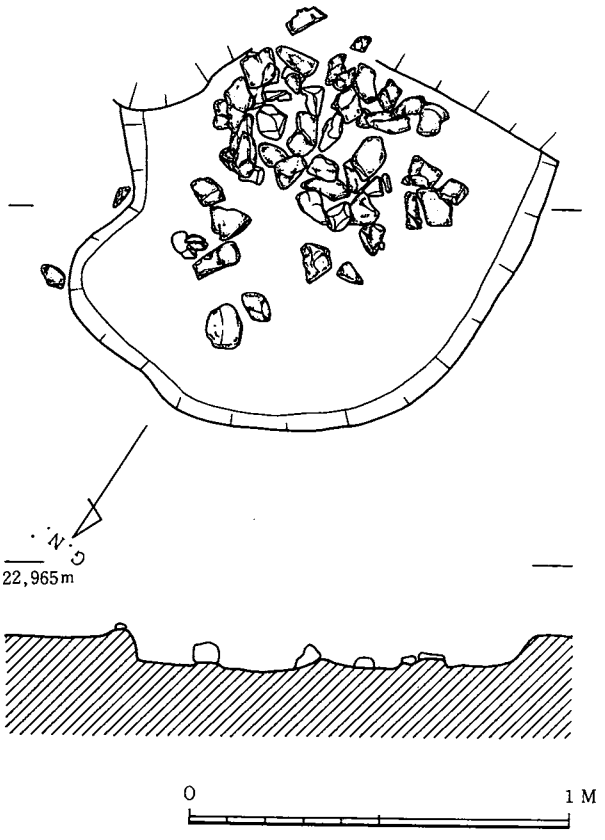
調査地域内において旧石器時代の石器は３点の出土である。層序的に旧石器時代の文化層までは掘り下げが到達しておらず、遺構の確認はされていない。ここでは縄文時代の遺構についてのみ述べることとする。

縄文集石遺構

今次の調査において、縄文時代の遺構は２箇所確認された。１つは35・36―Ｇ区試掘トレンチにおいてⅢ層上面で奈良・平安時代の遺構検出作業中に、集石の頭頂部の露出が確認されたものである。トレンチ範囲内で集石遺構の掘り込み面の確認を行なったが、範囲内では土色の識別が困難であり次年度の調査に譲りたい。さらに全剝ぎⅠ区内においても集石遺構状のものが数箇所検出されたが、調査範囲が限定されていたため正式の報告は次年度に結論を出したい。

他の１基は33―Ｆ区内においてＲＳＤ―01の溝上端肩部で、ほぼ半載される形で検出された。南側端部がＲＳＤ―01に削り取られているが、現在長で南北幅1.1ｍ、東西幅1.2ｍ、深さ10㎝の楕円形を残している。岩質は砂岩質の角礫で約50個が１群となっている。伴出土器類は見られないが、所謂縄文時代早期に多数発見例のある集石遺構であると考えられる。

但し、このレベル面での確認は層序的に見ても、やや上位過ぎるきらいもあり、他調査区の同一層序内では検出されていない点を考慮すると、時期決定には若干検討の余地がある。



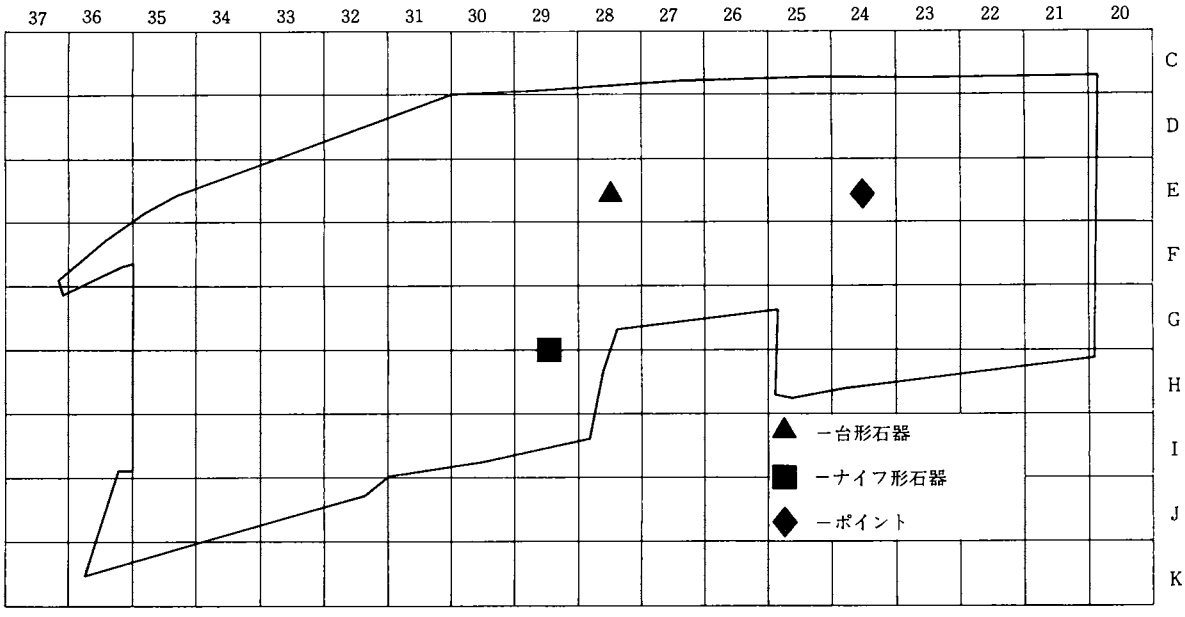
第７図　ＳＫ―230（縄文集石）実測図

2．遺　　物

石器（第９図）

今回出土した21点の石器について報告をしておきたい。これらの石器は本来時期を異にする遺構の調査や、表土剝ぎ作業中に出土したものと、調査中に表土から表採した資料も一括しており、出土層を明確にしていない。したがって、出土状況や共伴する石器や土器を不明としているが、一応(1)～(3)を後期旧石器時代、(4)～(21)を縄文早・前期のものと考えて報告しておきたい。

(1)ナイフ形石器　サヌカイトの横長剝片を素材としている。表面に広い平坦面を有し、素材は連続的に剝取された可能性がある。背部及び基部には主に主要剝離面から綿密な二次加工を施している。刃部の幅は



第8図　旧石器出土地点

狭く、斜刃で切り出し状を呈する。先端部を欠失しているため尖りについては不明である。

(2)台形石器　良質の黒曜石の不定形の剝片を素材としている。基部を形成する二次加工のほか、表面にも厚みを除去する調整剝離がある。

(3)尖頭器　横剝ぎによる剝片を素材としており、主に主要剝離面から二面に対して調整剝離を施し、断口が三角形を呈する尖頭器を形成している。

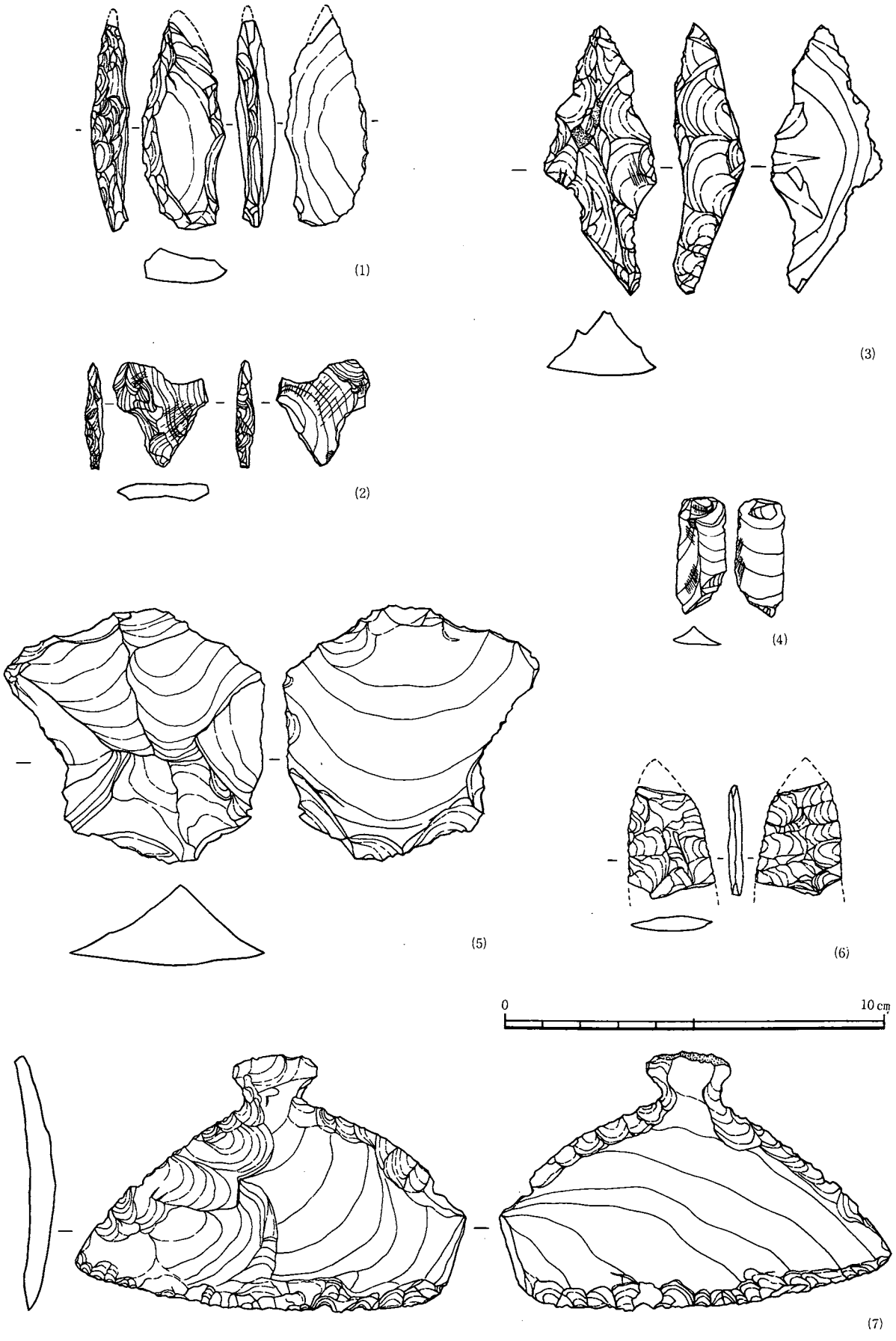
尖頭部を尖らし、基部は長い。全体的に粗い仕上げで屈曲が著しいが、三稜尖頭器として捉えることができよう。

(4)は黒曜石の剝片で使用痕が見られる。

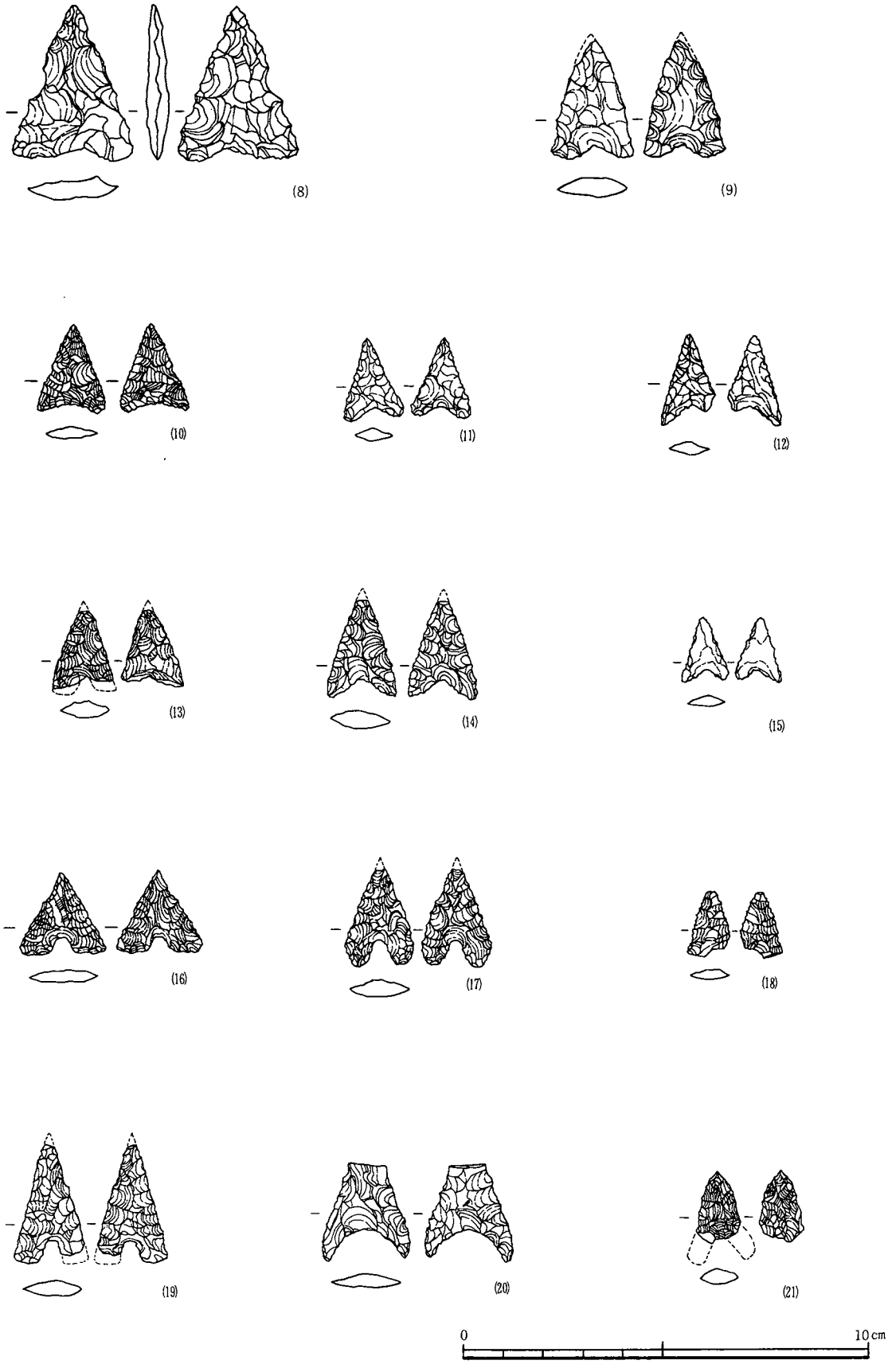
(5)はサヌカイトの剝片で、表面に多数の剝取痕が認められる。

図版番号	器種名	地　区	グリッド	層　　位	出土高度	石　　材	色　調	長　さ	最大幅	厚　さ	重　さ	備　　考
1	ナイフ形石器	Ⅱ区	29-G・H	溝埋土	cm	サヌカイト	灰褐色	5.4cm	2.1cm	1.0cm	10.5g	
2	台形石器	Ⅲ区	28－E	Ⅱ　層	-111.5	黒曜石	黒　色	2.8	2.5	0.5	2.3	
3	三稜尖頭器	Ⅰ区	24－E	SD－223埋土		頁　岩	灰褐色	7.1	2.9	1.2	19.9	
4	剝　片	Ⅲ区	37－I	表土層		黒曜石	黒　色	3.1	1.2	0.4	1.8	
5	剝　片	Ⅱ区	26－D'	SD－214埋土		サヌカイト	灰褐色	6.7	6.8	2.1	83.7	
6	尖頭器	Ⅱ区	32－I			黒曜石	黒　色	3.0	2.8	0.4	3.1	有茎？
7	石　匙	Ⅲ区	34－G	SD－202		サヌカイト	灰褐色	10.3	6.7	0.7	58.3	No14
8	石　鏃	Ⅰ区	22－F			チャート	灰褐色	3.8	3.0	0.6	4.3	炉跡一括
9	石　鏃	Ⅰ区	22－D	表土層		サヌカイト	灰褐色	2.9	2.0	0.5	2.1	
10	石　鏃	Ⅲ区	28－E	RSD－01第Ⅰ層		黒曜石	黒　色	2.2	1.2	0.3	0.9	
11	石　鏃	Ⅱ区	33－G	黒色土下		チャート	褐　色	2.1	1.1	0.3	0.5	RSD－01 SD－208 切り合い部
12	石　鏃	Ⅰ区	22－D	第Ⅲ層上面		チャート	褐　色	2.3	1.2	0.3	0.5	
13	石　鏃	Ⅰ区	22－F			黒曜石	黒　色	1.9	1.5	0.5	1.0	炉跡一括
14	石　鏃	Ⅲ区	28－E			チャート	灰褐色	2.4	1.8	0.5	0.9	
15	石　鏃	Ⅰ区	24－F			サヌカイト	灰褐色	1.6	1.2	0.3	0.4	
16	石　鏃	Ⅲ区	26－D			黒曜石	黒　色	2.1	2.1	0.3	0.9	
17	石　鏃	Ⅲ区	29－F			チャート	黒　色	2.4	1.8	0.5	1.0	
18	石　鏃	Ⅲ区	28－E	表土層		チャート	灰褐色	1.6	0.9	0.3	0.3	
19	石　鏃	Ⅰ区	24－G	柱穴内		チャート	灰褐色	2.9	1.8	0.4	1.4	
20	石　鏃	Ⅱ区	34－H	SD－201埋土中		サヌカイト	灰褐色	2.5	2.2	0.3	1.3	
21	石　鏃	Ⅲ区	29－E	RSD－01埋土中		黒曜石	黒　色	1.7	1.1	0.4	0.7	

第4表　出土石器一覧表



第 9 図　石器実測図(1)



第10図　石器実測図(2)

(6)は小型の尖頭器の破片である。最も質の悪い黒曜石を用いており、両面に押圧剝離による綿密な調整剝離を行っている。多くを欠失しているが有茎の可能性が強い。

(7)は大型の石匙で薄く剝取したサヌカイトの剝片を素材としている。上方にツマミを有し交互剝離により刃部を形成している。

(8)〜(21)は石鏃である。脚の抉りが少ないもの(8〜11)、抉りがやや深くなるもの(12〜15)、抉りが深くなり、脚部がめだつもの(16〜21)の3種類に分かつことができる。

旧石器時代の所産と考えた（1〜3）の3点の石器は特徴的なナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器の器種である。いずれも溝の埋土などから検出されたものであるため本来の出土層を明確にしていない。引き続いて発掘調査を実施した57年度の調査では第Ⅵ層に旧石器の主たる包含層があるという事実が判明しており、その石器組成はナイフ形石器と台形石器を主とするものであることが確認できている。そして、それは広域火山灰姶良・丹沢パミス「ＡＴ」を包む層よりも下位に位置することでさらに論議を呼んでいる状況にある。先の層位によって、縄文早期の押型文土器のメインの包含層は第Ⅳ層であると記したが、それ以前の旧石器時代遺物の包含層は、下位の第Ⅴ層・第Ⅵ層と考えられる。今後の発掘調査事例を見ないと判断はできないが、第Ⅳ層にも旧石器時代遺物を含む可能性はあろう。[註(1)] さて、3点の石器であるが、まず(1)のナイフ形石器からみてみると素材がサヌカイトの横剝ぎの剝片で連続的に剝出された可能性があることなど瀬戸内技法との関連が問われよう。形成された刃部が結局は切り出し状を呈することなど直接的に結びつけるのには疑問があり、今後に類例資料や石器などの出土を見ないとその関連性の確認はできない。(2)の台形石器は刃部の形成方法や基部の調整剝離技法の特色は従来の百花台タイプと技去木タイプとをミックスした様な独得のタイプである。(3)の三稜尖頭器と同様の石器は阿蘇郡小国町下城遺跡[註(2)]で多く出土している。石質がチャートであり、黒曜石を多く用いた下城遺跡と異なるが、形や技術に共通性が見られる。一般的に舟底型石器や円錐状石器と称され全国的に出土する石器であるが、「ＡＴ」より以前にはその出土を見ていないようである。とすれば、曲野遺跡における旧石器時代遺物の包含層は第Ⅵ層（ナイフ形石器＋台形石器）に加えて、第Ⅴ層もしくは第Ⅵ層にも文化層が予想され、「ＡＴ」をはさんで少なくとも二枚の文化層がありそうである。そうなった場合、(2)については上下どちらの所産であるのかはっきりしないが、(1)についてさらに瀬戸内技法との関連が強まるとすれば、(3)の三稜尖頭器と上の文化層におさまる可能性も生じてこよう。縄文時代の石器の中で特に注目されるのは(6)の尖頭器であろう。県内の縄文時代早期関係の発掘例で有茎尖頭器が出土した例は聞かない。わずかに、球磨郡多良木町里ん城遺跡[註(3)]の採集資料の中に類似した資料があるが、これも茎部ははっきりと形成していない。(6)がもし有茎であるとすれば、おそらく押型文土器よりも先行する時期の所産とされる。ただし、現時点ではそれにふさわしい土器の出土は見ていない。　　（江本）

註

(1) 有明海をはさんだ島原半島百花台遺跡では、第Ⅲ層の黒色火山灰土層に旧石器時代の包含層があり、台形石器や細石刃・細石核を出土している。麻生優・白石浩之「百花台遺跡」『日本の旧石器文化３』雄山閣1976

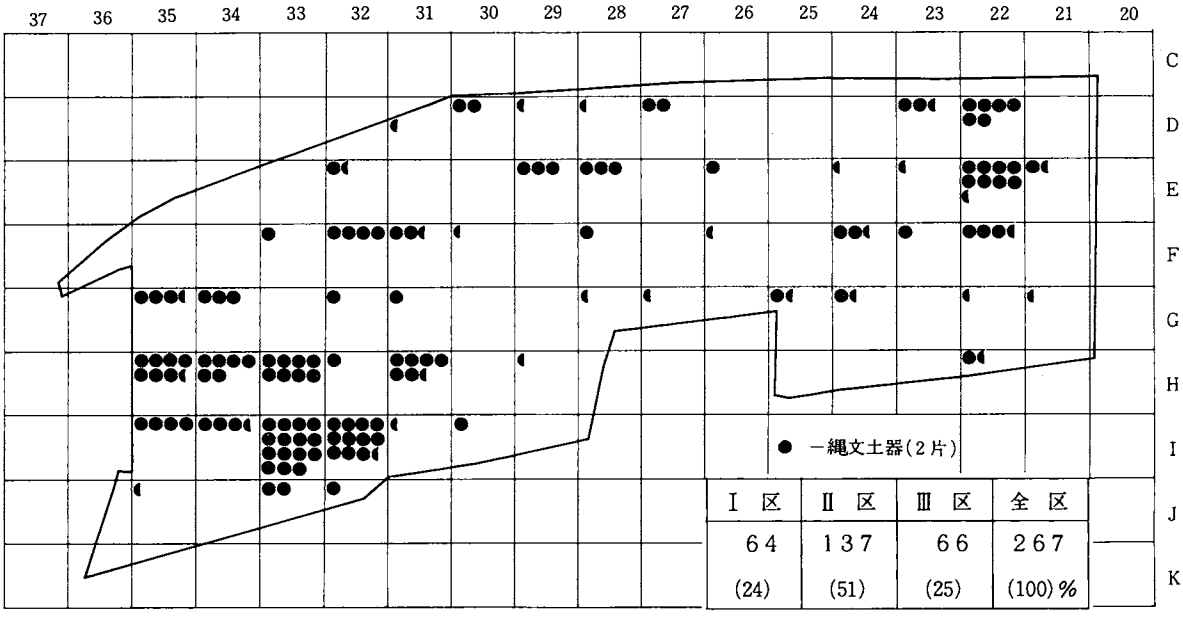
(2) 緒方勉・古森趾次『下城遺跡Ⅱ』熊本県教育委員会1980

(3) 大田幸博・下村悟史『里の城遺跡』熊本県教育委員会1980

縄文土器　（第12図〜第19図）

本遺跡のⅠ次（55年度、試掘）、Ⅱ次（56年度、本調査）調査において出土した縄文土器は276点を数える。時期は早期、前期、中期、後期、晩期の全時期にわたって出土しているが、中でも早期（押型文）及び後期（三万田式）〜晩期（古閑式）の時期の土器が大半を占める為、本遺跡において縄文時代の生活の中心時期は早期、後〜晩期の2時期に求める事が出来る。縄文期の遺構として、Ⅱ次調査により2箇所の集石遺構が検出

されているが、遺物の出土がなく、今回出土した土器のすべては、古代から中世、近世の遺構覆土中または包含層中よりの出土である。第10図は、グリッド別に縄文土器の出土点数を示したものである。この図を見ると、全調査区の中でも調査Ⅱ区32－Ⅰ、33－Ⅰ区に遺物の集中する部分が認められ、集石、住居址等の遺構の存在が予想される。次年度も調査が継続される為、その成果が期待されるものである。



Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	全区
64	137	66	267
(24)	(51)	(25)	(100)%

第11図　縄文土器出土地点　　第5表　縄文土器出土数一覧

Ｊ－01　胴部が張り頸部で内側に屈曲し口縁部が外側にゆるく外反して立ち上がる深鉢片で、外面には山形文を縦走施文し、内面には同一原体による原体条痕及び山形文を横走施文している。また口唇部には原体を押圧した刻目を施している。胎土は0.5～1mm程の砂粒を多量に含み、焼成は良、色調は内面浅黄橙色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－02　口縁部がほぼ直口して立ち上がる深鉢片で、内外面に大きく雑な山形文を斜走施文している。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに黄橙色を呈している。

Ｊ－03　口縁部がやや外反ぎみに立ち上がる深鉢片で、内外面に山形文を横走施文し、内面の山形文上部には原体条痕を施す。胎土は１mm程の砂粒を少量含み、焼成は良、色調は内外面ともに褐灰色を呈している。

Ｊ－04　口縁部が外反して立ち上がる深鉢片で、外面には大きく雑な山形文を斜走施文し、内面には同一原体による山形文を横走施文している。胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面暗灰黄色、外面黄色を呈している。

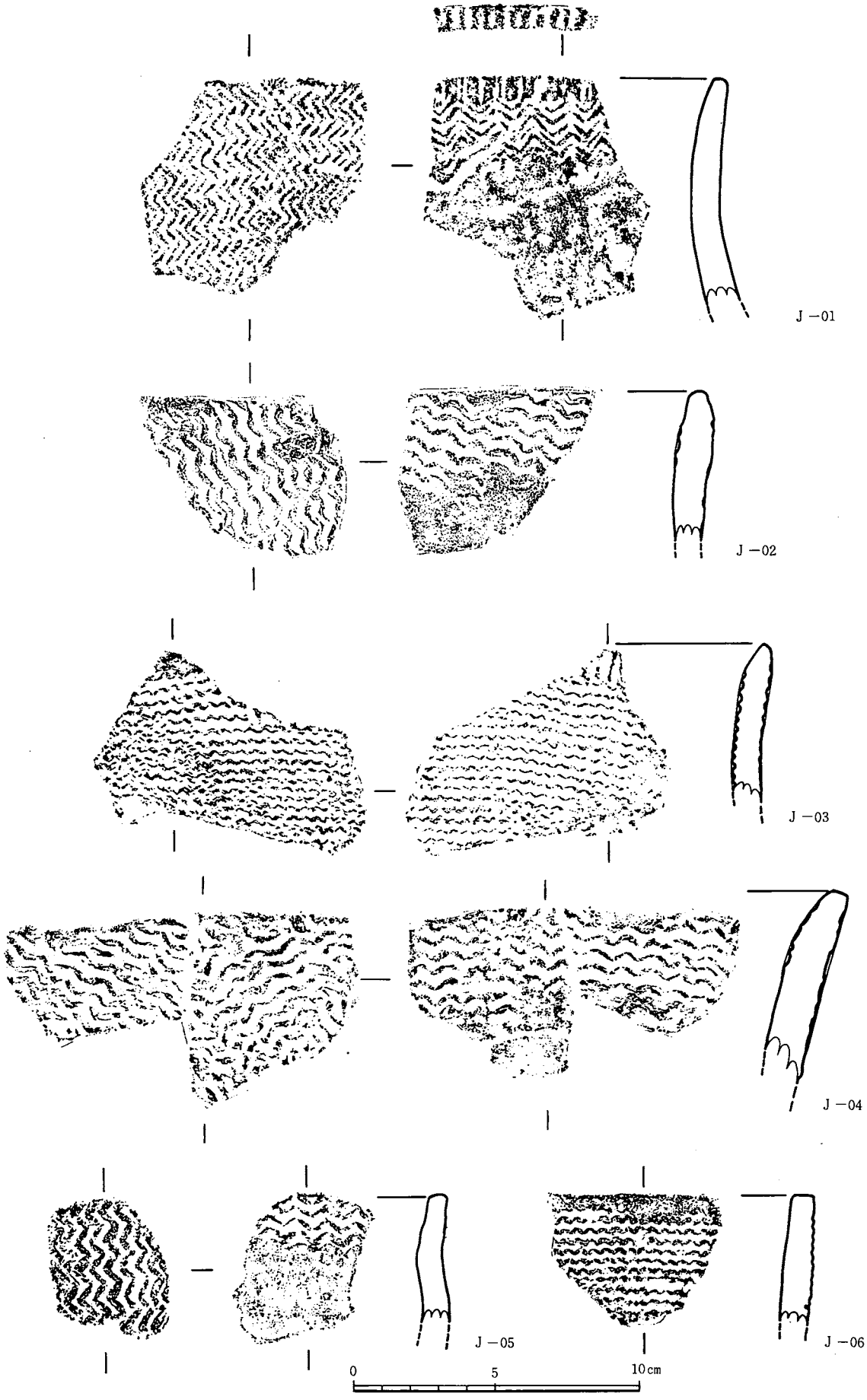
Ｊ－05　胴部から頸部にかけてゆるく内弯した後口縁が直口して立ち上がる深鉢片で、大きな山形文を外面斜走、内面横走施文している。胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに茶褐色を呈している。

Ｊ－06　口縁部が直口して立ち上がる深鉢片で、細かい山形文を外面に横走施文している。胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに明黄灰色を呈している。

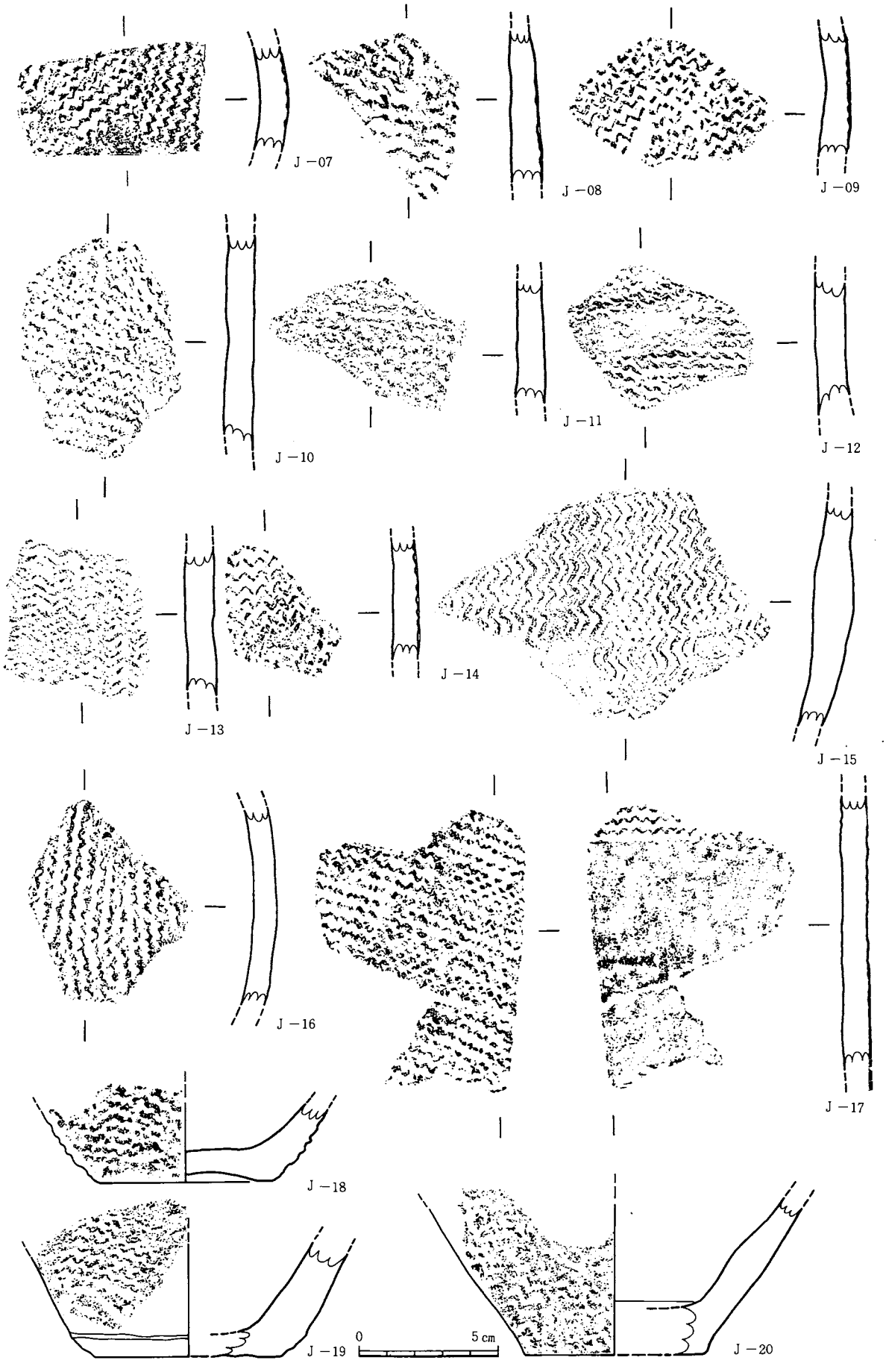
Ｊ－07　小さな山形文を斜走施文した深鉢胴部片で、胎土は0.5～１mm程の砂粒を多量に含み、焼成は良好、色調は内面鈍褐色、外面灰褐色を呈している。

Ｊ－08　大きく雑な山形文を斜走施文した深鉢胴部片で、胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。

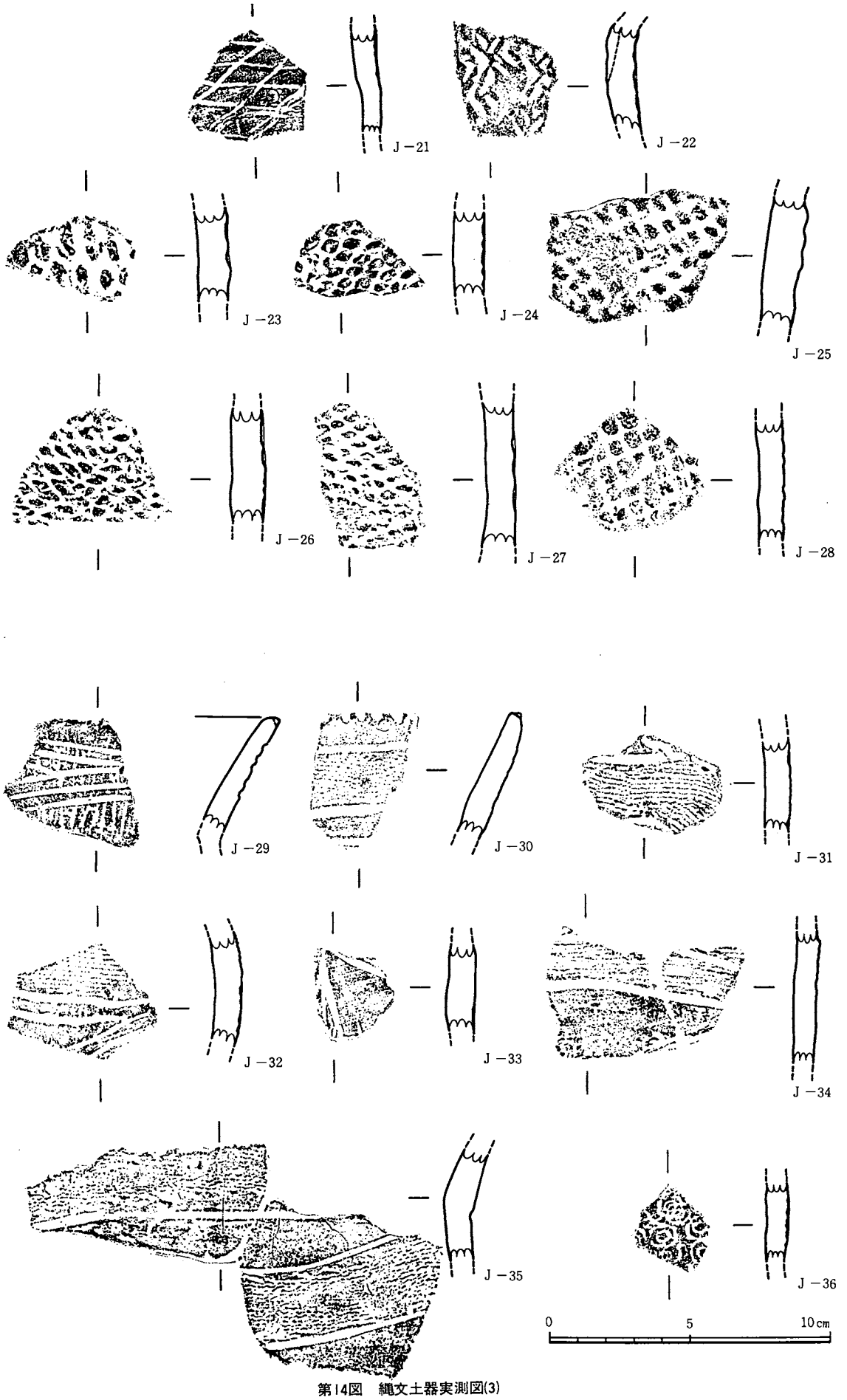
Ｊ－09　山形文を横走施文した深鉢胴部片で、胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良好で、色調は内外



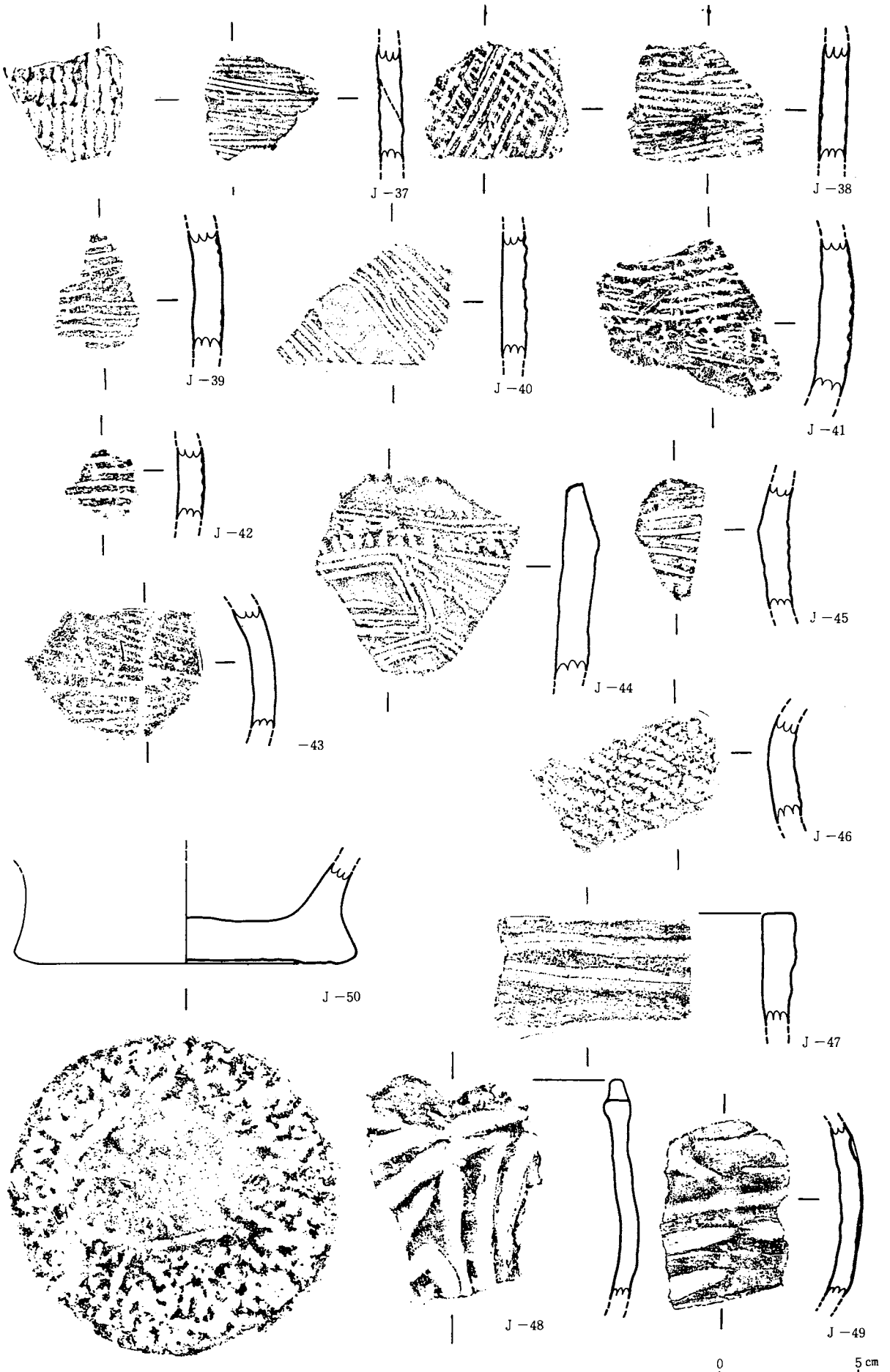
第12図　縄文土器実測図(1)



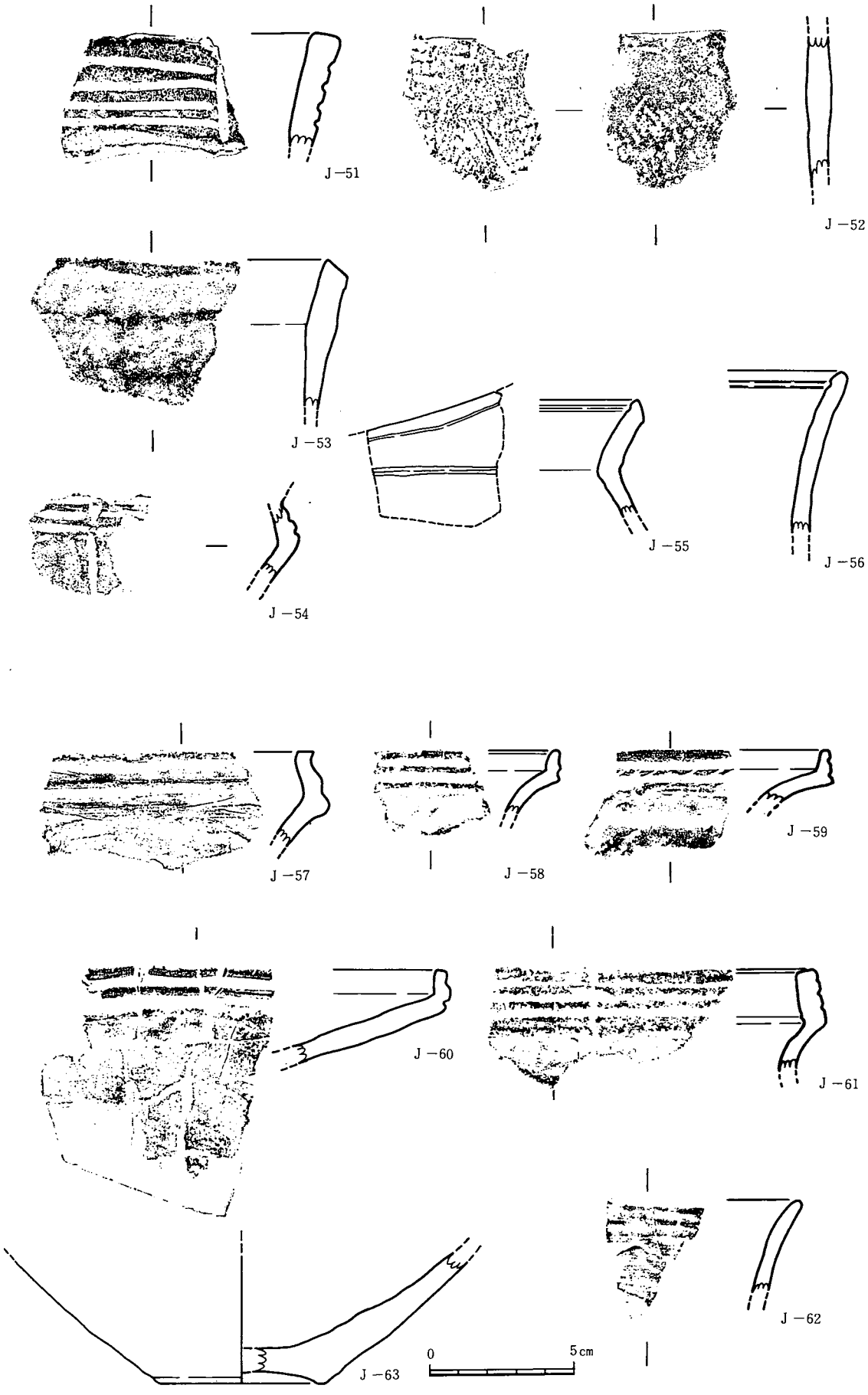
第13図　縄文土器実測図(2)



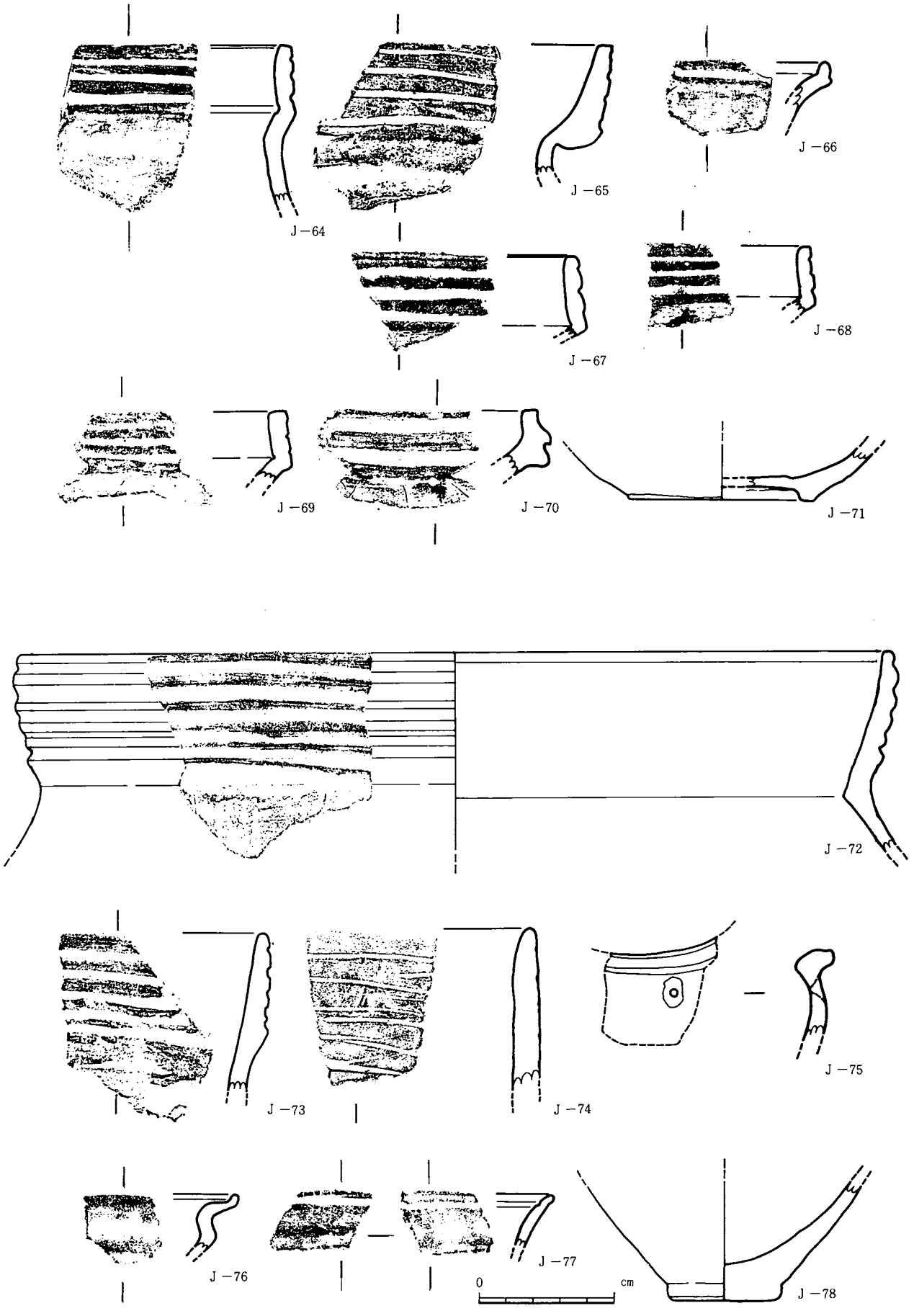
第14図　縄文土器実測図(3)



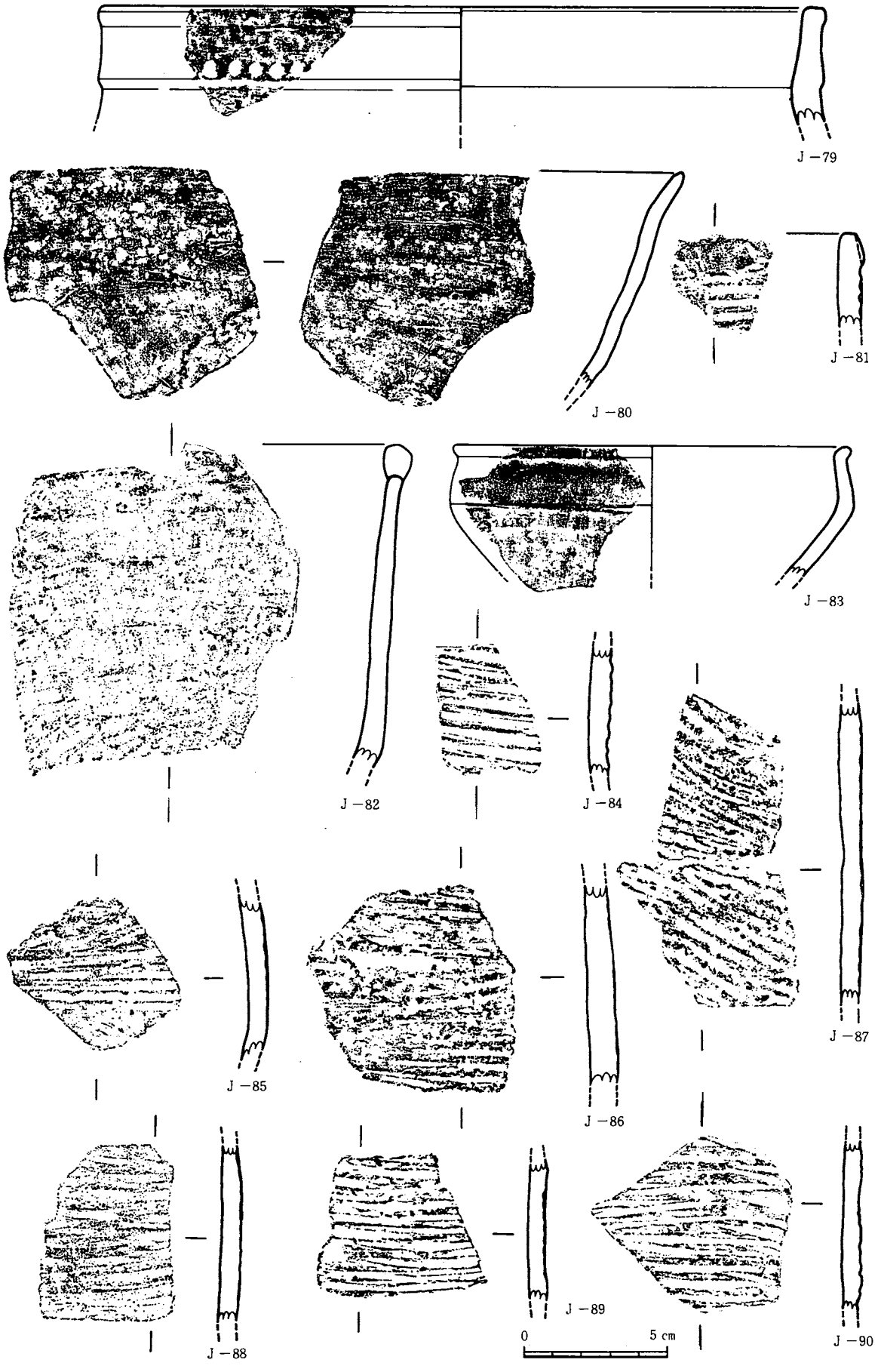
第15図　縄文土器実測図(4)



第16図　縄文土器実測図(5)



第17図　縄文土器実測図(6)



第18図　縄文土器実測図(7)

面ともに浅黄橙色を呈している。

Ｊ－10　小さくて幅が広く形の整った山形文を斜走施文した深鉢胴部片で、破片の傾きより底部に近い部位と考えられる。胎土は１～５mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面茶褐色を呈している。

Ｊ－11　10同様底部に近い部位と考えられる小さく幅の広い山形文を斜走施文した深鉢胴部片で、胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに茶黄褐色を呈している。

Ｊ－12　山形文を横走施文した深鉢胴部片で、胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに黄褐色を呈している。

Ｊ－13　細くてやや大型の山形文を横走施文した深鉢胴部片で、胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は茶黄褐色を呈している。

Ｊ－14　幅の広い山形文を横走施文した深鉢胴部片で、数箇所に文様の重複部が認められる。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。

Ｊ－15　細くやや大型の山形文を縦走施文した深鉢胴部片で、破片の傾きから底部に近い部位と考えられる。胎土は１～３mm程の砂粒を含み、焼成は良で、色調は内面黄褐色、外面黒褐色を呈している。

Ｊ－16　小さく幅の広い山形文を横走施文した深鉢胴部片で、胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面黒褐色、外面茶褐色を呈している。

Ｊ－17　口縁部は直口しやや外側にひらくと考えられる深鉢片で、小さく幅の広い山形文を外面に斜走、内面に横走施文している。胎土は２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面浅黄橙色、外面灰黄橙色を呈している。

Ｊ－18　平底でゆるい上げ底を呈する深鉢片で、小型の山形文を斜方施文している。底径6.2cm、残存高2.8cmを測り、胎土は１～７mm程の小石及び砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに鈍橙色を呈している。

Ｊ－19　丸底に近い平底を呈する深鉢片で、小さく幅の広い山形文を斜方施文している。底径５.５cm、残存高４.０cmを測り、胎土は１～３mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに茶褐色を呈している。

Ｊ－20　平底の深鉢片で、大型の山形文を斜走施文している。底径6.3cm、残存高5.4cmを測り、胎土は２～３mm程の石英粒等を多量に含み、色調は内外面ともに茶褐色を呈している。

Ｊ－21　撚糸を網状に施文した深鉢胴部片である。胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに茶色を呈している。

Ｊ－22　口縁部がくの字状に屈曲すると考えられる深鉢片で、原体に沈線を山形状に施し押圧している。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。

Ｊ－23　粗大化しつつある楕円文を縦走施文した深鉢胴部片で、胎土は１～３mm程の砂粒を多量に含み、焼成は良、色調は内外面ともに灰褐色を呈している。

Ｊ－24　楕円文を横走施文した深鉢胴部片で、胎土は２～３mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面灰黄橙色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－25　粗大化しつつある楕円文を横走施文した深鉢胴部片で、胎土は１～５mm程の砂粒を多量に含み、焼成は不良、色調は内面黄褐色、外面赤褐色を呈している。

Ｊ－26　楕円文を斜走施文した深鉢胴部片で、胎土は２～３mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面暗灰色、外面浅黄橙色を呈している。

Ｊ－27　楕円文を横走施文した深鉢胴部片で、胎土は２mm程の石英粒等を多量に含み、焼成は良、色調は内面明茶褐色、外面茶褐色を呈している。

Ｊ－28　粗大化した楕円文を縦走施文した深鉢胴部片で胎土は１mm程の石英粒等を含み、焼成は良、色調は内面黄褐色、外面茶褐色を呈している。

Ｊ－29　口唇部に刻目、口縁部には３本単位の沈線間に撚糸を施文し、口縁部がくの字状に屈曲した塞ノ神式土器の深鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面赤褐色を呈している。

Ｊ－30　口唇部に刻目、２本の沈線間に撚糸を施した塞ノ神式土器口縁部である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面灰黄褐色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－31　30と同様沈線間に撚糸を施した塞ノ神式土器胴部片である。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面明褐灰色、外面鈍橙色を呈している。

Ｊ－32　30と同様沈線間に撚糸を施した塞ノ神式土器胴部片である。胎土は１～３mm程の砂粒を多量に含み、焼成は良、色調は内面褐灰色、外面明褐灰色を呈している。

Ｊ－33　30と同様沈線間に撚糸を施した塞ノ神式土器胴部片である。胎土は２mm程の砂粒を多量に含み、焼成は良、色調は内面明褐灰色、外面黒色を呈している。

Ｊ－34　30と同様沈線間に撚糸を施した塞ノ神式土器胴部片である。胎土は２mm程の石英粒等を含み、焼成は良、色調は内面黄橙色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－35　30と同様沈線間に撚糸を施した塞ノ神式土器頸部片で、くの字状に外反している。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面鈍黄橙色、外面黒褐色を呈している。

Ｊ－36　竹管状施文具により同心円文を押圧施文した深鉢胴部片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。

Ｊ－37　縦方向に原体を回転させて造り出した隆帯文と内面に貝殻条痕を施した深鉢胴部片で、早期押型文平行期の土器と考えられる。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面明赤褐色、外面鈍赤褐色を呈している。

Ｊ－38　内外面貝殻条痕を施した深鉢胴部片で、轟Ａ式土器と考えられる。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面灰褐色、外面黒色を呈している。

Ｊ－39　横方向の貝殻施文具による細い沈線を施した深鉢胴部片である。胎土は１mm程の砂粒を多量に含み、焼成は良好、色調は内外面ともに鈍橙色を呈している。

Ｊ－40　細い沈線を施した深鉢胴部片である。胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに灰黄褐色を呈している。

Ｊ－41　外面貝殻条痕を施した深鉢胴部片である。胎土は３～５mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面黄橙色、外面明黄橙色を呈している。

Ｊ－42　外面に細い沈線を施した深鉢胴部片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面鈍黄橙色、外面褐灰色を呈している。

Ｊ－43　外面にヘラ状施文具で沈線を施した深鉢胴部片である。胎土は１～２mm程の石英粒等を含み、焼成は不良、色調は内面暗褐色、外面黒褐色を呈している。

Ｊ－44　３本沈線を基本に間に刻目、上部に刺突列点文、口唇部に刻目を施した深鉢口縁部片である。胎土は１～２mm程の砂粒を多量に含み、焼成は良好、色調は内外面ともに黄橙色を呈している。

Ｊ－45　横走する沈線を施した口縁部がくの字状に外反する深鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面褐灰色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－46　口縁部が屈曲する深鉢頸部片で、全体に斜縄文を施文している。早期の土器もしくは竹崎式土器と考えられる。胎土は３～５mm程の石英粒等を含み、焼成は良好、色調は内面褐灰色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－47　直口して立ち上がり、幅の広い凹線を３本横走施文した深鉢口縁部片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに黄橙色を呈している。

Ｊ－48　波状口縁で、指頭による幅の広い凹線を施した阿高式土器深鉢片で、口縁は直口して立ち上がり、胴部にかけて弱冠ふくらみをもつ。胎土は２～４mm程の滑石を多量に含み、焼成は良好、色調は内面黒褐色、外面赤褐色を呈している。

Ｊ－49　48と同じく凹線文を施した阿高式土器胴部片である。胎土は２～４mm程の滑石を含み、焼成良好、色調は内面灰褐色、外面赤褐色を呈している。

Ｊ－50　底面に土器製作時についたと考えられる鯨脊椎骨のスタンプが全面に残る、阿高式土器深鉢底部片である。底径11.2cm、残存高3.6cmを測る。胎土は0.5～１mm程の雲母粒等を含み、焼成は良、色調は内面鈍褐色、外面黄橙色を呈している。

Ｊ－51　ヘラ状用具による沈線を施し口縁部がくの字状に屈曲する出水式土器と考えられる深鉢片である。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面暗褐色、外面赤褐色を呈している。

Ｊ－52　竹崎式土器と考えられる内外面に斜縄文を施文した深鉢胴部片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに黄橙色を呈している。

Ｊ－53　口縁部がやや外反し、外面にヘラ削り調整を行なっている三万田式の深鉢片である。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに純橙色を呈している。

Ｊ－54　三万田式の浅鉢口縁部片で外面に沈線を施している。胎土は０.５～１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面灰褐色、外面褐色を呈している。

Ｊ－55　三万田式で山形口縁になると考えられる深鉢片で、内面にヘラ磨き調整を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面茶褐色、外面黒褐色を呈している。

Ｊ－56　内面口縁部に１条の沈線を施し、内外面ヘラ磨き調整を行なっている三万田式の深鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面茶褐色、外面茶黄褐色を呈している。

Ｊ－57　文様帯に２本の沈線を施し、頸部が外反し、口縁部は内傾する御領式の鉢片で、内外面にヘラ磨き調整を行なっている。胎土は２mm程の黒雲母等を含み、焼成は良、色調は内面鈍黄橙色、外面浅黄橙色を呈している。

Ｊ－58　57と同様文様帯に２本の沈線を施した御領式の浅鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面黄橙色を呈している。

Ｊ－59　57と同様御領式の浅鉢片で、内外面ともにヘラ磨き調整を行なっている。胎土は２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面浅黄橙色、外面褐灰色を呈している。

Ｊ－60　57と同様御領式の浅鉢片で、内外面にヘラ削り調整を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面黄灰色、外面純黄色を呈している。

Ｊ－61　文様帯に３本の細い沈線を施した天城式と考えられる鉢片で、ヘラによる粗い磨き調整を行なっている。胎土は０.５～１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに黄橙色を呈している。

Ｊ－62　２本の沈線を施した口縁部がやや外反ぎみに直口する御領式の深鉢片である。胎土は０.５mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面淡赤橙色、外面橙色を呈している。

Ｊ－63　上げ底で、ヘラ磨き調整を行なった御領式の深鉢片で、底径5.8cm、残存高4.4cmを測る。胎土は、０.５～１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面黄灰色、外面赤黄褐色を呈している。

Ｊ－64　文様帯に３本の沈線を施し、頸部がゆるく外反し、口縁部がやや内傾した天城式の鉢片で、外面ナデ、内面ヘラ削り調整を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－65　文様帯に４本の細い沈線を施し、頸部が外反、口縁部がやや外傾した古閑式の深鉢片である。胎土は０.５mm程の黒雲母片等を含み、焼成は良、色調は内面明褐色、外面赤褐色を呈している。

Ｊ－66　１条の沈線を施した御領式の浅鉢片で、外面にナデ調整を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－67　文様帯に３本の沈線を施し、頸部外反、口縁部がやや内傾する天城式の鉢片で、内面ナデ調整を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面橙色、外面明褐色を呈している。

Ｊ－68　67と同様天城式の鉢片で、内面ナデ調整を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに橙色を呈している。

Ｊ－69　67と同様天城式の鉢片で、内外面ナデ調整を行なっている。胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに橙色を呈している。

Ｊ－70　文様帯に幅の広い２本の凹線を施し、口縁がやや内傾する御領式の浅鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面灰黄褐色、外面黒褐色を呈している。

Ｊ－71　上げ底を呈した、内面不定方向の削り、外面ヘラ磨き調整を行なった天城式の深鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を多量に含み、焼成は良、色調は内外面ともに鈍橙色を呈している。

Ｊ－72　口縁部に５本の凹線を施し、頸部がくの字状に屈曲し口縁部が内湾気味に開いて立ち上がる古閑式の深鉢片である。内外面にはヘラ磨き調整が行なわれていて、底径31.8cm、残存高7.2cmを測る。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面鈍黄橙色、外面浅黄橙色を呈している。

Ｊ－73　口縁部に５本の沈線を施し、ほぼ直口して立ち上がる古閑式の深鉢片である。内外面にはヘラ磨き調整を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面浅黄橙色、外面橙色を呈している。

Ｊ－74　細い沈線を施し、口縁部が直口する古閑式深鉢片で、内面にナデ調整を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。

Ｊ－75　口縁部が山形になる古閑式の浅鉢片で、内面にヘラ磨き調整を行ない、焼成後に外面より穿孔を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面茶褐色、外面黒褐色を呈している。

Ｊ－76　外面にヘラ磨き調整を行なった古閑式の浅鉢片である。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに黄橙色を呈している。

Ｊ－77　内外面口唇部下に１条の沈線を施し、口縁部がやや外反ぎみに立ち上がる古閑式の浅鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに黄橙色を呈している。

Ｊ－78　平底で高台状を呈している鉢片で、底径3.7cm、残存高4.4cmを測る。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面浅黄橙色、外面黒色を呈している。

Ｊ－79　口縁部が直口して立ち上がり、口唇下に１条の刻目突帯を施す黒川式と考えられる深鉢片で、口径25.4cmを測る。内外面にはヘラ削り調整を行ない、胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに鈍褐色を呈している。

Ｊ－80　頸部で弱冠屈曲し外反する浅鉢片で、内外面にはヘラ削り調整を行なっている。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに赤褐色を呈している。

Ｊ－81　口縁部が直口し、外面に貝殻条痕を施した古閑式の粗製深鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内外面ともに鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－82　口縁部が直口して立ち上がり、口唇部に小さな突起を張り付けた晩期の粗成深鉢片で、内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り調整を行なっている。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面黒色、外面暗褐灰色を呈している。

Ｊ－83　胴部中位付近で内側にゆるく屈曲し、口縁部が短く外反する黒川式と考えられる精製浅鉢片で、外面を研磨している。口径13.8cm、残存高4.4cmを測る。胎土は0.5mm程の砂粒を少量含み、焼成は良、色調は内面橙色、外面浅黄橙色を呈している。

Ｊ－84　外面に貝殻条痕を施し、内面にヘラ削り調整を行なった古閑式の粗製深鉢片である。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面浅黄橙色、外面褐灰色を呈している。

Ｊ－85　84と同様古閑式の粗製深鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面灰褐色、外面褐灰色を呈している。

Ｊ－86　84と同様古閑式の粗製深鉢片である。胎土は１～２mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面灰白色、外面黄橙色を呈している。

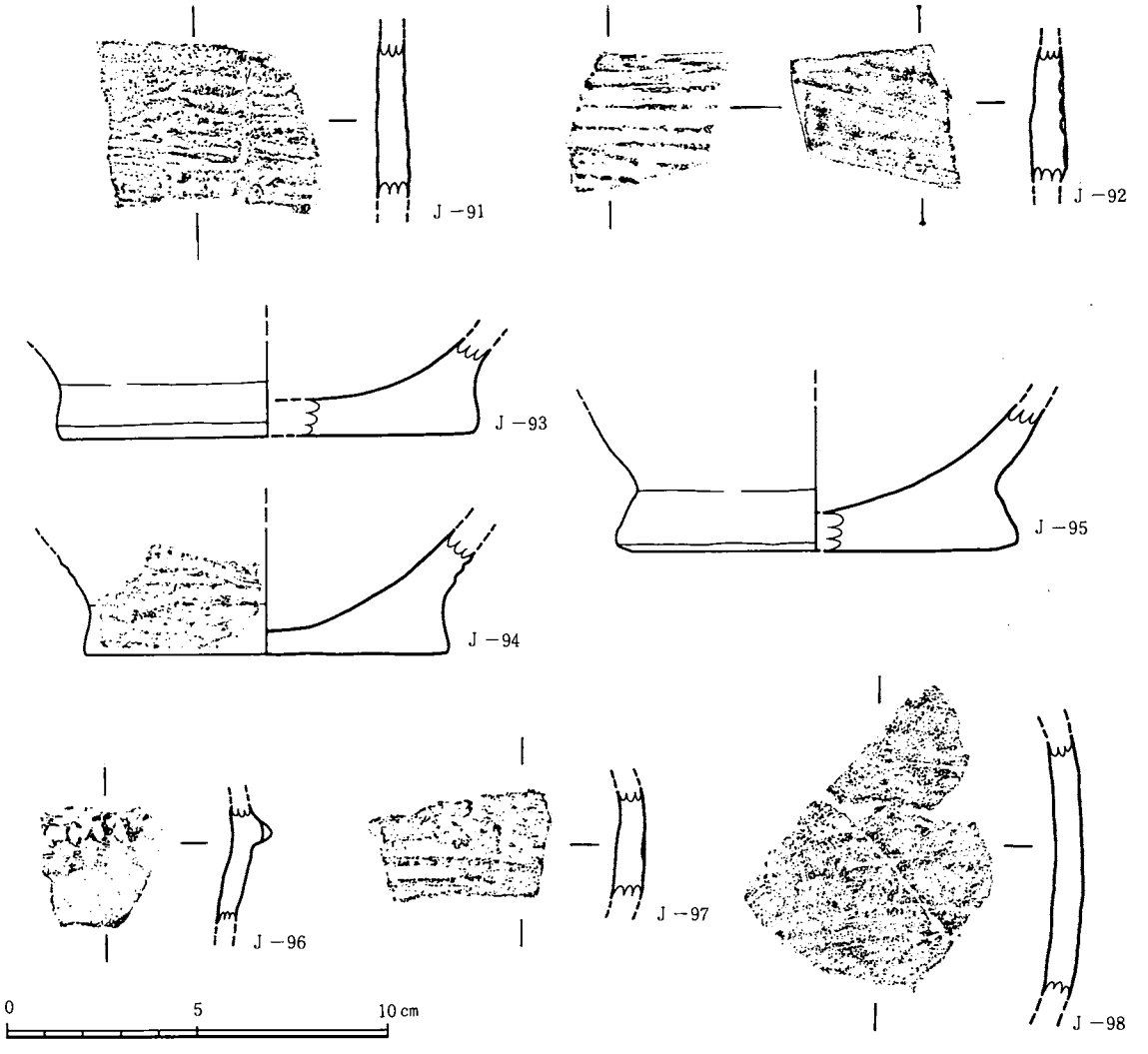
Ｊ－87　84と同様古閑式の粗製深鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面鈍橙色、外面灰白色を呈している。

Ｊ－88　84と同様古閑式の粗製深鉢片である。胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面灰白色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－89　84と同様古閑式の粗製深鉢片である。胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。

Ｊ－90　84と同様古閑式の粗製深鉢片である。胎土は１mm程の砂粒を含み、焼成は良である。色調は内外面ともに浅黄褐色を呈している。

Ｊ－91　84と同様古閑式の粗製深鉢片である。胎土は0.5～１mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに鈍黄橙色を呈している。



第19図　縄文土器実測図(8)

Ｊ－92　84と同様古閑式の粗製深鉢片である。胎土は0.5～1㎜程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内面橙色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－93　平底をなす円盤張り付けの底部で、底部端は外側に弱冠張り出す。古閑式あるいは黒川式の粗製深鉢片と考えられる。外面にナデ調整が行なわれ、底径11㎝、残存高2.5㎝を測る。胎土は1～2㎜程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面明褐灰色、外面鈍橙色を呈している。

Ｊ－94　底部端が外側に張り出した、平底の粗製深鉢片で、外面に貝殻条痕が施されている。93と同時期ぐらいと考えられる。底径9.6㎝、残存高3.2㎝を測り、胎土は1～2㎜程の砂粒を多量に含み、焼成は良、色調は内面浅黄橙色、外面橙色を呈している。

Ｊ－95　底部端が外側に張り出した、平底の粗製深鉢片で、外面にナデ調整が行なわれている。底径10.6㎝、残存高3.7㎝を測る。93・94と同時期ぐらいと考えられる。胎土は1～2㎜程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面黄橙色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－96　外面に1条の貼り付け突帯に刻目を施した山ノ寺式と考えられる鉢片である。胎土は1～2㎜程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面黄橙色、外面鈍黄橙色を呈している。

Ｊ－97　外面に貝殻条痕を施した古閑式の粗製深鉢片である。胎土は1㎜程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。

Ｊ－98　97と同様古閑式の粗製深鉢片である。胎土は2～3㎜程の砂粒を含み、焼成は良、色調は内面明黄褐色、外面茶褐色を呈している。　（浦田）

第Ⅲ章　弥生・古墳時代

1．遺　　構

土　壙

弥生時代に属する遺構は全く検出されていない。しかしながら，弥生土器３点の出土地点が23～25－Ｄ～Ｆ区に限定されていることから、この地区において遺構の存在した可能性は高いと思われる。

一方古墳時代の土師器の出土する遺構は次の２箇所である。

SK-205（第20図）

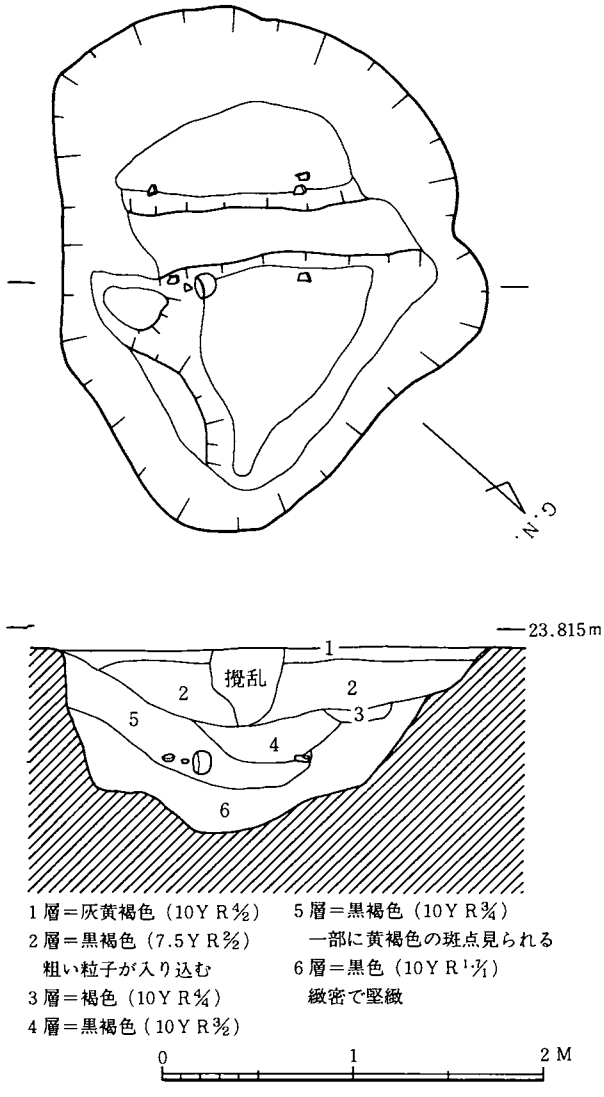
21・22－Ｅ・Ｆ区に位置する。長軸幅2.7ｍ、短軸幅2.2ｍ、深さ0.9ｍを測る。形状はほぼ楕円形を呈しており、中央部がやや隆起し長軸両端側に落ち込んでいる。出土遺物の土師器及び鉢（Ｈ-067）は第５層からのものであるが、第５層と第６層の土色には殆んど差は認められず、また埋土の状況等からも古墳時代に属する土壙であると考えられる。

SK-228（第21図）

29－Ｄ区に位置する。平面形はほぼ正方形を呈し，長軸幅1.62ｍ、短軸幅1.49ｍ、深さ0.3ｍを測る。土師器の出土した落ち込みはこの正方形の北端部に位置しており、同埋土中には若干の焼土、カーボンを包含していた。出土遺物は甕の胴部片と思われるが，口縁部が欠損している為器形は明瞭ではない。手法の特徴とて調整は、内面にヘラケズリ、外面にヨコナデを施しており古式土師器の特徴を備えている。

その他に，遺構は未確認であるがＳＤ-216内に複合口縁壺と推定される破片が一個分一括で採集されている。

以上の様に調査区内では，弥生時代、古墳時代ともに遺構は非常にまばらである。しかし古墳時代の遺構は希少ながらも、周辺古墳群との関係は無視できない面が残されていよう。



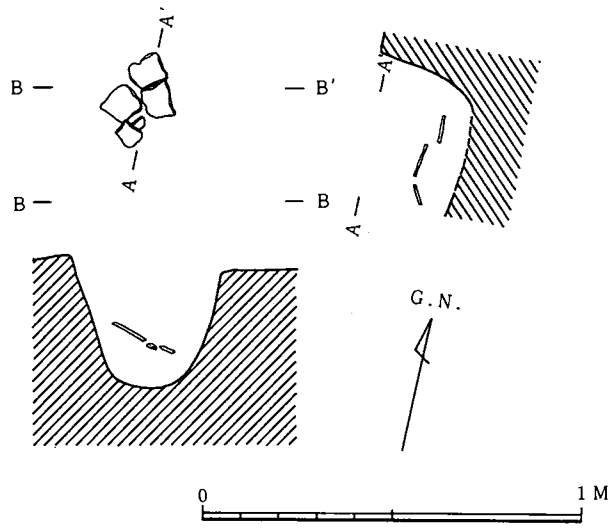
第20図　ＳＫ－205実測図

2．遺　　物

弥生土器（第22図）

弥生土器は近接した地点から３点出土しており、いずれも前期に属するものである。[註(1)]

Y−01　残存高4.8cmを測る。外面は突帯を有し、刻み目を付す。横方向を基調としたナデ調整をまんべんなく施し、内面にはヨコナデ調整を行う。色調は外面褐灰色，内面灰白色を呈する。23−Ｅ区試掘トレンチよりの出土。弥生前期の前葉時期と考えられる。



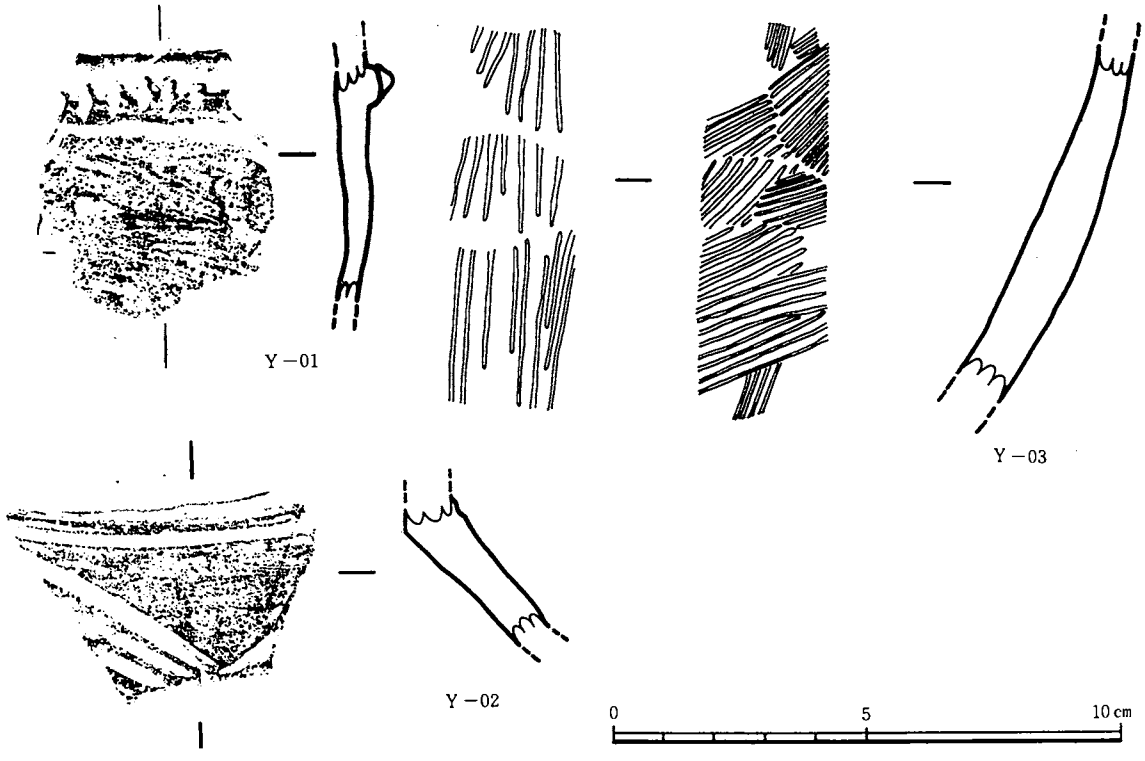
第21図　ＳＫ−228遺物出土状態

Y−02　残存高2.3cmを測る。壺の頸部の破片であり、外面には明瞭な沈線を横位に２条、斜方向に４条確認できる。黄橙色の色調を呈している。24−Ｄ区からの一括採集である。時期は前期であり、板付Ⅱ式土器に類例を見ることができる。

Y−03　残存高6.6cmを測る。甕の胴部の破片であり、外面の調整は板状工具によるハケ目調整（単位は７本で、長さ約1.3mm）、内面は暗紋を施す。鈍い橙色を呈し、ＬＳＤ−01内からの一括資料である。弥生前期と思われる。

註

(1)　弥生前期の遺跡の分布については，次の報告に詳しい。安達武敏、河北毅他『宇土城三ノ丸跡』宇土城三ノ丸跡発掘調査団　1982



第22図　弥生土器実測図

土師器（第29図H－067、第30図H－070）

古墳時代に属する土師器は次の２点である。

H-067　口径12.8cm、器高9.5cmを測る。鉢の形状をなし内外面ともにヘラによる研磨を施している。一部内面にはヘラ痕跡が見られる。色調は黄褐色を呈し、胎土密で焼成も良である。底部にススの付着が見られる。ＳＫ-205内第４層からの出土である。古式土師器に属するものではなかろうか。

H-070　残存高5.3cmを測る。複合口縁壺の口縁部付近が屈曲点付近より外れた跡が見受けられる。内面はヘラケズリ調整、外面にはヨコナデ後暗紋が見られる。色調は灰黄白色を呈し、胎土密で焼成は良好である。ＳＤ-216内の一括資料である。

第Ⅳ章　奈良・平安時代

1．遺　　構

溝遺構

ＲＳＤ－01

調査区の全域を覆う巨大な溝遺構である。

溝の流向及び規模

南北辺　Ⓐ中心長（真心から想定心までの長さ）

110.88ｍ（＝115.08ｍ）流向Ｇ．Ｎ．-29°15′-Ｗ

Ⓐ溝内側（溝の内側の上場間の長さ）

111.36ｍ（＝113.01ｍ）流向Ｇ．Ｎ．-29°15′-Ｗ

東西辺　中心長（真心から残存部までの長さ）

Ⓑ61.14ｍ　流向Ｇ．Ｎ．-63°00′-Ｅ

Ⓒ13.89ｍ　流向Ｇ．Ｎ．-68°00′-Ｅ

北側コーナー部は上部を削平され、13世紀後半時期に道路状遺構がこの地域を通り、しかもその中心は調査区外に出るためその正確な数値は１/180の図面上からの復原となる。なお一尺は30cmとして計算する。真心から想定心までの中心長は383尺、溝の内側上場間の距離は377尺となる。また南側にもＳＡの立板塀が存在していたと仮定し、ＲＳＤ－01とＳＡとの距離を最大７尺とすれば、その長さは363尺とたり１町(360尺)に近似する。また東西辺のⒷ辺は61.14ｍとなるが、最長102ｍの地点までは確認されており、まだのびるものと考えられる。さらに地形上からは最大135ｍ程度まではのばせるかもしれない。

コーナー部

南北コーナーが２箇所検出されているが、南側コーナー部（溝Ⓐと溝Ⓒとの交点）の内角は88°となり、また想定上では北側コーナー部（溝Ⓐと溝Ⓑとの交点）の内角は97°となる。溝は西側に向って5°の拡がりが見られる。

溝の断面

調査区全域のＲＳＤ－01で計15本の土層断面を観察したが、ほぼ同じ埋没のしかたをするようである。最上層にはⒶ埋土の黒色土が見られる。遺跡Ⅲ層の茶褐色土中に明瞭な黒色土が溝状をなして走るため、遺構の検出は容易であった。またこの埋土中にはいわゆる中世時期の遺物が含まれており、一部ＳＤ-202内の下層埋土に類似するものが見られる。中層にはⒷ埋土の黒褐色土が見られる。粘性が強くしまりに欠ける状況である。伴出遺物は奈良時代後半時期から平安時代前期までのもので、この層までの埋没時期が想定できよう。また溝の形状によっては肩部から流れ込む形での埋土もあり、これはⒷ埋土より古い時期と考えられる。最下層 にはⒸ埋土の暗褐色土が見られる。一部ロームの混入が見られるが、この層が溝の時期を決定するものであ ろう。この層からは地点を違えて３箇所から高台形に特徴のある高台付坏が出土しており、この遺物の時期 により、この溝の時期は奈良時代の後半～終末時期であることが想定される。

溝の掘り方

一辺115ｍにも及ぶ長大な溝に規格性を持たせ、溝の設計がなされているが、実際の掘り方は非常に粗い面

が残る。例えばⒶ辺とⒸ辺との交差部においては双方から掘り進めたと考えられ、接合部においては約5㎝程度の段差が残り、その部分の整形はなされていない。同様の現象は他の地区においても見られる。全Ⅲ区の中央部付近では、溝内への掘り込みが深すぎ、長軸長15.7mを測る土壙状の掘り込みが残存する。これ等は溝を作る際の1つの作業単位として捉えることができるものではなかろうか。また溝の壁面にも作業単位の痕跡が見られ、この溝の作業課程が想定される。

陸橋部

全Ⅰ区の南端部22—F区に一箇所確認された。溝の長辺の中央部に取り付けるのではなく、南端コーナー部から約8.1m離れた地点に陸橋が取り付けられている。陸橋幅は中心部で約2.1m（7尺）を測る。しかしこの陸橋部は溝の掘削に際し当初から作られていたものではなく、当初はこの部分も溝として掘られており、それ以降に土盛りを行い構築したことが覗える。この土盛りは溝の完成後直ちに行われたもので、それはⒶ埋土が陸橋部半載断面内（付図第　図）に含まれないことからも考えられる。また断面の最上部に1本の、さらに接して2～3本の硬化面が確認され、人の往来により土盛り部がかなり沈降した事が推定される。なお断面各層は種々の土をブロック状に含み、それを間層を含めて版築状につき固めて強化した事実が見られる。

溝内のピット

溝の全域にわたってピットが多数検出された。一部は溝の肩部にかかるもので、遺跡Ⅲ層上面の掘立柱建物遺構に伴うものであろう。しかし溝底部にも多数のピットが不規則に存在し、最大のものでは溝底部での径が80㎝、深さが97㎝を測るものもある。ピットの掘り込み面は明瞭ではなく一定してはいないが、その多くは溝埋土の中位からである。(付図第5図土層断面図C－C′では第15層の上面もしくは第6層の下面からである。) これらは、溝が部分的に埋没しかけたとき更に溝を清掃し、元況に戻すことなく溝内にピットを掘り込み、それによって溝の性格を代用させようとした痕跡ではなかろうか。ピット間隔が不規則であるのは、その時期が多時期に及んでいたものとも想定できる。なお溝底面のピット内からの遺物の出土は少なく、僅かに須恵器の甕の胴部片のみであり、遺物による時期決定は困難である。

ＳＡ－201、202（付図第5図）

SA－201はRSD—01の内側部分に周回状に廻り各地区で異なった状況を示している。北側の部分では全地区に間断なくのびる。ＲＳＤ—01との距離は一定しており、1.8～2.1mを測る。Ⅲ区の東側部分ではコーナー部付近からＳＡ—02の交差地点までは一応継続的に溝が続く。しかし明らかに溝が断絶する箇所が数箇所検出される。その間隔は北側から次のようになる。1.85m（6尺)、0.9m（3尺)、8.9m（30尺）を測る。前二者は幅長から通用口状のものを想定できようが、後者については幅長も長く、溝端部にピット等をもたないことから性格は不明である。SA－201、202はほぼ90°で直交しているが、接続はなされていない。両ＳＡの溝の端部にはピットを持ち、約25㎝の距離を保つ。ＳＡ－201は交差部以降、南側に向って断続的に走る。全Ⅰ区においては調査区の上面が約30㎝程削られた痕跡が考えられるため、コーナー部まで全周に廻っていたものかどうか不明である。なおSA－201の断面は「V字形」を呈しており、上場幅30㎝、深さ25㎝を測る。埋土の土色はほぼ単一で、遺構のⅢ層に近い明褐色土を呈し、建物ピット埋土ではＥ埋土の土色に酷似する。なお溝内には不規則にピットが存在する。その間隔は1.6m、2.6m、5.1mと不揃いであるが、各ピットは溝の変換点付近に多くは位置している。なおコーナー部は削平を受けているため状況は不明である。

この溝は直接ＲＳＤ—01に伴うものであると考えられ、溝とは6～7尺の間隔を保って周回状に廻っている。この遺構からは「たて板状の塀」が想定され、不規則に柱が配列されていたものと思われる。なお時代小区分はⅠ期～Ⅱ—1期に属すると考えられる。

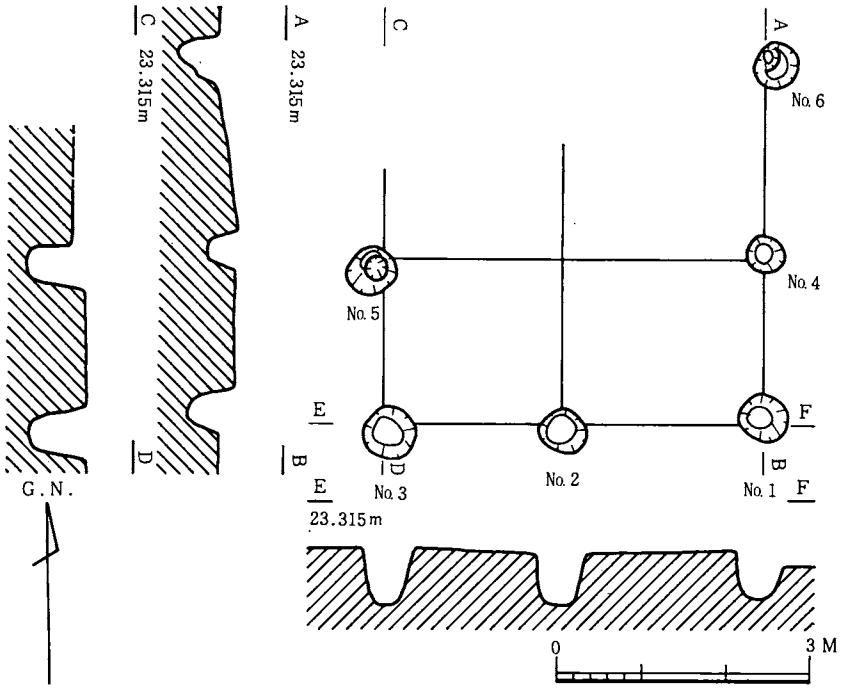
ＳＤ－209（折込第53図）

この溝遺構は全Ⅱ区の35－Ｈ～Ｋ区に位置している。溝の流向はＧＮ－70°35′－Ｎを保つ。ＳＤ－202、203と流向ではＡ群をなしている。溝の上部はＳＤ－202に削りとられ、底部のみ残存し、深さは50cmである。残存長は32.43ｍ、残存幅1.08ｍを測る。出土遺物は、Ｓ－016（高台付坏）であり、高台形のみでは隣接するＲＳＤ－01とほぼ同時期と考えられる。ＲＳＤ－01との距離は約3.0～3.3ｍで、殆んど全区間でこの距離は保たれている。この溝はＲＳＤ－01と同時期もしくは一形式程度の差であると考えられるが、その溝の形状及び規模、又10尺程外側に掘られている点等から、ＲＳＤ－01がⅡ－１期に再度修復を行なう際、掘り込まれたものではないかと想像される。

掘立柱建物跡

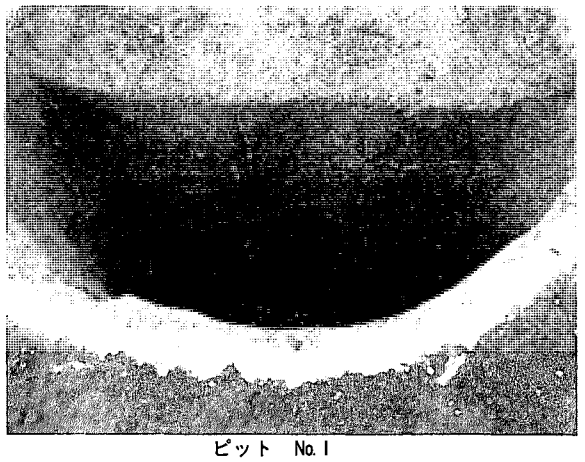
ＳＢ－203（第23図）

この建物は、ＲＳＤ－01の北側に位置している。棟方向はＧ.Ｎ.－１°10′－Ｗの方向を持ち、建物の半分はＳＤ－202に切られている。平面規模のうち桁側は完結してはいないが２間の14尺（4.1ｍ）であり、一方梁側は完結し２間で15尺（4.5ｍ）を測る。棟中央部には柱列は現在の所存在しない。構成柱穴は現存で６個であり、柱穴の土層断面は第22図のとおりである。柱穴はいずれも平面形は円形であり、最大のもので径60cmを、深さは80cmを測る。これらの柱穴はこの遺跡のピット群の中では大型に属している。半載を行い断面形を観察してみると、中央部もしくは一方の壁側に寄せて柱根痕が見られ一部ピットNo.5のごとく柱根の残存するものもある。柱根の周囲は、互層で土をつき固めたあとが見られ、いわゆる版築状をなしている。またピットNo.6はいわゆる地山にまで柱根が掘り下げられており、他のピットとは異なる。

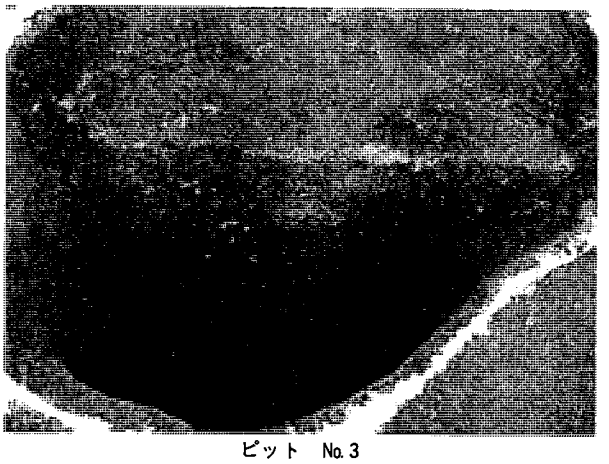


第23図　ＳＢ－203実測図

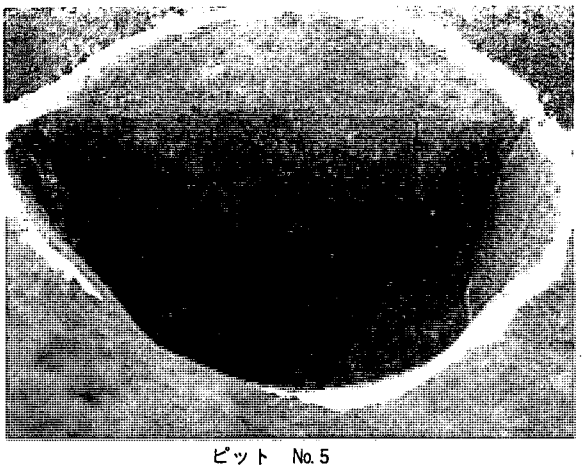
この建物の時期は、一つはＲＳＤ－01の溝方向と全く別方向を棟方向が向いていること、もう一つは北側半分がＳＤ－202に切られていることからみて両遺構の間の時期と考えられる。なお、ピットNo.5より土師片が２点出土しているが時期判定は困難である。なお時代小区分はⅡ－２期である。



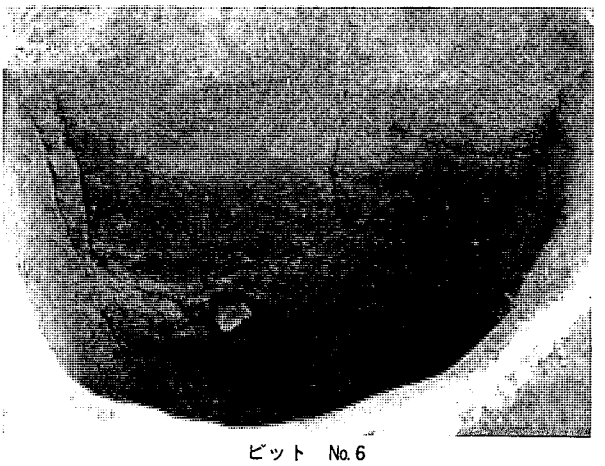
ピット　No. 1



ピット　No. 3



ピット　No. 5

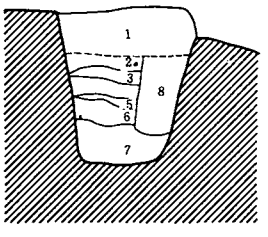


ピット　No. 6

1層＝不明
2層＝暗褐色土
　遺跡3層をブロック状に含む
3層＝2層と同色
　固くつきかためている
4層＝暗褐色土
　黒褐色土を混じえる、3層よりもやわらかいが、つきかためている
5層＝暗褐色土（やや明るい）
　3．4層よりやわらかい
6層＝3層と同色
　3層より固い
7層＝遺跡3層と4層の混じったもの
　固くつきかためている
8層＝暗褐色土
　明確にやわらかい

23.00 m

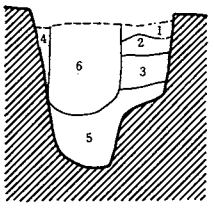
ピットNo. 1



1層＝暗褐色土
　やわらかい
2層＝1層より明るく、しまっている
3層＝黒褐色土
　固くかためている
4層＝遺跡3層のよごれたもの
5層＝遺跡3層と4層の混じったもの
　固くつきかためている
6層＝黒褐色土
　それほどやわらかくない

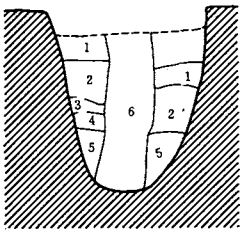
23.00 m

ピットNo. 5



23.00 m

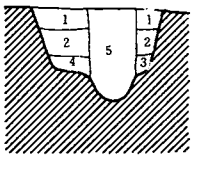
ピットNo. 3



1層＝暗褐色土
　遺跡3層をブロック状に含む
　固くつきかためている
1'層＝1層と同色
　ブロック状にやわらかい土がはいる
2層＝暗褐色土
　黒褐色土を混じえる、かたくしまる
2'層＝2層と同色
　2層ほど固くしまらない
3層＝黒褐色土
　固くつきかためている
4層＝遺跡3層のややよごれた色
　固くかためている
5層＝遺跡3層と4層の混じったもの
　固くつきかためている
6層＝暗褐色土
　明確にやわらかい

23.00 m

ピットNo. 6



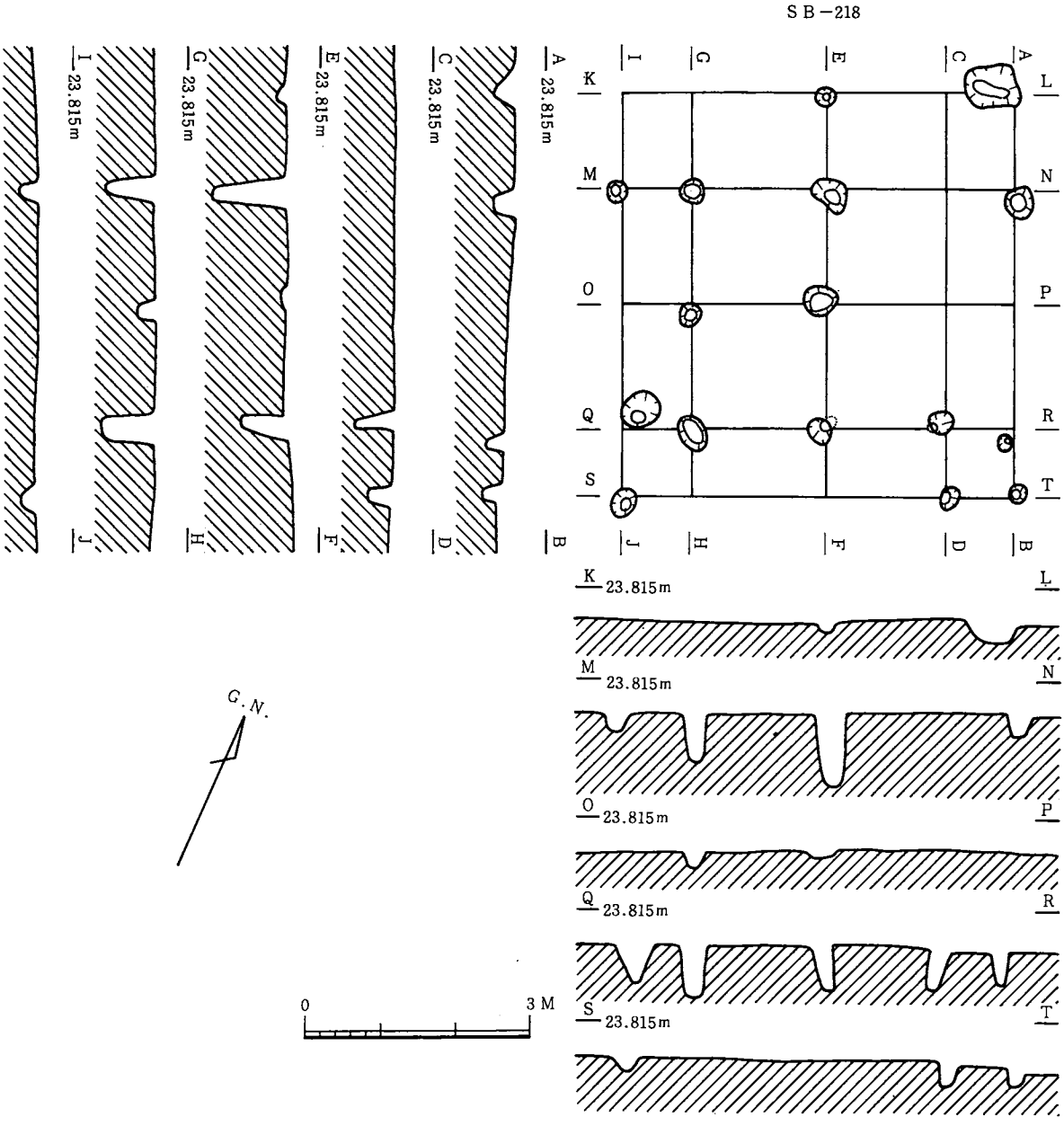
1層＝明暗褐色土
2層＝1層と同色
　固くかためている
3層＝暗褐色土
　固くかためている
5層＝暗褐色土
　明確にやわらかい

0　1　2 M

第24図　ＳＢ－203柱穴土層断面図

ＳＢ－218（第25図）

この建物は全Ⅰ区の21･22－Ｆ･Ｇ区に位置している。棟方向はＧ.Ｎ.－24°00′－Ｗの方向を持っているが、90°ふれる可能性もある。平面規模は桁側が18尺（5.25ｍ）梁側が17尺（5.1ｍ）を測り、ほぼ正方形を呈する。当該地区は特に攪乱がひどく、黒のドットは確認できるもの、日ぬきのドットは攪乱の為飛ばされ存



第25図　ＳＢ－218実測図

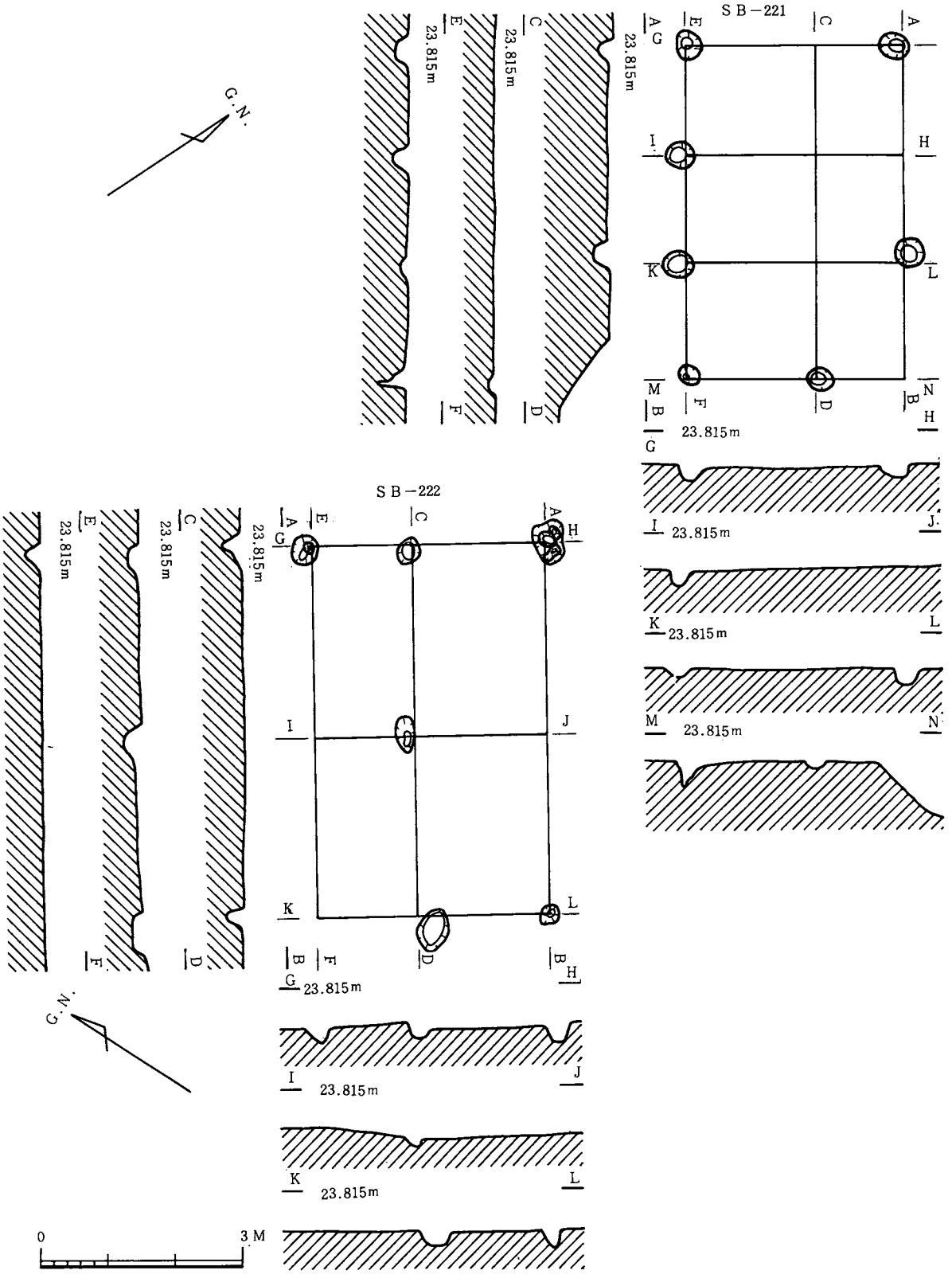
在が予測されるものである。それによると身舎部分は総柱をなし、特にその四個の隅柱が大型で面積は３坪（10.07㎡）であり、庇部分は四面のもので各コーナー部に隅柱をもつ形態である。柱穴は最大平面規模で50㎝を測るが、前述の如くこの地区は削平を受けており、実際はかなり大型になるものと思われる。

この建物はＲＳＤ－01の南側コーナー部に位置し、陸橋部に隣接した状況で検出された。一町方形溝遺構にとっては重要な地点であり、特殊な形状の建物と考えられ、所謂望楼状の建築物を想定したい。

この建物の時期は、ＲＳＤ－01のコーナー部に選地していることから、RSD－01やSA-201・202が使用されている期間内で陸橋部に対し、何らかの影響が示される時期であることが想像される。時代小区分はⅡ－１期である。

ＳＢ－221（第26図）

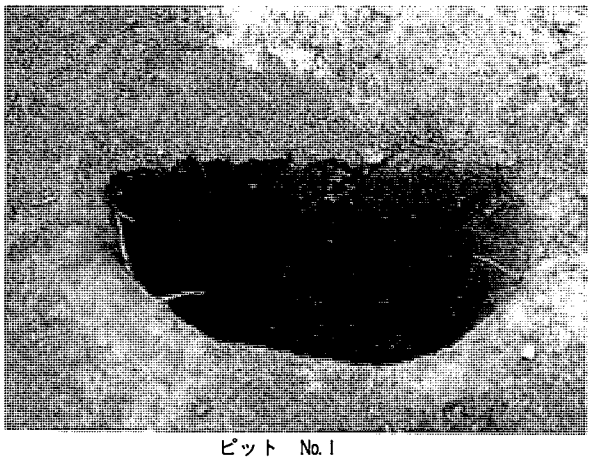
この建物は全Ｉ区の22･23―Ｆ･Ｇ区に位置している。棟方向はＧ．Ｎ－56°30′－Ｗの方向を持ち、隅柱の内１つはＲＳＤ－01に落ち込む。平面規模で桁側は16尺（4.8m）を、梁側は11尺（3.23m）を測る。棟中央部



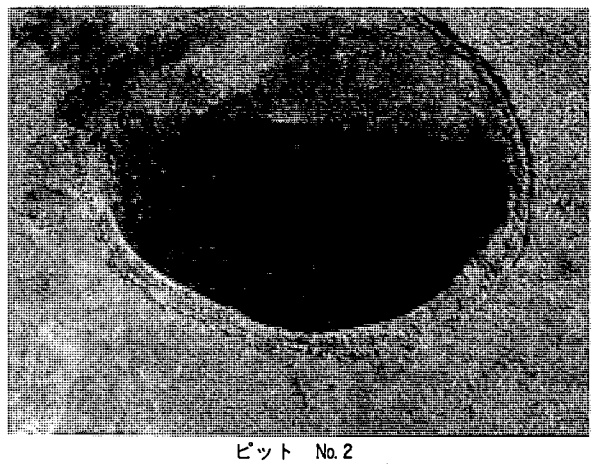
第26図　ＳＢ－221、ＳＢ－222実測図

には柱列は存在しない。構成柱穴は全部で７個であり、その最大平面規模は45cmを測る。しかしながら、そのピットを半載し、断面形の観察を行なったところ、ピット上面がかなり削平を受けたと思われた。それは

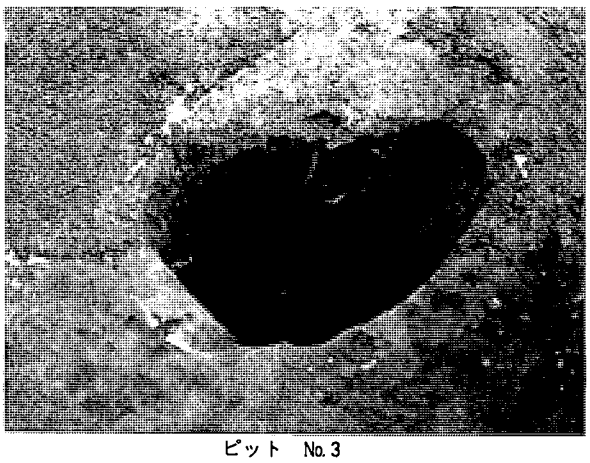
断面が第 24 図の如く、規模が小さく浅いが、埋土を版築状につきかためた跡が見られるからである。しかし、柱根、柱痕跡の確認はできない。このことは基本的にはＳＢ—203と同様の構築を行なっているが、上面約40cm程度を削り取り、柱根等も全て削平したものと判断される。又、周囲のピットのレベルと比較してみると、ＲＳＤ—01コーナー部付近がやや低くなっていることからも解る。



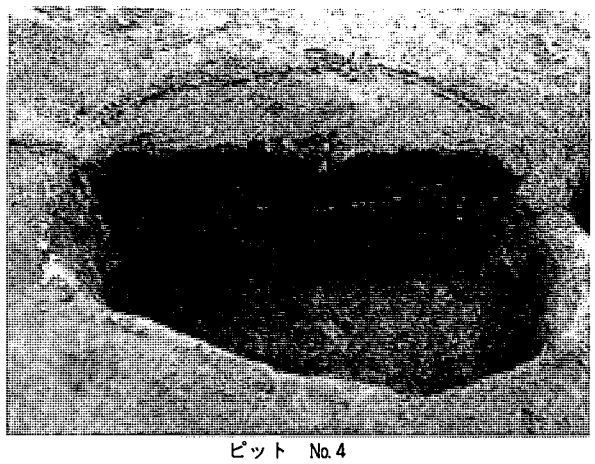
ピット　No. 1



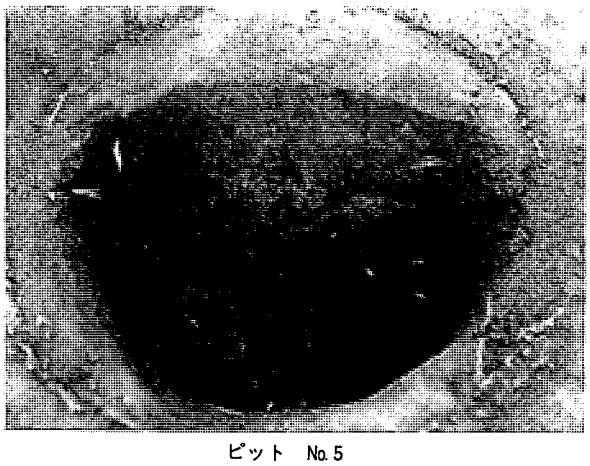
ピット　No. 2



ピット　No. 3



ピット　No. 4



ピット　No. 5

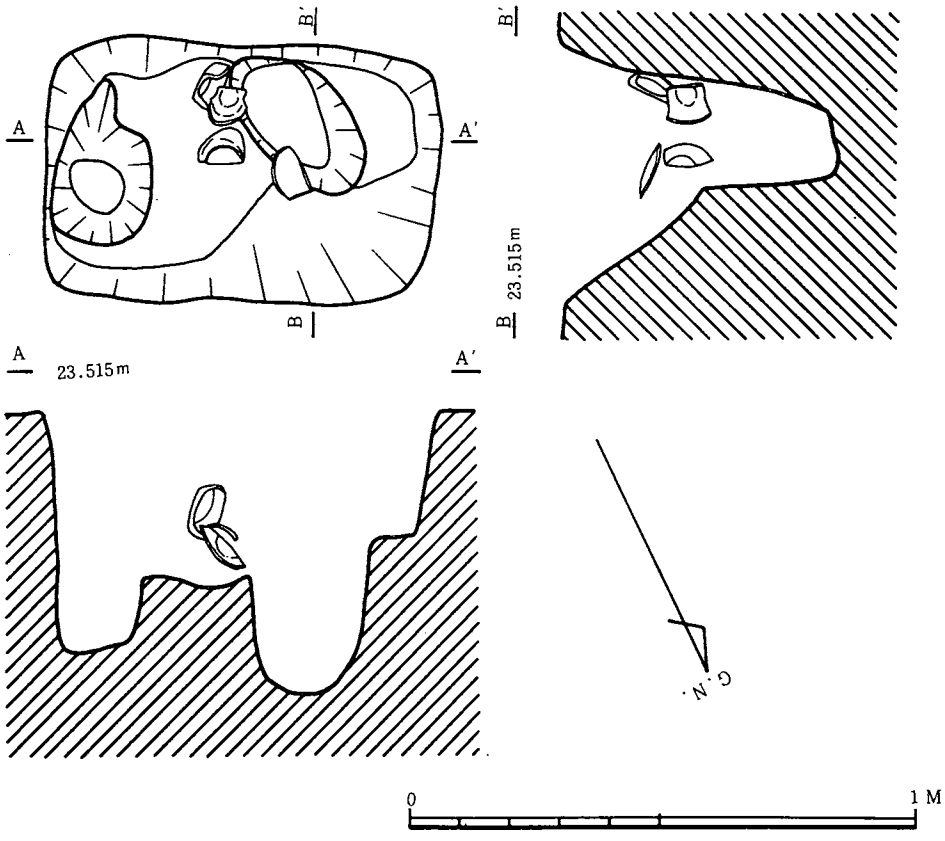
この建物の時期は、柱穴の基本的構築法が版築状のつき固めを行なっていること、建物の隔柱がＲＳＤ—01に一部落ち込み、ＲＳＤ—01の主軸方向と全く異なること等から、棟方向はＳＢ—203とは異なるが、同時期の建物である可能性が強いと考えられる。時代小区分はⅡ－２期である。

ピット

この時期の出土遺物を伴出するピットは、第 15 表の通りであるが、22—E区のピット31・32内からの須恵器はセット関係を知る上でも重要なものである。ここではこのピットのみ取り上げたい。

22－E区内ピットNo.31・32（第 27 図）

平面形は長方形を呈しており長軸は78cm、短軸は50cm、深さはピット32で55cmを測る。平面形上段は長方形であるが、下段は2個のピットに分かれ、遺物はそのピット間にはさまれた状況で出土している。先行す



第27図　22—E区 ピット31、32内遺物出土状態

るピットに方形の掘り込みを行い、その中に遺物を投棄したものであろう。出土する遺物は2個体であり蓋はつまみをもたない小型のもので、坏は無高台のものである。(第 33 図S—008．011）双方ともに半割れの状況で、故意に破損させた可能性も考えられる。なお、このピットは建物復元作業では、建物の柱穴としては使用していない。

2．遺　　物

調査地区内からは多数の土師器及び須恵器が出土している。その多くは各遺構の埋土内からのものである。時期的には大きく2時期にわかれる。1時期は奈良・平安時代に属するもの、他方は鎌倉・室町時代のものである。ここでは前者のみをあつかって述べて見たい。

土師器

総数　点の出土である。その器種は蓋、高坏・壺・甕などである。ここでは寺尾遺跡の分類をもとにして、説明を加えていきたい。

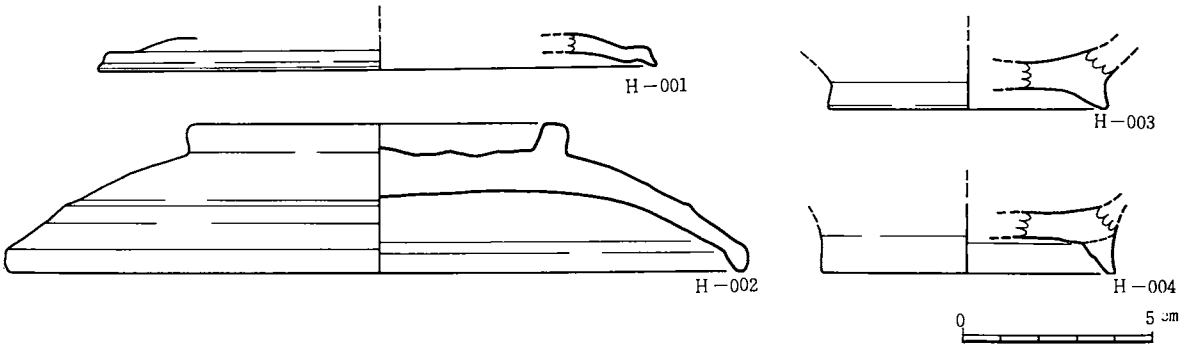
蓋（第 28 図H—001・002）

2点のみの出土である。001は基部径14.8cmを測る天井部は欠損して鈕の有無は不明である。口縁部は屈曲

実測図No	出土地点	鈕高	鈕径	基部径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H—001	SD—202 34—G ブリッジ 7～10層	—	—	14.8	残存高 0.9	密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
H—002	RSD—01 28—E	0.8	10.0	19.6	3.9	密・石英粒を含む	良好	浅黄橙色 — 浅黄橙色	鈕内側・ケズリ ヨコナデの後ヘラミガキ	端部付辺ヘラミガキ ヨコナデ	輪状鈕 ヘラ研磨

第6表 土師器蓋観察表

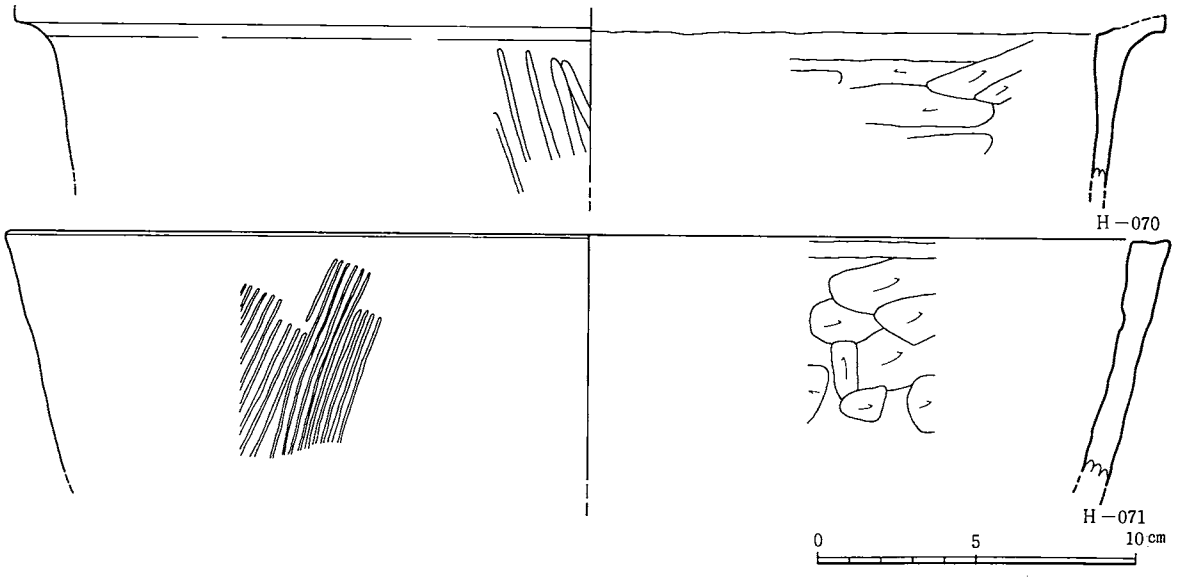
し下方に下り、端部は鋭さを有する。002は大型の輪状鈕を有する蓋である。基部径は19.6cm、器高3.9cmを測る。鈕内側を除き、他は内外面ともヨコナデ調整後丁寧なヘラミガキ調整を施す。口縁端部はやや肥厚している。鈕断面形は方形を呈しており強固である。RSD—01からの一括出土である。



第28図 土師器（蓋・坏）実測図

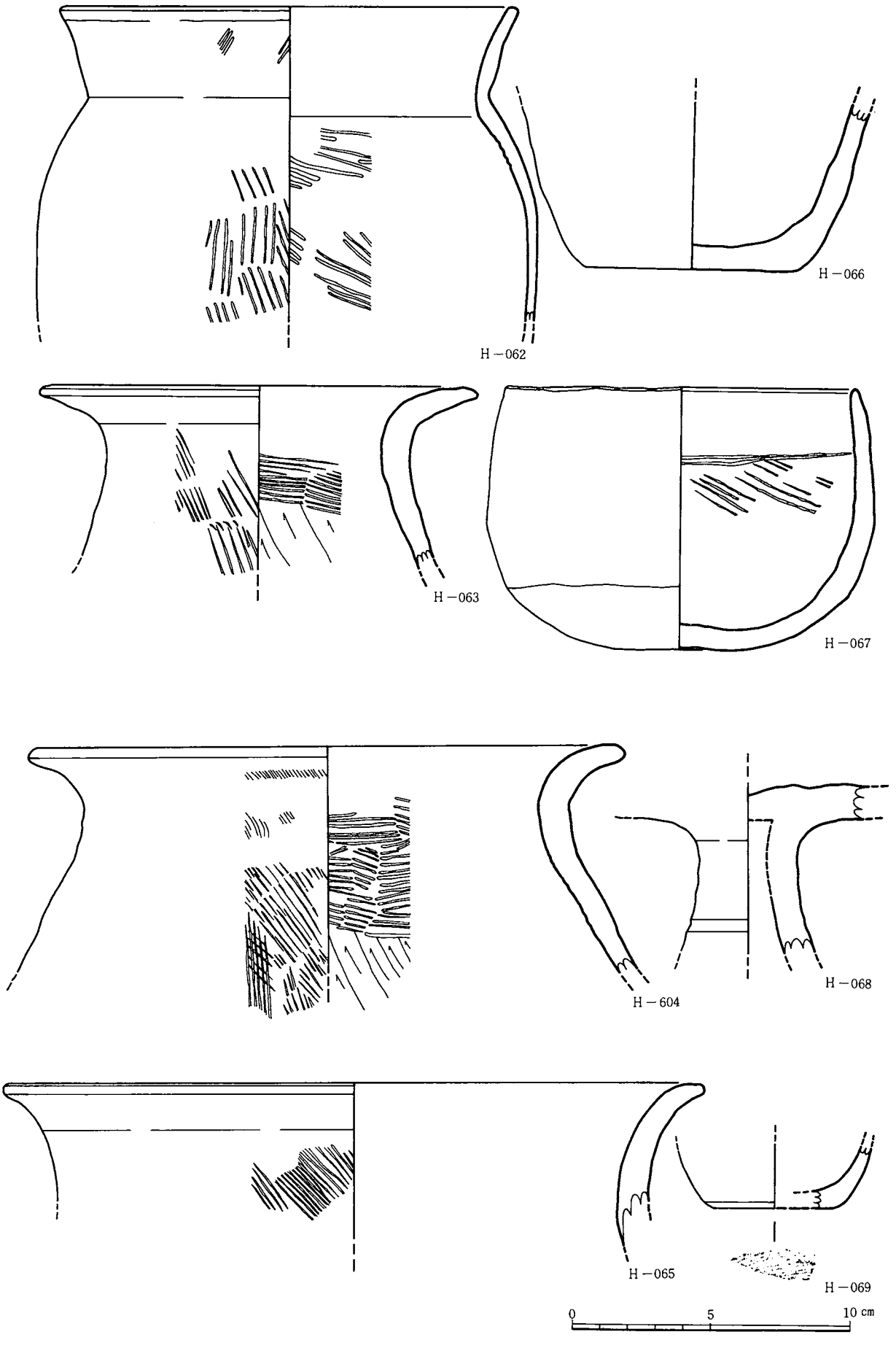
甕（第 29 図H—062～065）

この類は4点出土している。062は口径16.7cmを測る。外面はヨコナデ調整後ヘラナデ調整を、内面はヨコ



第30図 土師器（壺・甕）実測図

ナデ後ハケ目調整を施す。胴部はあまり張りがなく、口縁部はゆるく外傾する。063は基部から口縁部にかけ強く屈曲する。口縁部付近はヨコナデ調整。外面は上方から下方に向ってのハケ目調整を、内面は上位は横方向のハケ目調整を、下位はヘラケズリを施す。RSD—01からの出土である。064は口径21.7cmを測る。口縁部付近は全面にヨコナデ調整。外面は斜方向と縦方向のハケ目調整を、内面は上位にはヨコナデ後ハケ目



第29図　土師器（甕・鉢・高坏）実測図

実測図No	出土地点	口径	器高	基存高	残存高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H—062	21・23—F・G 一括	16.7	—	14.6	11.2	緻密	良好	にぶい橙色 — にぶい橙色	ヨコナデ後 ヘラナデ	ヨコナデ後 ハケ目	甕
H—063	29—E RSD—01 1層一括 2～5層 2層	15.9	—	11.0	6.6	緻密	良好	橙色 — 橙色	ヨコナデ ハケ目調整	ヨコナデ ハケ目 ヘラ調整	甕
H—064	RSD—01 3層 2～4層 2～5層 29—E	21.7	—	17.7	8.1	密	良好	橙色 — 橙色	ヨコナデ後 ハケ目	ヨコナデ後 ハケ目 ハケ目 ヘラケズリ	甕
H—065	RSD—01 29—E	25.5	—	—	5.6	密	良	浅黄橙色 — 橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ	甕
H—066	RSD—01 21—G	—	—	底径 7.8	6.0	密	不良	灰白色 — 灰白色	—	—	器壁の剝離がいちぢるしい 鉢
H—067	SK—205 21—E	12.8	9.5	—	—	密	良	黄褐色 — 黄褐色	ヘラ研磨	ヘラ研磨	底部にスス付着 鉢
H—068	RSD—01 23—F	—	—	3.8	6.2	密	良	黄橙色 — 黄橙色	ヨコナデ	坏部—ヨコナデ	高坏
H—069	SD—202 34・35—H 1層	—	—	底径 4.4	2.3	緻密	良	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底 器種不明
H—070	SD—216 一括 28—F	—	—	—	5.3	密	良好	灰黄白色 — 灰黄白色	ヨコナデ 暗文	ヘラケズリ	複合口縁 壺か
H—071	RSD—01 25—E	36.6	—	—	7.6	緻密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ハケ目	ヘラケズリ	鉢

第7表　土師器壺・甕・鉢・高坏観察表

調整を、下位にはヘラケズリを行う。これもRSD—01からの出土である。065は口径25.5cmを測る外面はヨコナデ調整後ハケ目調整を施す。RSD—01からの出土である。

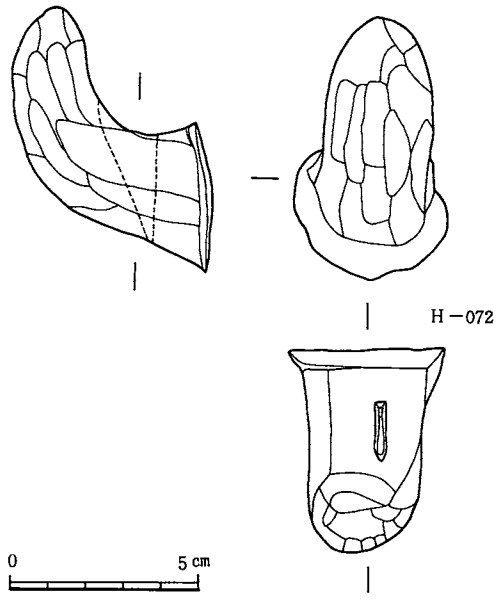
高坏・鉢（第 29 図H—066・068・069・071）

高坏はH—068の脚部のみ1点出土である。

鉢の類にあげられるものは3点である。066は器壁の剝離がいちぢるしく、観察が出来ない。RSD—01の上層からの出土である。069は底径4.4cmと小型で、底部は糸切り離しである。071は口径36.6cmを測る大型の鉢である。外面は縦方向のハケ目調整、内面はヘラケズリを行う。

甑把手（第 31 図H—072）

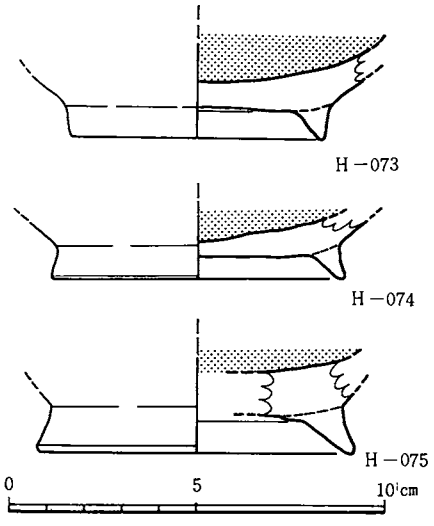
RSD—01内から1点出土している。全面にわたり丁寧なヘラケズリを行ない、仕上げる。羊角状の形態をしており、平坦部の上面より下面に向ってすかし状の穿孔を施す。穿孔は完全に下面までは達していない。寺尾遺跡からも穿孔を持った甑把手が3点出土しているが、これは円形にえぐったように、上下両面から穿孔しており、072のように、上面からのヘラ状の工具による穿孔とはやや技法が異なる。



第31図　甑把手実測図

内黒土器（第 32 図H－073～075）

総数３点の出土である。高台の断面形は逆三角形状を呈している。外面はヨコナデ調整、内面はヨコナデ調整後研磨を施し、黒色を呈する。073はＳＦ－208、074･075はＲＳＤ－01からの出土であるが、いずれも埋土上層からのものであり、直接遺構の時期とは結びつかない。



第32図　内黒土器実測図

実測図No.	出土地点	高台高	高台径	口径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H-073	ＳＦ－208 フク土中 32－Ｅ区	0.9	6.7	－	残存高 2.4	緻密	良	明黄褐色 － 明黒色	ヨコナデ	ヨコナデ 後研磨	
H-074	ＲＳＤ－01 3層 30－Ｅ	0.9	7.8	－	残存高 1.7	緻密	良好	にぶい橙色 － 黒色	ヨコナデ	ヨコナデ 後研磨	
H-075	ＲＳＤ－01 23－Ｆ	1.2	8.3	－	残存高 2.5	密	良	浅黄橙色 － 黒色	ヨコナデ	ヨコナデ 後研磨	

第８表　内黒土器観察表

須恵器

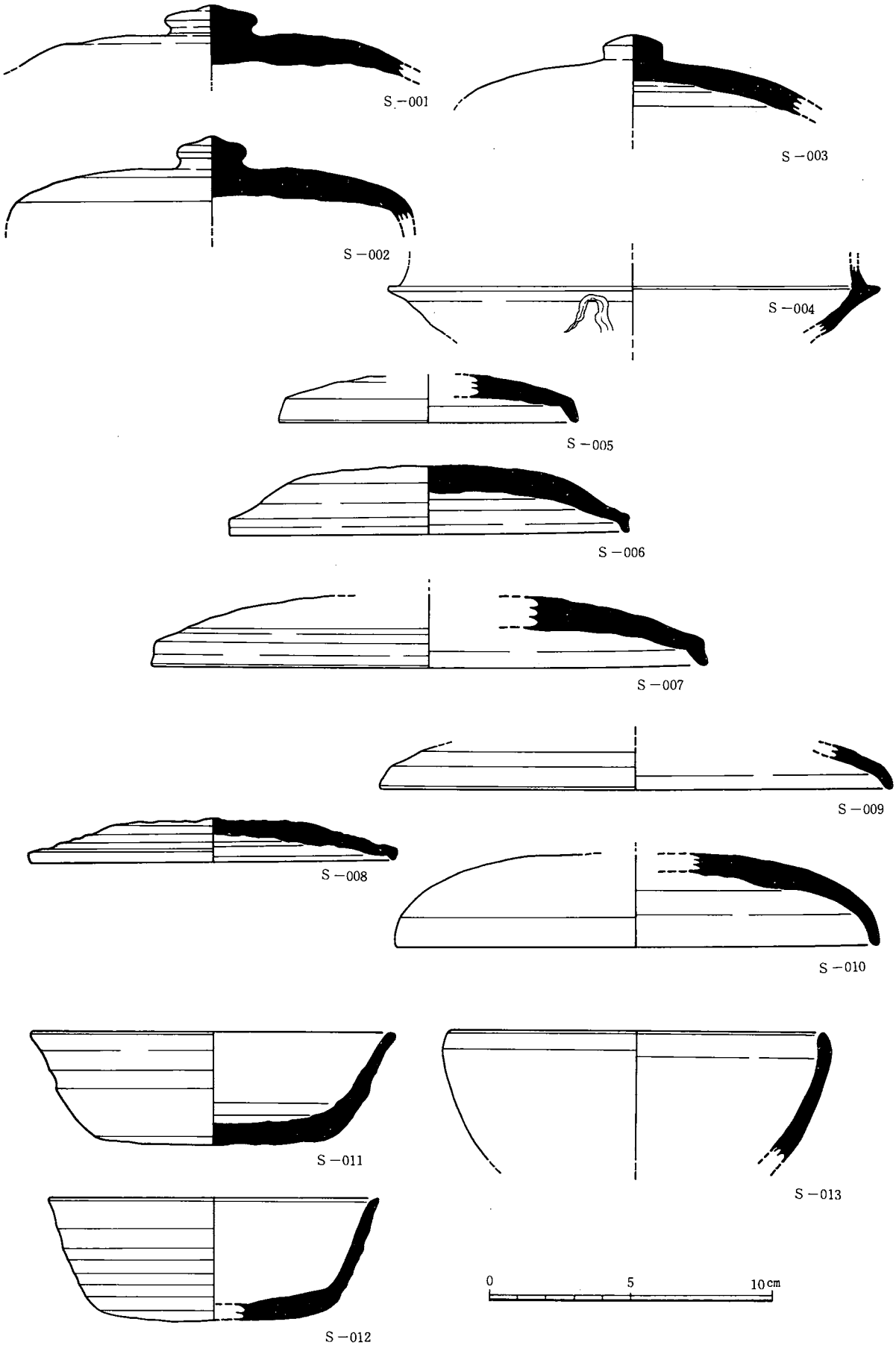
総数42点の出土である。その器種は蓋・坏・埦・高坏・壺・鉢・甕などである。ここでは寺尾遺跡の分類をもとにして、説明を加えていきたい。

蓋（第 33 図Ｓ－001～010）

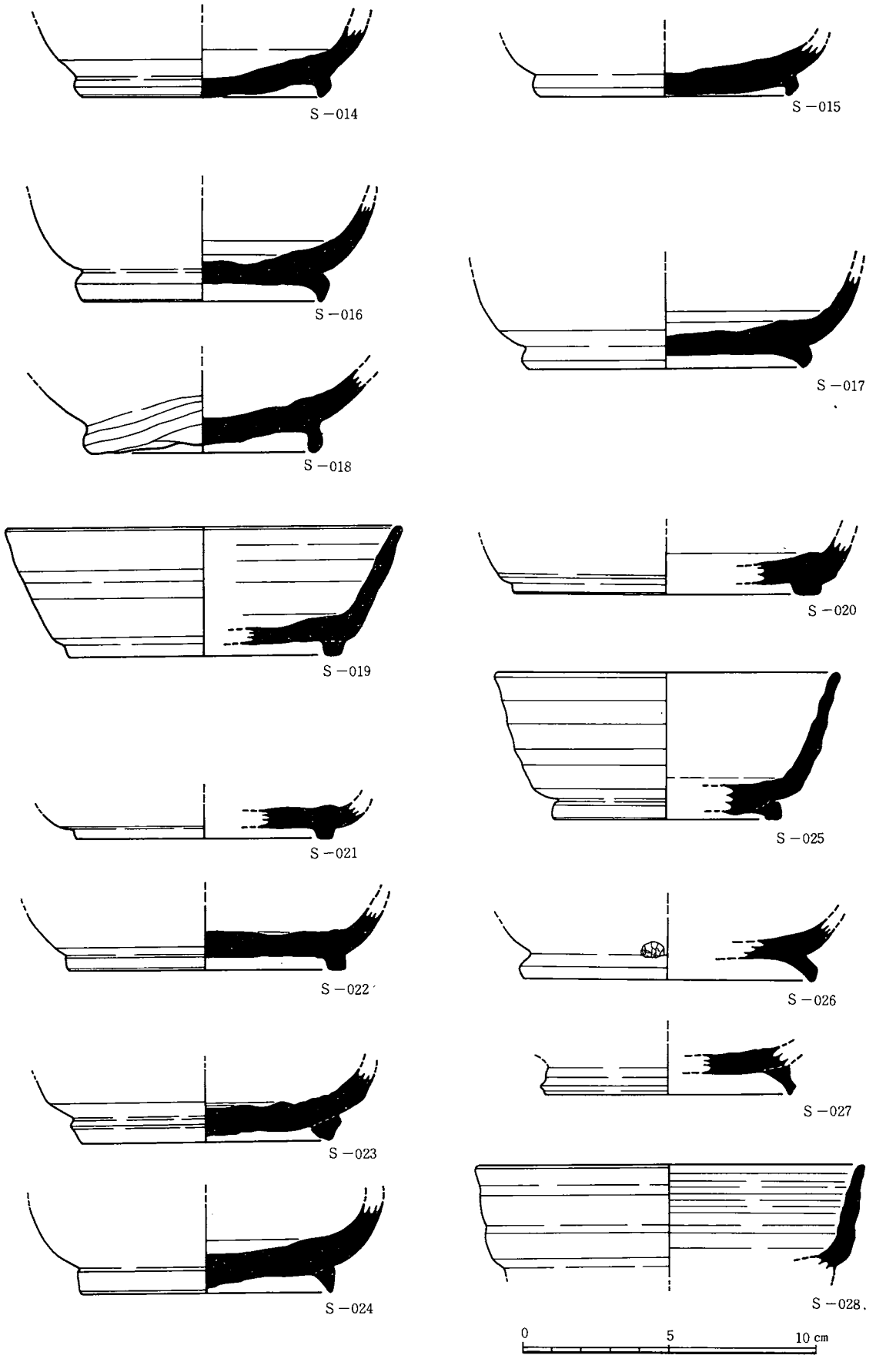
蓋類は総数８点出土している。これらを鈕の有無によって大別した。Ⅰ類は鈕を有するもの、Ⅱ類は鈕を持たないものである。

Ⅰ類（Ｓ－001～003）

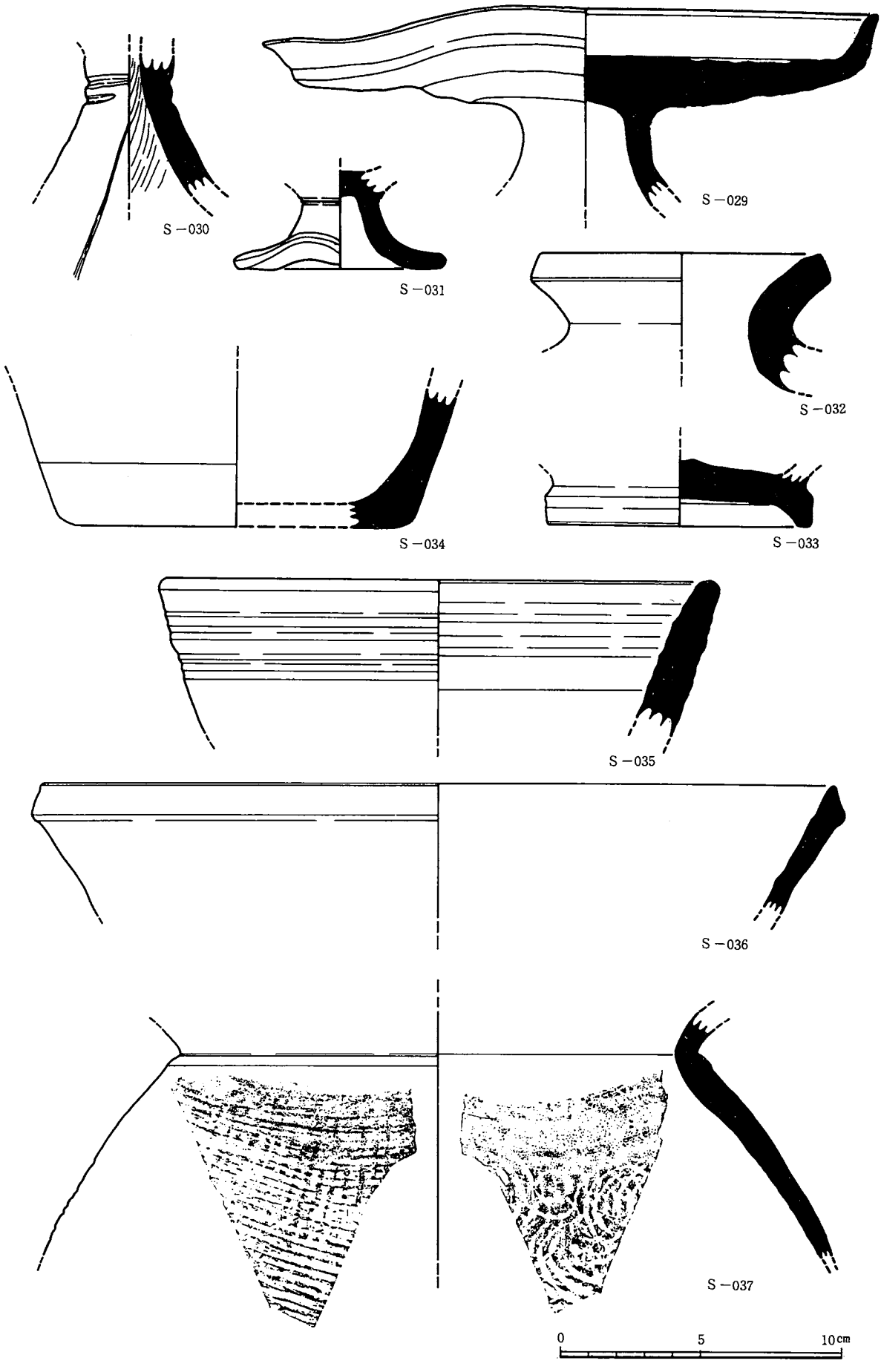
これら３点はいずれも蓋部のみで口縁部を欠損している。ⓐ類には001、002が含まれる。凝宝珠形のやや大型で、基部に強いくびれを有し、項部がふくらむ。002はやや器高が高くなると思われる。共に丁寧なヨコナデ調整を施して仕上げる。ⓑ類は003の１点のみである。基部にくびれがなく、断面形が扁平な方形ないし、逆台形状を呈している。なお寺尾遺跡からはこの形状の鈕は出土していない。



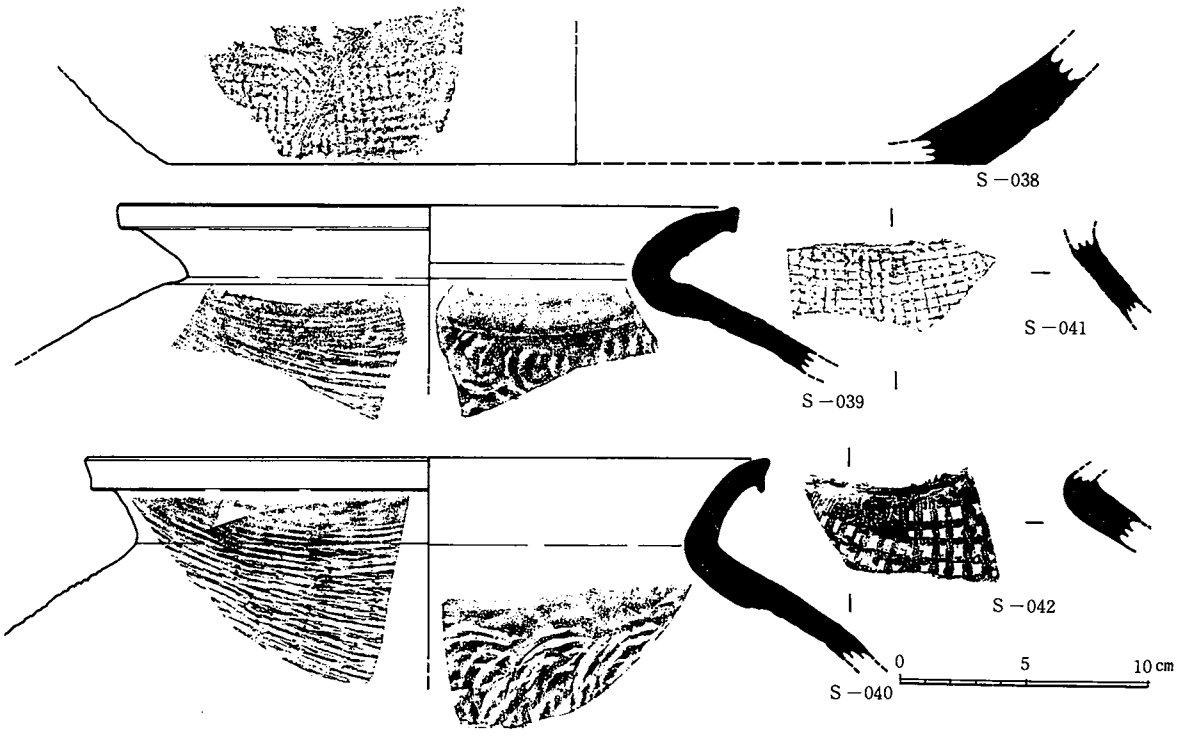
第33図　須恵器（蓋・坏）実測図



第34図　須恵器（坏）実測図



第35図　須恵器（高坏・鉢・壺・甕）実測図



第36図　須恵器（甕）実測図

実測図No	出土地点	鈕高	鈕径	基部径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S－001	ルート内 県道西側 表採	1.1	3.2	—	残存高 1.6	密	良好	灰白色 — 黄褐灰色	鈕部—丁寧なヨコナデ 基部—ヘラケズリの後ヨコナデ	丁寧なヨコナデ	鈕を有する
S－002	RSD－01 30－E Ⅱ層	1.2	2.4	—	残存高 1.9	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰色	ヨコナデ	不定方向のナデ	鈕を有する
S－003	SX－203 31－1	0.9	2.1	—	残存高 1.9	密	良好	緑灰色 — 緑灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	鈕を有する
S－005	試掘トレンチ 7－E	—	—	10.7	残存高 1.7	緻密 堅緻	良好	灰白色 — 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－006	RSD－01 21－G ピット87	—	—	14.3	2.4	緻密 堅緻	良好	灰色 — 明オリーブ灰色	上部—ヘラケズリ 下部—ヨコナデ	ヨコナデ	
S－007	RSD－01 23－F	—	—	19.7	残存高 2.6	緻密 堅緻 ・ 石英粒を含む	良好	緑黒色 一部灰色 — オリーブ灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－008	22－E (ピット31 ピット32	—	—	13.1	1.6	緻密 堅緻	良好	明オリーブ灰色 一部赤褐色 — 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－009	RSD－01 30－E Ⅲ層上面	—	—	18.2	残存高 1.5	緻密 堅緻	良好	灰白色 — 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－010	RSD－01 30－E Ⅱ層	—	—	17.2	残存高 3.3	緻密	良	暗灰色 一部灰白色 — 灰色	上部—ヘラケズリ 下部—ヨコナデ	ヨコナデ	不純物付着

第9表　須恵器蓋観察表

Ⅱ類（S－005～010）

計7点である。口縁端部の形状によってさらに細分できる。分類は寺尾の蓋口縁端部断面模式図（第17図）に準じて行う。005はⓐ類に含まれる。006、007はⓑ類に含まれる。006はＲＳＤ－01のピット内からの出土である。基部径14.3cm、器高2.4cmを測る。007は基部径が19cmと大型であり、鈕を持っていた可能性も考えられる。008はⓒ類に相当する。基部径13.1cm、器高1.6cmを測る。009はⓓ類に属する。天井部が欠損しており、鈕の有無は不明である。010は器高が高く内湾気味に下り、口縁端部はそのままおさまる。寺尾遺跡からは類例資料が出土していない。

坏（第31－32図S－004、011～028）

坏は総数19点が出土している。内訳は無高台のもの4点、高台を有するもの15点である。これらを前者ではⅠ類、後者をⅡ類として分類した。分類基準は寺尾遺跡に準じて行う。

Ⅰ類（S－004、011～013）

総数4点である。第20図須恵器坏形態分類図を参照していただきたい。004は坏の受部の破片で受部径は17.5cmを測る。立ち上がりを有するが、立ち上がり高は不明である。外面に焼成の際の不純物が付着している。須恵器のⅣ類に含まれると考えられ、セット関係では寺尾遺跡のS－202と組み合う可能性が高い。なお寺尾遺跡には同類資料は見られない。011、012はⓒ類に相当する。011は008と同一ピット内からの出土であり、セット関係を有する。013に相当する坏は寺尾遺跡から出土していない。底部が破損しているため詳細は不明であるが、内湾気味に立ち上がり、口縁端部付近で屈曲しやや内傾する。

実測図No.	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法手法の特徴		備考
								外面	内面	
S-011	22－E ピット32	19.9	4.0	8.4	緻密	良	灰白色 － 灰白色	ヨコナデ 底部－ヘラケズリ ハナシ	ヨコナデ	
S-012	表採	11.7	4.4	8.1	緻密 堅緻	良好	灰白色 － 灰黄色	ヨコナデ 底部－ヘラケズリ ハナシ	ヨコナデ 底部付近－不定方向のナデ	
S-013	ＲＳＤ－01内 33－G 8層	13.2	4.6	－	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S-004	ＲＳＤ－01 34－Ⅰ Ⅰ層	－	残存高 2.5	－	緻密 堅緻	良好	暗オリーブ色 － 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	不純物付着

第10表　須恵器坏観察表

Ⅱ類（S－014～028）

総数15点が数えられる。高台の貼り付け位置及び高台の断面形は寺尾遺跡の分類に準ずる。ⓐ類には014～018までの5点が含まれる。これらは底部のみである。014・015は高台外面の稜が弱く他の3点は強くくびれる。015・017・018はＲＳＤ－01からの出土であり、この溝の時期を決定する資料である。018は焼成の際のひずみが大きい。高台の貼り付け位置はいずれも②である。ⓑ類には019～022までの4点が含まれる。019は口径13.5cm、器高4.4cmを測り、ＳＤ－202のⅢ層からの出土である。高台の貼り付け位置は③に相当する。他の3点は高台底部のみの出土であり、その貼り付け位置は②に該当する。ⓒ類は023・024の2点である。023

は断面への両側方からの指圧が強く稜を有している。ＲＳＤ—01最下層からの出土である。024は断面形が逆三角形状であるが、肉薄である。025はⓓ類に属する。口径11.6cm、器高5.0cmを測る。底部はぶ厚く、高台貼り付けの際重ねたとも考えられる。７—Ｅ区試掘トレンチからの出土である。026・027はⓕ類に属する。026外面には不純物が付着している。027は更に両側方からの指圧による丁寧な仕上げをなし、高台は高く貼付けられている。028は高台を有すると考えられるが、欠損し高台形は不明である。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部は直立する。

実測図No.	出土地点	高台高	高台径	口径	器高	胎土	焼成	色調	手法の時徴 外面	手法の時徴 内面	備考
S-014	SD—210 24—G	0.7	8.2	—	残存高 2.5	緻密 堅緻	良好	灰白色 — 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S-015	RSD—01 22—F	0.8	8.5		残存高 1.0 —	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S-016	SD—209 一括	1.1	8.2	—	残存高 2.4	緻密	良好	灰褐色 — 灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S-017	RSD—01 33—G	0.8	9.3	—	残存高 2.5	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰色	ヨコナデ 高台内部—未調整	ヨコナデ 底部付近—不定方向のナデ	
S-018	RSD—01 23—F	1.0	7.6	—	残存高 1.8	緻密 堅緻	良好	灰白色 — 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ 底部付近—不定方向ナデ	焼成ひずみ大
S-019	SD—202 35—Ⅰ ブリッジⅢ層	0.4	9.3	13.5	4.4	緻密 堅緻	良好	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S-020	試掘一括	0.3	10.4	—	残存高 1.6	緻密 堅緻	良好	明褐色 — 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S-021	SD—216 26・27-F・G 上層	0.4	8.7	—	残存高 0.8	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰色	ヨコナデ 高台内側—不定方向のナデ	ヨコナデ	
S-022	SK—220 23・24—E Ⅱ層	0.5	9.4	—	残存高 1.7	緻密	良好	灰白色 — 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S-023	RSD—01 34—J 最下層	0.9	8.5	—	残存高 1.6	緻密 堅緻	良好	灰白色 — 灰白色	ヨコナデ 高台内側—ヘラケズリハナシ	ヨコナデ	
S-024	34—Ⅰ・H ピット86	0.9	8.5	—	残存高 2.2	緻密 堅緻 ・ 石英粒を含む	良好	青灰色 — 青灰褐色	ヨコナデ 高台内側—ヘラケズリハナシ	ヨコナデ	

実測図No.	出土地点	高台高	高台径	口径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S-025	試掘トレンチ 7—E	0.7	7.4	11.6	5.0	緻密 堅緻	良好	灰白色 — 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S-026	RSD—01 28—E 上面一括	0.8	9.9	—	残存高 1.3	緻密	良好	灰白色 — 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	不純物付着
S-027	RSD—01 22—F 上層	0.9	8.4	—	残存高 0.8	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S-028	試掘トレンチ 39—I・J 表土層	—	—	13.1	3.5	緻密 堅緻	良好	明茶褐色 — 明茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	

第11表　須恵器高台付坏観察表

高坏（第35図S—029～031）

総数3点である。029はRSD—01の下層からの出土である。焼成に際してひずみを有しており、実用には耐えられないと考えられる。030は頸部のみの破片である。2条の深い条線を有している。また長さ5.7cmの刻文を一条持っており、ヘラ記号であると思われる。031は基部径が7.6cmを測る小型のものである。RSD—01の第2層からの出土である。

壺・鉢（第35図S—032～036）

032・033は壺の破片であると考えられる。032は口径10.1cmを測る口縁部の破片である。基部はかなり強くくびれている。外面には部分的に叩きが見られる。033は高台底部の破片で長頸壺の底部に類似する。

鉢の類に属するものは034～036である。034は底部片、035は口縁部片である。口縁端部は丸くおさまるが肥厚しており、体部の器壁も厚い。内外面ともヨコナデ調整を施すが粗い調整面を残す。036も口縁部であるが形状が異なる。口縁部に向って外傾気味に立ち上がるが、口縁端部では逆くの字形の形状をなす。外側の稜は鋭さを持つ。

甕（第35図S—037～042）

総数6点中内訳は次のとおりである。口縁部片2点、底部片1点、胴部片3点である。

039は口径24.9cmを測る。口縁部内外は丁寧なヨコナデ調整を施している。外面は叩き板の木目を生かしたままで横方向に木目の文様がのびる。内面にはアテ具の痕跡が明瞭に見られる。040は口径27.4cmを測る。基部から口縁部に向ってはゆるく屈折し、その端部は特異である。端部は強く押されたため、下方に一部分垂れている。外面には口縁端部付近まで叩き板の木目を生かした文様が見られ、その中には木目に対し直角方向の条線を持つ箇所も見られる。内面にはアテ具の痕跡が残る。

038は底部の破片で底径32.7cmを測る。外面は底部周縁付近まで格子目文の叩きを全面に施す。内面はヘラ状工具による横方向の調整が見られる。037は胴部片である。外面は格子目状の叩きを施す。平行叩きに直角方向で条線を持ち、その間隔は4mm程度である。さらに胴部下位には一部平行叩きが見られる。また基部付近は内外面ともヨコナデ調整を施し、内面には同心円文状のアテ具の痕跡が見られる。なお全体に焼成の際、貫入による器壁の膨張が見られ、大きくひずむ。041・042は外面に格子目の叩きを持つが前者は格子目が3mm方眼、後者は4～5mm方眼である。叩き板の幅長は不明である。

実測図No.	出土地点	口径	器高	基部径	残存高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S-029	RSD—01 23—F	—	—	4.5	7.1	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰白色	ヨコナデ	坏部—ヨコナデ 不定方向ナデ	焼成ひずみ大
S-030	SX—201 21—E	—	—	3.1	8.0	緻密	良好	青紫灰色 — 青灰色	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラ記号あり
S-031	RSD—01 28—E 2層	—	—	7.6	3.6	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成ひずみ大
S-032	SD—204 31—G	10.1	—	8.0	5.0	緻密	良	灰白色 — 灰青色	ヨコナデ 叩き	ヨコナデ	壺
S-033	RSD—01 21—F	高台径 9.5	高台高 1.3	—	2.3	緻密 堅緻	良好	暗オリーブ灰色 — 暗オリーブ灰色	ヨコナデ	底部—指圧	壺底部か
S-034	表採	—	—	底径 12.6	5.2	密	良好	明灰色 — 暗緑灰色	ヨコナデ	ヘラ	鉢
S-035	SD—203 35—I	19.9	—	—	5.5	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	鉢か
S-036	22—F ピット9	28.2	—	—	4.8	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	鉢
S-037	RSD—01 34—I	—	—	18.5	8.7	密	不良	暗灰色 — 灰色	叩き	ヨコナデ アテ具痕跡	焼成ひずみ大 甕
S-038	31—I ピット64	—	—	底径 32.7	4.6	緻密	良好	灰色 — 灰色	叩き	ヘラ調整	甕
S-039	RSD—01 28—E 2層	24.9	—	19.2	6.7	緻密 堅緻	良好	灰白色 — 灰色	ヨコナデ 叩き	ヨコナデ アテ具	甕
S-040	RSD—01 33—F	24.7	—	23.3	8.1	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰色	ヨコナデ 叩き	ヨコナデ アテ具	甕
S-041	23—G ピット18	—	—	—	2.6	緻密 堅緻	良好	暗灰色 — 暗灰色	叩き	ヨコナデ	甕
S-042	31—H ピット14	—	—	—	1.8	緻密 堅緻	良好	灰色 — 灰色	叩き	ヨコナデ	壺か

第12表　須恵器高坏・壺・鉢・甕観察表

第Ⅴ章　鎌倉・室町時代

1．遺　　構

掘立柱建物跡

ＳＢ—204（第37図）

この建物は全Ⅱ区の32･33—H･I区に位置している。棟方向はG.N.—18°20′—Wの方向を持ち、この方向は、ＲＳＤ—01、ＳＤ—202の流向主軸方向に対して、ほぼ直角を保っている。柱間は整然としており、平面形は所謂長倉状を呈している。桁側の凡そ東西方向に対し庇を２面持つ。桁側は５間で38尺（11.35ｍ）を、梁側は４間で22尺（6.8ｍ）を測る。身舎面積は15.7坪（51.64㎡）、庇面積は7.7坪（25.53㎡）となる。構成柱穴は総数で28個となり、桁中央柱を１個欠くのみである。身舎部分の各隅柱はいづれも大型で最大平面規模は60㎝、深さは90㎝を測る。各柱間間隔はほぼそろい８尺であるが北側の１間のみ９尺と長く、又桁中央柱を１個欠損していることから、この地区のみ特殊な空間、土間状の空間が想定できよう。半載による柱根の確認は身舎側の各隅柱に限り可能で、他の柱穴では小型であるため確認が困難であった。特に庇部では一様に浅く、皿状の凹みを残すだけのものさえあった。又この建物の構成柱穴からは多数の土器類（糸切りの皿、坏）が出土し、よってこの建物の時期を知ることができる。さらに伴出遺物によりこの建物は、ＳＤ—202とほぼ同時期であることが推定され、復元建物跡内では時期判定ができるただ一棟の建物となった。尚時代小区分はⅢ—１—ⓐ期である。

ＳＢ—217

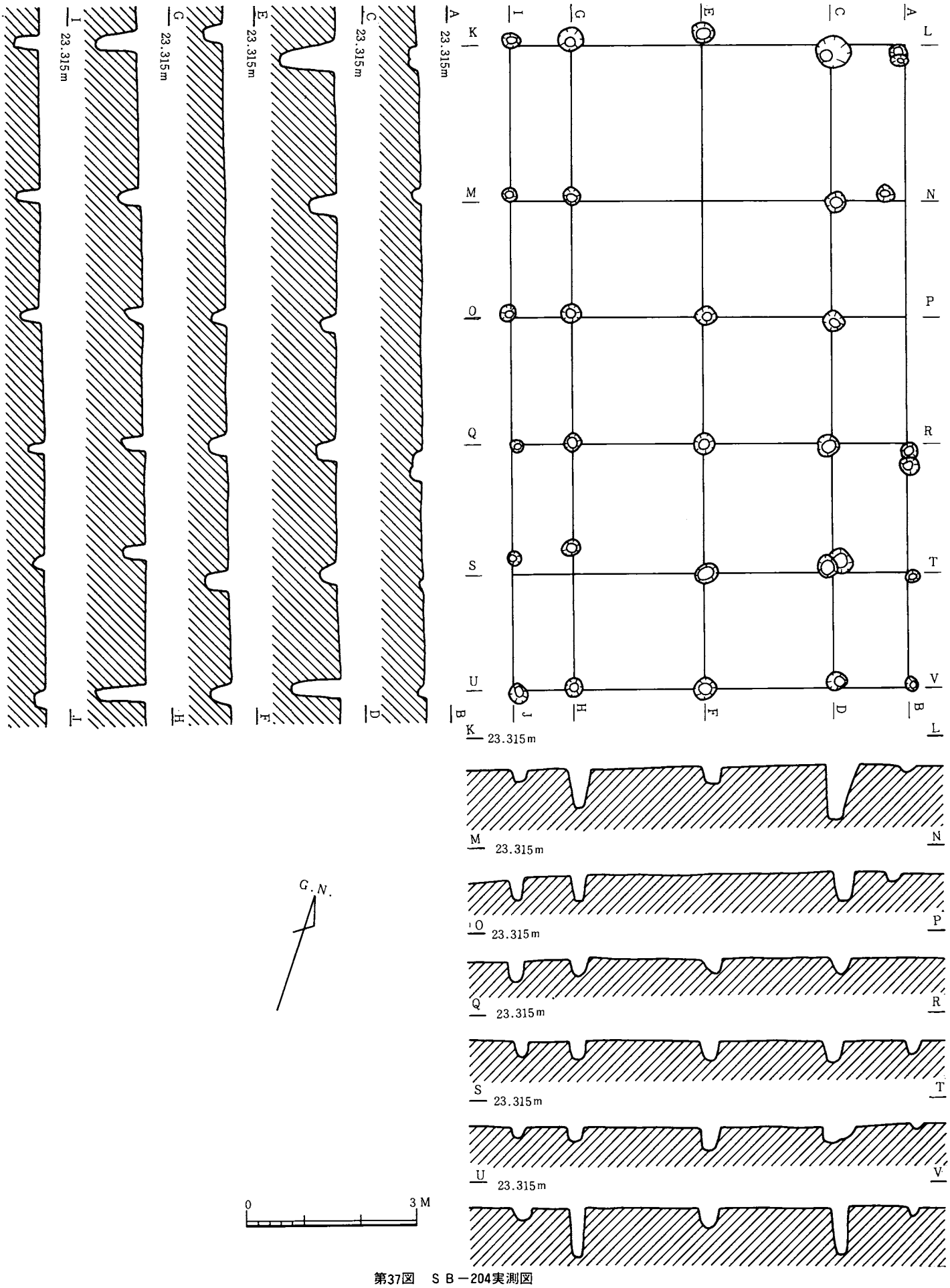
この建物は全Ⅱ区の30—H･I区に位置する。棟方向G.N.—81°00′—Wの方向を持っている。平面形は長倉状をなすと思われるが、½が調査区域外のため詳細は不明である。桁行は完結し４間で34尺（10.26ｍ）を測る。庇の間隔は３尺で、ＳＢ—204の庇間隔と同様である。尚、庇は一面のみであるのか、反対側にもう１つ付くのかは不明である。ピットからの出土遺物は皆無で、細時期は不明であるが、鎌倉・室町時代に属するものと思われ、時代小区分はⅢ—３—ⓒ期である。

ＳＢ—223（第38図）

この建物は全Ⅰ区24—G区に位置している。棟方向はG.N.—39°30′—Wの方向を持つ。平面規模は長倉形であるがやや特異である。桁行は22尺（6.47ｍ）を測るが、４間で各々４尺、７尺、７尺、４尺である。他方の側柱は中央部の三柱穴が欠如しており、又中央桁列も２個欠損している。梁行は２間で11尺（3.4m）を測る。尚時代小区分はⅢ—３—ⓑ期である。

ＳＢ—224（第44図）

この建物は全Ⅰ区の24—Ｆ･G区に位置している。棟方向はG.N.—53°00′—Ｅを示す。平面形は長倉形であるが柱間の並びが不揃いである。外側の桁行は２間の15尺（4.47m）であるが中央列は３間となり変則的である。梁行は２間で11尺（3.3ｍ）となる。尚ＳＢ—223と棟を接しており時代区分はⅢ—３—ⓓ期である。



第37図　ＳＢ－204実測図

ＳＢ—226（第39図）

この建物は全Ⅲ区28･29-F.G区に位置する。棟方向はG.N.—13°30′—Wの方向を保つ。

身舎部分は桁行で３間で20尺（6.1m）、梁行で２間で13尺（3.9m）を測る。面積は5.7坪（18.66㎡）である。

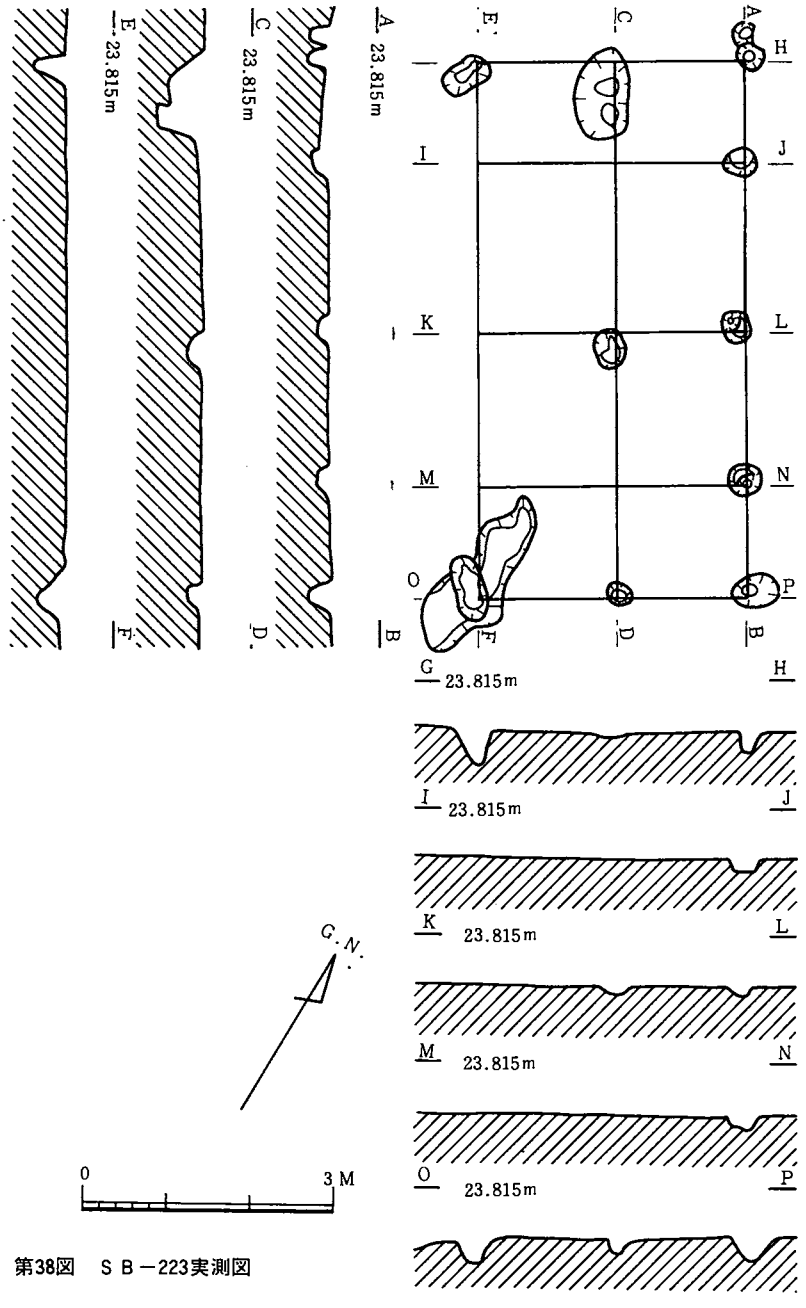
桁中央列には柱穴は存在しない。庇部は四面に庇を持ち、３尺及び４尺で、隅柱４個のうち１個が欠損している。構成柱穴内での最大平面規模は50cmでやや中型である。復元家屋は入母屋造りの大型の家屋と想定される。時代小区分はⅢ—３—ⓑ期に属する。

ＳＢ—243（第40図）

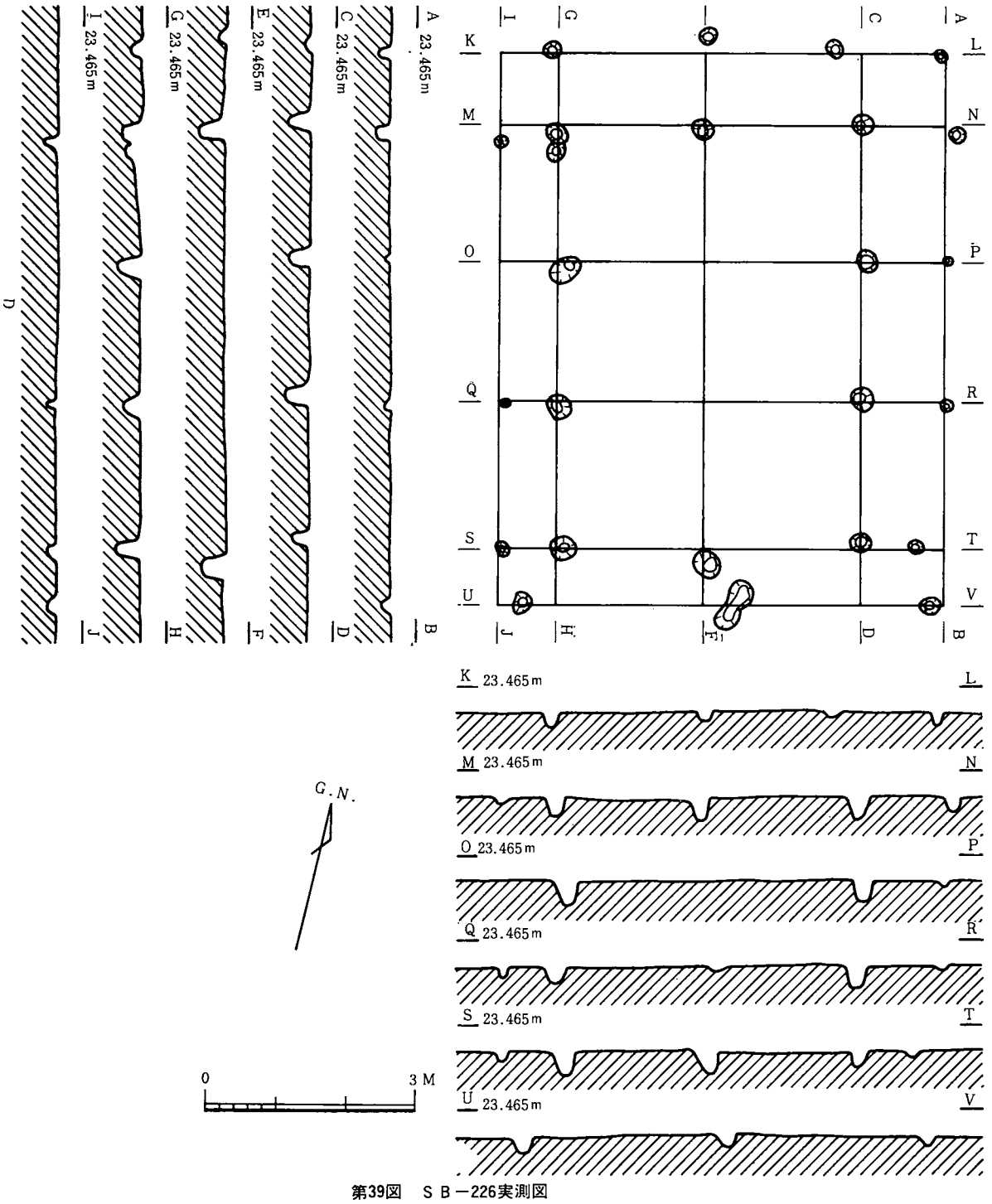
この建物は全Ⅰ区22—Ｅ区に位置する。棟方向はGN.—49°00′—Ｅを示す。桁行２間の16尺（4.8 m）、梁行１間の８尺(2.5m)を測る。所謂高床式倉庫であろうと推定されるが、隅柱を１個欠いている。

これは他の21Ｂａ—４類型の建物にも全て共通している。

倉庫状の建物であるがコーナー部に何らかの意味を持たせた遺構ではないかと想定される。総面積は３坪内外でほぼ一定しており、比較的小型に属する。時代小区分はⅢ—３—ⓓ期である。



第38図　ＳＢ—223実測図



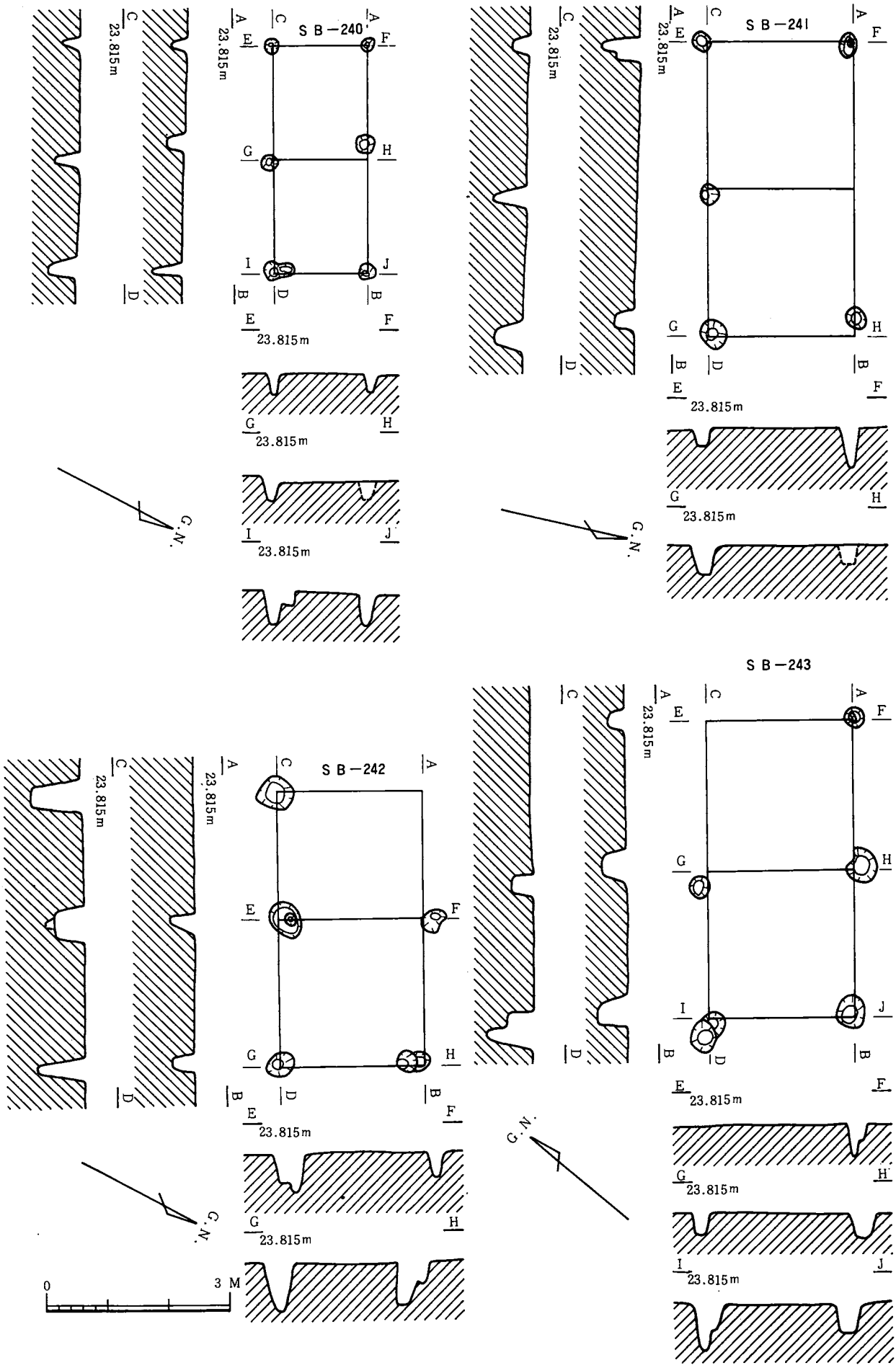
第39図　ＳＢ－226実測図

溝遺構

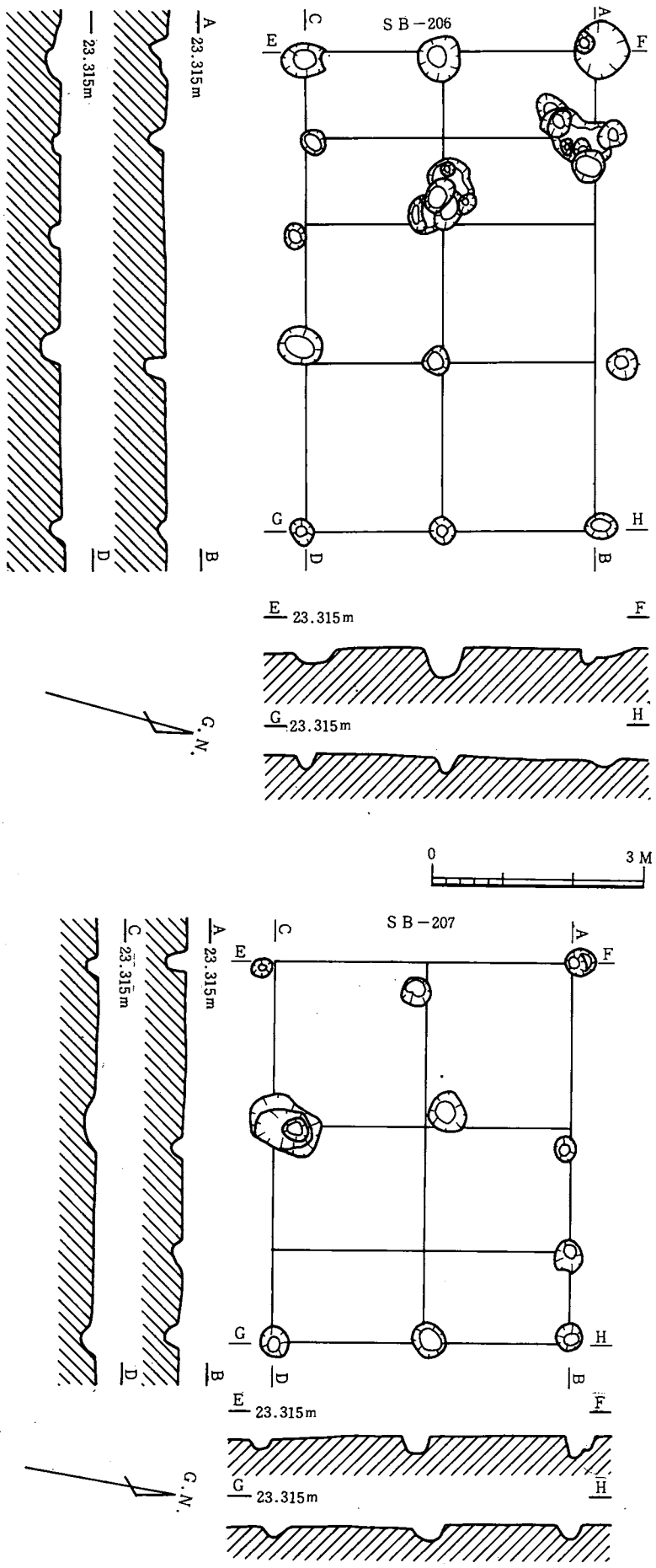
ＳＤ－202・203（第52図）

ＳＤ－202は全Ⅰ・Ⅲ区の34～36－Ｆ～Ｋ区に位置する。溝の流向はG.N.－70°35′－Ｅを計る。残存長は49.98m、最大上場幅は4.65～6.32m、最大深度1.27mを測る。大型の溝遺構で台地上を切断する形で東西側へ走る。断面観察によればその層序は、基本的には上下の２層に分けられよう。即ちⒷB層下面をその境と考えられる。断面Ｂ－Ｂ′を例にとれば、最下層の共通層Ⓒから共通層Ⓑ迄は種々の層がゆっくりと埋まった状況である。その後Ⓑ層より上面は急激に多量の土が堆積している。

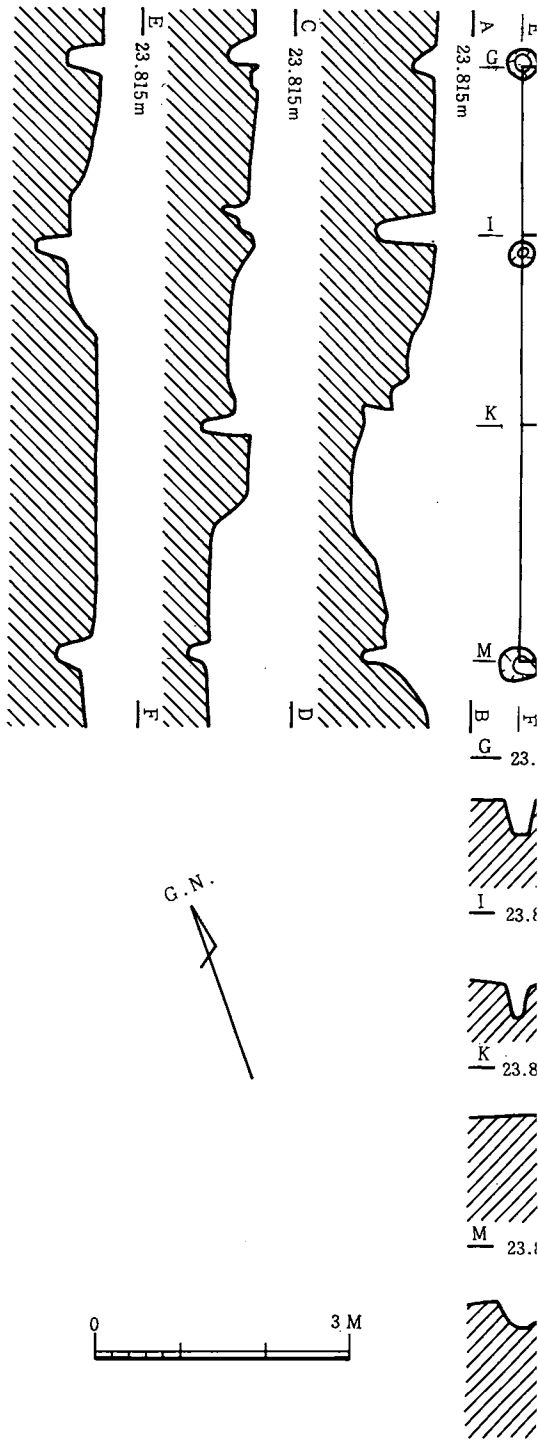
出土遺物は各層多数を有しているが、溝の時期決定に関与する遺物類は以下の通りである。



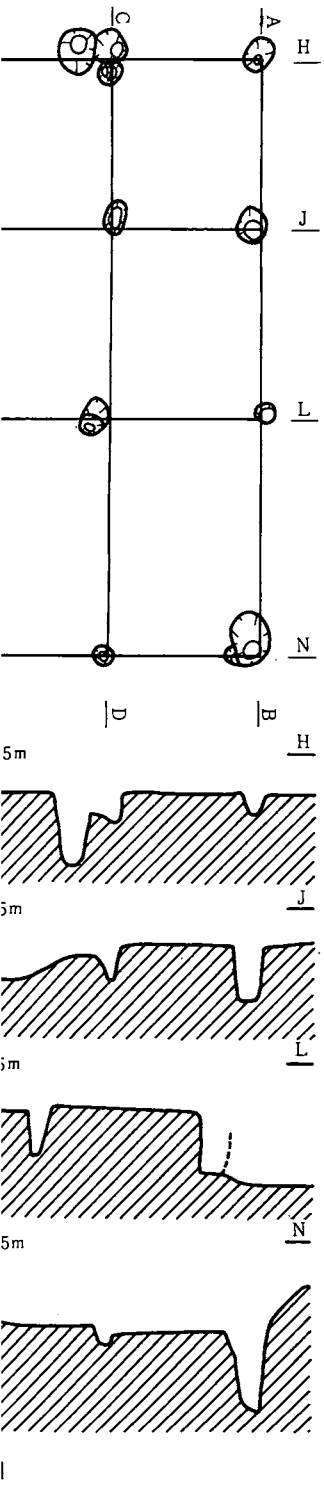
第40図　ＳＢ－240、ＳＢ－241、ＳＢ－242、ＳＢ－243実測図

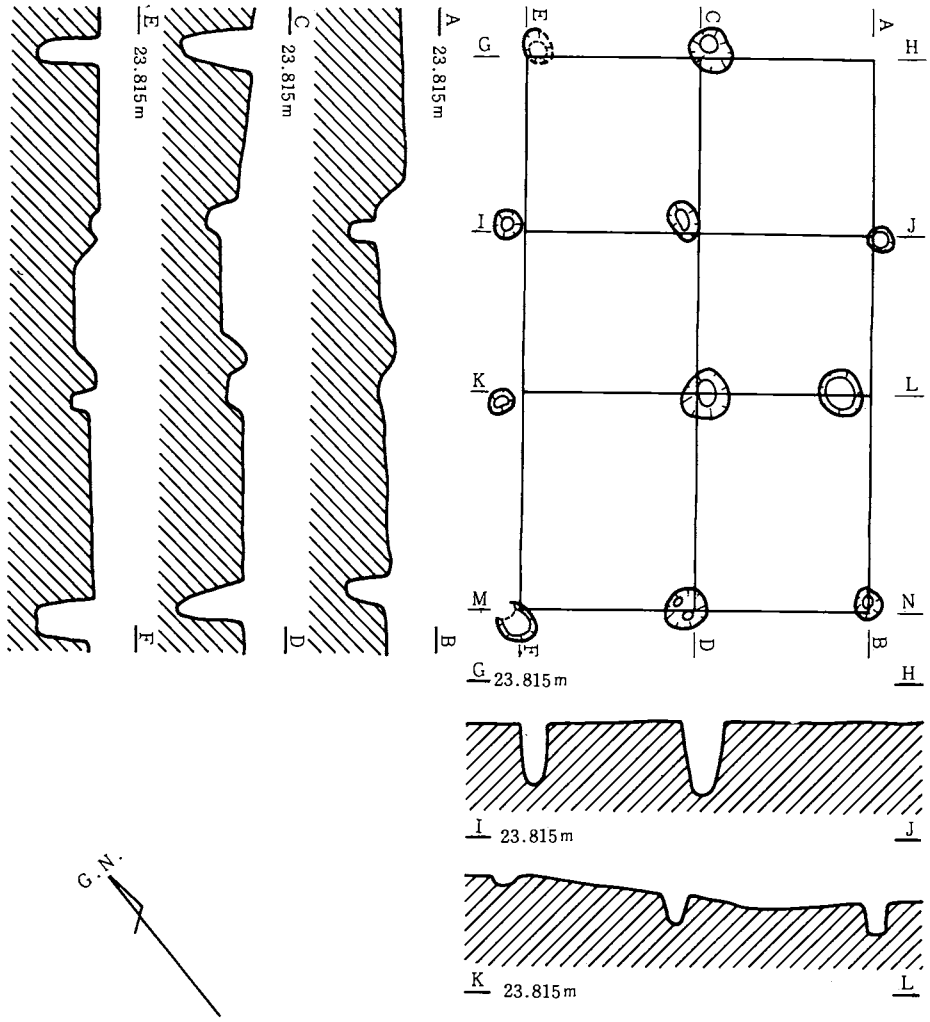


第41図　SB－206、SB－207実測図

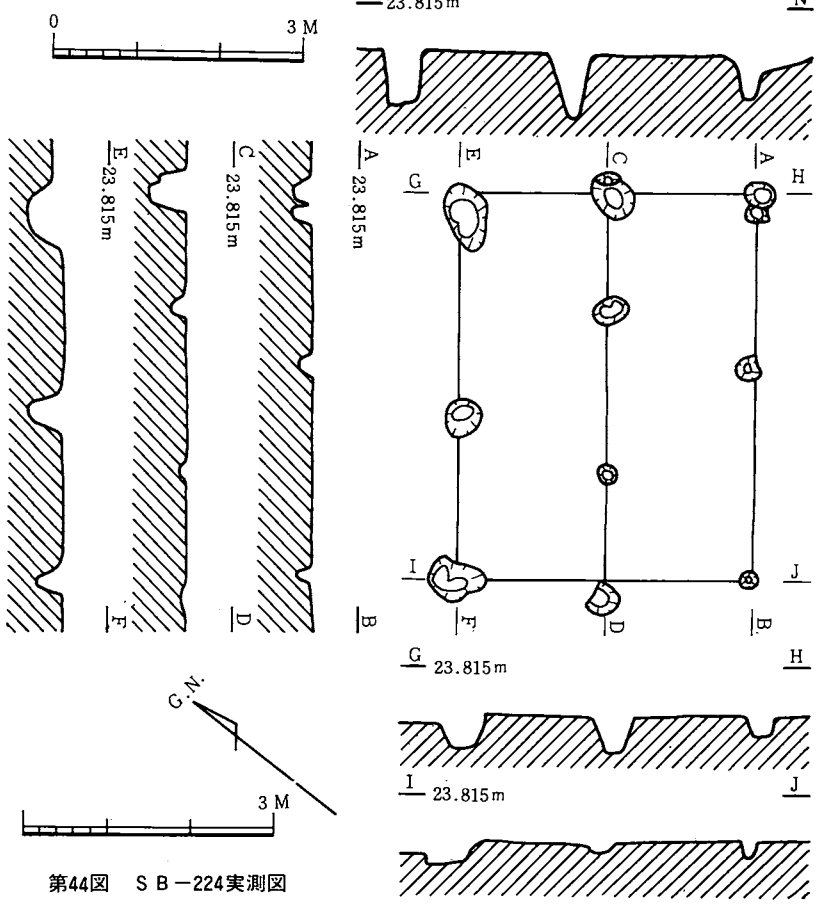


第42図　SB－219実測

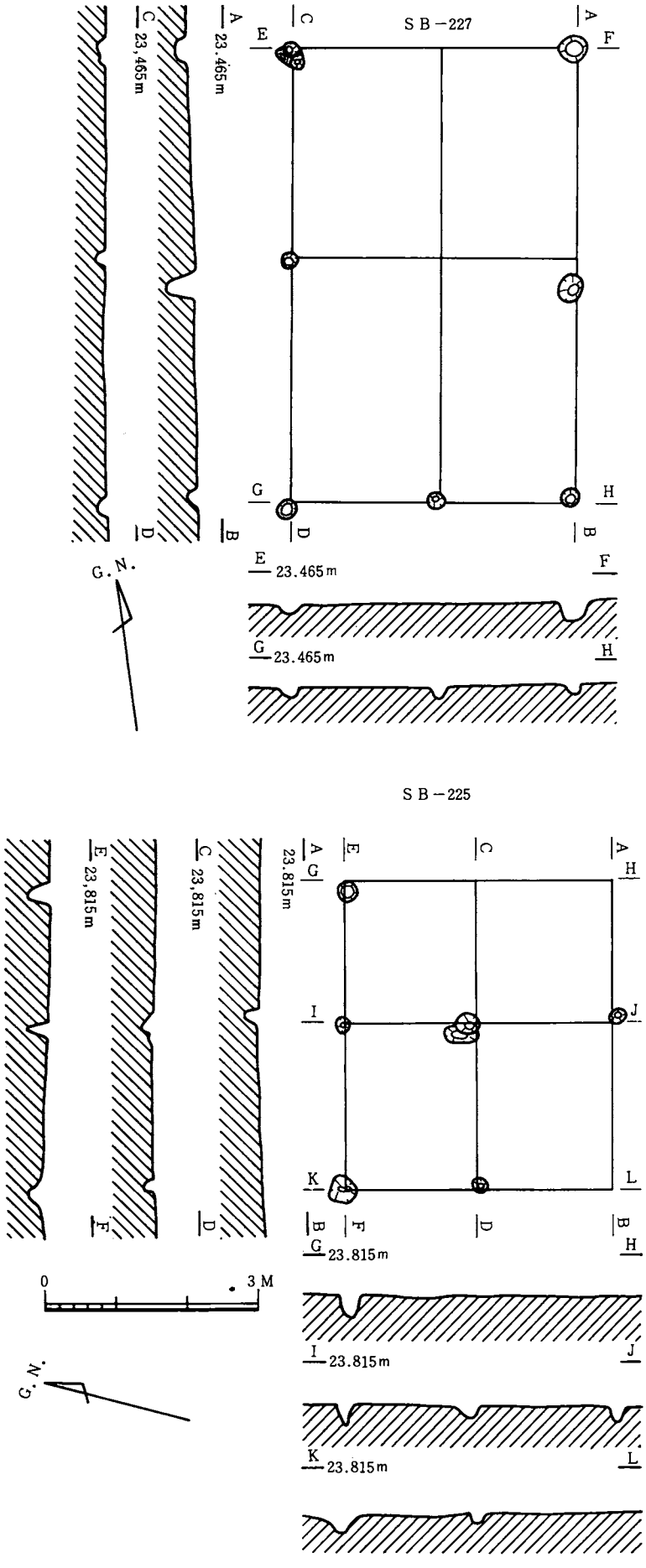




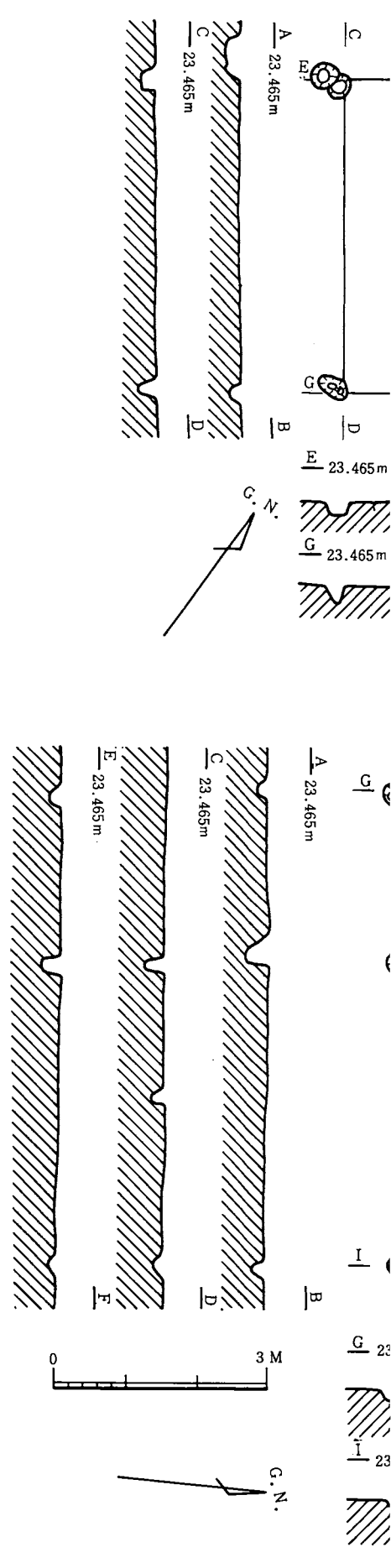
第43図　ＳＢ－220実測図



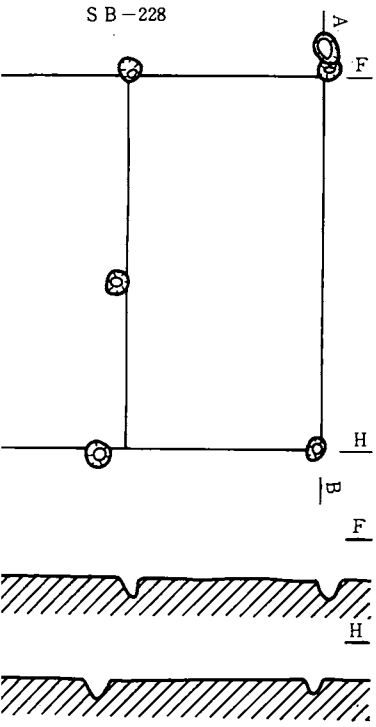
第44図　ＳＢ－224実測図

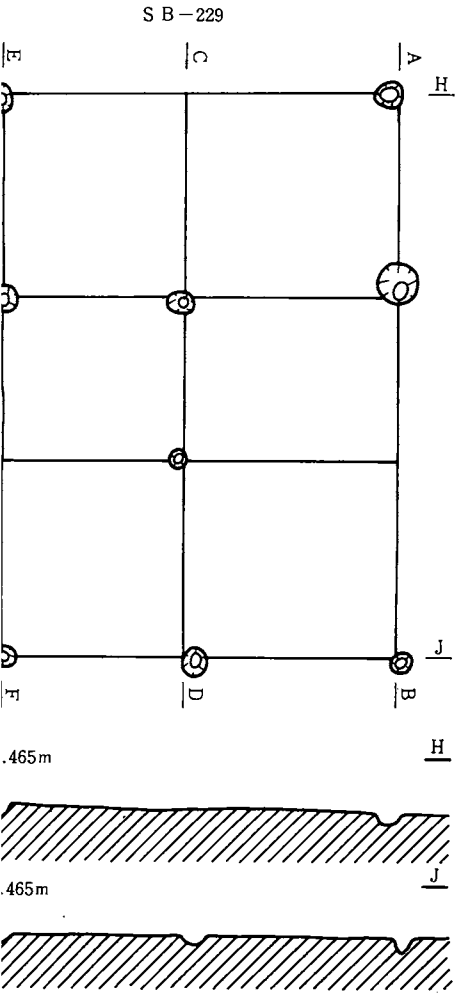


第45図　SB－225、SB－227実測図

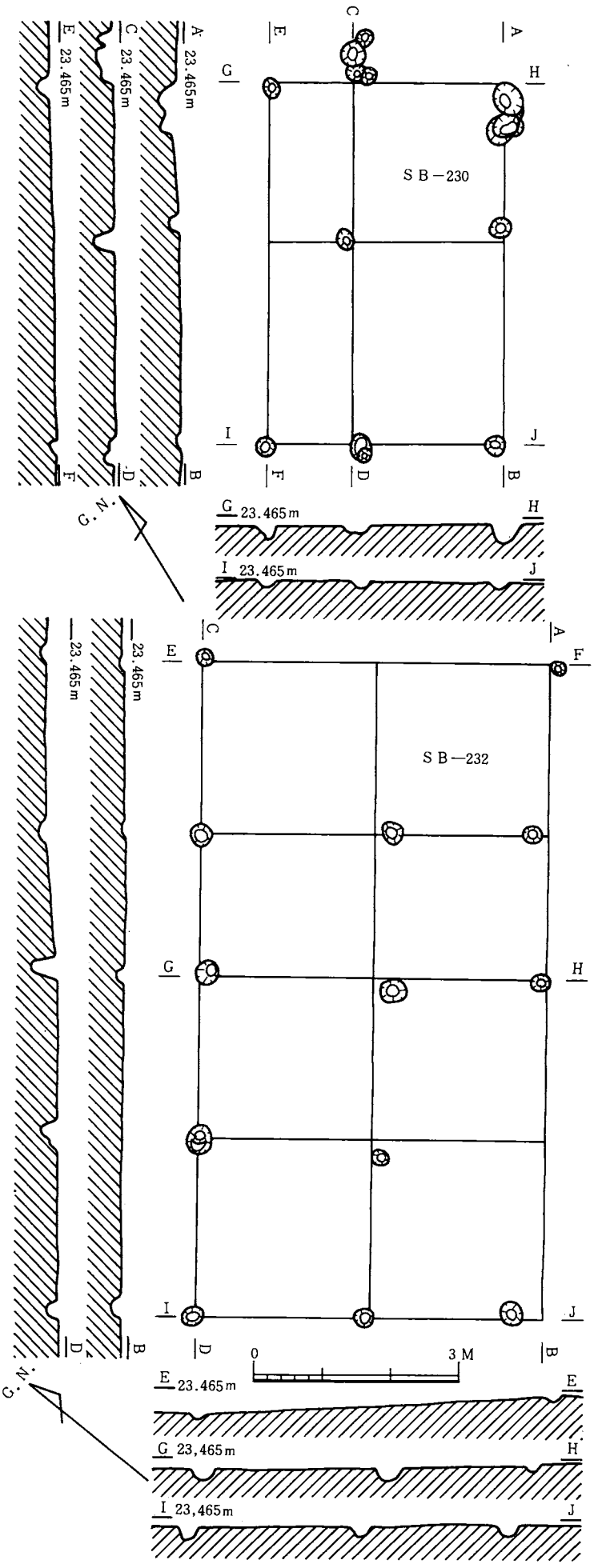


第46図　SB－2

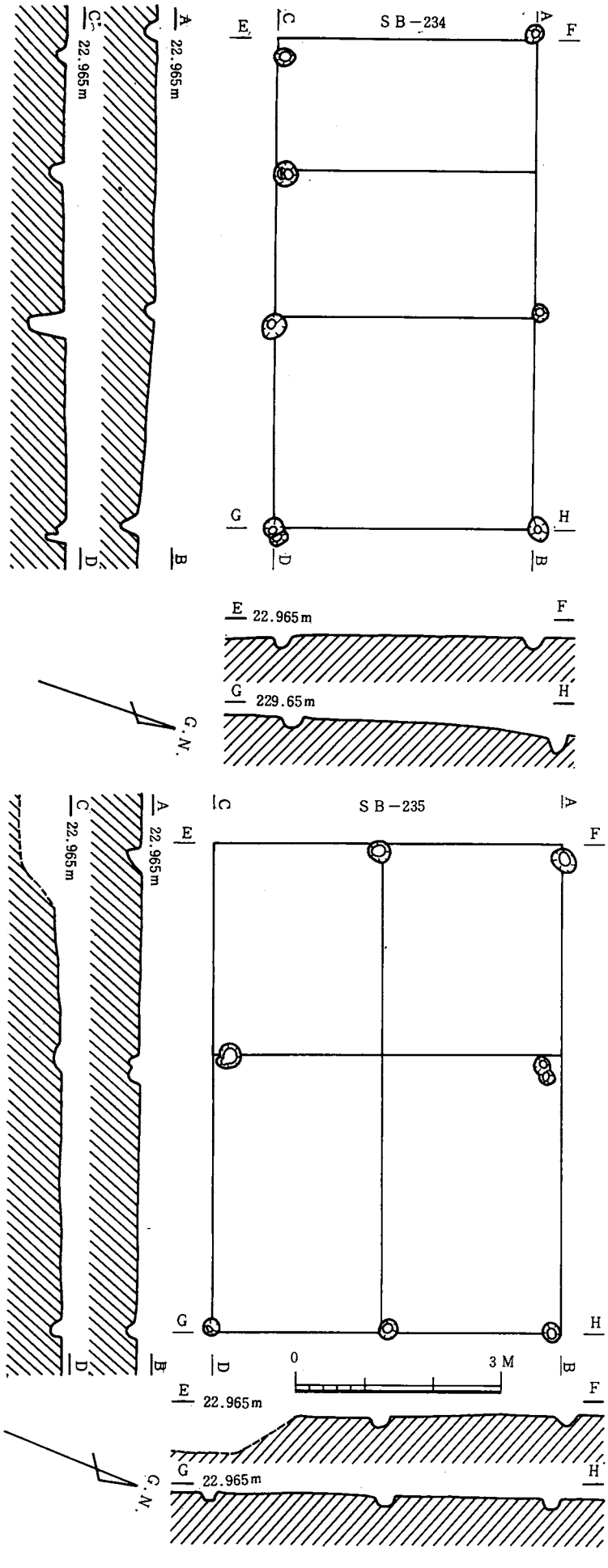




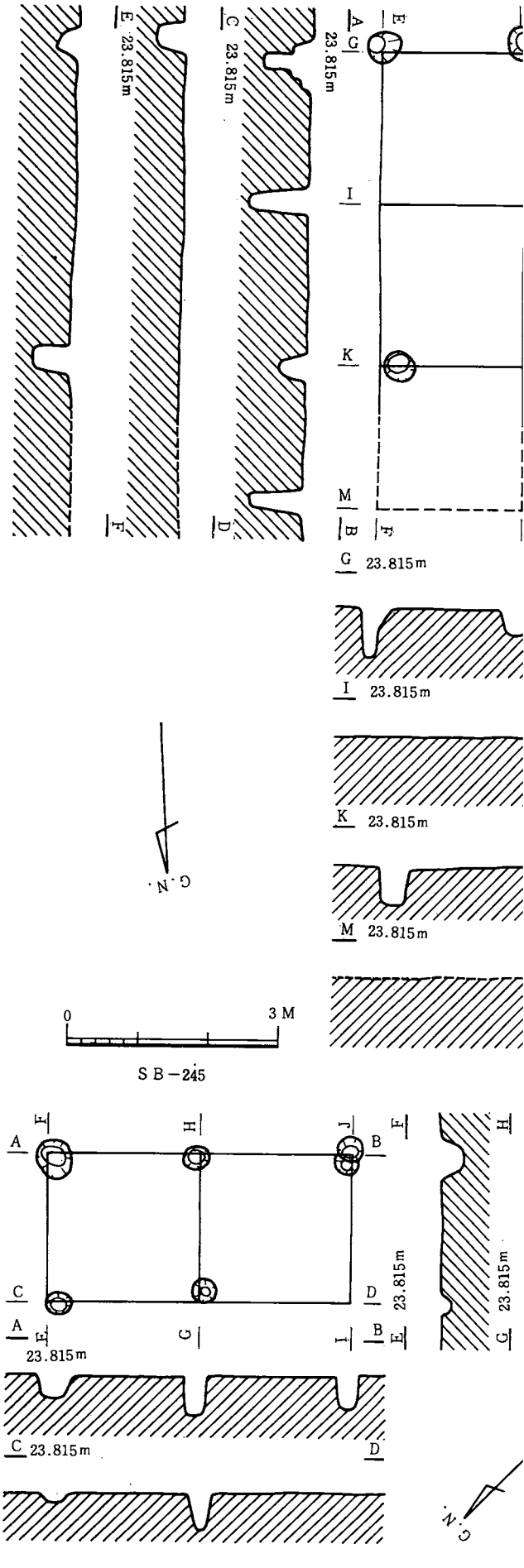
28、S B－229実測図



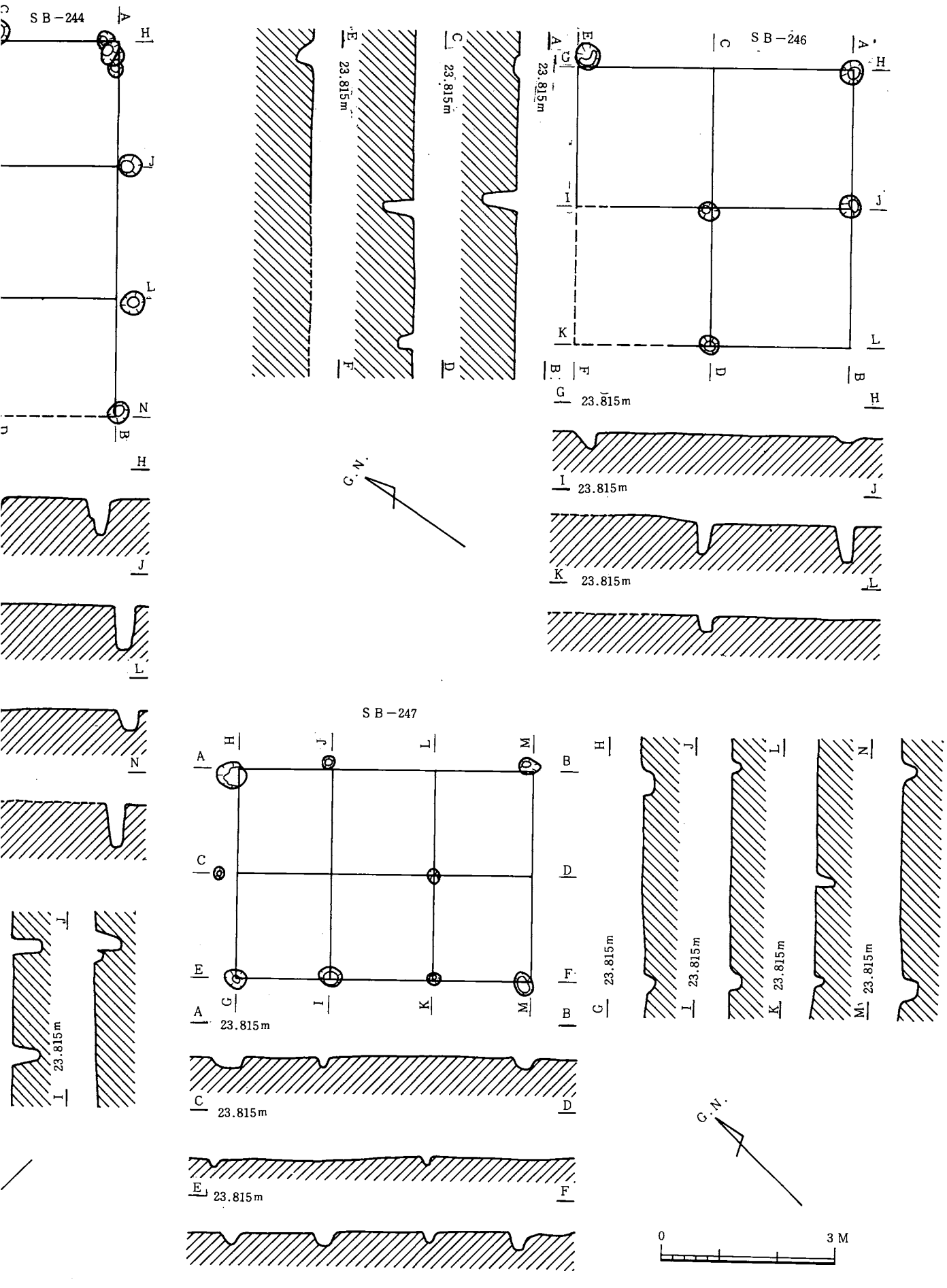
第47図　S B－230、S B－232実測図



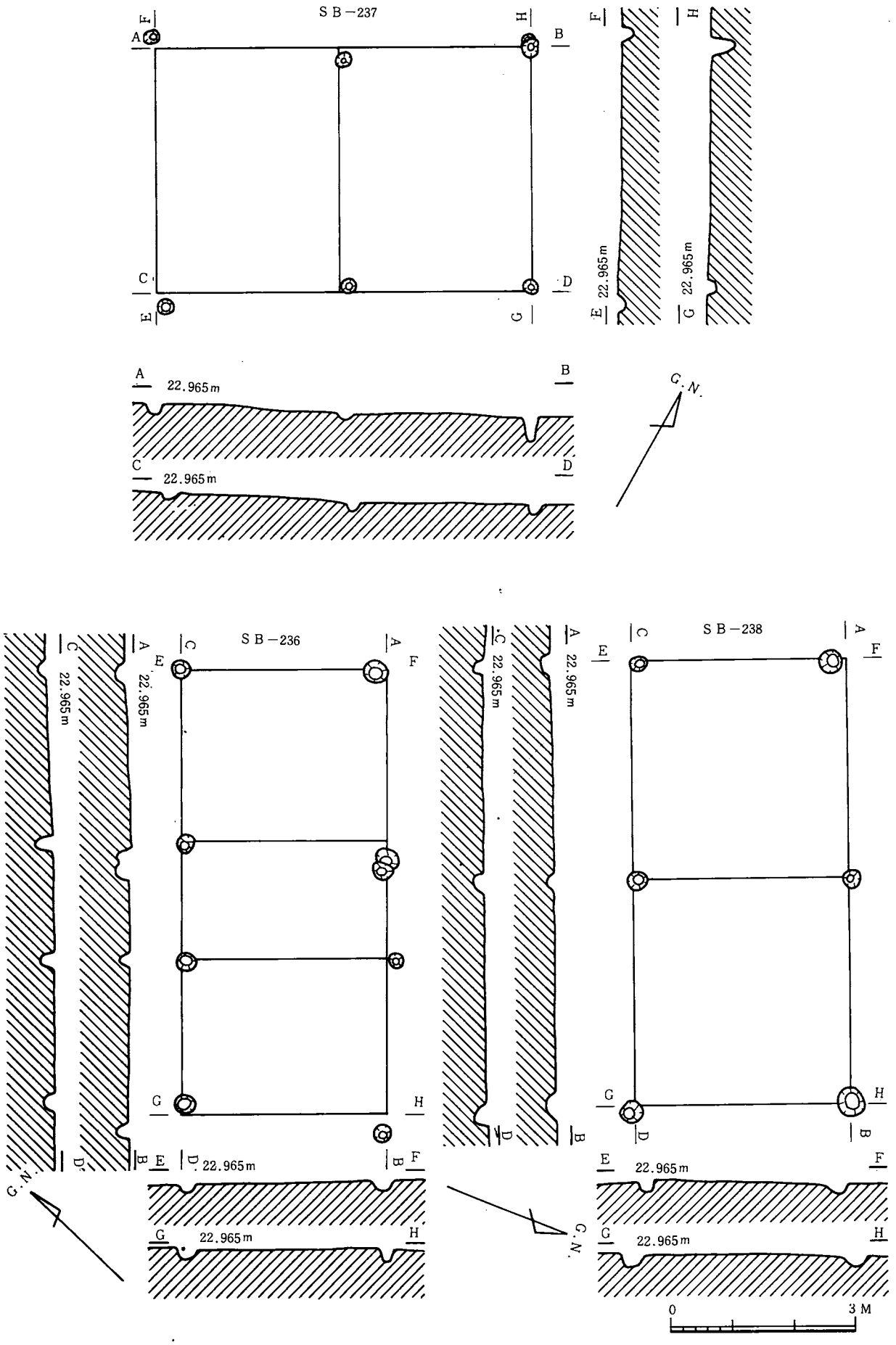
第48図　SB－234、SB－235実測図



第50図　SB－244 SB－245実測図



第51図　SB－246、SB－247実測図

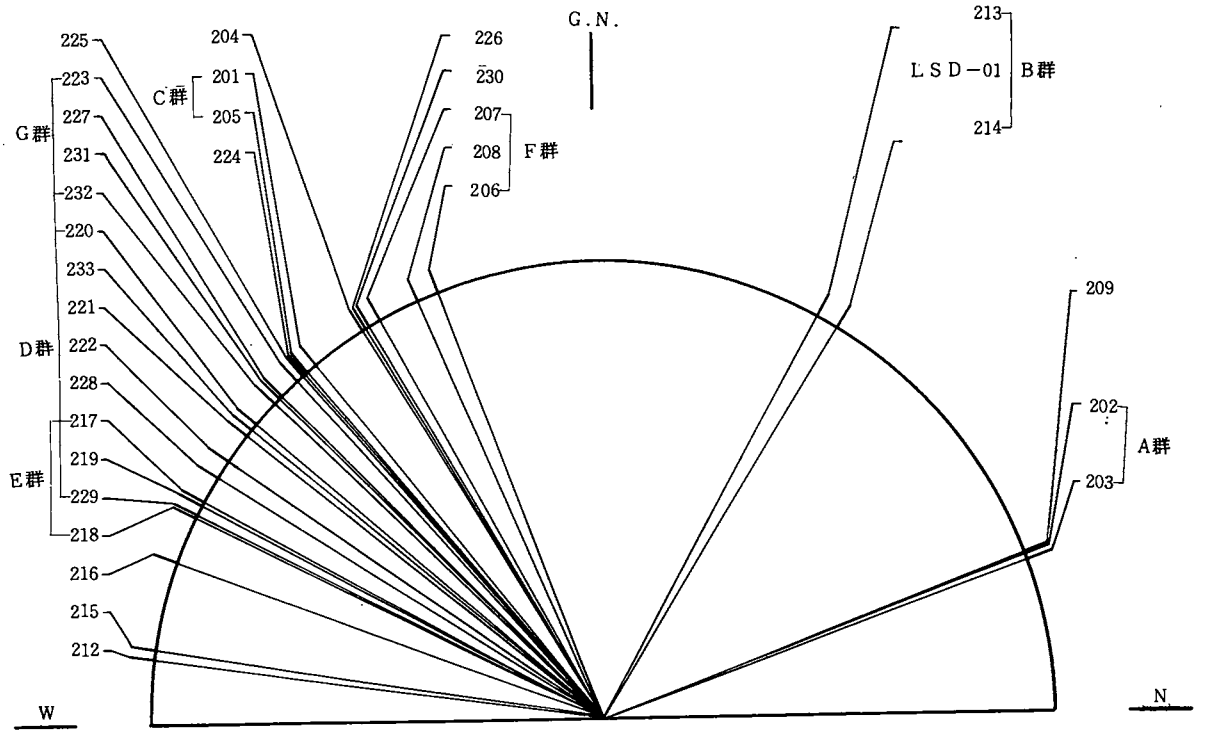


第49図　ＳＢ－236、ＳＢ－237、ＳＢ－238実測図

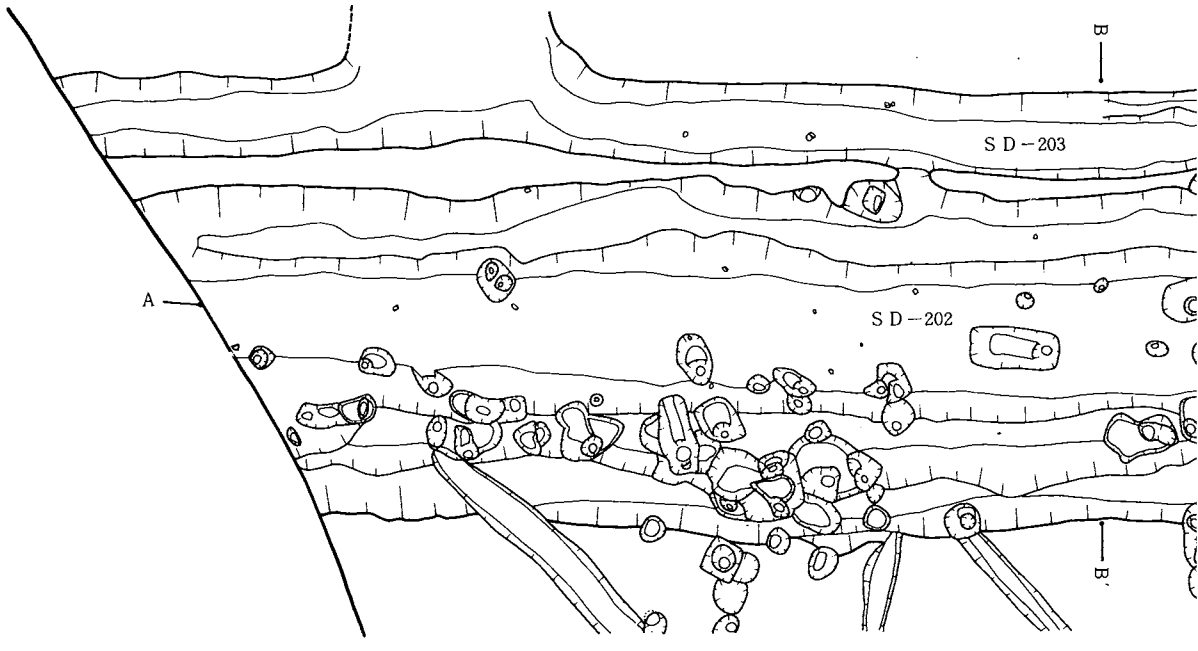
P—008（鉢）、　P—016（甕）、　P—019（甕）、　P—034（壺）、　C—017（埦）、　H—001(蓋）、H—006（埦）、　H—012（坏）、　H—016（坏）、　H—028（坏）、　H—029（坏）等である。これらについては遺物の項目で詳細に解説しているが、各種別にやや時期差が見出される。P—019に代表される甕類は須恵器の流れを汲む所謂中世陶器類で凡そ、13世紀の前半時期のものと思われる。又、H—012の坏では13世紀後半であると考えられ、溝内古銭出土ピットに於て古銭と伴出したH—011（坏）とは、法量も類似し型式上の分類では同型式となり、時期差を捉えることは出来ない。さらにSF—208直上出土のH—010（坏）とは、H—010が器形は小型となるが、口縁部の整形等では他のものと酷似していて型式差は殆んど考えられない。また、H—034の糸切り皿では、やや中型であり、法量等からは13～14世紀相当であると考えられるが、明瞭ではない。その他にも青磁や中国産と思われる壺（P—034）等も出土しているが、これらは時代が判明しない。この様に、土器の種別により時期幅があるが、熊本では時期が比較的明瞭であるP—019の甕及びH—012の坏の時代により、この溝の時期を13世紀後半と考えたい。又、前述の古銭出土ピットも土器型式からは同時期に考え、SF—208の時代もほぼ土器型式の1型式内に収まる可能性が強く、時期を同じくしている事が推定される。尚時代小区分はⅢ—1期に属すると考えられる。

SD—203（第53図）

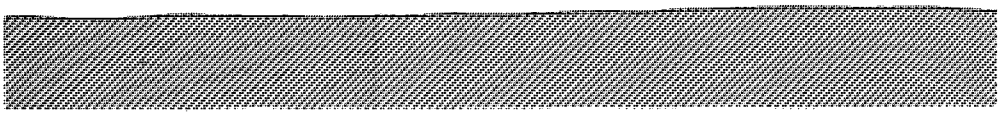
この溝遺構は全Ⅱ区の35·36—I ～K区に位置している。流向はG.N.—71°00′—Eを計る。別図の流向方位図ではSD—202と共にA群に含まれる。残存長は18.3m、最大幅1.8mを測る。遺構は浅く、最大でも38cmである。断面の層序は3層に分かれ、単純な堆積である。遺物は第3層から中世陶器が多く出土しており、前述のSD—202と時期的には接近するが、202の方がやや先行するものと考えられる。時代小区分では、202に相対してⅢ—2期を想定している。

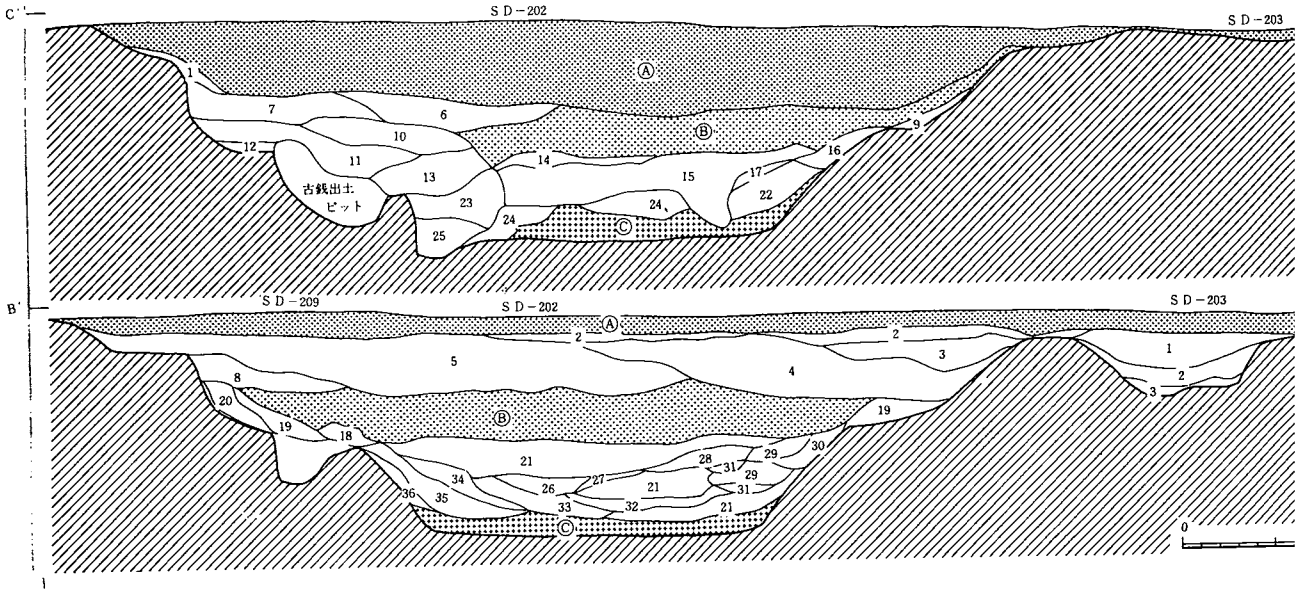


第53図　溝遺構（SD）流向方位図

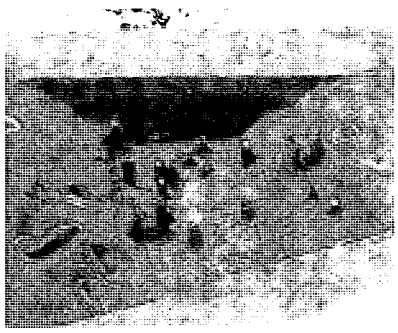


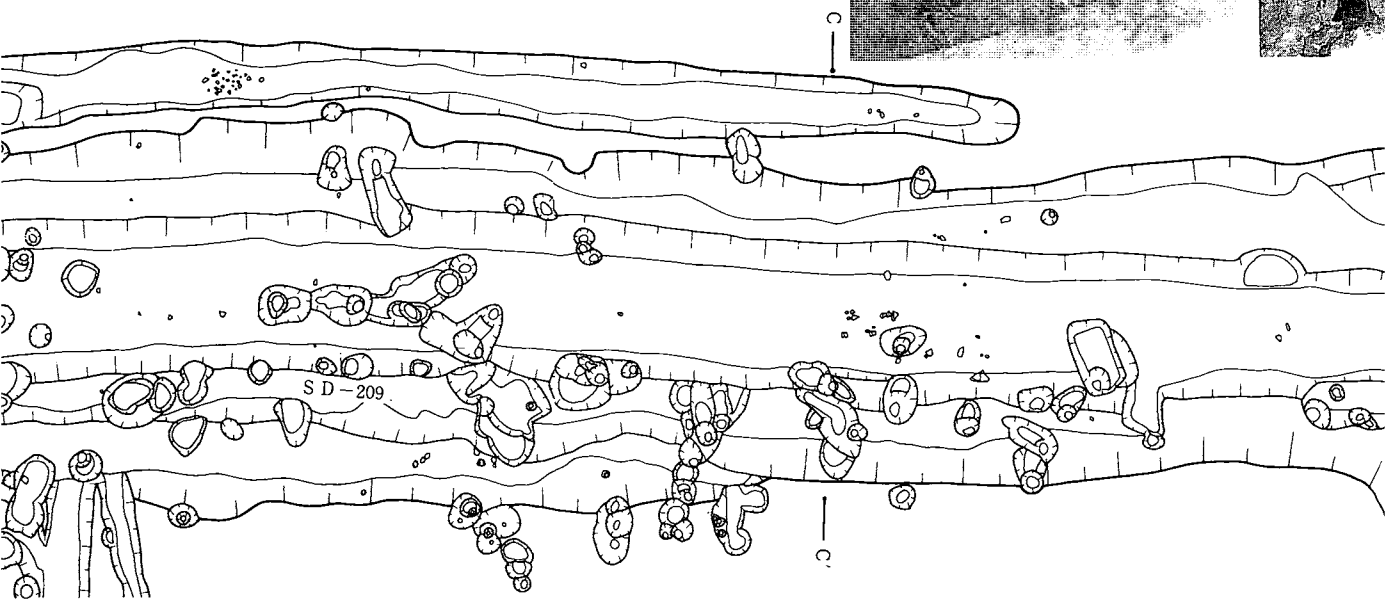
A — 23.315m

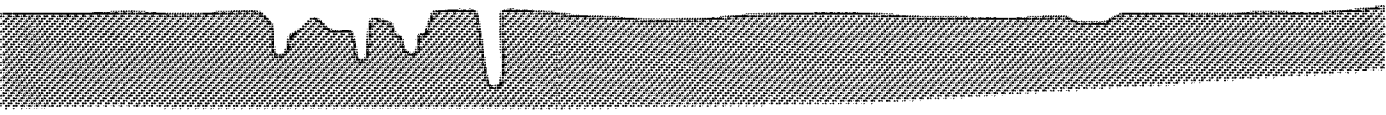




34.35－H区
土層断面





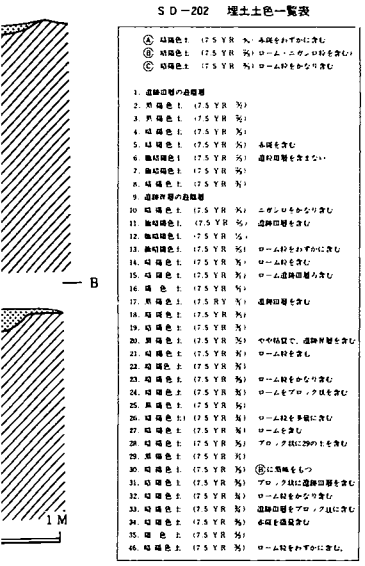


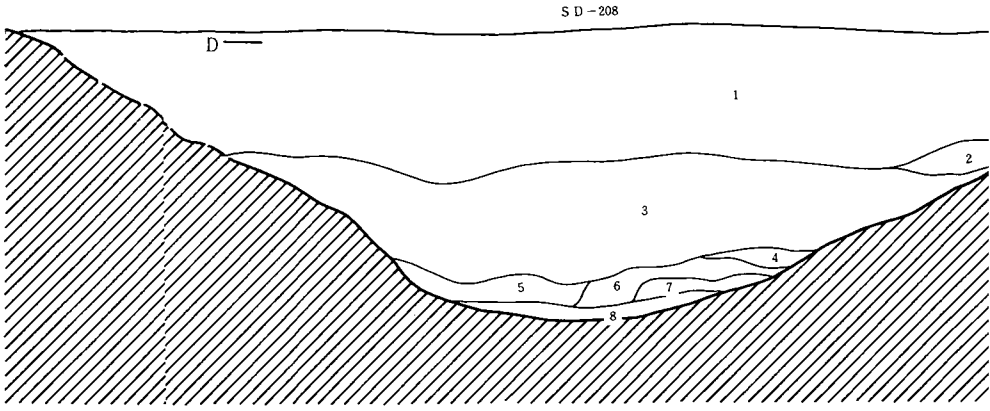
SD－203　埋土土色一覧表

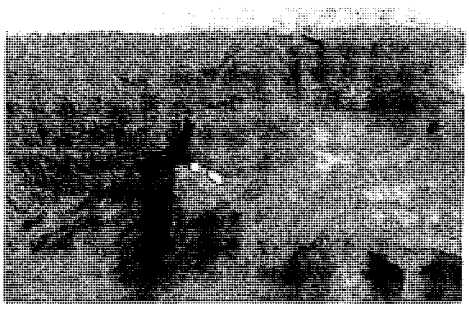
1.	黒褐色土	(7.5 YR 3/2)	本図をわずかに含む
2.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	黒色土を層状に含む
3.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	遺跡印象をブロック状に含む

SD－202　埋土土色一覧表

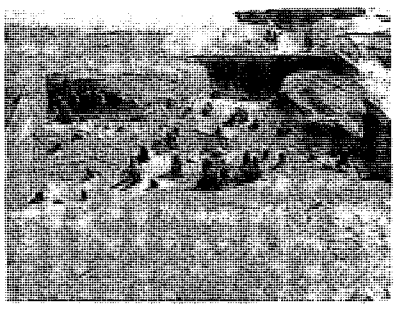
Ⓐ	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	本図をわずかに含む
Ⓑ	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム・ニガシロ粒を含む
Ⓒ	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム粒をかなり含む
1.	遺跡印象の盗掘層		
2.	黒褐色土	(7.5 YR 3/2)	
3.	黒褐色土	(7.5 YR 3/2)	
4.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	
5.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	本図を含む
6.	黒暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	遺跡印象を含まない
7.	黒暗褐色土	(7.5 YR 3/2)	
8.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	
9.	遺跡印象の盗掘層		
10.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ニガシロをかなり含む
11.	黒暗褐色土	(7.5 YR 3/2)	遺跡印象を含む
12.	黒暗褐色土	(7.5 YR 3/2)	
13.	黒暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム粒をわずかに含む
14.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム粒を含む
15.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム遺跡印象を含む
16.	褐色土	(7.5 YR 3/4)	
17.	黒褐色土	(7.5 RY 3/1)	遺跡印象を含む
18.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	
19.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	
20.	黒褐色土	(7.5 YR 3/3)	やや粘質で、遺跡印象を含む
21.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム粒を含む
22.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	
23.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム粒をかなり含む
24.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ロームをブロック状に含む
25.	黒褐色土	(7.5 YR 3/2)	
26.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム粒を多量に含む
27.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ロームを含む
28.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ブロック状に29の土を含む
29.	黒褐色土	(7.5 YR 3/2)	
30.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	Ⓑに類似をもつ
31.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ブロック状に遺跡印象を含む
32.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム粒をかなり含む
33.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	遺跡印象をブロック状に含む
34.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	本図を盗掘含む
35.	褐色土	(7.5 YR 3/4)	
46.	暗褐色土	(7.5 YR 3/3)	ローム粒をわずかに含む。







遺物出土状態
SD－202、208切り合い部

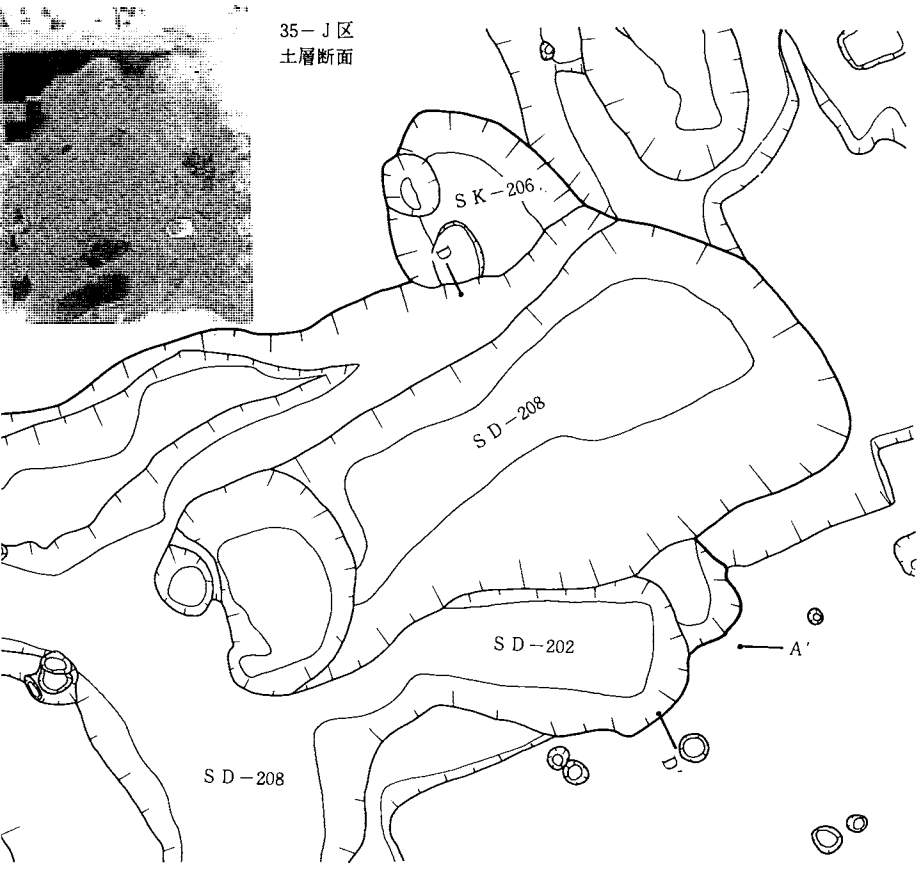


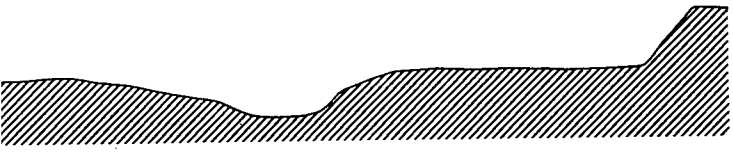
土層断面
SD－202、208切り合い部

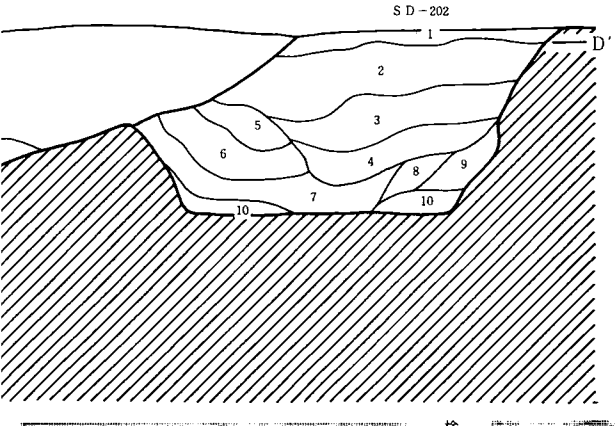
第52図　SD－202、203実測図

0

35－Ｊ区
土層断面

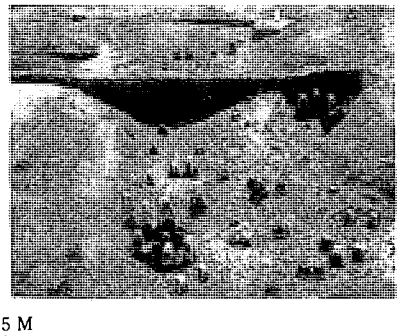






ＳＤ－208 埋土土色一覧表　ＳＤ－202 埋土土色一覧表

ＳＤ－208 埋土土色一覧表	ＳＤ－202 埋土土色一覧表
1. 現表土	1. 暗赤褐色土（7.5 YR 3/3） ローム粒わずかに含む
2. 赤褐色土（7.5 YR 3/4） ローム粒をかなり含む	2. 赤褐色土（7.5 YR 3/4） ローム粒を含む。固くしまっている。
3. 暗褐色土（7.5 YR 3/3） ローム粒わずかに含む	3. 暗色土（7.5 YR 3/3） やわらかく、ローム粒を含む
4. 暗褐色土（7.5 YR 3/3） ローム含み、粘質強し	4. 赤褐色土（7.5 YR 3/4） ローム粒を含む
5. 暗褐色土（7.5 YR 3/3）	5. 赤褐色土（7.5 YR 3/4） ローム粒、道路跡層を含む
6. 暗褐色土（7.5 YR 3/3） 黒色土を混じえる	6. 赤褐色土（7.5 YR 3/3）
7. ローム流入土	7. 赤褐色土（7.5 YR 3/3） やや明るい
8. 暗褐色土（7.5 YR 3/3） 粘質かなり強し	8. 赤褐色土（7.5 YR 3/3） ローム含み、粘質強し
	9. 赤褐色土（7.5 YR 3/3）
	10. 赤褐色土（7.5 YR 3/3）
	10. 赤褐色土（7.5 YR 3/3） ローム粒を多量に含む



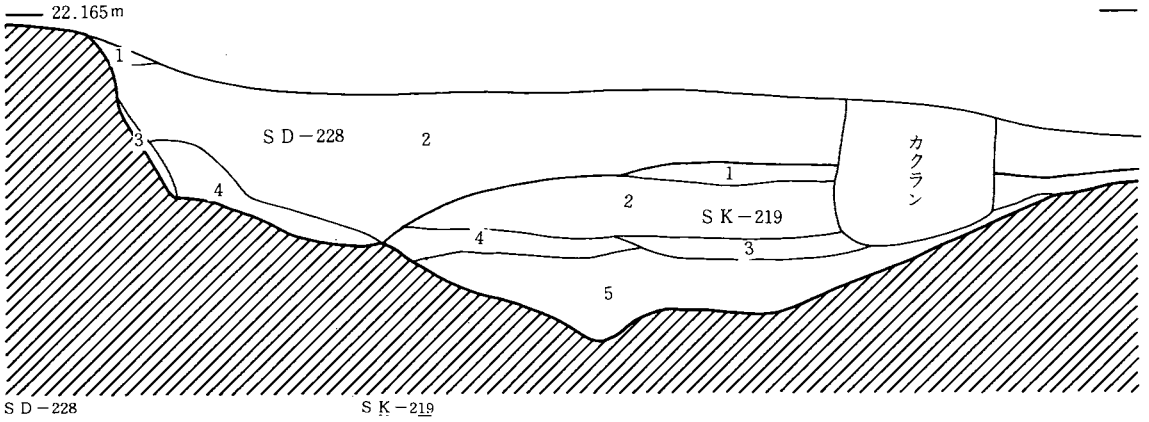
検出状況
ＳＤ－202、208切り合い部

5 M

土壙遺構

ＳＫ—219　ＳＤ—228（第54図）

ＳＫ—219は全Ⅲ区の34･35 —Ｆ区に位置している。平面形は長楕円形で、一部ＳＤ—228に切られるが、主軸は5.0m、短軸は2.4mを測る。断面の層序は５層に分かれるが、時期の判定ができるような資料は出土していない。



ＳＤ－228
1層＝褐色土（7.5ＹＲ⅔）
2層＝暗褐色土（7.5ＹＲ⅔）
赤色班を若干含む
3層＝黒褐色土（7.5ＹＲ⅔）
4層＝極暗褐色土（7.5ＹＲ⅔）

ＳＫ－219
1層＝褐色土（7.5ＹＲ⅔）
ローム粒、黒色土粒を若干含む
2層＝極暗褐色土（7.5ＹＲ⅔）
3層＝暗褐色土（7.5ＹＲ⅔）
4層＝褐色土（7.5ＹＲ⅔）
5層＝褐色土（7.5ＹＲ⅔）
ローム粒を含む

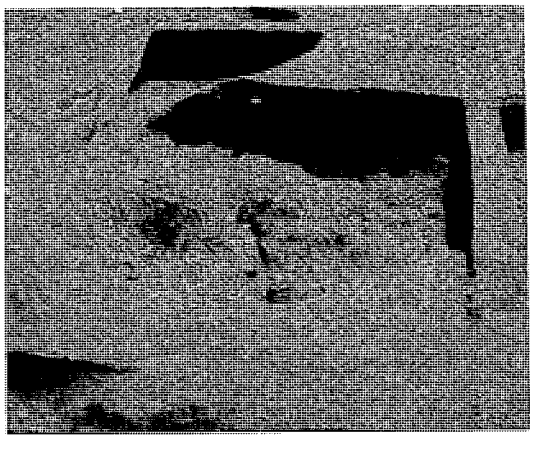
0　1M

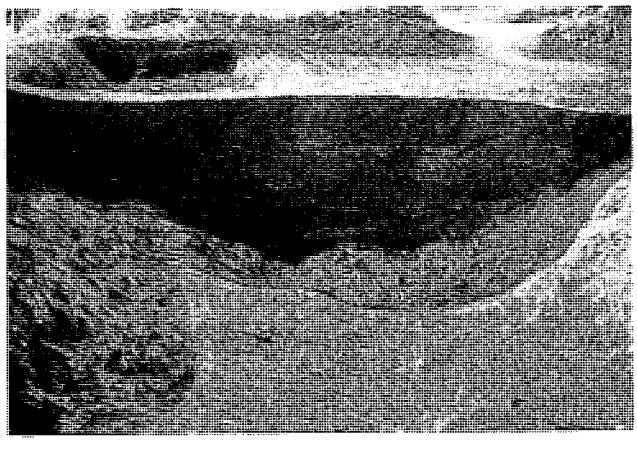
第54図　ＳＤ－228、ＳＫ－219土層断面図

ＳＤ—228は全Ⅲ区35—Ｆ区に位置している。溝の流向はG.N.—57°40′—Ｗを測る。残存長は8.28m、幅2.79mを測る。断面の層序はＳＫ—219の交差部分では４層に分かれる。第２層からはⅠ（石鍋）、Ｐ—008（鉢）、Ｂ—６（銅銭）等が出土している。銅銭は、「天禧通寶」でその初鋳年は西暦1017～21年となる。

この時期に近似した他の銅銭がＳＤ—202内のピット内から一括して出土しており、この溝の時期とほぼ同時期と考えられる。

又ＳＫ—219はＳＤ—228に切られているので、時期的にはＳＫ—219が古いものと考えられる。実年代で表わせば、ＳＤ—228はＳＤ—202と時期差のない13世紀後半と考えられ、ＳＫ—219のみがやや先行したものと思われる。

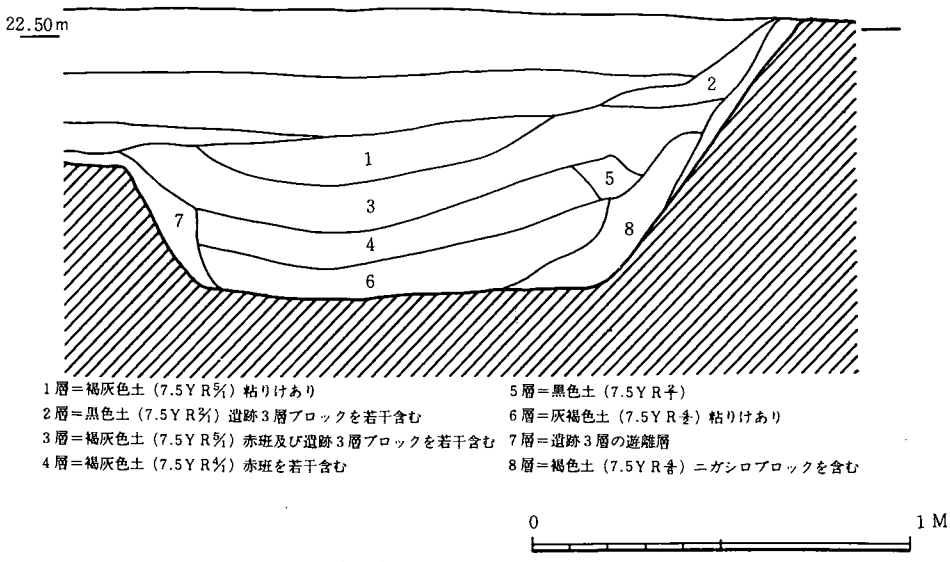




本文写真３　ＳＤ－228・ＳＫ－219

ＳＫ—202（第55図）

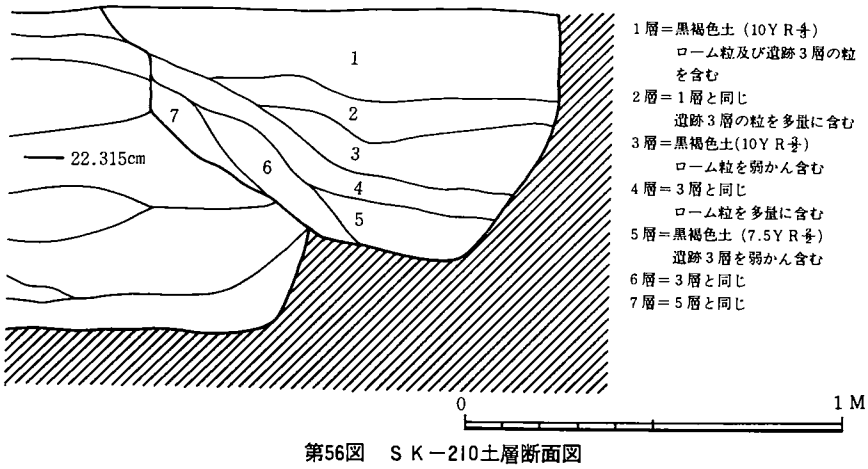
この土壙は全Ⅱ区の32･33—Ｇ･Ｈ区に位置している。平面形は一部ＳＤ—202に切断されている為不完全であるが、長軸4.8m、短軸1.7mの長楕円形を呈している。断面の層序は８層に分かれるが、時期を決定する様



第55図　ＳＫ－202土層断面図

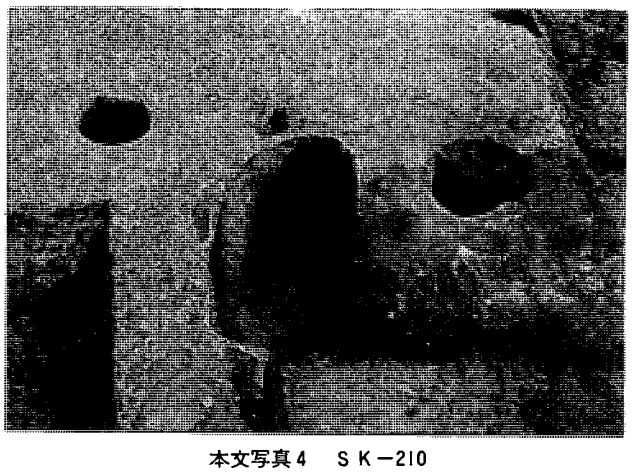
な資料はどの層からも出土していない。わずかに第３・第４層から糸切り土師皿の破片が出土している事、及び近世の遺構であるＳＤ—208に切られている事から、この遺構はⅢ－３期の時代に属するものと考えられる。

ＳＫ—210（第56図）



第56図　ＳＫ－210土層断面図

この土壙は全Ⅱ区の34—Ｉ・Ｊ区に位置する。ほぼ長楕円形を呈し、その規模は170cm×85cmを測る。この土壙はＲＳＤ—01に掘り込む形状をなし、ＲＳＤ—01が殆んど埋没した状況で掘り込まれている。その埋土中の第３層よりＨ—054の糸切りの土師皿が出土している。完形ではないので詳細な時期区分ができないが、13世紀以降と考えられる。又同様の性格の土壙は、ＳＤ—202内に掘り込まれたＳＫ—212、213が挙げられよう。これらは共にほぼ同規模の規格・



本文写真４　ＳＫ－210

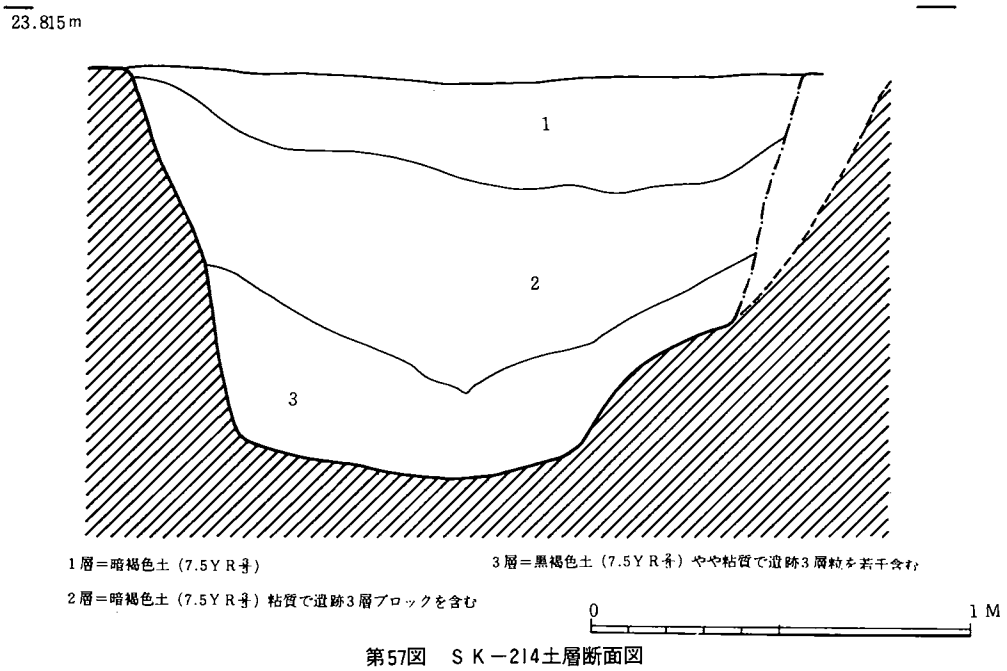
形状を有し、酷似している。

出土遺物は土師片のみで時期の決定は困難であるが、ＳＤ—202より下ることはなく、ＳＫ— 210と同時期であろう。尚時期小区分はⅢ—１期である。

ＳＫ—214（第57図）

この土壙は全Ⅱ区の28･29—Ⅰ 区に位置している。調査は区域の関係上½であるので、平面形はほぼ円形、もしくは楕円形をなすものと思われる。規模は径で2.3ｍを測る。断面の層序は単純明瞭で３層の埋土である。

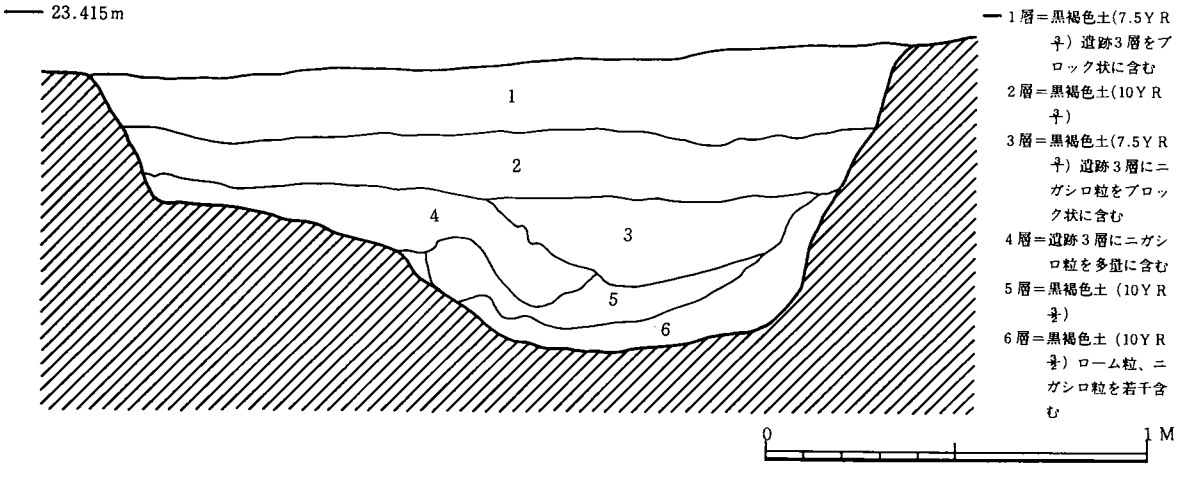
埋土の第１層からはＰ—055が、第３層からはＰ—007（鉢）が出土している。その出土遺物より鎌倉時代が想定され、小区分はⅢ—３期に属すると思われる。



第57図　ＳＫ—214土層断面図

ＳＫ—220（第58図）

この土壙は全Ⅰ区の23･24—Ｅ区に位置している。平面形は不整形をなし、長軸3.0ｍ、短軸2.5ｍを測る。ＳＤ—227と切り合うがＳＫ—220がこれに切り込まれている。断面による埋土は６層に分かれ、その第２層に

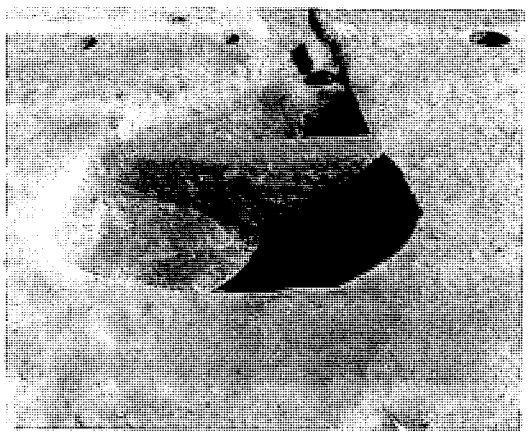


第58図　ＳＫ—220土層断面図

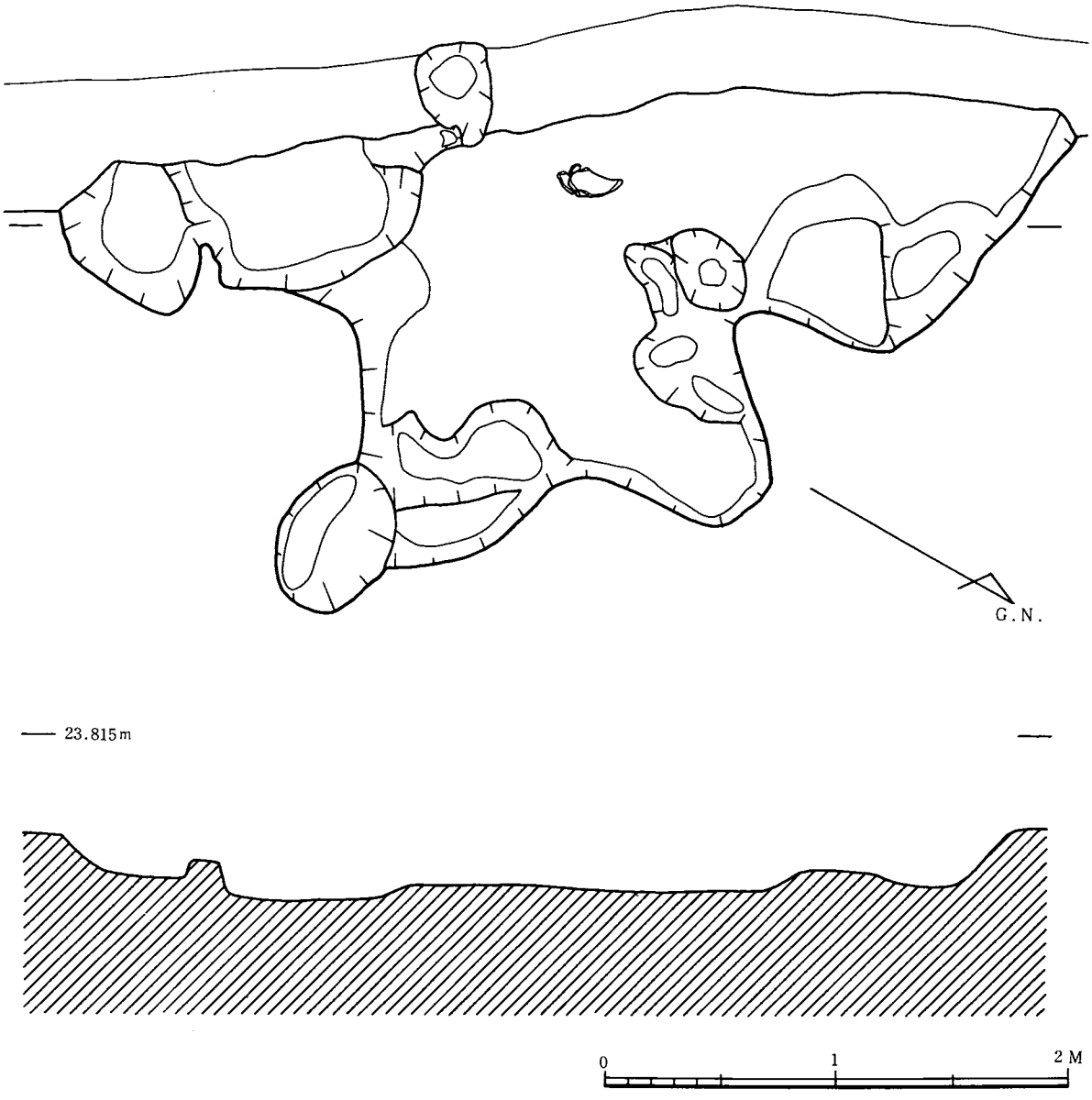
よりＨ—003（高台付坏）及びＳ—022（高台付坏）が出土している。これらは共に平安前期に位置づけられる資料である。しかし３層以下には時期決定できる資料が出土していないため、層序等の状況から見て鎌倉時代と推定される。時代小区分はⅢ—３期である。

ＳＫ—221（第59図）

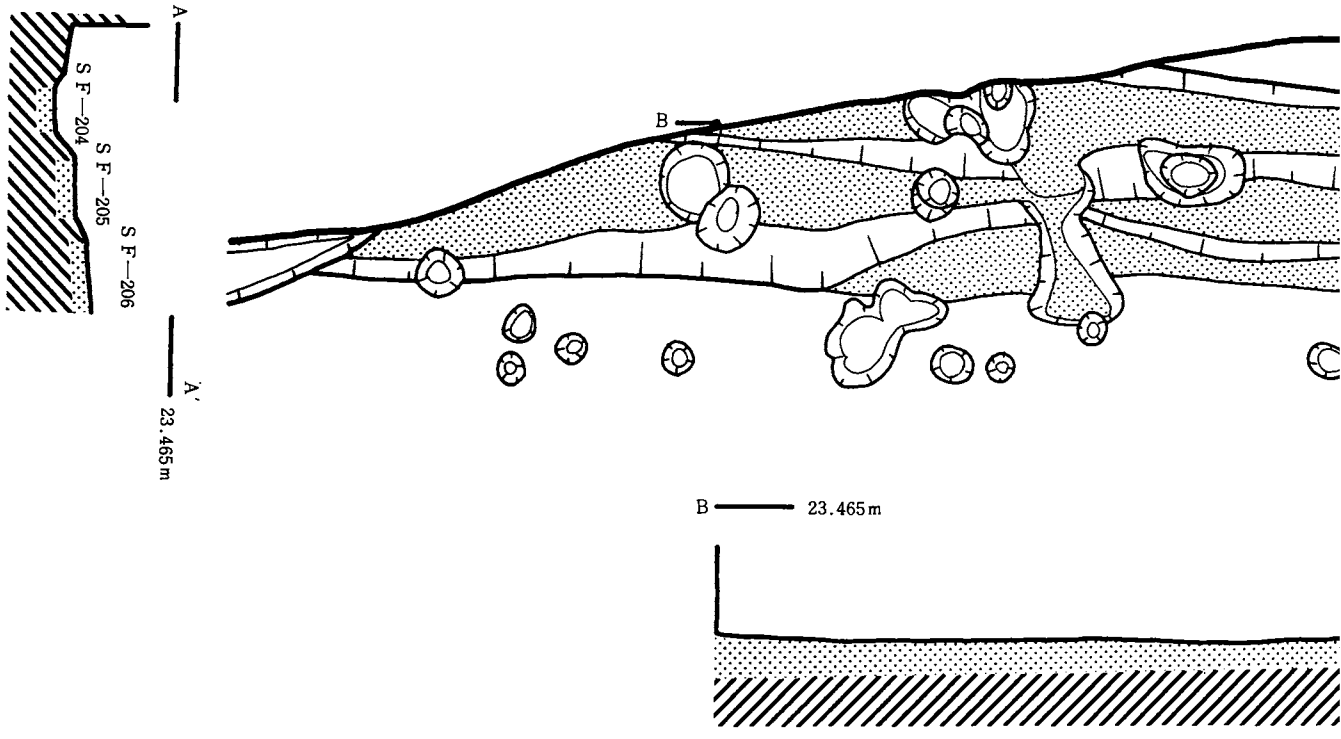
この土壙は全Ⅰ区の23—Ｆ区に位置する。平面形は不整形であり、一部ＲＳＤ—01内に落ち込んでいるため、全容は不明であるが、長軸4.4m、短軸が現存で1.5mを測る。非常に浅い皿状の窪みで、2.0cmの



本文写真５　ＳＫ—220



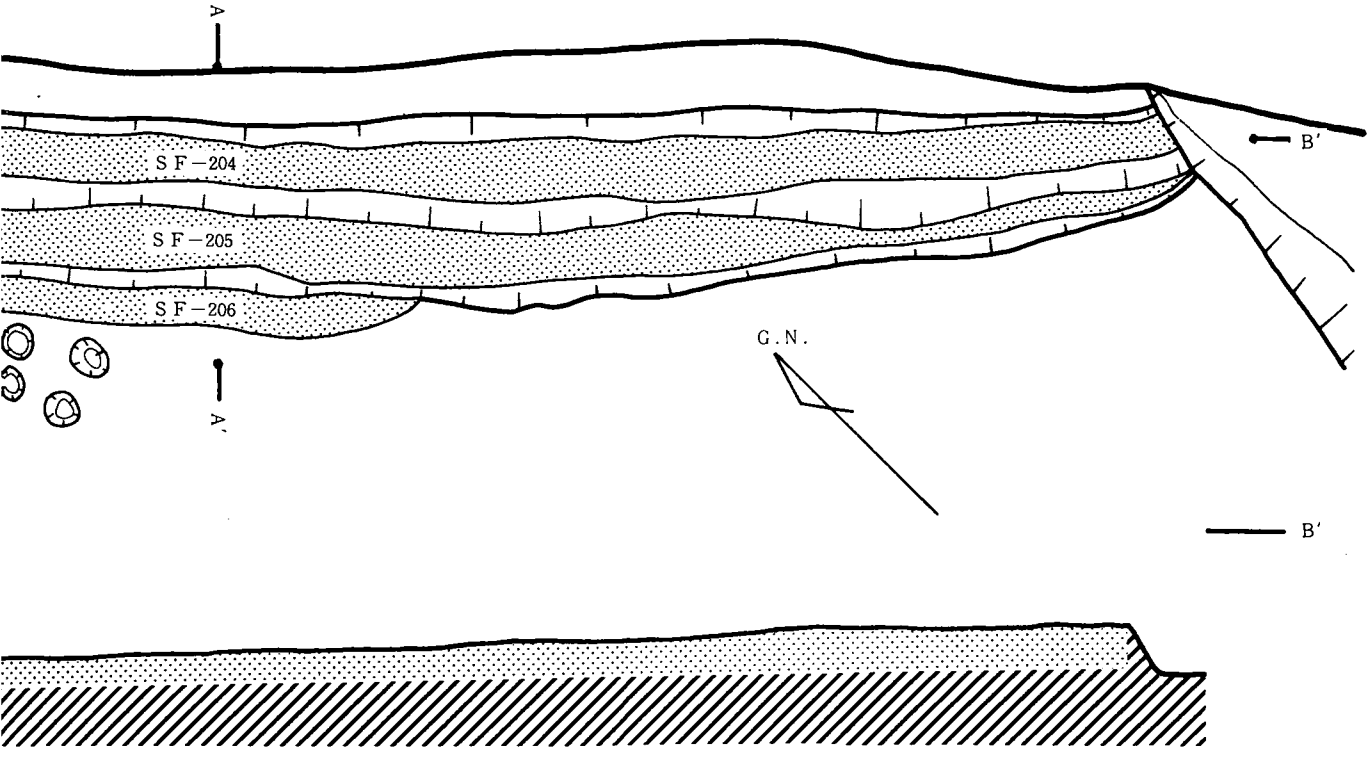
第59図　ＳＫ—221実測図



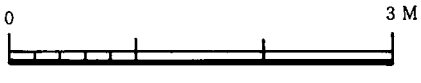
第60図　ＳＦ—204、

遺構番号	規　模 長さ(m)×幅(cm)	主要出土遺物	時　代 小区分	所　在 地　区	備　　考
ＳＦ-202	8.19m(＋α) × 78.0cm	—	Ⅰ～ Ⅱ—1	22 — D	ＲＳＤ—01の陸橋部を通過したこん跡あり。さらに陸橋部にはＳＦ—201の直下に、二層の硬化面が確認された。
ＳＦ-202	67.56m(＋α) × 39.0cm	—	Ⅲ期以降	29・30 31・32 33・34 35 — H.I.J.	ＲＳＤ—01の両側にまたがる為にこの溝が埋没した以降のものと考えられる。 なお、ＳＤ217と同方向の走りであるので、ほぼ同時期と考えられる。
ＳＦ-203	2.54m(＋α) × 25.0cm	青磁片	Ⅲ—3	30・31 32・33 34・35 — D.E	ＳＦ—207・208上面への道路状遺構 ＳＦ—204,205,206のいずれかの延長とも考えられる。
ＳＦ-204	13.50m(＋α) × 48cm	—	Ⅲ—3	27・28 — D	ＳＦ—205・206中で下位に位置する。

第13表　道　路　状

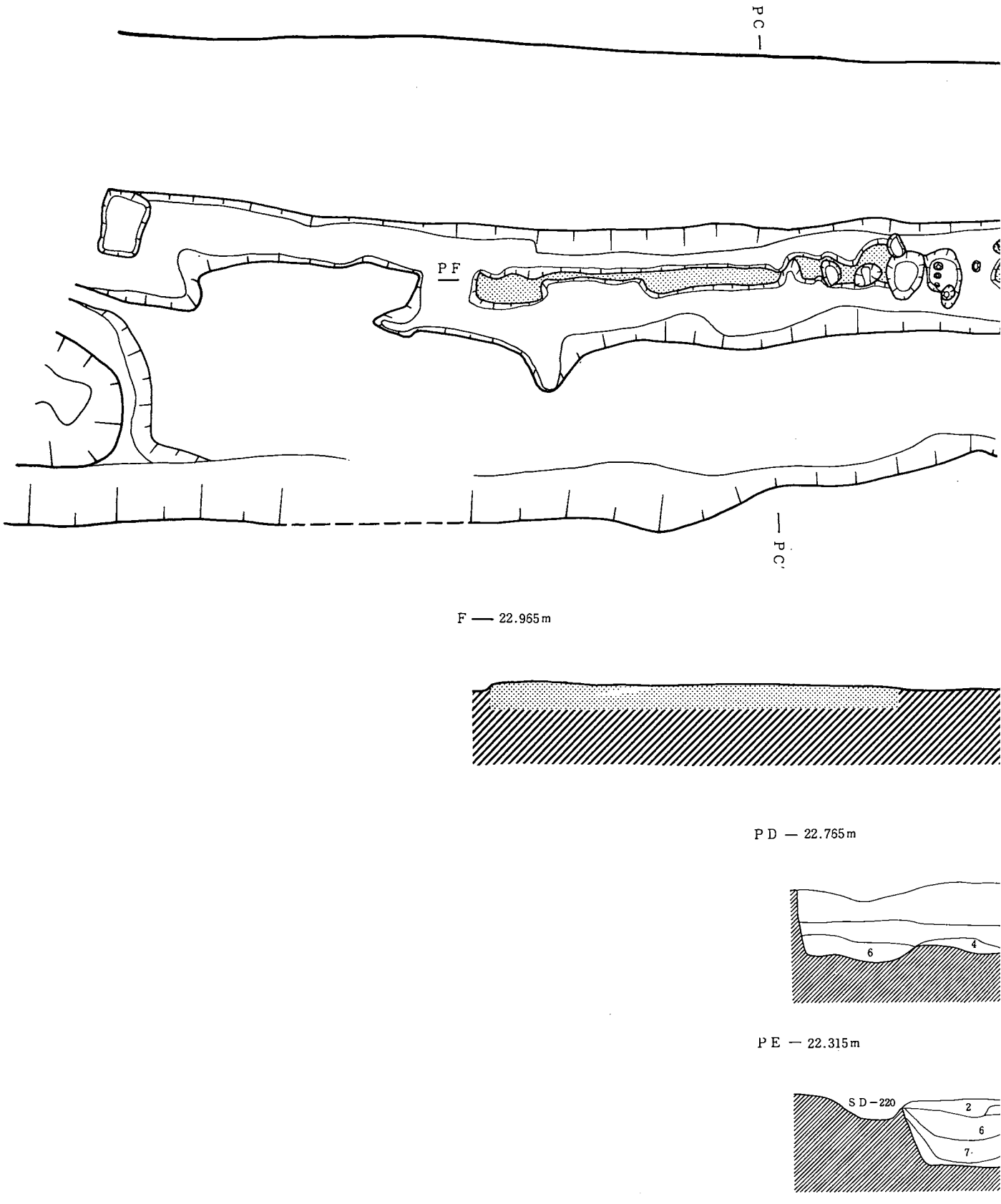


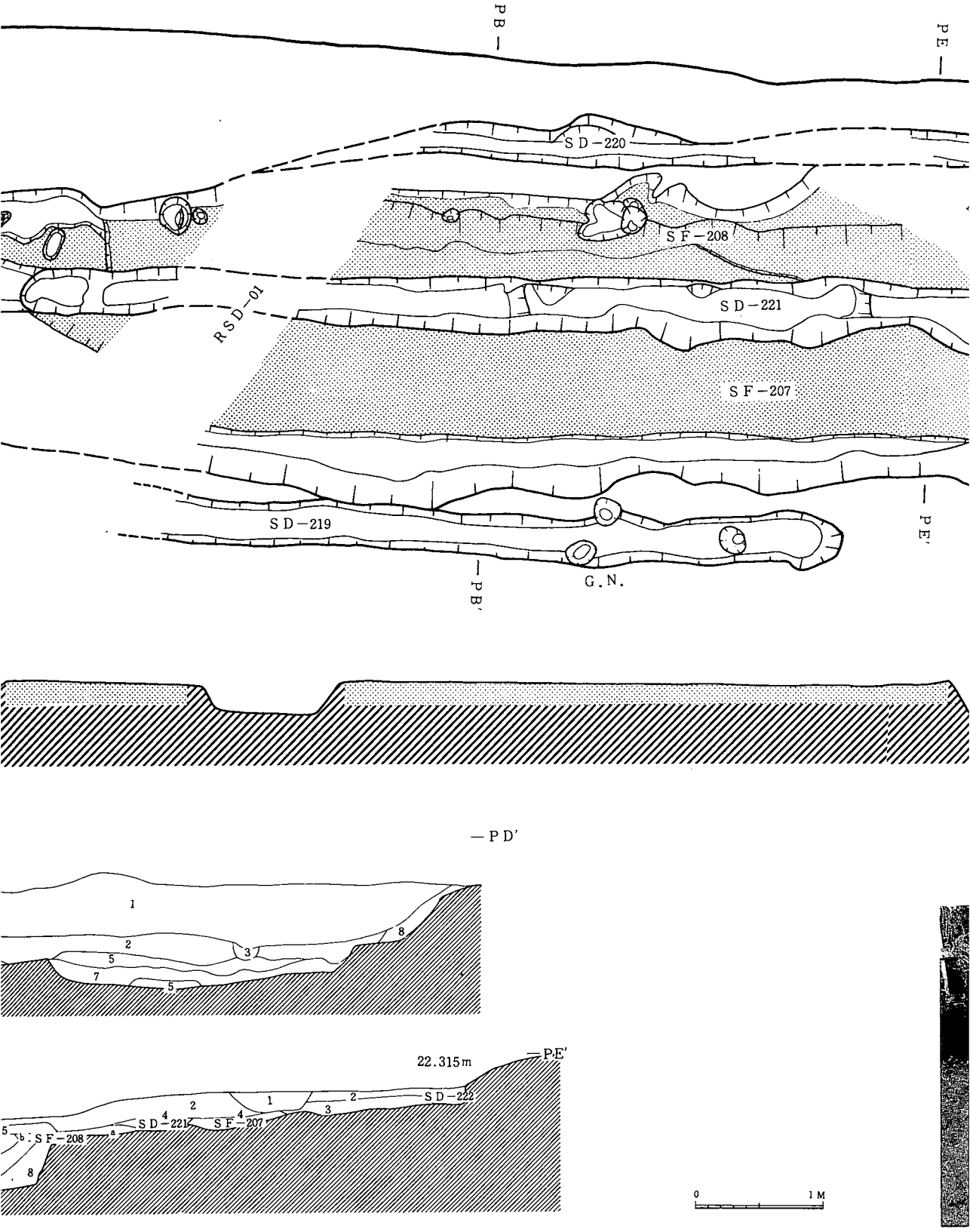
205、206実測図



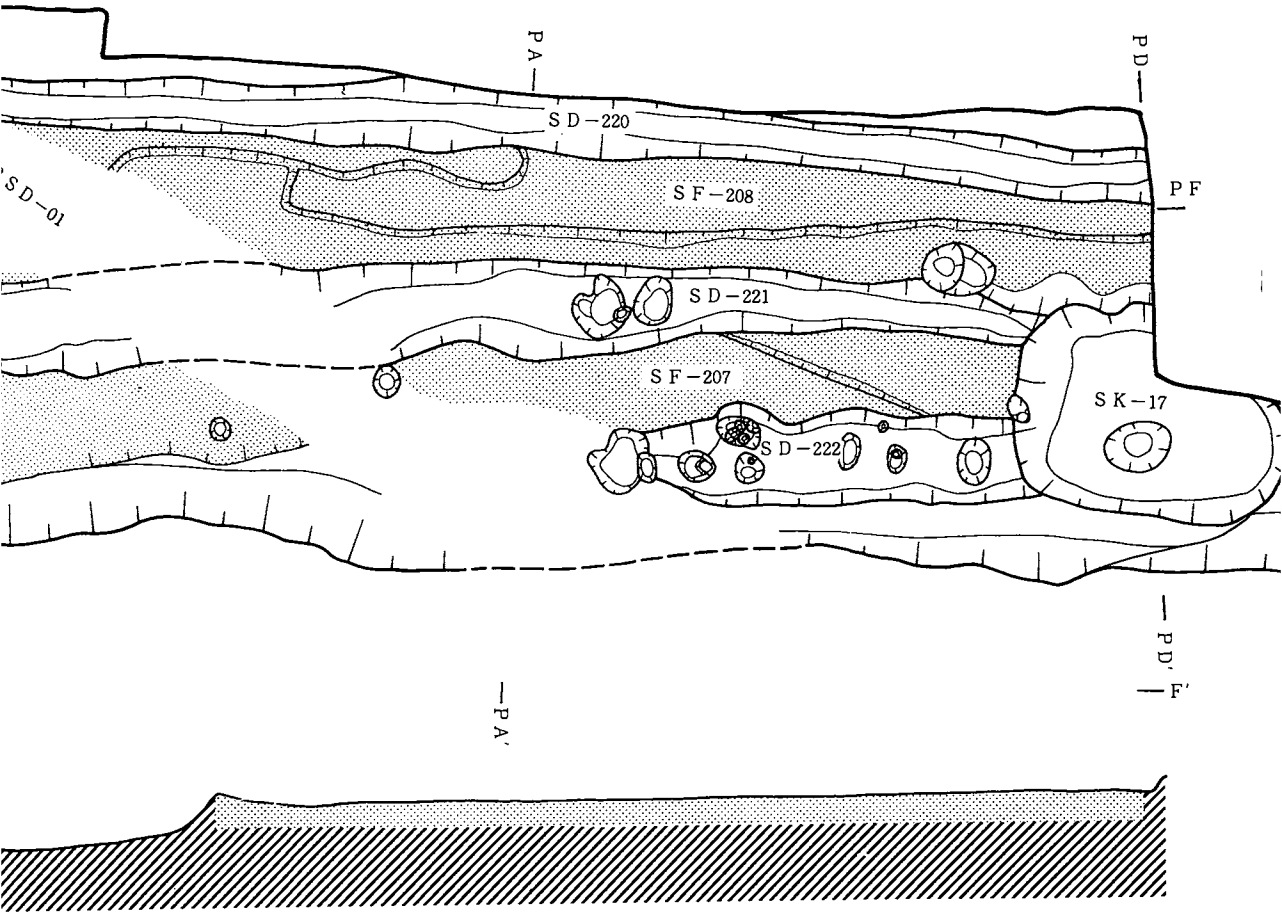
SF-205	16.89m(＋α) × 45cm	—	Ⅲ－3	27・28 29 — D	SF—204、206中で中位に位置する。
SF-206	7.47m(＋α) × 27cm	—	Ⅲ－3	27・28 — D	SF—204、205中で上位に位置する
SF-207	34.86m(＋α) × 166.0cm	P—051(壺) P—052(壺)	Ⅲ－2	30・31 32・33 34 — D.E	SF—208 に比べて新しい。SD—220、222が道路状遺構の両側方を区切る。
SF-208	33.74m(＋α) × 150cm	C—023 (埦) H—010 (坏) H—073 (内黒土器) 覆土中	Ⅲ－1	30・31 32・33 34 — D.E	SD—221 が道路状遺構の片側を区切り、他方は調査区外へとでる。

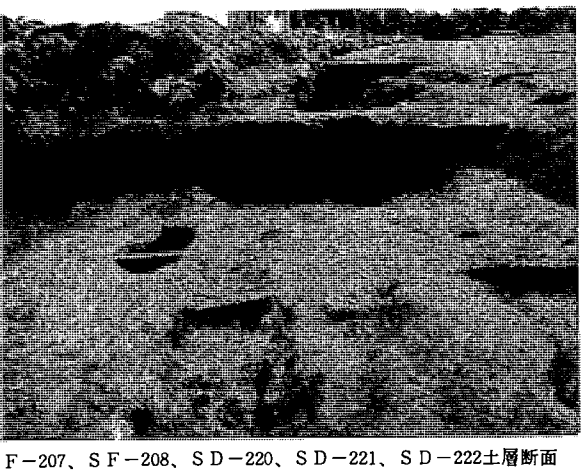
遺 構(SF)一 覧 表


PC
PF
PC'
F — 22.965m
PD — 22.765m
6
4
PE — 22.315m
SD-220
2
6
7


PB
PE
SD－220
SF－208
SD－221
RSD－01
SF－207
SD－219
PB'
G.N.
PE'
PD'
22.315m
PE'
SD－222
SD－221
SF－207
SF－208
0
1M

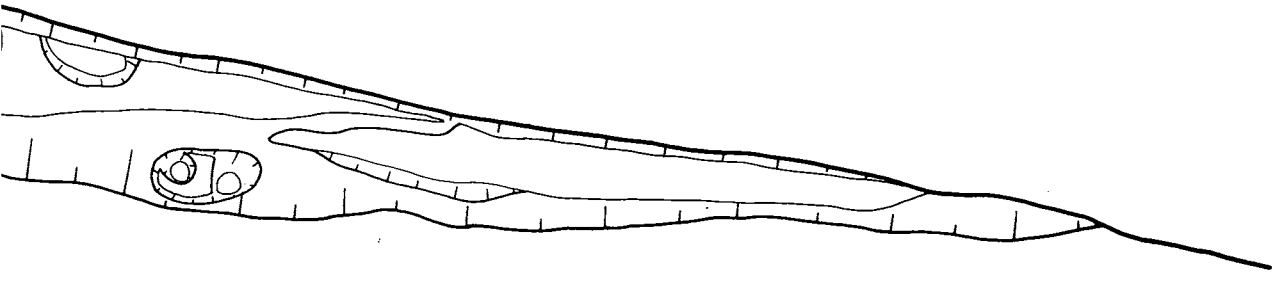
第61図　ＳＦ－207、

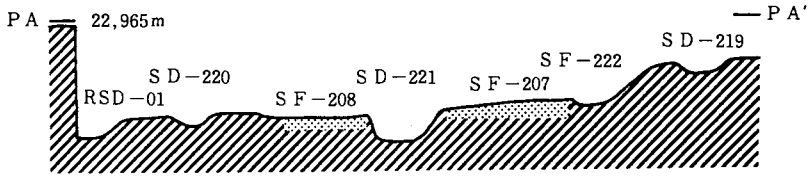


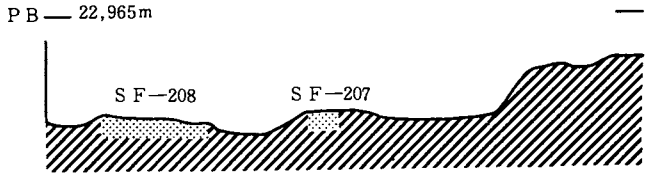


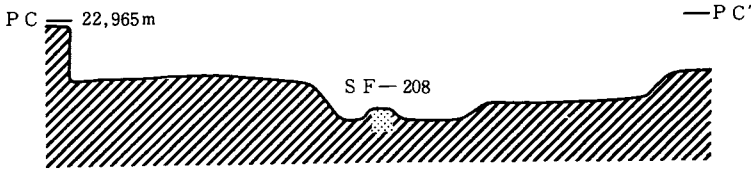
F－207、SF－208、SD－220、SD－221、SD－222土層断面

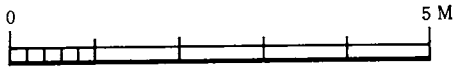
SF－208、SD－219、SD－220、SD－221、SD－222実測図




PA
22,965m
PA'
SD−219
SF−222
SD−220
SD−221
SF−207
RSD−01
SF−208


PB
22,965m
PB'
SF−208
SF−207


PC
22,965m
PC'
SF−208


0
5 M

深さしかない。ここからは遺構面に密着した状況で火舎（P—026）が出土している。上半分は耕作等により削平されて破損したことが想定され、体部にある菊花文及び器形等から室町時期迄下ると考えられ、この遺構の時期も遺物の時期とほぼ同じと考えてよかろう。

このように、ＲＳＤ—01に遺構を一部落とす状況で検出される遺構が多数ある。それはＳＫ—224、ＳＤ—225、226等である。これらからは時期を詳細に決定しうるような資料は出土していないが、ＳＫ—221の周辺に隣接し、同様の規模をもっているため、ほぼ同時期でⅢ—３期に属すると考えられる。

道路状遺構

ＳＦ—203

この遺構は全Ⅲ区の29～32—Ｄ・Ｅ区に位置する。流向は一定せず、一端はＳＦ—206に接し、その後ＲＳＤ—01の上面を走って一部ＳＦ—207・208の上にかぶさる形となる。出土遺物は硬化面から鎬蓮弁を持つ青磁片が数点出土している。切り合い関係からＳＦ—207・208が古い時期であるが、203の時期は限定できないものの凡そ鎌倉・室町時代内に収まると見てよかろう。尚時代小区分はＳＦ—204～206と同時期で、Ⅲ—３期に属すると考えられる。

ＳＦ—204、205、206（第60図）

この遺構は全Ⅲ区の27～29—Ｄ区に位置する一連のものである。流向はほぼ同一方向をなし前述のＳＦ—207、208及びＳＦ—203と近似する。遺構面は階段状を呈しており３段構成で、最大高位差は45cmである。各々上段より206、205、最下段は204である。204は硬化面の残存長13.50m、幅48cmを測る。205はこの３本の中では最長で硬化面の残存長16.89m、幅45cmを測る。又206は硬化面の残存長7.47m、幅27cmを測る。これからは、時期決定に係る遺物は全く出土しておらず、わずかに土師片のみである。しかしながら流向が隣接する道路状遺構と近似し、しかも一部分ＳＦ—203と接する箇所が確認されているため、ほぼＳＦ—207、208に遅れる時期であろうと考えられる。又この３本の遺構間に時間差が想定されるが明瞭ではない。尚時代小区分はⅢ—３期に属する。

ＳＦ—207、208、ＳＤ—220、221、222（折込第61図）

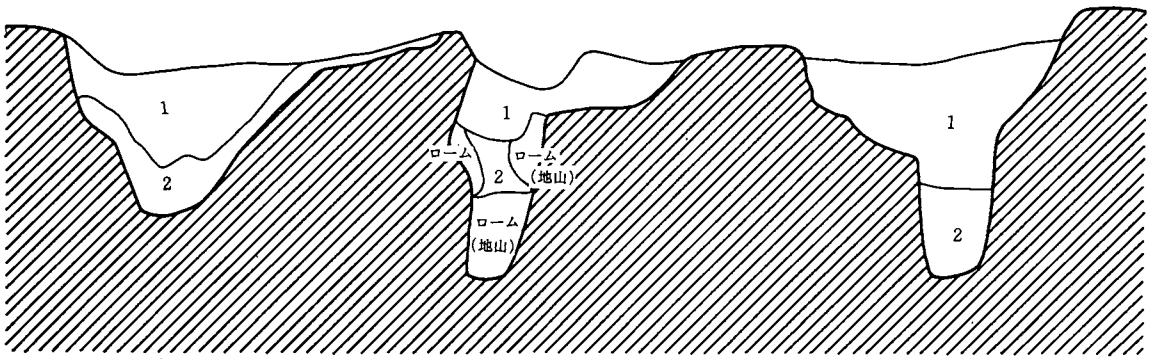
この遺構は全Ⅲ区の30～34—Ｄ・Ｅ区に位置している。ＳＦ—207の硬化面は残存長は34.86m、最大幅1.66mを測る。両側方には溝遺構ＳＤ—220、222を持つ。道路状遺構道路敷の基準幅長Ａ—Ａ′地点では4.25mを測り、尺で換算すると15尺弱となる。その他の地点でもこの数値に類似し、13～15尺を測りかなり大型の道路状遺構であることが判明する。出土遺物はＰ—051（壺）、Ｐ—052（壺）が直上から検出されている。ＳＦ—208の硬化面は残存長37.74m、最大幅1.50mを測る。約½が調査区域外で、本来はＳＦ—207同様両側方に溝を持つものかも知れないが、現存では片側方の溝遺構ＳＤ—221のみ残存する。道路敷の残存幅は3.45mである。出土遺物はＣ—023（埦）、Ｈ—010（坏）が直上から、Ｈ— 073(内黒土器・坏)が覆土中より出土している。ＳＤ—220は流向G.N.—49°00′—Ｗを保つ。残存長は22.44m、最大幅75cmを測る。これはＳＦ—207の片側溝となり、ＳＤ—222と対となる。ＳＤ—221は流向G.N.—51°10′—Ｗを持つ。残存長は27.51m、最大幅1.14mを測る。これはＳＦ—208の片側溝となる。ＳＤ—222は流向G.N.—55°00′—Ｗを持つ。残存長は27.72mを、最大幅1.05mを測る。又ＳＤ—220と対になるものである。これらの３本の溝からはいずれも時期決定に関与する遺物は出土していない。しかし、道路状遺構の側溝として使用されているので、時期決定は各々の道路状遺構に委ねたい。

道路状遺構はＳＦ—208の場合、道路敷の幅が13～15尺、側溝の上場幅が2.5～3.5尺を測る。208が先行し、207がその後切断するが、時期差はあまりないと思われる。ＳＦ—208の時期は、ほぼＳＤ— 202と同時期と見られ、13世紀後半であろう。尚時代小区分はＳＦ—208及びＳＤ—221はⅢ—１期に、ＳＦ—207及びＳＤ—220、222はⅢ—２期に、又ＳＦ—203もⅢ—２期に属すると考えられる。

ＳＤ－202内のピット群（第62図）

21.815m

ピット4　　ピット5　　ピット6



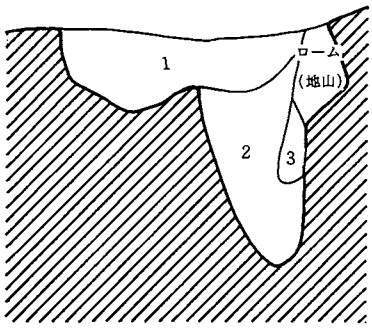
1層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ローム粒を少量含む
2層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ロームブロックを多量に含む

1層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ローム粒を少量含む
2層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ロームブロックを多量に含む

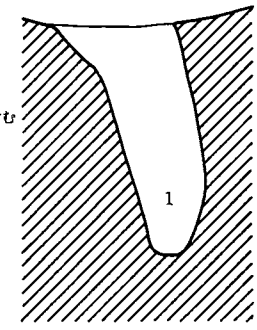
1層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ローム粒を少量含む
2層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ロームブロックを多量に含む

21.815m　　21.815m

ピット12　　ピット7



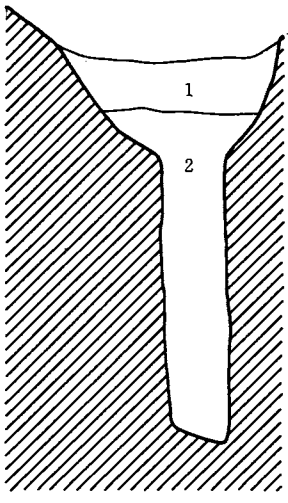
1層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ローム粒を微量に含む
2層＝黒褐色土（7.5YR$\frac{3}{2}$）
ロームブロックを多量に含む
3層＝黒褐色土（7.5YR$\frac{3}{2}$）
ローム粒を少量含む



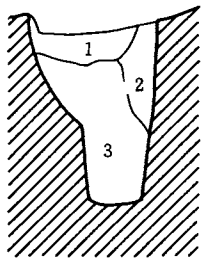
1層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ローム粒を含む

21.815m　　22.315m

ピット8　　ピット10



1層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ローム粒を少量含む
2層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ロームブロックを多量に含む



1層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ニガシロブロックを含む
2層＝黒褐色土（7.5YR$\frac{3}{2}$）
3層＝暗褐色土（7.5YR$\frac{3}{3}$）
ロームブロックを含む

第62図　ＳＤ－202内Pit土層断面図

0　1M

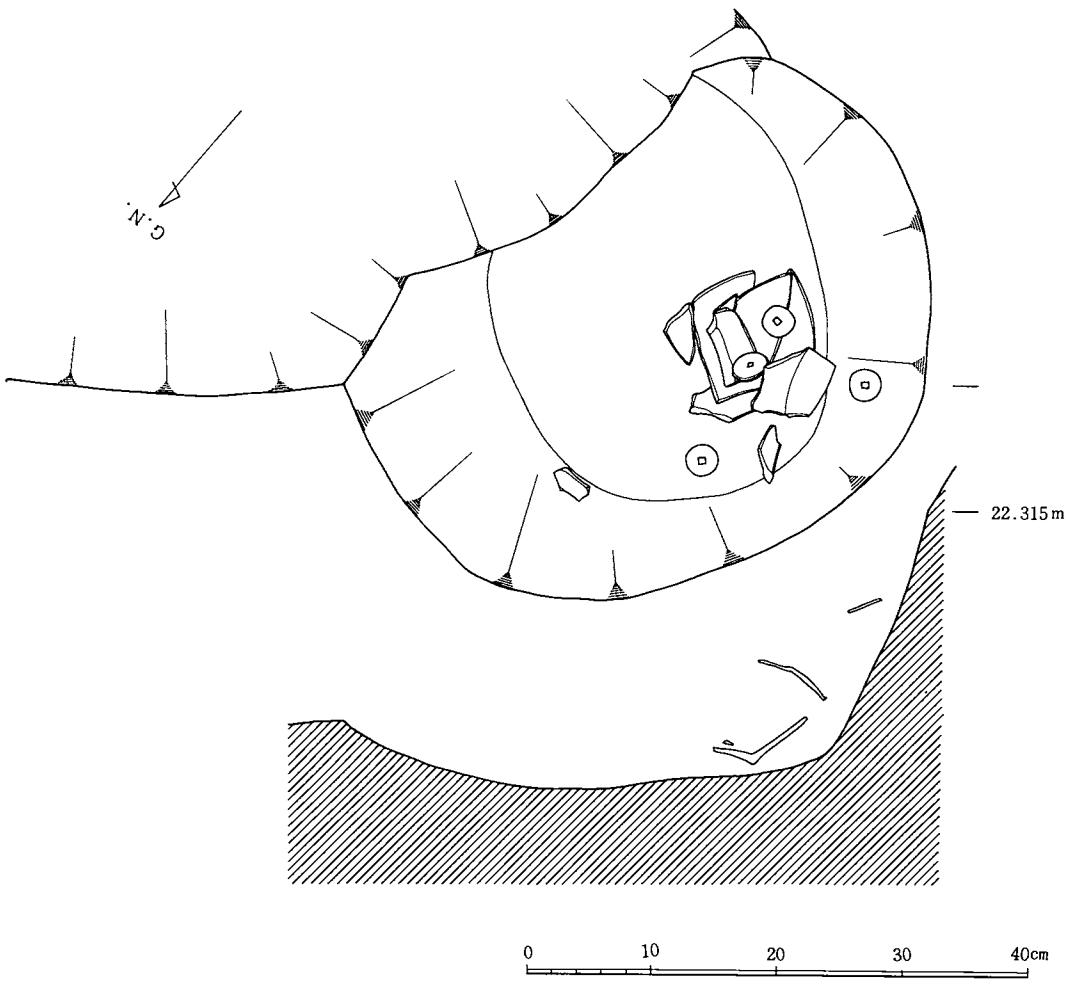
ＳＤ—202内ピット

ＳＤ—202内には多数のピットが散在する。溝の底部のみならず、溝肩部にも多数存在している。図中に示したピットは溝底部に位置するものであるが、多様な形をなしている。No.４～No.６のピットは一連のものであり、埋土は共に２層の比較的単純なものである。No.６は柱痕跡が見られるが、柱根は確認できない。No.７は単一層であるが直立せず傾斜している。No.８は２層に分かれ、柱を抜き取りその後に第１層の埋土が流入したものと思われる。No.10は埋土が３層に分かれるが、これも柱根は確認できない。No.12は断面形から見てピット上面に１の埋土をもった遺構が切り込んだ形をなしている。柱痕跡は見られるが柱根は未確認である。

これらのピットはいずれもあまり大型ではなく最大平面径60cm、最大深度１ｍを測る。そして溝底面に掘り込まれ、規格性を持たない。しかも柱痕跡は検出されるが、柱根が確認されない為、柱を抜き取ったと考えられる。以上のように、溝肩部にかかるものについては、遺跡Ⅲ層上面にある建物に関するピットと一連のものであると判断されるが、溝底面に位置し深さ１ｍ程のピット群については、埋土的には溝最下層の©層とは異なり、掘り込み面も確認できない。構築の当初から存在するのか、後の時期に掘り込まれたものか不明である。

ＳＤ－202内古銭出土ピット（第63図）

このピットは全Ⅱ区34—Ｈ区内のＳＤ—202内に位置する。径はほぼ48cmを測り、深さは現存高で20cmと浅い。断面では第52図のＣ－Ｃ′図中の第11層の下部に掘り込まれており、ＳＤ—202 とはやや時期差が考えられる。このピット内からはＨ—011（坏）と共に５枚の銅銭が出土している。銅銭については別表第20表の通りであるが、全て北宋銭であり、その初鋳年の上限は西暦で995年、下限は1078年となる。貨幣はそ



第63図　ＳＤ－202内古銭出土ピット

の性格上伝承し使用されており、銭甕等に於いても永く使用した銭が埋納される例が多い。銭はその実年代が10世紀終末～11世紀後半の時期であるが伴出の土師坏では凡そ13世紀後半時期となり、このピットの年代は後者の時期と考えられる。

ピット（第64図）

全調査地域内のピット総数は3.856個に達する。その内で掘立柱建物遺構に伴うピットは358個で、全体の9.3%となる。（第14表）

各全剝ぎ調査区域内での検出状況については別表を参照して頂きたい。検出状況の特色としては、以下の事が考えられる。①調査区ごとでは全Ⅱ区が面積に対しての出土数が比較的多い。②主にＲＳＤ—01及びＳＤ—202、203の内側に多く検出されるが、一部21・22—Ｅ区の様に外側でも集中し検出される。尚ＳＤ—202より以北の調査区では殆んどピットは検出されず、約120～30m程台地上を伸びた地点で一群が確認されるのみである。③ＲＳＤ—01内で特に濃厚に分布するものは22—Ｇ区のコーナー部付近で、数量も多くやや大型である又全Ⅱ区30～32—H・I区には小型ではあるが濃く分布し、集中する。④大型の方形もしくは円形の掘り方を持つピット群は調査区内では検出されていない。一部ＳＢ—203、211のピットがやや大型で埋土を版築状に突き固めた痕跡を示し、時期的には上る可能性が考えられる。⑤ピット内からの遺物の出土は極めて少ない。別表ピット内出土遺物一覧表の通りである。実測可能なものの出土は19個、その他土器の種別が判断できるものでも75個で、全体ピット数に対しわずか1.9%にすぎない。

	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	全区
ピット総数	1.012	1.064	1.422	3.498
（全区との比較）	(28.9)	(30.4)	(40.7)	(100%)
建物ピット総数	134	100	122	358
（全区との比較）	(37.4)	(27.9)	(34.1)	(100%)
ピット総数に対しての建物ピットの割合	13.4%	9.3%	8.6%	10.2%

第14表　ピット出土数一覧

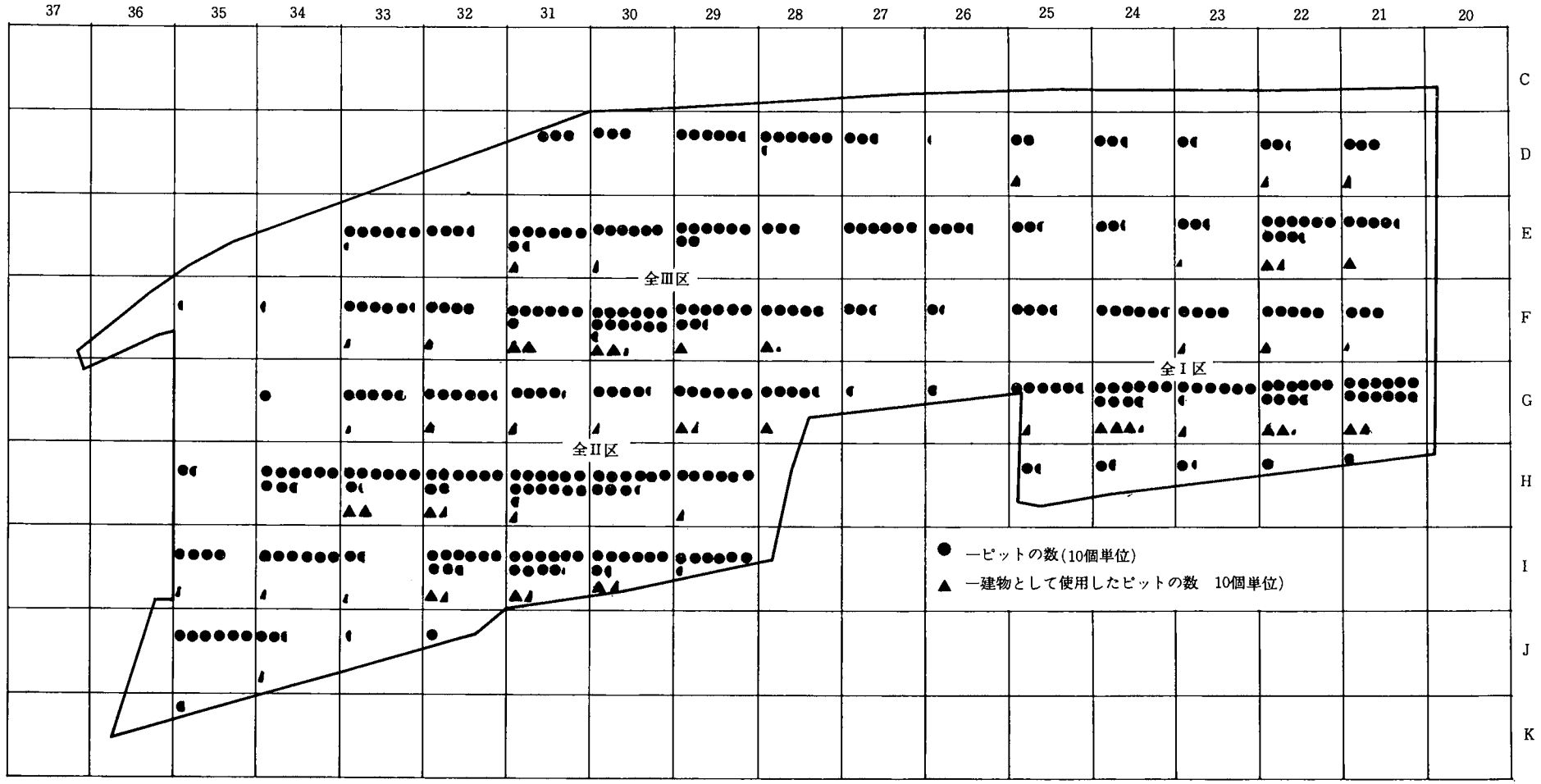
これらの特徴は中世村落の調査例である下右田・秋根遺跡等でも同様の例が見られ、ピット数の割合に対し、建物復元に使用したピットがわずか10%程度の数値を示している。

ピット内埋土土色について（第16表）

調査地区内のピットについては全てのピットについて埋土の土色を確認した。その土色は大別して次の5つである。A、黒褐色土　B、黒褐色土に遺跡Ⅲ層を含む　C、暗褐色土　D、暗褐色土に遺跡Ⅲ層を含む。E、明褐色土（遺跡Ⅲ層の汚れたもの）　調査区域のピットの大多数は、B～D埋土のもので約9割である。Aの埋土は明瞭な黒褐色でＳＢ— 211のピットを代表としており、土師器・須恵器が出土している。Bの埋土からは土師器が最も多く出土しており、次にC埋土・D埋土の順である。須恵器が最も多く出土しているのはCの埋土からで、次にB・Dの順序となる。全体を通してB埋土からの出土が最も多く、C埋土、D埋土の順である。

A、黒褐色
B、黒褐色土に遺跡Ⅲ層を含む。
C、暗褐色土
D、暗褐色土に遺跡Ⅲ層を含む。
E、明褐色土（遺跡Ⅲ層のよごれたもの）

第16表　ピット内埋土土色一覧



第64図　掘立柱ピット出土地点

No.	実測図番号	器種名	出土ピット番号	土色
1	H－009	土師器 坏	34－H区 No.43	－
2	H－018	〃 坏	29－I区 No.19	－
3	H－019	〃 坏	30－I区 No.12, 13	B
4	H－026	〃 坏	SB－04 No.13	B
5	H－032	〃 皿	29－H区 No.21	－
6	H－035	〃 皿	34－H区 No.59	Bor D
7	H－036	〃 皿	30－H区 No.50	D
8	H－047	〃 皿	SB－04 No.6	A
9	H－050	〃 皿	SB－04 No.3	A
10	H－057	〃 皿	30－H区 No.43	B
11	H－059	〃 皿	30－I区 No.14	B
12	S－008	須恵器 蓋	22－E区 No.31, 32	C
13	S－011	〃 坏	22－E区 No.31, 32	C
14	S－024	〃 高台付坏	34－H・I区 No.86	－
15	S－036	〃 鉢	22－F区 No.9	C
16	S－038	〃 甕	31－I区 No.64	Dor B
17	S－041	〃 壺か	23－G区 No.18	C
18	S－042	〃 壺か	31－H区 No.14	E
19	P－011	中世陶器 鉢	27－D区 No.30	－

第15表　ピット内出土遺物一覧（実測分）

又、埋土土色の時期については、掘立柱建物に関するピットの土色を参考にして時期を想定した。A埋土のものは建物の想定時期ではⅡ－2期に属し、比較的に古式に属する。SB－218の埋土は、E埋土で、遺跡Ⅲ層の汚れたものであり、識別はかなり困難であるがⅡ－1期に属し、最も古式に属すると考えられる。

又、この埋土はRSD－01の南側コーナー部付近に集中する。尚RSD－01に伴なうSA－01、02の埋土はピット埋土Eに類似している。その他のB～D埋土については調査区の全域に広く分布し、鎌倉・室町時代の全般を通しての埋土と考えられよう。

種別＼土色	A	B	C	D	E	小計
土師器	6	74	46	31	1	158
( )内%	(75)	(93)	(87)	(91)	(33)	
須恵器	2	5	7	3	2	19
( )内%	(25)	(6)	(13)	(9)	(64)	
内黒土器	－	1	－	－	－	1
( )内%		(1)				
瓦質土器	－	－	－	－	－	－
小計	8	80	53	34	3	

第17表　ピット内埋土土色別の出土遺物対比表
※上段はピットの数、下段は各土色のピットの計を100%とした場合のその土器の比率を示す。

2. 遺　　物

土師器

総数61点の出土である。その器種は坏、埦、皿などの糸切り底部をもつものである。ここでは新たに分類基準を設けて、説明を加えていきたい。

坏（第65図H—003～第66図H—029）

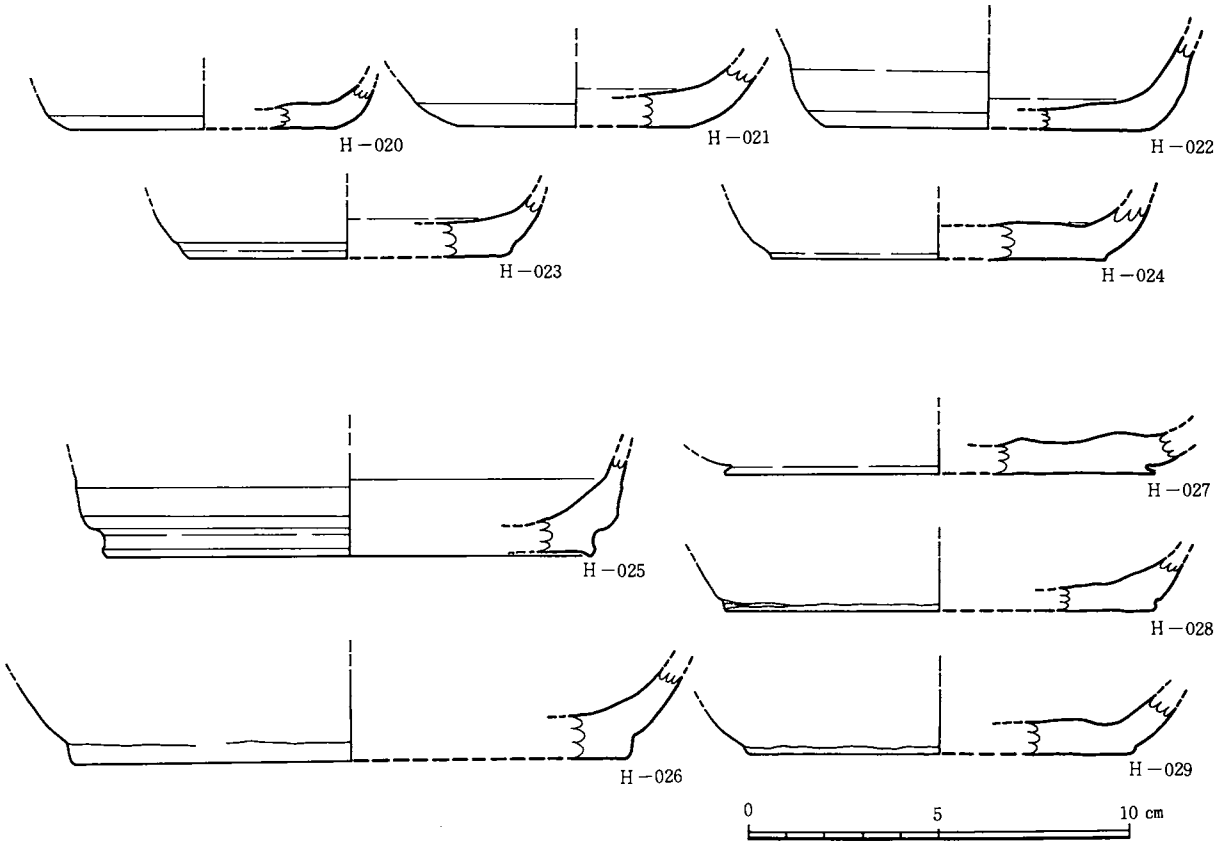
坏は総数27点が出土している。それらは高台を有するもの２点、高台を持たないもの25点である。これらの前者をⅠ類に、後者をⅡ類として分類した。

Ⅰ類（H—003・004）

僅か２点の出土である。高台の断面形は逆三角形を呈しており、寺尾遺跡の分類にはこれに属するものはない。技法的に近似すると思われるものは坏Ⅰ—ⓑ類である。

Ⅱ類（H—005～029）

無高台の坏類がこれに相当する。これらは全て実測可能なもので、25点を数える。底部の切り離しは１点を除き他は糸切りである。これら糸切り底の坏類を、破片の形状から全体のプロポーションの判明するもの



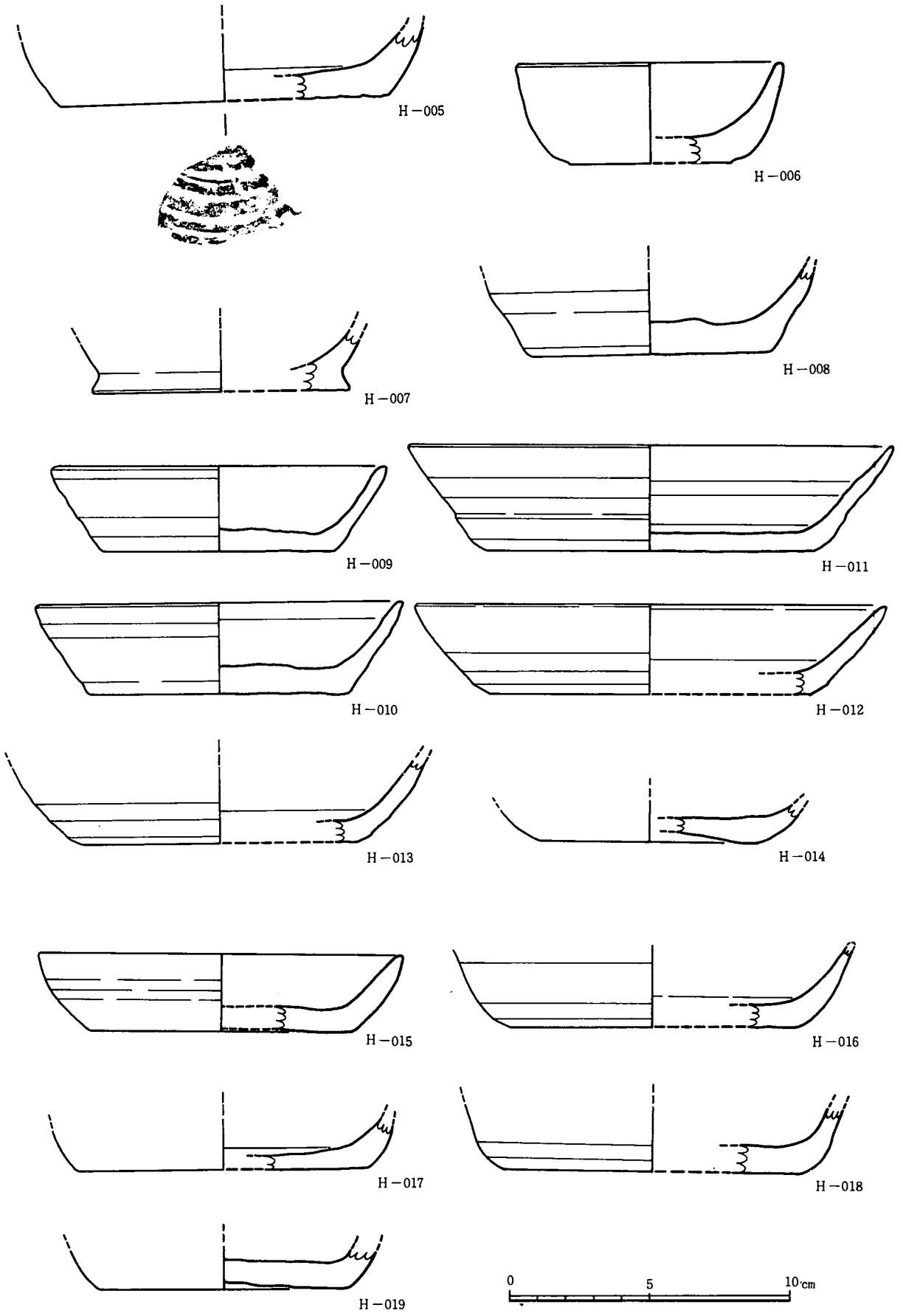
第66図　土師器（坏）実測図

と、そうでないものに分けた。さらに前者を細分し器種の形状によって分類した。順次この分類に沿って述べていきたい。

005はＳＤ—202内からの出土である。底部のみであり、内外面ともヨコナデ調整を施しヘラ切り離しを行っている。

ⓐ類　法量は小型であり、底部から口縁部に向って内湾気味に立ち上がり、端部は肥厚する。

ⓑ類　底部からストレートに外傾し、口縁端部は鋭さを持つ。



第65図　土師器（埦・坏）実測図

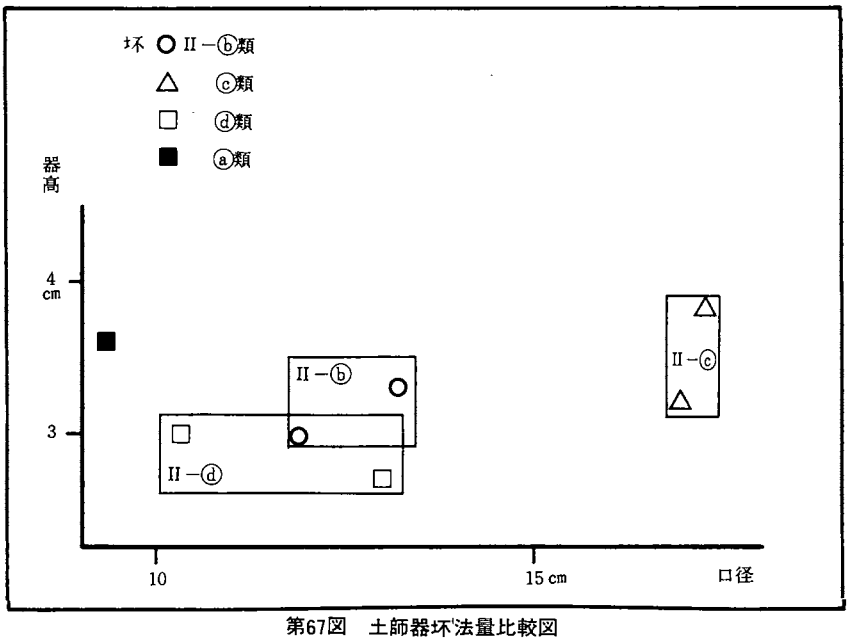
ⓒ類　ⓑ類と形態は酷似するが、法量がより大型化する。

ⓓ類　口縁部に向って内湾気味に立ち上がり、端部は鋭さを持つ。

006はⓐ類に含まれる。内外面ともヨコナデ調整を施している。寺尾遺跡にはこの器種に相当する類は見られない。ⓑ類には009、010が含まれる。009はＳＤ—202内から、010はＳＦ—207・208からの出土で、ほぼ同型式と考えられ、他の同時期の資料では13世紀終末時期に比定できる。ⓒ類はⓑ類がやや大型化したもので、011・012が含まれる。出土地点は前者がＳＤ—202の古銭出土ピットからであり、後者がＳＤ—202最下層からの出土である。同一型式ではぼ同時期であり、その年代は13世紀前半時期と想定される。また底部のみの破片であるが、013はⓒ類に、014はⓑ類に属すると考えられる。ⓓ類には015・016が含まれる。器壁が厚いが口縁端部は鋭さを持つ。016はＳＤ—202の第24層からの出土である。017～019は底部片のみではあるが、ⓓ類に属すると考えられる。

第67図法量比較図においては各類は種々の分布を示す。ⓐ類は口径が小型ではあるが、器高が高いため独立して位置する。ⓑ類、ⓒ類は口径の大小によって分離しており、ⓓ類は部分的にⓓ類と重複し合う。

底部付近のみの破片で、糸切り底を有し、坏類であることは判明するが、全体のプロポーションが不明であるものが多数出土している。これらを体部と底部との境界部に凹部を有するものと、そうでないものに便宜的に分けた。ⓔ類は凹部を有さないもので020～024の計５点である。ⓕ類は凹部を有するもので025～029の計５点を数える。概要は第18表観察表のとおりである。



第67図　土師器坏法量比較図

実測図No	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H—003	ＳＫ—220 23・24—E 11層	—	残存高 1.0	7.3	密	良好	明茶褐色 一部明褐色 — 明茶褐色 一部明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
H—004	ＳＤ—210 24—E	—	残存高 0.8	7.6	緻密	良	灰白色 — 明茶褐色	ヨコナデ	ヘラケズ リミガキ	ヘラ研磨
H—005	ＳＤ—202 34—H	—	残存高 2.4	11.7	緻密	良好	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り底
H—006	ＳＤ—202 34—G 11層	9.3	3.6	5.7	緻密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—007	30—H ピット43	—	残存高 2.2	9.1	緻密	良好	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—008	RSD—01 34—J	—	残存高 0.9	8.4	密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—009	ＳＤ—202 34—H	11.9	3.0	8.3	緻密	良好	にぶい黄橙色 — にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—010	ＳＦ—207 ・208 34—D	13.2	3.3	9.3	緻密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	糸切り底

実測図No	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H—011	SD—202内古銭出土ピット内34・35—H	17.3	3.8	11.7	緻密	良好	橙色—橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—012	SD—202 34・35—H覆土最下層	16.9	3.2	11.4	緻密	良	灰黄褐色—浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—013	SD—202 34—H	—	残存高2.8	9.7	密	良	灰黄褐色—にぶい黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—014	SD—202 35—1	—	残存高1.4	7.8	密	良	橙色—橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—015	SX—03 30—H	13.0	2.7	9.4	密	良	明赤褐色—明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	糸切り底
H—016	SD—202 34—F 10層	—	残存高2.9	10.3	緻密	良	浅黄橙色—橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—017	SD—202 34・35—H	—	残存高1.8	10.3	密	良	浅黄橙色—浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底か？器壁が荒るれ
H—018	29—I ピット19	—	残存高2.3	10.6	緻密	良好	浅黄橙色—灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—019	30—I ピット No12・13	—	残存高1.5	8.9	密	良好	橙色—橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—020	SK—202 32—G	—	残存高1.2	7.1	密	良	黄褐色—黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—021	SD—202 一括 34・35—G・H	—	残存高1.7	6.2	密	良	灰白色—灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—022	SD—202 34・35—H・I	—	残存高2.4	8.5	密	良	浅黄橙色—浅黄橙色	ヨコナデか？	ヨコナデか？	糸切り底か？器壁が荒れる
H—023	SD—208 I層 33—G	—	残存高1.5	8.3	密	良	橙色—橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—024	SD—208 34—G	—	残存高1.5	8.8	密	良	黄橙色—黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—025	SD—202 34—G	—	残存高2.7	12.8	密	良	橙色—橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—026	SB—204 ピット13	—	残存高2.4	14.8	緻密	良好	橙色—浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—027	SD—201 23—GH	—	残存高1.2	11.3	密	良	浅黄橙色—浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—028	SD—202 7～10層 14～18層 34—G	—	残存高1.4	11.2	密	良	にぶい褐色—にぶい褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—029	SD—202 3—13層 34・35—H	—	残存高1.7	10.2	密	良	浅黄橙色—浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底

第18表　土師器高台付坏、坏観察表

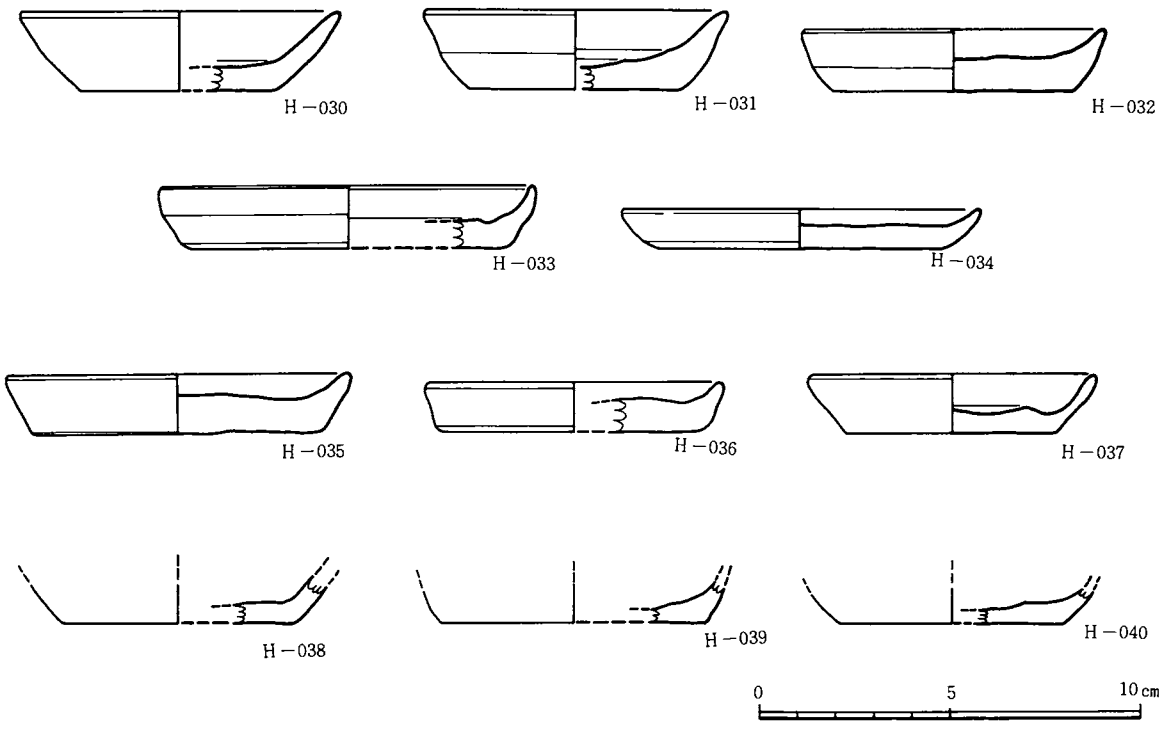
小皿（第68図H—030～第69図H—061）

寺尾遺跡の皿類に比べて、比較的に小型であるため、これらの皿類を小皿として分類した。総数32点を、体部最下位で調整に際して凹部を有するか否かで分類した。

Ⅰ類　底部は平らで、凹部を持たない。

Ⅱ類　底部は平らで、底部と外面体部下位に調整の際の凹部を有する。

また、これらを全体のプロポーションによってさらに細分化を行なった。



第68図　土師器（小皿）実測図(1)

Ⅰ類（H—030～043）

ⓐ類　底部より口縁部に向かって外傾し、大きく開き、端部は鋭さを持つ。

ⓑ類　口縁部に向って内湾気味に立ち上がる。

ⓒ類　器高が低く、体部器壁及び、底部がぶ厚い。

ⓓ類　底部及び、体部の器壁が薄く、外傾気味に開く。口縁端部がやや肥厚する。

ⓐ類に属するものは030～032である。030は、底部器壁も薄く内面も深い。口縁部に油煙の痕跡が見られる。

ⓑ類に属するものは033・034の２点である。033は体部下位に指圧のため凹みを有する。034は口径の割には内面が浅い。ⓒ類には035・036が含まれる。共にピット中からの出土である。ⓓ類は１点のみで037である。ＳＤ—208の１層からの出土である。

第70図法量比較図においてはⓐ類では器高が高いため縦方向に長く分布する。ⓑ類は口径が大きい為に他の類とは離れ独立している。ⓒ類はⓐ類と類似した分布を示す。038～043までは底部のみの破片である。

概要は第19表の通りである。

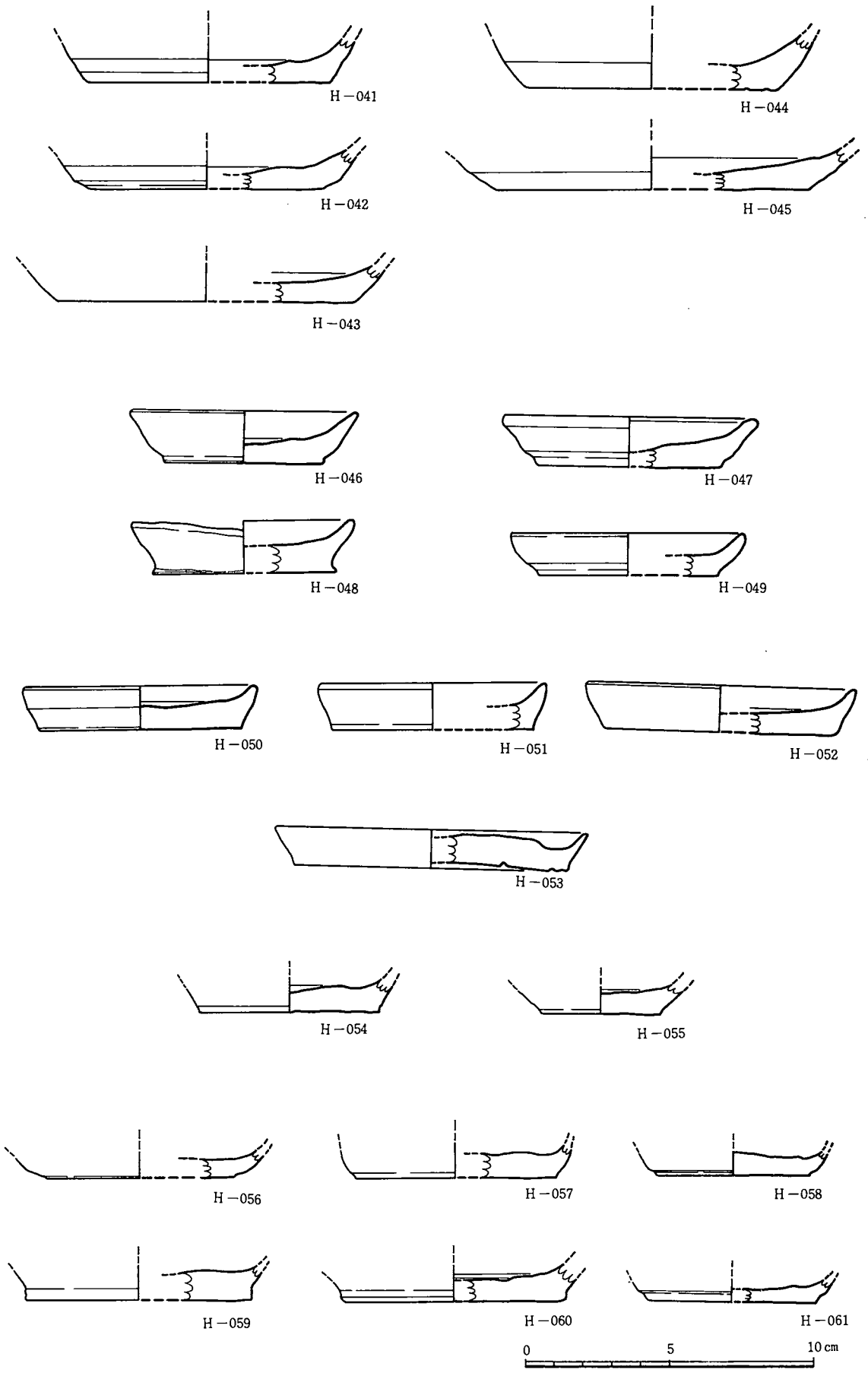
Ⅱ類（H—046～061）

ⓐ類　底部より口縁部に向って外傾気味に立ち上がり、端部は鋭さを持つ。

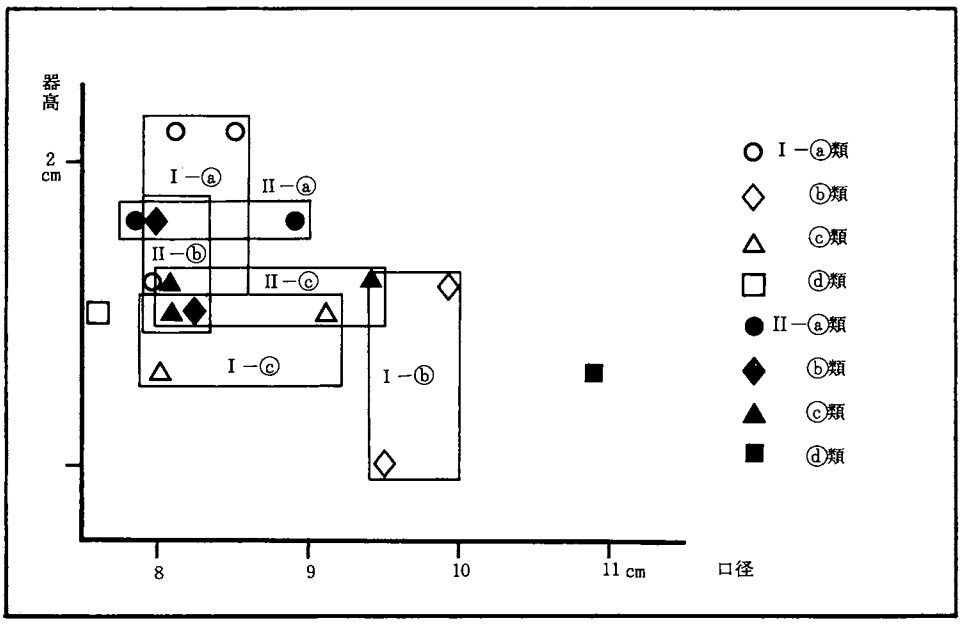
ⓑ類　口縁部に向って内湾気味に立ち上がる。

ⓒ類　器高が低く、体部器壁及び、底部がぶ厚い。

ⓓ類　底部が肉厚で、内湾気味に立ち上がる。体部は極めて薄い。



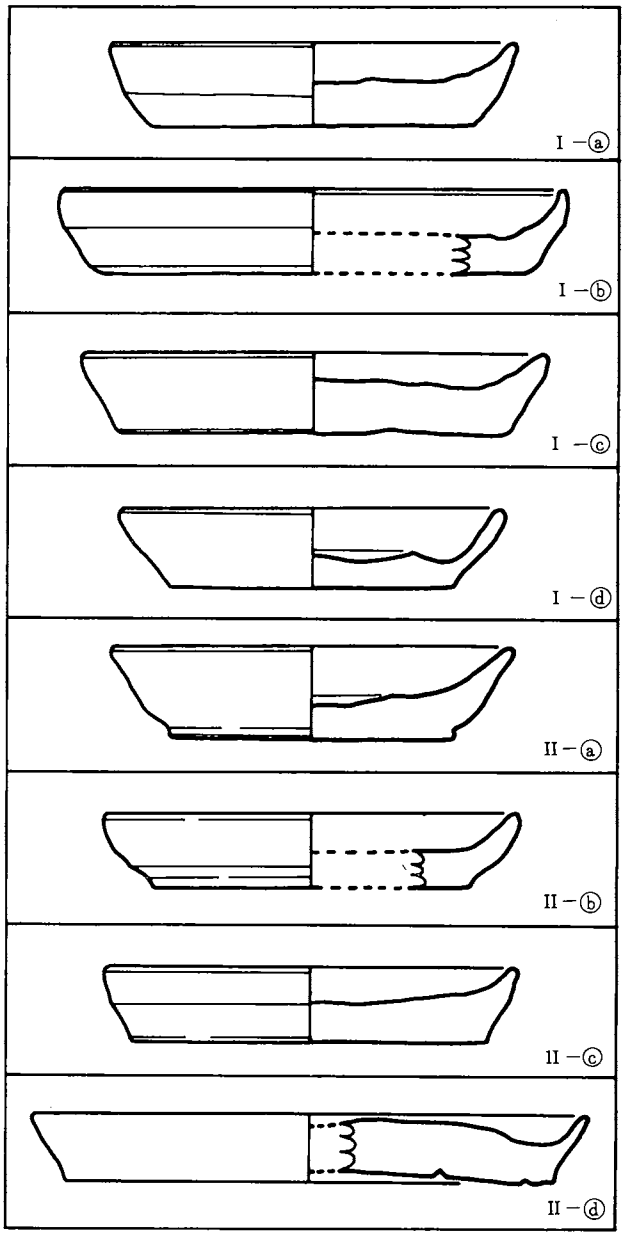
第69図　土師器（小皿）実測図(2)



第70図　土師器小皿法量比較図

046・047はⓐ類に属する。046は磨耗が激しく観察しづらい。047はＳＢ—204のピットNo.6の出土である。ほぼ完形で、ピット中に投棄された状況での出土である。この遺物によりこの掘立柱建物跡の時期がほぼ判定できる。ⓑ類には048・049が含まれる。ともにＳＤ— 202内からの出土であり、048は焼成に際してひずみを有している。ⓒ類には050～052の３点が含まれる。050はＳＢ—204のピットNo.3からの出土である。047と同時期と考えられ、ともに13世紀前半時期と想定される。053はⓓ類で１点のみである。底部は糸切りであるが、調整が粗く、凹凸が残る。糸切り底を呈する。

第70図法量比較図においてはⓐ類は器高の高い部分に、ⓒ類が低い部分に位置している。ⓑ類は双方にかかわっている。054～061までは底部のみの破片である。概要は第19表観察表の通りである。



第71図　土師器小皿形態分類図

実測図No	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H—030	SD—208 32・33—G・H	8.5	2.1	5.3	密	良好	赤黄褐色 — 赤黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部に油煙の痕跡 糸切り底
H—031	RSD—01 33—F 一括	8.1	2.1	6.7	緻密	良	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	糸切り底
H—032	29—H ピット No21	8.0	1.6	6.3	緻密	良好	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—033	RSD—01 27—E 1層	9.9	1.6	8.3	緻密	良好	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—034	SD—202 34—H	9.5	1.0	7.5	密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—035	34—H ピット59	9.1	1.5	7.7	緻密	良好	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—036	30—H ピット50	8.0	1.3	6.8	緻密	良好	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—037	SD—208 34—G 1層	7.6	1.5	5.6	密	良好	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—038	35・36—G 試トレ	—	残存高 1.0	6.3	密	良	赤褐色 — 赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—039	SD—208 4—12層 32—H	—	残存高 1.1	7.0	密	良好	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—040	37—I・J 試トレ	—	残存高 0.9	5.8	密	良	明黄褐色 — 明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—041	SD—202 34—H	—	残存高 1.6	8.4	密	良	にぶい橙色 — にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—042	SD—202 35—I	—	残存高 1.4	8.0	密	良	明橙色 — 明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—043	SD—202 一括	—	残存高 1.3	10.3	密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—044	SD—202 34・35—H 1層	—	残存高 1.9	8.8	緻密	良好	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—045	SD—202 34・35—H 1層	—	残存高 1.5	10.9	密	良	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—046	F・G—33 (1次) 試トレ	7.9	1.8	5.6	密	良好	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切りか？ 磨耗がはげしい
H—047	SB—204 ピット6	8.9	1.8	6.4	緻密	良好	にぶい橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—048	SD—202 一括	7.9	1.8	6.4	緻密	良好	にぶい橙色 — にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底 焼成ひずみ有
H—049	SD—202 34—G	8.2	1.5	6.2	緻密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—050	SB—204 ピット3	8.1	1.5	7.0	緻密	良好	灰白色 — 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—051	SK—216 30—I	8.1	1.6	7.1	緻密	良	赤黄褐色 — 赤黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—052	RSD—01 32—D	9.4	1.6	8.0	密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	—	—	器壁の磨耗が激しい 糸切りか？

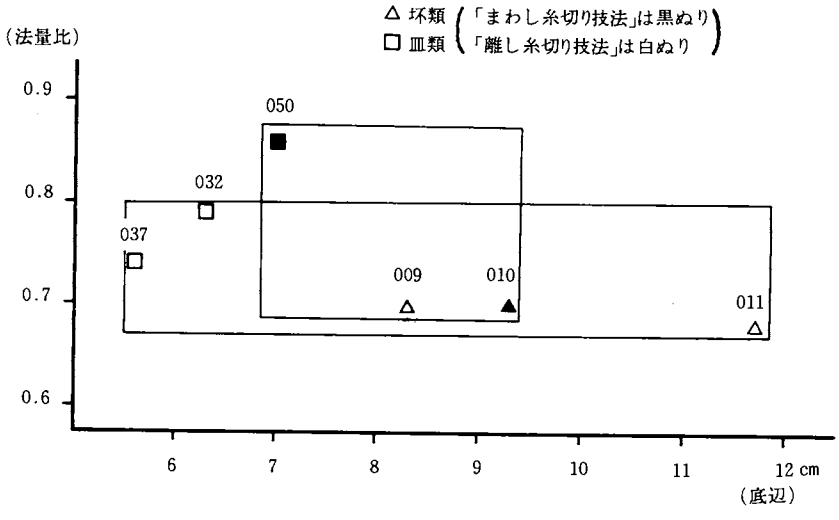
実測図No	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H—053	23—F 一括	10.9	1.3	9.6	密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—054	SK—210 34—J	—	残存高 1.2	6.3	密	良好	茶黄褐色 — 茶黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—055	SD—208 34—G 3層	—	残存高 1.0	4.2	密	良	浅黄橙色 — にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—056	SD—202 34・35—H 1層	—	残存高 0.9	6.5	緻密	良	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—057	30—H ピット43	—	残存高 1.2	7.1	緻密	良好	にぶい橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—058	SD—202 一括	—	残存高 0.9	5.4	密	良	浅黄橙色 — 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底 器壁が荒れる
H—059	30—I ピット14	—	残存高 1.2	7.8	緻密	良好	灰白色 — 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底
H—060	SD—202 一括	—	残存高 1.3	7.8	密	良	橙色 — 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
H—061	SD—208 33—G	—	残存高 0.8	5.9	密	良	にぶい褐色 — にぶい褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	糸切り底

第19表　土師器小皿観察表

土師器坏・皿類における糸切り技法について

本遺跡からは多数の土師器が出土しており、その中で実測可能なものは坏が24点、皿が32点である。その他小破片が多数あり、さらに資料数は増加すると思われる。実測図56点中、1点のみがヘラ切りであり他は全て糸切り底である。ここでは曲野遺跡出土の土師器の糸切り底について述べてみたい。

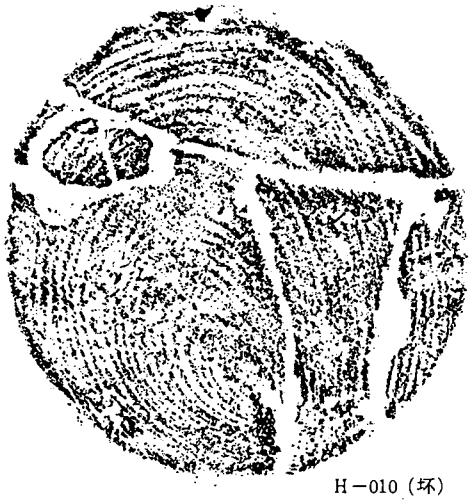
糸切り技法は大まかに2つに大別される。一つは静止糸切りであり、他方は回転糸切りである。今資料中で底部の糸切りの状況が判明するものは少ない。判明するものの中では、全てが回転糸切りであることが指摘される。器種は坏と皿であり、坏・皿ともに4点ずつである。



第73図　土師器糸切底の底径及び法量比図

第72図糸切底一覧図では最上段の3点が「まわし糸切り」である。これは糸を左右に引っ張らずに、右手をロクロの回転に合わせて回すように移動し、左手とほぼ対称の位置へ来たときに手前に引き切ったものである。糸切りの痕跡の特徴は中央付近の痕跡幅が最も広く、そこから離れるに従って、即ち糸のはいる部分、出る部分に近づくに従って狭くなることである。この技法のものは3点でH—010は坏で底径9.3cm、H—050は皿で7.0cmを測る。

「離し糸切り」は他の7点に用いられている。これは左手を左手前に右手を右奥に構え、右手で糸を器底



H－010（坏）

H－050（皿）

実測図ナシ

H－019（坏）

H－009（坏）

実測図ナシ

H－037（皿）

H－011（坏）

H－032（皿）

H－054

第72図　土師器糸切底一覧図

に入れる。さらに右手の糸の端を離し、あとはロクロの回転に任せる。十分に切れたところで左手の糸を引き、切りながら引き抜く作業である。このように前者とは糸を引き抜く行為において、異なっており、糸の引き抜きの痕跡が確認できるか否かが、両者をわかつ要素となる。これに属するものは底径が最小で5.6cm、最大で11.7cmとややばらつきがある。

第73図は法量比の判明できるものを底径との割り合いで比較した図である。ここで使う法量比とは底径÷口径の数値であり、その数値は口径に対し底径が小さいほど小となる。一般的にはその数値は時期差を示しており、底径の縮少化にはロクロにおける糸切り技法の展開が大きく影響すると考えられている。今回の作業においては器種が坏と皿の２種類であること、統計上使用する数量が計６点と僅少であること、土器の時期差があまりないことなどから、全体的な流れをとらえるまでにはいたっていない。今遺跡の、13世紀後半時期においては、まわし糸切り技法、離し糸切り技法の双方が使用されており、時期の流れを示すまでに至っていない事が考えられる。[註(1)]

註

(1)回転糸切り技法については、小川貴司「回転糸切り技法の展開」『考古学研究101号』1979を参照とした。

中世陶器

いわゆる中世時期の土器、陶磁器の類に相当するものが多数出土している。この章では、中世の陶磁類を(1)陶質、(2)瓦質、(3)須恵系土器の三つに分類した。おのおの仕分けてみたい。

陶質土器（第74図）

この土器に類する器種は、鉢・擂鉢・甕・壺・坏・火舎・羽釜・器台などがあり、多種多様である。

鉢（第74図Ｐ―001～010、第76図Ｐ―030～032）

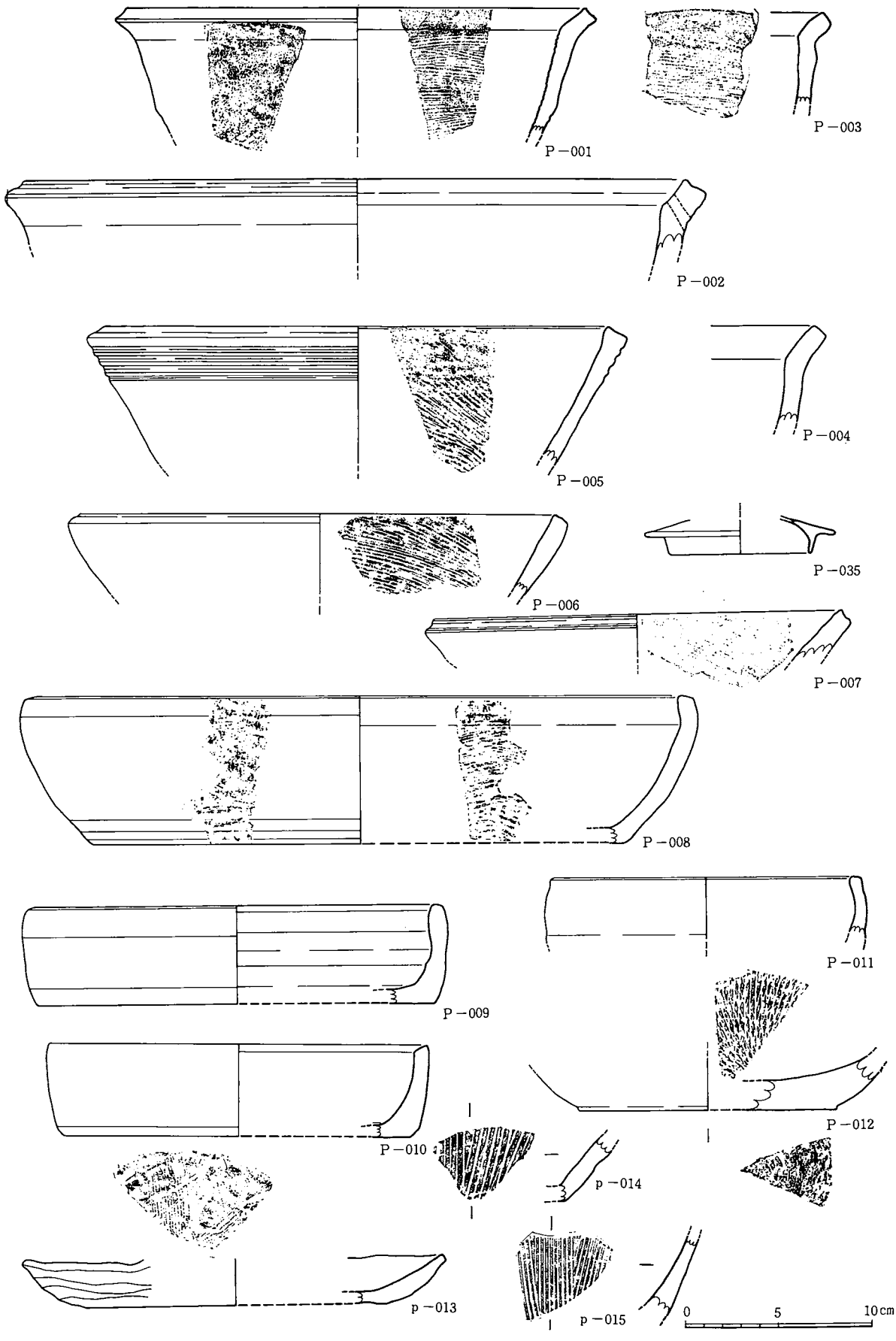
鉢の類を大きく２つに分ける。Ⅰ類は中型程度までのものであって、器形及び口縁部の形状によって更に４分類される。Ⅱ類は特に大型のものである。

Ⅰ―ａ類（Ｐ―001～Ｐ―004）

ａ類は体部から直線的にまっすぐのび、口縁部付近で屈曲し強く外反する。Ｐ―001は口径25.8cm、残存高6.6cmを計る。外面はヨコナデ調整後、ナデ調整を施し、内面はハケ目調整を施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面とも灰色を呈する。35―Ｆ区ＳＤ―228からの出土である。Ｐ―002は口径35.2cm、残存高4.5cmを測る。外面は丁寧なヨコナデ調整を施す。口縁部の屈曲部には径0.5cmの穿孔があり、これは焼成前である。胎土は密、焼成は良好、色調は外面が鈍い黄橙色、内面が黄褐色を呈する。35―Ｉ区ＳＤ―203からの出土である。Ｐ―003は口径16.7cm、残存高4.8cmを測る。外面はヨコナデ調整を内面は横方向のハケ目調整を施す。胎土は緻密、焼成は良、色調は外面が灰白、内面が黒灰色を呈する。22―Ｇ区ＳＤ―210からの出土である。Ｐ―004は残存高5.0cmを測る。外面はヨコナデ調整を施すが器壁が荒れる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は外面が灰色、内面は浅黄色を呈する。34―Ｈ区内のＳＤ―202内からの出土である。

Ⅰ―ｂ類（Ｐ―005～007）

ｂ類は体部から口縁部にかけて直線的にのび、端部は鋭さをもって終る。Ｐ―005は口径26.9cm、残存高7.4cmを測る。外面はヨコナデ調整を施し、口縁部付近に４本の条線を有する。内面は斜方向のハケ目調整を施し、その単位は７本である。胎土は緻密、焼成は良好、色調は外面が灰白色、内面が灰色を呈する。34・35―Ｈ区ＳＤ―202内の１・２層からの出土である。Ｐ―006は口径25.4cm、残存高4.3cmを測る。外面はヨコナデ調整を、内面は斜方向のハケ目調整を施す。なお口縁端部は丸くおさまる。胎土は密、焼成は良、色調は



第74図　中世陶器（鉢・すり鉢）実測図

内外面とも灰色を呈する。34・35—H区ＳＤ—202内の１層からの出土である。Ｐ—007は口径22.6cm、残存高2.8cmを測る。外面はヨコナデ調整を、内面は斜方向のハケ目調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は内外面とも灰白色を呈する。

Ｉ—ｃ類（Ｐ—008）

体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で屈曲し、内傾する。Ｐ－008は一点である。口径は34.3cm、器高7.8cm、底径28.3cmを測る。やや大型の部類に属する。外面は不定方向のヨコナデ調整を、内面はハケ目調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は外面が灰色、内面が暗灰色を呈する。34・35—H区ＳＤ—202内３～13層からの出土である。

Ｉ—ｄ類（Ｐ—009～011）

底部は平らで、体部から口縁部に向って直立する。Ｐ－009は口径21.8cm、器高5.2cm、底部21.1cmを測る。外面はヨコナデ調整を、下部にはヘラ削りを、内面はヨコナデ調整を施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面ともに灰色を呈する。なお器壁がひどく荒れる。ＲＳＤ—01表土層からの出土である。Ｐ—010は口径20.0cm、器高4.9cm、底径18.3cmを測る。内外面ともにヨコナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は外面が灰褐色、内面は黒褐色を呈する。29—D区ＳＤ—214内からの出土である。Ｐ—011は口径16.2cm、残存高3.3cmを測る。内外面ともヨコナデ調整を施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は外面が浅黄色、内面が黄灰色を呈する。27—D区ピットNo.30からの出土である。

Ⅱ類（Ｐ—030、032）

この類に属するものは比較的に大型のもので２点が含まれる。Ｐ—030は口径50.8cm、残存高8.6cmを測る。体部から口縁部に向ってストレートに外傾する。外面はヨコナデ調整を施すが、一部ハケ目調整が残る。内面はヘラケズリ調整を行う。胎土は緻密、焼成は良好、色調は外面が黄橙色、内面が灰白色を呈する。33－G区ＲＳＤ－01内からの一括出土である。Ｐ—032は口径62.2cm、残存高6.5cmを測る。体部から内湾気味に立ち上がり、端部は平らで、器壁は厚い。胎土は密、焼成は良、色調は外面が黄灰色、内面が黒灰色を呈する。35—Ｉ区ＳＤ—202内の出土である。

鉢底部　（第75図Ｐ—025）

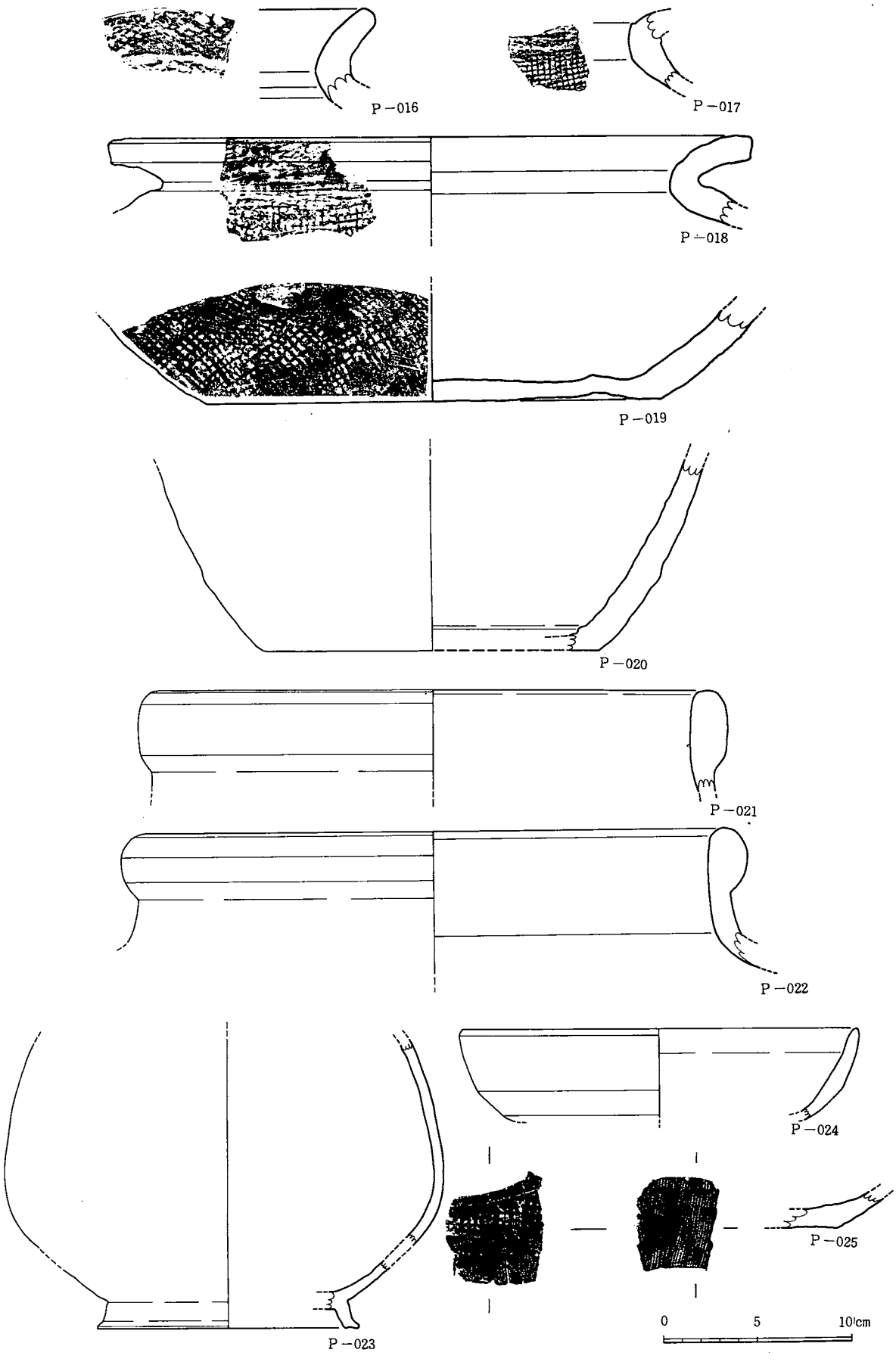
底部であると考えられるが、器種は鉢か甕であろうと思われる。ここでは鉢に分類したい。残存高は2.0cmを測る。体部外面は格子目文の叩きを、内面はハケ目調整が見られる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面とも明黄灰色を呈する。31—E試掘トレンチからの出土である。

擂り鉢（第74図Ｐ—012～015）

擂り鉢は計３点出土している。Ｐ—012は底径13.7cm、残存高2.8cmを測る。外面はヨコナデ調整を施し、底部はヘラ切り離しを行う。条線の単位は不明である。胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面とも赤褐色を呈する。34—Ｆ・Ｇ区ＳＤ—208 2層からの出土である。Ｐ—013は口径22.6cm、器高は2.5cm、底径は15.8cmを測る。外面はヨコナデ調整を施すが、整形は不揃いである。胎土は緻密、焼成は良、色調は内外面とも青灰色を呈する。21—E区ＳＸ—201からの出土である。Ｐ—014は残存高3.4cmを測る。内面の条線の単位は６本である。胎土は密、焼成は良好、色調は外面が茶褐色、内面が灰白色を呈する。Ａの２試掘トレンチからの出土である。Ｐ—015は残存高4.3cmを測る。外面はヨコナデ調整を施し、内面の条線の単位は７本である。胎土は緻密堅緻、焼成は良好、色調は内外面とも鈍い褐色を呈する。25—Ｇ区ＬＳＤ—01からの一括出土である。

甕（第75図Ｐ—016～022）

甕の類に属するものは口縁部片が５点、底部片が２点である。Ｐ—016は口縁部片であるが、径の復元は小破片のため出来ない。残存高4.8cmを測る。外面は格子目文の叩き伸ばしで、内面はヨコナデ調整を施す。胎



第75図　中世陶器（甕・壺・埦）実測図

土は緻密で、焼成は良、色調は灰色を呈する。出土地点は34—G区のＳＤ—202内で第１～６層、第12～13層の接合資料である。Ｐ—017は口縁部である。残存高4.0cmを測る。頸部外面は３mm方眼の格子目の叩き伸ばしで、内面はヨコナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は外面が黒灰色、内面が灰白色を呈する。25・26—Ｆ区ＬＳＤ—01内の一括出土である。Ｐ—018は口径34.2cm、残存高4.8cm、基部径28.6cmを測る。外面は格子目文の叩きを施し、基部から口縁部にかけてのばし、その後にヨコナデで摺り消している。胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面とも灰白色である。ＳＫ—201最下層からの出土である。Ｐ—019は底部である。底径24.2cm、残存高4.6cmを測る。外面は底部端まで格子目文の叩きを施している。単位は４mm方眼である。内面はヘラ削りを行い、一部不定方向のナデを施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は外面が灰白色、内面が灰色を呈する。34—Ｈ区ＳＤ—202内の第３～13層からの出土である。Ｐ—020は底部である。底径は17.9cm、残存高10.0cmを測る。外面はヘラ削りのあと不定方向のナデ調整を施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面とも鈍い黄橙色を呈する。25—Ｇ区ＬＳＤ—01からの一括出土である。Ｐ—021は口縁部である。口径は29.4cm、残存高5.2cmを測る。胎土は緻密堅緻、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。その胎土・色調などから備前焼の大甕と考えられる。26—Ｄ区ＳＤ—214からの出土である。Ｐ—022は口縁部である。口縁部はほぼ直立し端部で玉縁状を呈する。口径は30.6cm、残存高7.4cmを測る。胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面とも黒褐色を呈する。なお表面の剝離が著しい。ＳＤ—201内からの一括出土である。

壺（第75図Ｐ—023、第77図Ｐ—034）

高台を有する壺であると思われる。高台高1.5cm、高台径13.8cm、残存高13.3cmを測る。外面は格子目文の叩きを、一部にはヨコナデ調整を施す。内面にはヨコナデ調整を行う。焼成によるひずみが大きく、一部器壁が胎土内部の空気により膨らみ、変形している。胎土は密、焼成は不良、色調は外面が赤黒色、内面がオリーブ灰色を呈する。21—Ｇ区ＲＳＤ—01の上層からの一括出土である。Ｐ—034はその復元形より双耳壺であると思われる。口径12.7cm、基部径14.5cm、残存高37.5cmを測る。体部より頸部の境付近に耳が取付けられ、口縁部付近では一旦折り返しが付けられる。内外面とも器壁はうすく、ヨコナデ調整を施す。体部外面には刷毛状の施文具によって上段から下段にかけて流れ状の文様が描かれている。胎土は密で、焼成は良好である。色調は一部赤褐色を呈するが、地色は褐色、刷毛文は黒褐色に発色する。この壺に類似するものが近隣に見られないため、中国産とも考えられる。34・35—Ｈ区ＳＤ—202内の最下層、16・18層、３～13層等の接合資料である。一気に投棄したかの痕跡が見られる。

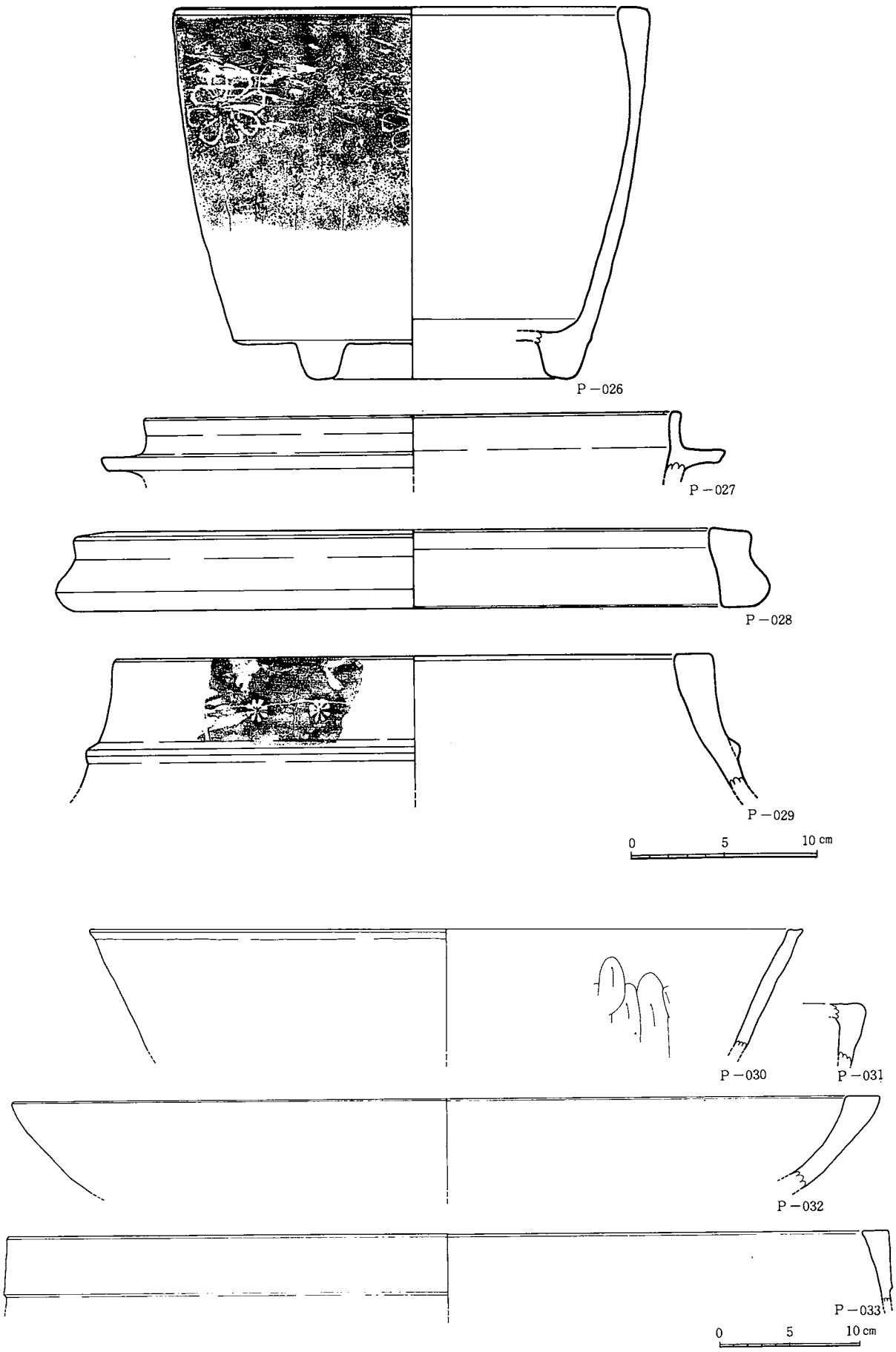
埦（第75図Ｐ—024）

埦形の器形をなすと考えられ、口径は21.0cm、残存高5.0cmを測る。外面に煤が付着しているため観察が出来ない。胎土は密、焼成は良好、色調は内面灰白色を呈する。

火舎（第76図Ｐ—026、029、033）

火舎は計３点出土している。Ｐ—026は３個の突起状足を持つ火舎である。口径は25.5cm、器高19.9cmを測る。足は胴部から一体に取り付けられ、やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚する。体部上段には径4.2cm、８葉の刻花文が見られる。胎土は密、焼成は良、色調は外面が灰黄色、内面が黒褐色を呈する。23—Ｆ区ＳＫ—221内の出土である。この遺物の時期は室町時代のものと考えられる。Ｐ—029は口径が37.2cm、残存高が7.2cmを測る。体部から口縁部にかけてやや内傾し、端部は平らである。体部に一条の突帯を持つ。外面はヨコナデ調整を施すが、口縁端部と突帯とに区分された箇所に、径1.3cm、８葉の小型の刻花文が見られる。胎土は密、焼成は良、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。ＳＤ—201からの一括出土である。Ｐ—033は口径63.0cm、残存高5.2cmを測る。外面はヨコナデ調整を施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。器壁が荒れ観察しづらい。26—Ｆ区ＬＳＤ—01からの一括出土である。

羽釜（第76図Ｐ—027）

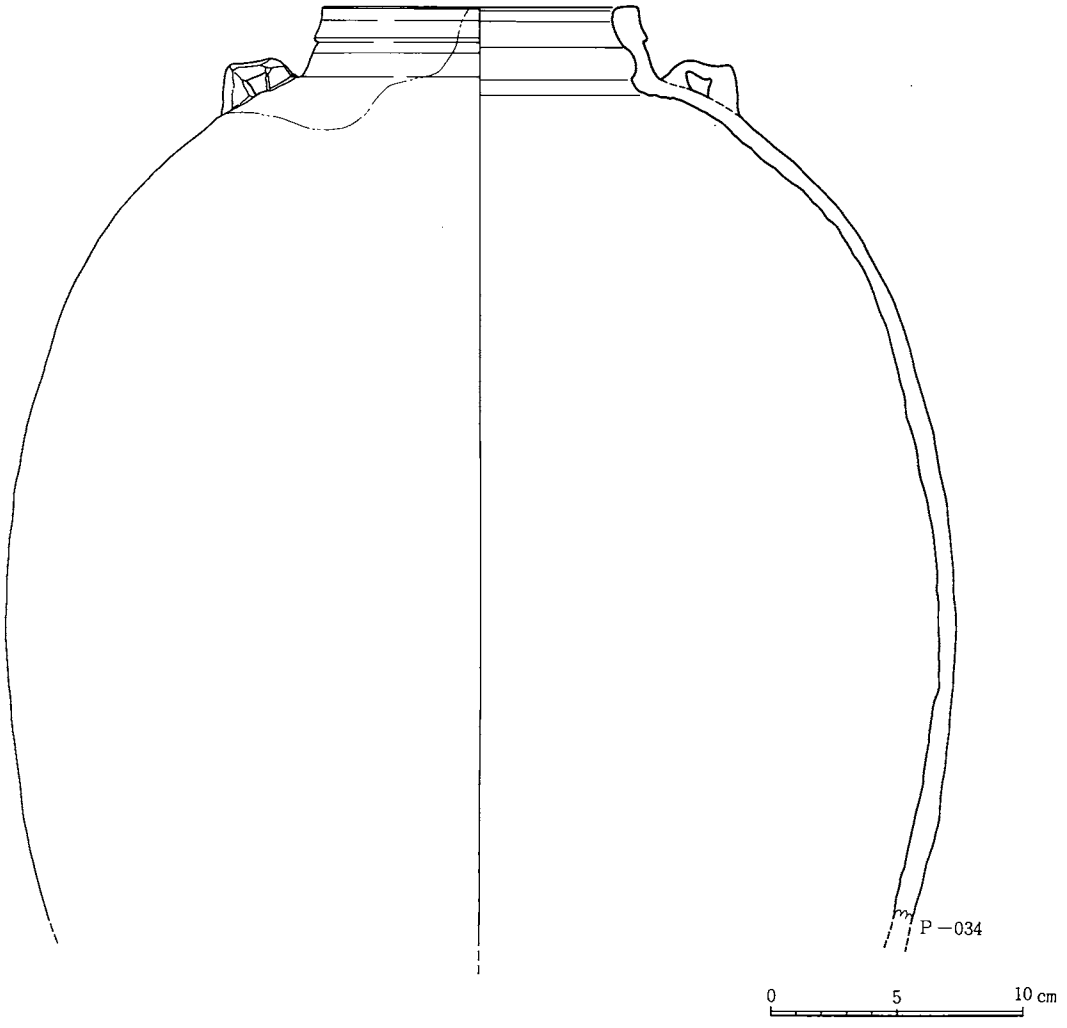


第76図　中世陶器（火舎・羽釜・器台・鉢）実測図

口径は29.2cm、残存高3.2cmを測る。全面にわたりヨコナデ調整を施す。器壁は薄い。胎土は緻密、焼成は良好、色調は灰色を呈する。32・33—G・H区SD—208からの出土である。

器台（第76図P—028）

いわゆるドーナツ型の器台で、口径32.2cm、底径36.6cm、器高4.2cmを測る。全面にわたりヨコナデ調整を施す、胎土は密、焼成は良好、色調は内外面とも灰黄褐色を呈する。LSD—01からの一括出土である。



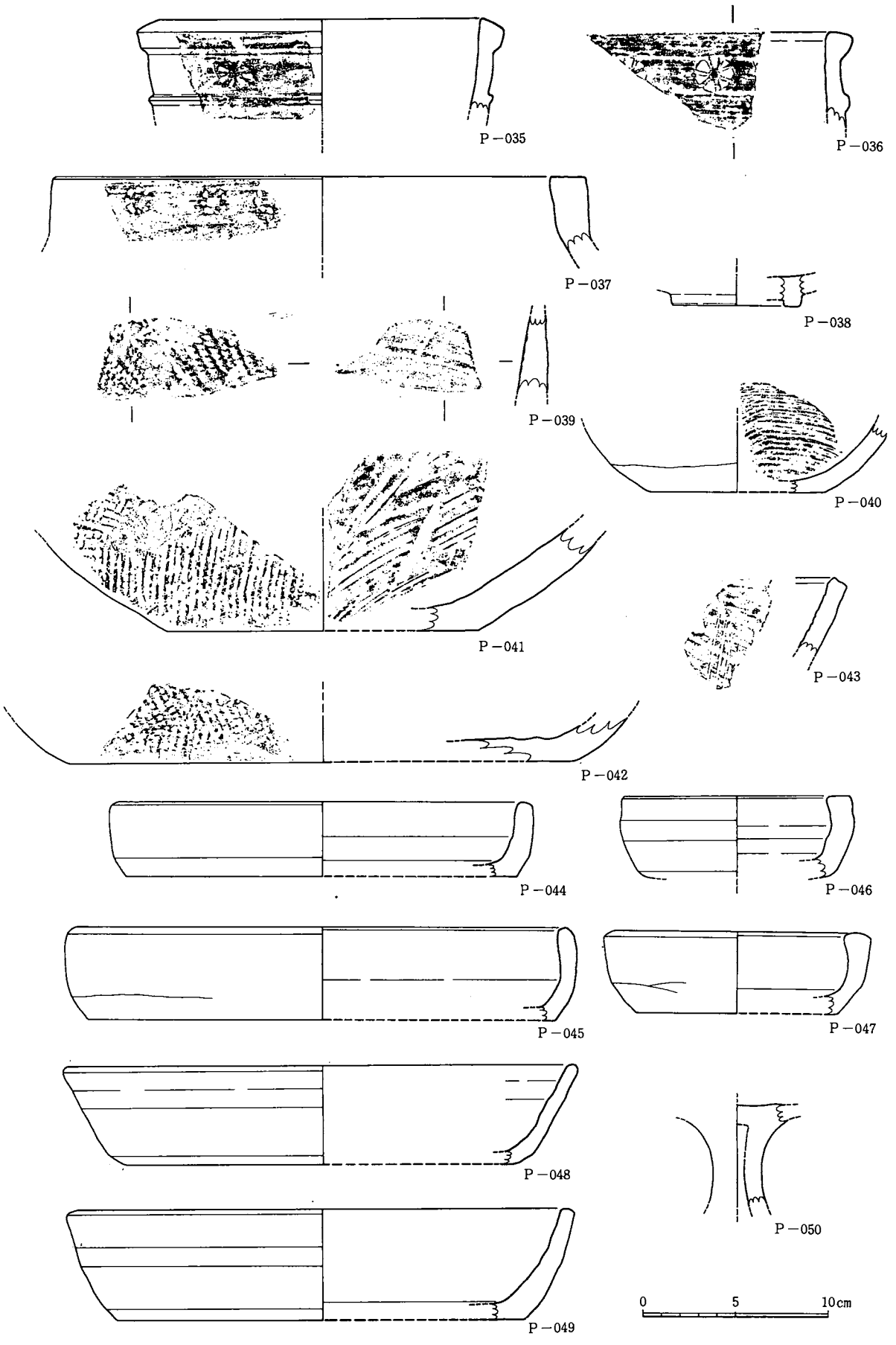
第77図　中世陶器（壺）実測図

瓦質土器

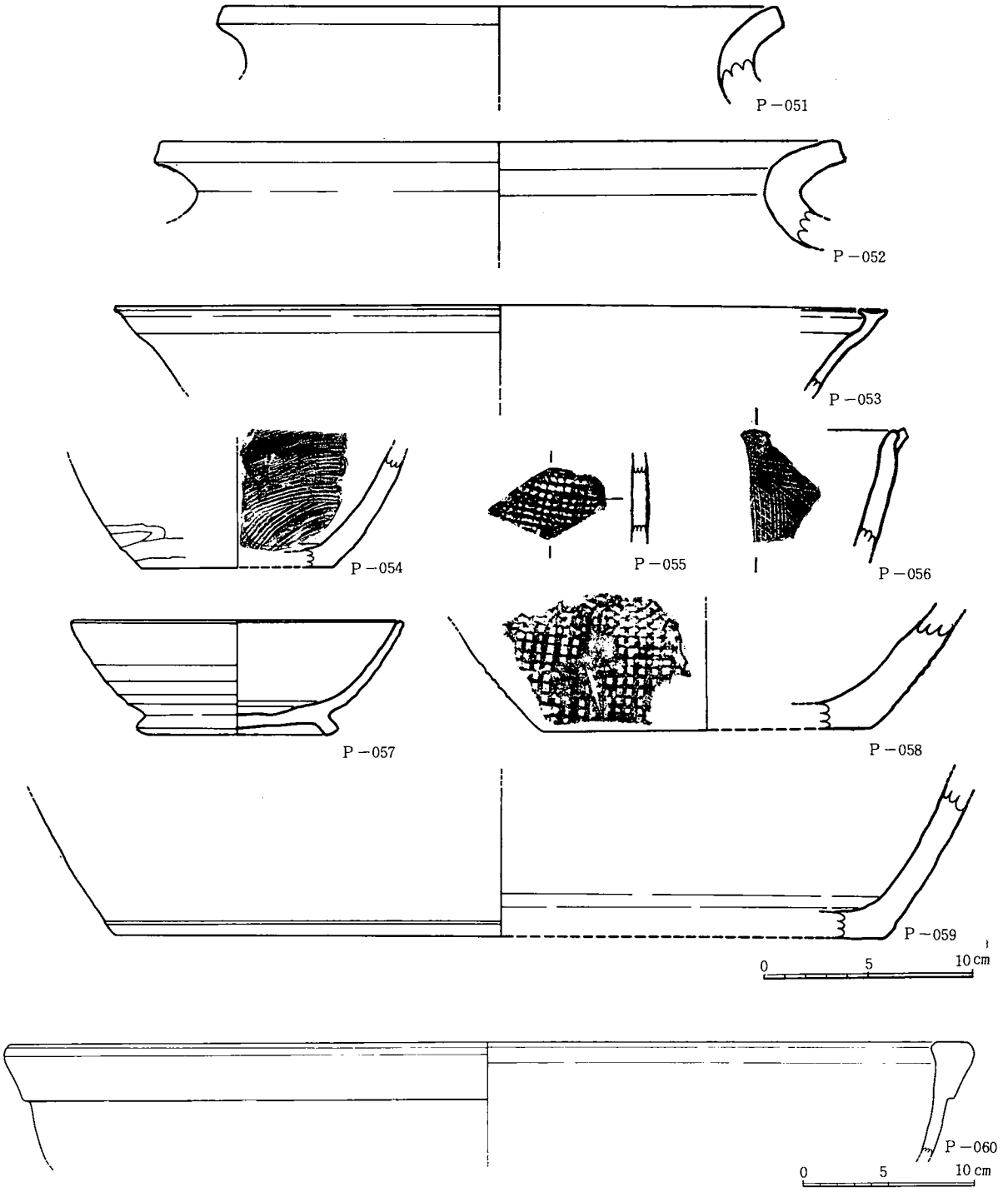
この土器に属する器種は火舎、鉢、高坏、壺である。

火舎（第78図P—035～037）

口縁部のみ3点出土している。P—035は口径17.5cm、残存高5.0cmを測る。体部からやや外傾して立ち上がる。体部には一条の突帯を持ち、口縁端部は断面方形状を呈する。この両者の区画する箇所に、径1.7cm、8葉のやや不鮮明な刻花文が施されている。胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面とも黒灰土を呈する。21—F区SD—212内からの出土である。P—036は035に類似するが傾き等不明である。残存高は4.8cmを測る。体部には一条の突帯を持ち、口縁端部は断面方形状を呈する。また035同様この区画域に径2.1cm、7葉の鮮明な刻花文を持っている。胎土は密、焼成は良、色調は内外面とも黒灰色を呈する。21—F区SK—203内からの出土である。P—037は体部から屈曲し、口縁部は直立する形状を示す。口径は28.8cm、残存高4.2cmを



第78図　中世瓦質土器（火舎・鉢・高坏）実測図



第79図　中世瓦質土器（甕）、須恵系土器実測図

測る。口縁部外面に径1.4cm、弁の形状が丸い８葉の刻花文が施されている。胎土は密、焼成は良、色調は暗灰色を呈する。26—Ｆ区ＬＳＤ—01内からの一括出土である。

鉢（第78図Ｐ—039～049）

この器種は大きく分けて２つに分けられる。Ⅰ類は大型のもので体部の外面には格子目文の叩きを、内面にはハケ目調整をもつものである。Ⅱ類は中型もしくは小型のもので、外面はヨコナデ調整を全体に施し、底部との境界付近はヘラケズリを行う類である。

Ⅰ類（Ｐ—039～042）

Ｐ—039は底部から胴部にかけての破片である。外面は格子目の叩きを施し、一部ナデ消す。内面はハケ目

の調整を施す。26・27—F・G区SD—216上層からの出土である。P—040は底部片で底径9.3cm、残存高3.7cmを測る。体部はやや内湾気味に立ち上がり、外面は一部ヘラ削りを、内面はハケ目調整を行う。胎土は密、焼成は良、色調は内外面とも灰色を呈する。34—G区SD—202内の出土である。P—041は底部片で底径16.8cm、残存高5.4cmを測る。外面は格子目状の叩きを施し、一部ナデ消す。内面は強いハケ調整を行う。胎土は密、焼成は良、色調は外面が灰色、内面が暗灰色を呈する。34—F区SD—202の第1層からの出土である。

P—042は底部片で底径27.2cm、残存高2.5cmを測る。外面は底部端まで格子目文の叩きを、内面はヨコナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は内外面とも灰黄色を呈する。35—K区SD—202内の一括出土である。P—043は口縁部片で、口径の復元はできないが、残存高4.2cmを測る。内面には強いハケ目調整が見られる。胎土は緻密、焼成は良、色調は内外面とも灰黄色を呈する。25—G区LSD—01からの一括出土である。

II類（P—044～049）

この類のものをさらに口縁部の形状により3つに分類した。

II—a類（P—044・045）

体部から口縁部に向って内湾気味に立ち上がる。P—044は口径21.8cm、器高4.0cm、底径21.0cmを測る。外面はヨコナデ調整を、そして下部にはヘラ削りを、内面はヨコナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は灰褐色を呈する。34—G区SD—208の一括出土である。P—045は口径26.2cm、器高5.0cm、底径25.2cmを測る。外面はヨコナデ調整を、そして下部には強いヘラケズリを施す。内面はヨコナデ調整を行う。胎土は緻密、焼成は良好、色調は黄橙色を呈する。23—F区LSD—01内第1層からの出土である。

II—b類（P—046、047）

体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚する。P—046は口径12.1cm、残存高4.2cmを測る。全面にわたりヨコナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は黒褐色を呈する。25・26—F・G区LSD—01内第1層からの出土である。P—047は口径13.3cm、器高4.4cm、底径10.8cmを測る。外面はヨコナデ調整を、下部には強いヘラ削りを行う。内面はヨコナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は外面が黒色、内面が灰色を呈する。34—F・G区SD—208第2層からの出土である。

II—c類（P—048、049）

体部から口縁部にかけてストレートに立ち上がり外傾する。P—048は口径27.4cm、器高5.4cm、底径31.2cmを測る。全面にわたり丁寧なヨコナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は内外面とも黒褐色を呈する。25—E区LSD—01の上層一括出土である。P—049は口径26.6cm、器高は6.0cm、底径は22.0cmを測る。全面にわたりヨコナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は黒褐色を呈する。25—E区LSD—01の上層の出土である。

高坏（第78図P—050）

基部から脚部にかけての破片である。全面にわたりヨコナデ調整を施す。胎土は緻密堅緻、焼成は良好、色調は内外面とも灰色を呈する。34—G区SD—201 の第11層からの出土である。

壺（第79図P—051、052）

口縁部の破片が2点である。P—051は口径26.5cm、残存高4.2cmを測る。外面は叩きを施し、その後ナデ消す。内面はヨコナデ調整を施す。胎土は緻密、焼成は良、色調は内外面とも暗灰色を呈する。33—E区SF—207直上からの出土である。P—052は口径32,6cm、残存高5.2cmを測る。外面は格子目文の叩きを施し、その後ナデ消す。内面はヨコナデ調整を施す。胎土は緻密、色調は良好、色調は内外面とも灰白色を呈する。33—E区SF—207の直上からの出土である。

P—053は器形が不明であるが一応ここでは中世陶器に含める。受部を持ち、大型の身とも考えられる。

口径は36.0cm、残存高3.8cmを測る。全面にわたりヨコナデ調整を施す。胎土は緻密堅緻、焼成は良好、色調は内外面とも黒褐色を呈する。25—E区LSD—01の一括出土である。

須恵系土器（第79図 P—054～060）

この土器に属する器種は鉢、擂鉢、埦、壺、甕である。

鉢（P—054）

底部片であり、底径は9.2cm、残存高は4cmを測る。外面は指圧による調整を、そして下段にはヘラ削りを行う。内面はハケ目調整を施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は外面が灰色、内面が灰褐色を呈する。35—I区SD—203からの出土である。

擂鉢（第79図P—056）

P—056は口縁部の破片であり片口となる。残存高は5.5cmとなる。外面はヨコナデ調整を、内面はハケ目を横位に、その後斜方向、縦方向に条線を施す。胎土は密、焼成は良好、色調は内外面とも灰色を呈する。35・36—I・J区SD—203の一括出土である。

埦（P—057）

高台を有する。口径は15.7cm、器高は4.5cm、高台径は8.6cm、高台高は0.9cmを測る。器壁は荒れるが、全面にわたりヨコナデ調整を施す。胎土は密であるが、焼成は不良、色調は内外面とも灰白色を呈する。32—D区RSD—01からの一括出土である。

壺（P—058、059）

P—058は底部片であり、底径は15.8cm、残存高5.2cmを測る。外面は格子目文の叩きを、内面はヨコナデ調整を施す。胎土は緻密、焼成は良、色調は全面にわたり淡黄色を呈する。25・26—E区RSD—01からの一括出土である。P—059は底部片であるがかなり大型である。底径は37.0cm、残存高7.1cmを測る。外面は不定方向のナデ調整を、内面はヨコナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良、色調は外面が黄灰色、内面が青灰色を呈する。SX—201の下層からの一括出土である。

甕（P—060）

口縁部片で大型のものである。口径56.1cm、残存高6.5cmを測る。外面はヨコナデ調整を行うが一部粗いケズリも有する。内面はヨコナデ調整を施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は明黄褐色を呈する。SD—202・208の交差部分からの一括出土である。

磁器（第80・81図）

今次調査において多数の磁器が出土したが、実測可能な分は29点であった。分類は青磁と白磁に分け、さらに窯の系列により細分した。

Ⅰa類（第80・81図C—001～C—025）

青磁類でいわゆる龍泉窯系の一群である。C—001は体部内面に沈線により上位には二条の横線を、下位には草花文かと思われる文様が描かれている。口径は13.5cm、残存高は4.0cmを測る。胎土は特徴で白色、釉薬は青紫灰色をなす。なお、口縁部に口兀の痕跡が見られる。SX—201の上層からの出土である。C—002は体部外面に削り出しの鎬単弁が三葉見られる。体部から一端立ち上がった後口縁部付近でさらに外傾する。胎土は緻密で灰白色、釉薬は暗オリーブ色を呈している。残存高5.2cmを測る。34—F区SD—208の2層からの出土である。C—003は体部外面に、削り出しの鎬単弁を持つ。胎土は緻密で灰白色、釉薬は青緑色を呈する。体部から内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で屈曲し、外反する。残存高は3.8cmを測る。RSD—01の1層からの出土である。C—004は体部外面に削り出しの鎬蓮弁が見られる。胎土は緻密で灰白色を、釉薬は青緑色を呈する。なお口縁部付近でやや肥厚する。残存高2.7cmを測る。LSD—01の第1層からの出土である。C—005は体部外面に削り出しの鎬複弁を持つ。胎土は灰白色を、釉薬は青緑色を呈する。口縁部は内側

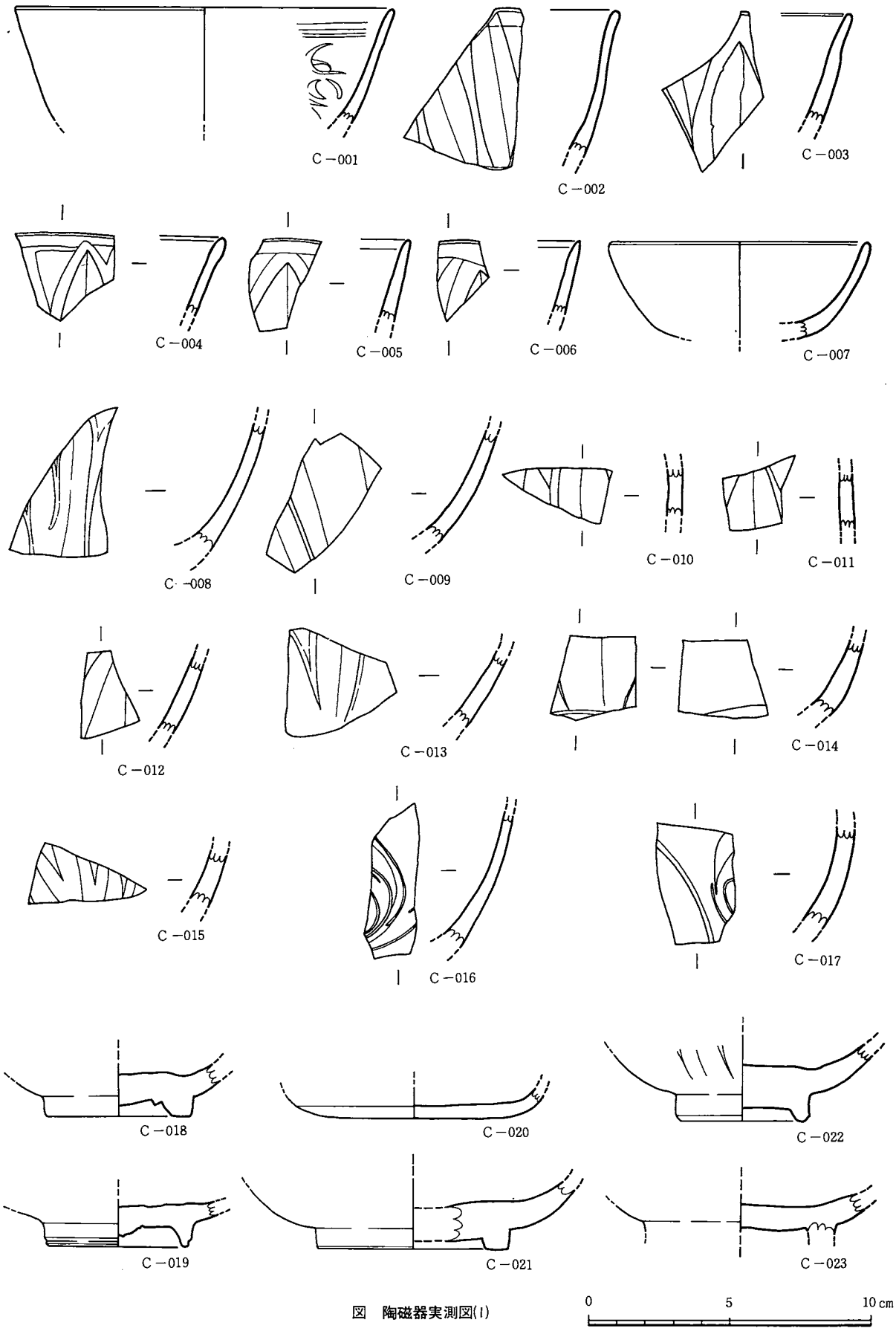
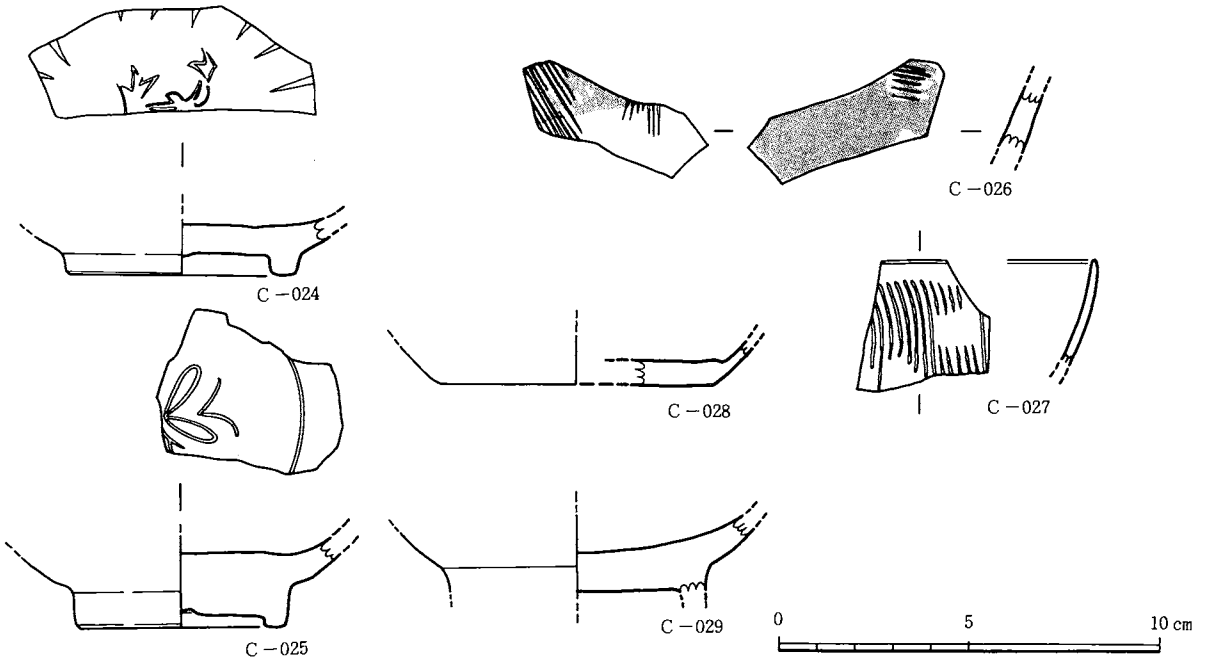

C－001
C－002
C－003
C－004
C－005
C－006
C－007
C－008
C－009
C－010
C－011
C－012
C－013
C－014
C－015
C－016
C－017
C－018
C－020
C－022
C－019
C－021
C－023
0
5
10 cm

図　陶磁器実測図(1)



第81図　陶磁器実測図(2)

がやや入り込み、稜を有する。ＲＳＤ—01の第１層からの出土である。Ｃ—006は体部外面に鎬単弁を持つ。胎土は緻密で灰白色を、彩薬は青緑色を呈する。ＲＳＤ—01の第２層からの出土である。Ｃ—007は椀形をなすが底部形は不明である。口径9.3cm、残存高3.5cmを測る。文様はなく無文である。34—Ｆ区ＳＤ—202内の第４層からの出土である。Ｃ—008は体部外面に削り出しの鎬蓮弁を持つ。胎土は緻密で灰白色、釉薬は明緑灰色を呈する。ＳＤ—201からの一括出土である。Ｃ—009は体部外面に削り出しの鎬の弁を持つが、単弁か複弁かは不明である。胎土は緻密で灰白色、釉薬は青緑色を呈する。ＬＳＤ—01の１層からの出土である。Ｃ—010は体部外側に、削り出しの鎬蓮弁を持つ。胎土は緻密で灰白色を、釉薬は青緑色を呈する。ＬＳＤ—01の第１層からの出土である。Ｃ—011は体部外面に、削り出しの鎬複弁を持つ。胎土は緻密で灰白色を、釉薬は青緑色を呈する。一括出土である。Ｃ—012は鎬単弁を持つ。胎土は緻密で灰白色で、青紫灰色を呈する。ＳＸ—201の一括出土である。Ｃ—013は体部外面に削り出しの鎬蓮弁を持つ。胎土は緻密で灰白色で釉薬は明緑灰色を呈する。ＳＤ—201の一括出土である。Ｃ—014は体部外側には削り出しの鎬単弁を、見込み部には沈線を一条施す。胎土は緻密で灰白色、釉薬は青緑色を呈する。ＬＳＤ—01からの一括出土である。Ｃ—015は体部外側に削り出しの鎬蓮弁を持つ。胎土は緻密で灰白色、釉薬は青緑色を呈する。ＳＤ—214の一括出土である。Ｃ—016は体部内面に沈線で文様を描く。胎土は緻密で灰白色、釉薬は青緑色を呈する。ＬＳＤ—01の出土である。Ｃ—017は体部内面に沈線による飛雲状の文様を描く。胎土は緻密で灰白色、釉薬は青緑色を呈する。ＳＤ—202の第11層からの出土である。Ｃ—020は底部径5.5cmを測る皿である。ヘラ削りによる切り離しの痕跡を有する。Ｃ—022は体部外面に沈線による文様を有する。高台は削り出しで、底部は1.5cmとぶ厚い。胎土は白色で、釉薬は青緑色を呈する。ＳＤ—202からの出土である。Ｃ—023はＳＦ—207・208からの出土である。Ｃ—024は見込み部に沈線で草花文状のものと、放射線状の直線を配している。胎土は緻密で灰白色を、釉薬は青緑色を呈している。高台径は6.1cmを測る。ＬＳＤ—01の上層からの出土である。Ｃ—025は見込み部中央に草花文、体部の境界部に一条の沈線を有している。胎土は緻密で灰白色を、釉薬は青緑色を呈する。ＬＳＤ—01の上層からの出土である。

Ⅰｂ類（第81図Ｃ—026、027）

青磁で洞安窯系の一群である。Ｃ—026は体部外面に全面釉薬がかかり、横位の櫛描きの文様を、内面には上部のみ釉薬がかかり、同様の描きが二方向から施されている。なお胎土は緻密で灰白色を、釉薬は灰オリーブ色をなす。ＳＤ—208の第２層下層の一括である。Ｃ—027は口縁部内面に同様の櫛描きの文様を持つ。胎土は緻密で灰白色を呈する。ＬＳＤ—01の上層からの一括出土である。

Ⅱ類（第81図Ｃ—028、029）

白磁の一群である。Ｃ—028は皿で底径7.3cmを測る。文様はなく、胎土は緻密で白色を、透明な釉薬を施す。ＳＤ—202からの一括出土である。Ｃ—029は高台付の椀であろう。残存高は2.3cmを測る。胎土は緻密で白色を、透明な釉薬を施す。34—Ｈ区ＳＤ—202の出土である。

銅銭

本調査区から出土した銅銭は、北宋銭６枚、江戸時代寛永通寶３枚、不明１枚である。

北宋銭でⅢ区33・34—Ｈ区ＳＤ—02ピット内から一括して検出したものは、至道元寶（995～７）、祥符通寶（1008）、景祐元寶（1034）、元豊通寶（1078）である。

Ｂ—１の至道元寶とＢ—５の元豊通寶は、肌面の文字が行書で描き、Ｂ—４の景祐元寶は楷書で描き、Ｂ—３の元豊通寶は篆書と思われる。

Ｂ—６天禧通寶（1017～21）はⅢ区35—Ｆ区ＳＤ—28褐色土層内から出土し、肌面の文字は楷書と思われる。[註(1)]

寛永通寶銭については、Ｂ—７の古寛永（1626）はⅢ区34—Ｇ区ＳＤ—08Ⅰ層から出土し、Ｂ—８の新寛永（1661～73）はⅢ区26—Ｄ・Ｅ区ＳＤ覆土一括から出土した。古・新寛永通寶については、古寛永と呼ばれるものは「寶」の足はス字になり、新寛永は「寶」の足がハ字に変化する。新寛永の肌背に「文」を描かれており、寛文年間の亀戸銭と思われる。[註(2)]

Ｂ—９の寛永通寶は、Ⅲ区26—Ｄ・Ｅ区ＬＳＤ覆土一括から出土し、肌面文字は小字である。

Ｂ—10は、Ⅲ区ＳＤ—08Ⅰ層から出土した。面背の磨滅が激しく、文字解説は不可能であるが、量目の重さなどから観察すると、品位は銀か白銅、或いはニッケルの可能性もある。

北宋銭については、968年宋通元寶～1125年宣和通寶まで35種類が鋳造され、渡来銭として我が国に輸入された。特に北宋銭の中でも元豊通寶・皇宋通寶・熙寧元寶などの流入が多く、本遺跡出土の元豊通寶は２種類あり、文字面の書体は篆書と行書で描かれている。

北宋銭の多量出土例は、山口県下右田遺跡から唐代開元通寶～李朝朝鮮通寶までの総数13,495枚が古備前焼壺から出土し、その中でも北宋銭は9,426枚（70.9%）と多量を占めている。[註(3)] 又、福岡県大宰府跡からは唐代開元通寶～明代洪武通寶まで46種、873点が出土し、北宋銭は736枚を占める。[註(4)] 熊本県下では、阿蘇郡長陽村河陽埋蔵銭出土地より唐代開元通寶～明代宣徳通寶までの1,850枚が陶製壺より出土している。[註(5)]

（河北）

註

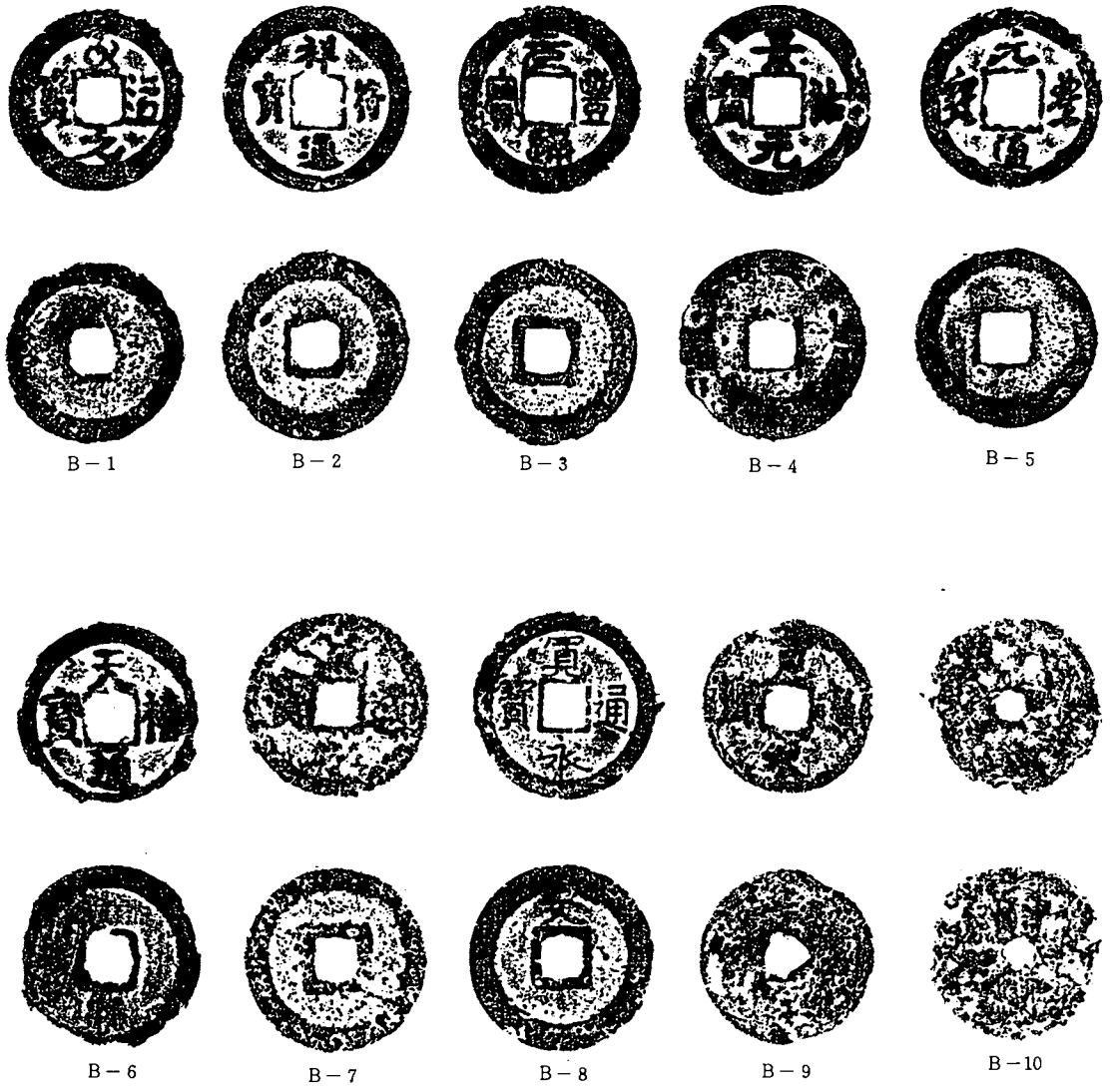
(1) 山口県教育委員会（1980）「下右田遺跡（第４次調査）」

(2) 寛永通寶銭は、寛文三年（1626）に商人佐藤新助が最初に鋳造し、その後幕府が引き継ぎ、寛永十三年(1636)に江戸・近江で官鋳し、全国通用の法定貨とした。明暦二年（1656）に一時中断したが、寛文八年（1668）から復活し、明治初期まで続いた。

(3) 註(1)に同じ

(4) 九州歴史資料館　1981「大宰府史跡（昭和55年度発掘調査概報）」

(5) 熊本県教育委員会　1976「熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表」



第82図　銅銭拓影図　（縮尺 原寸）

番　号	出土地点	古銭名	初鋳年	西　暦	外縁径 (mm)	内郭径 (mm)	外縁厚 (mm)	量　目 (g)	特徴　備考	時代
B－1	Ⅲ区33・34—H SD—202ピット内	至道元寳	至道年間	995～7	25.0	5.5	1.25	2.30	草書・無背	北宋
B－2	〃	祥符通寳	大中祥符元年	1008	26.0	5.75	1.25	3.10	楷書 小字・無背	
B－3	〃	元豊通寳	元豊元年	1078	31.0	5.0	1.50	3.80	篆書・無背	
B－4	〃	景祐元寳	景祐元年	1034	26.0	5.5	1.25	3.70	楷書に近い。無背	
B－5	〃	元豊通寳	元豊元年	1078	24.0	6.5	1.25	2.80	行書，無背	
B－6	Ⅲ区 35—F SD—228	天禧通寳	天禧年間	1017～21	26.0	5.75	1.00	2.80	郭が欠損，楷書，無背	
B－7	Ⅲ区 34—G SD—208 Ⅰ層	寛永通寳	寛永3年	1624	26.0	5.5	1.50	1.80	古寛永、「寳」字の足が「ス」～ス宝，無背	江戸
B－8	Ⅲ区 25・26—F LSD—01	〃	寛文年間	1661～73	26.0	5.0	1.20	3.30	新寛永，亀戸銭，正字背文	
B－9	26—D・E LSD覆土一括	〃	享保年間	1716～36	23.0	4.75	2.00	3.05	小字	
B－10	Ⅲ区 SD—208 Ⅰ層	不　明	—	—	22.0	4.0	—	5.10	白銅銭かとも思われる。	近代

第20表　出土銅銭一覧表

第Ⅵ章　近世・近代

1．遺　　構

江戸時代及び明治・大正時代に属する遺構は調査区全域に拡がり、その中で主要なものを取り上げてみたい。

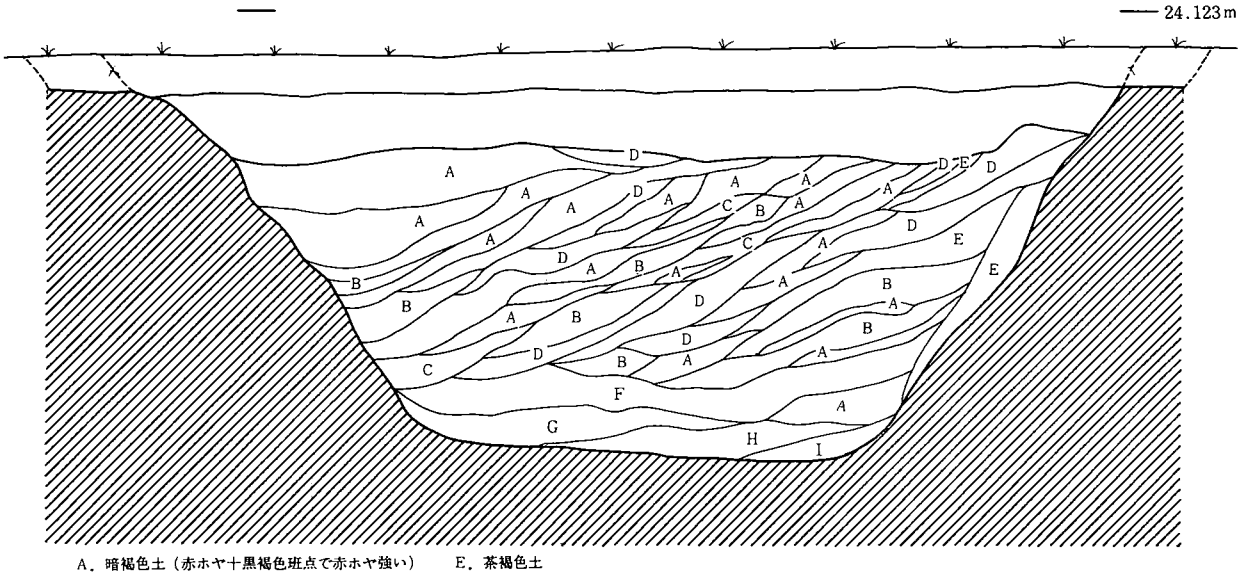
溝遺構

調査区に分布する溝遺構はその流向によって凡そ次の各群に仕分けられる（第53図参照)。それはＢ群（ＬＳＤ－01、214、215）Ｃ群（201、204、205、208）Ｅ群（217、218）その他の群（210、216）である。これらの各群にそって順次説明していきたい。

Ｂ群

ＬＳＤ－01（第81図）

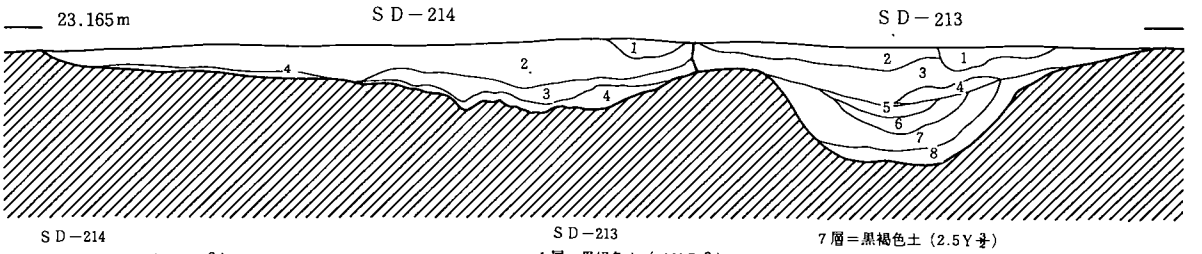
流向はＧ．Ｎ．－42°45′－Ｅを測る。Ｉ次調査の際検出され、溝は確認面よりさらに南西側に伸びるものと思われる。深さは2.1ｍを測り、その断面層序は特異である。Ａ～Ｄの４色の土層が交互に累層をなし、北側より急激に埋没した状況である。当初は台地上を切断する堀切状の遺構ではないかと思われたが、Ｇ層より寛永通寶銭（第80図、Ｂ－８)、及び近世染付が出土したため、その時期は江戸時代17世紀終末以降と考えられる。さらに多数の近世陶磁器が出土しており、その主な生産地は波佐見、網田、古伊万里、嬉野、黒牟田と多岐に渡っている。



第83図　ＬＳＤ－01埋土断面実測図

ＳＤ－213、214（第84図）

流向は213がＧ．Ｎ．－29°40′－Ｅ、214がＧ．Ｎ．－32°20′－Ｅを測る。断面の観察から214に対し213が掘り込む形状をなすが、出土遺物から江戸時代中頃と想定され、両者ともあまり時期差はないと考えられる。尚、



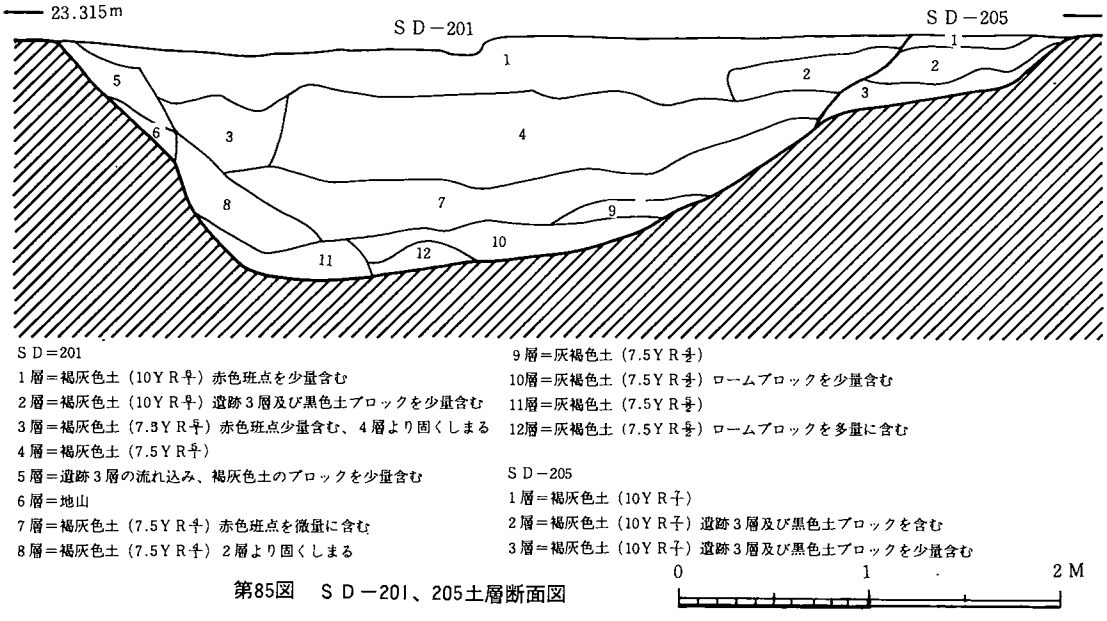
第84図　SD－213、214土層断面図

214の覆土中からは、台形石器が1点出土している。

C群

SD－201、205（第85図）

流向は201がG．N.－38°50′－W、205がG．N.－40°10′－Wを測る。断面の観察から205を201が掘り込む形状をなしている。201の溝最下層第11層からは中世の陶質の高坏が出土しているが、同レベルから近世染付が伴出している為、時期は江戸時代中頃と想定される。又、覆土中からナイフ形石器が1点出土している。205は南側を201に、北側をSK－201に切断され、全長は判明しない。溝内より木製柄の一部残存した鉄鎌が、また、貝を投棄した跡も検出された。隣接する204もその時期は201よりは下るが、ほぼ江戸時代中頃と推定される。



第85図　SD－201、205土層断面図

SD－208（付図第5図）

流向はG．N.－23°30′－W.を測り、C群とほぼ同方向を示すが、途中からN方向へ大きく59°屈曲する。SK－202、SD－202を切る。埋土は大きく3層に分けられ最下層の第6層内から古伊万里焼の椀（C－44）が出土しているので、時期はほぼ18世紀初頭であると推定される。尚、他に波佐見焼、有田焼の椀が見られ、上層から寛永通寶も出土している。

E群

この時期の他の群とは明らかに異なる流向を持つ。全Ⅰ区では、223、224、227、231、232、233の一群、全Ⅱ区では、217、218の各溝遺構である。しかしながら、いずれの遺構も時期を決定させる明瞭な遺物を持

たず、詳細は判断しかねるが、江戸時代に属すると思われる。又、206、207は後の時期に217、218を切り南走している。

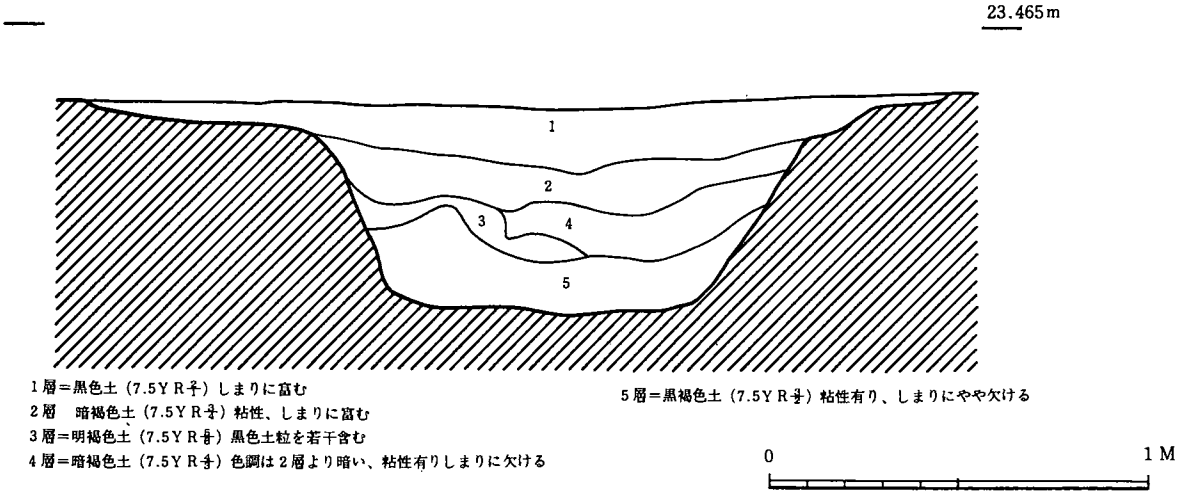
その他の群

ＳＤ－210

流向はＧ．Ｎ.－40°30′－Ｗを測り、Ｃ群に近似していて、201、205の延長かとも考えられるが、間に未買収地区を含むため即断は控えたい。出土遺物は平安時期のものが主流を占めるが、周囲のピット群からの混入と思われる。

ＳＤ－216（第86図）

流向はＧ．Ｎ.－69°20′－Ｗを測る。埋土は５層をなし、最下層から近世陶磁が出土している。又、上層からは複合口縁壺の破片が出土している。



第86図　ＳＤ－216土層断面図

土壙遺構

ＳＫ－207、244、245

溝遺構Ｂ群と一連の遺構である。

ＳＫ－201

溝遺構Ｃ群と同軸方向の一連の遺構と思われる。遺構の西側上場付近には「丸太状」のものを敷きつめたような、階段状の落ち込みが見られる。

ＳＫ－238

ＳＤ－208の下面に掘り込まれ、その埋土は溝最下層の埋土と同一のものである。溝遺構Ｃ群に含まれる。

道路状遺構

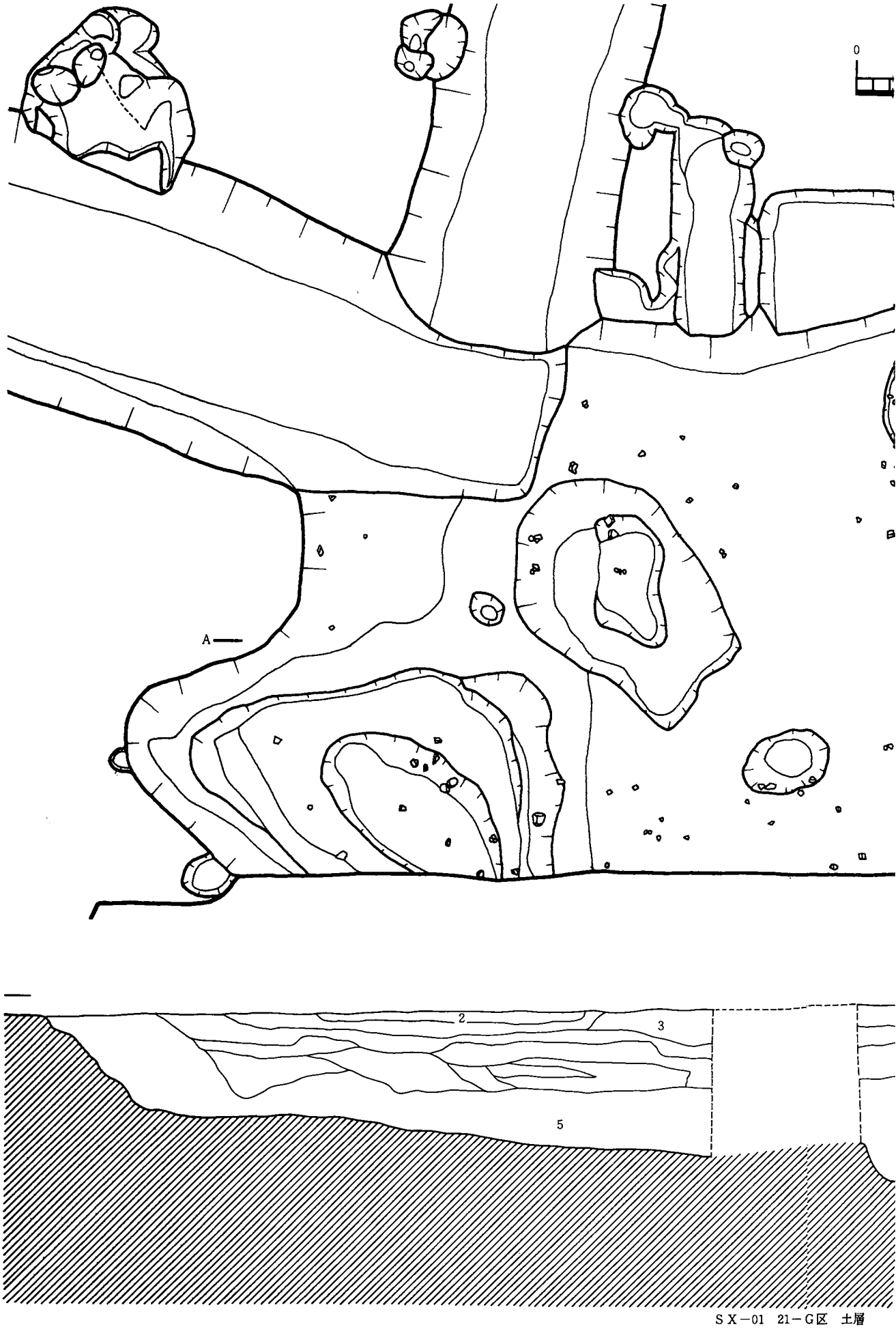
ＳＦ－202

出土遺物は全くないが、ＳＤ－217と主軸がほぼ同一方向であることや、ＳＤ－206、207に切られている点等から近世時期のものと思われる。

不明遺構

ＳＸ－01（第87図）

全Ⅰ区、21－Ｅ～Ｇ区に位置する。これに含まれる遺構はＳＫ－203、204、211、232、233、234、235、236、240、215、206、ＳＤ－212である、埋土は大きく２層に分かれ、上層はローム土に各種の土が混入し、間層状を呈している。所謂地山のローム土が逆転した状況である。下層はそれに対し褐色の単一層でＳＤ－212



SX－01　21－G区　土層

第87図　ＳＸ－201平面実測図

G.N.
埋土土色一覧表
1. ローム土（赤澄色）　橙色2.5YR 6/8
2. ローム土（澄　色）　橙色5YR 6/6
3. ローム土（黄　色）　浅黄橙色10YR 8/4
4. ローム土（黄色にやや白味がかかる）灰白色10YR 8/2
5. 褐色土　黒褐色10YR 2/3
6. 黒褐色土　黒色10YR 1.7/1
7. 2＋3の土色
A'
23.815m B'
B
A
23.815m
1
2
3
4
5

の最下層付近まで埋没する。第５層内より染付埦破片が出土しているが、時期の判定は困難である。時期的には遺物から近世かと思われるが、掘り下げが大規模であり、しかもロームまで達した後急激に埋め戻した事が想定できるため、近代時期の遺構ではないかとも考えられる。性格は全く不明であり、伝承等も聞かれない。

２．遺　　物

陶磁器

Ｃ－30　古伊万里染付蝶紋埦である。口径9.6cm、器高5.7cmを測り、口縁部は外湾する。胎土は密で灰白色を呈する。外面には黒色で濃淡を付けた染付がみられ、口縁部付近に１条、体部下位に１条の横線をまわす。内外面ともに透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作である。ＳＤ－ 208、202 交差部第１層からの出土である。

Ｃ－31　古伊万里染付草花文埦である。所謂波佐見窯のくわらんか手茶埦である。口径10.5cm、器高4.8cmを測る。器壁は肉厚で内湾気味に立ち上がる。胎土は緻密で焼成は良好である。外面には青色で濃淡をつけた文様が見られ、高台部外側には２条の横線をまわしている。さらに高台内側には染付の窯印も見られる。高台部畳付の部分を除き全面に透明の釉薬がかかる。江戸中期の作である。32－Ｈ区SD－208第１～３層からの一括資料である。

Ｃ－32　古伊万里染付文様埦である。残存高2.0cmを測る。体部が欠損している為文様構成は不明であるが、体部から高台部外側にかけて３本の横線が確認される。又、内面見込み部には染付で文様が描かれているが、詳しくは不明である。胎土は緻密で白色、染付は青色である。一部貫入が見られる。波佐見窯の産で江戸中期の作である。25－Ｅ区ＬＳＤ－01の上層一括資料である。

Ｃ－33　古伊万里染付鋸歯文埦である。口径9.1cm、器高4.3cmを測る。高台形は断面三角形を呈し、体部は内湾し立ち上がる。染付は青色で透明の釉薬が全面にかかる。胎土は密で灰白色である。江戸後期の作であり、ＬＳＤ－01からの一括資料である。

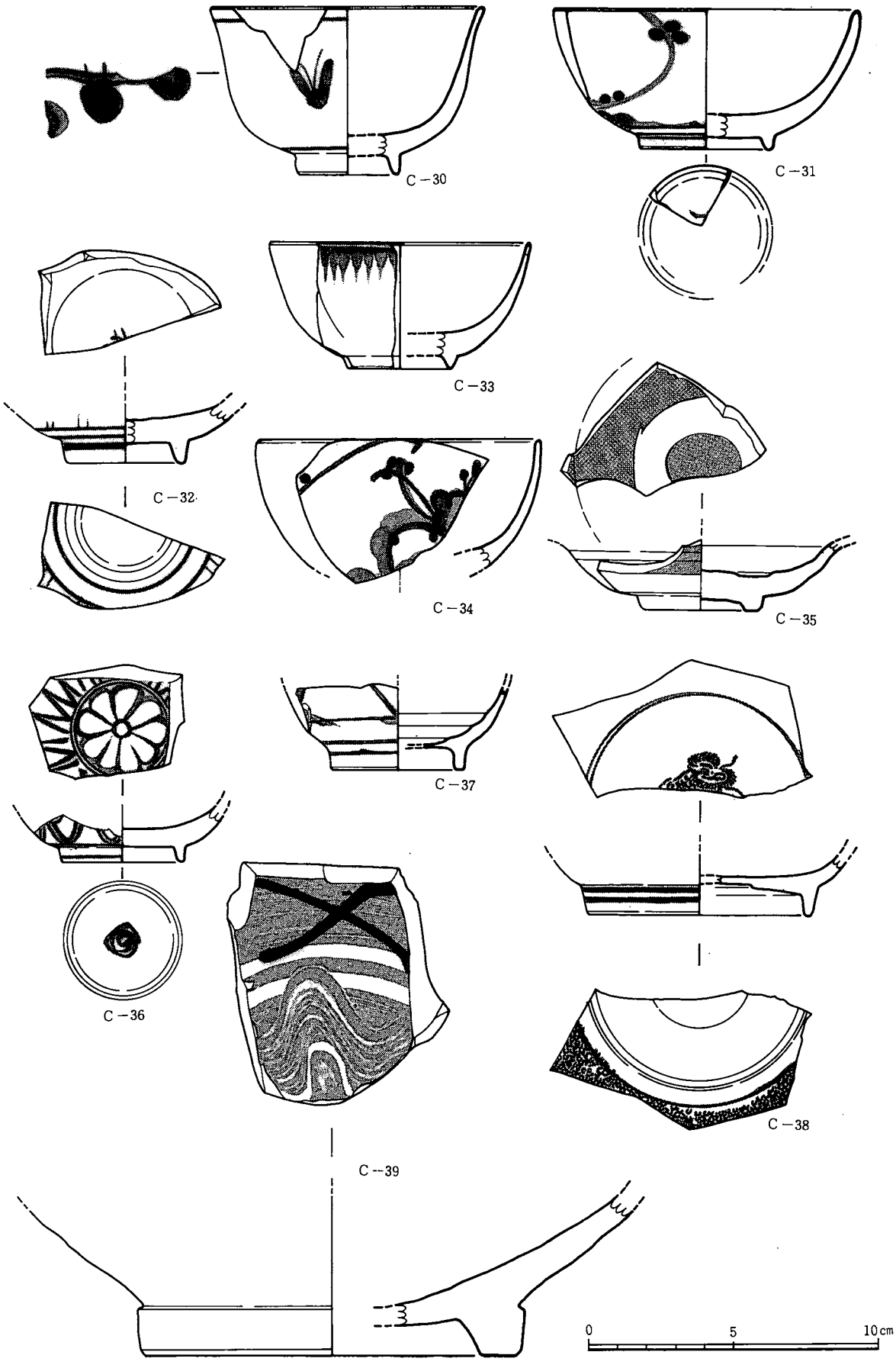
Ｃ－34　古伊万里染付草花文埦である。口径は9.8cm、残存高4.8cmを測る。胎土はやや疎で灰白色を呈する。染付は青色の濃淡を付している。透明の釉薬が全面にかかるが、焼成は余り良くない。江戸後期の作であり、ＬＳＤ－01からの一括出土である。

Ｃ－35　嬉野焼無文皿である。残存高2.5cmを測る。高台部は削り出されており、体部最下位にはヘラ削りの痕跡が見られる。又内面見込み部は蛇の目剝ぎを施している。胎土は密で灰褐色を呈し、釉薬の部分は黒褐色を呈する。江戸中期～後期の作である。ＬＳＤ－01上層からの出土である。

Ｃ－36　有田焼染付網文埦である。残存高2.8cmを測る。外面には二重の網文が施され、内面見込み部には九葉の菊文が付されている。胎土は緻密で灰白色を呈し、染付は淡い青色で、透明の釉薬が畳付の部分を除き全面にかかっている。又高台部天井には渦福の窯印が付けられ、これにより18世紀頃の作と考えられる。21－Ｆ区ＳＤ－212の出土である。

Ｃ－37　染付埦である。残存高3.0cmを側る。文様構成は不明であるが、染付は青色及び緑色を用いており、高台外側部には二本の条線を持つ。透明釉を外面にかけるが、埦内面部及び畳付は除かれている。時期・生産窯とも不明である。34－Ｅ区ＳＤ－208の第２層からの出土である。

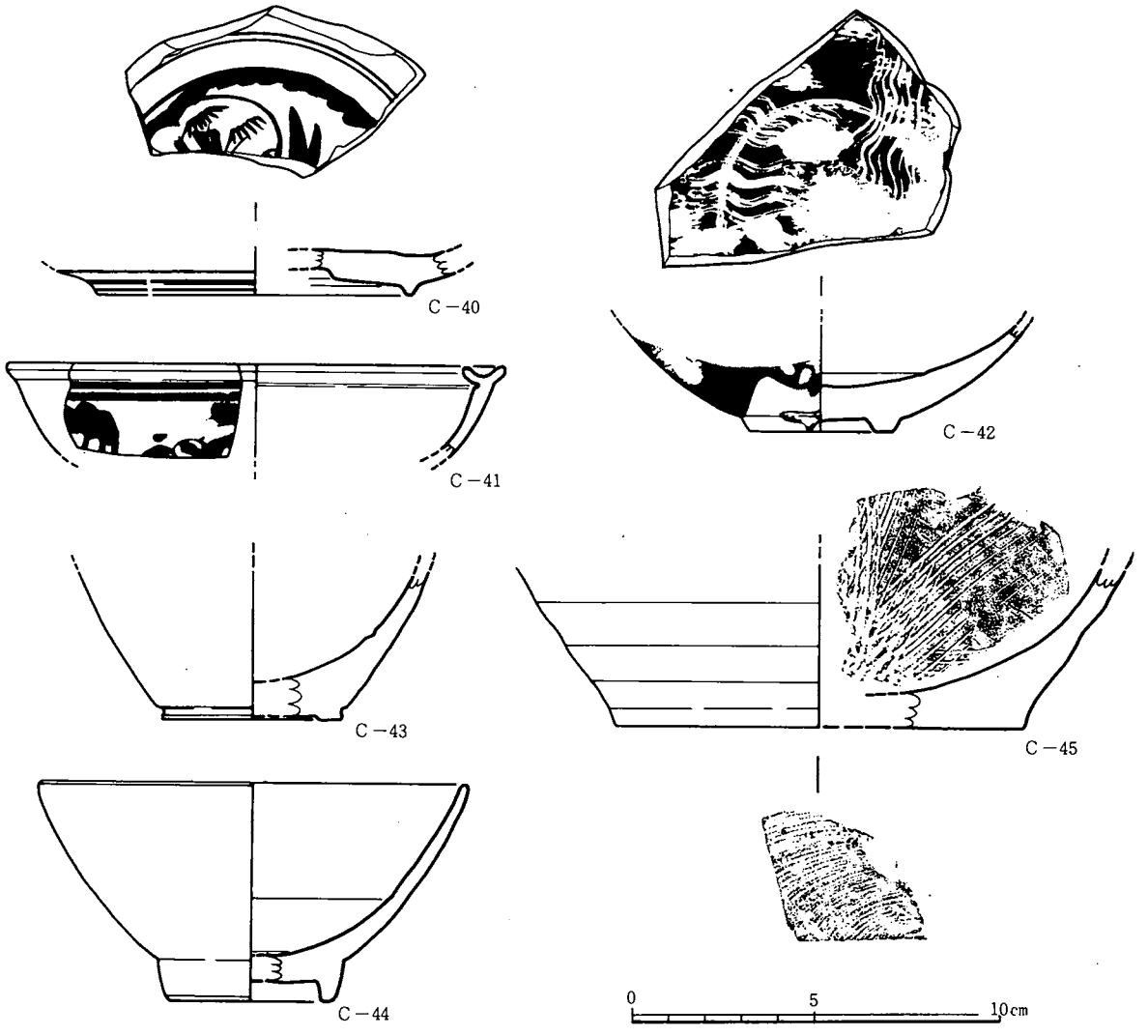
Ｃ－38　網田焼染付文埦である。残存高2.1cmを測る。外面には極小の半円弧の文様が付けられ、高台外部に２条の横線が、見込み部には２条の円文と中央部に龍の模様が施されている。染付は濃青紺色で、網田焼独特のそれである。透明な釉薬が全面にかかるが、畳付部及び高台天井外縁部は除かれる。胎土は密で灰白色を呈す。ＬＳＤ－01からの一括資料である。



第88図　近世陶磁器実測図(1)

C－39　庭木窯白化粧櫛描色釉流し大鉢である。残存高5.6cm、底径13.2cmを測る。胎土は密で赤褐色を呈する。内面見込み部は櫛描で白色の化粧を施すが、素地が所々現われる。さらにその上から銅釉を流し×印を付してある。江戸時代後期の作で21－F区ＬＳＤ－01内の第５層からの出土である。

C－40　染付草花文皿であろう。残存高1.3cmを測る。胎土は密で白色を呈する。内面見込み部には２条の円と草花文、高台外面部にも２条の横線がまわされ、青色の染付で濃淡が付けられている。尚高台天井部には釉薬が一部削り取られた跡がある。産地・時代とも不明である。



第89図　近世陶磁器実測図(2)

C－41　波佐見窯染付草花文埦と思われる。口径13.5cm、残存高2.5cmを測る。受部にはかえりを有し、この部位のみ釉薬は除かれる。染付は青紺色をなし濃淡を付ける。胎土は密で灰白色をなす。絵柄にややしまりがないので江戸後期の作であろう。29－G区ＳＤ－201からの出土である。

C－42　白化粧櫛描色釉流し埦である。残存高2.8cmを測る。胎土は密で赤褐色を呈する。内面見込み部には、櫛描で浅い沈線を施し、さらに円の沈線を付す。又重ね焼きの痕跡も見られる。透明の釉薬が全面にかけられるが、外面にはややまばらである。高台は張り出しで頭巾突起が見られる。34－G区ＳＤ－208落ち込み部からの出土である。

C－43　黒牟田窯埦である。残存高4.0cmを側る。胎土は密で褐色を呈する。釉薬は茶褐色で内外面ともかけられるが、高台部のみ除かれる。高台は張り出しで低い。25・26－F区ＬＳＤ－01上層一括の出土である。

江戸中～後期の作と考えられる。

C－44　古伊万里埦である。口径11.6cm、器高5.9cmを測る。胎土は緻密で白色を呈し、透明の釉薬が全面にかかる。内面見込み部には重ね焼きの痕跡があり、その周辺のみ釉のかかりが薄い。34－G区SD－208、202の交差部第6層からの出土である。江戸後期と考えられる。

C－45　黒牟田窯擂り鉢である。残存高4.4cm、底径11.1cmを測る。胎土は密で赤褐色を呈す。赤黒色の釉薬が内面及び一部外面に残る。見込み部条線の単位は6本と4本の二種であり底部は糸切り離しである。25－E区LSD－01の上層一括出土で、江戸後期の作である。

参考文献

東京国立博物館『日本出土の中国陶磁器』昭和53年

三上次男『有田天狗谷窯』有田町教育委員会　昭和47年

後藤茂樹『世界陶磁全集2・3』小学館　昭和52年

加藤唐九郎編『世界陶器大辞典』淡交社　昭和47年

村井真輝他『熊本県文化財調査報告第42集　境古墳群、境遺跡』熊本県教育委員会　1980年

高木正文『熊本県文化財調査報告書第43集　平原・野中遺跡』熊本県教育委員会　1980年

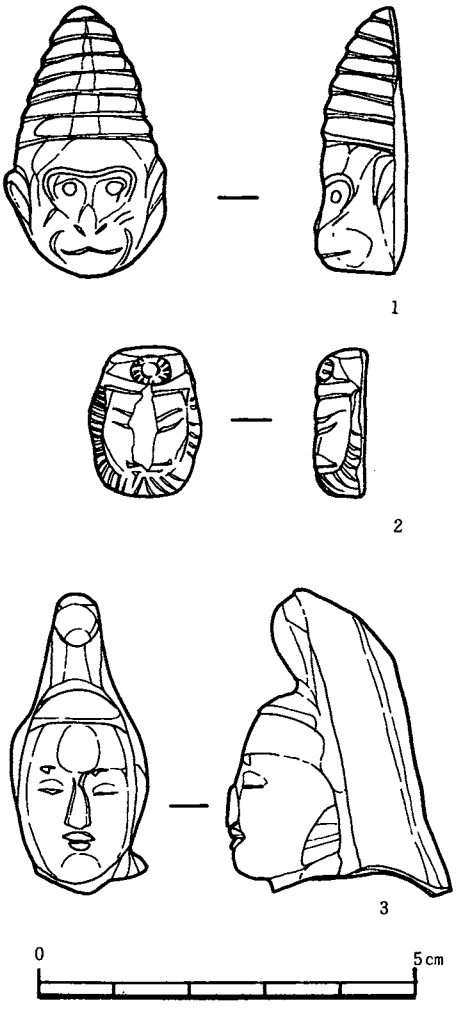
土製品（第90図）

民俗事例等で知られる「土メンコ」「畑人形」とも呼称される土製品が3点出土している。いずれも焼成は良好であり、表情も豊かである。

1　37－I・J区試掘トレンチからの出土である。全長3.5cm、幅2.1cmを測り猿面の表情を示している。

2　21－G区内からの一括出土である。全長1.9cm、幅1.5cmを測る。閻魔もしくは山伏を表わしているのかも知れない。

3　SD－201内の一括資料である。表裏の型にはめ込み、継目の跡をヘラで研磨した跡が見られる。頭部のみ残存し、内は中空である。菅原道真を模しているのではなかろうか。



第90図　土製品実測図

鉄製品（第91・92図）

鉄製品は、SD－201、SD－208、SD－214のI層から比較的に多く出土し、総数は71点である。

その内訳は、鉄鏃1点、鍬1点、鋏（かすがい）1点、板状鉄製品12点、鉄鎌1点、用途不明品26点を数える。

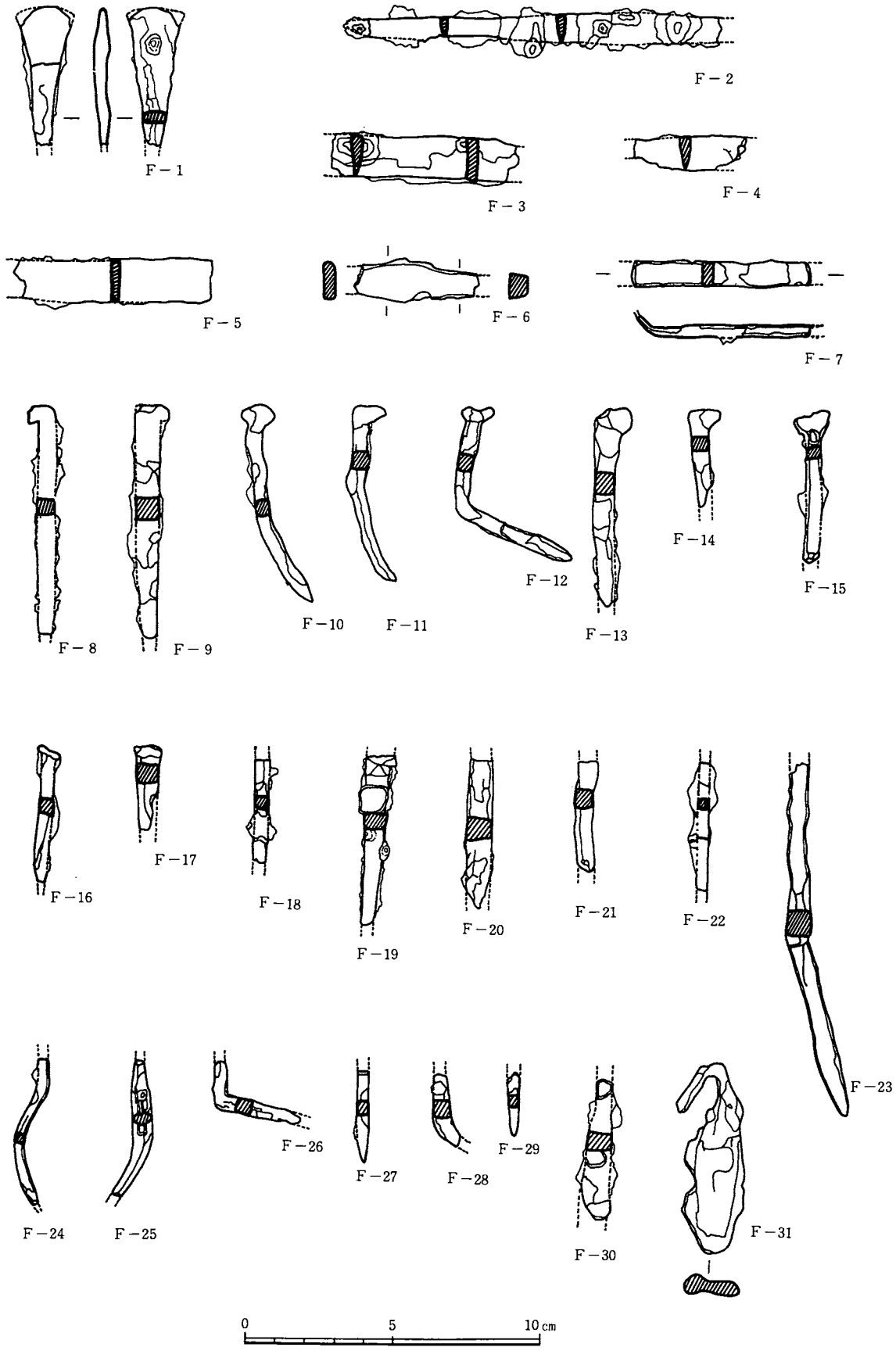
鉄鏃（F－01）

刃部はやや鋭利に欠け、一部に布帛がみられる。方頭広根をなし、茎尻を欠損する。

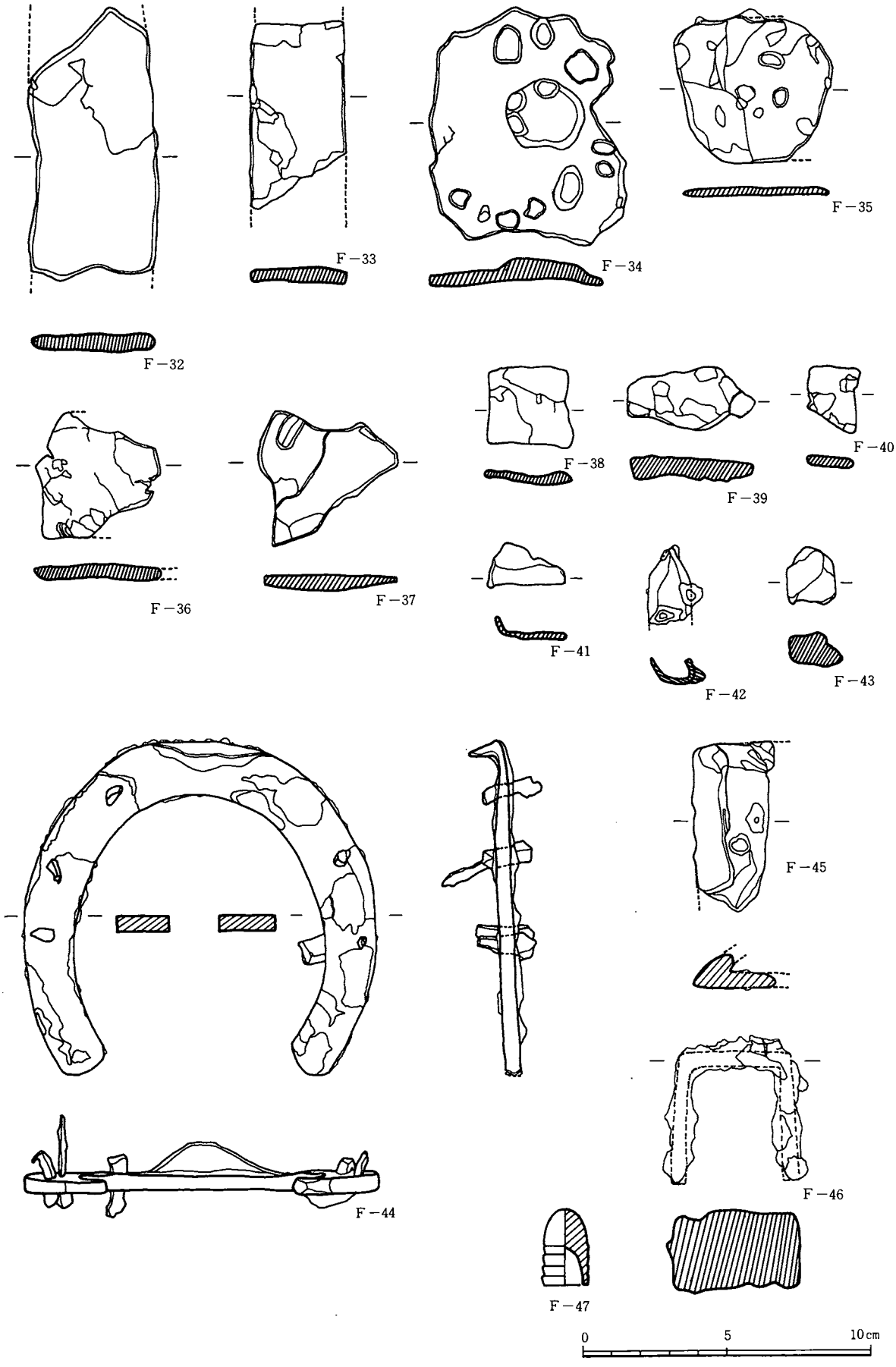
刀子（F－02～04）

02は刃部が残存するが、茎が欠損する。棟と刃部に布帛が残る。04は、棟・刃区から茎の部分が残存するが殆ど欠損する。

鉈（F－05～07）



第91図　鉄製品実測図(1)



第92図　鉄製品実測図(2)

鉄釘（F－08～29）

08・09は角釘で、頭部を折り曲げている。

板状鉄製品（F－32～41）

用途不明品（F－30、31、42、43）

蹄鉄（F－44）

長さ11.7cm、幅2.0cm、厚さ1.7cmを測る。

鍬（F－45）は刃部が欠損する。

鎹状鉄製品（F－46）など。

鉛弾（F－47）

長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ1.7cmを測る。

（河北）

実測図No	名称	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土地区	出土遺構	層序	備考
F－01	鉄鏃	4.7	1.2	0.4	7.50	29－F	攪乱内	1層	方頭広根斧箭式
02	刀子	12.8	1.1	0.3	11.30	32－D	RSD－01		刃部に布帛か？
03	〃	6.4	1.6	0.4	14.40	26－D	SD－214		〃
04	〃	3.3	1.1	0.4	3.60	30－H	SD－201	1～3層	〃
05	錐か？	6.7	1.5	0.3	9.30	26－D	SD－214		〃
06	〃	4.2	1.5	0.4	7.80	Ⅱ区	SD－201	覆土	
07	〃	5.9	0.9	0.4	5.70	29－G	SD－201		
08	鉄釘	7.7	0.9	0.5	11.80	25・26－F・G	LSD－01	1層	
09	〃	7.9	1.1	1.0	18.60	26－D	SD－214		
10	〃	6.9	0.8	0.6	4.70	34－F	SD－208	1層	
11	〃	5.9	0.7	0.6	5.00	29－F	ピットNo 9	1層	
12	〃	5.4	0.6	0.6	5.50	26－D	SD－214		
13	〃	6.6	1.0	0.6	9.40	Ⅲ区	SD－202	1～2層	
14	〃	3.2	1.1	0.5	1.70	26－F	LSD－01	覆土	
15	〃	5.1	1.1	0.4	3.70	Ⅱ区	SD－201	〃	
16	〃	4.6	0.7	0.6	2.70	25－E	LSD－01		
17	〃	2.8	1.0	0.7	2.70	26－D	SD－214		
18	〃	3.4	1.0	0.8	2.00	25・26－F	LSD－01	1層	
19	〃	5.7	1.1	0.5	7.20	21－F	SX－201	2層	
20	〃	5.0	1.0	0.8	7.30	29－G	SD－201		
21	〃	3.7	0.6	0.6	2.90	34－G	SD－202、208（交差部）	1層	
22	〃	4.3	0.9	0.8	3.40	34－F・G	SD－208	2層	
23	〃	12.1	0.9	0.9	16.40	30－H	SD－201		
24	〃	5.0	0.6	0.3	1.70	26－D・E	LSD－01	覆土	
25	〃	4.6	0.6	0.5	3.20	Ⅱ区	SD－201	〃	
26	〃	3.4	1.6	0.5	2.40	26－F	LSD－01	〃	
27	〃	3.2	0.5	0.5	2.10	26－D・E	LSD－01	〃	
28	〃	2.5	0.7	0.6	1.80	29－D	SF－204	1層	
29	〃	2.1	0.5	0.4	0.65	26－D・E	LSD－01	覆土	
30	用途不明	4.7	1.2	0.6	8.00	30－E	RSD－01	1層	
31	〃	6.3	1.9	0.6	21.20	Ⅲ区	SD－208、202（交差部）	1層	
32	板状鉄製品	9.5	4.4	0.7	64.70	26－D	SD－214		

実測図 No	名称	法量 (mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土地区	出土遺構	層序	備考
F－33	板状鉄製品	6.4	3.3	0.6	23.10	29－D	SF－204	1 層	
34	〃	8.2	6.9	0.7	75.40	28－G・F	SD－202、208 (交差部)	1 層	
35	〃	5.3	5.7	0.3	14.40	34－F・G	SD－208	2 層	
36	〃	4.4	4.3	0.5	13.30	28－G・F	SD－202、208 (交差部)	1 層	
37	〃	4.5	5.0	0.5	18.60	25・26－F・G	LSD－01	覆土	
38	〃	2.7	3.0	0.4	4.80	26－D	SD－214		
39	〃	4.4	2.3	0.9	9.10	26－D	SD－214		
40	〃	2.0	2.6	0.2	3.00	?	SD－201	覆土	
41	〃	1.4	2.7	0.3	1.40	26－F	LSD－01	〃	
42	用途不明	1.9	1.7	1.1	1.80	34・35－H	SD－202	1～2 層	
43	〃	2.3	1.8	0.3	6.50	26－F	LSD－01	覆土	
44	蹄鉄	11.7	2.0	0.5	212.30	26－D	SD－214		
45	鍬	6.1	2.8	1.2	28.50	26－D	SD－214	覆土	
46	鎹状鉄製品か	5.0	1.0	2.8	64.40	33・34－D・E	不明	表土	
47	鉛弾	2.7	1.6	1.7	28.90	29－D	SD－214		

第21表 鉄製品一覧

第Ⅶ章　総　　括

1．遺構の様相

松橋―宇土間における市街地への交通緩和を目的として昭和49年より建設省九州地方建設局において計画された一般国道松橋バイパスは、当該地区を大きく変容させ、事業が進んできた。昭和51年にはバイパスの路線を決定するために曽畑貝塚の試掘調査が、また微雨遺跡の発掘調査が行われた。ここ曲野地区においても計画路線内の踏査等の所見により、縄文時代の遺構と曲野城に関するであろう中世時期の遺構が想定された。こうした中で、２年間に及ぶ調査の結果、律令時代の官衙遺跡を示す遺構・遺物が発見されたのはこの地域の歴史のみならず、古代史において重要な位置をなすものであろう。

ここではⅠ～Ⅵ章に示した調査所見にもとづいて、付編の寺尾遺跡等との関係も考慮し、さらにまとめてみたい。

遺跡の立地　曲野遺跡は松橋町北部に広がる当尾台地の南西端部で、現在の海岸線から直線距離で 1.5 kmほど入り込んだ丘陵地帯の海抜23ｍほどの平坦部に位置している。寺尾遺跡はこの丘陵を東側へ 600ｍ程高度を上げた、海抜23ｍの曲野遺跡に比べればやや広域な平地に存在している。周辺の丘陵地帯は、当尾山を中心として広がるもので、この地区では東側から西側に向って、狭い沖積地に向って小支丘陵を派生しながら、周縁には無数の刳欠部を作り、迫田を形成している。松橋町においては、沖積平野が僅かで小支流の河川により形成された河川支流平野のみで、本来的に生産の基盤となる地域は現存に比べ、遙かに地理的に制限を受けていたと想定される。現在見られる沖積平野は通称「新地」と呼称されている干拓地であり、曲野遺跡が第２のピークをむかえる中世時期においても、なお海岸線は深く侵入した状況で、丘陵縁辺部においても後背湿地を持っていたと想定される。

曲野、寺尾遺跡が位置する丘陵地帯では、随所にやや狭隘ではあるが平坦地がひらけ、奈良時代末期～平安時代初期に比定できる土器類を採集できる。特に寺尾遺跡から曲野遺跡へは単一の独立した丘陵であり、途中住居址群ではないかと想定される箇所が３ヶ所ほど存在する。[註(1)] このようにこの丘陵ではほぼ同時期の遺跡が一連につながり、現在確認されている地点まで含めると、延べ 800 ｍの距離に集中した状況が見うけられる。[註(2)] 以上のように地理的には大きく制約を受けた中で、丘陵地帯で官衙地域と住居地域が相隣接していたことが想定される。

遺構の変遷　今回の本調査によって検出された遺構群は、伴出する遺物、及び遺構どおしの切り合い関係、ならびに遺構の主軸方向による分類などによって、おおよそ５期に分類される。縄文時代から明治時代にいたる長い期間遺跡が営まれていたことが判明する。

調査区の全域に分布するピット群については全て建物として復元することは不可能であった。また復元した掘立柱建物跡についても遺物が稀であり、大部分は詳細な時代判定が困難はものであった。今後中央部に当然予想されるＲＳＤ－01に本来伴なう主要な建物群が確認されることによって、更に遺跡の全容が判明するものと考えられる。ここではこのような問題点を含めて遺構の編年を試みた。（付図６遺構変遷図・第25表遺構の変遷一覧表）

Ⅰ期以前　ＲＳＤ－１が構築される前の時代をⅠ期以前としてまとめた。遺構として確認できるものは今のところ縄文時代と古墳時代の遺構である。縄文土器は各時期にわたって調査区全域で多数採集されたが、

時代区分＼遺構分類		SD（溝遺構）	SF（道路状遺構）	SK（土壙遺構）	SB（掘立柱建物跡）	SX（性格不明遺構）
I 期以前 縄文時代				230		
古墳時代				205 208		
I期 奈良時代末期		RSD−01 （SA−01, 02）	201	239 242		
II期 平安時代（8世紀終末〜12世紀終末）		209			218	
					203 221	
III期 鎌倉・室町時代（12世紀終末〜16世紀中頃）		202 221 228 229	208	219 210 (212 213	ⓐ204 229 235 238	
		203 (220 222	207			
		219 225 226	203 (204 205 206	(218 225 221 227 224 229 216 202 209 214 222 223 241 220	ⓑ206 211 214 222 223 226 234 239 224 244 ⓒ217 219 225 227 230 242 245 248 ⓓ208 216 220 224 228 232 236 237 241 243 247	202 203
III期以降 江戸時代（17世紀初頭〜19世紀中頃）		LSD−01 201 204 205 206 207 208 210 213 214 215 216 217 218 223 224 227 230 231 232 233	202	201 207 208 217 226 231 237 238 243 206 244 245		
不明		212		203 204 211 232 233 234 235 236 240 215 206		201

第25表 遺構の変遷一覧表

今回の調査区が全I区のみに限定されたため、遺構の確認は集石遺構（SK−230）1基のみであった。古墳時代に属する土壙は2基である。古式土師器等の採集地点を含めても出土は少なく、台地上に散逸した状態で検出されるのみである。

I期　奈良時代末期の時期である。調査区の大部分を占めるRSD−01とそれに付随すると思われるSA−01・02が構築された時代である。前述の如く、SAの埋土は遺構確認面の土色に類似し、Ⓔ埋土となり最も古い時期のものと考えられる。さらには、RSD−01の南北辺側のSAが当初から存在したと仮定した際の尺の数値が完数の一町に近似値を見ることからこの時期と想定される。当然遺跡の中央部には中心となる建物が存在するであろうが、調査区域外であり現在のところ未確認である。類似の遺跡の調査例等[註(3)]から考えれば中央部に少棟ではあるが大型の建物が1棟もしくは3棟程度想定されうる。なおRSD−01の全I区陸橋部上面には硬化面が確認されており、谷側からまっすぐ延びる道路状遺構（SF−201）が存在する。この遺跡の初源の時期である。

II−1期　平安時代を総称してII期とした。RSD−01の存続時期及び終末についてはやや不明ではあるが、埋土内の遺物の状況から平安時代にまで下るものと思われる。RSD−01はその⅓程度までは埋没して

いたと考えられ、この時期に溝自体に新たな区画性を持たせる為に、不規則な柱列を溝内に掘り込んだものと考えられる。但しＳＡについては一応存続していたものと仮定する。南側コーナー部にはＳＢ－218が１棟だけ建ち、それは望楼状の性格の建物ではないかと想定される。[註(4)] なおＳＡが全１区に溝上場と７尺の距離を保ち延びた場合、当然ＳＢ－218と接することとなり、その為の開閉施設が想定される。

Ⅱ－２期　ＲＳＤ－01は完全に埋没している。溝に一部棟がかかる状況でお互いに離れた別地点でＳＢ－204、221の２棟が並ぶ。棟方向に規則性は持たない。柱根及び柱痕跡が残ることから、この遺跡では大型に属する建物となる。[註(5)]

Ⅲ－１期　鎌倉・室町時代をまとめてⅢ期とした。この期の始まりはＳＤ－202が掘られた13世級の後半時期と想定される。ＳＤ－202は台地上を切断するかのように走り、一方側方に溝（ＳＤ－221）をもつ道路状遺構（ＳＦ－208）が他の溝群とつながって南北方向に走る。このような新たな区画内で大型の２面庇をもつ、ＳＢ－204と一連の建物群（ＳＢ－229・235・238）が現われる。この遺物群の棟方向はＳＤ－202に影響を受けたと思われ、ほぼ両者の方位は直角を測ることができる。なおこの時期の建物は前述のⓐ群である。この時期からこの遺跡では第２のピークの時期をむかえる。

Ⅲ－２期　ＳＤ－202の北側に新たにＳＤ－203、そしてＳＦ－208に重なるようにＳＦ－207（両側方に溝遺構・ＳＤ－220・222）が造られる。Ⅲ－１期の区域を時間的に保持もしくは、やや拡張するために新たに設けられたものと考えられる。なおＳＤ－202内にはやや溝内に埋土が堆積した状態で不規則な柱列が掘り込まれる。これは前述のＲＳＤ－１内の柱列と共通するものであり、溝に対しての新たな区画性を示していると考えられる。

Ⅲ－３期　概ね鎌倉・室町時代に層するが、詳細な時期の判定が困難な遺構群をこの期にまとめてみた。その為、本来的には前述の時期に含まれるが、便宜的にこの期に属するものがある。特に建物遺構については構成柱穴から出土する遺物が僅少であるためこの感が強く、時期判定は困難であった。一方遺構の分布においては、特徴も少なく、全１区においてＲＳＤ－01の既に消滅した溝付近に土壙が集中すること、またＳＦ－207の上面に新たな道路状遺構（ＳＦ－203）が作られ、この地区が永く道路として使用されていたことが窺える。この時期から近世時期に至るまで、時期的に断絶がみられる。

Ⅲ期以降　鎌倉・室町時代以降をこの時期で総称した。主に江戸時代に属すると考えられ、一部不明遺構が残る。調査区中央部に台地を切断する形で溝流向のＢ群（ＬＳＤ－01、ＳＤ－213・214）等が走る。また台地中央部には溝流向のＣ群（ＳＤ－201・204・205・208）等が、調査区西側には溝流向のＥ群(217・218)、ＳＦ－202、Ｆ群（206・207）らがのびる。さらに全１区においては溝流向のＧ群ＳＤ－223・232等）がＳＸ－201に隣接する。ＳＸ－201は時代、性格ともに不明ではあるが、掘り下げ規模が大きいこと等から近代かとも考えられる。

掘立柱建物跡　曲野遺跡で発見した遺構は多岐におよび、別表に示す通りである。このうち数量的に大部分も占めるものはピットである。これらのピットは掘立柱建物跡とそれに付随する施設のものであると考えられる。ピットの総数は 3,498個を数え、その内で建物のピットとして認定できるものは、その10.2%である。柱穴の配列関係から復元できる建物跡は総数38棟である。そのうち建物が完結する棟は30棟であり、残りの８棟は未完の建物である。調査不能地域や調査地域外にわたるものがこれにあたる。

時代の決定及び建物の時期　建物跡における時代の決定は、その建物を構成するすべてのピットから出土する遺物によって判定した。ただし遺跡Ⅲ層を掘りぬくかたちで、ピットがはいりこむため、縄文土器が多数混じりこむ。そして最も新しい時期に属するものが、その判定資料となる。しかしながら第15表ピット内出土遺物一覧表に示すとおり、全ピット内からの遺物の出土は少なく、さらに時代の判明する資料は 0.5%にもみたない。これは掘立柱の柱穴として使用したピット内にも同様のことが伺え、全38棟中７棟の柱穴か

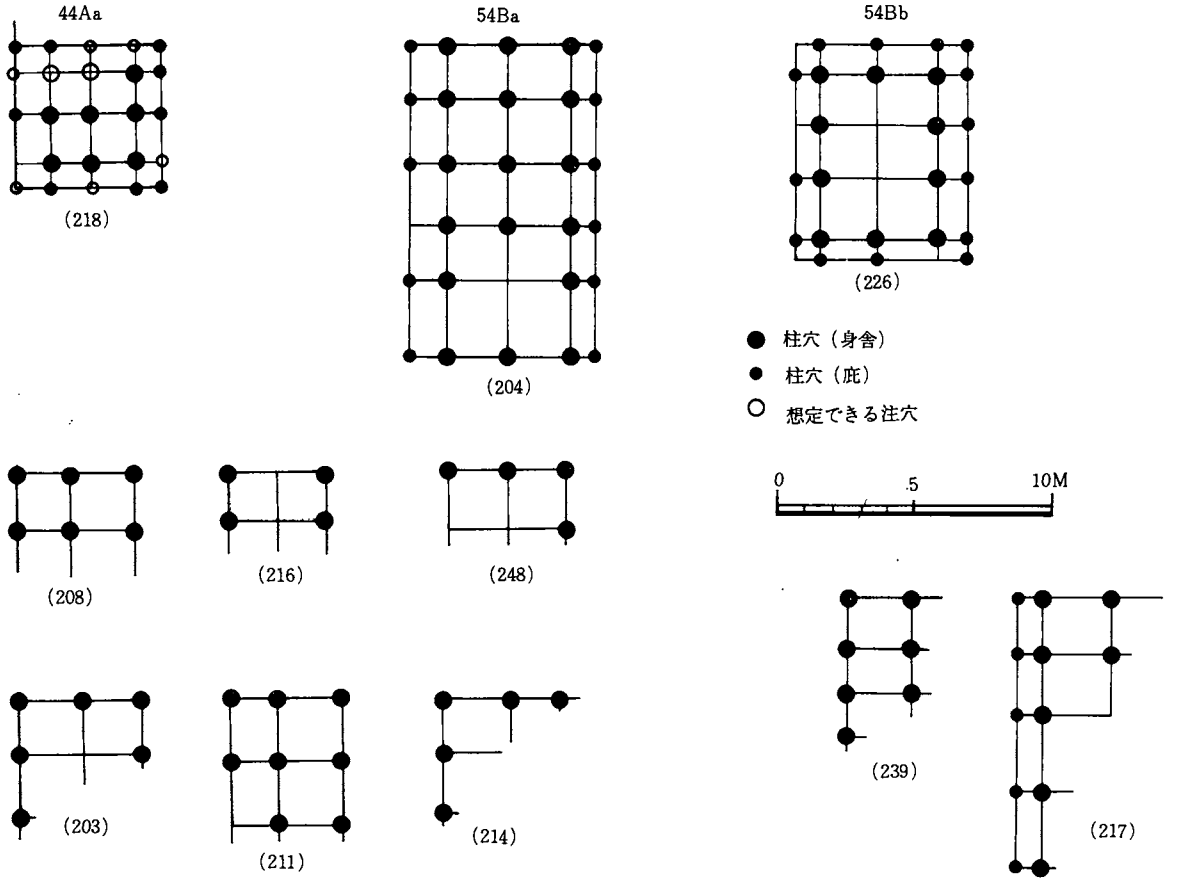
ら遺物が出土したのみである。

そのため建物跡の時期判定は、出土遺物による時期決定が可能なＳＢ－204、 埋土に特色があり最も時期が上ると考えられるＳＢ－214、建物構成に特色があるＳＢ－226の三棟をメインにして、その他は主軸方向(棟方向)がどのような方向を持っているかによって細分した。時期の区分は奈良時代末期をⅠ期、平安時代をⅡ期、鎌倉・室町時代をⅢ期とした。Ⅰ期の建物はなく、Ⅱ期の建物は３棟、残りの35棟はⅢ期に属すると考えられる。

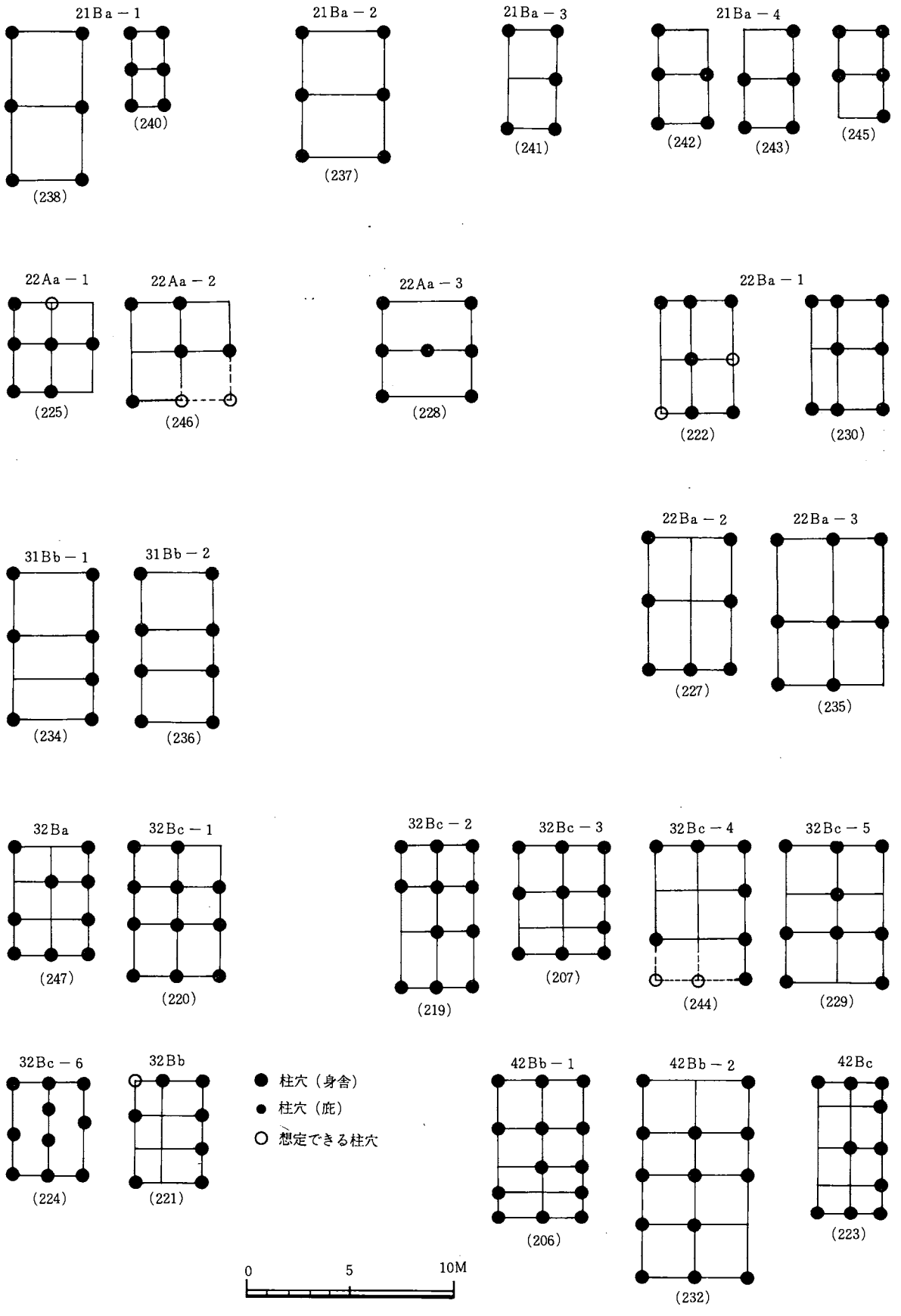
建物の立地　各地区の設定は、任意に行ったもので自然地形等によって仕分けたものではない。ほぼ平垣な平面地形であるため、特に分布に疎密はないが、時期によって分布が限定されるようである。ＲＳＤ－01が残存し、その機能が働いている間は当然、溝内に限定されていたものと思われる。その後の時期では遺跡の規模が拡大したこともあって中核となるような大きな建物を中心として、全域にくまなく分布する。

建物の構成柱穴　柱穴の多くは単一の埋土を持ち、単純な掘り方を持つものがほとんどである。一部、柱根及び柱痕跡が確認できるものがあり、それには埋土を互層につき固めた跡も確認された。また同一建物の構成柱穴であっても、埋土の土色が一つではなく、幾つにも及ぶ例もある。さらに建物相互間の新旧関係はそのほとんどの場合は不明で、埋土土色や伴出遺物では決定できず、建物の棟方向等でかろうじて判明する程度である。

建物の構成と類型　建物の構成はおおよそ身舎だけの簡単なものが多い。また本遺跡では柱穴の数が非常に多く、建物復元作業において、総柱である事を想定しなければ作業自体が困難な場合が多かった。その結



第94図　掘立柱建物類型分類（２）



第93図　掘立柱建物類型分類（Ⅰ）

果実測図には平面形で全ての棟・梁方向に線を引き、結合させ、図面上統一させた。身舎内の間仕切りや床束柱などが、想定が可能であっても、図面上に現われていないのは、このためである。

類型化の作業においては、総平面規模の桁行柱間柱数×梁行柱間数を数字の並列で示した。なお側通りで柱が欠損している場合でも、対称側に柱穴が存在すれば、柱通りが完了したものとした。次に全平面形からその形状にあわせて３つに分類した。[註(33)]

Ａ：正方形またはそれに近い形

Ｂ：両辺の比が１：２以内の長方形

Ｃ：両辺の比が１：２以上の長短形

さらに柱間に留意して、その形状により３つに分類した。

Ａ：柱間がほぼ等間にあるもの

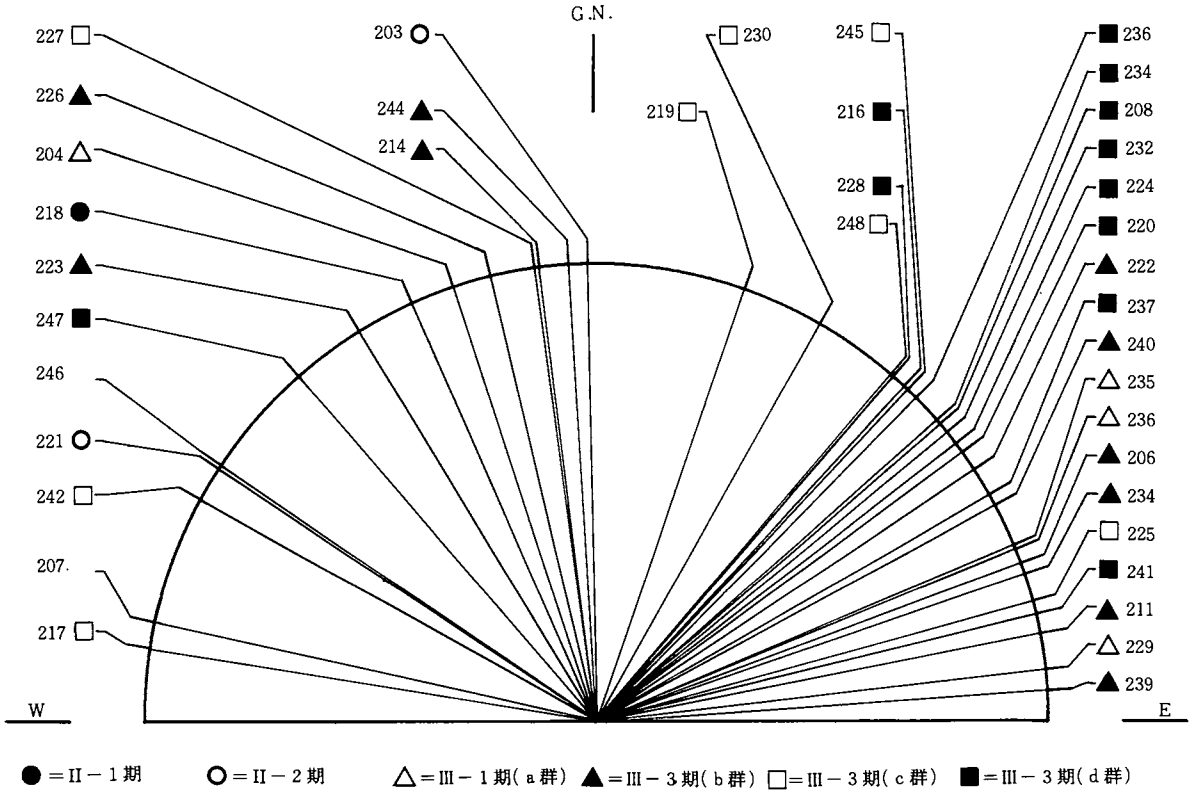
Ｂ：側柱が対称に配列するもの（等間は除く）

Ｃ：側柱間が不規則な間隔をとるもの

これに枝番号を付したものは、同類型中で、柱穴の欠損状況が異なり、当然内部構造が違うと考えられるものである。また第93・94図においては縮尺を統一し、おおまかな柱間尺度及び総面積を示した。

例：32ＢＣ－１は桁行２間×梁行２間で長方形を呈しており、側柱間が不規則な間隔をとるものである。細分類は１である。

柱間尺度と柱筋　本遺跡における建物復元の際の必要条件として次の２つを考えた。１つは隅柱が平面形状に位置すること。他の１つは、柱列はおおむね直線上配列されるが、ほぼ15cm以内におさまることである。この15cmと言う数値は調査の初期、ＳＢ－207の建て方に際し、１つだけ大きくはずれたピットまでの数値で



第95図　掘立柱建物跡（ＳＢ）棟方向方位図

ある。これを曲野遺跡におけるピット数値の許容範囲としてとらえた。柱間は30cmを１尺とした。柱間では数値上かなりのバラつきがあるが、６・７・８尺の等間のものが多くみられる。また庇では３・４尺が大部分を占める。

庇　二面庇の場合は全て桁側である。庇の柱穴は、身舎の側柱に対応しているが、四面庇の場合で、一部隅欠きもある。庇の柱穴の規模はほとんどが、身舎のそれよりも小型で、まれには皿状のくぼみを残すだけのものさえある。

時期別棟方向

平安時代　II－１期においてはＲＳＤ－01が区画として残存していた可能性が強いため、建物は基本的には溝の方位に対して強く影響されていたと考えられる。SB－218は溝の南側コーナー部に位置し、Ｇ.Ｎ.－24°00′－Ｗを側る。次のII－２期ではＳＢ－203・221の建物が溝上面位置にまでのびることから、ＲＳＤ－01は消滅していたと考えられる。そのため、２棟の建物においては溝に対し何らの制限も受けず、棟方向も一定していない。

鎌倉・室町時代　前述の建物以外の全ての建物がこの時期に属すると考えられる。しかしこの中で時期が決定できるものはSB－204のみであり、他の建物遺構はピット内出土遺物、埋土、重複関係などからこの時期のものとして想定した。ⓐ群は二面庇を持つSB－204のG.N.－18°20′－Wの方向に集約される。他の建物については概ね３群に大別されるようである。ⓑ類は四面庇を持つＳＢ－226及びＳＢ－206を中心とする建物群である。棟方向はG.N.－13°30′－Wに集約される。ⓒ群は庇をもつSB－217を中心とする建物群で、棟方向はG.N.－81°00′－Wを測る。その他の建物はⓓ群としてまとめられる。中心になる建物はSB－224・247と思われ、その棟方向はG.N.－53°00′－W付近で一群を形成する。

まとめ　以上、曲野遺跡から検出された掘立柱建物跡について各項目にわけて述べてきたが、次節においては他地域の同性格の遺跡を見ることによって、さらに内容を深めていきたい。

◎印　完結した棟
△印　完結しない棟

総構成規模（桁行×梁行間数）	遺構番号	棟方向	柱間 桁行(尺)	柱間 梁行(尺)	総規模 桁行×梁行(m)	総規模 面積（m², 均）	構成柱穴 総数	構成柱穴 最大平面規(cm)	出土遺物	類型	所在地区	時代小区分	備考
2×1	△ SB-208	N 49°45′ E	7・+■	7・7	4.2×2.1 (14尺×7尺)	8.8+■, 2.7+■	6	40×45	—	—	II区 31－H	III-3-ⓓ	北側はSD-201, 204に切られる。
	△ SB-216	N 43°45′ E	6・+■	6・6	3.5×1.7 (12尺×6尺)	5.95+■, 1.8+■	4	40×45	—	—	II区 33－H	III-3-ⓓ	北側はSD-208に切られる。
	◎ SB-237	N 60°30′ E	10・10	14	6×4.08 (20尺×14尺)	24.48, 7.4	6	30	—	Ba-2	III区 31-E・F	III-3-ⓓ	総柱建物
	◎ SB-238	N 68°10′ E	12・12	11	7.2×3.4 (24尺×11尺)	24.48, 7.4	6	50	—	Ba-1	III区 32・33－F・G	III-1-ⓐ	総柱建物
	◎ SB-240	N 62°00′ E	6・6	5	3.7×1.6 (12尺×5尺)	5.92, 1.8	6	30	—	Ba-1	I区 25－D	III-3-ⓓ	総柱建物
	◎ SB-241	N 76°45′ E	7.4・8	8	4.6×2.4 (15尺×8尺)	11.04, 3.3	5	40×47.5	—	Ba-3	I区 21・22－D	III-3-ⓑ	総柱建物 SB-242に棟を接する。
	◎ SB-242	N 61°10′ E	8・7.5	8	4.6×2.4 (15尺×8尺)	11.04, 3.3	5	65×70	—	Ba-4	I区 21・22－D・E	III-3-ⓒ	隅柱が１つ欠ける。SB-241, 243に棟を接する。

総構成規模（桁行×梁行間数）	遺構番号	棟方向	柱間 桁行(尺)	柱間 梁行(尺)	総規模 桁行×梁行(m)	総規模 面積（m², 坪）	構成柱穴 総数	構成柱穴 最大平面規模(cm)	出土遺物	類型	所在地区	時代小区分	備考
2×1	◎ SB-243	N 49°00′ E	8・8	8	4.8×2.5 (16尺×8尺)	12.00, 3.6	5	47.5×60	—	Ba-4	I区 22-E	Ⅲ-3-ⓓ	隅柱が1つ欠ける。SB-242, 244, 245, 246に棟を接する。
	◎ SB-245	N 43°30′ W	7・7	7	4.2×2.1 (14尺×7尺)	8.82, 2.7	5	47.5×52.5	—	Ba-4	I区 22-E	Ⅲ-3-ⓒ	隅柱が1つ欠ける。SB-243, 244, 246に棟を接する。
	△ SB-248	N 41°30′ E	6 +■	7・7	4.4×1.9 (14尺×6尺)	8.36+■, 2.5+■	5	40×50	—	—	I区 21-G・H	Ⅲ-3-ⓒ	南側が調査区外 SB-239に棟を接する。
2×2	△ SB-203	N 1°10′ W	6.5・7.6 +■	8・7	4.5×4.1 (15尺×14尺)	18.45+■, 5.6+■	6	55×60	ピットNo.5 土師2	—	II区 34・35-I・J	II-Z	SD-202に北側を切られる。
	△ SB-211	N 79°30′ E	7・7.6	8・6	4.35×4.25 (15尺×14尺)	18.49+■, 5.6+■	6	45×50	—	—	II区 31-I	Ⅲ-3-ⓑ	調査区外へさらに延びる為、尺の長い方を桁行とした。
	△ SB-214	N 7°10′ W	8・8 +■	8・8	4.7×4.65 (16尺×16尺)	21.86+■, 6.6+■	8	40	—	—	II区 29-H・I	Ⅲ-3-ⓑ	桁行の続きはSK-214へ一部落ちる.
	◎ SB-222	N 57°00′ E	9・9	5・7	5.45×3.55 (18尺×12尺)	19.35, 5.9	6	40×65	ピットNo.3 土師皿1	Ba-1	I区 23-G	Ⅲ-3-ⓑ	
	◎ SB-225	N 75°00′ E	6・8	6・7	4.15×3.9 (14尺×13尺)	16.19, 4.9	6	40	—	Aa-1	I区 24・25-G・H	Ⅲ-3-ⓒ	
	◎ SB-227	N 7°40′ W	10・11	7・6	6.3×4 (21尺×13尺)	25.2, 7.6	6	50	ピットNo.5 土師1	Ba-2	III区 28・29-F・G	Ⅲ-3-ⓒ	SB-226, 228と棟を接する。
	◎ SB-228	N 41°15′ E	7・7	7.6・7.6	4.6×4.4 (15尺×15尺)	20.24, 6.1	7	35	—	Aa-3	III区 29-F・G	Ⅲ-3-ⓓ	桁側中柱が東西ともに欠失。SB-227と棟を接てる。
	◎ SB-230	N 30°50′ E	6・10.5	7・4.6	5.1×3.4 (17尺×11尺)	17.34, 5.3	7	40×47.5	—	Ba-1	III区 30・31-F・G	Ⅲ-3-ⓐ	西側の1間は庇とも考えられる。SB-232に棟を接する。
	◎ SB-235	N 67°50′ E	13・10	8・8	6.9×4.65 (23尺×16尺)	32.09, 9.7	7	30×40	—	Ba-3	III区 31・32-F・G	Ⅲ-1-ⓒ	南側隅柱がSD-208に切られる。
	◎ SB-246	N 56°20′ W	7.5・8	8・7	4.65×4.6 (16尺×15尺)	21.39, 6.5	5	40	—	Aa-2	I区 21・22-E	—	桁側中柱及び隅柱が欠失。SB-243, 244, 246と棟を接する。
3×1	◎ SB-234	N 71°00′ E	10・7・6	13	6.95×3.9 (23尺×13尺)	27.11, 8.1	7	32.5×40	—	Ba-1	III区 31・32-E・F	Ⅲ-3-ⓑ	SB-237と棟を接する。
	◎ SB-236	N 45°30′ E	9・6・9	11	7.28×3.3 (24尺×11尺)	24.02, 7.3	8	40	—	Bb-2	III区 31-F・G	Ⅲ-3-ⓓ	総柱建物
	◎ SB-239	N 86°45′ E	6・6・6 +■	8 +■	5.46×2.36 (18尺×8尺)	12.89+■, 3.9+■	7	45×57.5	ピットNo.6 土師1	—	I区 21-G・H	Ⅲ-3-ⓑ	西側が調査区外にさらに延びる。SB-248と棟を接する。
3×2	△ SB-207	N 78°00′ W	7・5・5	7・7	5×4.1 (17尺×14尺)	20.5, 6.2	10	55	—	Bc-3	II区 31・32-H・I	—	
	◎ SB-219	N 19°50′ E	7・8・9	6・6	7.1×3.45 (24尺×12尺)	24.5, 7.4	10	50×62.5	—	Bc-2	I区 21・22-G	Ⅲ-3-ⓒ	南側隅柱がRSD-01に落ちる。SB-218, 220と棟を接する。
	◎ SB-220	N 54°00′ E	7・7・8.5	7・7	6.6×4.2 (22尺×14尺)	27.72, 9.2	11	60	—	Bc-1	I区 22-G	Ⅲ-3-ⓓ	SB-218, 219と棟を接する。

総構成規模（桁行×梁行間数）	遺構番号	棟方向	柱間 桁行(尺)	柱間 梁行(尺)	総規模 桁行×梁行(m)	総規模 総面積（m², 坪）	構成柱穴 総数	構成柱穴 最大平面規模(cm)	出土遺物	類型	所在地区	時代小区分	備考
3×2	◎ SB-221	N-56°30′-W	5・5・5	7・4	4.8×3.23 (16尺×11尺)	15.50, 4.7	7	45	—	Bb	I区 22・23-F・G	II-2	南側隅柱がRSD-01に落ちる。
	◎ SB-224	N-53°00′-E	4・8・7・6・7・8・5	5・6	4.47×3.3 (15尺×11尺)	14.75, 4.5	10	45×80	—	Bc-6	I区 24-F・G	III-3-ⓓ	桁行の中央線のみが3間で、両側方は2間となる。SB-223と棟を接する。
	◎ SB-229	N-84°00′-E	8・6・7	9・7	6.43×4.89 (21尺×16尺)	31.44, 9.5	9	47.5	—	Bc-5	III区 30-E・F	III-1-ⓐ	SB-232と棟を接する。
	◎ SB-244	N-3°15′-W	8・8・6	7・7	6.5×4.2 (22尺×14尺)	27.3, 4.6	7	45×50	—	Bc-4	I区 21・22-E	III-3-ⓑ	梁行の南側中央及び隅柱がSX-01に切られる。SB-243, 245, 246と棟を接する。
	◎ SB-247	N-41°00′-W	5.5・6・5.5	4・6	5.1×3 (17尺×10尺)	15.3, 4.6	9	45×50	—	Ba	I区 24-G	III-3-ⓓ	SB-223と棟を接する。
4×2	◎ SB-206	N-70°30′-E	8・6・4・4	7・7	6.6×4.19 (22尺×14尺)	27.65, 8.4	13	50×65	ピットNo.4 土師1	Bb-1	II区 32-H・I	III-3-ⓑ	SB-204と棟を接する。
	△ SB-217	N-81°00′-W	9・9・9・7	3・8+■	10.26×3.25 (34尺×11尺)	(総) 33.35+■, 10.1+■ (身舎) 25.14+■, 7.6+■ (庇) 8.59, 2.6	12	35×40	—	—	II区 30-H・I	III-3-ⓒ	北側に庇を持つ。
	◎ SB-223	N-31°30′-W	4・7・7・4	5.6・5.6	6.47×3.4 (22尺×11尺)	22, 6.7	10	35×55	ピットNo.9 土師1 ピットNo.10 土師皿1	Bc	I区 24-G	III-3-ⓑ	SB-247と棟を接する。
	◎ SB-232	N-51°45′-E	8・8・8・8	7・9	9.5×4.94 (32尺×16尺)	46.93, 14.2	13	35×40	—	Bb-2	III区 30・31-E・F	III-3-ⓓ	SB-229, 230と棟を接する。
4×4	◎ SB-218	N-24°00′-W	4・4・5・5	3・5.5・5.5・3	5.25×5.1 (18尺×17尺)	(総) 26.78, 8.1 (身舎)10.07, 3.00 (庇) 16.71, 5.1	13	35×50	—	Aa	I区 21・22-F・G	II-1	四面の庇を持つ。SB-219, 220と棟を接する。
5×4	◎ SB-204	N-18°20′-W	9・7・8・7・7	4・7・8・3	11.35×6.8 (38尺×22尺)	(総) 77.18, 23.4 (身舎)51.64, 15.7 (庇) 25.53, 7.7	28	60	ピットNo.3 H-050(皿) ピットNo.6 H-047(皿) ピットNo.13 H-026(杯) ピットNo.5 糸切り皿 ピットNo.8 〃 ピットNo.9 〃 ピットNo.18 〃 ピットNo.26 〃	Ba	II区 32・33-H・I	III-1-ⓐ	柱間整然。桁中央柱を欠く。東西方向に2面の庇を持つ。
	◎ SB-226	N-13°30′-W	4・6・7・7・3	4・6・7・3	7.9×6 (26尺×20尺)	(総) 47.4, 14.4 (身舎)18.66, 5.7 (庇) 28,74, 8.7	24	32.5×47.5	—	Bb	III区 28・29-F・G	III-3-ⓑ	柱間整然。四面庇を持つ。SB-227と棟を接する。

第26表　掘立柱建物一覧表

溝遺構及び塀遺構　本遺跡の中央部に位置するRSD－01及びSA－01・02は第Ⅰ期の中核をなす遺構である。従来官衙遺跡と認められている遺跡の中で、遺跡の四至を土塁や溝で区画する例は良く知られており、郡衙と推定する指標の１つとなっている。[註(6)] 溝による区画を示す遺跡の類例をあげてみたい。

関和久遺跡　この遺跡は福島県西白河郡泉崎村関和久字中宿に所在し、陸奥国白河郡家跡であろうと想定されている。[註(7)] 現存Ⅳ次まで調査が行われており、台地上の遺跡の範囲は大溝によって四至を限り東西250ｍ（２町20間）南北436ｍ（４町）を測る。この地域内に有礎建物15、掘立柱建物31、溝10、柱列２、井戸等多

数の遺構が検出され、全体の東西方向中央部には「院」の中心と推定される地区が発見された。大溝は上幅3.0m（10尺）底幅1.0m（3尺）深さ1.8mを測り、一部大溝跡内側に土塁状遺構の痕跡も見られる。また郡院であろうと想定される地区には、遺跡の南北中軸線上に南門を持った柵が存在し、東西5間×南北2間の官衙風な建物をかこんでいる。

宮尾遺跡　本遺跡は岡山県久米町宮尾に所存し、美作国久米郡衙に想定されている。段丘上に立地し、東西300m・南北150mの遺跡規模とみられ、掘立柱建物14、溝5、井戸1、柵等が発掘されている。[註(8)] これらはほぼ四期に分けることができ、I期は長大な建物をコ字形に配し、柵でつなぎ周囲に東西辺約60mの方形と思われる溝をめぐらしている。II期では溝による区画を東西に拡張し、内側には柵をめぐらし北門を設ける。溝は最大50mまで確認され、柵列は130mの地点まで述びると考えられる。なお溝の規格性等について詳細は不明であるが、遺物から7～8世紀にかけての遺跡と考えられている。

芳賀輪遺跡　本遺跡は千葉県千葉市古泉町、野呂町に所存し、古代末期の居館址と想定されている。調査途中であり、詳細は不明であるが、一辺約70mの方形の溝1、掘立柱建物24等が検出されている。[註(9)] 溝は南北2ヵ所に土橋を有し、その規格は上幅2.0m、下幅1.0～0.9m、深さ0.9mを測る。また溝内には「掘り方の単位を示す節が認められる」とし、底面に明瞭な段を有し5cm程の落差を持つ。これは曲野遺跡のＲＳＤ－01の溝掘り方にも類似した手法が見られ、作業単位によるものか、他の意味を持つものか今後の検討の途地を残している。いずれにしても、溝掘り方に一応の規格性を持たせてはいるが、掘り方も粗雑で段差を残し未調整であること等から，古代末期に共通する要素を見い出せるのではなかろうか。

八森遺跡　本遺跡は山形県飽海郡八幡町市条字八森に所在し、平安時代後半の郡衙遺跡と想定されているこの遺跡からは、四囲をめぐる溝遺構、礎石建物跡1、掘立柱建物跡1、八脚門跡1等が検出されている。[註(10)] 溝は約90mを一辺とし、方形の区画を有すると思われ上幅、深さとも0.7mを測る。この「溝は建物の四囲をめぐる塀のような施設と考えられるが、具体的な構造はまだ言明できない」と述べられている。

以上代表的な遺跡を4例あげたが、その他にも前述の下国府遺跡においても約37mの方形の溝を有し、更に溝内側には約26mの方形の小溝を有しており、これは二重の施設と考えられる。このように遺構中心部に対し、方形の溝をめぐらす例は多数知られており、これに単純な溝、柵等による区画の例まで加えるとその資料数は倍増するものと考えられる。本来的には溝の性格は防御性、他地域との区別、溝本来の区画性等が考えられ、それを律令時代に限定した場合には特に溝自体の区画性が最重要視されるものと考えられる。I期ではＲＳＤ－01は他地域との区別を行うため、丘陵の台地平坦面上に最大範囲内で選地を行い溝を掘り下げた。溝内側には溝上場端と6尺の間隔を保ち立板塀を設ける。この立板塀は全I区で、存在は想定でき、他地区ではほぼ全周しており、また遺構中軸線に沿ってはＳＡ－02の立板塀が延びる。遺構中央部は未調査であり速断できないが、このＳＡ－02がこのまま延びるとすれば建物群を区分する施設になるとも考えられる。[註(11)] このように郡衙遺跡において、規格性を有する溝は独特の構造を持っており、曲野遺跡におけるＲＳＤ－01、ＳＡ－01・02も区画性を示す重要な遺構であると考えられる。

2．遺物の様相

須恵器　今回の調査でＲＳＤ－01の時期を決定した資料は通称「萩尾型」と称される。高台付坏の高台下端にきわめて特徴的なくせを有する一群の土器である。また、この土器が出土する萩尾大溜池窯跡は松橋町萩尾字高岳に所在し、踏査で現在7基が確認されている。[註(12)] 地形的には他にも窯の所在する可能性も高く、10～20基の大窯跡群と考えられる。これらの窯跡群は同一時期と考えられ、肥後では数少ない第Ⅶ様式に属するものであり、しかもかなり大規模な生産が想定されている。器種のバリエーションは各様であり、坏蓋高台付坏・鉢・長頸壺(凸帯付胴張壺)・甕等である。[註(13)] 器種中特異な存在を示すものは次の2種であり、相方

とも全体的に自然釉が多く付着している。坏蓋は一部のもので天井部がぶ厚い。S－006・007・208・209・211・217・218等がこれに属する。高台付杯は前述の如く通称「萩尾型」と称される高台下端にきわめて特徴的なくせを有するもので、本文中の高台断面分類表ⓐ・ⓖ類がこれにあたる。曲野・寺尾遺跡から多数この類の土器が出土しており、生産地は当然隣接する萩尾大溜池窯であることが想定される。[註(14)] また同様な特徴を有する高台付坏は八代市興善寺廃寺遺跡(馬場[註(15)]・四郎丸・志水[註(16)])、城南町上の原遺跡等からも出土しており、出土資料数そのものはさらに増加すると思われるものの、出土遺跡の範囲はかなり限定して考えることができよう。この「萩尾型」が出土する遺跡は現在確認されているところ上述の遺跡であるが、これらの遺跡からは、円面硯・墨書土器・土馬等が供伴しており、供給先に何らか性格の類似したものとも想定される。今後「萩尾型」の類例資料が増えることにより、この点も解明なされていくと思われる。

その他の遺物　建物跡に関する遺物　掘立柱建物を構築する際に使用したと考えられる釘類が多数出土している。[註(17)] 大小の2形式でありほぼ断面形は方角状をなしている。調査区内に広く散在しており、時期の決定できる資料は少ない。また鉄斧・鉈等の工具類の出土も見られる。掘立柱建物の用材の加工に用いたと考えられるが、この資料も時期の判定できる資料は少ない。

鉄鏃・刀子類　鉄鏃は1点のみの出土である。[註(18)] F－02は残存長約13cmを測りRSD－01溝最下面からの出土である。なお寺尾遺跡からも残存長約7cmの刀子が出土している。

製鉄関係　小鍛冶滓と考えられる鉄滓が出土している。曲野遺跡の資料は13世紀後半時期のもの（Ⅲ－1期）のものであり、寺尾遺跡の資料は8世紀末～9世紀初頭にかけての資料である。官衙に関連した遺跡から鉄滓が出土する例が最近あいついで報告されている。

3．遺跡の性格及び時期

前節において曲野遺跡と同性格の遺跡について述べてきたが、ここでは各期においての遺跡の性格等についてさらに考えてみたい。

Ⅰ期　奈良時代末期の一町方形と想定される溝遺構とそれに付帯する立板塀遺構は、この時期の主要な遺構群である。これらの遺構は前述の如く、その規模、規格性、遺物の性格等から「古代の官衙」に関連する遺構であることが想定される。しかしながら従来までは、この地域は古保山廃寺を除いては古代史上空白の地区であった。それはこの地域が古代～中世にかけて郡境が複雑に移動する地域であり、しかも宇土、益城、八代各郡の辺境地に位置しており、従来までの官道の想定においてもこの地域から遠く離れていたからである。[註(19)] ただ松本雅明氏は前述の古保山廃寺を宇土郡の郡寺と想定され官衙地域が隣接することを示唆されている。[註(20)] 今回曲野、寺尾両遺跡が発見されたことにより従来までのこの地域における古代史像は大きく変容することとなった。官道については林田憲義氏が述べる松橋町当尾小学校の追分付近を通る駅路の想定がなされている。[註(21)] また建久6年の阿蘇文書中に記されている「八代大道」[註(22)]の位置や、村田氏の想定駅路にそって分布する「有馬田」[註(23)]、「車路」[註(24)]等の小字名等を考慮した場合、林田氏の駅路の想定がより蓋然性の高いものと思われる。しかし両遺跡が位置する郡・郷についての比定は困難である。上述の建久6年の阿蘇文書においては「宇土郡勾野」[註(25)]と記されており、宇土郡に属する可能性が高いと考えられる。平安前期以前においては宇土郡は、諫染（かそめ）、櫻井、林原、大宅の4那である。[註(26)] 大宅郷については板楠氏の論文があり、それを網田平野に想定されているが、[註(27)] 他の3郷については未比定である。[註(28)] いずれにしても郡境付近部に、曲野、寺尾遺跡は位置する訳であり、従来までの宇土郡家想定地[註(29)]とはかなり離れることとなる。しかし、曲野遺跡における規格性の強い溝遺構、ならびに寺尾遺跡における出土遺物（ヘラ研磨及び赤色顔料染付痕跡のある土師器群、巡方、土馬等）等から、この地域には「官衙地域」の存在想定が可能であると思われる。[註(30)]

Ⅲ期　曲野遺跡から検出された建物遺跡は総数38棟に及びその内34棟はⅡ期即ち鎌倉・室町時代に属す

るものである。この時代を通じてこの地区では阿蘇氏が所録をおさめており、いずれかの荘園に概当するものと思われるが、文献上は不明瞭である。34棟中には倉庫ならびに住居[註(31)]であると考えられ、丘陵平坦部を切断する形でＳＤ－202・203が走る。一方建物群の側方にはＳＦ－207・208等が走り、この建物群の北東側の限りを示している。また隣接する曲野城[註(32)]は創始年代が明確ではないものの、曲野遺跡の建物群と同時に存在した可能性も強く、将来この面での解明が待たれる。

註

(1)宅地造成用に採土を行った地点から４ｍ四方に集中し、多量の土師器、須恵器が採集された。付編寺尾遺跡の実測土器中の表採とし、あげられているものがこれに属する。

(2)昭和57年度・第３次調査ではグリッド番号66—Ｍ・Ｌ区において、竪穴が確認されさらに、72—Ｐ区～76—Ｒ区において集中し、住居域が存在するようである。

(3)後述する山形県八幡町の「八森遺跡」、新潟県佐渡郡の「下国府遺跡」、及び宮城県多賀城市の「多賀城の第Ｉ期」、山形県酒田市の「城輪柵遺跡の第Ｉ期」の遺構と建物群との関係をこれに想定している。

(4)建物類型では44Ａの類に属する。この類での復元では隅柱を持つ四面庇建物であり、入母屋造、寄せ棟造とも想定が可能であるが、この建物が溝コーナー部の陸橋付近に位置することから性格的には望楼状の建物ではないかと考えられる。

(5)９世紀初頭時期の官衙遺跡と想定される上鶴頭遺跡では、全体の柱穴がこのように版築状につき固めた痕跡を示し、柱根及び柱痕跡の観察も可能であった。鶴嶋俊彦他『上鶴頭遺跡』熊本県文化財調査報告　第63集　1983　熊本県教育委員会

(6)山中敏史氏はその論文の中で、Ｉ類を郡衙と推定し、その条件を満たす指標として10を掲げている。山中敏史「古代郡衙遺跡の再検討」　日本史研究161　1976

(7)「関和久遺跡Ⅳ」『福島県文化財調査報告書第91集』福島県教育委員会　1981　　を参照として概要をまとめてみた。

(8)「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告４』岡山県教育委員会　1973　　を参照し、一部山中敏史註　を補足し、概要をまとめた。

(9)「千葉市芳賀輪遺跡」『千葉市文化財抄報２』千葉市教育委員会　1980

(10)『八幡町八森遺跡第２次発掘調査現地説明会資料』八森遺跡発掘調査団　1977

(11)「小郡遺跡」では、「官衙群と倉庫と考えられる一郡を仕切るため」の 820柵が存在し全長60ｍが確認されている。『福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報1967'68'70』福岡県教育委員会　1971

(12)松本健郎他「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」熊本県文化財調査報告第48集　熊本県教育委員会　1980　本文中の宇城窯跡群の110頁～120頁に詳細は述べられている。

(13)今回寺尾遺跡におけるＳＫ－101内よりの一括資料により、さらにバリエーションが増加し、器形が明瞭になった。長頸壺は全体のプロポーションが判明し、従来興善寺廃寺から出土しているそれは、やや形態上は異なることが判明した。また鉢については底部が検出され、さらに提瓶が資料として追加された。

(14)三辻利一、山本成顕両氏は熊本県内窯跡出土須恵器の産地推定の研究において、「下益城郡松橋町の楕円形土壙出土須恵器は10点のうち５点が地元の宇城グループに対応し、残る５点は荒尾窯跡グループからの搬入品である。」と述べておられる。しかし、この土壙内の資料のほとんどは隣接する萩尾大溜池窯の出土資料中にあり、三辻氏の結論に疑問を感ずる。今後小破片でなく形態の判明する資料での再操作が必要であろう。三辻利一、山本成顕「元素分析による古代土器の産地推定の実例(4)—熊本県内窯跡出土須恵器—」『古文化財教育研究報告』第11号別冊　1982

(15)野田拓治氏の分類では、この一群を高台断面形分類ⓐ類でまとめられており、製作技法上特徴のあるものとされている。野田拓治「興善寺Ｉ・興善寺馬場遺跡」『熊本県文化財調査報告第44集』　熊本県教育委員会　1980

(16)興善寺馬場遺跡に隣接する志水遺跡でもこの一群の土器が出土しており、広義で分類がなされている。そしてこの類が「八代地方のこの地区に分布する須恵器であることから興善寺式とも呼べるであろう」と述べてあるが、

やや分類においてもさらに細分が可能であり、生産窯が判明した時点で名称そのものは「萩尾型」と呼ぶべきであろう。江本直・高谷和生「興善寺Ⅱ・興善寺四郎丸・志水遺跡」『熊本県文化財調査報告第61集』　熊本県教育委員会　1980

⑰前掲書註　の肥後国分僧寺から多数の釘類が出土している。断面形は方形で端部は屈折させている。この類に近いものはＦ－08～15までの一群である。

⑱前掲書註⑪の小郡遺跡からは、 1,000本ばかりの鉄鏃が溝中より一塊となった状態で検出された。鏃の形態は３種類であり、いずれも長土15cm程度の細根式鉄鏃で、曲野遺跡出土の鏃とはやや形態がことなる。

⑲松本雅明氏の駅路の想定では、城南町「陣内―鰐瀬―山崎―下郷―海東―小川へとぬけると思われ、この通路にそって益城国府・陣内廃寺・益城郡家・浄水寺などが建立された。」(『城南町史』) また日野尚志氏もほぼこのコースを想定されている。日野尚志・島津義昭「熊本県の条里」『熊本県文化財調査報告第25集』熊本県教育委員会 1977

⑳この遺跡から出土する瓦は、肥後国分寺の創建期の瓦と同類の文様瓦が出土しており、法隆寺式の伽藍配置をとると予想され、塔の心礎も残存している。松本雅明編『城南町史』城南町史編纂会刊　昭和40年

㉑村田憲義著『松橋町史』松橋町　昭和54年の165頁に述べられている。「先ず本道は城南町の東阿高を経て海の平の１つ橋、そこからしばらく現高速自動車道と同じところを通り、古保山の松葉川上流の水田迫のところでこれと分かれて畑台地に上り、やがて当尾山の東腹の峠を越えて浦川内の堀切に出て……」

㉒鎌倉時代初頭の建久６年（1195）３月の『肥後国司庁宣』(阿蘇家文書８）の中に

宇土郡勾野四至（曲野の境界の意か）

東限―八代大道　西限―大野岸　南限―墓町・南縄　北限―高井小道　面積四十七町四反余

宇土権介　紀朝臣　判

と述べられており、中世時期に官道と考えられる道が、寺尾遺跡に接近した箇所を通っていたことが想定される。

㉓註㉑の前掲書の 166頁中に内田地区に「有馬田」の小字があり、村田氏は駅に関係する小字名ではないかと想定されている。

㉔鶴島俊彦氏の御教示による。「車道」の小字名をもつ坪が１ヵ所、当尾小学校と高速自動車道との間の想定路線上に存在する。

㉕前掲書　註㉒の通り。

㉖池邊彌著『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館昭和56年によった。

㉗板楠和子「文献から見た網田平野」『城二号墳・宇土市埋蔵文化財調査報告書第３集』　城二号墳発掘調査団熊本県宇土市教育委員会　1981

㉘前掲書　註㉑松橋町史においては、村田氏は「旧松橋町及び久具を除く旧当尾は諫染郷所属」と述べられている。曲野、寺尾遺跡については、後期古墳の分布、水系等から諫染郷であると想定されている。

㉙宇土郡家の想定地は、布目瓦が出土している「境目Ｂ遺跡」となっている。註⑲前掲書『熊本県の条里』

㉚地図上では、直線距離にして曲野遺跡より古保山廃寺まで0.6km、当尾遺跡まで0.6kmである。なお村田氏の駅路想定地までは 1.2kmとなる。この地域のどの地点かに郡庁の建物群の想定が可能であろう。さらには、寺尾遺跡からの出土遺物の状況等から見ると寺尾遺跡により接近するかもしれない。

㉛註㉝の前掲書「下右田遺跡」でも、柱穴が小型であり、建物の配列等も不規則である。建物として使用するピット数も、全体のピット数に比べ10％程度で、今後の中世集落跡における建物複元の困難さがうかがえる。

㉜太田幸博他『熊本県の中世城跡・熊本県文化財調査報告第　集』熊本県教育委員会　1976
曲野城は、阿蘇家臣釣野民部少輔が在城したと伝えられている。２条の土塁、空掘等が存在し、城域は東西41ｍ×南北36ｍ程度の広さであると考えられる。集落、高所には「辻の屋敷」という小名が残り、そこが城跡の館跡べはないかと考えられ、周縁には「法華寺」「寺尾」「寺原」等の小名が残り、城に関連するものと考えられている。

㉝掘立柱建物跡の平面類型分類については、下右田遺跡の分類を参照とし、平面規模を付加した『下右田遺跡(第４次)』山口県教育委員会　1980

図
版

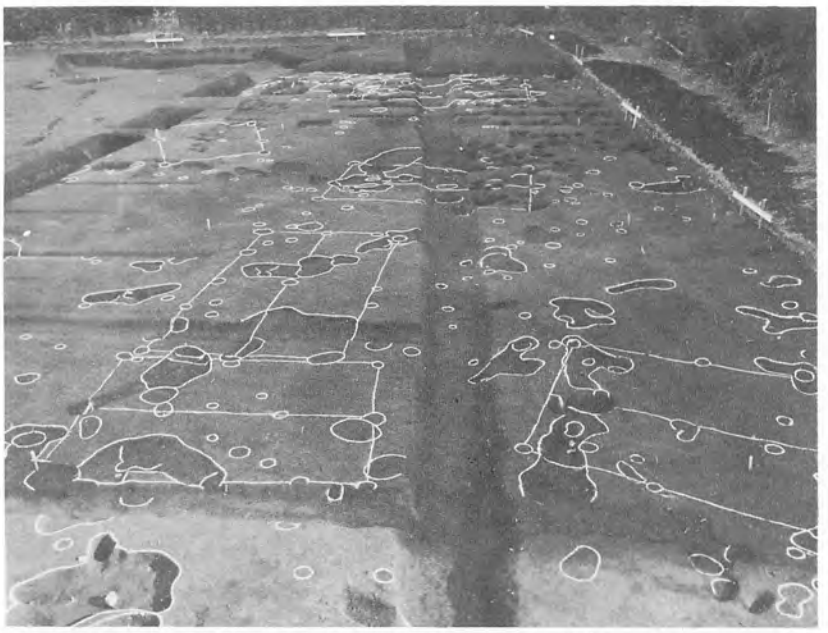
図版1

(1)調査前風景

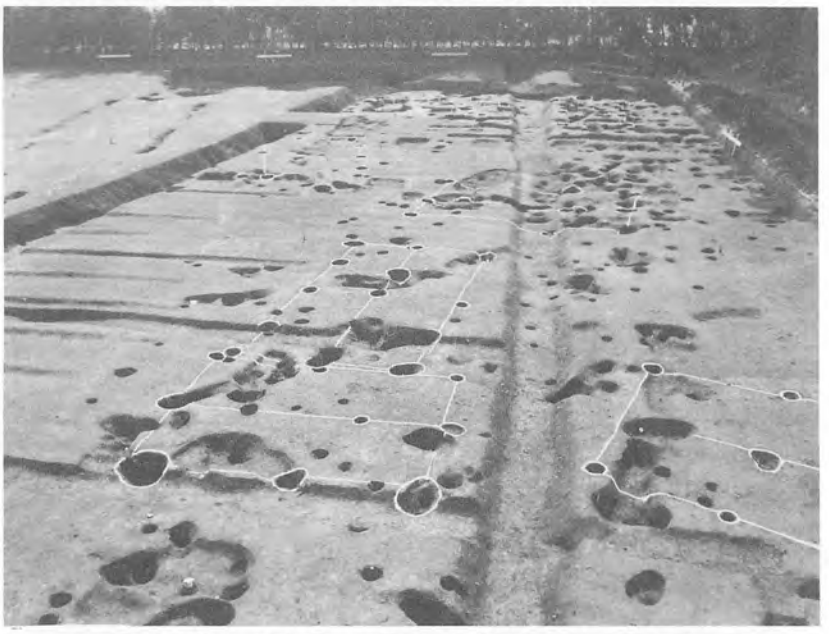
(2)調査全区（発掘後）

(3)調査風景

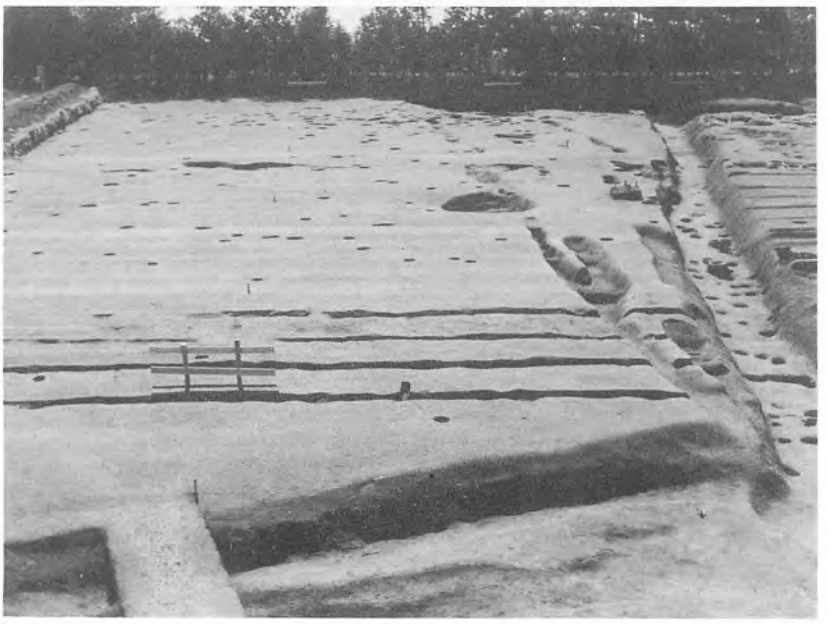
図版2



(1)全Ⅰ区ＲＳＤ－01内側
遺構検出状況
（発掘前）



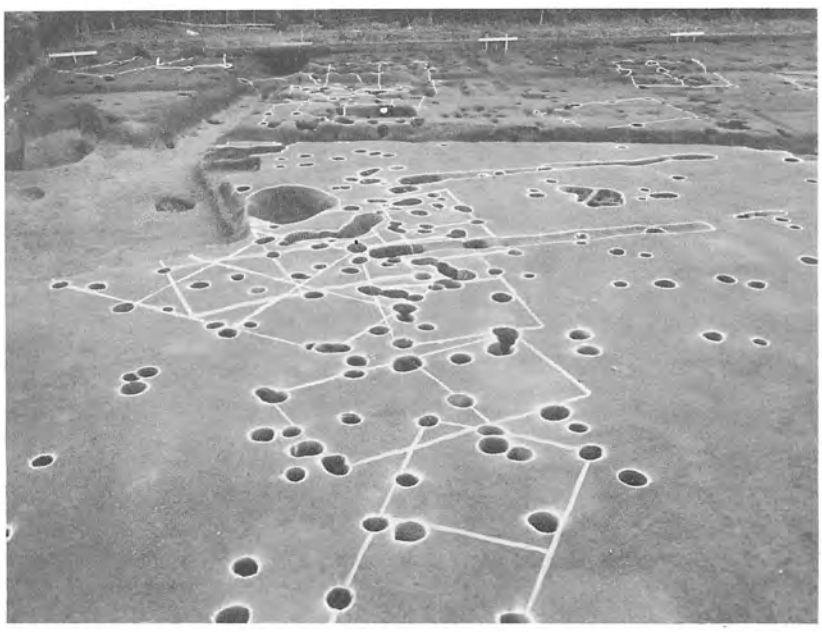
(2)全Ⅰ区ＲＳＤ－01内側
遺構検出状況
（発掘後）



(3)全Ⅰ区ＲＳＤ－01外側
遺構検出状況
（発掘後）

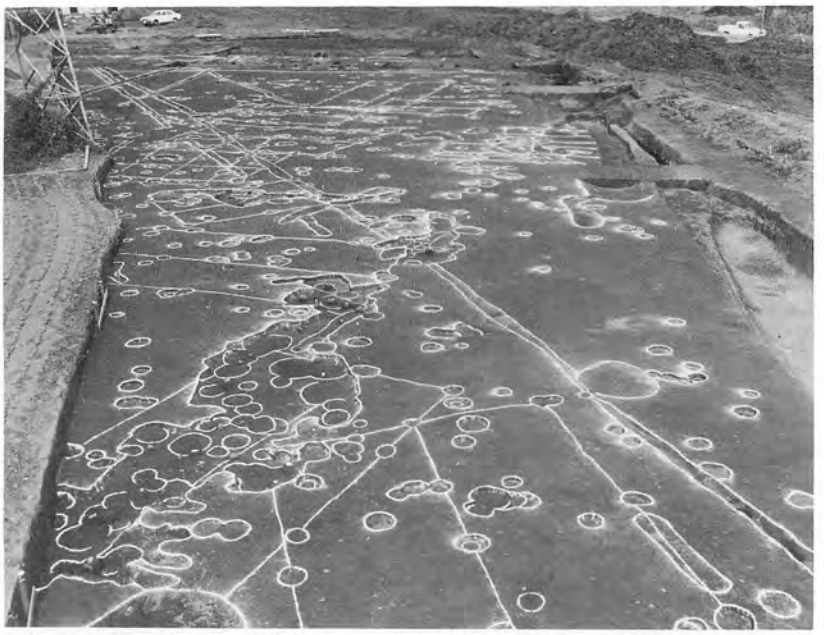
(1)全Ⅰ区ＲＳＤ－01コーナー部
遺構検出状況
（発掘前）

(2)全Ⅰ区ＲＳＤ－01コーナー部
遺構検出状況
（発掘後）



(3)全Ⅰ区遺構検出状況
（発掘後）

図版4



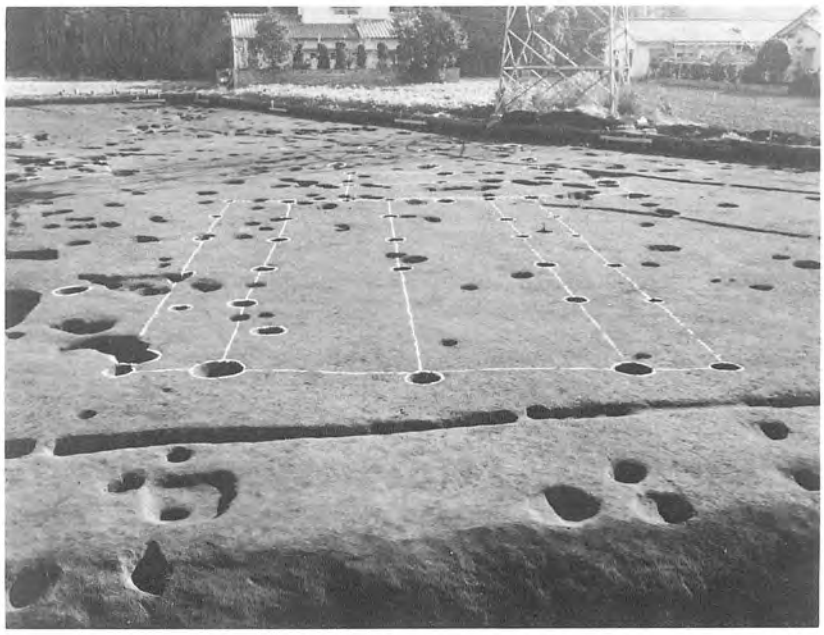
(1)全II区遺構検出状況
（発掘前）

(2)全II区遺構検出状況
（発掘後）

(3)全III区遺構検出状況
（発掘前）

図版5

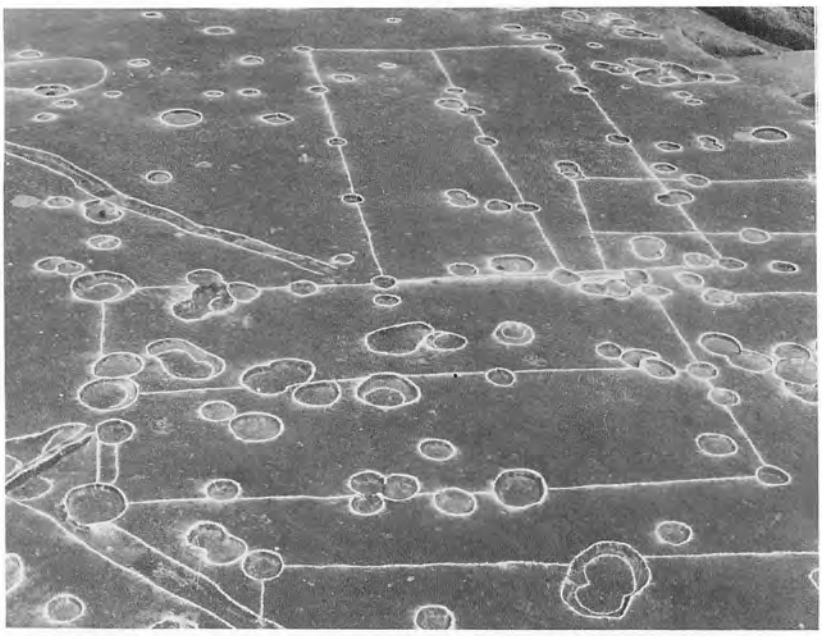
(1) S B－203（北ヨリ）



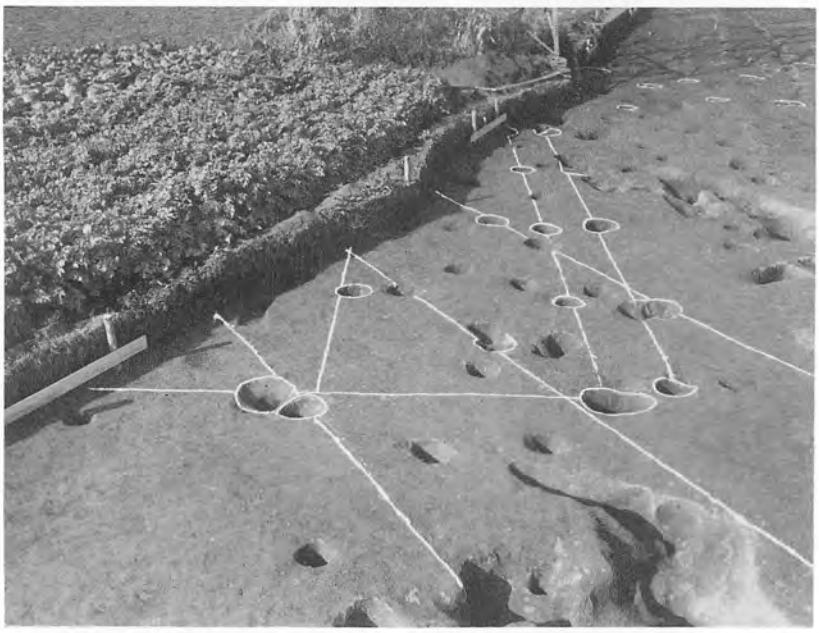
(2) S B－204（北ヨリ）

(3) S B－204（東ヨリ）

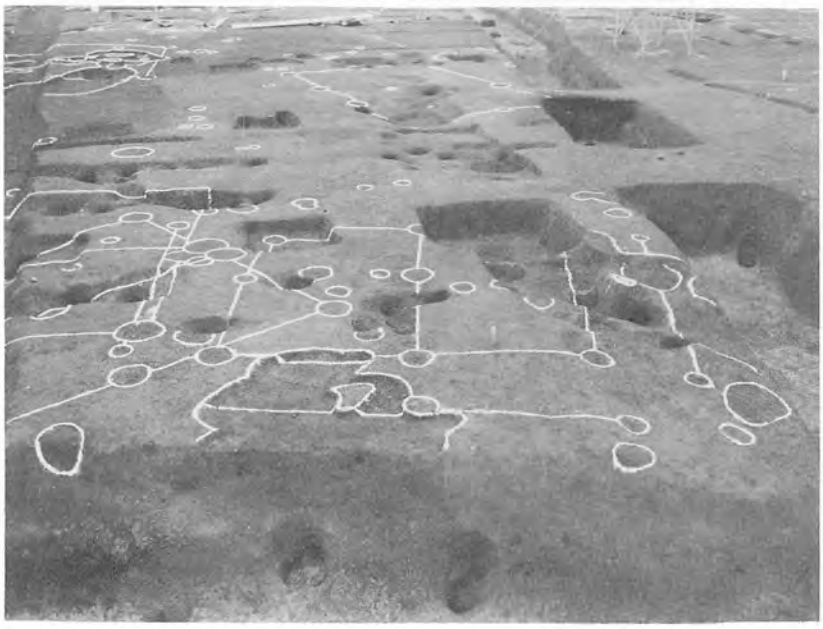
図版6



(1)ＳＢ－204・ＳＢ－206（南ヨリ）



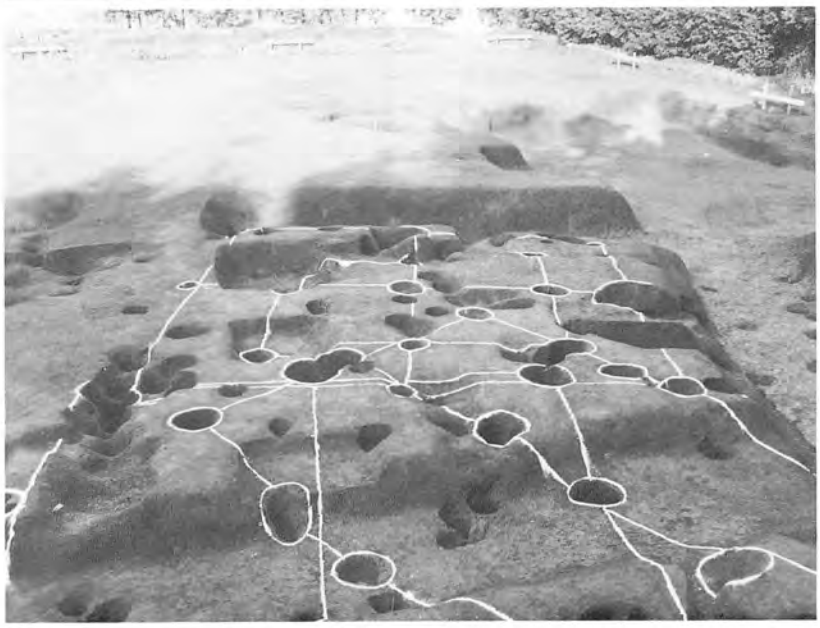
(2)ＳＢ－217（東ヨリ）



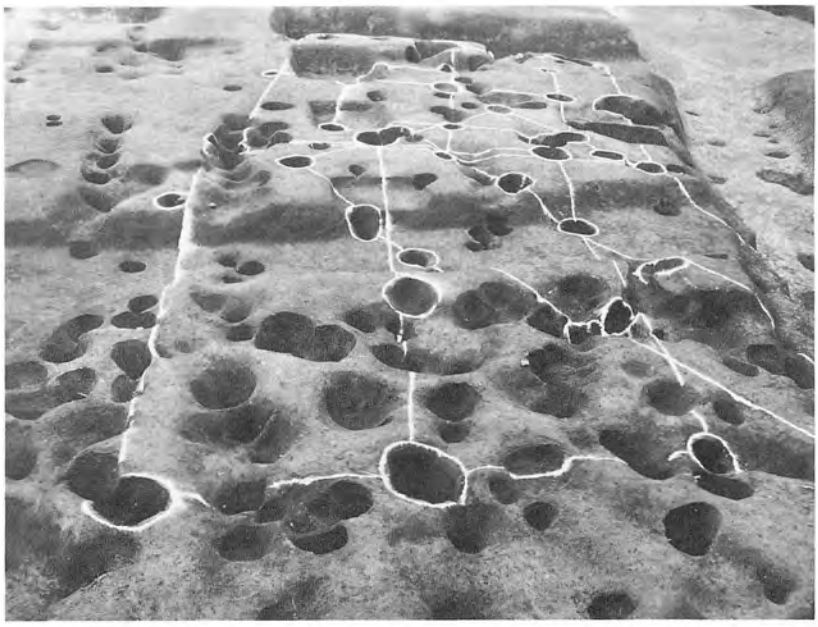
(3)ＳＢ－218（南ヨリ・発掘前）

図版7

(1)ＳＢ－218（南ヨリ）
（発掘後）

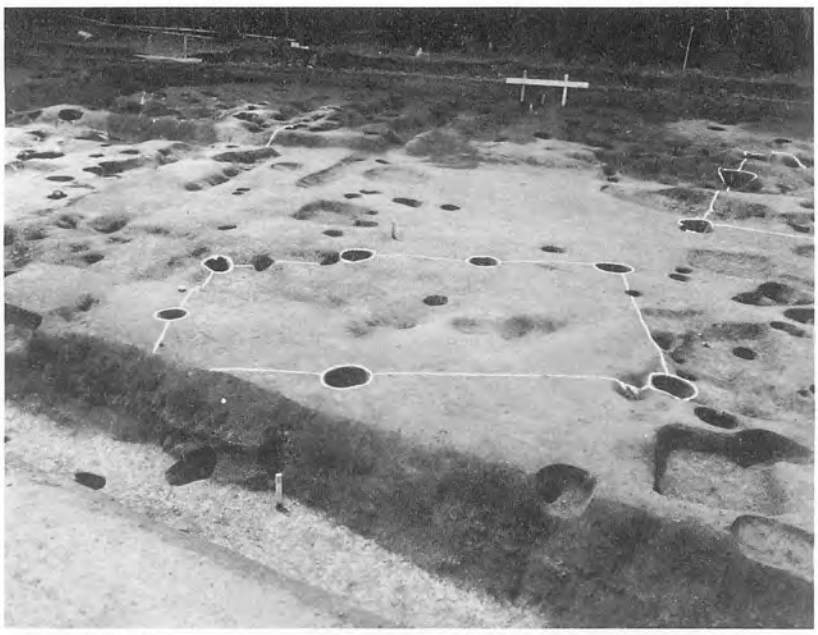


(2)ＳＢ－218（西ヨリ）
（発掘後）



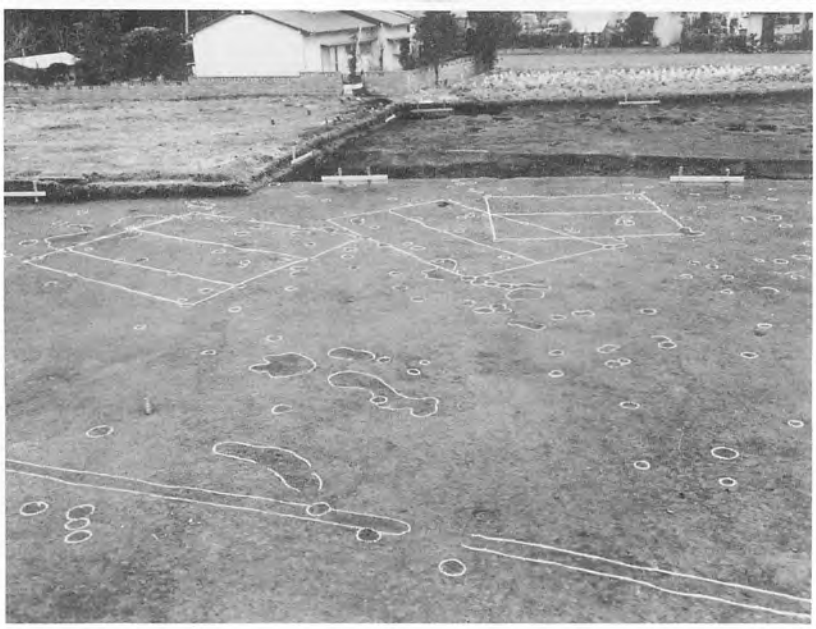
(3)ＳＢ－220（西ヨリ）

図版8

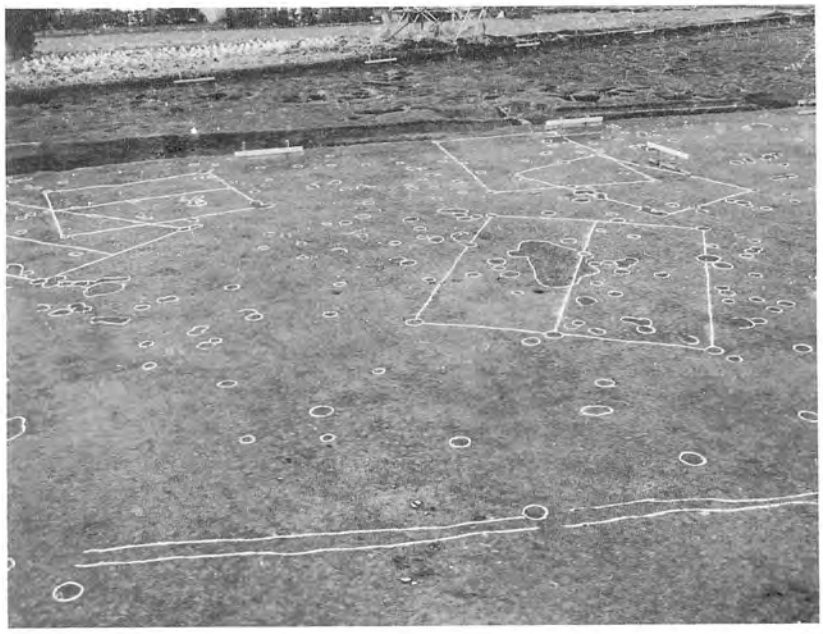


(1)ＳＢ－221（北東ヨリ）

(2)ＳＢ－221（南東ヨリ）



(3)ＳＢ－226・ＳＢ－227・ＳＢ－228
（発掘前）



(1)ＳＢ－229・ＳＢ－230
（発掘前）

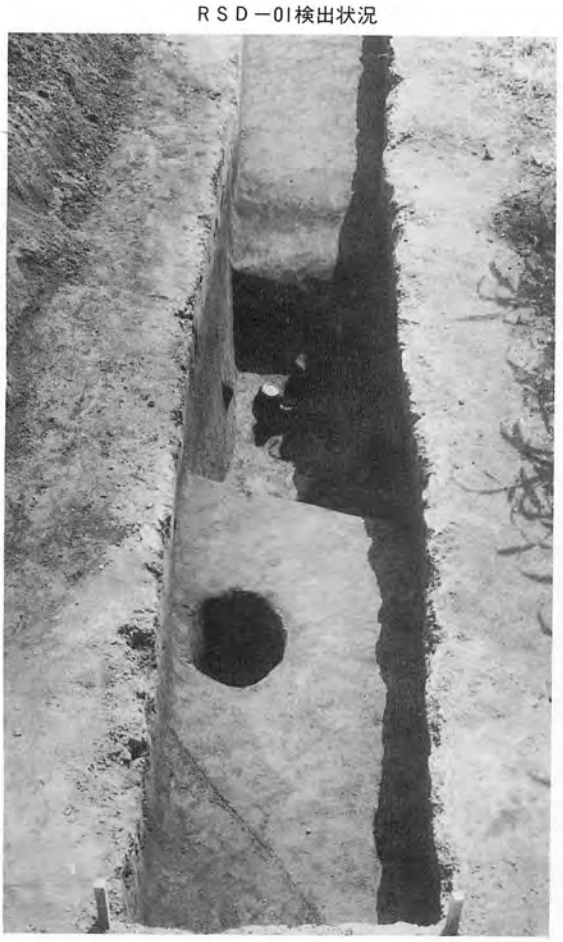
(2)ＳＢ－234・ＳＢ－235
（発掘前）

(3)ＳＢ－226（南ヨリ）

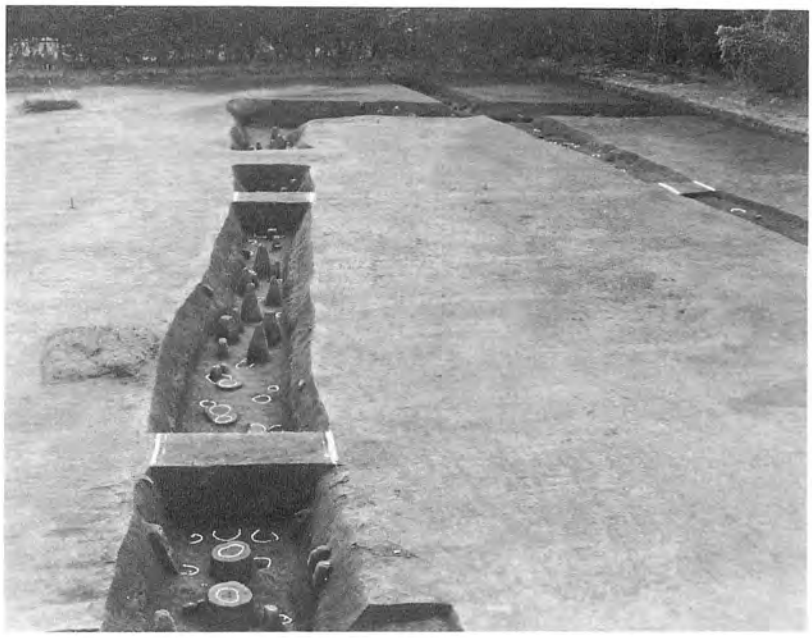
図版10

(1)遺跡北側遺構集中部
ＳＢ－229・ＳＢ－230・ＳＢ－232
ＳＢ－234・ＳＢ－235・ＳＢ－236
ＳＢ－237
（発掘後）

(2)33、34－Ｊ区　Ｉ次試掘
ＲＳＤ－01検出状況



(3)遺物出土状態拡大（須恵器 高台付坏）

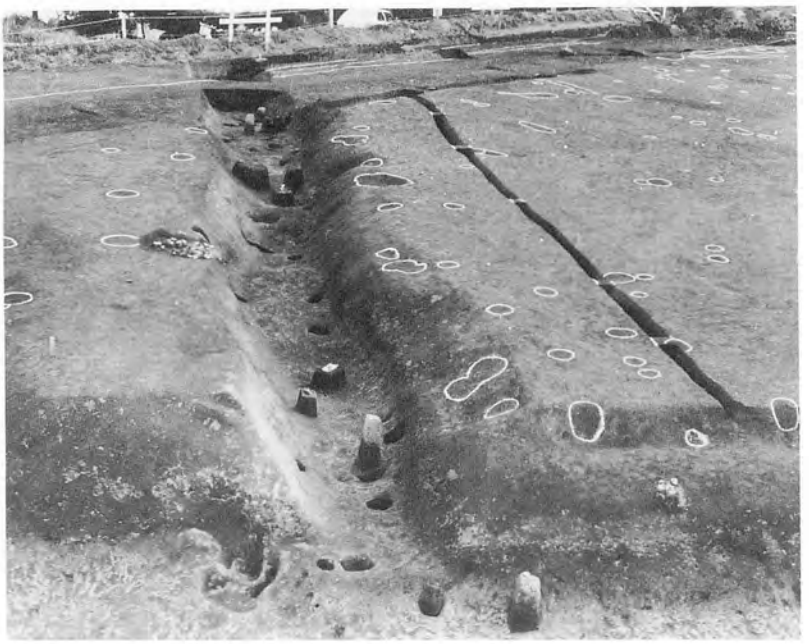


(1)全Ⅰ区 ＲＳＤ－01内遺物出土状態

(2)28・29－Ｅ区 ＲＳＤ－01内遺物出土状態

(3)28・29－Ｅ区 遺物出土状態拡大

図版12



(1)全Ⅲ区ＲＳＤ－01内遺物出土状態

(2)全Ⅱ区ＲＳＤ－01内遺物出土状態

(3)全Ⅲ区ＲＳＤ－01検出状況
（発掘後）

図版13

(1)全Ⅰ区ＲＳＤ－01検出状況
（発掘後）

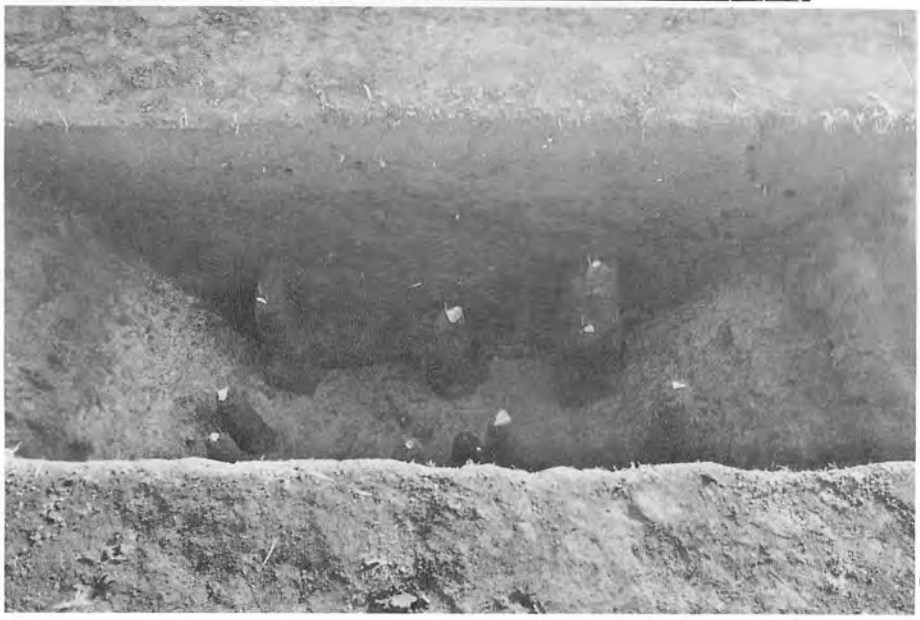
(2)全Ⅲ区ＲＳＤ－01コーナー部検出状況
（発掘後）

(3)全Ⅲ区ＲＳＤ－01、ＳＡ－01検出状況
（発掘後）

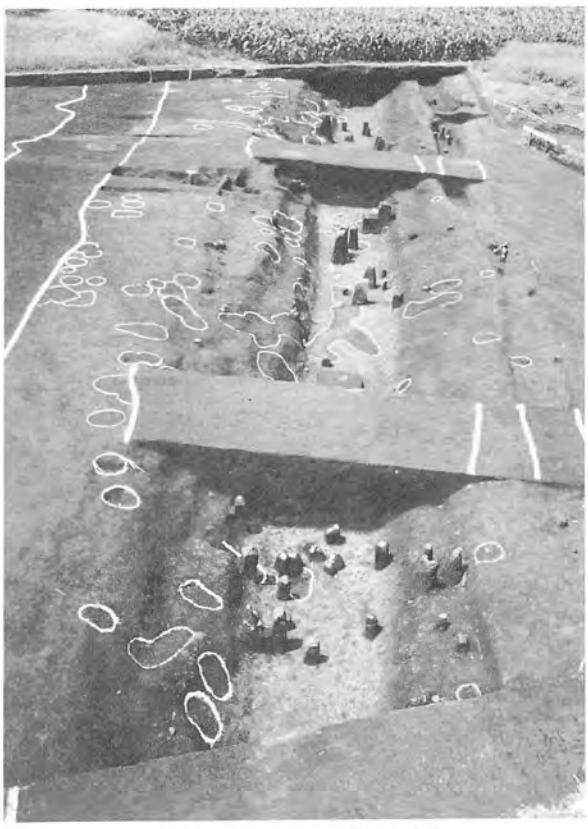
図版14

(1)全Ⅱ区RSD－01・SA－01検出状況
（発掘後）

(2)全Ⅲ区LSD－01・SK－207・
SD－213・SD－214検出状況
（発掘後）



(3)Ⅰ次試掘LSD－01検出
状況



(1)全II区ＳＤ－202内遺物出土状態

(2)全II区ＳＤ－202遺構検出状況（発掘後）

(3)全II区ＳＤ－202内遺物出土状態拡大

図版16

(1)ＳＤ－215・ＳＤ－216検出状況

(2)ＳＤ－206・ＳＤ－207検出状況

(3)ＳＦ－204・ＳＦ－205・ＳＦ－206検出状況

(1) ＳＦ－207、ＳＦ－208、ＳＤ－220
ＳＤ－221、ＳＤ－222遺構検出状況

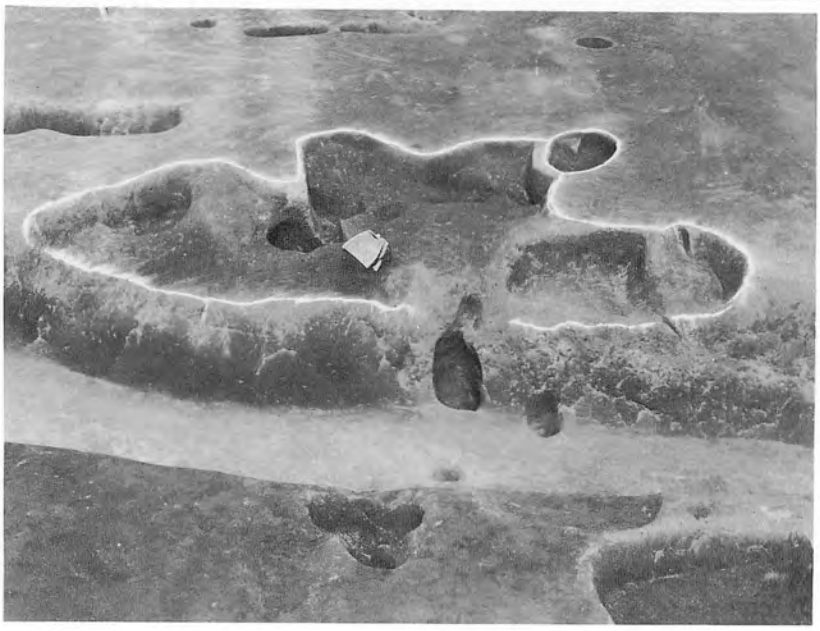
(2)全Ⅰ区22－ＥピットＮｏ32内遺物出土
状態

(3)全Ⅱ区34－Ｌ
SD－202内古銭出土ピット

図版18

(1)ＳＫ－205検出状況

(2)ＳＫ－214検出状況



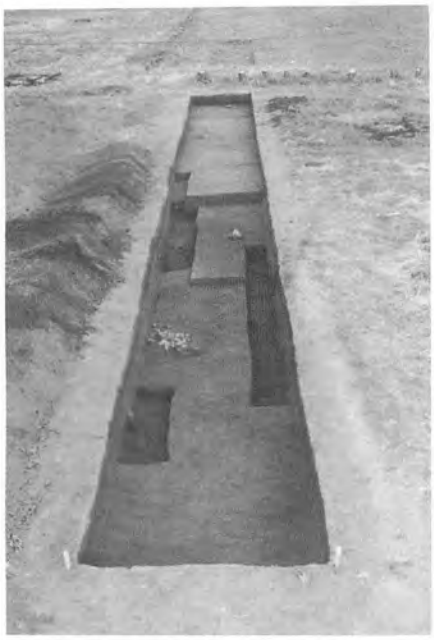
(3)ＳＫ－221検出状況

(1) S K －230（縄文集石）検出状況

(2) S X －201遺物出土状態

(3) S X －201遺構検出状況（発掘後）

図版20



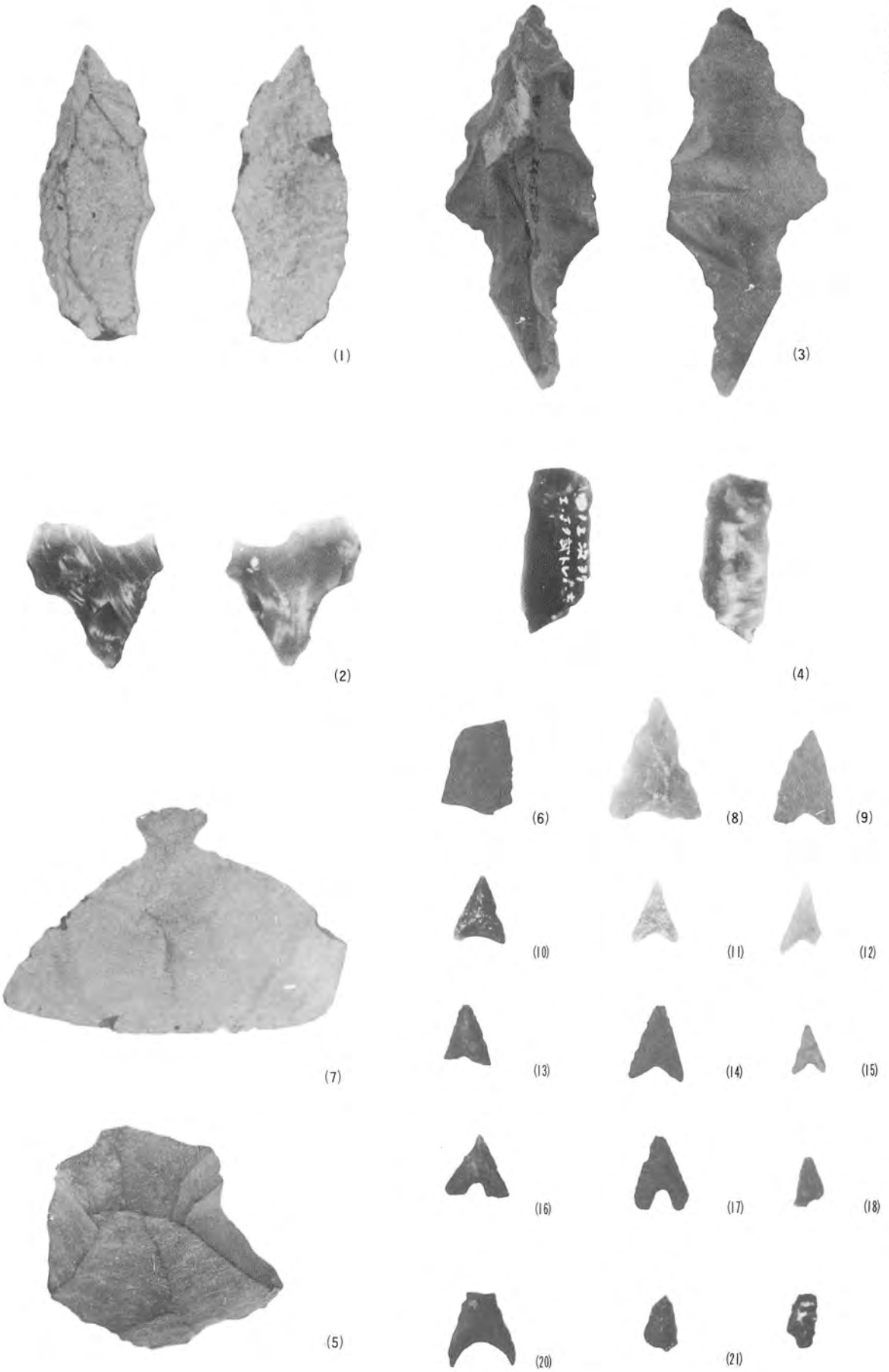
(1)35・36－G区　試掘トレンチ

(2)35・36－G区　縄文集石拡大

(4)47－K・L区　出土遺物拡大

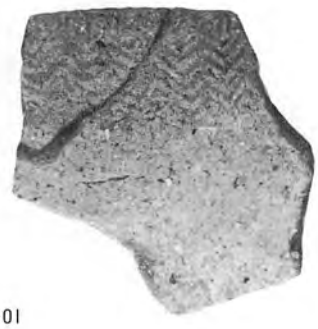
(3)47－K・L区　試掘トレンチ

(5)40－F・G区　試掘トレンチ

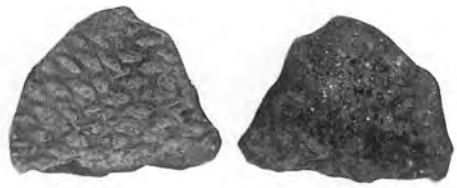


(1)～(4)$\frac{1}{1}$，(5)～(21)約$\frac{1}{2}$

図版22



J－01



J－26

J－04

J－18

J－19

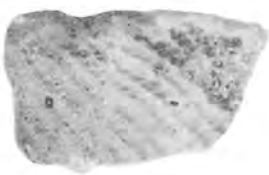
J－34

J－35

J－43

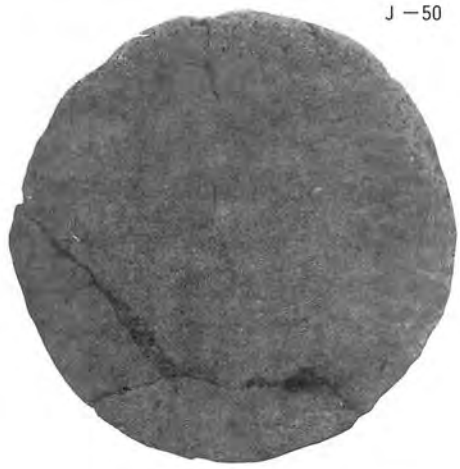
J－44

J－50



J－46

J－48



J－51

J－57

J－61

J－63

J－65

J－78

J－79

J－83

J－96

J－82

J－93

H－006

H－030

H－031

H－008

H－032

H－009

H－033

H－034

H－010

H－035

図版24

H－011

H－036

H－037

H－012

H－046

H－015

H－047

H－048

H－016

H－049

H－018

H－050

H－053

H－002

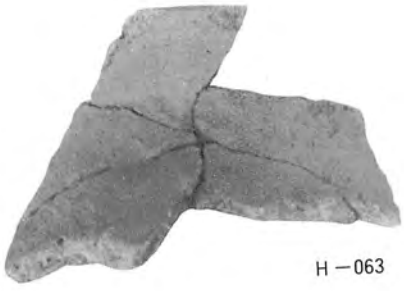
H－004

H－073

H－066

H－068

H－074


H－063

H－064

H－072

H－062

H－067

S－002

S－011

S－006

S－012

S－008

S－014

S－010

S－016

S－007

S－018

図版26

S－023

S－029

S－024

S－031

S－030

S－033

S－039

S－019

S－040

S－025

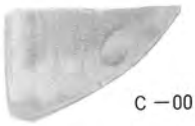
P－005

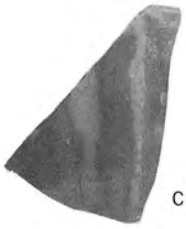
P－008

P－021

1

P－029


C－001


C－002

C－003

C－007

C－017

C－024

C－025

C－028

P－034

P－041

P－057

図版28

P－023

P－018

P－052

P－019

P－054

P－026

付　　論

曲野・寺尾遺跡の鉄滓調査
曲野遺跡出土の馬歯について

曲野・寺尾遺跡の鉄滓調査

昭和58年　1月　23日
大澤　正己

1．はじめに

曲野遺跡は、熊本県下益城郡松橋町に所在する。奈良時代末から平安時代に比定される巨大な溝遺構から鉄滓が多数出土した。又，曲野遺跡に隣接して同じ舌状丘陵上600mを隔てて寺尾遺跡が存在するが，ここより8世紀末から9世紀にかけての土坑より含鉄鉄滓が出土した。

これら両遺跡出土の遺物調査の依頼を熊本県教育委員会より受けたので、鉱物組成や化学組成らの金属学的調査を行ない、若干の考察を加えて報告する。

曲野遺跡の鉄滓は、いずれも鉄製品らの鍛錬鍛冶（小鍛冶）作業に伴なって排出される鍛冶滓であり、鍛冶炉の炉底部に集積した椀形滓（鍛錬鍛冶椀形滓）も共伴していた。寺尾遺跡出土の含鉄鉄滓も鍛冶段階で生成したもので、残留した金属鉄は炭素含有量が0.28%あり、過熱組織になっていた。

なお、寺尾遺跡からは、文官の七位相当の着用したと推定される青銅製帯金具が出土して官衙遺跡の特徴を示している。[1] また、土製馬形品が検出され、[2] 古代の鍛冶と祭祀の関連問題を提出している。

2．調査方法

（1）供試材

Table 1に調査に供した試料の履歴及び調査項目を示す。曲野遺跡出土品は8個（符号1はガラス釉の塊であったので調査対象材として扱っていない)、寺尾遺跡出土品1個である。なお後者は含鉄鉄滓であり、鉄滓と金属鉄を分離して調査した。

Table 1　供試材の履歴及び調査項目

遺跡名	符号	出土位置	推定年代	鉄滓内容	鉄滓の大きさ		調査項目		
					サイズ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	化学組成	マイクロ・ビラカース断面硬度
曲野	1	SX-201 ブリッジ下層		鉄滓ではなくガラス釉	50×30×23	26.5	中止	中止	中止
	2	SD-202　I－4	12～13C	鍛錬鍛冶椀形滓	90×65×30	305	○		
	3	〃　35-I区 I-2		〃	105×85×25	372	○	○	
	4	〃　34-H区 I-1		鍛錬鍛冶滓破片	50×35×20	77.6	○	○	
	5	〃　埋土内一括		盤状堆積砂鉄？	40×45×5	26.1	○		
	6	LSD-01 埋土上層一括		鍛錬鍛冶椀形滓の半分	50×45×22	139.8	○		
	7	SK-220 24-E区覆土中		鍛錬鍛冶椀形滓の破片	30×20×3	15.9	○		
	8	SD-210　23-G区 No.1		鍛錬鍛冶椀形滓(小型)	47×30×10	18.2	○		
	9	表土 33・34-D・E区		鉄片（錆化）	55×30×15	41.4	○		
寺尾	10	1-B区 SK—107-括	8C末～9C	含鉄鉄滓	60×40×20	1021.6	○ ○※	○ ○※	○ ○※

符号1は鉄滓ではないので調査を実施していない。　※金属鉄を分離して調査

（2）調査方法

1）　肉眼観察

2）　光学顕微鏡組織

鉄滓は水道水で充分に洗滌して乾燥後、二分割して片方の中核部を検鏡試料とした。（残余部分は化学分析用)。検鏡試料は、ベークライト樹脂に埋込んだ後、エメリー研摩紙（コランダム：Al_2O_3に磁鉄鉱を含んだ黒灰色の結晶の粉末砥石を膠質の接着剤で塗布している）の#150，#320，#600，#1,000を使って荒研磨し，次にアルミナ（Al_2O_3）粉末溶液(アルミニウム塩の沈澱物を焼成して作られた六方晶形細粒粉末の水溶懸濁液）をバフ布に注ぎながら被研面を仕上げて構成鉱物の同定を行なった。アルミナの粒子は，5μと1μを2回に分けて使用している。

3）　化学組成

Table 2に示した曲野・寺尾両遺跡出土品及びTable 4の寺尾遺跡遺物は次の分析法による。

容量法……酸化第1鉄（FeO)，五酸化燐（P_2O_5）

重量法……二酸化硅素（SiO_2）

赤外吸収法……炭素（C)，硫黄（S）

原子吸光法……全鉄分（Total Fe)，酸化アルミニウム（Al_2O_3)，酸化カルシウム（CaO)，酸化マグネシム（MgO)，酸化マンガン（MnO)，二酸化チタン（TiO_2)，酸化クロム（Cr_2O_3)，バナジウム（V)，銅（Cu)，

酸化第2鉄（Fe_2O_3）は計算による。

4）　マイクロ・ビッカース断面硬度

残留金属の組織及び酸化第1鉄(FeO)の同定のために、マイクロ・ビッカース断面硬度計(Micro Vickers Hardness Tester)による硬さの測定を行なった。試料は鏡面琢磨した試料に136°の頂角をもつダイヤモンドを押し込み，その荷重を除した商を硬度値としている。

3．調査結果

photo. I，IIに曲野遺跡出土品の鉱物組成を，photo. IIIに寺尾遺跡出土の含鉄鉄滓の鉱物組成及び金属鉄の組織を示す。また，鉄滓の化学組成をTable. 2に．金属鉄の化学組成をTable. 4に，マイクロ・ビッカース断面硬度値をTable. 5に記載している。

I）　**曲野遺跡出土鍛錬鍛冶椀形滓（2，3，6，7，8）**

試料2，3，6，7，8は，鍛冶炉炉底部に集積生成した椀形滓であり，鉱物組成はいずれも同系である。また化学組成も大きな変動はないと考えられるので，一括して述べることにする。

肉眼観察：　表皮は茶褐色を呈し，やゝなめらかな肌と，気泡の破裂した粗鬆な面を併せもっている。裏面は鍛冶炉の炉底のカーブにそった弯曲面をもち、滴下状の凹凸面で覆われている。色は茶褐色と黒褐色が混在し，やゝ楕円形気味の浅い椀形形状の鉄滓である。破面はコークス状の黒色多孔質部分と，赤褐色の緻密部分を有している。

今回の椀形滓は，大きなものは試料3で，105×85×30mmあり，小さなものは試料8の47×30×10mmである。3個（2，3，8）が完形品で，2個（6，7）が破片である。

顕微鏡組織：　試料2，3はphoto. Iに，試料6，7，8はphoto. IIに示す。鉱物組成は白色粒状で大きく成長したヴスタイト（Wüstite：FeO）と，灰色で長柱状もしくは盤状に発達したフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）らが，地の暗黒色ガラス質上に晶出している。鍛冶滓特有の晶癖を顕著に示している。

化学組成：　試料3で代表して分析している。結果をTable. 2に示す。全鉄分（TotalFe）が63.5%と非常に高く，このうち，酸化第1鉄（FeO）が55.8%を占め，酸化第2鉄（Fe_2O_3）が28.7%である。

造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は二次滓であるので低目の10.8%である。また，随伴微量元素もすべて低目である。二酸化チタン（TiO_2）0.22%，バナジウム（V）0.018%，酸化マンガン（MnO）0.084%

酸化クロム（Cr_2O_3）0.051%，硫黄（S）0.11%，五酸化燐（P_2O_5）0.15%，銅（Cu）Nilであった。

2）　曲野遺跡SD-202，34-H区，I-I出土鍛錬鍛冶滓破片（4）

肉眼観察：　表裏共に淡茶褐色でやゝ粗鬆な面をもち，周囲を割れ口で囲まれた鉄滓である。破面は茶褐色多孔質である。やはり鍛冶滓の特徴をそなえ，50×35×20mmで重量は77.6gであった。

鉱物組成：　photo. Iの上から3段目に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト（Wüstite：FeO）が多量に存在し，それらの粒間にフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が盤状に晶出している。

化学組成：　Table. 2に示す。全鉄分（Total Fe）は，やはり高目で58.5%で，このうち酸化第1鉄（FeO）の占める量が多く57.5%あり，酸化第2鉄（Fe_2O_3）は少な目の19.76%であった。

造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は鍛冶滓として平均的なレベルで16.99%あったが、このうち酸化アルミニウム（Al_2O_3）3.27%，酸化カルシウム（CaO）3.71%と高目で，この二成分のみを抽出すると，鍛冶滓としては珍しい類例に入るであろう。

二酸化チタン（TiO_2）は0.18%，バナジウム（V）0.015%と両者は低目である。しかし、鍛冶滓としては酸化マンガン（MnO）0.55%，五酸化燐（P_2O_5）0.46%はやゝ高目であるが，他は酸化クロム（Cr_2O_3）0.013%，硫黄（S）0.051%，銅（Cu）Nilで，いずれも少ない。個々には鍛冶滓として高目成分もあるが，総合的にみれば鍛錬鍛冶滓と判定して差支えなかろう。

3）　曲野遺跡SD-202埋土内一括出土盤状堆積砂鉄？（5）

肉眼観察：　淡茶褐色を呈し，あたかも鉄片が酸化した状態のような外観を示している。破面は締った土質状で小豆色を有し、そのなかに光輝微粒子が認められる。表裏と破面に磁性はほとんどない。40×45×5mmで重量は26.1gであった。

顕微鏡組織：　photo. Iの最下段に示す。光輝微粒子は砂鉄である。各粒子は角がとれ，丸味を帯びて風化を受けている。地圧で形成された自然堆積物の可能性が強い。盤状土質中の砂鉄量は少なく，製鉄原料とは考え難い。ただし、結論を出すには今後の検討が必要であろう。

4）　曲野遺跡表土33・34－D・E区出土鉄片（9）

肉眼観察：　淡茶褐色を呈する鉄片酸化物である。割れ目からは黒赤色のシミが出ている。破面も同色で金属鉄の残留は認められない。55×30×15mmで41.4gであった。

顕微鏡組織：　photo. IIの最下段に示す。金属鉄の残留はなく，鉄酸化物であるゲーサイト（Goethite：$Fe_2O_3 \cdot 2H_2O$）組織の確認にとどまった。鍛造品であるが該品から金属学的情報を得ることはできなかった。

5）　寺尾遺跡I－B区，S'K－107一括出土含鉄鉄滓（10）

肉眼観察：　表裏ともに赤褐色に黒赤色を混じ，鉄塊を思わせる塊である。強磁性であり，大きさが60×40×20mmに対して比重が大きく1021.6gの重量があった。テクニカッターで二分割した写真をphoto. IIIの下枠右上段に示す。約半分に金属鉄の残留と一部に銹化部分があり、鉄滓側はコークス状で黒色多孔質であった。以下に鉄滓と金属鉄を分けて記述する。

鉄滓の顕微鏡組織：　photo.IIIの上枠に示す。鉱物組成は白色粒状で巨大成長した多量のヴスタイト（Wüstite：FeO）と，金属鉄が風化したゲーサイト（Goethite：$Fe_2O_3 \cdot 2H_2O$）と，フェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$），それに地の暗黒色ガラス質から構成されていた。

鉄滓の化学組成：　Table. 2に示す。全鉄分（Total Fe）は非常に多く64.3%であり，このうち，酸化第1鉄（FeO）が低目の34.3%，鉄酸化物でゲーサイトの存在からか酸化第2鉄（Fe_2O_3）が他の鍛冶滓にみられない様に高く，53.6%あった。

造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は少なく5.75%であり，以下随伴微量元素も全部低目で二酸化チタン（TiO_2）が0.067%，バナジウム（V）0.006%と現われて、鉄滓そのものではなく，酸化鉄と一部鉄滓の

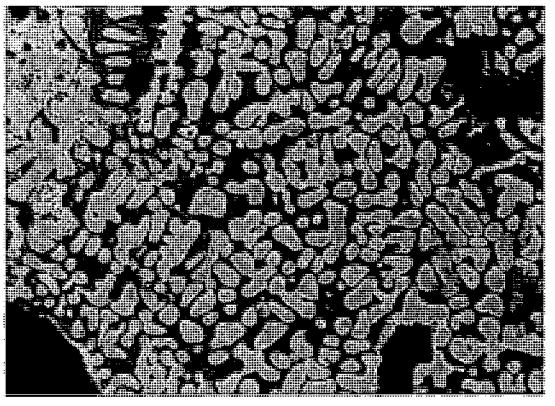
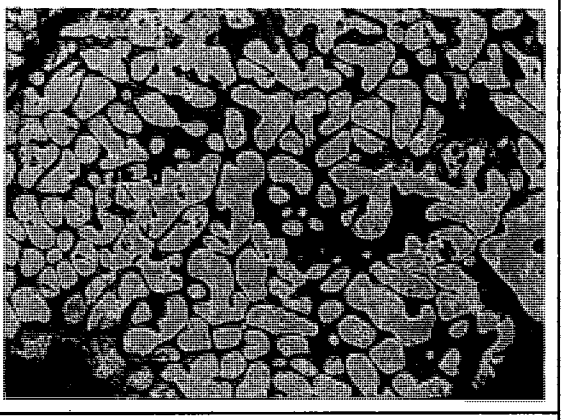
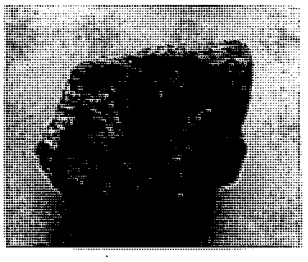
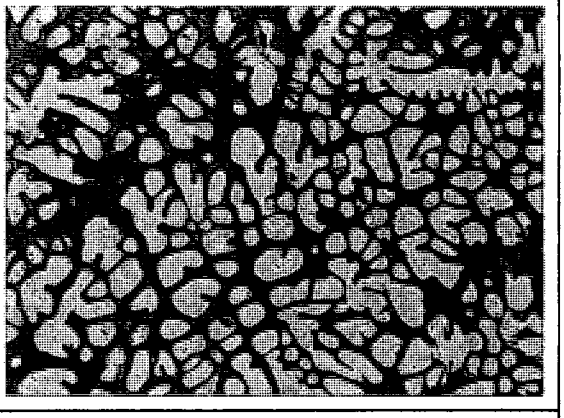
2 曲野遺跡 （ＳＤ－202 Ｉ－４） 鍛錬鍛冶滓 （椀形滓） ×100 外観写真½		
3 曲野遺跡 （ＳＤ－202 35－Ｉ区） 鍛錬鍛冶滓 （椀形滓） ×100 外観写真½		
4 曲野遺跡 （ＳＤ－202 34－Ｈ区） 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真½		
5 曲野遺跡 （ＳＤ－202 埋土内一括） 盤状堆積砂鉄 ×100 外観写真½		

photo Ｉ　鉄滓及び盤状焼結砂鉄の顕微鏡組織

Table. 2　鉱滓・鍛冶滓・砂鉄の化学組成（%）　―熊本県関係―

符号	遺跡名	区分	※番号	全鉄 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第一鉄 (FeO)	酸化第二鉄 (Fe_2O_3)	二酸化硅素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	註
3	曲野	鍛錬鍛冶滓		63.5	—	55.8	28.7	8.18	1.98	0.27	0.37	0.084	0.22	0.051	0.11	0.15	0.10	0.018	Nil	10.80	0.170	0.004	Φ-(イ)
4	〃	〃		58.5	—	57.5	19.76	9.22	3.27	3.71	0.79	0.55	0.18	0.013	0.051	0.46	0.08	0.015	Nil	16.99	0.290	0.003	Φ-(ハ)
10	寺尾	〃		64.3	—	34.3	53.6	4.00	1.51	0.039	0.15	0.10	0.067	0.018	0.088	0.11	0.20	0.006	Nil	5.75	0.089	0.001	Φ-(ロ)
K-821	洗切	鍛錬鍛冶滓		56.8	—	63.0	11.24	13.99	5.20	2.69	0.80	0.10	0.62	0.029	0.019	0.23	0.04	0.06	0.003	22.68	0.399	0.011	④
G-71	竜寺光	製鉄滓	3	44.12	0.14	44.04	13.94	13.23	6.86	1.99	4.58	1.02	12.65	0.08	0.037	0.240	0.11	0.22	0.001	26.66	0.604	0.287	⑤
H-71	古城谷	〃	4	37.17	0.14	40.28	8.18	14.48	8.66	1.68	5.33	1.17	1.750	0.12	0.048	0.177	0.11	0.31	0.001	30.15	0.811	0.471	〃
F-71	兎瓦音寺	〃	15	45.40	0.14	43.79	16.04	14.05	6.72	1.43	3.17	0.95	13.20	0.07	0.072	0.252	0.10	0.20	0.001	25.37	0.559	0.291	〃
E-71	たたらもとA	〃	18	39.32	0.22	45.54	5.30	14.74	8.11	2.06	5.02	1.30	16.00	0.12	0.043	0.206	0.09	0.27	0.001	29.93	0.761	0.407	〃
D-74	金塚	〃	20	49.55	0.14	47.06	18.34	8.58	6.32	1.62	2.73	1.06	14.00	0.10	0.044	0.303	0.10	0.20	0.001	19.25	0.389	0.283	〃
D-9	野原八幡4号墳	〃	25	50.50	Trace	26.94	42.26	10.90	2.76	Trace	2.76	0.68	10.58	0.127	0.048	0.119	0.41	0.26	Trace	16.42	0.325	0.210	〃
C-71	むくろじ	〃	38	25.81	0.28	21.57	23.98	23.52	11.41	4.58	4.24	0.75	9.45	0.12	0.071	0.240	0.09	0.42	0.002	43.75	1.695	0.366	〃
3i-6	諏訪原	鍛錬鍛冶滓	45	51.71	0.11	48.84	19.50	16.30	5.82	1.07	0.68	0.11	0.46	0.018	0.035	0.265	0.119	0.020	0.016	23.87	0.462	0.009	〃
S-71	沈目立山	鍛錬鍛冶滓（椀形滓）	60	60.63	0.15	50.86	29.95	12.14	3.92	1.22	0.65	0.52	0.44	0.05	0.064	0.211	0.12	Trace	0.006	17.93	0.296	0.007	〃
F-9	五反田	鍛冶滓？	70	7.73	Trace	1.58	9.29	66.39	14.50	1.07	2.75	0.16	0.46	0.042	0.015	0.148	0.32	0.038	Trace	84.71	10.959	0.060	〃
E-9	嵐口鞴	製錬滓	90	34.97	Trace	36.07	9.91	32.88	4.27	0.07	4.02	0.56	9.43	0.085	0.011	0.197	0.28	0.240	Trace	41.24	1.179	0.270	〃
G-9	丸山	〃	102	33.75	Trace	33.41	11.12	35.52	3.98	0.08	2.82	0.48	9.83	0.155	0.029	0.188	0.40	0.211	Trace	42.40	1.256	0.291	〃
H-91	今泉製鉄	〃	103	28.54	0.32	14.94	23.75	15.79	7.45	1.21	5.80	1.34	29.41	0.030	0.005	0.154	0.085	0.490	0.010	30.25	1.060	1.030	〃
H-92	〃	〃	103	31.75	17.56	1.65	18.46	17.71	6.99	1.05	5.46	1.02	30.06	0.020	0.017	0.120	0.167	0.380	0.003	31.21	0.983	0.947	〃
H-9	今泉製鉄	砂鉄		58.23	0.11	24.71	55.64	8.58	2.87	Trace	1.94	0.50	4.32	0.38	0.014	0.055	0.86	0.47	0.04	—	—	—	〃
KE	菊池川	〃		56.92	0.14	30.43	47.37	2.46	4.12	0.77	3.65	0.72	9.65	0.05	—	0.269	0.10	0.25	0.002	—	—	—	〃
3J-6	高橋南貝塚	鍛冶滓	57	36.87	0.28	20.20	29.87	22.55	4.48	7.20	1.52	0.12	0.33	0.011	0.358	1.150	1.86	Trace	0.009	35.75	0.970	0.008	⑥
3K-6	浜の館跡	鍛錬鍛冶滓（椀形滓）	62	67.20	0.06	64.19	24.66	5.75	2.18	1.01	0.34	0.05	0.13	0.011	0.040	0.245	0.113	0.008	0.004	9.28	0.138	0.002	⑦
3L-6	蓮花寺跡	〃 〃	107	67.02	0.05	62.39	24.61	5.25	1.97	1.07	0.34	0.09	0.09	0.011	0.032	0.149	0.137	0.020	0.005	8.63	0.129	0.001	③
3M-6A	相良頼景館跡	〃 〃	108	48.69	0.11	48.86	15.16	24.80	4.54	1.77	0.78	0.12	0.30	0.015	0.023	0.252	0.118	Trace	0.004	31.89	0.655	0.006	③
13	西弥護免	鍛錬鍛冶滓		45.8	—	52.1	7.30	21.4	10.01	2.85	1.41	0.10	0.43	0.012	0.031	0.68	0.09	0.011	0.003	35.67	0.779	0.009	㉖

造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）

※松本健郎『生産遺跡基本調査報告書Ⅰ』〈製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作所〉（熊本文化財調査報告第38集）熊本県教育委員会　1979
第3表製鉄遺跡一覧表の番号と対応する。（8～14頁）分析値は生産遺跡の報告用に準備したものであるが筆者急病のため未発表になっていた。
3i－6諏訪原，13西弥護免遺跡出土鉄滓は弥生時代後期～終末期の古いものである。

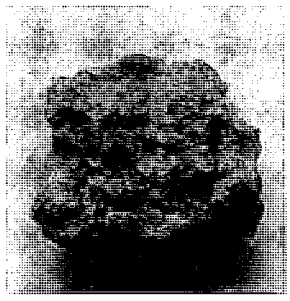
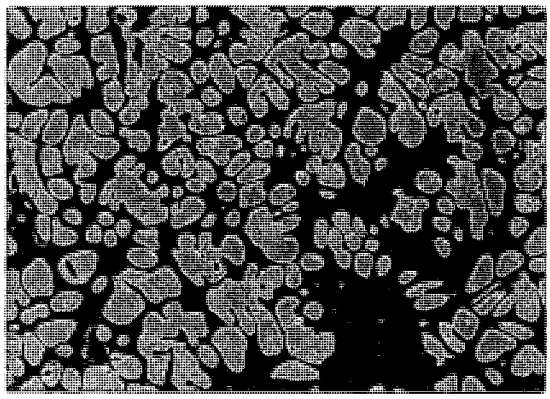
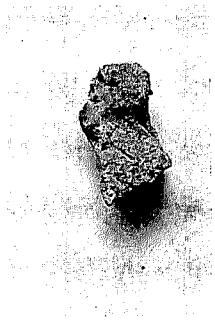
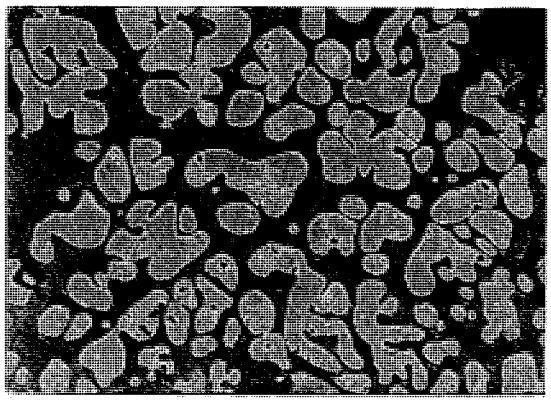
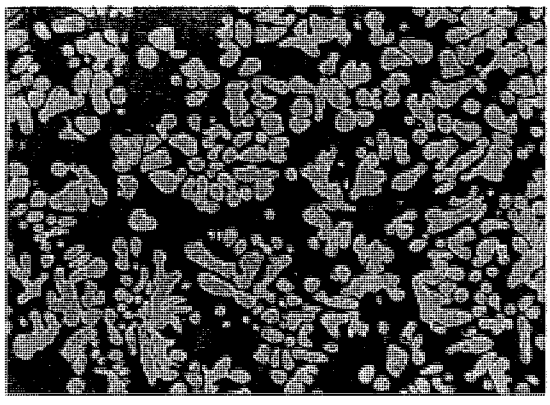
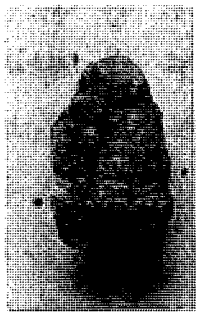
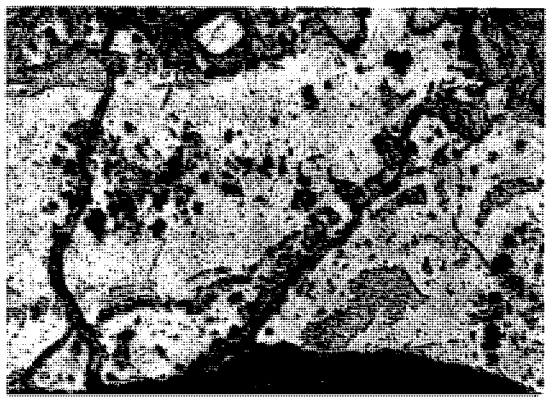
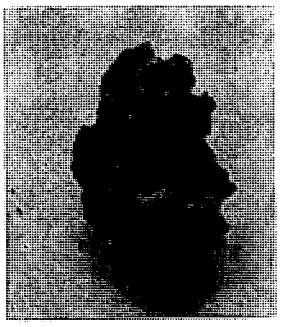
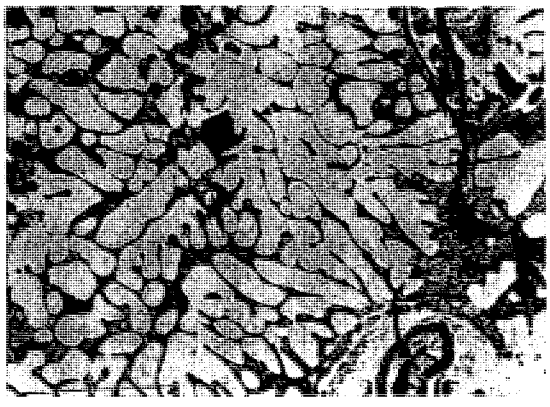
6 曲野遺跡 （LSD－01埋土上層一括） 鍛錬鍛冶滓 （椀形滓の半分） ×100 外観写真½		
7 曲野遺跡 （SK－220 24－E区覆土中） 鍛錬鍛冶滓 （椀形滓破片） ×100 外観写真½		
8 曲野遺跡 （SD－210 23－G区No.1） 鍛錬鍛冶滓 （小型椀形滓） ×100 外観写真½		
9 曲野遺跡 （表土33・34－D・E区） 鉄片酸化物 ×100 外観写真½		

photo Ⅱ　鉄滓及び鉄片酸化物の顕微鏡組織

10
寺尾遺跡
（1－B区 SK－107一括）

含鉄鉄滓
（鍛冶滓側）
×100
外観写真½

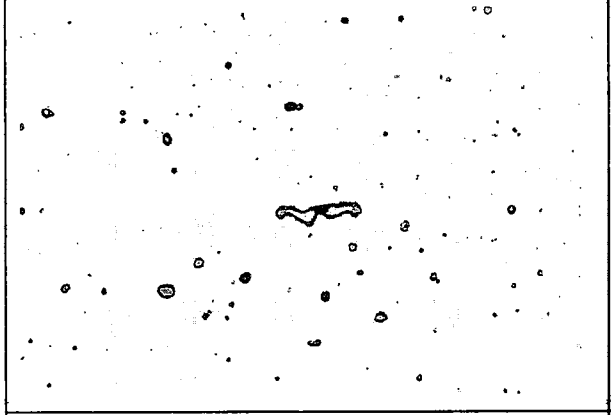


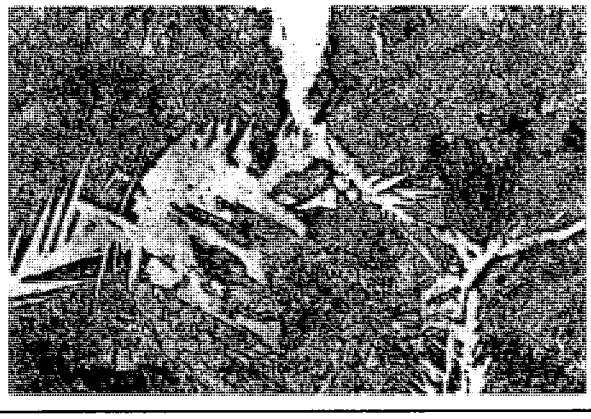


10　寺尾遺跡

金属鉄の組織

	二分割断面
非金属介在物 腐食なし ×100	炭化物組織 ピクラル腐食 ×400
非金属介在物 腐食なし ×400	結晶粒組織 ナイタル腐食 ×100





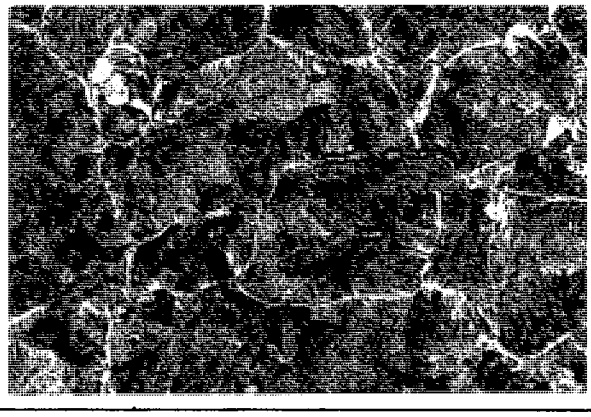


photo Ⅲ　含鉄鉄滓の顕微鏡組織

Table 3　既報告鉄滓分析例

符号	遺跡名	区分	※番号	全鉄 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化硅素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	註
他者分析結果	蛇ヶ谷	製鉄滓	28	46.72				7.81	18.46	1.55	4.38		Trace							32.20	0.689		⑧
	〃	〃	〃	33.19	2.09	38.26	1.94	22.64	8.15	3.22	4.41	1.28	12.97	—	(SO_3) 0.197	0.275				38.42	1.16	0.39	⑨
	下前原	鍛治滓	36	58.63				12.13	9.86	1.03	1.99		Trace							25.01	0.427		⑧
	柳迫	製錬滓	85	48.71				9.30	13.02	1.79	3.62		Trace							27.73	0.57		⑧
	〃	〃	〃	21.22	0.14	9.05	20.07	36.30	12.75	3.15	1.86	0.8	8.16	0.13	0.07	0.5			±	54.06	2.54	0.38	⑩
	六反	〃	30	44.85	0.56	43.03	15.50	15.84	6.56	1.42	1.02	1.08	14.52	—	0.054	P 0.096		—	0.001	24.84	1.711	0.324	⑪
	天草郡本渡海岸	砂鉄		53.59	—	28.73	44.70						6.42					V_2O_5 0.346					⑫

※Table 2に準ずる。

Table 4　鉄塊の化学組成

符号	遺跡名	所在地	推定年代	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ti	V	Ni	Co	Ca	Mg	Al	Cr	Zn	Mo	Sn	註
10	寺尾	熊本県下益城郡松橋町	8C末～9C	0.28	2.26	0.023	0.047	0.008	Nil	0.071	Nil	00.10	0.037	Nil	0.11	0.013	0.013	Nil	Nil	Nil	⑬
2C-92	大賀茂金山	静岡県下田市	平安後期	0.57	1.13	0.036	0.021	0.082	0.004	1.05	0.21	0.009	0.018	—	—	0.49	0.08	—	Trace	0.004	⑭
	西浦北	埼玉県大里郡岡部町	平安末期	0.75	1.79	0.007	0.202	0.172	0.020	0.059	0.007	0.026	0.035	0.42	0.036	0.23	Nil	Nil	0.003	Nil	⑮
Z-822	押入西	岡山県津山市押入西	6C末	0.92	0.07	0.025	0.013	0.015	Nil	Nil	Nil	0.020	0.044	Nil	0.023	Nil	Nil	Nil	Nil	Nil	⑯
	西浦北	埼玉県大里郡岡部町	平安末期	1.20	0.89	0.031	0.078	0.213	0.008	0.45	0.055	0.009	0.024	0.61	0.156	0.24	Nil	Nil	0.003	Nil	⑮
4A-6	真木山	新潟県北蒲原郡豊浦町	奈良末～平安初期	1.55	<0.001	Trace	0.038	0.013	0.106	0.025	0.005	0.025	0.042	0.0009	0.002	0.010	0.007	0.0008	0.004	0.013	⑰
30	大山	埼玉県北足立郡伊奈町	平安中期	2.0	0.18	0.08	0.155	0.120	0.011	0.85	0.108	Trace	Trace	—	—	—	0.01	—	Trace	0.003	⑱
	有馬条里	群馬県渋川市	平安	3.04	0,009	0.005	0.43	0.17	0.011	Nil	0.004	0.018	0.053	Nil	0.009	0.032	Nil	Nil	Nil	Nil	⑲
	公津原	千葉県成田市山口	奈良～平安	3.50	SiO_2 0.09	MnO 0.01	P_2O_5 0.45	0.046	0.015	TiO_2 0.01	0.01	—	—	CaO 0.01	MgO 0.01	Al_2O_3 0.02	0.004	—	—	—	⑳
	御幸畑	千葉県成田市東峰	8C	4.28	SiO_2 2.58	MnO 0.04	P_2O_5 0.27	0.058	0.009	TiO_2 0.26	0.09	—	—	CaO 0.13	0.10	Al_2O_3 0.98	0.02	—	—	—	⑳

10

分析値となっている。

金属鉄の顕微鏡組織： photo. Ⅲの下枠側の4枚に金属組織を示す。左側2枚は腐食（etch）なしの非金属介在物である。左上は100倍，左下は400倍で示す。非金属介在物の組成は，楕円形状に幾分伸びた淡灰色部がチタン一鉄酸化物（ウルボ・スピネル系：$2FeO \cdot TiO_2$)であり，灰黒色で多く点在するものが珪酸塩系（$SiO_2+Al_2O_3+MgO$）の介在物である。チタン一鉄酸化物の存在から，この金属鉄の履歴は砂鉄を原料とした製錬素材であることが指摘できる。非金属介在物の量は多くて清浄度は，0.4%前後になるものと推定される。

次にphoto. Ⅲ下枠右中央の組織は，ピクラル（ピクリン酸4 g＋エチルアルコール100cc.)で約30秒間腐食して現われた炭化物組織である。白い部分はフェライト（Ferrite)，黒もしくは層状に現われているところがパーライト（Pearlite）である。また，針状のフェライトはウィドマンステッテン組織（Widmannstätten Structure）の過熱組織（Over heated Structure）になっている。この組織から，金属鉄は鍛冶作業時の素材調整のため，鍛冶炉内で少なくとも1200℃前後の高温に加熱されている。そのため，オーステナイト（Austenite）結晶粒が温度とともに成長し，粗大化した過熱組織になったのであろう。金属鉄は再加熱して鍛造することにより，組織は微細化され，鉄製品に加工できる。

photo. Ⅲ下枠右下にナイタル（硝酸5 cc.＋エチルアルコール100cc.）腐食（etch）の結晶粒を示している，フェライトが母体オーステナイトの結晶面に析出した状態である，このオーステナイト結晶粒は，加熱温度が上昇するにつれて著しく大きくなり，一定温度で保定されれば結晶粒も均一化される。該材は温度が十分に安定しないうちに放冷されたとみえて結晶粒が，まだ不均一である。鍛錬鍛冶作業時の未回収品であろうか。

マイクロビッカース断面硬度： 金属鉄及び，ヴスタイト（Wüstite：FeO）部分の硬度の測定結果をTable 5に示す。金属鉄は，132～149で平均値は142である。炭素含有量が0.28%で炭化物がパーライトの過熱組織からみて妥当な値であろう。

参考のために，ヴスタイト（Wüsite：FeO）の硬度も測定した。401～623で平均値で476であった。文献にみられる値に近似している。

Table. 5 マイクロ・ビッカース断面硬度

符号	試料	硬度値					平均値
10	金属鉄	132	149	146	141	141	142
	Wüstite	623	401	429	450	475	476
※文献	Wüstite	450～500					
	Fayalite	600～700					
	Magnetite	500～600					
	Hematite	10000					

※日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』昭和43年

4. まとめ

曲野・寺尾遺跡は，8世紀末～9世紀にかけての官衙遺跡の可能性が強いところである。この遺跡の鍛冶工房より廃棄されたと考えられる椀形鉄滓や含鉄鉄滓の鉱物組成及び化学組成らの金属学的調査を行なって次のことが明らかになった。

〈1〉 椀形状鉄滓は，鉄製品鍛造加工時に排出される鍛錬鍛冶滓（加工鍛冶滓）である。いわゆる近世たたら用語でいうところの小鍛冶滓である。

〈2〉 鉱物組成は大きく成長したヴスタイト（Wüstite：FeO）＋フェアライト(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)で構成されている。

〈3〉 化学組成は二次滓であるので，全鉄分（Total Fe）が高く58.5～64.3%，逆に不純物は少なく，造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）が5.75～16.99%，二酸化チタン（TiO_2）0.18～0.22%，バナジウム（V）0.006～0.018%である。

〈4〉 Table. 2及びTable. 6に示した熊本県下出土の製錬滓の成分と今回の供試材を比較すれば，その差は明らかである。製錬滓の全鉄分（Total Fe）は28.5～50.5であり平均値で38.3%である。逆に製鉄

Table 6　各地域別の製錬滓と鍛冶滓の化学組成・鉱物組成の比較

組成 ＼ 項目		熊本県⑬			山口県白須山を中心に㉑		
		製錬滓	鍛冶滓		製錬滓	鍛冶滓	
			精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓		精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓
化学組成	全鉄分 (Total Fe)	28.5～50.5% 〈38.3%〉	〈48.7%〉	51.7～67.2 〈61.2%〉	27.9～36.7% 〈32.4%〉	54.9～61.2% 〈57.8%〉	65.6%
	造滓成分	19.3～43.8 〈30.6%〉	〈31.9%〉	8.6～23.9 〈14.5%〉	31.4～33.5% 〈32.8%〉	14.7～20.6% 〈18.6%〉	8.7%
	二酸化チタン (TiO_2)	9.45～ 30.1 〈15.65%〉	〈0.30%〉	0.18～0.62 〈0.32%〉	13.1～26.7% 〈18.1%〉	0.14～2.2% 〈0.83%〉	0.06%
	バナジウム (V)	0.20～0.49 〈0.29%〉	〈Trace〉	Trace～0.02 〈0.018%〉	0.20～0.48% 〈0.32%〉	Trace～0.21% 〈0.07%〉	Trace
	銅 (Cu)	Trace～0.010 〈0.002%〉	〈0.004%〉	0.006～0.016 〈0.005%〉	0.001～0.004% 〈0.002%〉	Trace～0.003% 〈0.001%〉	Trace
鉱物組成		M＋W＋F M＋F U＋I＋F	W＋F	W＋F W＋F＋Me	U＋I＋F I＋F	W＋F＋Me W＋F	W＋F＋Me

造滓成分 ($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$)
〈　〉内の数字は平均値

M　：Magnetite　(Fe_3O_4)
F　：Fayalite　($2FeO \cdot SiO_2$)
W　：Wüstite　(FeO)
Me　：Metallic Fe
U　：Ulvöspinel　(Fe_2TiO_4, $2FeO \cdot TiO_2$, $3FeO \cdot Fe_2O \cdot TiO_2$)
I　：Ilmenite　($Fe\ TiO_3$, $FeO \cdot TiO_2$)
S　：半還元砂鉄粒子
H　Herceynite　($FeO \cdot Al_2O_3$)

組成 ＼ 項目		福岡県糸島郡内㉒			福岡県北九州市内㉓			岡山県久米郡稼山地区内㉔			千葉県内㉕		
		製錬滓	鍛冶滓		製錬滓	鍛冶滓		製錬滓	鍛冶滓		製錬滓	鍛冶滓	
			精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓		精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓		精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓		精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓
化学組成	全鉄分 (Total Fe)	40～52% 〈46%〉	46～52% 〈49%〉	62～63% 〈62%〉	34～46% 〈39%〉	40～57% 〈49%〉	39～66% 〈56%〉	34～38% 〈36%〉	52%	53%	38～50% 〈43%〉	46～63% 〈55%〉	48～69% 〈59%〉
	造滓成分	26・29%	23～31% 〈27%〉	13～15% 〈14%〉	35～42% 〈39%〉	21～41% 〈31%〉	12～36% 〈19%〉	17～27% 〈22%〉	21%	7.5%	12～33% 〈23%〉	14～31% 〈22%〉	8～32% 〈19%〉
	二酸化チタン (TiO_2)	3.49%	1.8～2.6% 〈2.2%〉	0.05～0.2% 〈0.13%〉	2.9～13% 〈6.0%〉	1.5～2.2% 〈1.8%〉	0.13～0.38% 〈0.27%〉	22～36% 〈30%〉	5.6%	1.6%	13.8～30.0% 〈18.1%〉	2.09～5.5% 〈3.8%〉	0.11～1.8% 〈0.56%〉
	バナジウム (V)	0.29%	0.08～0.10% 〈0.09%〉	0.005～0.015% 〈0.012%〉	0.25～0.26% 〈0.255%〉	0.01～0.12% 〈0.07%〉	Trace～0.05% 〈0.019%〉	0.1～0.48% 〈0.26%〉	0.12%	0.06%	0.16～0.27% 〈0.24%〉	0.038～0.27% 〈0.16%〉	0.006～0.15% 〈0.040%〉
	銅 (Cu)	Nil	0.002% 〈0.002%〉	0.004～0.006% 〈0.005%〉	—	—	—	0.001～0.002% 〈0.002%〉	0.004%	Trace			
鉱物組成		W＋F W＋F＋M W＋F＋M＋S	W＋F W＋F＋M	W＋F	W＋F W＋F＋M W＋F＋M＋S	W＋F W＋F＋M	W＋F W＋F＋H	M＋F U＋I＋F	W＋M＋F	W＋F	W＋M＋F M＋F M＋S＋F M＋P＋F	W＋F W＋F＋M	W＋F W＋F＋H

原料に帰属する不純物は多い。造滓成分は19.2～43.8%，平均値で30.6%である。二酸化チタン（TiO_2）は砂鉄を原料としているので高目の9.45～30.1%，平均値で15.65%である，バナジウム（V）も砂鉄から随伴するので多く0.20～0.49%，平均値で0.29%である。

〈5〉　鉄滓中の化学組成は，製錬時に装入された砂鉄成分に大きく影響される。その為，砂鉄賦存地域の成分差が出てくる。Table. 6に示した九州の糸島郡内，北九州市内，山口県，岡山県，千葉県等の例でも判るように，それぞれの地域で大きく変動している。

〈6〉　寺尾遺跡出土の含鉄鉄滓は金属鉄の炭素量が0.28%である。現代でいう半軟鋼（C：0.20～0.30%）である。この炭素含有量レベルのものも鉄器製造の素材として使用されたものと考えられる。また，金属鉄中の非金属介在物からチタン一鉄酸化物が検出されたことにより，砂鉄製錬の素材と確認できた。過熱組織から1200℃前後の鍛冶温度が推定される。球磨郡多良木町の蓮花寺跡出土の椀形鍛冶滓の金属鉄からも過熱組織が検出されている。[③]

〈7〉　近年官衙に関連した遺跡から鉄滓の出土例があいついで報告されている。熊本県では八代市の洗切遺跡の例がある。[④] 他県についても20例近く調査している。後日これらをまとめて発表したいと考えている。

註

① （イ）高谷和生『曲野遺跡発掘調査』〈建設省3号松橋バイパス関係　報告会資料〉熊本県教育委員会　1982
（ロ）高谷和生「寺尾遺跡出土の青銅製帯金具『肥後考古』第2号　1982．9

② （イ）千葉県柏市の鴻ノ巣遺跡においても24号住居址から土製馬形品と鉄滓が出土し，祭祀行為があったことが報告されている。
古内茂・矢戸三男『柏市鴻ノ巣遺跡』千葉県都市公社　1974
（ロ）大澤正己「千葉県下遺跡出土の製鉄関係遺物の分析調査」『研究紀要』7　千葉県文化財センター　1982
鴻ノ巣遺跡出土鉄滓は鍛冶滓であった。

③ 大澤正己「蓮花寺跡出土鉄滓の調査」『蓮花寺跡・相良頼景館跡』（熊本県文化財報告書　第22集）1977

④ 大澤正己「洗切遺跡出土鉄滓の分析調査」『洗切遺跡調査報告』八代市・洗切遺跡調査団　1982

⑤ 熊本県教育委員会松本健郎氏から試料の提供を受けて筆者が分析した。未発表。

⑥ 菊池泰二・大澤正己・大迫靖雄・木村幾多郎・松本健郎『高橋南貝塚』熊本県文化財調査報告第28集 1978

⑦ 桑原憲彰・阿蘇保夫・大澤正己他『浜の館一阿蘇大宮司居館跡一』熊本県文化財調査報告第21集 1977

⑧ 和島誠一「鉄器の成分」『月の輪古墳』近藤義郎編　月の輪古墳刊行会　1960

⑨ 窪田蔵郎『鉄の考古学』雄山閣　1973

⑩ 湊秀雄・佐々木稔「タタラ製鉄鉱滓の鉱物組成と製錬条件について」『たたら研究』第14号 1968

⑪ 窪田蔵郎「現代のスラグ・古代の金糞」(その材質と用途の比較)『金属』アグネ社　Vol. 50　No. 6　June　1980

⑫ 長谷川熊彦『砂鉄』　技術書院　1963

⑬ 大澤正己「曲野・寺尾遺跡の鉄滓調査」本報告

⑭ 大澤正己「大賀茂金山遺跡出土の鉱滓・鉄塊の分析調査」『大賀茂　金山遺跡』下田市教育委員会　1980

⑮ 佐藤忠雄『大寄B遺跡・西浦北遺跡』埼玉県大里郡岡部町教育委員会　1979
遺構についての概報はなされているが、近日中の製鉄関係遺物の報告が刊行される予定。この時点で鉄塊分析値を発表する。

⑯ 岡山県津山氏教育委員会安川豊史氏提供試料。近日中に報告予定。
大澤正己「押入西遺跡出土鉄滓及び鉄塊の金属学的調査」『押入西遺跡』
（津山市埋蔵文化財調査報告書第　集）1983

⑰ 大澤正己「真木山遺跡出土の鉱滓・鉄塊の調査」『真木山製鉄遺跡』豊浦町教育委員会　1981

⑱ 大澤正己「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』（埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集）1979

⑲ 大澤正己「有馬条里遺跡出土鉄塊及び鉱滓(製錬滓)・精錬鍛冶椀形滓の調査」『有馬条里遺跡』群馬県渋川市教育委員会 1983

⑳ 大澤正己「千葉県下遺跡出土の製鉄関係遺物の分析調査」『研究紀要』7 千葉県文化財センター 1981

㉑ 大澤正己「白須山たたら製鉄関係遺物の調査」『白須たたら製鉄遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告 第65集) 1981

㉒ 大澤正己「前原町波多江遺跡出土鉄滓の分析調査」『波多江遺跡』福岡県教育委員会 1982

㉓ 大澤正己「新道寺天疫神社前遺跡出土の鉄滓の調査」『新道寺天疫神社前遺跡』北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 1982

㉔ 大澤正己「大蔵池南製鉄遺跡を中心とする製錬滓と鍛冶滓の検討」『稼山遺跡群』Ⅵ 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982

㉕ 大澤正己「谷津遺跡出土の製鉄・鋳銅関連遺物の分析調査」千葉市教育委員会へ原稿提出済み 1981. 9. 8

㉖ 瀬丸敬二他『西弥護免遺跡調査概報』西弥護免遺跡調査団 1980

○補足 1

帯飾り金具(銙板)と鍛冶炉13基が検出された。8世紀代の官営製鉄跡(鍛冶工房)と考えられる新潟県佐渡郡相川町の馬場遺跡出土の椀形滓も鍛錬鍛冶滓(小鍛冶滓→加工鍛冶滓)であった。

大澤正己「馬場遺跡出土鉄滓・砂鉄の調査」『馬場遺跡』相川町教育委員会 1983

○補足 2

福岡市南区柏原所在の柏原遺跡M区において石製帯飾り具(丸鞆…3種)と唐三彩皿(晩唐期)及び鍛冶炉が6基(増加の可能性あり)検出されている。調査続行中。平安時代に推定される。官衛的工房の可能性が考えられる。S58.3.26現地確認。福岡市文化課山崎純男氏調査担当。

○補足 3

神奈川県平塚市上吉沢に所在する向原遺跡は10～11世紀に比定される。この遺跡の39号住居址より2基の鍛冶炉と共に羽口数点を出土し,鍛冶工房址と推定されている。また鍛錬鍛冶椀形滓や鍛打滓らと共に3,358点にも及ぶ鉄製品が検出され,さらに石帯1点が共拌して注目されている。

大澤正己「向原遺跡出土の鉄滓及び鉄器片・鍛打滓の金属学的調査」『向原遺跡』(神奈川県埋蔵文化財調査報告書) 1983

○補足 4

千葉県八千代市村上字込の内に所去する村上込の内遺跡は9世紀に比定され,093住居址がある。これより銙帯具の鉈尾と鍛錬鍛冶滓が共伴出土している。

大澤正己「千葉県下遺跡出土の製鉄関係遺物の分析調査」『研究紀要』7千葉県文化財センター 1892

○補足 5

製錬炉,鍛冶炉両方を設置した遺物で丸鞆(石製)を共伴した遺跡に埼玉県大里郡岡部町所在の西浦北遺跡がある。Table 4に示す鉄塊を調査した遺跡(注⑮)である。

曲野遺跡出土の馬歯について

吉倉　真

曲野遺跡，調査区ＳＤ−202，ＳＫ−219，36−Ｆ区などから出土した馬歯について，調査した結果を報告する。

まずＳＤ−202から出土したもののうち，ここに記載するものは，半ば土中に埋まっている下顎左側（Ｌ）の第２前臼歯（P_2）〜第３後臼歯（M_3）（図１）と，遺跡発掘のとき取りあげられた、下顎右側（Ｒ）の第３前

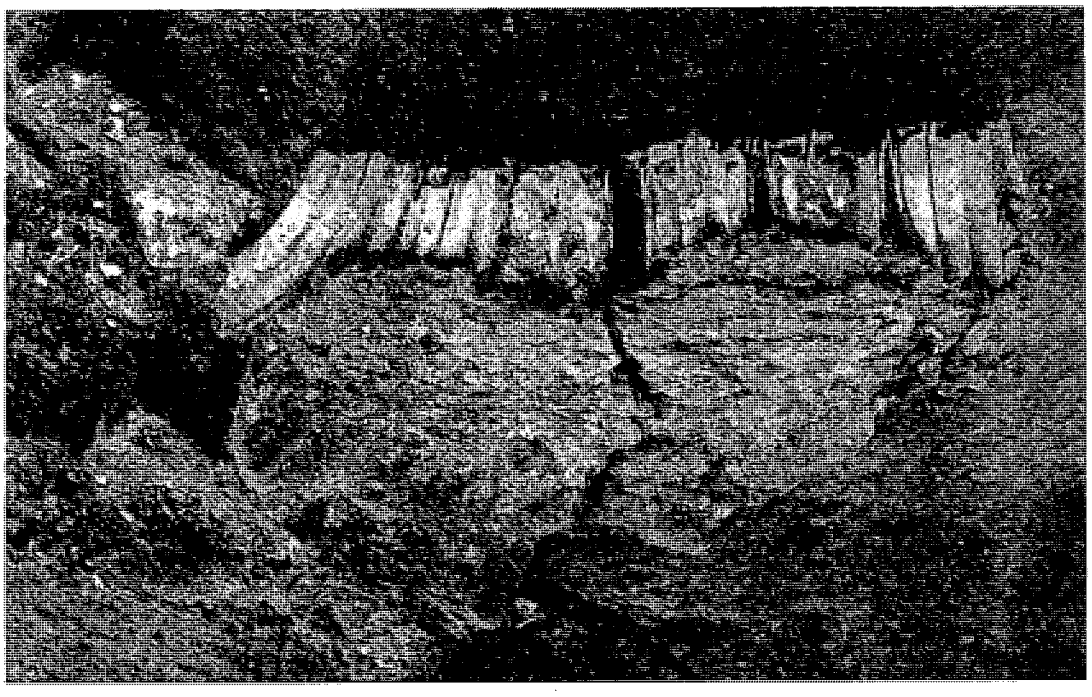


図１　曲野遺跡調査区ＳＤ−202出土の馬歯（LP_2−M_3）

臼歯（P_3），第４前臼歯（P_4），第１後臼歯（M_1），第２後臼歯（M_2），第３後臼歯などである。これらは同一個体のものであるが，いずれも破損していて，完全な測定はできなかった。測定値を表１に示す。

表１．曲野遺跡ＳＤ−202出土の馬歯の測定図

	歯冠（咬合面）			
	長さ mm	幅 mm	幅率(%) 幅/長さ×100	歯高 mm
LP_2	28+	8+	−	55+
LP_3	25+	−	−	−
LP_4	26+	−	−	−
LM_1	24+	12+	−	−
LM_2	22+	12.0	−	−
LM_3	35.0	11+	−	60+

	歯冠（咬合面）			
	長さ mm	幅 mm	幅率(%) 幅/長さ×100	歯高 mm
RP_2	−	−	−	−
RP_3	24+	−	−	57+
RP_4	27.0	14.0	51.85	68+
RM_1	26.0	13.0	50.00	59+
RM_2	26.0	12.0	46.15	63+
RM_3	27+	11+	−	56+

歯冠部におけるP_2前端からM_3後端までの長さ160＋mm

註１．歯の高さから，この個体は10歳位のものと思われる。

次に調査区ＳＫ−219から出土したものであるが，これは下顎右側の臼歯５個だけであった（図２）。

図2　曲野遺跡調査区ＳＫ－219 出土の馬歯（RP_2、RP_4－M_3）（浦田）

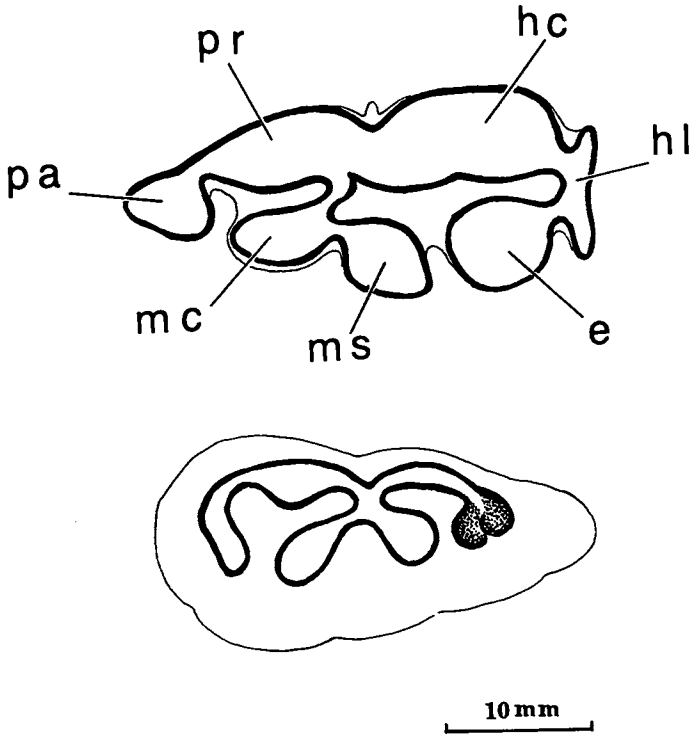


図3 曲野遺跡調査区ＳＫ19出土の馬歯。歯冠のエナメルひだを示す
上．RP_2　下．RM_3　e．entoconid（下内錐）hc．hypoconid（下次錐）hl．hypoconulid（下次小錐）mc．metaconid（下後錐）ms．metastylid（下後付錐）pa．paraconid（下前隆起）Pr．protoconid（下原錐）

それらの測定値を表２に示す。

この馬の歯について注意をひくのは，まず歯高の測定値が，ＳＤ02出土のものに比べて大きい。

つまり，歯根が深く入りこんでいて長いことである。次にM_3（図３）の歯冠の後部，hypoconulid（下次小錐）およびentoconid（下内錐）のエメナルひだがまだできていない。つまり，萠出中のものと思われる。なお，歯冠全体が著しく小さい。これらのことは，この馬がまだ若いことを示すものである。現代馬では，M_3は生後３～４年ごろ発生する。従ってこの馬も，おそらくそれ位の年齢と思われる。

調査区Ⅲ36Ｆからは，下顎左側の臼歯の破片が１個出ている。このものの歯冠のエナメルひだを見ると，それは，塚原古墳群丸山39号墳出土のLM_2のそれによく似ている。しかし破片なのでM_2かどうかは確言できない。

論　　議

さて，熊本県内の中世遺跡から馬歯が出た例は極めて少ない。筆者が初めて見たものは，昭和51年３月４日，熊本市健軍町庄口川沿いのミョウゲンジ屋敷下の鎌倉時代の遺跡から，青磁などと共に得られた馬歯16個であった。それらはみな著しく破損していて，詳しい調査はできなかった。ただ，頬歯であることは間違いなく，その大きさからみて，塚原古代馬よりはやや大きい小形馬ではないかと思われ

表2．曲野遺跡SK-219出土の馬歯の測定値

	歯冠			歯高
	長さ mm	幅 mm	幅率 %	mm
RP_2	32.0	13.0	40.62	61+
RP_3	—	—	—	—
RP_4	26.0	12.0	46.15	82+
RM_1	28.0	12.5	44.64	85+
RM_2	28.0	12.5	44.64	78+
RM_3	20.0	9.0	45.00	73+

表3．高橋南貝塚出土の馬歯の測定値

	歯冠			歯高(現長)
	長さ mm	幅 mm	幅率 %	mm
RP^2	36.4	21.75	59.75	—
RP^3	29.2	25.1	85.95	72.9
RP^4	28.3	25.8	91.16	73.0
RM^1	24.8	25.3	102.01	67.3
RM^2	25.9	21.2	81.85	66.7
RP_3	28.8	26.6	92.36	71.0
RP_4	29.3	26.4	90.10	71.6

註1．幅率の数値は筆者による

表4．多々良遺跡出土の馬歯の測定値

	歯冠			歯高(現長)
	長さ mm	幅 mm	幅率 %	mm
RP_3	27.0	16.0	59.25	54.0
RP_4	25.0	16.0	64.00	62.5
RM_1	24.0	15.0	62.50	49.0
RM_2	24.0	14.0	58.33	53.0

歯冠部におけるP_3前端からM_2後端までの長さ100mm
註1．幅率の数値は筆者による

表5．中世馬のM_1の歯冠の大きさ（mm）

長さ	幅	幅率	発掘地（時代）	文献
1．R．28.0	12.5	44.64	熊本県曲野遺跡 SK19（中世）	
2．R．26.0	13.0	50.00	〃 SD02（中世）	
3．R．24.0	15.0	62.50	福岡市多々良遺跡（鎌倉時代？）	(1)
4．L．22.4	15.0	66.96	神奈川県秦野市（江戸末期）	(3)
5．R．24.4	17.5	71.72	青森県下北郡川内町（中世～近世）	(3)
6．L．22.0	17.0	77.27	神奈川県鎌倉市（鎌倉時代）	(3)

た。

熊本市高橋町の高橋南貝塚（鎌倉時代後半）からは，馬の四肢骨と歯が出ている。歯について木村（1978）が調べた測定値を表3にあげておく。

木村によれば，この馬は，先史時代の小形馬と，中形馬との中間に属するもので，推定体高124.5cm。農耕馬というよりは，日常の乗用馬として使用されていたものであろうか，とのことである。この馬の歯について注目すべきは，RP^3－M^2，RP_3，P_4などの歯冠の幅率が，いずれも著しく大きく，80～100%程度であることである。このことは咬合面が幅広いことを示すもので，これが一体何を意味するかについては後で考察することにしたい。

福岡県福岡市では，鎌倉時代のものであろうといわれている多々良遺跡から，馬歯が4個出ている。これについて林田（1972）が調べた測定値を表4にあげてみよう。

多々良の馬の下顎頬歯の歯冠の幅率は，曲野の馬よりやや大きく，60%程度である。ところで筆者はさきに，「塚原古墳群出土の馬歯」の報告（1975）において，日本全国各地から得られた古代馬のM_1の歯冠の幅率について，それらの数値を比較してみた。それによると，熊本県塚原古墳群の古代馬では，1頭は43.3%，他の1頭は60.4%であった。これに対して関東地方の古代馬では，その多くが75～80%程度であった。このことは，前者が九州在来の小形馬であり，後者がアジア大陸から日本に移入された，蒙古馬系統の中形馬であることを示唆するものであろうということを述べた。

中世馬についても，資料が乏しいので確言はできないが，表5をみると，それと同じことが言えそうである。

要するに，ここに報告した曲野遺跡の中世馬は，古墳時代から飼養されていた九州在来の小形馬とみなされる。さきに述べた高橋南貝塚の中世馬は，頬歯の歯冠の幅率が著しく大きいところをみると，九州在来の小形馬とは思われない。大陸から移入された蒙古馬系統のものか，それの血筋をひく雑種ではないかと思われる。

引用文献

（1） 林田重幸（1972）中世馬―多々良遺跡出土の馬歯を中心に。
福岡県埋蔵文化財調査報告書20集。81―89。

（2） 木村幾太郎（1978）高橋南貝塚出土の動物遺存体。
熊本県文化財調査報告書第28集。85―95。

（3） 直良信夫（1970）日本および東アジア発見の馬歯・馬骨。日本中央競馬会。

（4） 吉倉　真（1975）塚原古墳群出土の馬歯。熊本県文化財調査報告第16集。323―337。

付　　編

寺尾遺跡調査報告

本文目次

1．調査経過及び調査の概要…… 195
2．主な遺構と遺物…… 199
(1)遺　構…… 199
(2)遺　物…… 204
3．まとめ…… 241

図版目次

図版１　(1)遺物出土状況（上層）…… 243
(2)ＳＩ－101，102遺物出土状況…… 243
(3)１，２－Ａ～Ｃ区遺構集中部…… 243
２　(1)ＳＫ－101遺物出土状況…… 244
(2)ＳＫ－101出土遺物拡大…… 244
(3)１，２－Ｂ，Ｃ区遺構集中部…… 244
３　(1)１，２－Ａ～Ｃ区完掘状況…… 245
(2)０－Ａ～Ｃ区遺構状況…… 245
(3)縄文集石半載…… 245
４　(1)発掘調査風景…… 246
(2)小具塚半載(ＳＭ－106)…… 246
(3)ＳＤ－103，107…… 246
(4)ＳＤ－103断面写真…… 246
(5)紡錘車出土状況(ＳＫ-127内ピット107)
(6)土馬（No.１）出土状況…… 246
(7)小具塚分布状況…… 246
５　出土遺物（土師器）…… 247
６　出土遺物（須恵器）…… 248
７　出土遺物(土師器・紡錘車・土馬・須恵器)… 249

挿図目次

第１図　寺尾遺跡周辺地形図(2,500分の１)…… 196
２　寺尾遺跡遺構配置図…… 197
３　ＳＫ－101出土遺物実測図…… 199
４　土師器蓋法量比較図…… 205
５　土師器(蓋)実測図…… 206
６　土師器(坏)実測図…… 207
７　土師器(坏・埦)実測図…… 208
８　土師器高台付坏・埦法量比較図…… 209
９　土師器坏形態分類図…… 211
10　土師器坏・埦法量比較図…… 212
11　土師器(坏・鉢・皿)実測図…… 213
12　土師器皿法量比較図…… 214
13　土師器(高坏・高台付盤・鉢)実測図…… 216
14　土師器(甕)実測図…… 217
15　土師器(甕・甑)実測図…… 218
16　土師器(甑・把手)実測図…… 220
17　須恵器蓋口縁部模式図…… 222
18　須恵器蓋法量比較図…… 222

第19図　須恵器（蓋）実測図……223
20　須恵器坏形態分類図……225
21　須恵器坏法量比較図……225
22　須恵器坏高台断面形模式図……226
23　須恵器高台付坏法量比較図……227
24　須恵器(坏)実測図(1)……228
25　須恵器(坏)実測図(2)……229
26　須恵器(坏・埦)実測図……231
第27図　須恵器(皿・鉢・蓋・高坏)実測図……233
28　須恵器(甕)実測図……235
29　須恵器(提瓶・長頸壺)実測図……236
30　巡方実測図……237
31　寺尾遺跡出土鉄製品実測図……238
32　土馬実測図……239
33　紡錘車実測図……240

表　目　次

第１表　土壙遺構（ＳＫ）一覧……200
2　竪穴遺構（ＳＩ）一覧……202
3　溝遺構（ＳＤ）一覧……203
4　遺構別出土遺物個数一覧(実測分)……204
5　土師器蓋観察表……205
6　土師器高台付坏観察表……209
7　土師器坏観察表……210
8　土師器埦・高台付埦観察表……214
9　土師器皿観察表……215
10　土師器鉢・高坏・高台付盤・甕・甑観察表……219
第11表　須恵器蓋観察表……224
12　須恵器坏観察用……227
13　須恵器高台付坏観察表……230
14　須恵器高台付埦観察表……232
15　須恵器皿観察用……232
16　須恵器盤・壺蓋・鉢・平瓶観察用……234
17　須恵器高坏観察表……234
18　須恵器壺・甕・長頸壺観察表……237
19　寺尾遺跡出土鉄製品実測図……238

1. 調査経過及び調査の概要

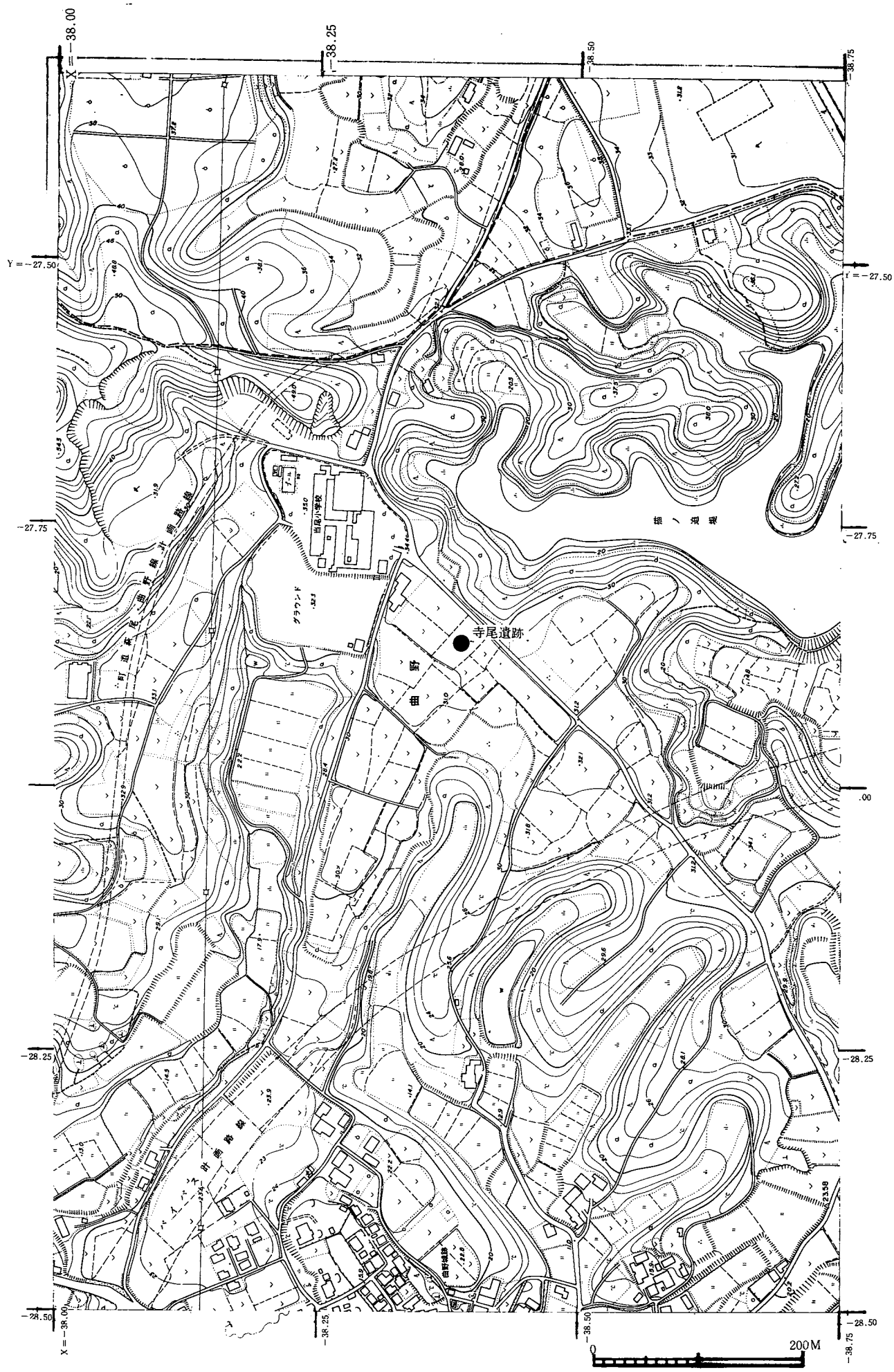
昭和55年11月17日、高谷と古森政次は一般国道松橋バイパス埋蔵文化財調査で現地付近の踏査を行なっていた所、県営当尾地区圃場整備事業に伴う工事において削られた断面より須恵器、土師器破片を多数採集した。既に大部分の遺跡と思われる部分は削平されているが50m×40m程の地域については残存し、その地域についても近日中に削平するとの事であった。

当該地域は圃場整備事業の工事に際し立合いが必要である地域であり、至急課内で協議し対策を立てた。まず試掘トレンチを設定し遺構面を確認する。さらに遺構面直上まで重機によって表土を剝ぎ遺構の拡がりを確認する。その結果この地域については、奈良末～平安時代初頭の竪穴3軒、溝遺構1本等が確認されたので発掘調査が必要であると判断された。調査に際して県耕地一課、県文化課、松橋町産業振興課耕地係および松橋町教育委員会との協議事項は次の通りである。(1)調査日数は20日間とし、調査費は県耕地一課が負担する。(2)調査員は松橋町教育委員会が派遣し、県文化課が調査指導を行なう。

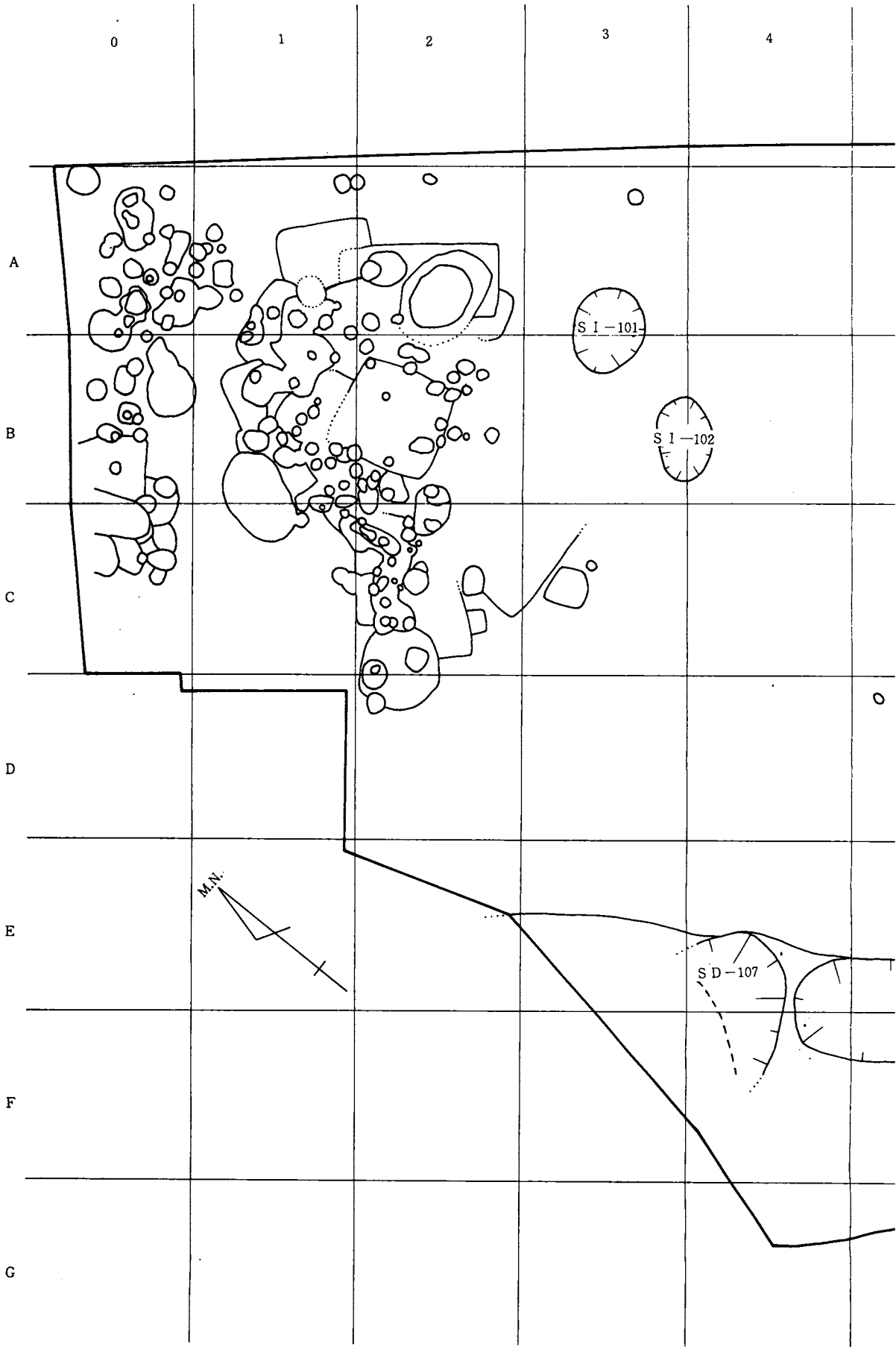
調査は12月初旬から開始された。全地域に5m方眼のグリッドを設定する。遺物は北側の1～3－A～C区に集中し、遺物を一層取り上げた後遺構面の確認を行なった。遺構はかなり複雑に複合し合い検出に手間どった。さらに排土地としていた箇所にまで遺構が広がる事が確認できたので北側に拡大し調査区を拡げた。遺構は当初の想定を越え新たに増加し検出された為に、調査期間をさらに20日間延長し、後半からは県文化課職員による調査となった。昭和56年2月末日現地での調査を完了した。

調査組織

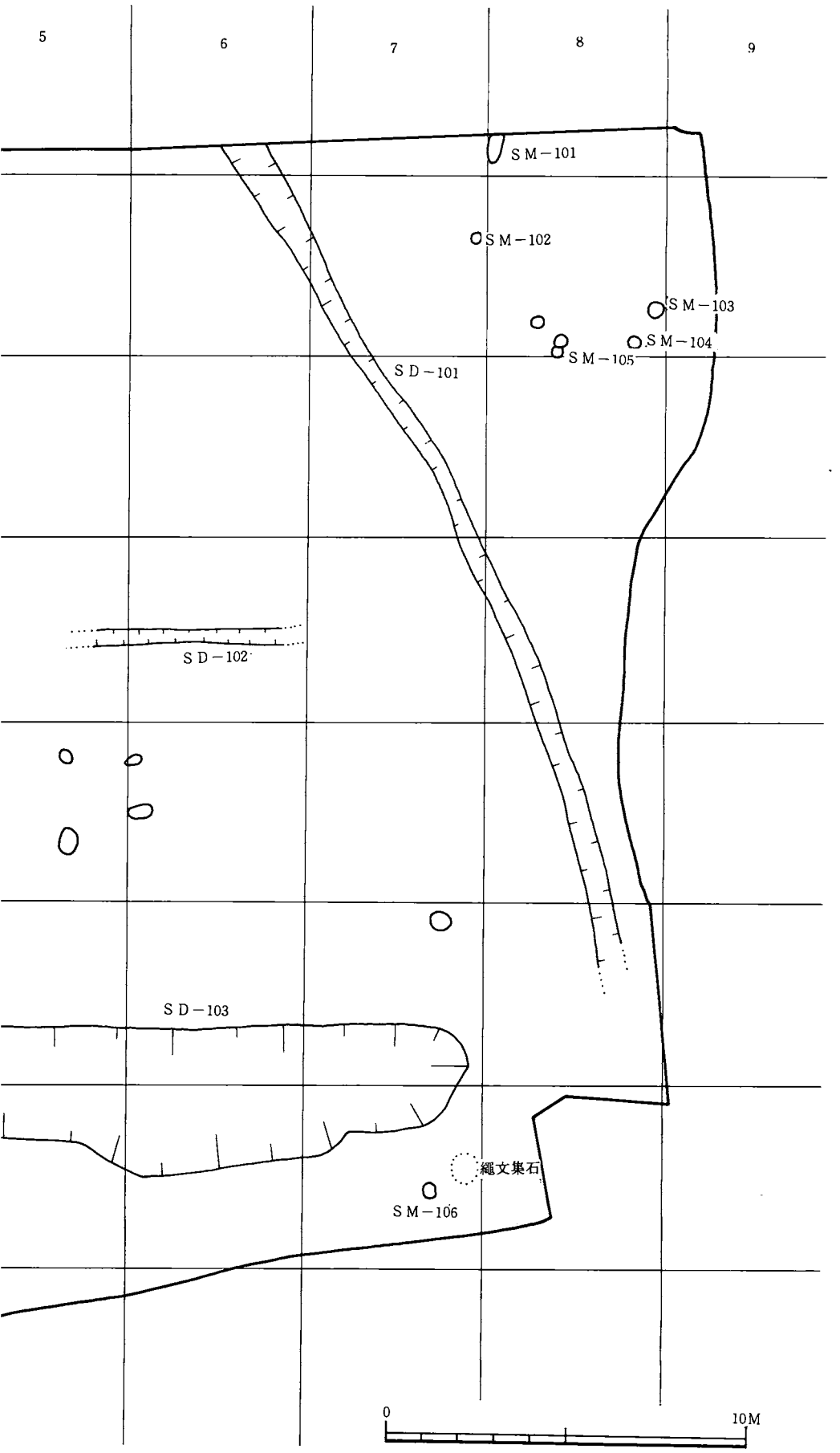
調査主体　熊本県教育委員会
調査責任者　岩崎辰喜（文化課長）
調査総括　隈　昭志（文化財調査係長・主幹）
調査員　小田原弘則（松橋町教育委員会社会教育主事）
緒方　勉（文化課参事）
高谷和生（文化課技師　調査主査）
古森政次（文化課嘱託）
調査指導及び協力者
白木原和美（熊本大学文学部教授）
三島　格（肥後考古学会会長）
甲元真之（熊本大学文学部助教授）
佐藤興治（飛鳥藤原京跡発掘調査部室長）
松橋町教育委員会
松橋町産業振興課耕地係・管理係
当尾小学校　当尾地区住民一同
調査事務局　田辺宗弘（前文化課長補佐）
大塚正信（前文化課管理係長・主幹）
矢野みゆき（前主事）
遺物整理　上野辰男（文化課主幹）



第１図　寺尾遺跡周辺地形図(2,500分の１)



第２図　寺尾遺跡遺構配


5
6
7
8
9
SM－101
SM－102
SM－103
SM－104
SM－105
SD－101
SD－102
SD－103
縄文集石
SM－106
0
10M

図

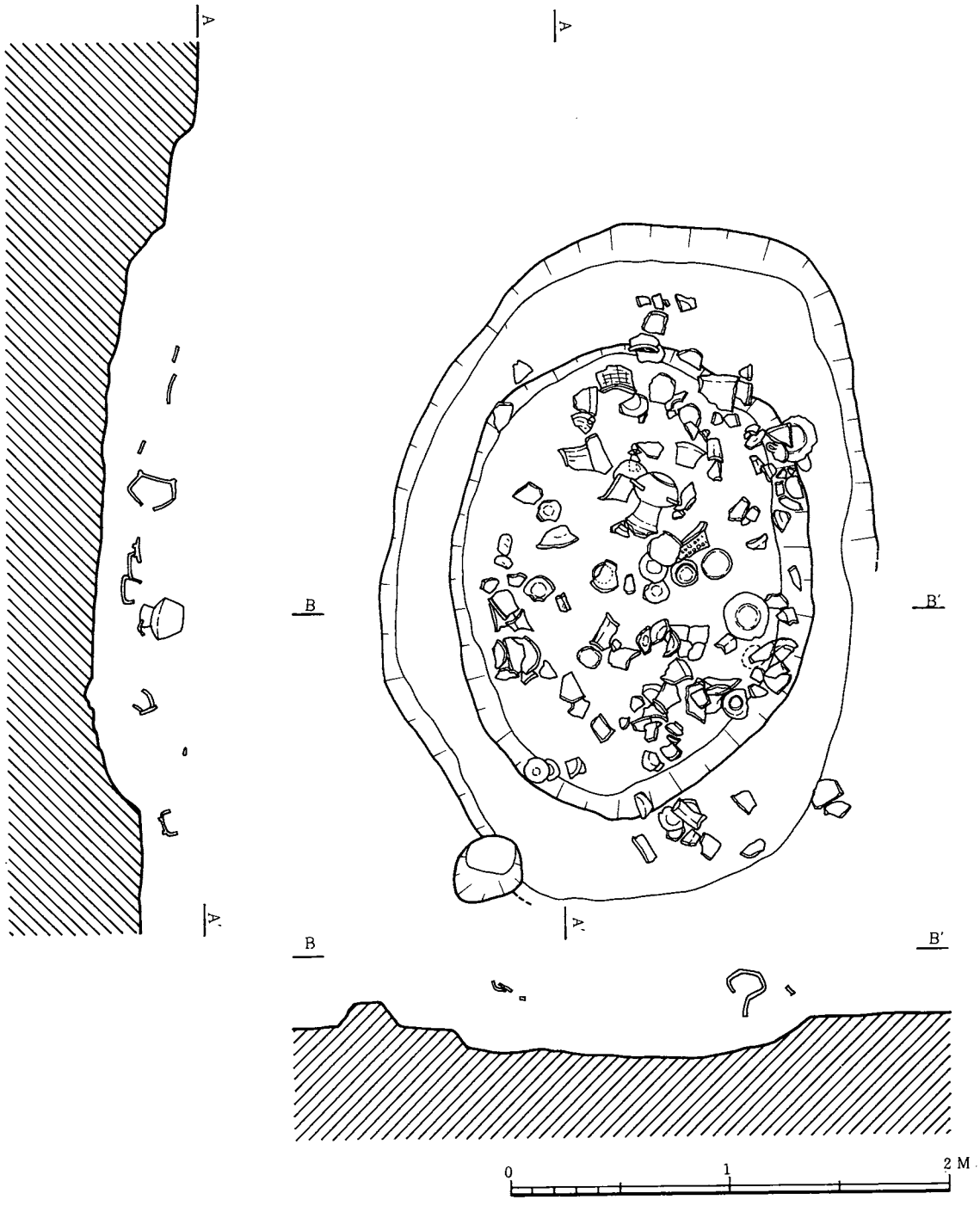
2. 主な遺構と遺物

(1) 遺　　構

調査区全域に遺構が分布するが、主に集中するのは１・２－Ａ～Ｃ区であり、かなり多くの遺構が複合する。土壙遺構が40、竪穴状遺構が８、溝遺構が７、小貝塚が６、縄文集石遺構が１である。各々順次説明して述べたい。

土壙遺構

ＳＫ－101（第３図）



第３図　ＳＫ－101 出土遺物実測図

ＳＩ－103に切り込んでこの土壙が検出される。２－Ａ区に位置する。一部上場が欠損しているが、ほぼ楕円形状を呈している。残存で長軸は3.02ｍ×2.08ｍ×0.45ｍを測る。主軸はＭ．Ｎ．－86°－Ｅを計る。多量の土器を包含しており、一部上層からの落ち込みも見られる。実測分のみで総数55点を数え、土師器29点、須恵器26点の内訳である。掘り込みは２段となり、最底部からも上層と同器種の破片が出土している。この遺構は一種の「土器溜め」と考えられ、ここから出土する土器の破片中完全に復元できるものは一点もない。他の場所で使用していたものが破損したために、一気に投棄したものと考えられる。出土の遺物中ではあまり時期差が見られず、あっても一型式程度と考えられる。出土遺物の須恵器は主に、遺跡に隣接する「萩尾大溜池窯」産のものと思われ、奈良後期のものに集中する。

ＳＫ－104

この土壙は１－Ａ区に位置する。平面形はほぼ楕円形を呈しており、残存では長軸が98cm、短軸89cm、深さ29cmを測る。主軸はＭ．Ｎ．－42°－Ｅを保つ。土師器等が焼土と共に出土している。炉址かとも考えられる。

ＳＫ－127

この土壙は0・1－Ａ区に位置する。平面形は不整形状を呈しており、長軸は1.48ｍ、短軸は1.02ｍ、深さ15cmを測る。主軸はＭ．Ｎ．－67°－Ｅを保つ。須恵器片、01（紡錘車）、Ｆ－02（刀子）が出土している。

ＳＫ－129

この土壙は0・1－Ｂ区に位置する。平面形は不整形であるが大型の土壙に一部不整形の土壙が重なり合った形状を持つ。長軸は2.42ｍ、短軸は1.46ｍ、深さ0.35ｍを測り、主軸はＭ．Ｎ．－42°－Ｅを保つ。円形の土壙の方からＨ－262（甕）、Ｈ－263（甕）等多量の土器が出土している。

ＳＫ－130

この土壙は０－Ｂ・Ｃ区に位置する。平面形は不整形状を呈し、長軸は1.98ｍ、短軸は1.30ｍ、深さは0.45ｍを測る。主軸はＭ．Ｎ．－20°－Ｗを保つ。ＳＩ－108を切る形で複合している。出土遺物は、Ｓ－217(蓋)、Ｓ－251（高台付坏）、Ｓ－258（高台付坏）が出土している。

遺構番号	平面形 長軸の方位	規模 長軸(cm)×短軸(cm)×深さ(cm)	出土遺物	備考	所在地区
ＳＫ－101	楕円形 M.N.－86°－E	302×(208＋α)×45	○Ｈ－201(蓋・宝珠形鈕) Ｈ－204(蓋・輪状鈕) Ｈ－205(蓋・輪状鈕) Ｈ－206(蓋・輪状鈕) Ｈ－207(蓋) Ｈ－211(高台付坏) Ｈ－212(高台付坏) Ｈ－213(高台付坏) Ｈ－214(高台付坏) Ｈ－218(高台付坏) ○Ｈ－220(坏) Ｈ－221(坏) Ｈ－222(坏) Ｈ－223(坏) Ｈ－224(坏) Ｈ－226(坏) ○Ｈ－227(坏) Ｈ－229(坏) Ｈ－235(坏) Ｈ－236(坏) Ｈ－237(坏) ○Ｈ－253(皿) Ｈ－247(鉢) Ｈ－258(壺) Ｈ－260(壺) Ｈ－261(壺) Ｈ－264(壺) Ｈ－265(壺) Ｈ－267(壺) Ｓ－206(蓋・輪状鈕) Ｓ－209(蓋) Ｓ－213(蓋) Ｓ－218(蓋) Ｓ－219(坏) Ｓ－221(坏) Ｓ－229(高台付坏) Ｓ－231(高台付坏) Ｓ－232(高台付坏) Ｓ－238(高台付坏) Ｓ－239(高台付坏) Ｓ－242(高台付坏) Ｓ－243(高台付坏) Ｓ－245(高台付坏) Ｓ－246(高台付坏) Ｓ－249(高台付坏) Ｓ－250(高台付坏) Ｓ－257(高台付坏) Ｓ－268(鉢) Ｓ－277(平瓶) Ｓ－270(高坏) Ｓ－274(壺) Ｓ－275(壺) Ｓ－276(壺) Ｓ－278(共瓶壺) Ｓ－280(共瓶壺)	・ＳＩ－103を切る。 ・多量の土器を包含	２－Ａ
ＳＫ－102	長方形 M.N.－28°－E	(188＋α)×142×21	－	・ＳＤ－104に切られる。 ・ＳＫ－107に切られる。	１－Ｂ
ＳＫ－103	長楕円形 M.N.－16°－E	287×188×23	－	－	1－B・C
ＳＫ－104	楕円形 M.N.－42°－E	(98＋α)×89×29	土師器片	・ＳＩ－106、ＳＤ－104を切る。	１－Ａ
ＳＫ－105	方形 M.N.－72°－E	158×(68＋α)×10	－	・ＳＫ－106に切られる。 ・ＳＤ－104に切られる。	2－A・B
ＳＫ－106	不整形 M.N.－18°－W	(72＋α)×(41＋α)×(8＋α)	－	－	１－Ｂ
ＳＫ－107	不整形 M.N.－9°－W	(110＋α)×(110＋α)×40	・Ｓ－271(高坏)	－	１－Ｂ
ＳＫ－108	楕円形 M.N.－33°－E	109×80×40	－	－	2－B・C

遺構番号	平面形 長軸の方位	規模 長軸(cm)×短軸(cm)×深さ(cm)	出土遺物	備考	所在地区
SK−109	楕円形 M.N.−77°−E	162×110×45	−	−	2−B・C
SK−110	不整形 M.N.−79°−W	(110+α)×50×19	・S−245(高台付坏)	−	1−B・C
SK−111	不整形 M.N.−27°−W	70×48×26	−	−	1−B・C
SK−112	方形 M.N.−27°−E	78×62×17	−	−	0 − A
SK−113	長方形か？ M.N.−89°−E	(321+α)×(129+α)×10	−	・SK−124に切られる。	2.3−C
SK−115	円形 M.N.−32°−E	$(260)^2$ ×9	−	・SK−120、121、122に切られる。	2−C・D
SK−116	長方形 M.N.−36°−E	(190+α)×(110+α)×32	−	・SK−115に切られる。 ・SK−123に切られる。	2 − C
SK−117	不整形 M.N.−36°−W	95×50×15	−	−	1−B・C
SK−118	不整形 M.N.−50°−E	68×60×12	−	−	2−B・C
SK−119	円形 M.N.−45°−E	80×78×39	−	・SD−106を切る。	2 − C
SK−120	円形 M.N.−48°−E	90×81×16	−	・SK−115を切る。	2−C・D
SK−121	円形 M.N.−48°−E	64×58×17	−	・SK−115を切る。	2 − D
SK−122	円形 M.N.−45°−E	78×72×11	−	・SK−115を切る。	2 −C・D
SK−123	方形 M.N.−54°−W	(58+α)×60×23	−	・SK−116に切られる。	2 − C
SK−124	方形 M.N.−47°−E	90×66×14	−	・SK−113を切る。	2 − C
SK−125	方形 M.N.−26°−W	120×106×13	−	−	3 − C
SK−126	不整形 M.N.−43°−E	182×106×27	−	−	0 − A
SK−127	不整形 M.N.−67°−E	148×102×15	・01(紡錘車) ・F−02(刀子)	−	0.1− A
SK−128	不整形 M.N.−74°−E	212×138×63	−	−	0−A・B
SK−129	不整形 M.N.−42°−E	242×146×35	・H−262(甕) ・H−263(甕)	・多量の土器を含む	0.1 − B
SK−130	不整形 M.N.−20°−W	198×130×45	・S−217(蓋) ・S−251(高台付坏) ・S−258(高台付坏)	・SI−108を切る。 ・SK−133、137、134を切る。	0−B・C

遺構番号	平面形 長軸の方向	規模 長軸(cm)×短軸(cm)×深さ(cm)	出土遺物	備考	所在地区
SK−131	楕円形 M.N.−68°−E	134×62×32	−	−	0 − A
SK−132	円形 M.N.−26°−W	64×62×7	−	・SK−130に切られる。	0−B・C
SK−133	円形 M.N.−44°−E	148×(98+α)×12	−	・SK−135を切る。 ・SI−108、SK−130 134に切られる。	0−B・C
SK−134	円形 M.N.−20°−W	(80+α)²×18	−	・SK−130、137に切られる。	0 − C
SK−135	楕円形 M.N.−31°−E	(82+α)×72×15	−	・SK−136、133に切られる。	0 − C
SK−136	楕円形 M.N.−35°−W	90×62×16	−	・SK−135に切られる。	0 − C
SK−137	不整形 M.N.−10°−E	152×88×30	−	・SK−130を切る。 ・SK−138に切られる。	0 − C
SK−138	不整形 M.N.−10°−E	120×100×24	−	・SK−137を切る。	0 − C
SK−139	楕円形 M.N.−41°−W	140×110×25	−	・SI−103を切る。	2 − A
SK−140	不整形 M.N.−59°−W	123×71×15	−	・SI−105を切る。	1−A・B

第1表　土壙遺構（SK）一覧

竪穴遺構

SI−101、102

この竪穴は複合地区よりやや離れ、各々単独に位置している。SI−101は3−A・B区に位置しており、平面形は長楕円形で、長軸が2.50m、短軸が2.20mを測る。H−215(高台付坏)、H−231(坏)、H−241(高台付坏)等が出土している。尚90cm×60cmの方形の深い落ち込みを持っている。SI−102は3・4−B区に位置しており、平面形は101同様長楕円形の小形住居である。長軸は2.45m、短軸は1.70mを測る。H−250(Ⅲ)、H−252(Ⅲ)、S−261(Ⅲ)等が出土している。この時期は両者ともほぼ同時期と考えられるが、果たして住居として使用したものかは不明である。

SI−107

この竪穴は1・2−B区に位置する。平面形は正方形だが、上場が殆んど欠損している。長軸は3.12m、短軸は2.98m、深さ18cmを測る。床面には硬化面は見られない。これは他の遺構と複合する竪穴でも見られる。このことは竪穴が使用されたとしても短期間のものであることが想定される。焼土塊を一部有し、付近のピット上面からは巡方が出土している。

遺構番号	規模 長軸×短軸×深さ (cm)	主要出土遺物	備考	所在地区
SI−101	250×220×	H−215(高台付坏) ○H−231(坏) ○H−241(高台付椀)	・小形で単独の竪穴。 ・90cm×60cmの方形の落ち込み部を有する。	3−A・B
SI×102	245×170×	H−250(Ⅲ) ○H−252(Ⅲ) S−261(Ⅲ)	・小形の竪穴。	3・4−B

遺構番号	規模 長軸×短軸×深さ (cm)	主要出土遺物	備考	所在地区
SI－103	474×220×10	－	SK－138、SK－101、SI－104に切られる。 SK－105を切る。	1・2－A
SI－104	286×(132＋α)×20 ※長軸、短軸不明	－	SI－104がSI－103より古い。 SI－106に切られる。SK－104に切られる。	1・2－A
SI×105	266×(87＋α)×10 ※長軸、短軸不明	－	SK－116に切られる。 SD－104に切られる。	1－A・B
SI－106	(231＋α)×(123＋α)×22 ※長軸、短軸不明	－	SI－104を切る。 SK－104に切られる。 SD－104に切られる。	1・2－A
SI－107	312×298×18	－	焼土塊を持つ。 巡方がこの竪穴付近のピットより出土	1・2－B
SI－108	(172＋α)×(202＋α)×11	－	SK－130に切られる。 SK－132、133を切る。	0－B

第2表　竪穴遺構（SI）一覧

溝遺構

SD－104～106

遺構複合地区の1・2－A～C区に位置する。各遺構は、他の遺構と切り合っており、出土遺物等に時期差は捉えられない為、他の遺構同様ほぼ同時期と考えられる。

SD－103

この溝遺構は4～7－E・F区に位置する。流向はM.N.－30°－Wを保ち、その規模は長さ16.4m、幅2.9～4.1mを測る。この遺跡の発見に際し、崖面に多量の土師器、須恵器を発見した箇所は、この溝遺構の付近である。種々の土師器が出土しているが、溝の埋土状況、並びに溝最下面から寛永通寶銭、近世染付が出土していることから、この溝は江戸中期と考えられる。

遺構番号	規模			主要出土遺物	流向 (略方向)	所在地区	備考
	長さ(cm)	幅 (cm)	深さ(cm)				
SD－101	24.7	80～120	－	・S－264（高台付盤）	M.N.－30°－E	6～8 － A～E	
SD－102	5.3	30～40	－	－	M.N.－39°－W	5・6 － C	
SD－103	16.4	290～410	－	・S－240（高台付坏） 寛永通宝	M.N.－30°－W	4～7 － E・F	近世陶磁片出土
SD－107	8.1＋α	425	－	－	M.N.－30°－W	2～4 － E・F	近世陶磁片出土
SD－104	3.7	90～220	30～40	－	M.N.－77°－E	1－A・B	SK－104に切られる。
SD－105	2.1	80～90	20	－	M.N.－17°－W	1・2－C	SD－106に切り込む。
SD－106	3.4	70～120	10～15	－	M.N.－53°－E	1・2－C	SK－115を切る。

第3表　溝遺構（SD）一覧

(2) 遺　　物

寺尾遺跡からは多量の土師器・須恵器があたかも一気に投棄されたかのような状況で出土した。実測可能な遺物は土師器72点、須恵器79点の計151点に達しほぼ半々の割合をもつ。遺物の出土面は、作業上の過程から２面に仕分けた。上層のものは各区の一括及び集中地点においては番号を付し取上げを行なった。下層のものは、遺構に伴うものとして確認した。これら遺物の中には上層出土のものと下層出土のものが接合する例が何点か見られ、このことは部分的には本来遺構に伴うものでなく遺構内に遺物が流れ込んだとも考えられる。

なお土師器の坏内面に墨書名をもつ土器が１点出土したが、発掘調査中に粉失した。墨書名の判読はなされていなかった。

遺構＼分類	土師器													須恵器													その他
	蓋	蓋（鈕）	坏	坏（高台）	椀	椀（高台）	皿	高坏	甕	甑	鍋	鉢	盤（高台）	蓋	蓋（鈕）	坏	坏（高台）	椀	皿	高坏	長頸壺	壺蓋	甕	鉢	盤（高台）	平瓶	
ＳＩ－101			1(1)	1		1(1)																					
ＳＩ－102							2(1)												1								
ＳＤ－101																									1		
ＳＤ－103																	1										寛永通宝(1)
ＳＫ－101	1	4(1)	11(2)	5(1)			1(1)		6			1		3	1	2	12			1	2		3	1		1	
ＳＫ－107																				1							
ＳＫ－110																	1										
ＳＫ－127																											紡錘車(1)
ＳＫ－129									2																		
ＳＫ－130														1			2										
上層一括資料																											
全区一括	1(1)	2	4	1	1			2							3	3	3	1	1		2		1				土馬(1)
１－Ａ区						1	1						1	1													
１－Ｂ区																								1			
１－Ａ・Ｂ区																	1										
２－Ａ区				1	4		2			2	1			3	2	1	5		1	1							紡錘車(1)
２－Ｂ区	2(2)		1(1)				1(1)			2									1								土馬(1)
２－Ｃ区			1(1)						1																		
２－Ａ・Ｂ区			1														2										
０－Ｂ区										1				1	1		1										
０－Ｃ区				2										1			6					1	1				
小計	4(3)	6(1)	19(4)	10(1)	5	2(1)	7(3)	2	9	5	1	1	1	72(13)	10	7	6	34	1	4	3	4	1	5	2	1	1	79	

第４表　遺構別出土遺物個数一覧（実測分）

土師器　72（内赤色顔料塗布痕跡のあるもの　13）
須恵器　79
小　計 151

土師器

総数72点の出土である。その器種は蓋・坏・椀・皿・高坏・甕・甑・鍋・鉢・盤などである。その内、器種によっては赤色顔料を塗付し丁寧な仕上げを行なうものが13点数えられる。またあわせてヘラ研磨を施すものが多いのもこの遺跡での特徴と言える。国府や郡衛遺跡など、公共性の強い遺跡等に、共通する特徴である。

蓋（第５図Ｈ－201～210・273）

蓋類は総数11点出土している。これらを鈕の有無によって大別した。Ｉ類は鈕を有するもの、II類は鈕を持たないものである。これらをまた前者では鈕の形態によって仕分けした。また破片が小さく鈕の有無が不明なものについてはその他で分類した。

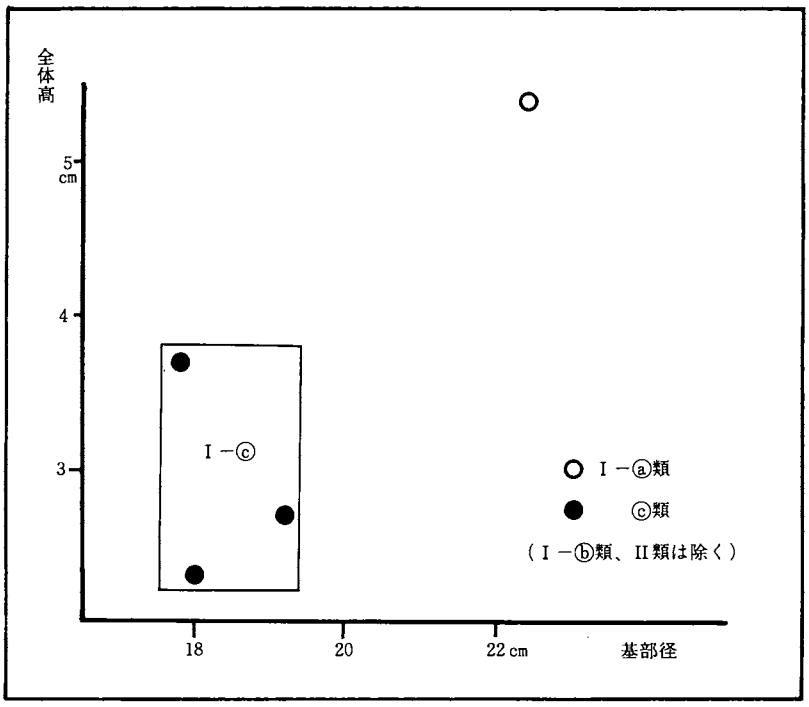
Ｉ類（Ｈ－201～206）

ⓐ類　大型の宝珠形鈕を有しており、天井部から口縁部にかけて大きく屈曲して下る。口縁端部は、屈折し直立する。

ⓑ類　ボタン状の凝宝珠形の鈕を有する。

ⓒ類　輪状の鈕を有している。鈕部は大型で5.0～5.5cmを測る。

201はⓐ類に属する。焼成の際にややひずみを持つが、全体に丁寧な仕上げである。大型の宝珠鈕を持ち、外面はナデの後ヘラミガキ調整、内面は丹念なヘラミガキ調整を施す。内外面に赤色顔料を塗布する。ⓑ類には202･203が属する。202は口縁端部が欠損している。内外面とも回転ヨコナデ調整を施す。鈕基部のくびれが強い。この器種については、土師器に凝宝珠形鈕を有するものがないため、赤焼きの須恵器かとも考えられるが、時期的に上る資料も見られるため、ここでは一応土師器の分類に含ませたい。ⓒ類は３点である。鈕の断面形はいずれも三角形状を呈し、天井部から口縁に向ってストレートに下り、口縁端部で屈曲し下方に広がる。第４図法量比較図においても一群を明瞭に示す。またこの３点中最も全体高の高い205のみ内外面に赤色顔料が塗付される。なお焼成によるひずみを有している。206は鈕の位置が中央よりややずれる。器壁があれ調整の観察が困難である。



第４図　土師器蓋法量比較図

Ⅱ類（Ｈ－207）

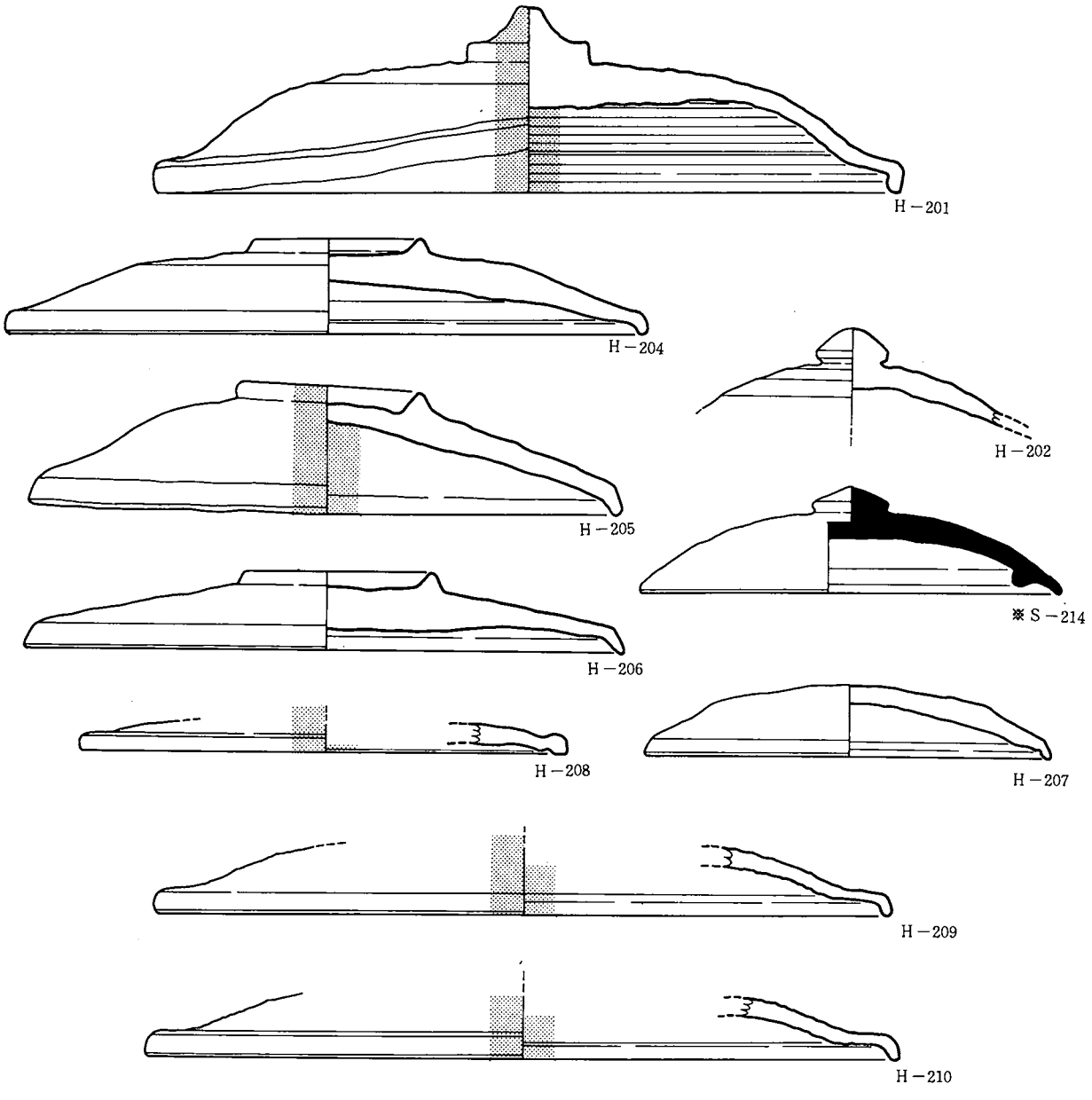
ただ１点の出土である。基部径12.1cm、器高2.1cmを測る。内湾気味に下方に下り、口縁端部は鋭さを有する。

その他破片が３点あるが中央部が欠損しているため、鈕の有無は不明である。209、210は口縁端部が201に類似し、しかも基部径が22cm内外と大型で、赤色顔料が内外面に塗付されていることなどから、鈕を持っていた可能性が高い。

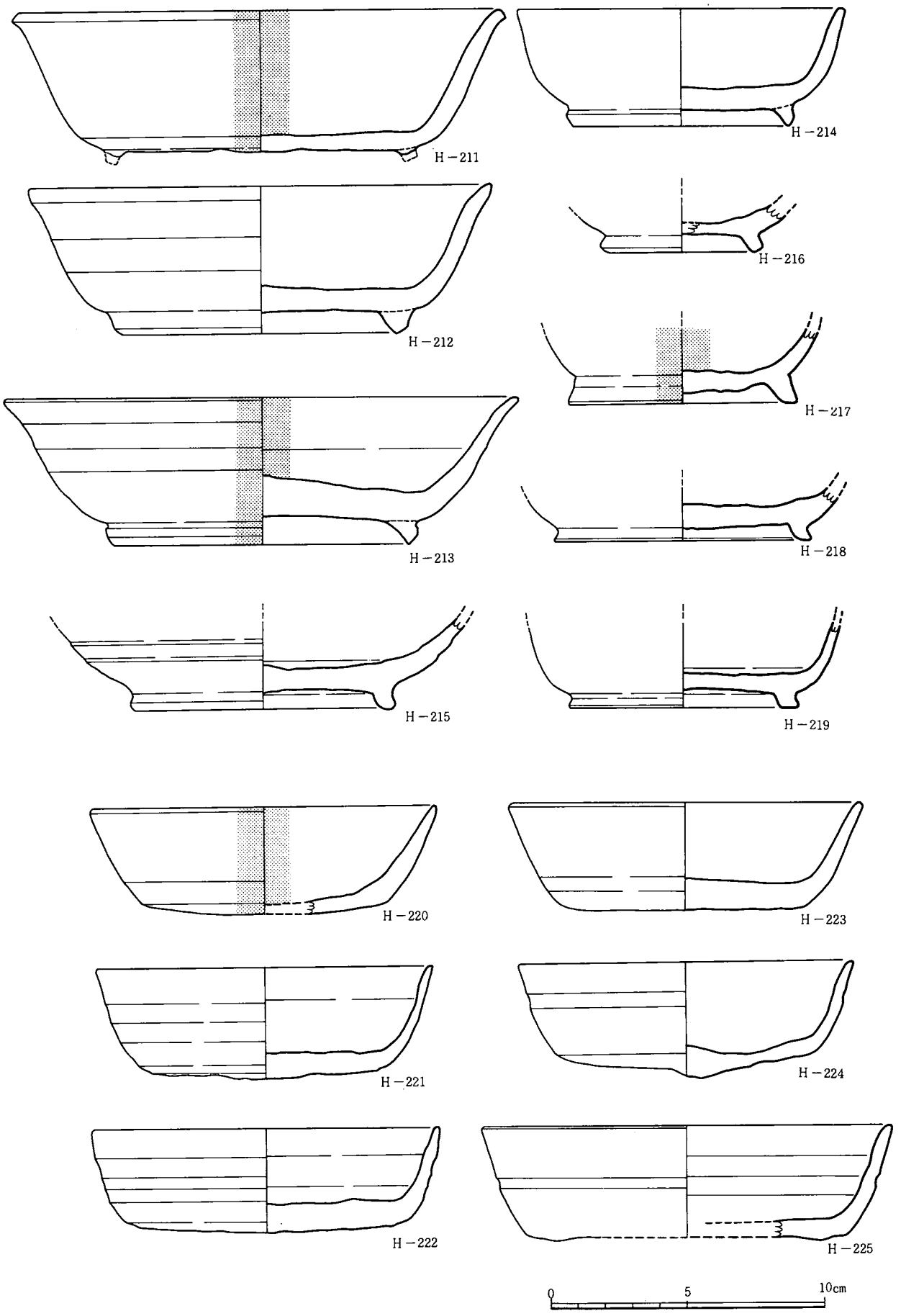
実測図No.	出土地点	鈕高	鈕径	基部径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
Ｈ－201	２－Ａ ＳＫ－101	1.6	3.7	22.4	3.8	密 大型の石英粒を含む	良好	浅黄橙色－浅黄橙色	ナデのちにヘラミガミ	ヘラミガキ	内外面に赤色顔料塗付 宝珠形鈕 焼成ひずみ有
Ｈ－202	一括	1.1	2.1	－	残存高 1.8	緻密	良好	橙色－橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	凝宝珠形鈕
Ｈ－204	２－Ａ ＳＫ－101	0.4	5.0	19.2	2.3	緻密	良好	橙色－橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	輪状鈕
Ｈ－205	２－Ａ ＳＫ－101	0.5	5.3	17.8	3.2	緻密	良好	橙色－橙色	ヨコナデのちにヘラミガキ	ヨコナデのちにヘラミガキ	内外面に赤色顔料塗付 輪状鈕 焼成ひずみ有

実測図No.	出土地点	鈕高	鈕径	基部径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H－206	2－A SK－101	0.4	5.5	18.0	1.9	緻密	良好	橙色－橙色	ヨコナデのちにヘラケズリ	ヨコナデ	輪状鈕 鈕の位置が中央よりずれる。器壁が荒れる
H－207	2－A SK－101	－	－	12.1	2.1	緻密	良好	橙色－橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－208	2－B	－	－	14.6	残存高 0.9	緻密	良好	明赤褐色－明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内外面に赤色顔料塗付
H－209	2－B	－	－	22.1	残存高 2.0	緻密	良好	にぶい橙色－浅黄橙色	ヘラケズリ 端部付近ヨコナデ	ヘラケズリ 端部付近ヨコナデ	内外面に赤色顔料塗付
H－210	一括	－	－	22.6	残存高 1.9	緻密	良好	橙色－浅黄橙色	ヘラケズリ 端部付近ヨコナデ	ヘラケズリ 端部付近ヨコナデ	内外面に赤色顔料塗付
H－273	2－B	－	－	16.8	0.9	緻密	良好	橙色－橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	内外面とも赤色顔料塗付有

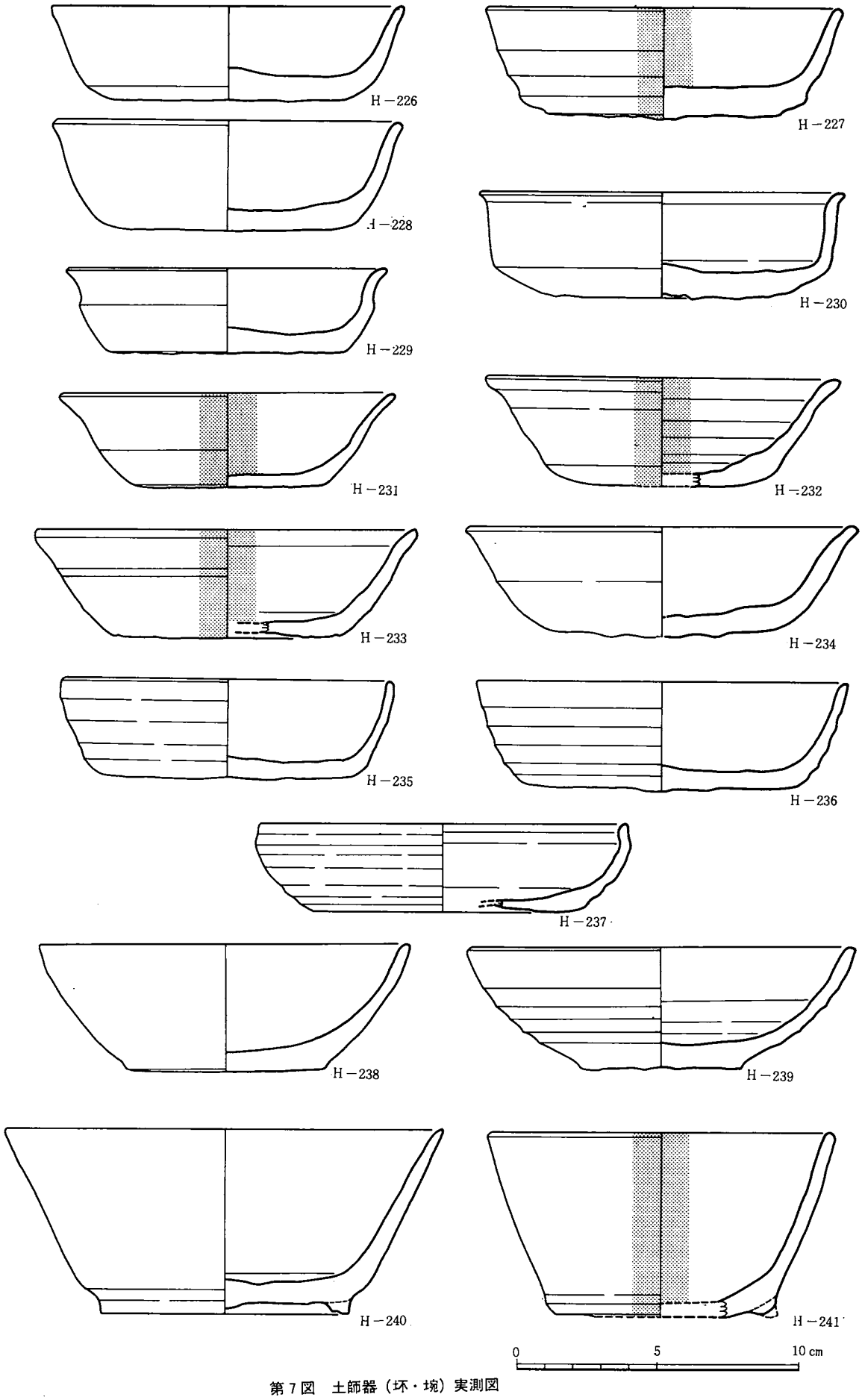
第5表 土師器蓋観察表



第5図 土師器（蓋）実測図


H－211
H－214
H－212
H－216
H－217
H－213
H－218
H－215
H－219
H－220
H－223
H－221
H－224
H－222
H－225
0
5
10cm

第6図　土師器（坏）実測図



第７図　土師器（坏・埦）実測図

坏（第６図Ｈ－211～第７図Ｈ－239）

坏は総数29点が出土している。その内訳は高台を有するもの10点、高台を持たないもの19点である。これらを前者をＩ類に、後者をII類として分類した。

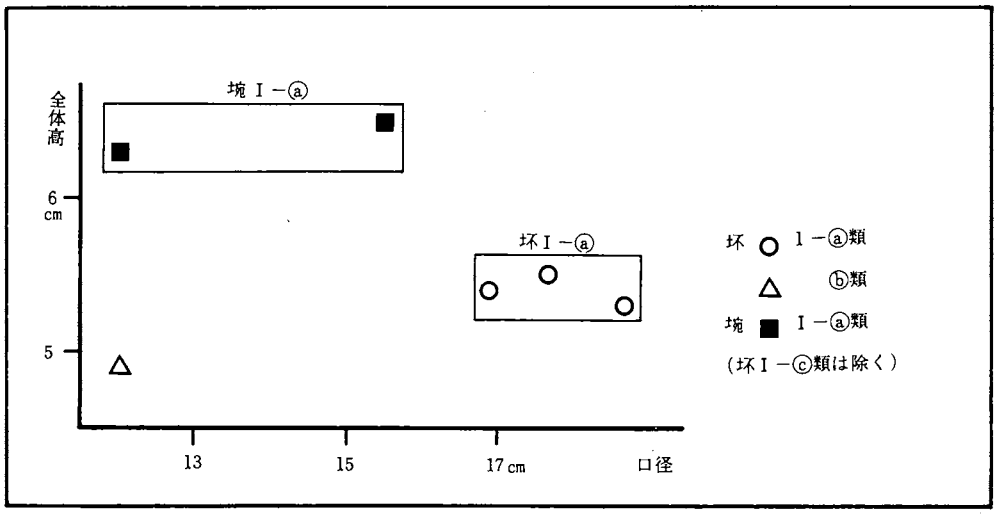
Ｉ類（Ｈ－211～219）

計10点が数えられる。さらにこれらは高台の断面形による分類は次のとおりである。

ⓐ類　高台の基部に強いくびれを持ち、外面に稜をなし、下部は内傾する。

ⓑ類　底部周縁端より外方に、外湾するように貼りつけられる。

ⓐ類には211～213・214・216が含まれる。これらはいずれも底部から内湾気味に立ち上がり、口縁付近でやや屈曲し、外傾する。体部外面はヨコナデ調整を全面に、内面にもヨコナデ調整を施す。211は内外面に



第８図　土師器高台付坏、椀法量比較図

実測図No.	出土地点	高台高	高台径	口径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
Ｈ－211	2－A SK－101	残存高 0.2	－	17.7	5.1	密 砂粒を含む	良	黄橙色 － 黄橙色	ヨコナデののちヘラケズり	ヨコナデののちヘラケズり	内外面に赤色顔料塗付 ヘラ切り
Ｈ－212	2－A SK－101	0.9	10.0	16.9	4.5	密 小石、砂粒を含む	やや不良	暗赤褐色 － 暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
Ｈ－213	2－A SK－101	0.8	10.3	18.7	4.5	密 砂粒を含む	良	明赤褐色 － 明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内外面に赤色顔料塗付 ヘラ切り
Ｈ－214	2－A SK－101	0.6	7.8	12.0	4.3	密 小石、黒雲母を含む	やや不良	赤褐色 － 赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
Ｈ－215	3－A・B SI－101	0.6	9.2	－	残存高 2.6	緻密	良好	橙色 － 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
Ｈ－216	1－B Pit 43	0.6	5.2	－	残存高 1.3	緻密	良好	－ 黒色	ヨコナデ	－	内黒土器
Ｈ－217	2－A 一括	1.0	8.2	－	残存高 1.2	緻密	良好	にぶい橙色 － 淡橙色	ヨコナデ 高台内部一部－粗い調整	ヨコナデ 不定方向のナデ	内外面に赤色顔料塗付
Ｈ－218	2－A SK－101	0.5	9.3	－	残存高 1.9	緻密	良好	明褐灰色 － にぶい橙色	ヨコナデ 高台内側－粗い調整	ヨコナデ 不定方向のナデ	
Ｈ－219	一括	0.6	8.2	－	残存高 2.6	緻密	良好	浅黄橙色 － 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	

第６表　土師器高台付坏観察表

ヘラ研磨を行い、赤色顔料を両面に塗付している。213も内外面に赤色顔料を塗付している。これらの3点はいずれもほぼ同一法量で第8図の法量比較図においても一群を成す。214は前三者に比べやや小型である。底部から口縁部にかけての立ち上がりも急である。ⓑ類には215・217～219が含まれる。いずれも高台底部のみの破片で、口縁部は欠損している。外面はヨコナデ調整を、内面はヨコナデ調整と不定方向のナデ調整を施す。215は体部外面に稜を有している。217は高台が強く外側に貼り付けられており、この類中ではさらに細分他も可能かもしれない。また内外面ともに赤色顔料が塗付されている。

II類（第7図H－220～239・274）

無高台のもの19点を、全体のプロポーションによって7つに分類した。

実測図No.	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H－220	2－A SK－101	12.6	3.9	8.9	密	良好	にぶい黄橙色 ― にぶい黄橙色	ヘラ調整 底部―ヘラみがき	ヨコナデのちヘラ研磨	焼成ひずみ 内外面に赤色顔料塗付のち焼成
H－221	2－A SK－101	12.2	4.1	8.3	密 砂粒含む	やや良	橙色 ― 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－222	2－A SK－101	12.6	3.8	10.3	密 小石、砂粒を含む	やや良	明橙色 ― 明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－223	2－A SK－101	12.6	3.9	8.7	密 小石、黒雲母を含む	良	明赤褐色 ― 明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－224	2－A SK－101	12.1	4.1	9.3	密 小石を含む	良	明橙色 ― 明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－225	0－C	14.8	4.1	11.7	密 砂粒を含む	良	橙色 ― 橙色	ヨコナデ ヘラ切りのちみがき	ヨコナデ	
H－226	2－A SK－101	12.5	3.3	8.3	密 小石を含む	やや不良	赤褐色 ― 赤褐色	ヨコナデ ヘラ切りのちナデ	ヨコナデ	
H－227	2－A SK－101	12.5	3.9	8.3	密 黒曜石片・砂粒含む	良	明赤褐色 ― 明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内外面に赤色顔料塗付の痕跡 ヘラ切り
H－228	一括	12.1	3.9	8.6	密	やや不良	橙色 ― 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－229	2－A SK－101	11.2	3.0	8.4	密 小石を含む	やや不良	橙色 ― 橙色	ヨコナデののちヘラミガキ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－230	0－C	12.8	3.7	7.6	密	良	淡黄褐色 ― 淡黄褐色	ヨコナデ 底部―ヘラ切りのちヘラ調整	ヨコナデ	
H－231	3－A・B SI－101	11.7	3.3	6.8	密	良	淡黄色 ― 淡黄色	ヨコナデのちヘラ削り	ヨコナデのちヘラ削り	内外面に赤色顔料が僅かに残る ヘラ切り 口縁部にスス付着
H－232	2－C	12.3	3.8	8.3	密	良	淡黄色 ― 淡黄色	ヨコナデのちヘラ削り	ヨコナデのちヘラ削り	内外面に赤色顔料が僅かに残る
H－233	2－B 12	13.3	3.8	8.0	密	良好	にぶい橙色 ― にぶい橙色	ヨコナデ 底部―ヘラ切りのち粗い調整	ヨコナデ	内外面に赤色顔料塗付
H－234	一括	13.6	3.8	8.0	密 砂粒を含む	良	浅橙色 ― 浅橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－235	2－A SK－101	11.4	3.4	8.8	密 小石を含む	やや不良	明赤褐色 ― 明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－236	2－A SK－101	13.0	3.8	9.7	密 砂粒を含む	良	赤褐色 ― 赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－237	2－A SK－101	13.1	3.1	10.2	密 砂粒を含む	良好	浅黄色 ― 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－238	一括	13.0	4.4	7.0	密 小石を多量含む	良	橙色 ― 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－239	一括	13.5	4.2	5.6	密 砂粒を含む	良	黄橙色 ― 黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－274	2－A・B	14.1	残存高 5.0	―	緻密	良好	橙色 ― 黄橙色	ヨコナデ	ヘラミガキ	※第24図に図面有

第7表 土師器坏観察表

ⓐ類　底部はほぼ平らで、口縁部に向ってほぼストレートに外反する。

ⓑ類　底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部付近で屈曲し、外反気味にひらく。

ⓒ類　内湾気味に強く立ち上がり、口縁端部付近で屈曲し、外湾する。

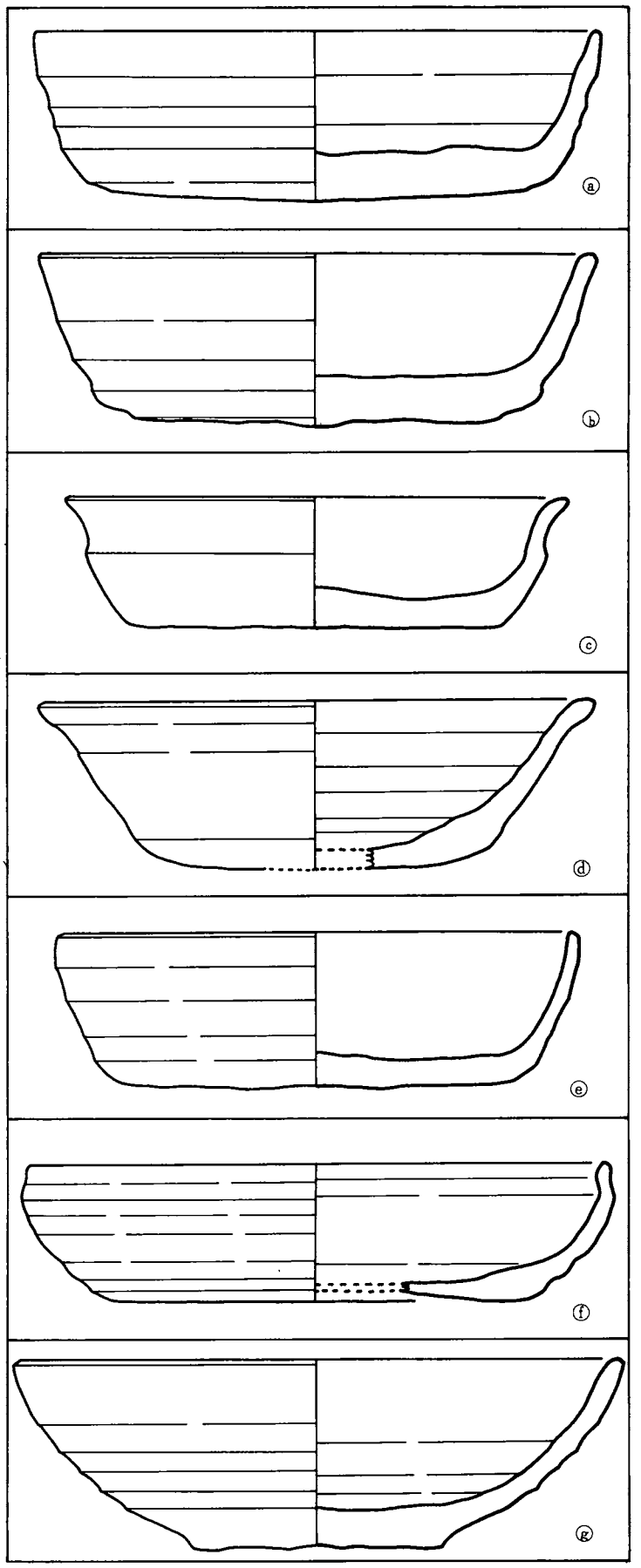
ⓓ類　口縁部に向ってほぼストレートに外傾し、端部付近で外反し、屈折する。

ⓔ類　底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部付近ではほぼ直立する。

ⓕ類　内湾気味に立ち上がり、口縁端部付近でさらに屈曲し内傾する。

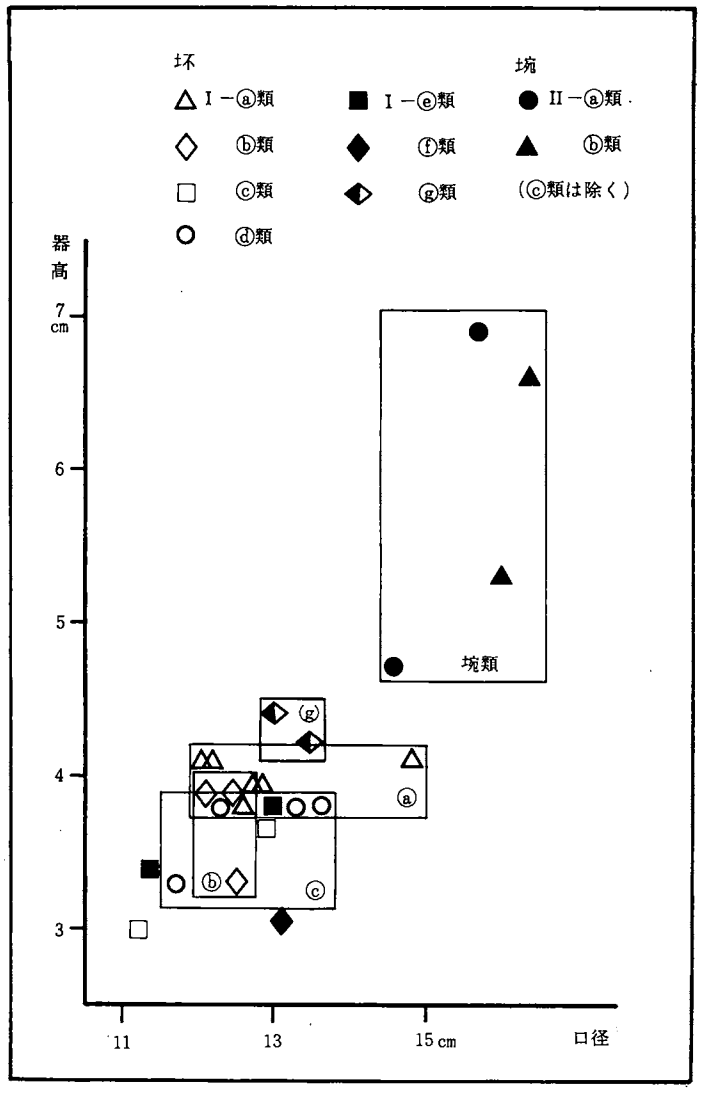
ⓖ類　底部は平らで、底径は小さい。内湾気味に立ち上がり、器高は高い。

ⓐ類には220～225の6点が含まれる。220は体部外面にはヨコナデ調整の後ヘラ研磨で、内面も同様ヘラ研磨で仕上げを行っている。さらに内外面とも赤色顔料を塗付している。やや焼成の際のひずみを有する。225は内面にヨコナデ調整後、ヘラ研磨で仕上げを行なっている。他のものはいずれも、内外面ともヨコナデ調整を行ない。底部をヘラで切り離す手法を用いている。224は底部中央部が肥厚しており、特異な形状をなしている。法量比較図ではⓐ類は器高はほぼ近値し、口径において広がりを持ち一群を形成する。ⓑ類には226～228が含まれる。口径はほぼ近似し、器高において



第9図　土師器坏形態分類図

やや広がりを持っており、一群を形成する。227は内外面ともヨコナデ調整後赤色顔料を塗付している。ⓒ類には229・230の２点が含まれる。229は体部外面にはヨコナデ後にヘラ研磨を行なっている。ⓓ類には231～234までの４点が含まれる。231･232は内外面ともヨコナデ調整を、その後に赤色顔料を塗付する。231には口縁端部外面に煤が付着しており、燈明皿として使用したものと思われる。232は特に口縁端部が肥厚する。233は内外面ともに赤色顔料が塗付されるいる。第10図法量比較図では口径・器高ともにやや広がりが見られるものの、小型に属する一群としてとらえられる。ⓔ類には235･236が含まれる。ⓕ類は237の１点である。底部はやや上げ底状を呈しており、体部外面は強いヨコナデ調整を施す。ⓖ類には238　239が含まれる。比較図では法量は近似し、器高も高い部類に属し、一群を形成する。239は外面がヨコナデ調整を施すが、粗く稜線を有する。



第10図　土師器坏、椀法量比較図

椀（第10・11図Ｈ－240～246）

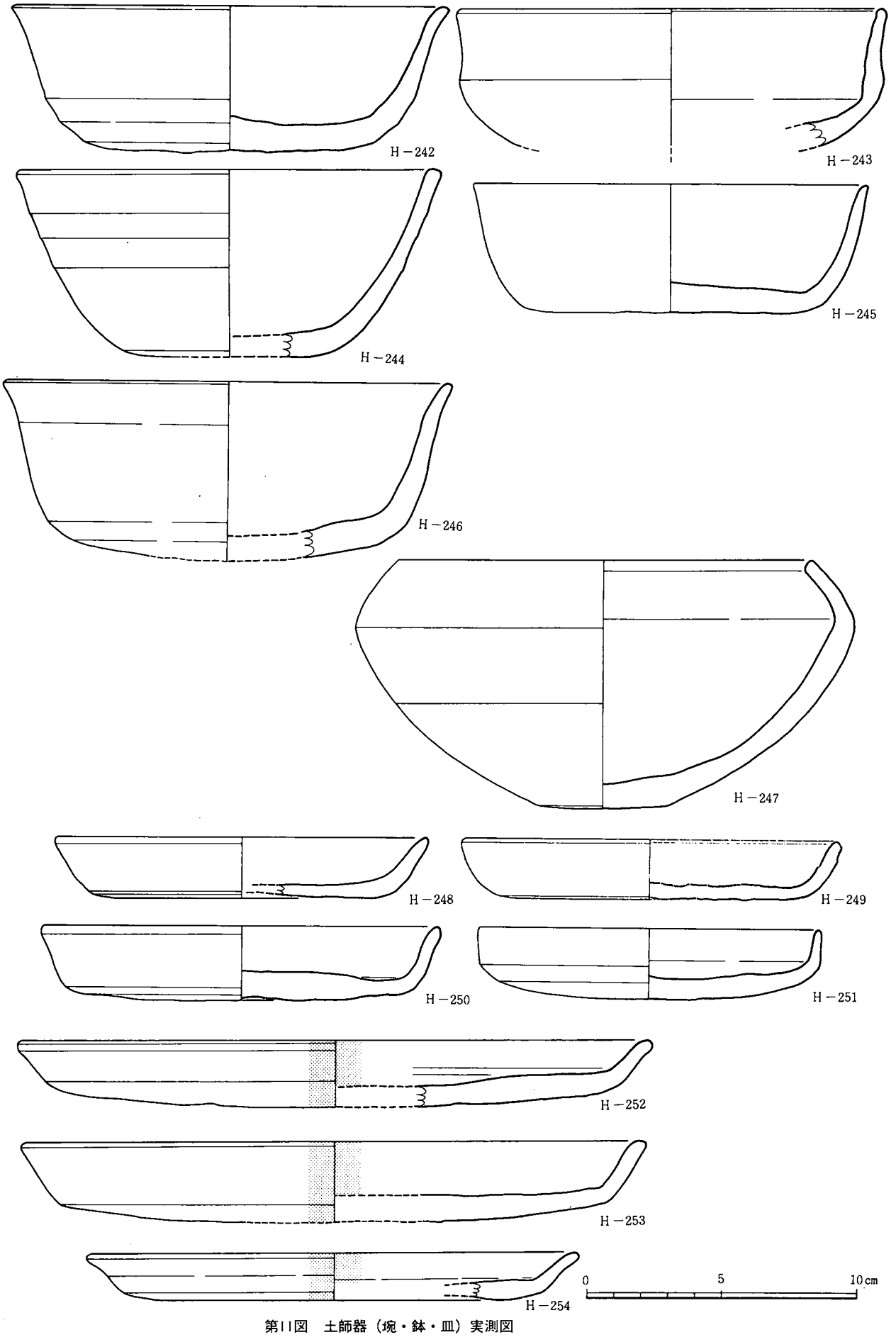
この土器に属するものは７点であり、坏類に比べ器高が5.0cm、口径が12cm以上の比較的大型のものが含まれる。高台を有するものをⅠ類、無高台のものをⅡ類とした。さらに後者は全体のプロポーションから細分した。

Ⅰ類（Ｈ－240、241）

高台は底部周縁部に小さく貼り付く。高台断面形はほぼ方形を呈する。口縁部に向ってストレートに立ち上がり外傾する。端部は鋭さを持つ。240は内外面ともヨコナデ調整を施し、ヘラ研磨で仕上げる。 241は高台高が低く底部と接する。内外面ともヨコナデ調整後、ヘラ研磨によって仕上げを行なう。内外面ともに赤色顔料を塗付する。第10図法量比較図においても坏類とは大きくかけ離れて、一群を形成する。

Ⅱ類（Ｈ－242～246）

計５点を数える。全体のプロポーションによって３類に分けられる。ⓐ類には244・245が属する。底部から口縁部に向ってストレートに立ち上がり、端部はそのまま終る。244は器高が高く6.9cmを測る。端部はやや肥厚する。245は底部をヘラ切り離し後、研磨し仕上げる。端部は鋭さを持つ。ⓑ類には242・246が属する。やや丸い底部から口縁部に向ってストレートに立ち上がり、外傾し、口縁端部で屈曲し、外反する。内外面ともヨコナデ調整を施す。ⓒ類は243の１点のみである。底部の形状は不明であるが、口縁部に向って内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で屈曲し外傾する。これらは第10図法量比較図においても坏類とは離れた箇所で一群を形成する。



第11図　土師器（椀・鉢・皿）実測図

実測図No	出土地点	高台高	高台径	口径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H－240	1－A－25 一括	0.5	8.8	15.5	6.0	密	良	黄褐色－橙色	ヨコナデの後ヘラケズリ	ヨコナデの後ヘラケズリ	ヘラ切り
H－241	3－A・B SI－101	0.7	7.3	12.0	5.7	密	良	淡黄色－淡黄色	ヨコナデの後ヘラ削り	ヨコナデの後ヘラ削り	内外面に赤色顔料塗付の痕跡僅かに残る

実測図No	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H－242	一括	16.0	5.3	10.9	密 小石を含む	やや不良	橙色－橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り
H－243	2－A	15.7	残存高 5.0	－	緻密	良好	橙色－橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
H－244	2－A	15.7	6.9	8.0	密 砂粒を含む	良	浅橙色－浅橙色	ヨコナデ 底部付近－ヘラ調整	ヨコナデ	
H－245	2－A	14.6	4.7	11.1	密 小石、砂粒を多く含む	不良	赤褐色－赤褐色	ヨコナデ 底部－ヘラ切り後ミガキ	ヨコナデ	
H－246	2－A	16.4	6.6	11.5	密 小石を含む	良	浅黄橙色－浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	

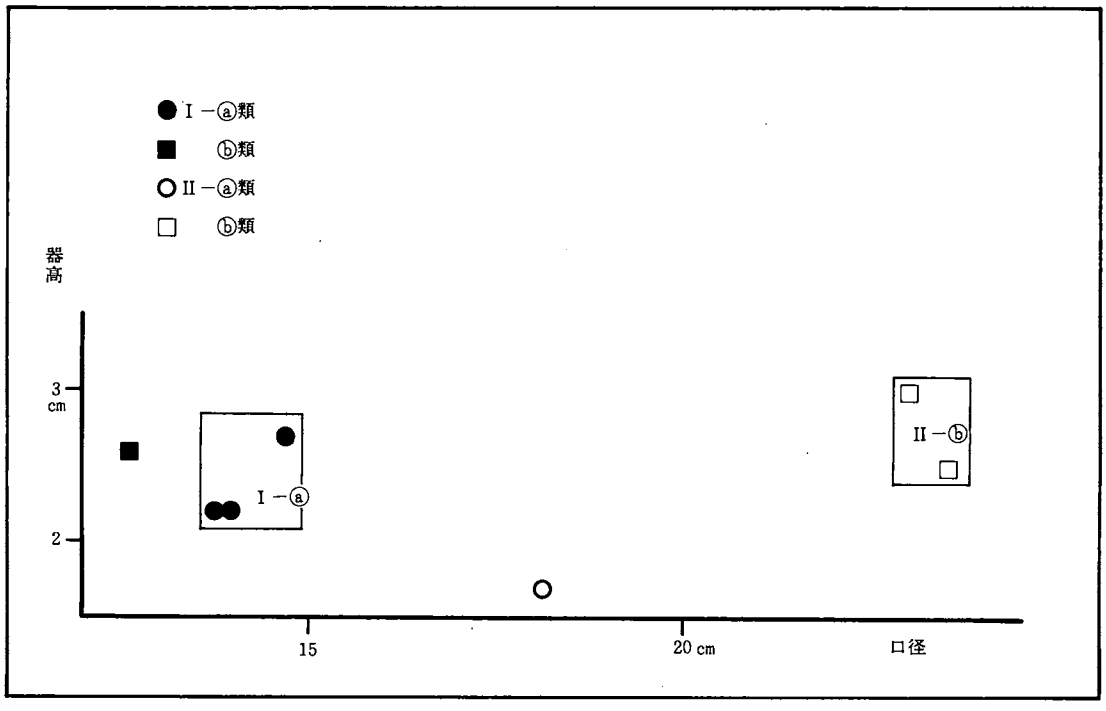
第8表　土師器埦・高台付埦観察表

皿（第11図H－248～254）

この類に属するものは7点ある。皿をI類とし、いわゆる大皿をII類とし、分類した。

I類（H－248～251）

口縁部の形状でさらに2類に分けられる。ⓐ類は248～250の計3点である。口縁部に向って外反気味に立ち上がり、端部付近でやや外傾する。249は内外面ともヨコナデ調整後にヘラ研磨による仕上げを行なう。ⓑ類は1点のみで251である。底部はやや丸底で、内湾気味に立ち上がり、端部付近でストレートに立ち上がり、端部は鋭さを持つ。



第12図　土師器、皿法量比較図

II類（H－252～254）

口縁部の形状でさらに２類に分けられる。ⓐ類は254の１点のみである。底部より内湾気味に立ち上がり、端部付近で外傾する。内外面に赤色顔料塗付の痕跡が見られる。ⓑ類には252・253の２点が含まれる。口縁部に向ってストレートに立ち上がり、端部はそのまま終わる。252は内外面ともヘラ研磨による仕上げを行ない、赤色顔料も塗付されている。253は内外面ともヨコナデ調整を施し、赤色顔料を塗付し仕上げを行なっている。なお器壁があれて観察しづらい。（第12図法量比較図）

実測図No.	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H－248	1 － A	13.8	2.2	11.0	密 砂粒、小石を含む	良好	にぶい橙色 － にぶい橙色	ヨコナデ 一部ヘラ調整 底部－ヘラ切り	ヨコナデ	
H－249	2 － A	13.8	2.2	11.3	緻密	良	橙色 － 橙色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	
H－250	3－A・B SI－102	14.7	2.7	13.0	密 砂粒、小石及び粘土塊含む	良好	橙色 － 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 粗いナデ調整	ヘラ切り
H－251	2 － A	12.6	2.6	11.2	密	良	赤褐色 － 赤褐色	ヨコナデ ヘラ切りのちヘラ調整	ヨコナデ	
H－252	3－A・B SI－102	23.5	2.5	21.6	密 砂粒含む	良好	橙色 － 橙色	ヘラみがき 底部－ヘラ切りのち粗い調整	ヘラみがき	内外面に赤色顔料塗付
H－253	2 － A SK－101	23.0	3.0	20.4	密 小石、砂粒を含む	不良	淡黄色 － 淡黄色	ヨコナデか？	ヨコナデ	内外面に赤色顔料塗付 器壁があれる
H－254	2 － B	18.1	1.7	15.1	やや疎 砂粒を多く含む	良好	浅黄橙色 － 浅黄橙色	ヨコナデ 底部付近－ヘラ調整	ヨコナデ	内外面に赤色顔料塗付 ヘラ切り

第９表　土師器皿観察表

鉢（第11図H－247）

底部より内湾気味に立ち上がり、胴部の最大幅部で、強く屈曲し内傾する。内外面ともヨコナデ調整を施すが、外面胴部下位においてはヘラ研磨で仕上げを行なう。なお底部はヘラ切り離しを行ない、底径は5.0cmを測る。

高坏（第13図H－255・256）

計２点の出土である。坏部のみの破片である。255は内湾気味に立ち上がり、外傾しておわる。256も内湾気味に立ち上がる。

高台付盤（第13図H－257）

１点のみの出土で、高台部分の破片である。高台径11.2cm、高台高2.6cmを測る。全面にわたりヨコナデ調整を行なう。

甕（第13・14・15図H－258～265、267）

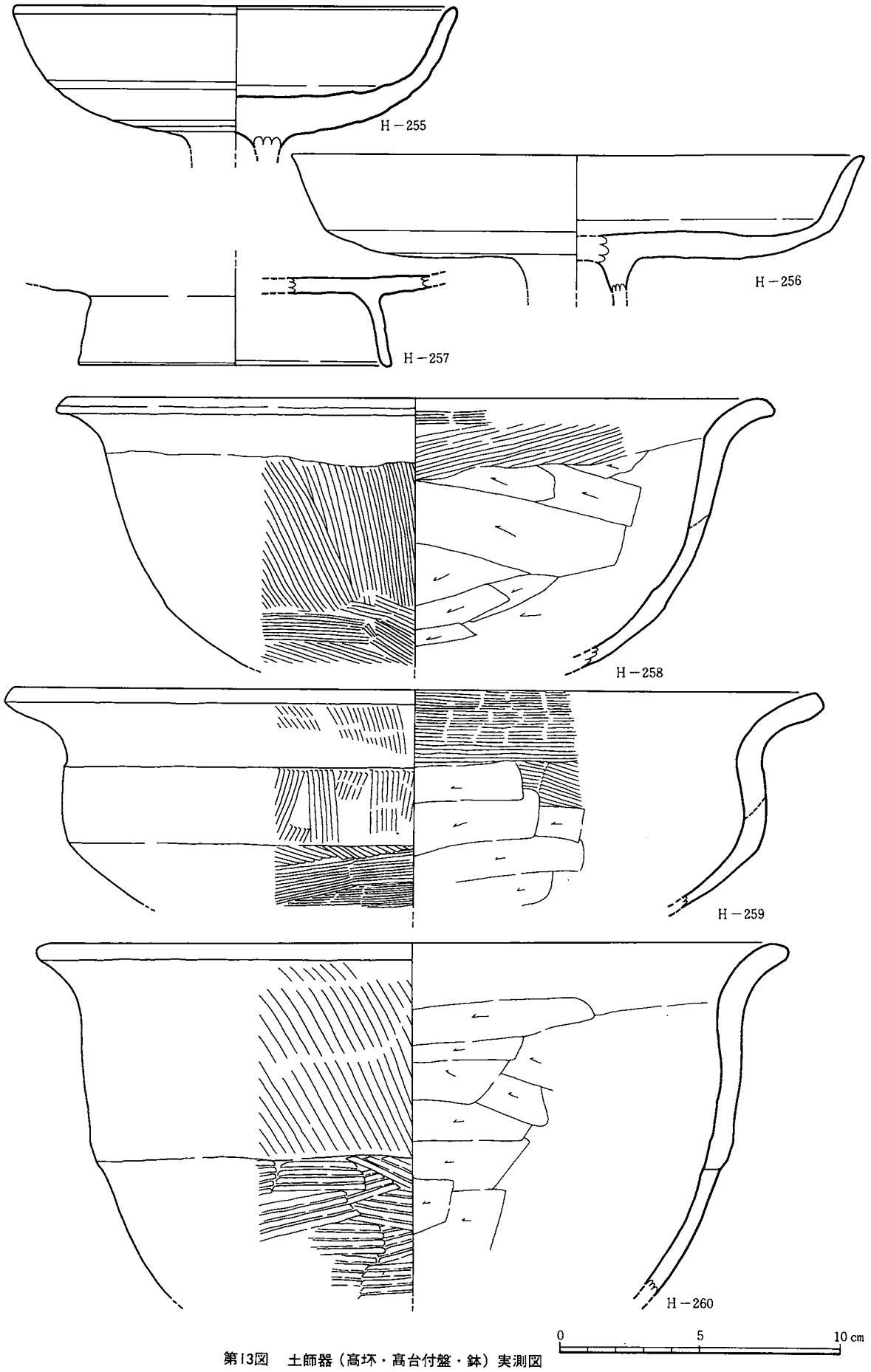
甕類は９点の出土である。これらを全体のプロポーションによって３つに分類できる。

ⓐ類　全体の器高は低く、底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で屈曲し、外湾する。

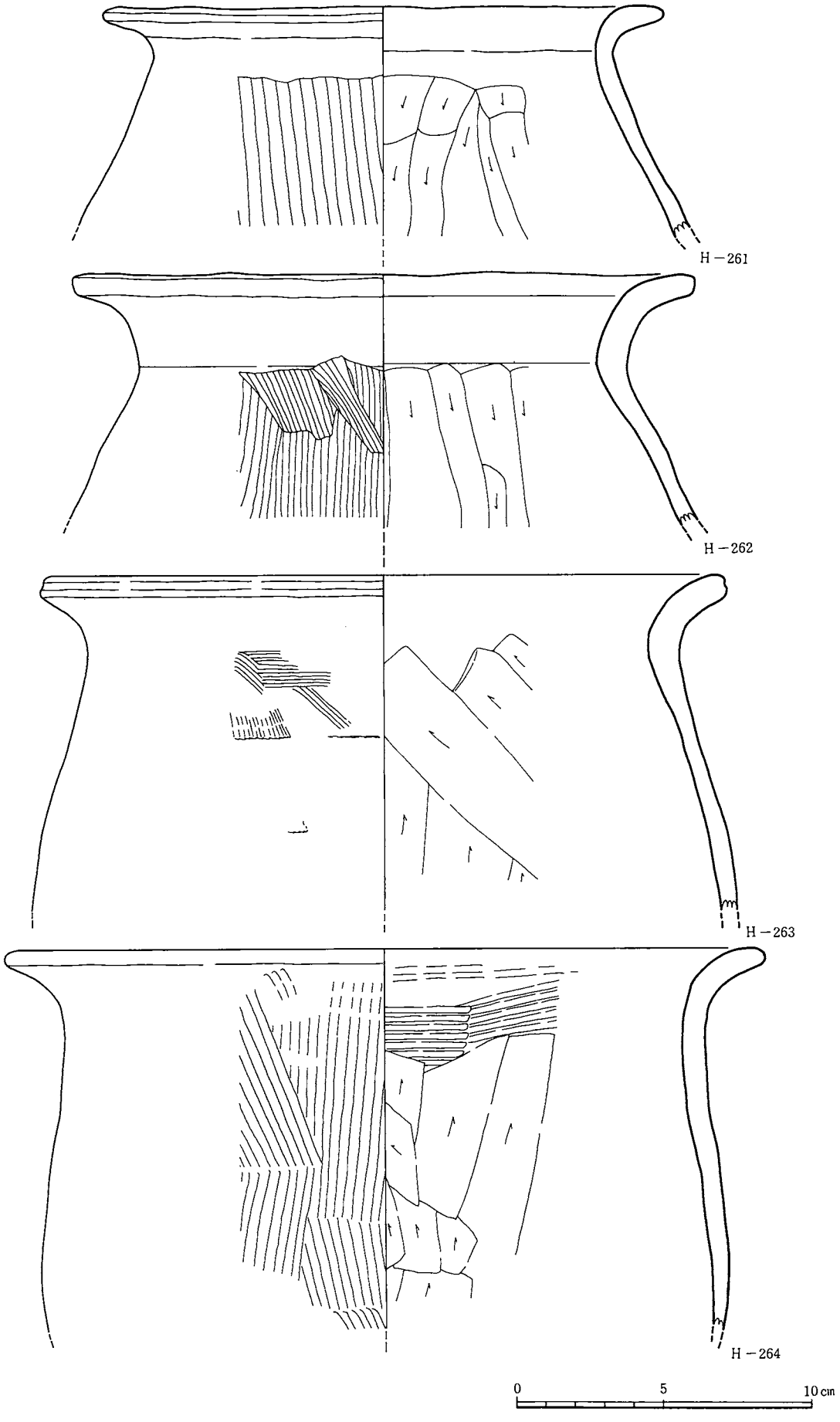
ⓑ類　器高は深く、胴部が張るものと、そうでないものに分かれる。口縁基部で屈曲し外反する。

ⓒ類　比較的に小型で、胴部は張り、口縁部付近で屈曲し、外湾する。

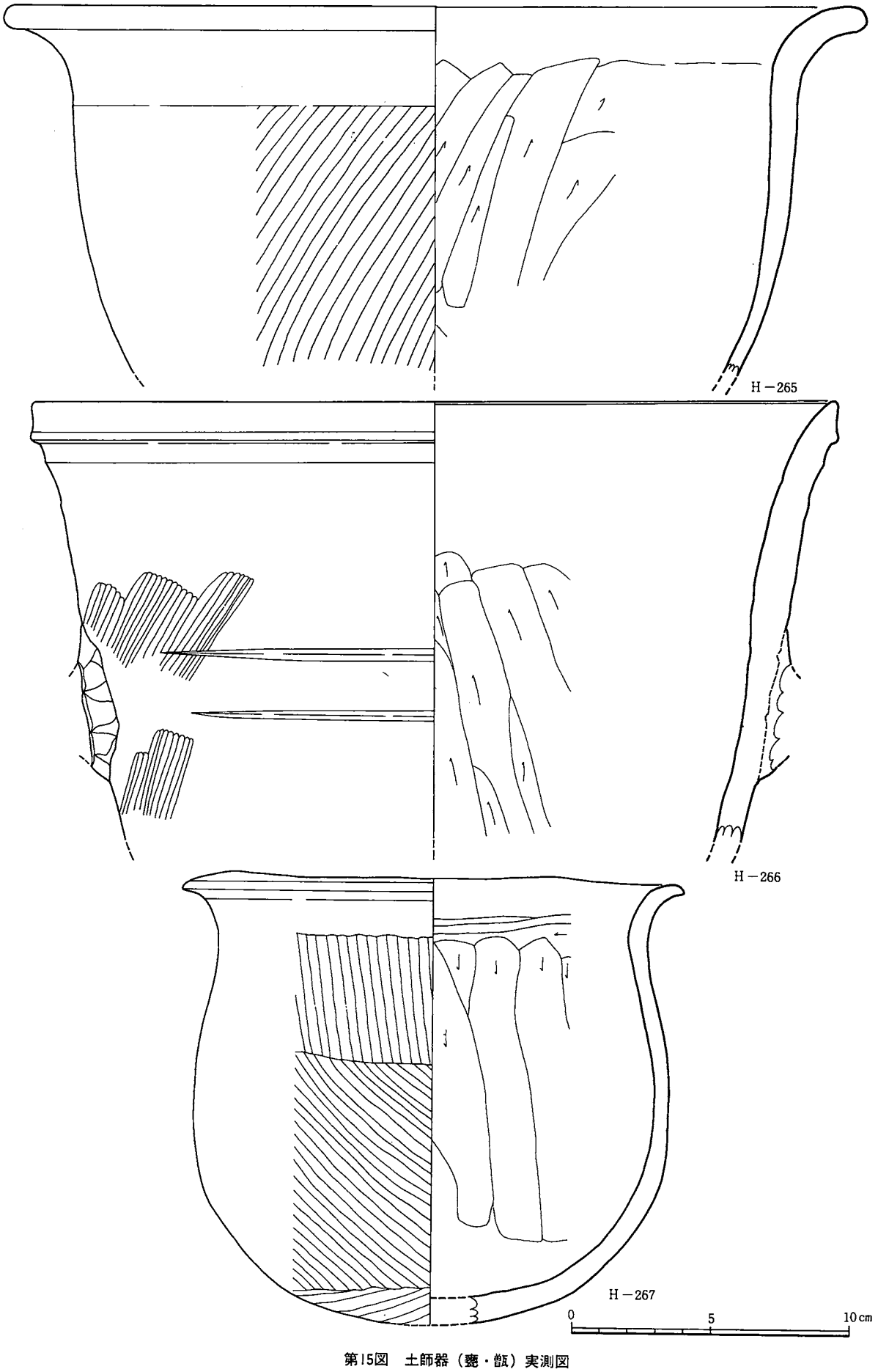
ⓐ類には258～260の３点が含まれる。258は外面の調整が中位が縦方向のハケ目、下位が横方向のハケ目調整を施す。また内面上位は横方向のハケ目調整後、ヨコナデを行ない、更に下段はヘラケズリ調整を施す。体部中位には粘土帯の継ぎ目も観察できる。259は外面の調整が口縁部付近は縦方向のハケ目のあとヨコナデ、中位は縦方向のハケ目のあと部分的ナデ、下位は横・斜方向のハケ目調整が見られる。内面は上位が横



第13図　土師器（高坏・高台付盤・鉢）実測図



第14図　土師器（甕）実測図



第15図　土師器（甕・甑）実測図

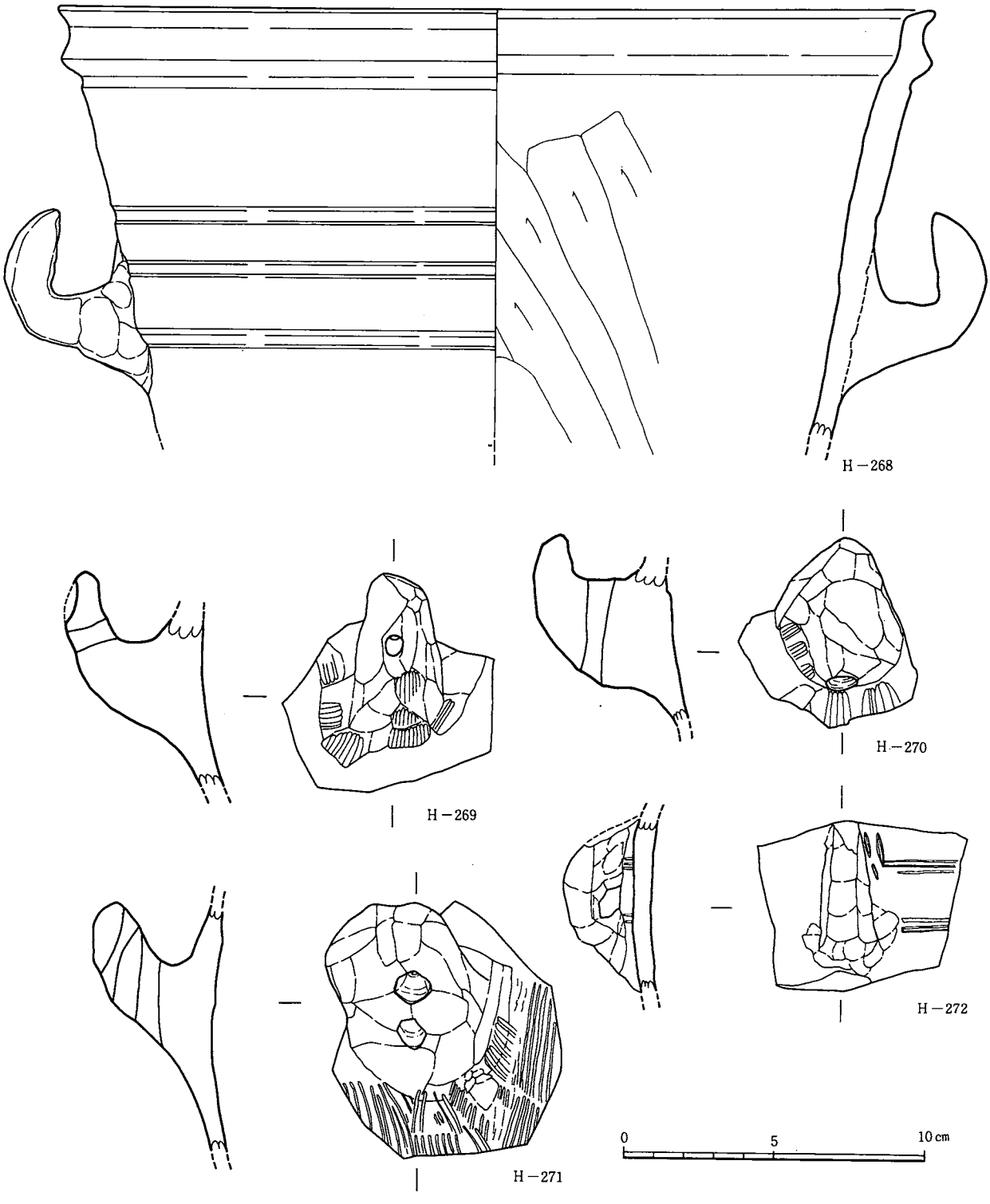
方向のハケ目のあとヨコナデ調整を、下位には横方向のヘラケズリを行なう。なお外面には部分的に煤が付着している。260は口縁部付近がヨコナデ調整を施す。外面には中位が斜方向のハケ目、下位が雑なハケ状工具の横方向のケズリ調整を施す。内面は横方向のヘラケズリが基帳となる。また外面には部分的に煤が付着している。ⓑ類には261～265までの5点が含まれる。261・262は基部が強くくびれ、胴部が大きく張る形をなす。261は口縁部がヨコナデ調整を、外面は縦方向のハケ目調整を、内面は縦方向のヘラケズリ調整を行なう。263は口縁部が強いヨコナデ調整を、外面には縦・斜方向のハケ目調整の後、ナデにて仕上げを行なう。また内面は縦・斜方向のヘラケズリ調整を施す。264は口縁部が横方向のハケ目の後ヨコナデ調整を施す。外面は縦方向のハケ目、内面は縦方向のヘラケズリを行なう。265は口縁部がヨコナデ調整を、外面が斜方向のハケ目調整を、内面は斜方向のヘラケズリを行なう。なお内面は口縁部付近に、外面は基部周辺に煤が付着している。ⓒ類は1点のみで267である。口径は18.2cm、器高16.0cmを測る。口縁部はヨコナデ調整を、外面の上位は縦方向のハケ目、中位は斜方向のハケ目、下位は横方向のハケ目調整を施す。内面上位に横方向のハケ目調整を施す他、縦方向のヘラケズリと指圧による調整を行なう。

実測図No.	出土地点	口径	器高	基部径	残存高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
H－247	2－A SK－101	15.4	9.2	底径 5.0	胴部最大径 18.6	密	良	明赤褐色－明赤褐色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	鉢
H－255	一括	15.8	－	3.2	5.1	緻密	良好	橙色－橙色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	高坏
H－256	一括	20.6	－	3.5	4.8	密	良	明黄褐色－明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	高坏
H－257	1－A	高台径 11.2	高台高 2.6	－	3.2	緻密	良好	にぶい黄橙色－にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	高台付盤
H－258	2－A SK－101	25.6	－	－	9.5	密	良好	淡橙色－淡橙色	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ヘラケズリ	甕
H－259	2－C 上層	29.1	－	－	7.7	やや疎	良好	淡黄橙色－明褐色	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ヘラケズリ	甕
H－260	2－A SK－101	26.7	－	－	12.7	密	良好	橙色－橙色	ヨコナデ ハケ ケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	甕
H－261	2－A SK－101 No.27	19.1	－	－	7.8	密	良	黄橙色－黄橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ヘラケズリ	甕
H－262	0－B SK－129 No.140	21.2	－	－	8.3	密	良	赤褐色－黄橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ヘラケズリ	甕
H－263	0－B SK－129 No.129	23.2	－	－	11.3	密	良好	橙色－淡橙色	ヨコナデ ハケの後ナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	スス付着 甕
H－264	2－A SK－101 No.18	25.8	－	－	12.9	密	良好	淡橙色－橙色	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ヘラケズリ	甕
H－265	2－A SK－101 (No.58 No.46)	31.1	－	－	12.9	密	良好	橙色－橙色	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ハケ	スス付着 甕
H－266	2－A 23	29.0	－	－	15.5	緻密	良好	橙色－黄橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ヘラケズリ	甑
H－267	2－A SK－101 (No.66 No.80)	18.2	16.0	－	－	密	良	明赤褐色－橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ ヘラケズリ	甕
H－268	0－B	29.1	－	－	13.9	緻密	良好	橙色－橙色	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	甑

第10表　土師器鉢・高坏・高台付盤・甕・甑観察表

甑（第15図Ｈ－266　第16図Ｈ－268）

甑の本体は２点出土している。266は口径29.0cm、残存高15.5cmを測る。把手ははずれているが、貼り付けの際、刻み目を四方から入れて、接着を強めようとした痕跡がある。口縁部周辺の内外にはヨコナデ調整を行なう。外面にはヨコナデ調整を施すが、部分的にハケ目調整を行なう。なお中位には２本の深い条線を刻み、その後にハケ目調整、最後に把手を貼り付けるという製作手順である。内面には下方より上方に向っての縦方向のヘラケズリが見られる。268は口径が29.1cm、残存高13.9cmを測る。胴部より口縁部に向って外反し立ち上がるが、口縁端部付近では大きく２度屈曲し、先端は鋭さを持つ。外面中位には三条の沈線を



第16図　土師器（甑・把手）実測図

有し、更に羊角状の把手を貼り付けてある。全面にヨコナデ調整を施し、内面には斜方向の下方から上方へのヘラケズリを行なう。

甑把手（第16図Ｈ－269～271）

甑把手が12点ほど出土しているが、その中ですかし孔を持つ把手を３点とりあげてみたい。これらはいずれも外面はヘラケズリを行ない、ハケ目調整が部分的に見られる。穿孔は271が２個で、他は１個である。269・270は上下双方からの穿孔、271は外側は上下双方からの穿孔、内側は上方からのみの穿孔である。

把手（第16図Ｈ－272）

甑、もしくは鍋の把手であろう。ヘラケズリで外面を丁寧に調整する。なお取付け本体部分には浅い沈線が上方に３本、下方に２本見られる。

須恵器

総数79点の出土である。その器種は蓋・坏・埦・皿・高坏・長頸壺・壺蓋・甕・鉢・盤・平瓶などである。[註(1)]

蓋（第19図Ｓ－201～218）

蓋類は総数17点が出土している。これらを鈕の有無によって大別した。Ｉ類は鈕を有するもの、II類は鈕を持たないものである。これらをさらに前者は鈕の形状によって、後者は口縁端部の形態によって細分化した。[註(2)]

Ｉ類（Ｓ－201～207）

ⓐ類　宝珠形鈕を有しており、口縁端部にかえりを持つ。体部はなめらかで稜を持たない。

ⓑ類　扁平状の鈕を有している。体部はやや角ばっており、体部肩部に稜を持つ。

ⓒ類　輪状の鈕を有している。鈕部は大型でその径は6.3～9.4cmを測る。また鈕の断面形により更に細分ができよう。

201は１点のみの一括出土である。全体のプロポーション及び口縁部にかえりを有することなどから、第Ⅵ様式の土器と推定され、その時期は、７世紀中頃と考えられる。第５図214はかえりを有する赤焼き須恵器である。201と同時期と考えられる。202は体部外面に稜を持ち、やや角ばっている。扁平状のつまみは中央部がやや落ち込んでいる。須恵器の第Ⅳ様式に属すると考えられ、その時期は６世紀中頃と考えられる。なおこの遺跡出土では、この土器が最も古式に属する。ⓒ類においては203のみが形状的に他のものと区別されよう。輪状鈕は大型でその径は9.4cmを測る。鈕の作りは強固で、断面形は方形を呈している。外面は全体にヨコナデ調整を施すが、鈕内側には粗い面を残す。肩部は強く張り、口縁端部は鋭くおさまる。204～206は鈕径もやや小ぶりとなり、鈕高も低い。断面形はほぼ方形もしくは逆三角形状を呈している。おのおの口縁端部は、後述の分類で言えば、204はⓑ類、205・206はⓐ類に相当すると考えられる。207は天井部外面に鈕の剥離の痕跡が明瞭に残る。その規模からボタン状もしくは凝宝珠形の鈕と予想されるが、定かではない。なお端部の形状は208に酷似し$ⓐ_1$類となる。

鈕を有する蓋類はその法量から見て、大型に属するものがほとんどである。第18図法量比較図においては一群をなし、無鈕の蓋とは一線を画する。また鈕と口縁端部との結びつきについては前述の通りであるが、この関係には時期差が明らかに感じられる。輪状鈕の最も古い形態を示す203と、口縁端部で丁寧な仕上げを示すⓔ類との関係。また鈕が簡略化し小型化した204～206に対してのⓐ、ⓑ類との結びつきがこれである。このように鈕の形態差を時期的な流れの中でとらえることは重要であると考えられる。

II類（Ｓ－208～218）

計10点の無鈕蓋をその口縁端部の形態により分類した。

ⓐ類　口縁部の屈曲はなく、下方へ内湾気味に長くのびる。口縁端部はやや丸みを持ち、外面に明瞭な稜

を有する。

ⓑ類　口縁部は小さく屈曲し、端部は外反気味に小さく突出する。

ⓒ類　口縁部は小さく突出し、つまる。

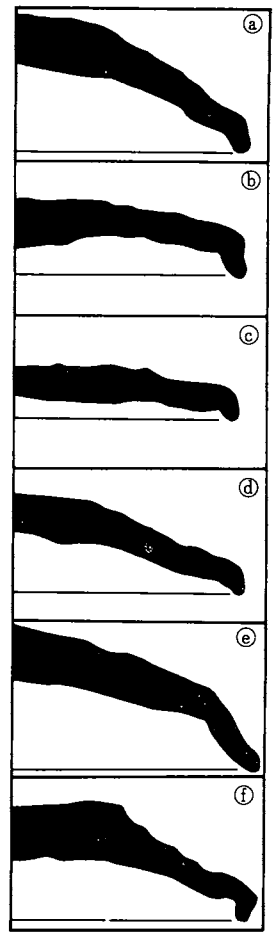
ⓓ類　口縁部には屈曲が見られず、下方にのび、端部は尖り気味となる。

ⓔ類　口縁部は屈曲して下方向にやや外湾気味に長くのびる。外面に明瞭な段を有し、端部は長く外反気味に突出する。

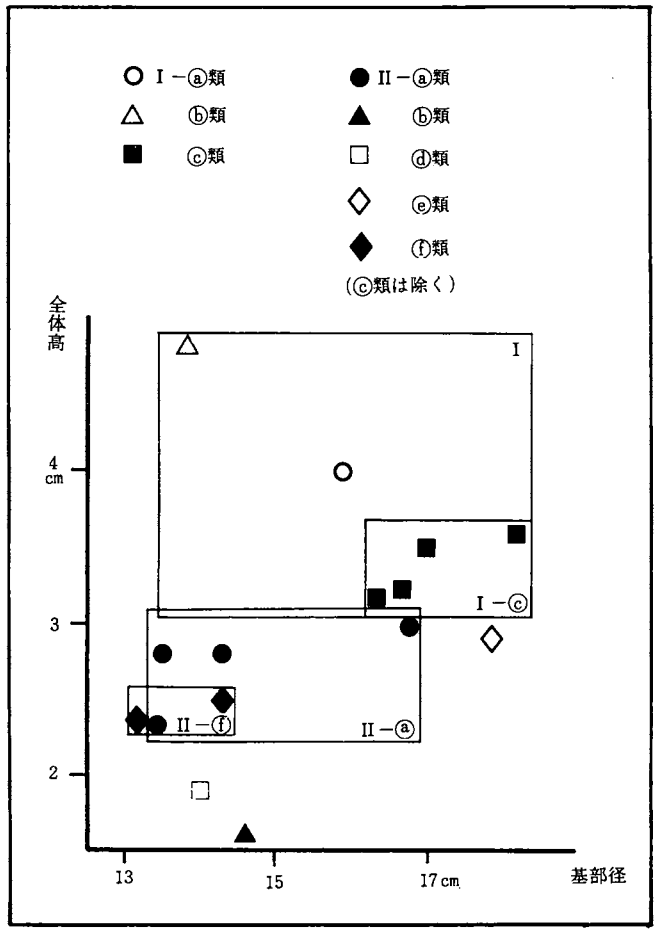
ⓕ類　口縁部は小さく屈曲し、端部は内傾気味に小さく突出する。

208～211はⓐ類に属すると考えられる。いずれも天井部が肥厚し、自然釉がまんべんなく全体にかかる。萩尾大溜池窯跡出土の土器の特徴を備えている。212はⓑ類に属している。天井部は厚みを持っているが、器高は低く1.6cmを測る。213はⓒ類に属するが基部径が8.8cmと小型で、また器高も低いため蓋坏の類ではなく、他の器種との組合わせが考えられる。215はⓓ類、216はⓔ類に属する。216は天井中央部が欠損しており、口縁端部の形状は203に近似し、古い要素を持っているため鈕があった可能性も考えられる。217・218は天井部が肥厚し、体部には明瞭な段を有している。全体にヨコナデ調整を施すが、天井部には粗いヘラ切り離しの痕跡が明瞭に残る。なおⓕ類に属する。

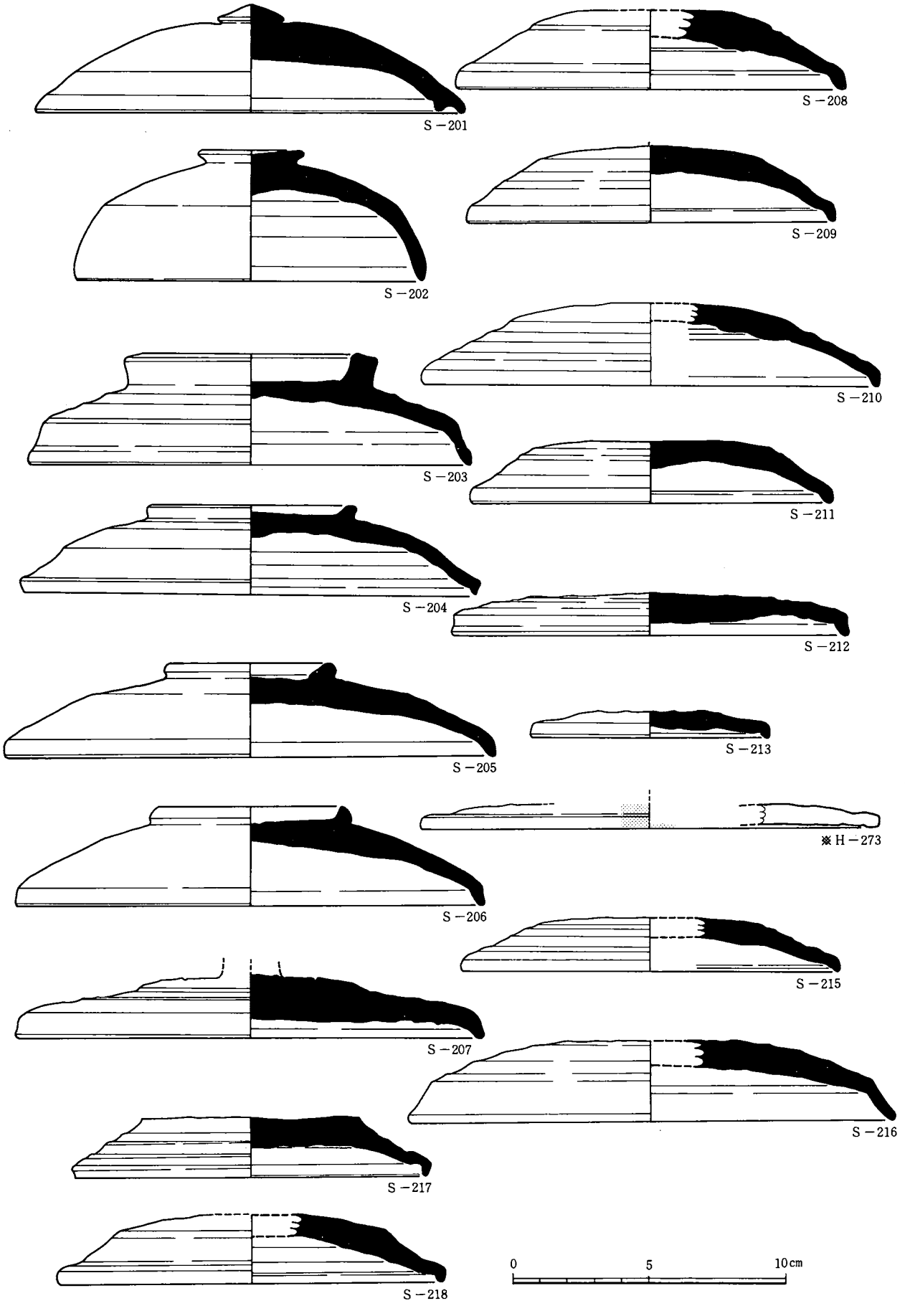
第18図法量比較図では、ⓐ類・ⓑ類がグループとして認められる。ⓒ類は小型であるため除外し、ⓕ類については、前述の如くⅠ類の鈕を有する一群の位置に接近している。



第17図　須恵器蓋口縁部模式図



第18図　須恵器蓋法量比較図



第19図　須恵器（蓋）実測図

実測図No.	出土地点	鈕高	鈕径	基部径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S－201	一括	0.7	2.4	15.9	3.3	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰白色	ヨコナデ 一部不定方向の削り	端部付近－ヨコナデ 不定方向のナデ	宝珠形鈕 かえり
S－202	一括	0.5	3.9	12.8	4.3	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	扁平状鈕
S－203	0－B上層	1.2	9.4	16.3	2.9	緻密 大型石英粒を含む	良好	灰色 － 灰白色	ヨコナデ 鈕内側－粗い調整	不定方向のナデ	輪状鈕
S－204	2－A 19	0.4	7.8	16.7	2.8	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ	不定方向のナデ	輪状鈕
S－205	2－A 23	0.5	6.3	18.0	3.0	緻密	良好	赤褐色 － 赤褐色	ヨコナデ調整後ヘラ削り	ヨコナデ	輪状鈕
S－206	2－A SK－101 No.30	0.7	7.4	17.2	2.9	緻密	良好	赤褐色 － 赤褐色	ヨコナデ	不定方向のナデ	輪状鈕
S－207	一括	－	－	17.2	2.2	緻密	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ 一部ヘラ削り	不定方向のナデ	鈕剥離痕跡有
S－208	2－A 25	－	－	14.3	2.8	緻密 堅緻	良好	灰白色 － 灰オリーブ色	ヨコナデ 一部ヘラ削り	ヨコナデ	
S－209	2－A SK－101 (No.33 (一括	－	－	13.5	2.8	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ 一部ヘラ削り	ヨコナデ	焼成ひずみ有
S－210	1－A No.10	－	－	16.8	3.0	緻密	良好	灰白色 － 浅黄色	ヨコナデ 一部ヘラ削り	ヨコナデ	
S－211	2－A 15	－	－	13.4	2.3	緻密 堅緻	良好	灰オリーブ色 － 灰色	ヨコナデ 一部粗いへら切り離し	不定方向のナデ	
S－212	0－C	－	－	14.7	1.6	緻密	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ 一部粗いへら切り離し	端部－ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－213	2－A SK－101	－	－	8.8	0.9	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－214	一括	0.7	2.3	12.6	2.4	緻密	不良	浅黄橙色 － 浅黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤焼須恵器 かえりを有する凝宝珠形鈕
S－215	2－A 23	－	－	14.0	1.9	緻密	良好	灰黄色 － 灰黄色	ヨコナデ 一部粗いへら切り	ヨコナデ	
S－216	西側一括 (0－B)	－	－	17.9	2.9	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ 一部粗いへら削り	端部－ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－217	SK－130	－	－	13.3	2.3	緻密	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ 粗いへら切り離し	ヨコナデ	
S－218	2－A SK－101 No.1・2	－	－	14.3	2.5	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ 粗いへら切り離し	端部－ヨコナデ 不定方向のナデ	

第11表 須恵器蓋観察表

坏（第24図S－219～第26図S－256）

坏は総数37点出土している。その内訳は無高台のもの6点、高台を持つもの31点である。坏と埦との区別については、厳密には仕分けられないが、法量で、口径14cm、器高4cmを基準として、大型のものを埦、小型のものを坏として分類した。さらに坏では無高台のもの[註(3)]をⅠ類、高台を持つものをⅡ類として分類した。[註(3)]

Ⅰ類（S－219～225）

計6点が数えられる。全体のプロポーションから4類に分けられる。

ⓐ類　底部は丸みを持ち、体部は外反気味に広がる。さらに口縁部付近で、外側へ短く屈曲する。

ⓑ類　体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部付近で内側に屈曲する。

ⓒ類　底部は平らで、口縁部に向ってストレートに外傾し、端部に鋭さを持つ。

ⓓ類　底部より口縁部に向って内湾気味に立ち上がり、端部付近で外側に小さく屈曲する。

219～220はⓐ類に属する。いずれもほぼ同法量で第21図法量比較図に示すように、他の土器とは仕分

けられ、一群を有する。その中で220には底部に境界部から中央に向って約3.5cmの一条の刻線を持ち、ヘラ記号と考えられる。222はⓑ類に属すると思われる。また焼成の際、大きなひずみを持っている。224はⓒ類、225はⓓ類にそれぞれ属する。225は底部が平らで、底部と体部との境界部に凹みを有しており、底部付近の調整が他の土器とは異なる。

II類（S－226～256）

計36点が数えられる。さらにこれらは高台の貼り付け位置ならびに高台の断面形により、9つに分類できる。高台の断面形による分類は次のとおりである。

ⓐ類　高台の基部は強くくびれ、外面に稜を有して、外方にはり出す。

ⓑ類　断面形が扁平な方形ないし台形状を呈し、端部はやや角ばっている。

ⓒ類　断面形が逆三角形状を呈している。

ⓓ類　高台基部がくびれ、断面形は偏平な方形である。

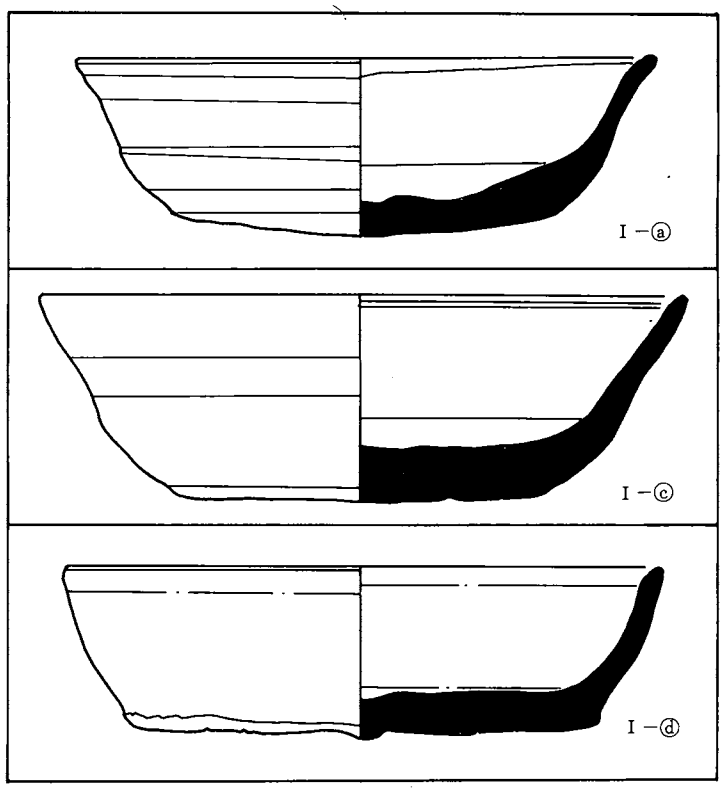
ⓔ類　外方に外反するように貼り付けられる。端部は鋭い。

ⓕ類　やや外方に開くように貼り付けられ、高台は肉薄である。

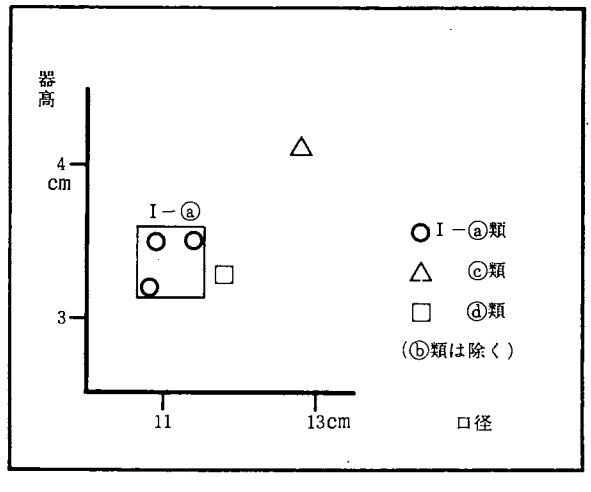
ⓖ類　断面形は方形を呈し、角ばり、全体的に外方に開くように貼り付けられる。

ⓗ類　外方に外湾するように貼り付けられる。

ⓘ類　やや外方に開くように取り付けられ、断面形は方形を呈する。



第20図　須恵器坏形態分類図



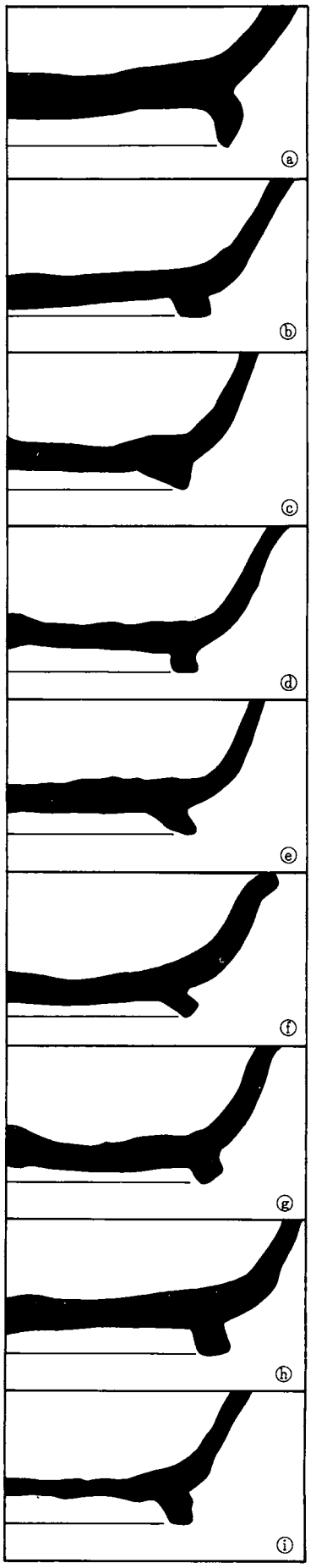
第21図　須恵器坏法量比較図

また高台の貼り付け位置により更に細分ができる。①外側底部周縁よりかなり内側に高台が貼り付く。②周縁部よりやや内側に貼り付き、基部にくびれを有する。③体部と底部の堺界部に位置しており、体部と高台が一体となっている。

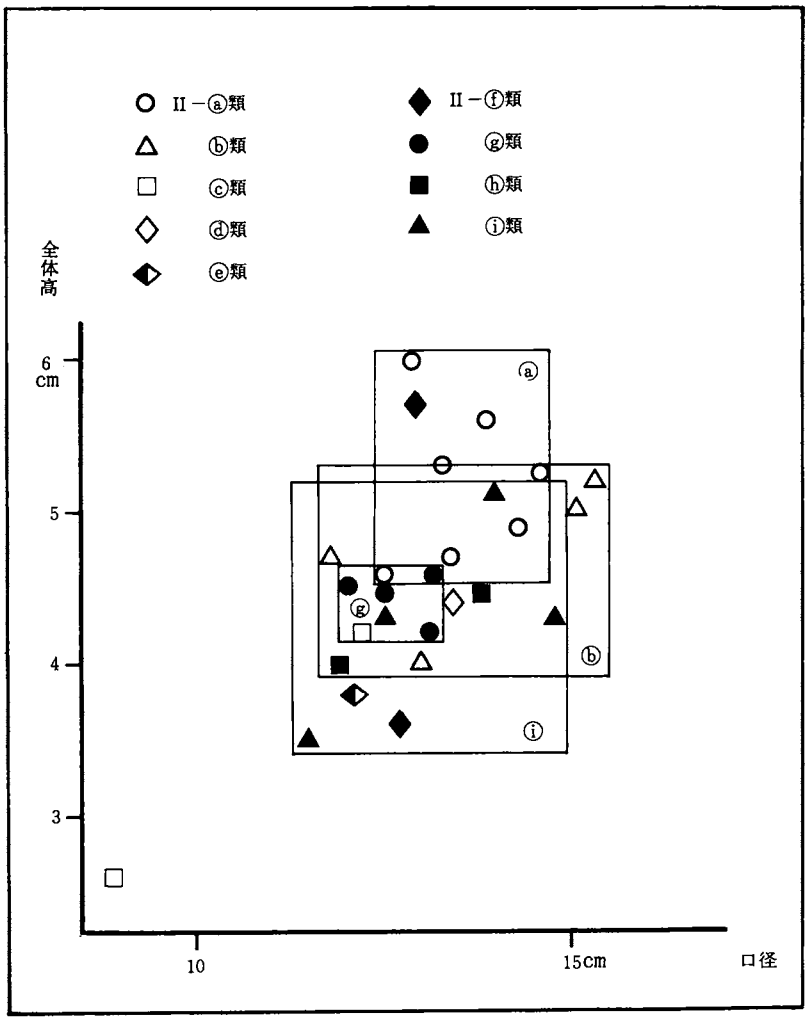
226はⓐ類に属するがその基部のくびれは弱い。貼り付け位置は①である。227～232もⓐ類に属する。これらの土器では外面はヨコナデ調整を施し、内面はヨコナデもしくは不定方向のナデ調整を行なう。高台部は丁寧はナデを行ない、内側は指圧により強くおしつける。なお高台の貼り付け位置はいずれも②である。

233～237はⓑ類に含まれる。234・236とも坏類ではやや大型に属し、口径は15cm、器高は4.5cm内外を測る。貼り付け位置は②である。ただし237は、高台の貼り付けが内側に入りこみ①に含まれる。このことからこの類では古式に相当すると考えられる。ⓒ類には238～240が含まれる。断面形は両側方より高台部に向って強く指圧をかけて整形したものと考えられる。239は特に小型で、口径8.9cm、器高は21.cmを測り、特殊な用途の土器とも思われる。貼り付け位置は②に相当する。ⓓ類には241・242が含まれる。242は焼成に際して大きなひずみを有する。貼り付け位置は②に属する。243はⓔ類に属し、ただ1点の出土である。なお貼り付け位置は②に相当する。ⓕ類には244～246の3点が含まれる。244は体部外面に丁寧なヨコナデ調整を施し、浅い沈線を5条有する。246は焼成の際のひずみが大きく、実用には耐えられない。貼り付け位置はいずれも②に属する。ⓖ類には247～250が含まれる。いずれもほぼ同法量で、比較図においてまとまり一群を形成する。貼り付け位置は②に相当する。247には焼成の際の不純物が多数付着し、萩尾大溜池窯の特徴を有する。ⓗ類は251・252の2点である。プロポーションは全体的に丸みを持っている。貼り付け位置は共に②に相当する。ⓘ類に属するものは253～256の4点である。254は体部外面ではヨコナデ調整を施し、浅い沈線を4条有する。法量にはややばらつきが見られる。貼り付け位置は②に相当する。

第23図法量比較図にⓐ類とⓑ類においては異なる分布を示す。ⓐ類は全体高が高く、口径がまとまる。ⓑ類は口径が広がり、全体高が比較的に低い。ⓖ類はⓑ類中にほとんど含まれるが、法量的に一定し、小さくまとまる。ⓘ類については、法量が一定せず大きくばらつきが見られる。



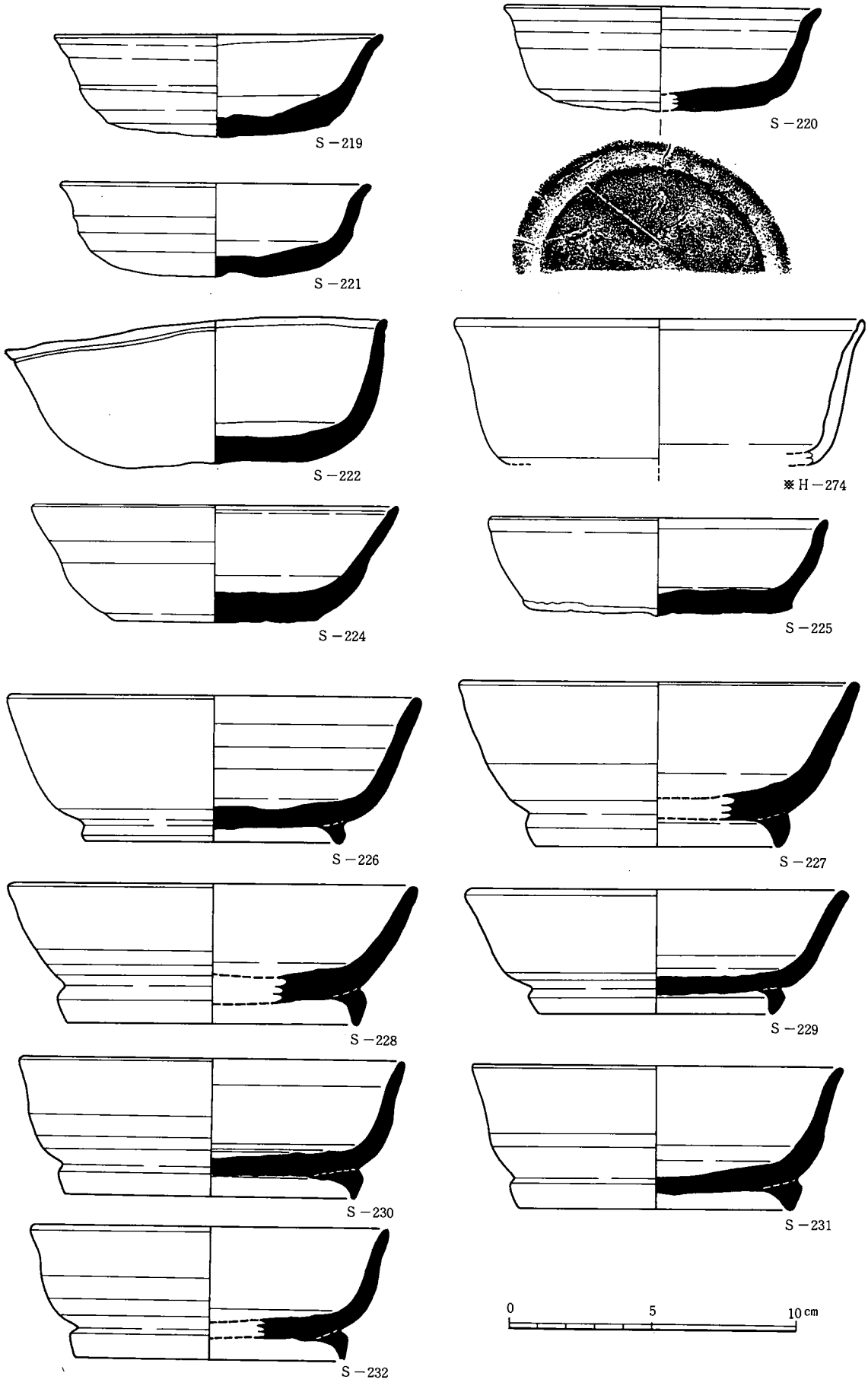
第22図　須恵器坏高台断面形模式図



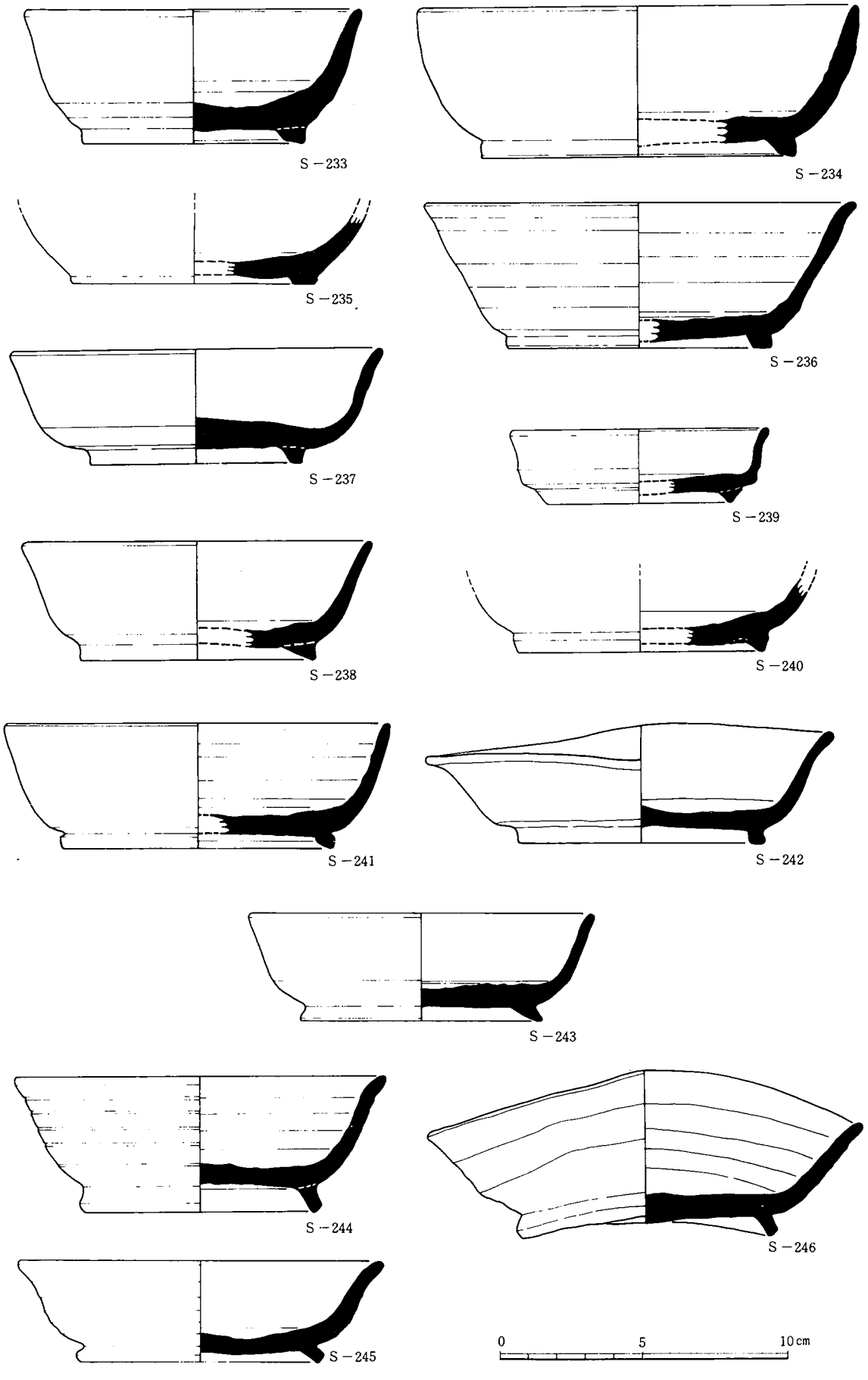
第23図　須恵器高台付坏法量比較図

実測図No.	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S－219	2－A SK－101 No.74	11.4	3.5	7.8	緻密	良	灰白色 ― 灰白色	ヨコナデ 一部ヘラ削り	ヨコナデ	
S－220	― 括	10.9	3.5	7.4	密	良	灰色 ― 黄灰色	ヨコナデ ヘラ切り後ナデ	ヨコナデ	ヘラ記号
S－221	2－A SK－101 No.74	10.8	3.2	7.3	緻密	良	灰色 ― 灰色	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ	
S－222	2－A 19	―	4.9	―	緻密 堅緻	良	灰色 ― 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成によるひずみ大
S－224	― 括	12.8	4.1	7.1	緻密	良	乳灰色 ― 乳灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－225	― 括	11.8	3.3	9.3	緻密	良	灰白色 ― 灰白色	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ 不定方向ナデ	

第12表　須恵器坏観察表



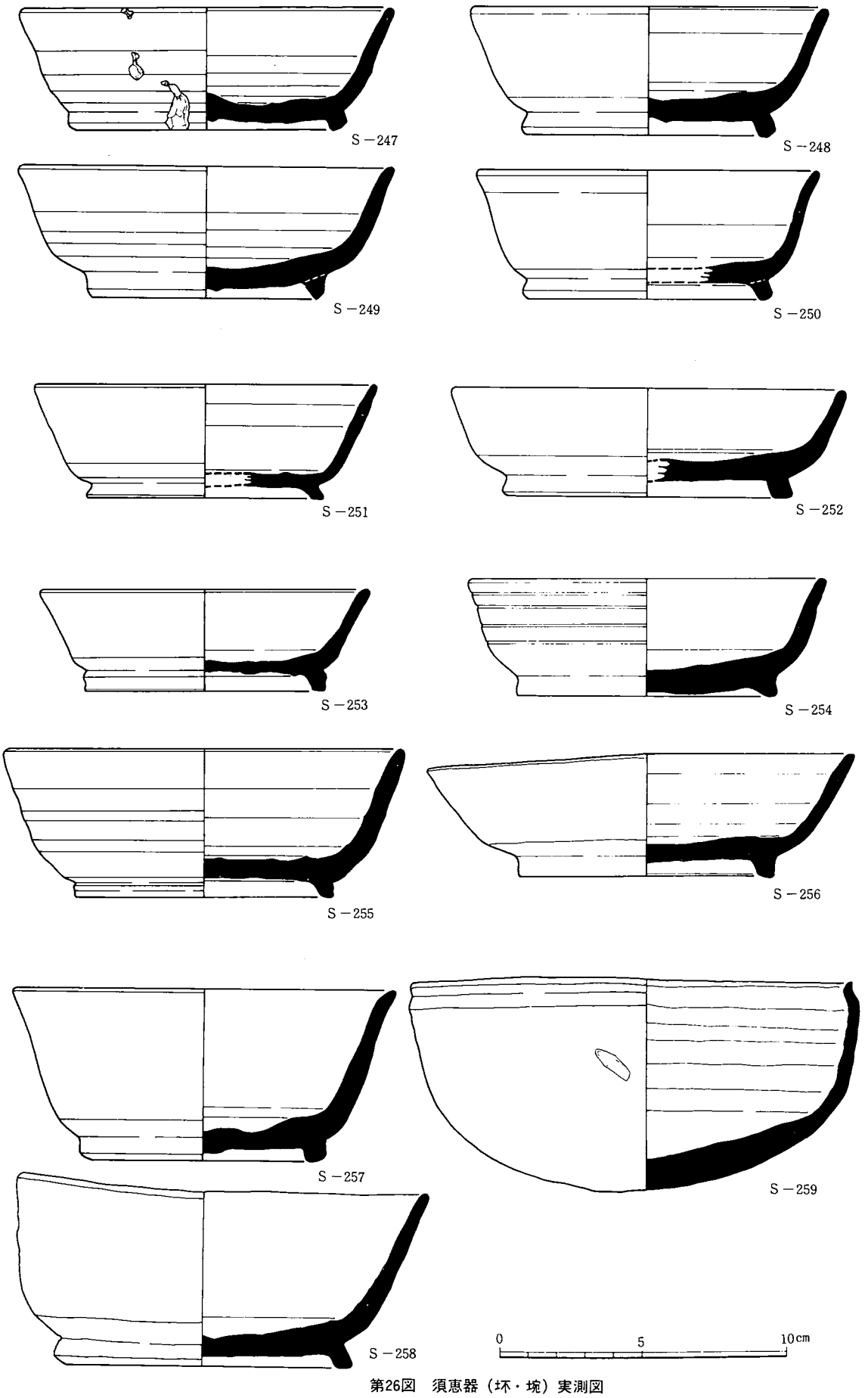
第24図　須恵器（坏）実測図(1)



第25図　須恵器（坏）実測図(2)

実測図 No.	出土地点	高台高	高台径	口径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S－226	0－C	0.8	9.2	14.6	4.4	緻密 堅緻	良好	灰色 灰オリーブ色	ヨコナデ	不定方向のナデ	
S－227	2－A・B	1.2	8.5	13.9	4.4	緻密 堅緻	良好	灰オリーブ色 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－228	2－A 19	1.3	10.2	14.3	3.6	緻密 堅緻	良好	灰オリーブ色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－229	2－A SK－101 No.44	0.9	8.9	13.3	4.4	緻密 堅緻	良好	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－230	2－A・B	1.0	10.5	13.4	3.7	緻密 堅緻	良好	灰白色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－231	2－A SK－101 No.59	1.1	10.2	12.9	4.9	緻密 堅緻	良	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－232	2－A SK－101 No.4	1.1	9.6	12.5	3.5	緻密 堅緻	良	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－233	2－A 22	0.6	7.8	11.8	4.1	緻密 堅緻	良	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－234	一括	0.6	10.8	15.3	4.6	緻密 堅緻	良	灰白色 浅黄色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－235	西側一括 (0－B)	0.2	8.5	－	残存高 2.1	緻密 堅緻	良	灰黄褐色 —	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－236	2－A 上層一括	0.5	9.2	15.0	4.5	緻密 堅緻	良	灰白色 灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－237	一括	0.6	7.5	13.0	3.4	緻密 堅緻	良好	灰白暗灰色 灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－238	2－A SK－101 No.32	0.6	8.2	12.2	3.6	緻密 堅緻	良好	灰色 黄灰	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－239	2－A SK－101 No.69	0.4	7.1	8.9	2.1	密	良	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向のナデ	
S－240	SD－103	0.7	8.9	－	残存高 1.9	緻密	良	黄灰色 灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－241	0－C上層	0.6	9.6	13.4	3.8	緻密	良	灰白色 にぶい黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	
S－242	2－A SK－101 No.22	0.5	8.6	－	3.5	緻密 堅緻	不良	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	焼成ひずみ大
S－243	2－A SK－101 No.71	0.6	8.5	12.1	3.2	緻密 堅緻	良好	灰黄色 黄灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－244	(2－A (2－A23	0.9	8.4	12.9	4.8	緻密 堅緻	良好	灰色 灰オリーブ油	ヨコナデ 浅い沈線を持つ	ヨコナデ	
S－245	(1－B (SK－110 (2－A (SK－101 (No.80	0.5	8.6	12.7	3.1	緻密 堅緻	良好	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	
S－246	2－A SK－101 No.61	0.7	－	－	－	緻密 堅緻	不良	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	焼成ひずみ大
S－247	一括	0.6	9.8	13.1	3.6	緻密 堅緻	良好	灰黄色 灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	不純物付着
S－248	0－C上層	0.8	8.9	12.5	3.7	緻密 堅緻	良好	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	
S－249	2－A SK－101 No.16・9	0.8	8.3	13.2	3.8	緻密 堅緻	良好	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－250	2－A SK－101 No.56	0.7	8.7	12.0	3.8	緻密 堅緻	良好	にぶい黄橙色 灰オリーブ色	ヨコナデ	ヨコナデ	
S－251	(0－BC (SK－130 (0－B上層 (0－C上層	0.5	8.2	11.9	3.5	緻密 堅緻	良好	灰色 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	
S－252	0－C上層	0.7	10.1	13.8	3.8	緻密	良	灰白色 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	
S－253	0－C 上層一括	0.7	8.4	11.5	2.8	緻密 堅緻	良好	灰色 灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	
S－254	2－A 9	0.7	9.0	12.5	3.6	緻密 堅緻	良好	浅黄色 浅黄色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	
S－255	0－C上層	0.5	9.0	14.0	4.6	緻密 堅緻	良好	褐灰色 にぶい褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	

第13表　須恵器高台付坏観察表



第26図　須恵器（坏・埦）実測図

坏（第26図S－257～259）

これに属するものは3点である。無高台が1点、高台を有するものが2点である。法量はいずれも口径14cm、器高4cmを越える。257は高台の断面形が方形を呈している。体部はストレートに外傾し、口縁端部で小さく外反する。258は高台の断面形が方形ながらも、高台が高く外方に開くように貼り付けられる。焼成によるひずみが大きく、プロポーションが一定しない。259は底部が丸みを持っており、肉厚である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部で小さく屈曲し内傾する。なお焼成によるひずみが大きく、不純物が多数付着する。

実測図No.	出土地点	高台高	高台径	口径	器高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S－256	1－A・B 上層	0.7	8.9	14.8	3.6	緻密 堅緻	良	灰白色 ― 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	焼成ひずみ大
S－257	2－A SK－101 No.79	0.7	8.6	13.4	5.2	緻密 堅緻	良	褐灰色 ― 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	
S－258	SK－130	0.9	10.5	－	5.2	緻密 堅緻	不良	灰色 ― 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	焼成ひずみ大

第14表　須恵器高台付椀観察表

皿（第27図S－260～263）

計4点の出土である。全体のプロポーションから3類に分けられる。I類（S－260・261）蓋かとも考えられるが、ここでは皿類に属すると考えられる。底部はやや丸みを持っており、底部から口縁部に向ってストレートに立ち上がり、端部は丸くおさまる。法量は両者ともほぼ同一である。II類（262）1点のみである。底部はヘラ切りで粗い調整を残している。底部端より口縁部に向っては外湾気味に立ち上がり、口縁端部付近で屈曲し外傾する。III類（263）1点のみの出土である。やや丸底の底部である。底部端は鋭さを持っており、口縁部はストレートに立ち上がる。口縁端部は肥厚する。

実測図No.	出土地点	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S－260	2－A 23	12.7	2.5	8.2	緻密 堅緻	良好	灰黄褐色 ― 灰色	ヨコナデ ヘラ削り	ヨコナデ	
S－261	3－A・B SI－102 No.9	12.5	2.8	8.0	緻密 堅緻	良好	灰黄色 ― 灰白色	ヨコナデ ヘラ削り	ヨコナデ 不定方向ナデ	
S－262	2－B包含	14.2	1.6	11.3	密	やや不良	灰白色 ― 灰白色	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ	
S－263	一括	12.8	2.1	10.4	緻密 堅緻	良好	にぶい黄橙色 ― 灰白色	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ 不定方向ナデ	

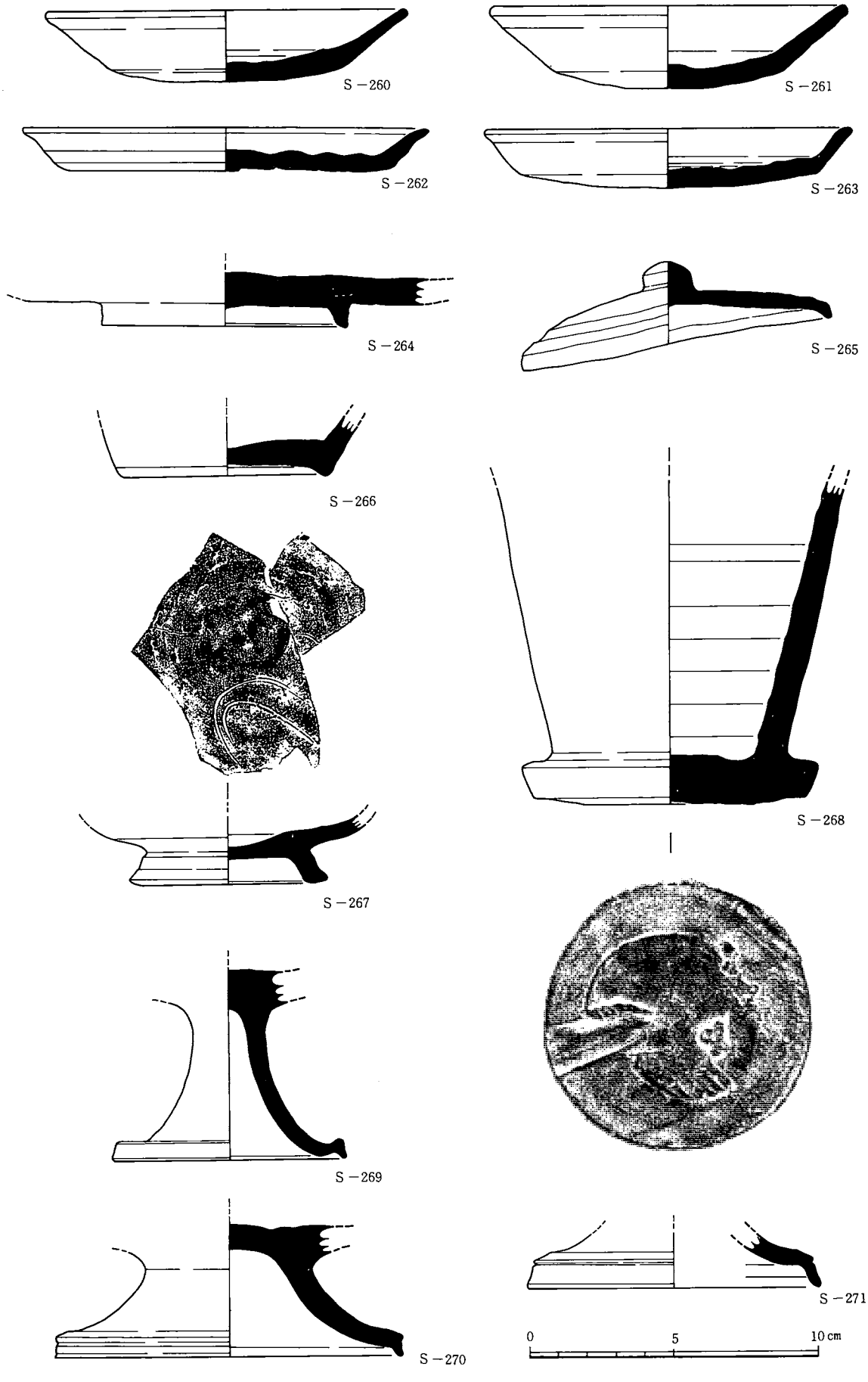
第15表　須恵器皿観察表

盤・壺蓋・鉢・平瓶（第27図S－264～268・277）

264は高台付盤である。高台径は8.6cm、高台高は0.8cmを測る。高台の断面形は逆三角形状を呈している。

265は壺蓋と考えられる。ボタン状の凝宝珠形の鈕を有している。鈕基部にはくびれを持ち、口縁端部に向ってストレートに下り、端部は鋭さを持つ。焼成の際にひずみを有する。266は鉢の底部と思われる。やや上げ底状を呈している。

267は高台を有する底部片であるが、器種は不明である。高台は外反するように貼り付けられている。なお内面の見込み部には渦巻き状の刻文が見られ、ヘラ記号の一種であると考えられる。268は鉢である。製作の手順は次のとおりである。体部外面の全体にわたり底部の突出部まで回転ヨコナデ調整を施す。底部端より底部変換点までのヘラ切り離しを行なう。再度底部突出部のヨコナデ調整を行なう。最後に底部中央部



第27図　須恵器（皿・鉢・蓋・高坏）実測図

実測図No	出土地点	口径	器高	基部径	残存高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S－264	6·7－A－C SO－101	高台径 8.6	高台高 0.8	－	1.9	緻密	良	オリーブ灰色 － オリーブ灰色	ヘラケズリ	ヨコナデ 後ナデ	高台付盤
S－265	0－C 上層	－	－	－	3.0	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成ひずみ大 凝宝珠形鈕 壺蓋
S－266	1－B 一括	－	－	底径 7.2	2.0	密	不良	淡黄色 － 淡黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	鉢
S－267	一括	高台径 6.9	高台高 1.1	－	2.3	緻密 堅緻	良好	灰黄色 － 灰色	ヨコナデ	ヨコナデ 不定方向ナデ	内面に刻文がみられる 高台付長頸壺か？
S－268	2－A SK－101 No.65	－	－	底径 8.9	11.2	緻密 堅緻	良好	灰白色 － 黄灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	鉢
S－277	2－A SK－101 No.7	3.9	7.8	底径 6.5	－	緻密	良好	灰白色 － 黄灰色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	平瓶

第16表　須恵器(盤・壺蓋・鉢・平瓶)観察表

にヘラを差込み、回転させ切り離す。なお内面はヨコナデ調整を施すが、中央部は未調整のままである。底部と体部との境部は、外面では強いくびれを、内面では凹みを有する。この器種は陶邑などでは多数出土しているものの、熊本県下では出土数が稀である。萩尾大溜池窯からの出土器は口縁部から体部にかけてのものであり、底部は初めての出土である。

277は平瓶である。口径は3.9cm、器高7.8cmを測る。外面は全面にわたり回転ヨコナデ調整を施し、天井部には一部分円孤状の条線を有する。胴部は強く張り出し稜を有する。胴部下位はヘラ削り調整を行なう。底部は粗い切り離しを行ない、器壁はやや薄い。内面は同様に回転ヨコナデ調整を行なうが、天井部はやや異なりナデ調整である。製作上、天井部は最後に貼り付けを行ない、その中央部には上方より斜下方に向って刺突の跡が見られる。頸部は体部に貼り付け後、丁寧なヨコナデ調整を施し、部分的には下方に一部はみ出す。

高坏（第27図S－269～271）

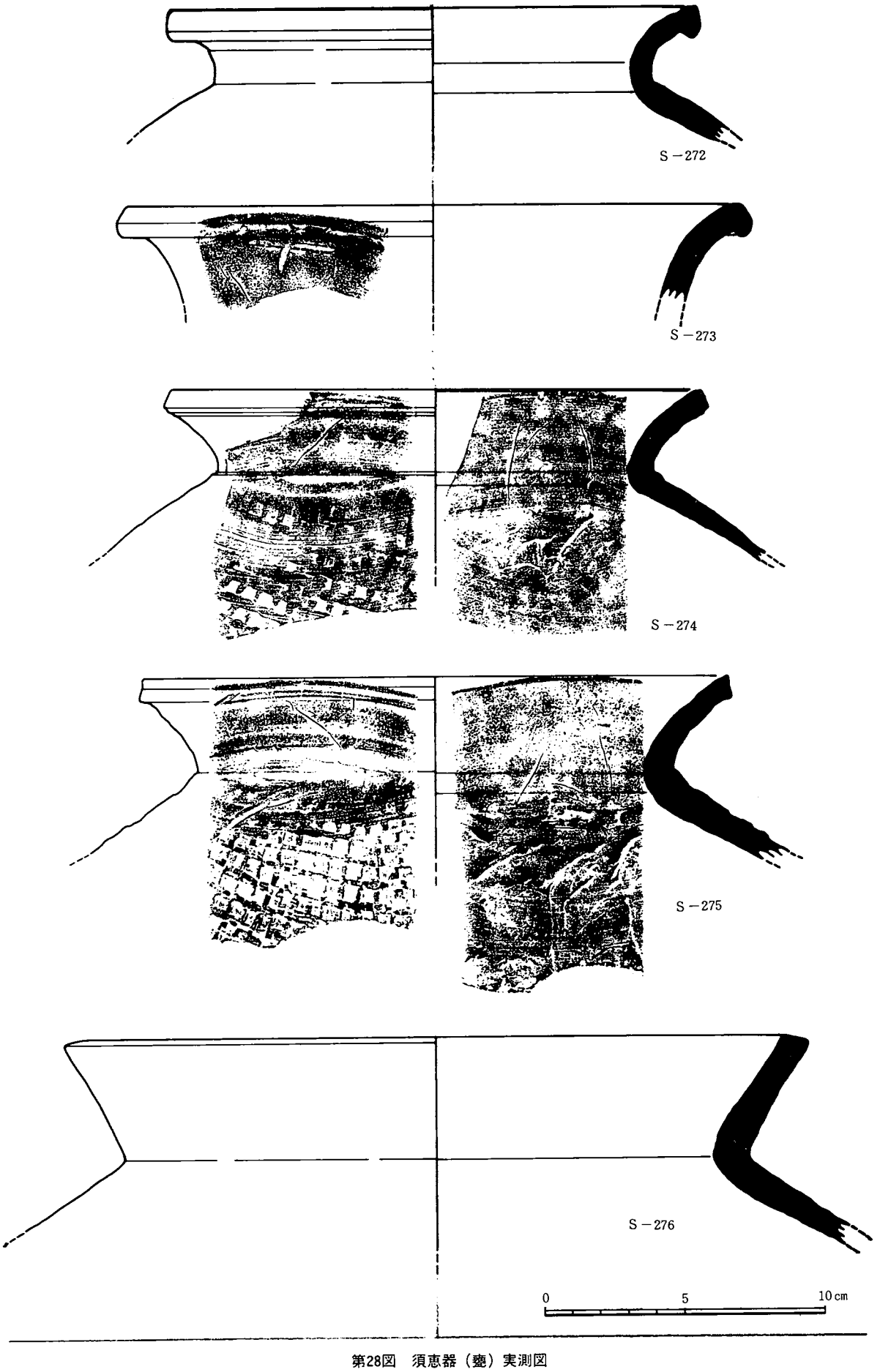
計3点の出土である。269は基部から脚部にかけてのもので、比較的に脚部高も高い。脚端部は強く屈曲し、外側に強く突出する。271は脚端部の突出が長く、外傾している。270の脚部内側には不純物が多数付着している。

実測図No	出土地点	底部径	器高	基部径	残存高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S－269	2－A 19	8.2	－	3.1	6.5	緻密	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ調整	坏部－ヨコナデ 脚部－ヨコナデ	
S－270	2－A SK－101 No.26	12.2	－	5.9	4.5	緻密 堅緻	良好	灰色 － 灰色	ヨコナデ	坏部－不定方向ナデ 脚部－ヨコナデ	脚部内面に不純物付着
S－271	1－B SK－107	10.2	－	－	1.9	緻密	良	灰色 － 灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	

第17表　須恵器高坏観察表

甕（第28図S－272～276）

計5点の出土である。全体のプロポーションは類似しており、口縁端部の形状によって3種に分けられる。I類（272・275）口縁端部が先端でつまり、肥厚する。272は端部断面形が三角形状を呈し、強く肥厚する。体部外面には格子目叩きを施すが、その後のナデ調整と、釉のかかりにより不明瞭となる。275は全面にヨコナデ調整を施し、体部外面に格子目文の叩きが、内面にはアテ具の痕跡が残る。叩き板の横幅は3.3cm、胴部側から口縁部側へ斜方向のたたきである。なお格子目は5mm方眼である。II類（273）1点のみである。小破片であるため断定できないが、体部からの立ち上がりが急で、端部が下方に屈曲し下る。ヨコナデ調整

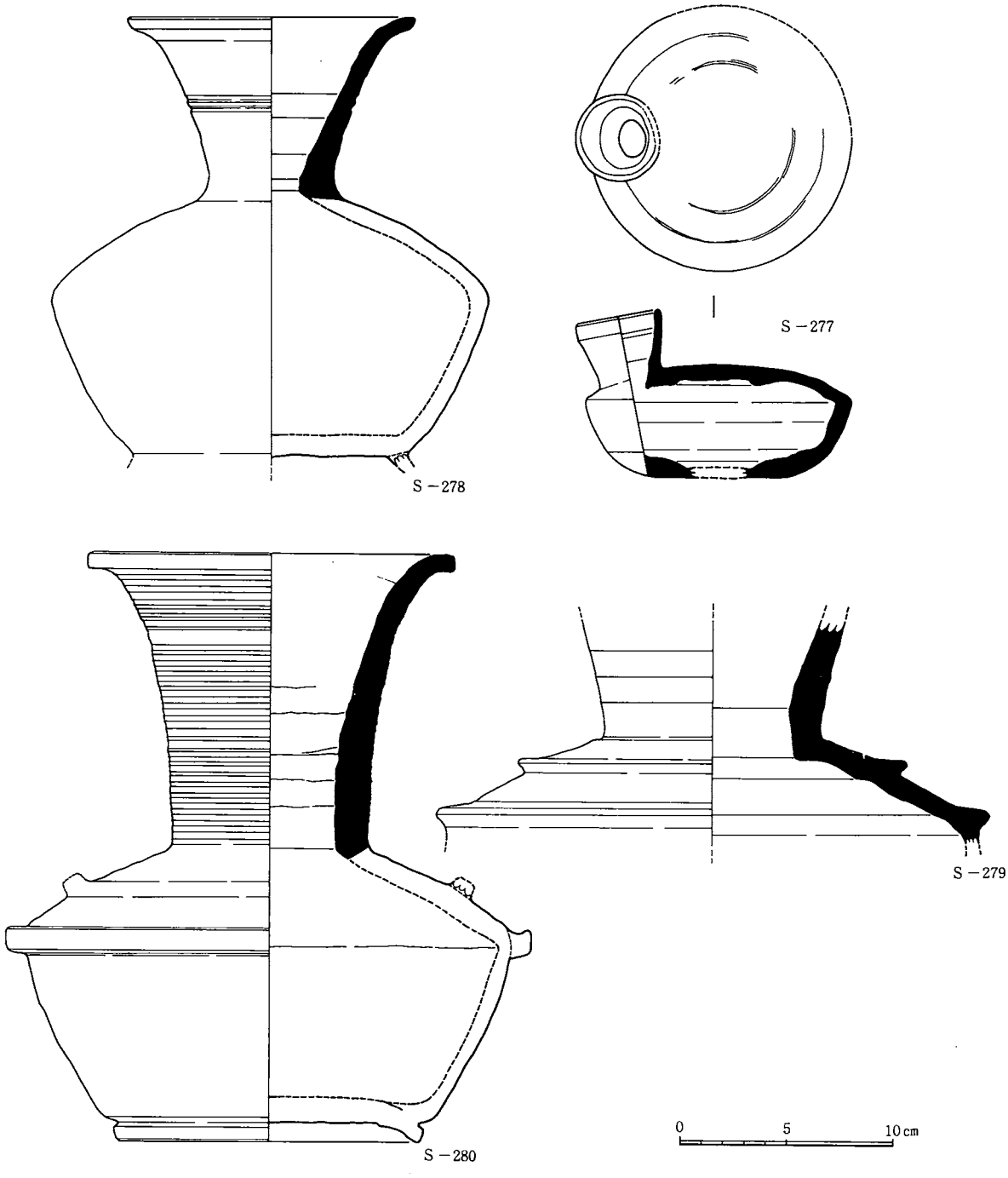


第28図　須恵器（甕）実測図

を全面に施す。口縁部外面にはメ字のヘラ記号と思われる符号が付けられる。刻文は横方向（3.3cm）を縦方向（1.7cm）が切る。Ⅲ類（274・276）基部からストレートに外反し、端部はそのまま終る。274は全体にヨコナデ調整のあと外面に格子目文の叩きを、内面にはアテ具の痕跡が残る。格子目は4mm×5mmの方眼で、叩き板の横幅は3.2cmを測る。叩きのあとナデ消す。276は外面は叩きを、内面はアテ具の痕跡が残る。自然釉がたっぷりかかり、凹凸が残されていない。

長頸壺（第29図S－278～280）

計3点の出土である。[註(4)] 278は残存高は20.8cm、最大胴部径20.5cmを測る。外面は全面にヨコナデ調整を施し、頸部には二条の沈線を有する。内面はヨコナデ調整を施す。高台を有するが断面形は判明しない。なお

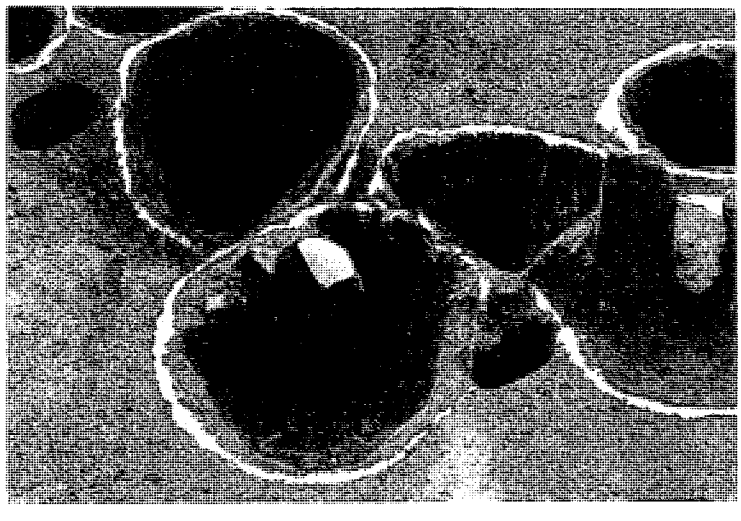


第29図　須恵器（提瓶・長頸壺）実測図

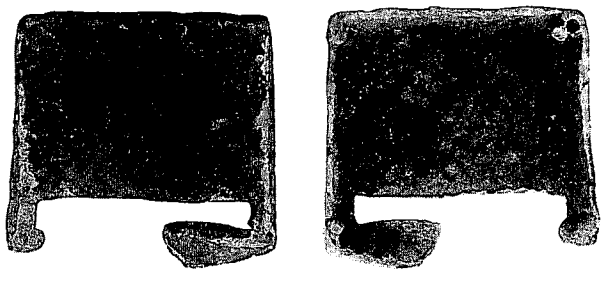
実測図No.	出土地点	口径	器高	基部径	残存高	胎土	焼成	色調	手法の特徴 外面	手法の特徴 内面	備考
S－272	0－C上層	19.2	－	15.8	4.8	緻密 堅緻	良好	灰色 灰色	ヨコナデ 叩き	ヨコナデ	甕
S－273	一括	22.8	－	－	3.5	密	良	灰黄色 暗灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部外面にヘラ記号有 甕
S－274	2－A SK－101 No.50	19.5	－	15.7	6.2	緻密 堅緻	良好	黄灰色 灰色	ヨコナデ 叩きの後ヨコナデ	ヨコナデ あて具痕跡	甕
S－275	SK－101 No.8・37	21.3	－	17.2	6.4	緻密 堅緻	良好	灰色 灰色	ヨコナデ 叩き	ヨコナデ あて具痕跡	甕
S－276	2－A SK－101 No.22	26.6	－	22.4	7.6	緻密 堅緻	良好	黄褐色 浅黄色	ヨコナデ 叩き	ヨコナデ あて具痕跡	甕
S－278	SK－101 No.49	13.5	－	7.1	20.8	緻密	良好	灰白色 灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	長頸壺
S－279	一括	－	－	10.3	10.5	緻密 堅緻	良好	灰色 灰オリーブ色	ヨコナデ	ヨコナデ	長頸壺
S－280	SK－101 No.29	17.3	27.5	9.3	－	緻密	良好	褐灰色 灰色	ヨコナデ カキ目	ヨコナデ	長頸壺

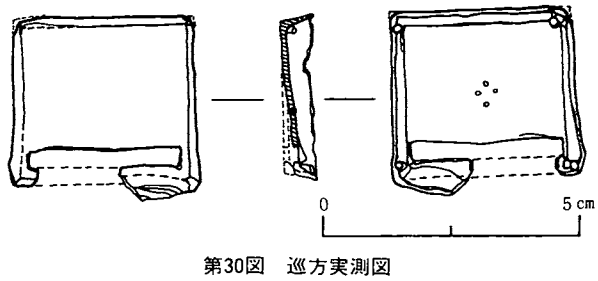
第18表　須恵器壺・甕・長頸壺観察表

取り付けに際しては、底部側に二条の条線を刻み、貼り付けを容易にしている。頸部より口縁部に向って外反気味に立ち上がり、口縁端部付近で屈折しさらに外傾する。全体にやや頸部が短く、胴部が大きい形をなすのが特徴である。279は頸部から胴部にかけての破片である。外面はヨコナデ調整を施し、肩部には二条の貼り付け突帯を有する。内面はヨコナデ調整を施す。全体の器形は280に類似する。280は器高27.5cm、胴部最大幅24.8cmを測る。外面は頸部がカキ目調整を、体部全面にはヨコナデ調整を施す。貼り付け突帯は二条持ち、内1条は胴部の最大幅部に位置する。内面は全面にわたりヨコナデ調整を施し、また粘土巻き上げの痕跡も見られ、その幅は 1.0～2.0cm内外である。高台は底周縁部にハの字に貼り付けられ、強いくびれを有し、その粘土は底部と同一のものを折りまげて製作している。なお壺埋土内には何も含まれていない。



本文写真1　巡方出土状況





第30図　巡方実測図

青銅製帯金具（第30図）

青銅製帯金具は、巡方一点がSI－107付近のピット上面から、小破片の形状不明な製品[註(5)]がSD－104内埋土より検出されている。

巡方は、横幅3.60cm、縦幅3.26cmを測り、下方寄りに透し孔を持つ。透し孔は一部破損し、端部がねじれた形状をなすが長方形を呈し、横幅2.95cm、縦幅0.45cmを測ること

が出来る。全体に台形状をなし裏面四隅には小形の鋲足が付く。鋲足は全て折損しているが凸状であり、この事から表金具であることが判明する。更に裏面中央部には∘∘状の陰刻が確認される。[註(6)] 表面に漆塗痕跡[註(7)]は見られないが、本来は黒漆[註(8)]が塗付されていた事が覗える。重さは11.6ｇである。

青銅銭

ＳＤ－103の確認のため計３本の試掘トレンチを設定したが、４－Ｅ～Ｇ区のトレンチ埋土内よりの出土である。表裏ともに腐触が激しく字体が明瞭ではなくかすかに右部の「通」、下部の「永」の字が判読できる。他に同銘の銭がないので「寛永通寶」であると考えられる。径は1.22cm、重量3.20ｇを測る。

鉄製品（第31図、第19表）

Ｆ－01　刀子である。残存長6.4cm、幅1.0cm、断面の最大幅0.3cm、刃部はやや丸みを持っている。

Ｆ－02　縦3.3cm、横8.3cmを測る。断面の最大幅は0,4cmで形状から見て刃部は下方であると考えられる。一部左上方に鉄材が屈折しており装着の際に使用したものかも知れない。重量は28.45ｇ、鎌であろう。

Ｆ－03　長さ6.7cm、幅0.8cm、断面形は方形を呈しており0.7cm×0.5cmを測る。ＳＫ－110内の出土である。

Ｆ－04　残存長4.7cm、幅0.6cm、断面形は方形で0.6cm×0.4cmを測る。角釘であり破損している。

Ｆ－05　丸釘である。残存長4.3cm、断面は直径3.5mmの円形を呈している。Ｆ－04同様に表土層からの一括採集である。

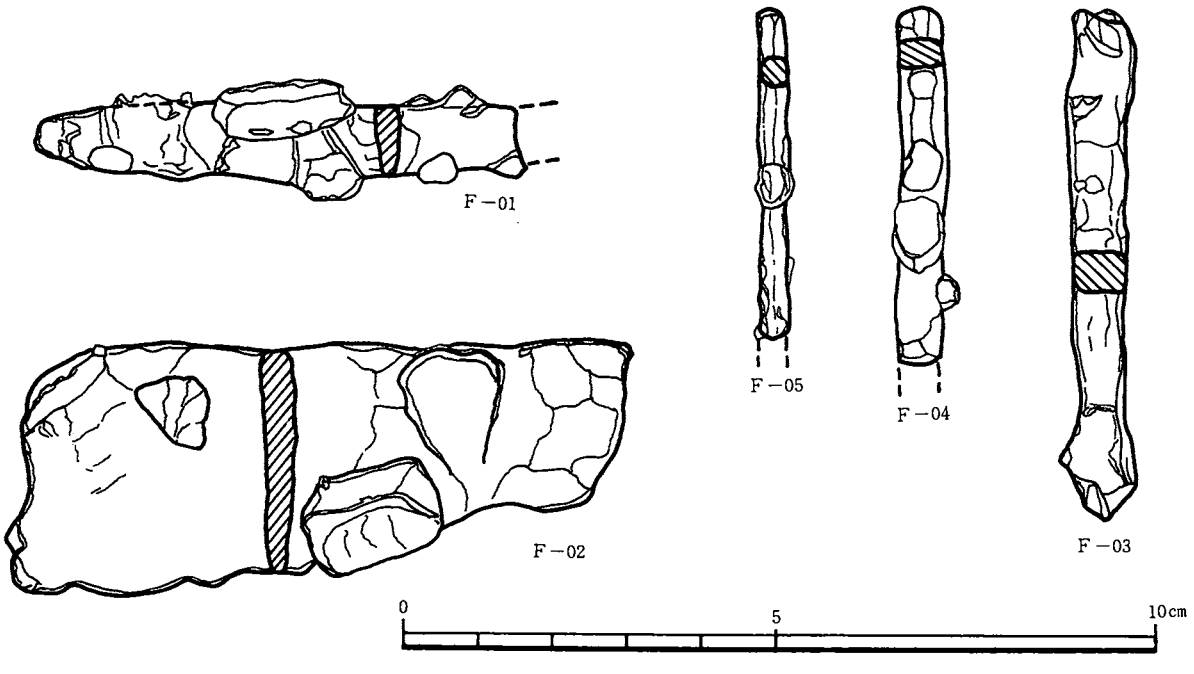
実測番号	形態	重量(g)	出土地点	備考
Ｆ－01	刀子	6.10	１－Ｂ区　一括	
Ｆ－02	鎌	28.45	⑧ No.125 ＳＫ－127 内埋土	
Ｆ－03	角釘	6.25	１－Ｂ区 ＳＫ－110　一括	
Ｆ－04	角釘	3.30	2－Ｂ　表土層一括	
Ｆ－05	丸釘	1.60	〃	

第19表　寺尾遺跡出土鉄製品一覧表

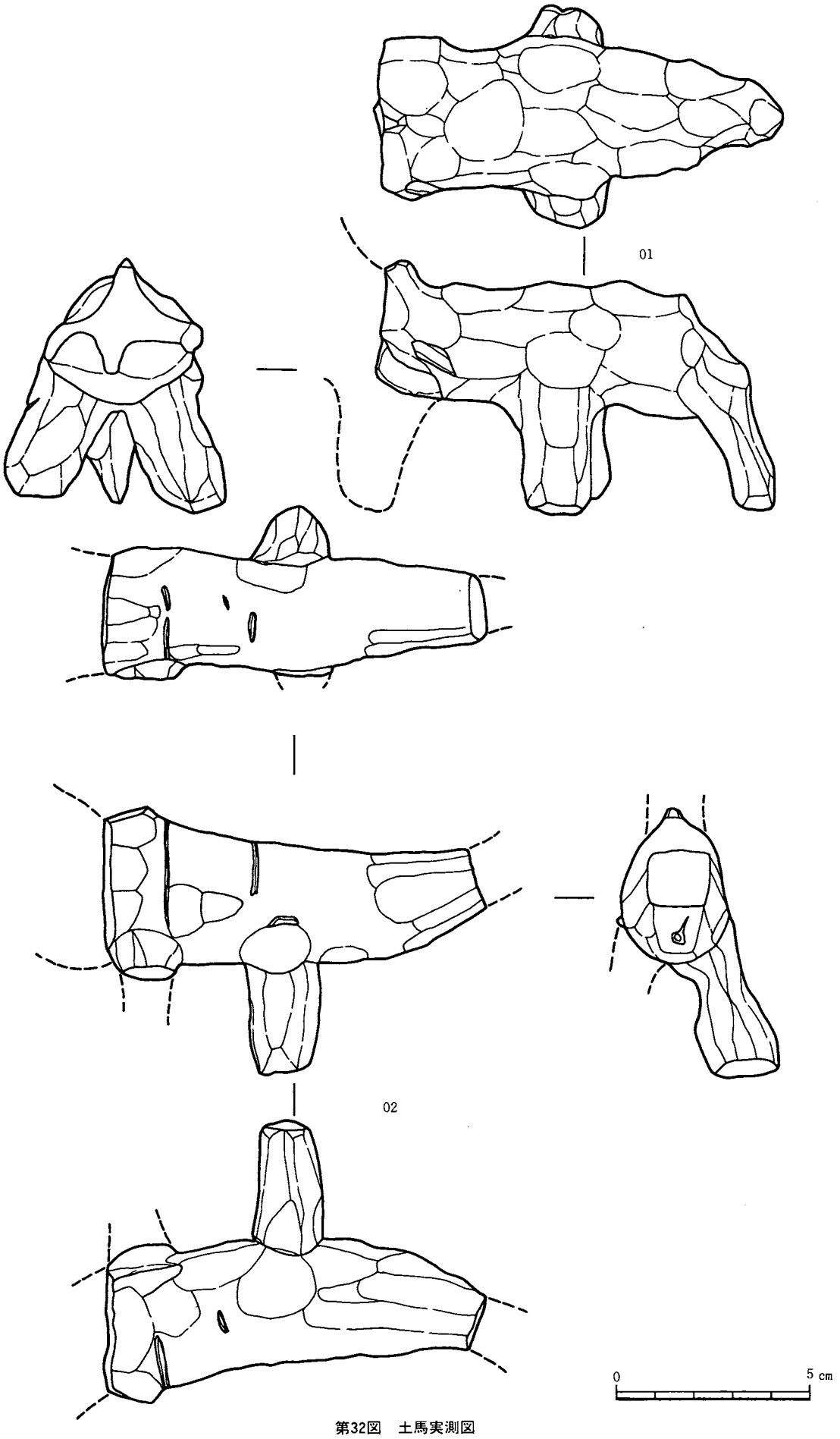
土馬（第32図）

調査区の上層から土師質の土馬が２点出土している。

01　残存長10.5cm、残存高6.3cm、幅5.7cmを測る。前足２本及び肩から上は欠損している。全体的に丁寧な指によるナデ及び指圧による整形がなされる。鬣（たてがみ）部には両端から強い指圧による押し上げがみられる。左側面には長さ1.5cmのヘラキズが見られるが、右側面にはないので用途は不明である。製作手順は先



第31図　寺尾遺跡出土鉄製品実測図



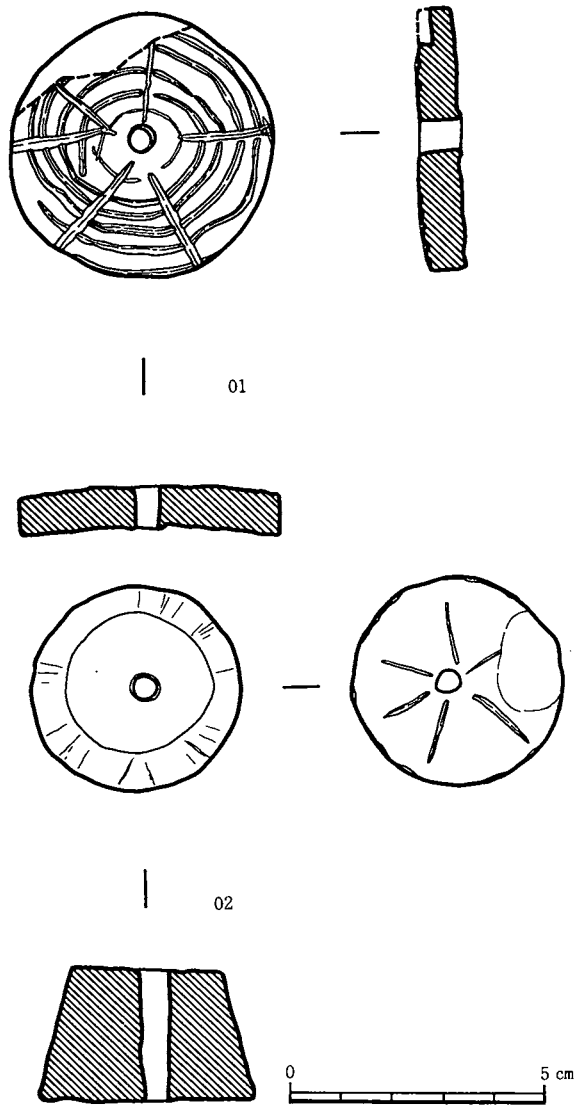
第32図　土馬実測図

ず本体を製作し、足の位置する部位に指で装着の為の穴を造り出し、その後足をその穴に４本さし込み、最後に尻尾を付けて全体の整形を行なったと推定される。色調は黄橙色を呈し、焼成は良好である。遺構上面の２－Ａ区からの出土である。

02　残存長9.8cm、残存高6.8cmを測る。胴部並びに後足１本のみの残存である。全体に指ナデによる整形後、尻部や足の端部では強いヘラケズリ調整を行なう。肩部には鬣の表現がなされ、さらに胴部にかけては鞍を装着した痕跡が残る。それは、胴部の上位置に左右それぞれ２条の沈線を施し、さらに支持土で一部固定する方法をとっている。又、尻部には１基の穿孔があり、肛門・生殖器を示すものではなかろうか。足の装着法は、01の様に装着穴は設けず胴部に直接貼り付け、支持土で固定する方法をとる。色調は赤黄褐色を呈し、焼成は良好である。調査区中央部付近の一括出土である。

紡錘車（第33図）

01　径は5.1cm、中心孔径0.5cm、厚さは0.8cmを測る。表面は一部欠損しているものの中心より外周に向って、深さ１mm程度の渦巻状の紋様が彫り込まれている。さらに６本の深い条線を放射線状に配置している。裏面には整形の際の指圧の痕跡が明瞭に残る。穿孔は表面より裏面に対して行なわれる。色調は青灰色を呈し、須恵質である。ＳＫ－127内のピットからの出土である。



第33図　紡錘車実測図

02　径は2.7cm、中心孔径0.5cm、底径4.0cm、厚さ 2.6cmを測り、断面形は台形状を呈している。裏面には放射線状に６本の浅い条線を有する。体部は上位から下位に向って丁寧なケズリ調整を施されており、穿孔が表面から裏面へ向っている。色調は橙色を呈し土師質である。上層の２－Ａ区一括出土である。

註

(1)　出土遺物のバリエーションは県教育委員会が、八代市で調査した興善寺遺跡の出土遺物に類似している。基本的には興善寺Ⅰ・Ⅱ遺物での分類をもとにし、新規の追加資料については考察を加えた。

(2)　蓋類の口縁端部の分類については、次の報告書においても詳しく説明を付してある。野田拓治他『熊本県文化財調査報告第45集　興善寺Ⅰ』熊本県教育委員会　1980年　なお分類はⓐ類となる。

(3)　高台を有する坏類の分類については、次の報告書においても詳しい。江本直・髙谷和生他『熊本県文化財調査報告第45集　興善寺Ⅱ』熊本県教育委員会　1980年

(4)　長頸壺の出土は、太宰府跡ＳＥ400遺構、久留米市西谷火葬墓群、城南町久保遺跡、八代市興善寺志水、城南町上の原遺跡、八代市洗切遺跡などから出土している。

(5)　詳細は、髙谷和生「寺尾遺跡出土の青銅製帯金具」『肥後考古第２号』肥後考古学会　1982年を参照していただきたい。

(6)　巡方裏面にこのような陰刻が付される例は初めてであり、鋳造の際の目印とも考えられるが、今後の資料の

増加を待ちたい。佐藤興治氏の指摘である。

(7) 「衣服令」によれば、腰帯は金銀装と烏油装とに分かれ、武官の尉・志、兵衛、主師、文官六位以下は烏油腰帯とあるので、後に述べる想定通りであるとすれば当然黒漆を塗付していたものと考えられる。

(8) 一部が破損しているため正確な数量は判明しないが、数値は発見当初のものである。尚、秋山隆保氏による非破壊分析では銅・錫・鉛が主成分を占め銀・砒素、鉄等の不純物も若干検出された。

現在のところ、熊本県での鈴帯の出土遺跡は下記の四箇所である。

番号	遺跡名	所在地	名称	点数	保管先	備考
1	寺尾遺跡	下益城郡松橋町曲野字寺尾	銅製巡方	1＋α	県教委	本報告
2	上の原遺跡	下益城郡城南町字上の原	鋼製鉈尾	1	県教委	「上の原遺跡発掘調査報告書」『熊本県文化財調査報告第61集』1983
3	湯舟原遺跡	菊池郡旭志村湯舟原	石製丸鞆	1	個人	福田正文氏採集
4	境目西原遺跡	宇土市境目町西原	石製丸鞆	1	宇土高校	表採

3. まとめ

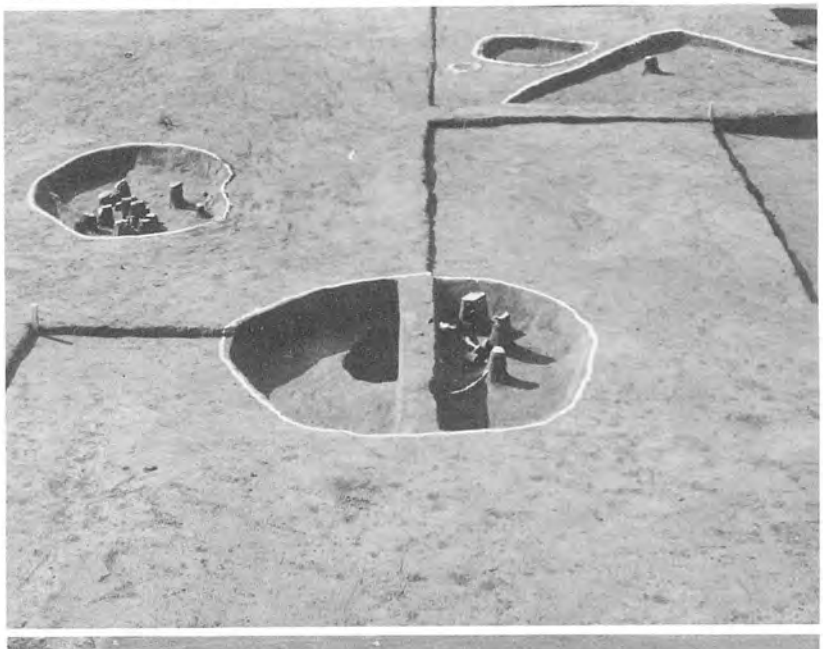
寺尾遺跡からは土壙遺構40、竪穴状遺構８、溝遺構７等が検出されているが、その大部分は15ｍ四方地区に集中している。竪穴状遺構はいずれも複合が激しく、床面の確認も部分のみであり、平面形プランも明瞭でない。非常に短期間使用したものと考えられ、硬化面の残存も良くない。その後この地区に土壙、溝等が掘り込まれた後に、土器類の放棄場所として使用されたものと想定される。今回調査箇所の東側平坦部にこれらの遺物類を使用した竪穴状遺構もしくは掘立柱建物遺構の存在が想定される。土師器は蓋・坏類中において、ヘラ研磨及び赤色顔料塗布痕跡の残る資料の割合が高く、特異な状況である。これは肥後国分僧寺跡遺跡[註(1)]、洗切遺跡[註(2)]等にも共通した状況が見られ、官衙遺跡に共通した要素とも考えられる。また郡司級の人物が使用したと考えられる巡方の出土、土馬等の出土により、郡家集落の建物の一部の存在がこの地域に想定される。

註

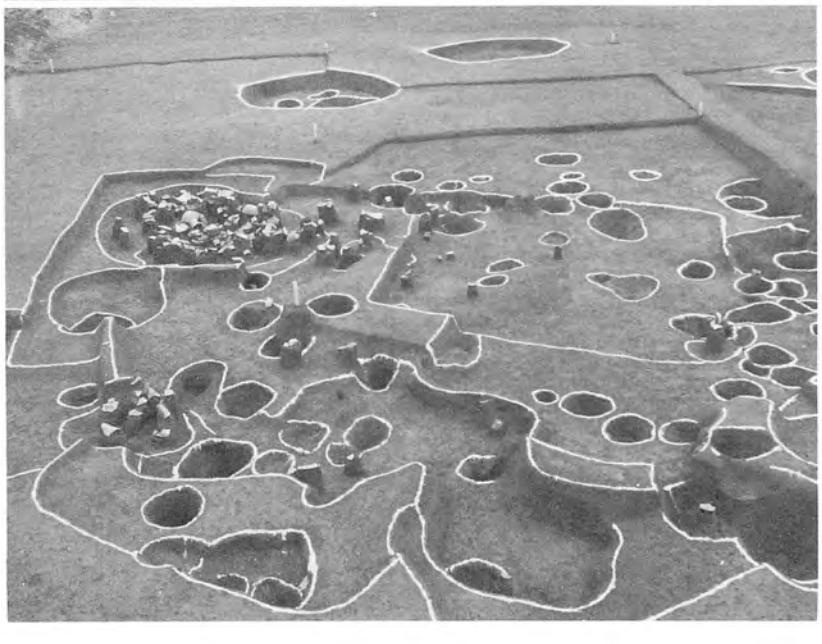
(1) 大田幸博・鶴島俊彦他『肥後国分僧寺Ⅰ・熊本県文化財調査報告第58集』 熊本県教育委員会 1982 この遺跡においては、坏類に赤色顔料を塗布する割合が高く、特異な例を示している。土師器全体数に対しては18.2％、同一機種中では27％の高率を示す。

(2) 佐藤伸二『洗切遺跡調査報告』 八代市・洗切遺跡調査団 1982 この遺跡からは多量の須恵器、ヘラ描文字を持つ土師器、三彩片、鉄製品等が出土している。出土土師器の器種では類似したものも多く、寺尾遺跡と同時期のものと考えられる。佐藤氏はこの遺跡を「郡衙に付属した工人集団の居住地」と考えており、寺尾遺跡との類似性が伺える。

(1)遺物出土状況（上層）



(2)ＳＩ－101、102遺物出土状況

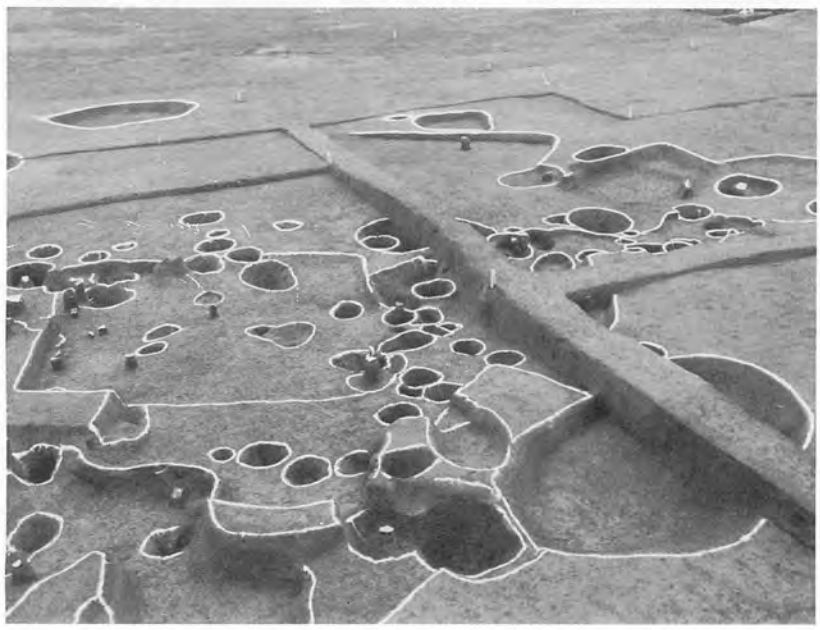


(3)Ｉ・２－Ａ～Ｃ区遺構集中部

図版2

(1)ＳＫ－101遺物出土状況

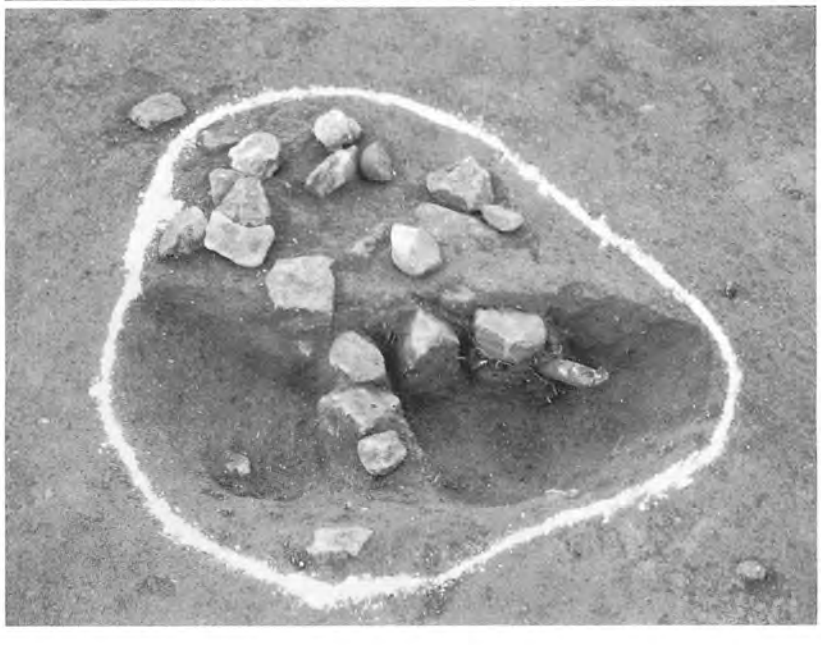
(2)ＳＫ－101出土遺物拡大



(3)１・２－Ｂ・Ｃ区遺物集中部

(1) I・2－A～C区完掘状況

O－A～C区遺構状況



(3)縄文集石半載

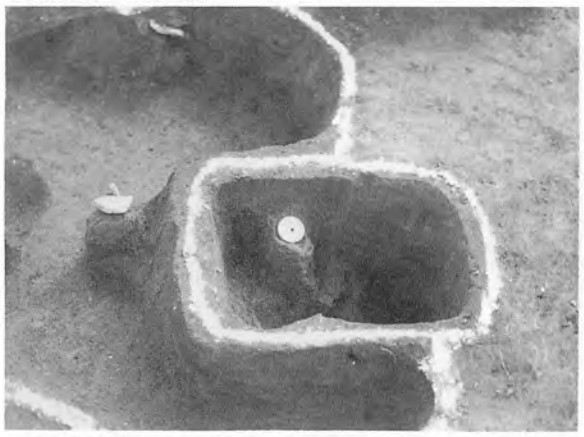
図版4

(1)発掘調査風景

(2)小貝塚半載（ＳＭ－106）

(3)ＳＤ－103，107

(4)ＳＤ－103断面写真



(5)紡錘車出土状況（ＳＫ－127内ピット107）

(6)土馬（No.１）出土状況

(7)小貝塚分布状況

H－201

H－203

H－205

H－237

H－254

H－213

H－252

H－212

H－262

H－247

H－241

H－253

図版6

S－202

S－203

S－209

S－217

S－219

S－267

S－220

S－273

S－246

S－277

S－257

S－259

S－277

H－258

02

01

H－268

02

01

S－280

S－278

熊本県文化財調査報告　第61集

曲野遺跡 I

一般国道3号松橋バイパスに伴う埋蔵文化財
発掘調査報告（第I・II次調査報告）

発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　コロニー印刷
〒860 熊本市二本木3丁目12－37

正　誤　表

8頁25行　寺尾遺跡　発掘成果 → 寺尾遺跡の発掘成果

43頁11行　陸橋部半載断面内（付図第　図）→ 付図第5図

46頁4行　日ぬきのドット → 白ぬき

58頁12行　第20図 → 寺尾遺跡第20図

139頁34行　大宅の4那である → 4郷

141頁33行　当尾遺跡まで0.6km → 寺尾遺跡

141頁38行　第30集

210頁6行　細分他も可能 → 細分類

130頁第25表

II期　平安時代		→	II期　平安時代	1
				2
III期　鎌倉・室町時代			III期　鎌倉・室町時代	1
				2
				3

補足1

※ＳＢ－203、221の時期判定について。

この両建物跡についての時代小区分はII－２期としているがこの根拠は次の通りである。①ピット内の埋土が「Ａ埋土・黒褐色土」であり、他のピット内埋土と明瞭に区別ができる。②柱根の周囲を互層でつき固めた痕跡が見られ、他のピットに比べ大型で丁寧である。③両建物ともＲＳＤ－01に落ち込む状況で検出がなされ、ＲＳＤ－01が埋没した後であることが判明する。

補足2

※ＳＢ－218の時期判定について。

この建物の時期についてはＲＳＤ－01が未だ完全に埋没せず、その機能が充分に働いていたと考えられるII－１期に相当する。それは次の状況によるものである。①ピット内埋土が「Ｅ埋土・明褐色土」であり、遺跡III層に類似する。他のピット内埋土と明瞭に区別ができるものである。またその埋土はＳ－008、011が出土したピットの埋土と同一である。②ＳＢ－203、221はその状況からII－２期に位置し、その時代には既にＲＳＤ－01は埋没したと考えられる。しかしながらＳＢ－218はＲＳＤ－01のコーナー部に位置しており、その事から溝の埋没以前であることが判明する。③柱穴は最大平面規模で50cm、深さ90cmを測り、本文中の如くこの地区が削平を受けていた事を想定すれば、実際はかなり大型になると考えられる。このような事からこの建物跡はII－１期のもので、ＲＳＤ－01に併なう特殊な形状の建物と考えられ、所謂望楼状の建築物を想定したい。

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 61 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：曲野遺跡 1
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日